
悪魔の絵本 6 恋人【逆】（カーネフェル編?）

有月 仮字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の絵本6 恋人【逆】（カーネフェル編？）

【Nコード】

N6697S

【作者名】

有月 仮字

【あらすじ】

神の審判により始まった悪魔のゲームに巻き込まれ、玉座と引き替えにすべての家族失った少年王アルドル。初陣であるタロツクとの戦争は背水の陣。負け戦に現れる聖十字の少女。女王のカードを持つジャンヌの活躍によりタロツク軍をカーネフェルから追い出すことに成功するカーネフェル。引き起こされる世界を巻き込む大戦の開始を意味した。タロツク攻略の要所、セネトリアを落とすべく進軍するカーネフェルにセネトリア女王と道化師の悪意が待ち受ける！

主人公の政略結婚で味方連中も不穏な感じでなんだかドロドロ。ヒロインの死亡率が半端ない！愛憎こった煮どうせバッドエンドなダイクファンタジー！悪魔の絵本カーネフェル編第二弾。

道化師は夜の声を聞く。なぜなら自身も葬られた存在だから。

少なくともあの王にとって、イグニスと言えばあの少女のことだ。そしてギメルと言えば、本当に眠っているのだと未だに信じている。それら全ては限りなく真実であり真つ赤な嘘だ。信じる人間ほど馬鹿を見る。それがこの世の摂理というもの。

「だから君は愚かなんだよ、アルドール」

去りゆく馬車を見送りながら、崩れ落ちた廃墟を照らす月と一緒に嘲笑う。

一番厄介な女王カードをこんなに早く葬ることが出来るとは、正直思っていなかった。それも此方の痛手はほとんど無い。恋に溺れた娘と、恋から逃げた男を使つての仲違い。

クラブのジャックには疑念を植え付けだし、ハートのジャックの代償は残り少ない。クラブのシンクも間もなく不運に見舞われる。

「まあ、僕のお手並み拝見つてところか。ギメルはどう動くかな」

このままではカーネフェルは潰える。この現状、誰の目から見ても戦争に勝つのはタロツクだ。そうさせないために、彼女が今まで以上に動くしかなかった。それはつまり、アルドールの傍からギメルが消えるということ。それは道化師にとつても好都合。

神子の次の手のおおよその見当は付く。失つたクイーンと離れる自分の代わりに新たな駒を調達してくるはずだ。あの神子にとつての最優先はアルドール。教会もシャトランジアもおそらくどうでもいい。それは手段であつて目的ではない。

「……………それにしても、君は一体どうしてしまったんだい？」

少なくとも1年半前の彼女なら、こんな風にはならなかった。あんな馬鹿な男のために自身を犠牲にするなんて。

彼女が彼に寄せる好意に、昔感じた心苦しさ、その怒りと憎しみとは意味が異なる。今あるものは驚愕だ。まるで悪夢だ。そんなことはあり得ない。あり得ないものを見せられている。それに自分は唯々驚かされている。

死者は決して人の力で蘇らない。それがこの世界の根本にある絶対のルール。それを破ることが出来るのが神の審判、悪魔のゲーム。それならば彼女の正体も、自ずと限られては来る。

だからこそこんなにも驚かされている。彼女を殺すことに僅かの躊躇いを覚えるくらいに。

これが現実なら、真実なら……………願いなど必要ない。唯彼女に駆け寄り抱き締める。

けれどこの世を統べる神に人の求める慈悲など無い。だから奴らはまさしく悪魔。人にとってはそれ以外の何者でもない。

だからこそ彼女は彼女であるはずがないのだ。これは現実、それでも悪夢。この手で誰よりも愛しい人を、殺めると悪魔は言う。そのためのカードなのだからと。

「……………ギメル」

愛しい人の名前を呟いて、道化師は悲しげに小さく微笑んだ。

眠りに就いた人が、再び動き物語る。それを何時までもすぐ傍で眺めていたいと思う。それでも願いに至るため、それは越えなければならぬ苦難。抱き締めるのではなく首を絞めると神は言う。語り合うのではなく殺し合えと悪魔が言う。

「本当に神様って奴は無粋だね。人間って言うのは貴方達とは違

つて、そう簡単に全てを白と黒で考えられるわけじゃない。確かに彼女は彼女じゃないけれど、彼は彼女であることは本当なんだ。だから僕はそれを知っていても全ての迷いを断ち切るまでちょっとは時間が要るんだよ」

それを愚かと語る神と、興味深いと眺める神と。その狭間で道化師が笑う。

「ねえ零の神。貴方は僕の心を愚かと言っけれど、僕はそこまで僕が愚かではないと思うよ。僕から言わせて貰えば、かつて貴方が伴侶に抱いた感情の方が愚かだね」

だからこそ2人の神は、出会い別れ未だに争っている。人の目に映れない悲しい者へとなり果てて尚。そんな不幸をまき散らす愚かな戦い。始まりはその愚かな感情こそがその全て。

「僕はそれを知っている。愛は無償で高貴なものだ。だけど恋は低俗で欲深く、残忍だ。この世で最も愚かな人の心を知っているかい零の神？いや貴方が一番それを理解しているんだろっね」

何も見えない苦痛の生で、一度だけ見えた光。その愛のために死んだ者のために、その愛のために生きる。他には何も要らない。理不尽な世界と神に奪われたものを取り戻す。

愛するに値しない世界で唯一、愛しいと思うことが出来た彼女のために生きること。それが間違っているなど誰にも言わせない。それを口にし責めることが出来るのは、世界に唯一人、眠りについた彼女だけ。

彼女に責め詰られるのなら、それはそれで構わない。そうすることが出来るのは、紛れもなく自身の幸福。

小さな不平を言い合って腹を立てたり、そして再び笑い合う。そ

んな些細なことがどんなに幸せだったことか。それ以上の幸せなんて望んだりはしなかった。あの日のまま、いつも2人で小さな幸せの中に浸っていられば、それだけで良かった。

「ああ、下らない。実に下らないよ。馬鹿げている。この世で最も愚かな感情、それは恋だよ零の神」

僕はね彼女を世界の誰より愛しているけれど、別に彼女に恋している訳じゃないんだよ。崩れ落ちたその教会で、道化師は笑う。砕かれた偶像をせせら笑いながら。

廃墟と化した悲しい領地。無能な王は相も変わらず盲目を生き、真実を半分も知らずにここを去った。隻眼の騎士も何処まで見えていたのやら。彼らの愚かさを語るのも全てはその心。

何にせよ人は愚かだ。道化師はそう思う。とりわけ恋する人は何より愚かだ。

人が賢く生きる道。それは恋を知らずに生きることだろう。

「まあつまり……人に道を誤らせるにはそのスパイスを添えてやればいいとも言っね。人を内から綻ばせることなんて、とても容易いことなんだから」

次の悪巧みを思い付き微笑む彼に、誰の目にも映れない者達は誰の耳にも聞こえない、不協和音の音色を発した。道化師は不協和音に薄く笑み、領主の屋敷だった建物からおびただしい数の墓の前へと飛び降りる。

作られたばかりの墓標。真新しい土の下で眠るのは、とうに骨になっていた少女。

「眠っていたところ叩き起こしてしまっごめんね。ゆっくりお休みお嬢さん」

彼女は過去の思い出のオルゴール。死者は未来を見据えない。数式で知り奏でることが出来るのは、過去に残された想いだけ。逃げ続けた彼からの慕情が彼女に伝わらないよう、道化師の謝罪の言葉もまた、届かないとは知っている。それでも手を合わせる。それがどんなに無意味でも、道化師もまた人間だった。時に無意味なことをする。

「まあ、悲しむこともないよ。彼はいつかまた貴女に会いに来る。どっちの意味かは返答しかねるけれど」

恋は愚かで愛は偉大だ。恋から愛へ至れない思いのどんなに多いこと。

だから恋になる前に封じられた思いは未知数だ。あの騎士がどう転ぶか、それは先を見通す目を持つ道化師にも解らない。けれどそれを不安に思う心は道化師にはない。

完璧な計算はない、操るのが人である以上。それでも計算に僅かの狂いを交えること。それは時に楽しい。ゲームは結果が全てではない。過程を最大限に楽しみつ勝つことが、ゲームのおもしろさと言うものだ。何が起こっても対処できる力が自分にはある。

それでも彼らの方はそういうわけではない。計算で動いている彼女のために狂いを与える。

それが巻き起こす騒動は未来を濁らせるだろう。石はもう、投げ込んだ。後は波紋の広がりを暫し楽しむことにしよう。

道化師は、月下に笑う。ほくそ笑む。

*

「馬鹿だなあ……人間って」

木の幹に背を預けながら、エルスはそう思う。思いながら薄汚い人間達を眺めていた。眼下には戦火から逃げ出す人々の群れ。その中で生まれた出会い、ささやかな幸せを見つけた者もいるのだろう。寄り添い会う男と女。硬く手を握り合つて。

そんなものを見せられてしまうと、穏やかな微笑を浮かべるその顔を、絶望で彩らせてやりたいと思うのだ。彼らもきつとその方が嬉しい。だってこのまま平凡な幸せが続いたら、彼らは互いに必ず不満を持ち始める。粗探しを始める。そして傷付け合うのだ。そしてその時一番苦しむのは彼らではない。生まれ出る悩みとは、生まれなければ生まれない。

だから恋は恋の内に粉々に崩れ去るのが一番。それが世界平和というものだ。

あの恋人達。一体何が楽しくて生きているんだろう。同じ事の繰り返し。馬鹿みたいだ。それがさも当たり前かのように語り、教え、それを引き継がせていく。巡らせていく。それが当たり前だと言うように。その当たり前。それをその輪から少し離れて眺めるだけでとても馬鹿馬鹿しい物事のようにエルスには見える。

男と女。他にすることなんか無いって言わんばかりに、一時の気の迷いで恋をし面倒事を抱え込む。或いは恋さえせずに彼らは寄り添う。それが唯々、唯々薄気味悪くて気持ちが悪くて堪らない。

その当たり前前に組み込むこと。それが共同体という組織。それは時に国であったり村であったり、なんという不自由。そんな風に考える自分を、自由気ままな風のように言った人間がいた。そんなことを思い出す。

そうだ。僕は風。自由に気まぐれ。緩く冷たくそして残忍。

僕はそれでいいと、あの日はそう告げられたのだ。罪から逃げ、裁かれない人間は、いつか必ず罰を求めるようになる。あの男は僕を罰まで育て上げようとしていたのだ。そしてあの男はそこに救いを見出した。

本来ならあの男が僕をこんな危険の真っ直中に送り込むことはな

い。猫可愛がりで城に残したがるに決まっている。つまり僕がこんな戦争の真つ直中にいるということが、十分おかしいことなのだ。それに気付かないあの堅物同僚は本当に馬鹿。カーネフェルの連中だって結局何も見えてはいない。

「さて、あの幸せそうな2人を祝福してあげようかな」

幸せを幸せに留めさせてあげるお手伝い。人は愚かだから幸せを幸せと感じられる期間がある。幸せはいつまでも幸せではない。そう思えない、だから、そんな風にならないように、ちゃんと今の内に教えてあげるのが幸せな2人に贈る一番の親切というもの。別にお礼も謝礼も要らない。僕が欲しいものはそんなものではない。2人の歩む道が、一時の暇つぶし、憂さ晴らしの物語になるならそれでいい。

簡単な数式を描けば、エルスの美しい黒髪はカーネフェルの金髪へと変わる。勿論薄紅の瞳も青へと偽った。後はその人間達を先回り、行き倒れを演じるだけでいい。

「君、大丈夫かい？」

間もなく声が掛かって、その一向に抱き起こされた。心配そうに此方を覗き込む人々のその顔に吹き出しそうになるのを堪えるのが大変だったが、そんなミスは犯さない。

「……………」

何かを訴えようと口を開く。カーネフェル語を話せないわけではないけれど、こっちの方が味がある。戦の恐怖で声も出ないと言わんばかりに脅えてみせた。

「可哀想に。よっぽど辛い目に遭ったんだね。でも大丈夫、もう大丈夫だよ」

「ゆっくりでいいのよ。何があったのか、話して？」

幸せな人間は頭の方まで幸せだ。自分が幸せだから周りの人間がみんな不幸に見えるのだ。そして幸せな自分が、その可哀想な人間に手を差し伸べたくなる、それが人間。

「……………ボクの、街が……………」

この先は危険だと、そこも戦火に包まれた。それを伝えれば、ざわめく人の声。

「そうだったのか。……………それじゃあこのまま先に進むのは止めた方がいいか」

「そうね、長へ掛け合って来るわ。別のルートでの避難を考えましょう」

男女が群れの頭の元へ向かった隙に姿をくらます。どうせ他の者達は取り乱していて此方を見ていない。その隙にエルスは、近場に構えている破落戸達の所に顔を出す。数術を使えばほんの瞬き一瞬、山岳に拵えられた小さな砦。ここは通称サーカス小屋^{ツイルクスツェルト}。そういう名前の山賊の居城。情報収集のためにたまたま足を運んでいる情報源の一つ。数術だけでは取りこぼしてしまう情報というものはやはりある。また敵の敵は味方とも言う。カーネフェルへの敵対勢力との仲を深めておくことには意味がある。

あの堅物は使わないような手ではあるけれど、綺麗事で戦に勝てるなら世の中もっとシンプルだ。そうじゃないから面倒臭い。使える手ならどんな手でも使うのが、戦という舞台での礼儀というもの。

「やあ、みんな、最近の調子はどう？」

皆に足を運べば、柄の悪そうな男達が両手を広げて出迎えてくれる。

「ややつ！これはこれはエルス様！いやあ、ぼちぼちって感じですよ」

「そうそう！エルスちゃんが遊びに来てくれるようになってから、ほんと稼ぎが増えてなあ！」

「そっか。それは良かった。ボクも君たちの力になれて嬉しいよ」

にこやかに微笑むエルスに、男達は下卑た笑いをもって応える。

より面白いことになるなら、どんな相手とだって手を組むのがエルスのモットー。あの少年王の最期を、存分に惨めに飾り付けるためならばどんな人間とだって手を組む。それにエルスは、こういう薄汚さのある人間の方が好きだった。先程の男女のような偽善者面の頭が幸せな奴よりも、常に悪巧みをしているような信用できない人間の方がずっと好感を持てる。人間嫌いの自分としては珍しいことだとは思つ。それでも俗に言う下衆な人間はそこまで嫌いではないのだ。

そう。だから彼らも不思議な気分なのだろう。破落戸である自分たちの所に、幼い成りの大国の将が親しげに遊びに来る。その度に美味しい獲物を引き連れて。

「まあ、もしカーネフェルをタロツクが支配して商売あがったりになったら何時でもタロツクにでもおいでよ。ボクのところへ迎えに来るから」

「へへっ、いやあありがてえ」

男達はまた妙な鈍りのタロツク語でケタケタ笑う。上品ぶったお

貴族様とは違い、その鈍りが懐かしくさえ思うのは、きっとこの空気のせいだ。エルスは海より山の方が好きだった。山に囲まれて育ったせいもあるのだろうか。

「あ、そうそう。あの平野にまた馬鹿な奴らが逃げてきたよ。襲って下さいって言わんばかりにあんな目立つところで足を止めてる。期待には応えてあげないとね？」

この間はセネトレアから来た商人とその手下達を使ったが、カーネフェルには他にも多く使える駒がある。略奪者は何度も往復する手間を考え、カーネフェルのあちらこちらに拠点を築いている。ここに残ってコンスタントに略奪を行い、その戦利品を船へと乗せる。今日ではそういうシステムが出来上がっている。その者達は山賊として城を構え、今では往復組との仲も悪化し独立勢力と化している。海からの略奪者と山からの略奪者。元は同じものでありながら、獲物を奪い合っている。だから獲物の情報を流してやれば、彼らはすぐに此方に尻尾を振るようになる。

「野郎共！すぐに仕度だ！！」

「エルス様！いや、毎度すまねえです」

「エルスちゃんー！帰ったらお酌してくんな！行って来るぜー！」

手を振りながら居城を出て行く山賊達。そして思いだしたかのように踵を返し、ごろんと横になっているその人物を揺すり出す。

「ほら、お頭！お頭ー！仕事ですぜレーヴェのお頭あつー！！」
「ん……」

寝返りを打ちながら、起こそうとした部下を思いきり殴り飛ばす

その頭。見れば見るほど興味深い。その黒髪はありふれた色。それでもその身体に刻まれた数値はいささか風変わり。

エルスがここに通り詰めている理由のもう一つがこの人間。これを味方に引き込めば、後々全てが楽になる。

「……駄目だこりゃ」

「ああ、レーヴェはボクが見ておこうか？」

「それは有り難いんだけども、お頭がいねえと俺らの戦力半減つてもんだ」

ぐうぐうといびきをかいているそのお頭に、頭を抱える山賊達。

1人は未だに壁にめり込んでいる。

「まあ今回は連れて行かない方が暴れられて良いと思うよ。戦え
そんな奴は殆どいないし、若い娘が一杯いたよ。お頭の前では好き
勝手暴れられないだろ？」

ブロンド美女が大股開けて君たちをお待ちかねだよとエルスがほくそ笑めば、山賊達はすぐさま外へと賭けだした。

「いや、流石エルスちゃん！男心をよくわかってらっしゃるぜ！」

「出発だっ！行くぜ野郎共おおおおおおおおおおお！！」

ひらひらと手を振って山賊達を見送れば、物凄いスピードで馬を操り駆けていく。その姿に人間は、とりわけ男は本当に馬鹿だなあとそう思う。こういう馬鹿はそう嫌いではないけれど。

まもなく遠くの方で悲鳴が上がった。ああ、きつと面白いことになる。見に行ってみようか。ちょっとそう思った。けれど止めておいた。人づてに聞く物語というのもそう悪くはないものだ。それに今はここの留守番を任されている。この人材を釣り上げるためにや

るべき事はまだあった。

「さてと……」

出かけていった男達も帰ってきたら宴会だろう。準備くらいはしておかなければ。

人間を釣り上げるのに必要なものは快樂だ。そしてそれは食というものでもある。食を極めれば人を操ることなど容易い。それを作ることが出来るのがその者しかないのなら、誰もその者に牙を向けなくなるからだ。

そしてそのそれが美味ならば、それだけで相手は好意的に解釈をするようになる。これだけ美味しい物を作る者が、此方に敵意を持っているはずもないと。

「いい匂い……」

「ああレーヴェ、起きたんだ」

言うなれば単純馬鹿。そしてここのお頭もそういう部類の人間だった。

料理を作り始めた途端、むくりと起き出し背中にへばりついてくる者がいる。寄り掛かるよう持たれてくるその重みはじぶんのそれより随分重い。うっとりとした灰色の瞳が見つめる先は火にたかれた鍋の中。

「エルスー……やっぱお前って良い奴だな、俺のために飯作りに来てくれるなんて!!」

餌付けは効いてきたらしい。山賊達のお頭は、頭の横で結われた髪を犬の尻尾のように振り回す。見た感じ大型犬のような印象だ。獅子を名乗っている癖に、戦っていない時はどうも犬っぽい。まあ、

百獣の王ということで頭には相応しい名だとは思う。他の山賊達も大体はサーカスにいそうな動物の名前を名乗っている。

「はいはい、もうちょっと待ってね。今出汁取ってるから」

図体ばかり大きいのが、灰の瞳はなんとも綺麗な色をしている。こんな破落戸の長には似つかわしくないような気もするが、それにはそれなりのわけがある。

まず第一にレーヴェはタロツク人。性質として割と義を重んじる。この面倒くさがりの性格でもそれは同じだ。そしてもう一つが……

「っていうか、お前らなんか大変なんだろう？俺カーネフェル語わかんねえしよくわかんねーけどみんな大騒ぎしてっし」

そう、これだ。レーヴェはタロツク語しか話せない。そんなレーヴェがカーネフェルで生きて行くにはタロツク語の通じる相手のところにふらふらと歩み寄るしかなかった。そしてこの純真無垢だ。適当に言われたことをそのまま信じるようなところがある。それで腕の方は立つのだから山賊達もそりゃあ歓迎するだろう。

「まあ、大々的に戦争も始まることになったから。ボクも大忙しってところだよ」

「にしても……エルのタロツク語懐かしい。ここの奴ら妙な鈍りで俺までおかしくなっちまいそうで笑える」

普通の返答にも猛者の長は顔を綻ばせて擦り寄ってくる。余程故郷が恋しいのだろう。タロツクへ戻る方法を教えてやれば、おそらく完全に墮ちるとエルスは踏んでいる。唯、手下全員と一緒になければそれには従わないだろう。彼ら全員を迎え入れるためには、やはりカーネフェルを落とす必要がある。まだもうしばらくの段取り

が必要だ。

「そっぴや腕の方はもういいのか？」

「まあ、一応は」

「ほんと許せねえ！人の腕切るなんざ、世の中には酷え奴もいたもんだ！カーネフェルの金髪族の奴ら鬼だぜ！悪魔だぜ！俺が見つけたら三倍返しでそいつらの両腕もぐかへし折ってやるからな！」

レーヴェは拳を握って顔も見えない相手への怒りを口にするが、それはとても山賊のお頭の口から出るような言葉ではない。しかしこのお頭は、山賊がヒーローみたいなものだと思っているのだ。仕方がない。

「あ、ありがとう。でも腕は三本ないから二本でいいよ」

「エルスは優しいな」

「まあね。それでレーヴェ、このあたりを通過したっていう話は？」

ザビル大河の北に位置する以上、橋の壊れた今誰でもすぐに来られる場所ではないが、この山岳地帯は都ローザクアと要塞カルディア間を見るには監視には絶好のポイントだ。エルスが時折ここを訪れるのはその情報収集も兼ねてのことだった。

新たなカーネフェル王。彼の消息は未だ不明。数術で探してもいるが、傍にいる数術使いが厄介だ。シャトランジアの神子……彼が何を考えているのかよくわからないが、出し惜しみの回りくどい術を使う。故にまだまだ数術の才は未知数。油断は出来ない。

「んー……エルスに言われてから一応監視してみたんだけど、今ところカルディアから都に向かった奴らがいるって話は聞いてねえなー。ああ、唯……」

「唯？」

「何つたつけ？あの今は使われてねえってところの領地」

「シャラット領？」

「あ、それぞれ。そこからローザクアに向かう馬車を見かけたぜ」

「それ、何時？」

「んー…と、五日前の夕暮れだったぜ」

「そうか。ありがとう」

すぐさまエルスはシャラット領とローザクア。そこに向けて情報
数式を練る。

(……………なるほど、だからあんなことを)

情報は見つかった。情報隠蔽も満足に行えないほど、あの数術使
いは消耗していたのか。如何に才能があっても代償がなければ数術
は意味がない。その点、代償が自分ではないエルスの数術は使い勝
手の良いものだ。

長期戦、望むところだ。長引けば長引くほどカーネフェルの勝機
は弱まる。それが今、結論づけられた。

「エルス、やっぱまだ腕痛いのか？」

「そんなことはないけど……………どうして？」

考え込んでいたエルスのことを心配そうに見つめるレーヴェ。何
故そんな風に思うのか、聞き返してみると指さされたその腕には…
…確かにまだ包帯が巻かれていた。

怪我は治った。数術で簡単に治すことが出来た。それでも何故か
これを解くことが出来ずにいる。何をやっているんだろ。そう思
う。思うのにどうしてか、そうすることが出来ないのだ。

これを解こうとする度に、あの馬鹿な同僚の顔を思い出す。それ

が嫌でなるべく見ないようにしていたのだ。そうすると、必然的にそれは腕から離れない。

(人間なんかに……あんな人間なんかに)

哀れまれた。屈辱だ。そう思う。あのカーネフェルの少年王……アルドールに哀れまれたときは本当に怒りで体中の血液が沸騰するかと思った。よりもよってお前が僕を哀れむのかとそう怒り狂った。

哀れまれるのは嫌いだ。別に僕は可哀想じゃない。僕は十分楽しい。毎日楽しんで愉しんで生きている。自分の価値観で僕を哀れみ可哀想がる奴が僕は大嫌い。そう言う奴は自分が優越感に浸りたいだけだ。本当に可哀想だなんて微塵にも思っていない。人を哀れむ自分が好きなだけなのだ。そんなエゴの餌になどなりたくはない。今この腕に巻かれているものだって、そのエゴの産物。そうだ。そのはずなのに……どうして僕はこれを解くことが出来ないでいるのだろう。

(双陸……)

あんな男大嫌い。価値観が違う。馬が合わない。あんな堅物僕は嫌い。僕はもつと不真面目で自堕落で愚かな奴が好きなんだ。あいつだって僕みたいな主への忠誠心の欠片もないような奴大嫌いだろう。僕らは今まで何年もそうやって生きてきた。同じ城で同じ人に仕えているのに、全く別の世界を生きていた。あの城よりずっと広い見知らぬ土地にやって来て、それで初めて前より近くに感じるなんて本当に気持ちの悪い話だ。あいつだって人間だ。僕の大嫌いなタイプの人間だ。

「エルス……？」

レーヴェに何て言えばいいんだろう。レーヴェは単純だが馬鹿ではない。嘘を吐くにはちゃんと上手く吐いてやらなければ駄目なんだ。今の僕はちゃんと上手く喋ることが出来るだろうか？

「只今エルスちゃん！！」

「あ、お頭あつ！！起きてたんすか！？」

「おお！飯だぜ！！本当エルス様々だな！！」

「いやほんと、エルスは良い嫁になるぜ」

「こらお前ら！勝手に俺の飯を食うな！！お頭の俺より先に食おうなんて百万年はええぞ！！」

助け船と言わんばかりに帰ってきた山賊達。戦利品を抱えて居城の一室へと雪崩れ込む。早速料理に手を掛けようとした男を見つけ、レーヴェがその皿を奪いに走り去る。食べ物の怨みは恐ろしい。空中コンボを食らって天井にその男がめり込んでいる。

運び込まれた戦利品は金品に食料に、それから数人の人間。

カーネフェル人の中で売り飛ばす金になりそうなのは、僅かな若い男だけだ。多すぎる女は奴隷としての商品価値は殆ど無いし、年離れた老人達もそれに等しい。

見回せば山賊達には返り血が付着しているし、それなりに大暴れをしたのだろう。男達は純粹なお頭に気を使ってカーネフェル語で土産話を始めてくれる。ちなみにそのお頭は天井に張り付いている部下に文句を言いながらもりもりと食事を始めているため此方の会話には気付いてもないようだった。

「いやあ、今回も傑作だったな」

「そうそう。この男本当馬鹿でよ、見物だったぜエルスちゃん」

「へえ、そうだったんだ」

「なんでもよお、恋人の女を後生大事にしてたつてんでな、まだ一回もやってなかったらしいんだわ。それを目の前で、だもんなあ！もう止めてくれ止めてくれって泣き叫ぶのが縛られてるだけつつ男の方だつてんだから腹痛くなるほど笑つちまつてこつちまで泣きそうなつちまつた！」

「にしてもよお、金髪族の野郎は軟弱男しかいねえんだな！もう俺ら爆笑して手元が狂いそうでやばかつたつて話」

「あははっ！それはほんと面白い！ボクも付いていけば良かったかな」

また一つ不幸な恋人達の別れ話。女の方は目を離れた隙に舌を噛んで死んだらしい。タロツクでは女は月でも、カーネフェルでは女は星の数。使い捨ての消耗品の命を哀れむ者はいない。今日この場で彼女を哀れむのはその片割れである青年1人。

「そ、その声……………まさか」

エルスの笑い声に、目を見開くその青眼。それがあの少年王と一瞬重なつて、僅かな高揚感に満たされる。

「やあ、さつきぶりだねお兄さん？ご機嫌如何？ボクは最っ高！」

「な、何で……………っ！こんな酷いことをっ！！」

「あのねお兄さん、人間は二つの自由を与えられた生き物なんだよ。一つは疑うこと、もう一つは信じること。そのどちらを選ぶもその人の勝手に自由」

泣き叫ぶ男ににこりとエルスは微笑んだ。

金髪青眼の男は嫌いだ。あいつを思い出す。だからこの男が苛ついたので。見たかったのだ。この男が泣き叫び、絶望の底に沈む様

を。

「その自由には責任というものがついて回るんだ。その選択の先での不幸を人のせいにするのはとても愚かなことだよ。自分の考え無しと能無しをひけらかしたいのなら話は別だけど?」

この僕を可哀想だと哀れんだ自分自身を呪うがいいさと教えてやれば、男は今度は可哀想な自分自身のために泣く。本当にカーネフエルの男はどいつもこいつも心が弱い奴らばかり。

「いやあ、相変わらずエルスちゃんはいいい鬼畜っぷりだねえ!」

「なんだ!酒が進むつてもんだ!」

下品な笑い声で溢れかえった砦の中、酒が回ってくる頃には戦利品達の涙も涸れ果てる。安堵しているのだろう。少なくとも可愛い我が身は殺されることはないのだとは知って。

ああ、やはりこんなものか。嗚呼くだらない。愛なんて恋なんて、所詮その程度のものなんだ。思い出として美化された彼女は何時まで生きられるだろうか?この男はどうせまた他の女を愛するような薄情者なんだろう。生きていても死んでいてもそう長くは生きられなかったのだろう。こんな男に惚れるなんて、哀れむべきは彼女に死なれた彼ではなく、彼女を見る目のなさだったのかもしれない。

「あ、そうだレーヴェ」

そろそろ出かけなければ。そう思いながら、先程仕入れた情報の一つを伝えることを思い出す。

「ん?なんだエルス」

「もうしばらくしたらさ、カーネフェルの奴らがこっちに北上し

黒髪に薄紅の瞳の赤子が二人生まれたよ。二人は女と男、姉と弟。二人は重さも背丈も不気味なほど瓜二つの姿。それだけで十分人を恐れさせるもの。

おまけにやその姉弟は妖を見、話すことが出来る不思議な目を持つとつて……そりゃあ二人が鬼だからなんじゃと村の衆は囁き合ってたんだと。

貧しい村は食うにも困る次第であつてね……口減らしにつて弟の方、ぼいっと山へと捨てられたんだと。その頃にや、悪いお殿様が悪い命令敷きまして。二番目からの男はね、みんな殺すか捨てられるかつてな話。その家にはもう一人先の兄がおつたから、何から何まで同じなのに……捨てられるのは男の子。

それでもその子は自分が悪いんだと知っていたもんで、せめて姉さや苦しい思いをさせたくはないと思つたんだと。それでひもじいつても家さは帰らず山の中さいたんだと。

そんな子鬼を助けたのは、山に暮らす物の怪達。毎日村のあちこちから盗みを働きどんちゃん騒ぎ。子鬼も物の怪達との暮らしが楽しくて堪んねつてさ。

んだどもある時子鬼も里心が付いて、おつかさんが恋しくなつたんだと。

村さ現れた子鬼の姿に村の衆は大騒ぎ。そりゃもう死んだはずの人間が、帰ってきたらそりゃ怖え怖えつてな。最近悪さしてるつて物の怪もその子鬼なんだつて話になつて、今度こそちゃんと息の根止めねとな……つう話さなつて、子鬼は最後に姉とおつかさんに会いてえつて泣くもんだから、んならそんくらいつて村の衆も聞いてやつたんだつたな。

おつかさんもおとつちゃんも兄ちゃんもみんなどうして帰つてきたんだと、子鬼を責めて詰つて罵つて、子鬼さ水をぶっかけた。それを止めたのは、子鬼が自分の見窄らしい格好が惨めになるくらい綺麗に着飾つた姉だつたんだと。顔も背丈も相変わらず同じなんだ

けども、子鬼やそりゃあ悲しくなっただと。

「あのな、おら長の息子のとこさお嫁さ行くんだ。したら食うに困らんで、あんたも戻ってこられっべ。おらもみんなと村長さ謝っからな」

姉は優しく話しかけてくれっけど、子鬼にやそれは裏切られたっつって怒っただ。

姉も子鬼と同じ、鬼なんだ。同じ物見えっし、同じ色の目なんだわ。だども山さ連れてかれたのも、石投げられんのも、これから殺されんのも子鬼の方だけなんだと。

おまけに姉は、嘘を言っただって子鬼はわかってんだ。手が震えてたんだ。子鬼が怖くて堪んねえからって、どうせ助けられもしねえのに、優しいこと言っただと。自分だけは呪わねえでくんねってな。そういう薄汚え……人間らしい心になっちまっただと。石を投げられる子鬼の方が、村の誰よりも綺麗な心を持っただんだな。

だから、子鬼は人一倍傷ついたんだ。子鬼は悔しくてのう、悲しくてのう……村を呪った。綺麗な色の大きな宝石みてえな目ん玉に、いっばい涙を浮かべてな。泣きながら、家族も村も呪っただと。

村の衆は子鬼のその言葉が恐ろしいってんで、さっさと子鬼を殺そうとした。その時山から一斉に物の怪が村へと降りてきて、子鬼を助けに来たんだと。

んだども、物の怪達やそんなに強い妖怪じゃなかったんでな、物の怪見えない人間に、悪さは出来なかつただ。見てないところで盗んだり、脅かしたり、そんなくらいしかできねえ弱い妖怪だったんだな。

だから人前さ出て、子鬼を助けるってのはどんなに大仕事か。物の怪達はそんな時に、子鬼の縄を解くのが精一杯。後は人さ心も体も踏んつけられて、次々消えてしまっただと。

子鬼はなあ、そんな時なつてやつとわかつたんだ。人間がどんなに汚え心を持つとつて、妖怪がどんなに優しい心を持つてたか。

そんなら自分も鬼でいい。妖怪でいい。子鬼は本当に大切な家族を無くしたと気付いてわんわん泣いた。仲間を殺した人間が憎くて憎くて仕方ねえつて、子鬼は怒り狂つて本物の鬼になった。村を焼いて人を焼いて、地獄絵図を作り上げたんだと。

悪いお殿様はそんな鬼を討伐に来ただけどな、その鬼があんまりに可愛らしいもんだから、召し抱えて城さ連れ帰つたんだと。残酷なその鬼は、悪いお殿様とは大層馬が合つて、二人して悪さをして人と村を沢山焼くようになつたんだ。

空の向こうに煙が見えつべ？ありや鬼がまた悪さしてんだな。

鬼はな、人間が大嫌いでな。妖怪を殺す人間と幸せそうな人間が大嫌いなんだ。鬼には夢があつてな、世の中から人間を消して、妖怪だけの世の中にするんだつて言つてんだ。

また昔みてえに、妖怪だけでどんちゃん騒ぎ。毎日たらふく飲んで食つて歌つて踊つて……そんな昔を取り戻したくてな、今日もあやつて、鬼は村を焼いて回るんだと。

だども鬼を哀れんでいけねぞ。鬼はそうされるのが一番嫌いなんだと。鬼は誇りを持って鬼をやつてんだ。薄汚ね人間なんか哀れまれるのが気に障るんだな。

だから鬼さ出会つた時は、恐れてやんのが一番だ。そうやつて鬼恐れる心がな、妖怪生むんだと。だからああやつて、鬼は人を怖がらせてんだ。

*

鬼が出たぞと人が言う。振り向けば誰もいない。

ああそうか、指を指されているのは僕なんだ。

鬼は何処にいるの？鬼はここにいるよ。

石が狙うのは誰かじゃなくて僕なんだ。

何もかもが嫌になった。燃えていく赤は綺麗な色。たぶん何もかもを終わらせてくれる色。焼いて焼いて燃やして消して、全てを零へと帰してくれる。

嗚呼、綺麗だな。このまま全部壊してくれないか。僕の怒りも悲しみも全部赤く塗り潰して。どうしてこんなに悲しいのか。どうしてこんなに苦しいのか。その全てを忘れさせてくれる。きっと全てを清めてくれる。

パチパチと燃え上がる家屋の鳴る音は、まるで喝采の拍手だね。ここは何かの舞台だろうか？そうか誰かが見ているんだ。僕という奴の生き様を。人生をまるで脚本のように眺めて物語り嘲笑う。だけれどもうそれもお終い。僕も燃えて無くなるんだろう。

今にも崩れ落ちそうな屋根の上に腰掛けて、もうどうでもいいやと目を閉じて、最後の拍手の時を待つ。

崩れ落ちたその直後に聞こえたのは別の音。

燃え上がるのは家屋じゃない。もっと近くから聞こえる。崩れ落ちたのは屋根じゃない。僕の身体だ。その激痛に目を見開いた。目に映るのは赤じゃない。一面の青。僕の腕を焼いているのはその色。ぞつとするような青ざめるその痛み。手から腕から広がっていく。早くこれを切り落とさなければ炎は痛みは拡大していく。

逡巡後、僕は決断。僕は僕の腕を切り落とさせた。その痛みには僕は目覚める。

「はあっ……………、はあ……………」

夢か。また嫌な夢を見た。

恐る恐る視線を向けた先、ちゃんと僕の腕はある。

「カーネフェル王……………、アルドール……………」

僕に屈辱を植え付けたあの男。人間の癖に鬼の僕を傷付けるなんて。そんなのおかしい。間違っている。人を狩るのが鬼。鬼は人を凌駕する。

僕がおまえに狩られるんじゃない。僕がおまえを刈り取ってやる！……そう心に誓ってエルスは気を静めた。

「……………」

深く息を吸ってもう一度、腕を見れば巻かれた包帯が目に入る。鬼であるエルスが人間に手当をされたのは、あれが初めてのことだった。それをこの上ない屈辱だと思っ以外の思いが胸の内にあるようで、それが酷く落ち着かない。それがよりにもよってあの堅物の双陸だとは。

「……………あいつ、何があつたんだ？」

少し前までのあの男なら、こんなことはしなかった。王に命令されたなら手当くらいはするかもしれない。それでも自分の意思でわざわざ此方に歩み寄るようなことなんかなかったはずだ。彼のこちらを見る目は、異形を見るそんなものだった。それが何故今更柔らかくなったのか。

「……………まさか」

時期を考えれば、思い当たる節は一つだけ。それはエルスがちょうど片腕を失った頃。あんな大怪我、大失態。それをあの男に知られてしまった。それが全ての原因だ。

(あいつ……、僕を哀れんでいるのか!?)

僕を恐れの対象ではなく、無力な子供だと認識したのだ。それは鬼であるエルスには耐え難い苦痛だった。鬼は強いなければいけない。弱さを見せることで恐れを失い人になる。殺す側ではなく、殺される側に戻ってしまう。

僕は弱くなんかない。見せつけてやらなければ。僕は人間の子供とは違う。僕は鬼だ。そう化け物だ。

弱みは見せられない。あいつだって人間だ。人間は必ず裏切る。信じる価値なんかない。こんなの唯の気まぐれだ。或いは偽善だ。そしてエゴだ。別にこれは僕のために施された優しさではない。

「こんな物つ……」

さつさと剥がして捨ててしまおう。そうして腕に巻かれたそれへと手を伸ばす。簡単な動作なのに、それがとても難しく思える。そうしてその繰り返し。

「あいつ……昔は全然こんなじゃなかったのに。どうしたんだよ……突然」

だからこつちも調子が狂う。悪いはあの男だ。僕は何も悪くない昔だ。もう何年も昔だ。僕はもつと背が低くて、あいつも今よりは仏頂面ではなかったし、まだ子供と呼べる年頃だった。

「こんな所で何をしている！危ない、逃げるぞ！」

気がつけば一人の少年に僕は抱えられていた。助け出されたのだと知っても、有り難いとは思えずに、余計なことをしてくれたものだとなさえ僕は思った。

「……………何って」

馬鹿だろつかこの男は。

「そんなの見てわからない？村を焼いてるんだよ」

僕の言葉で彼は自分が助けたのが人ではなく、鬼だったのだと気付いたのだろう。抱える手が強張った。そして僕も知る。ああ、これもやっぱり唯の人間だ。だから急いでそこから飛び降りた。人間なんかに助けられたくなんか無い。僕は誇り高い妖怪なんだ。馴れ合うもんか。

「何の権利があつてそんなことを……………」

「そんなの殺したいからに決まってるよ」

「民はお前の物ではない。王の物だ。だから勝手に殺していいものではない。そんなこともわからないのか？」

「それじゃああなたはどうして生きているの？」

変なことを言い出したその人間に、僕はそう切り返す。

「何の権利があつてあなたは生きているの？生きているんだから何かを殺して食らつて生きているんだろ？ボクは鬼だから人を食らつて生きている。それにいちいち許可を取らないといけないわけ？あんたは息をする度に誰かに許可を貰っているの？」

これはそれと同じ事。僕は生き続ける以上、人を怨まずにはいけない。だから殺す唯それだけさ。息をするのと同じように、それが僕にとっての自然だった。

同じ場所にいられない。人が嫌いな虫を叩きつぶすのと同じだ。

唯目障り立っただけで。いや違うか。確かに奴らは害がある。悪質な蚊だ蜂だ。最悪僕を殺す虫だから、僕は僕の安全のために殺しているんだ。

僕がそう責めれば彼は苦しげな顔になった。何か気に障ることを僕が口にしたのだろう。

「ねえ、綺麗な黒のお兄さん。綺麗な着物のお兄さん。あなたは人間に石を投げられたことがある？食うに困って生死の境を彷徨ったことは？あんたら凡人の目には見えない者達の、悲しみを聞いたことはある？何？一つもないの？その癖そんなに多くを知ったような顔をしているの？本当人間って盲目で傲慢な生き物なんだね」

目に映る景色のその全てが憎らしくて堪らない。嗚呼、世界の何もかもが呪わしい。全て音を立って崩れて壊れてしまえばいい。

その日彼は、僕の言葉に何も返せなかった。そのまま答えられずにただそこで僕を見つめていた。

そこから八年位同じ城に仕えていたけれど、彼と顔を合わせることはあっても向き合うことは一度もなかった。彼はよく外へ仕事に出ていたし、僕はいつも城にいた。数術に疎いタロツクは僕の力を重宝した。基本的に僕に出来ないことは何もない。あるとすれば数術で不可能と言われていた死者の蘇生くらいなものだ。それ以外は代償さえあれば叶えられることばかり。

まあそれでも須臾王は、僕の力自体にはそこまで興味がなかったのかも知れない。あつたのは周りの奴らだけ。王は僕がお気に入りだった。得に王は僕が目がお気に入りだった。紫は薄めれば桜色に見えるからだつて。どんな我が儘を言っても王は僕がお気に入り。人間って本当に馬鹿。くだらない感傷に捕らわれて踏み外す。

真面目に誠心誠意忠誠を誓うあいつより、適当で不遜で無礼な僕が可愛がられる。それをきくとあいつは気に入らないと思っただろうし、僕もそう思われている自覚はあった。何しろあいつの僕

を見る目は本当に冷たい。化け物を見るような目で僕を見ていた。それは昔は純粹な恐れでも、年を重ねる度にそれは唯の嫌悪と薄気味悪さの不快感へと変化した。そういう目を向けられるのは。

それがどうして今更になって。僕を哀れんでいるのか？それとも馬鹿にしている？鬼なんかじゃない。唯の非力な子供なんだって見下している？

それでも丁寧に施された、それでいてぎこちない不器用な結びの包帯。そこにどういう意味が込められているのかわからない。やらなければやられる、それなら僕はやる。そんな風に生きてきたからやらないのにやられてしまった時にどうしていいのかわからない。

「……借りは返してやらないと。そうだ、どんなことでも同じ事だ」

恨みでも、感謝でも。それが人の世の理だ。郷に入っては郷に従え。鬼だって時々は空気を読もうと思ってみたりするものだ。勿論唯の気まぐれか、利害の一致それだけだけだ。

*

要塞カルディアでのタロックとカーネフェルとの交戦が始まって一週間。その決着はカーネフェル側の撤退という結果に終わる。

カーネフェルを指揮するアロンダイト卿。昨日までは好戦的に捨て身の覚悟と気迫を感じさせるまでの圧倒的強さで砦を守った。

指揮官が最前線に出るといふその無謀。それを舐めて掛かった兵はことごとく切り捨てられた。それに身構えた兵士さえ、切り捨てられた。並の者では相手にならない。

国と主へのその忠義に敬意を表し、三日目から双陸がアロンダイト卿の相手を務めた。剣は幼少から嗜んでいた。勝てるとは言いが切れないが、負けるとも言わない。剣だけなら渡り合える。気持ち

勝れば討ち取ることも叶う。相手が唯の剣士なら。しかし相手は唯の剣士ではなかった。アロンドイト卿は剣士にして数術使い。剣を交えている際に発動される数術。それを避けるので精一杯。そしてそれを避けても今度は襲い来る剣戟。どうしても此方が防戦一方になつてしまふ。彼と互角の勝負をするためには正々堂々では無理だ。兵士達も彼の数術を恐れて動けない。

正直なところ、此方も数術使いがいなければ話にならない。

エルス・ザイン……あの同僚である混血の子供が傍にいてくれたなら、そう思いもしたがこればかりは仕方がない。同僚とは言え同じ目的のために動いているかも怪しい相手だ。

それにあんな子供が傍にいては気が散つてもっとまともに戦えなくなる。あれが唯の子供ではないとは知ってはいても、あんな姿だ。大怪我をさせたなら、此方の気も乱れてしまふ。

しかしこれ以上、アロンドイト卿一人に手こずるわけにはいかない。そして今朝……七日目から方針を変えた。自分が彼を抑えている間に彼ではなく他の者を狙えと。

如何に数術使いとは言え、多くの仲間全てを守るのは難しい。そんなことしようものなら集中が乱れ、術か剣技に乱れが生じる。

そして今日、彼が下した決断は……撤退。最後の最後に王の命令ではなく部下の命を取つたのだ。

それは自分には決して選べない選択。それでも彼の選択を責めるつもりはない。むしろその慈愛には好感すら持てる。しかしこれは遊びではない、戦争だ。相手の弱みには付け込まなければならぬ。

「カルディアは完全に我らがタロツクの手に残した！残すは都！ローザクアのみっ！！敵は体勢を崩した！このまま都まで進軍するっ！」

湧き起こる歓声の中、進軍の準備を整えるよう兵士達に声を掛け、皆より物資の補給を行った。一通り命令を下して周れば、もう辺り

は薄暗い。まもなく夜が訪れる。

地の利は向こうにある。夜の間は進軍は出来ないだろう。そうなれば今日は皆で一夜を明かすことになる。

これまで強行軍で無理をさせた兵士達。南の砦だけでは部屋が足りなかった。一夜だけとはいえゆっくり休ませてやれるのは有り難い。敵将のようにはなれず。王の命より彼らを選んでやれない自分の不甲斐なさに自責の念を覚えるも、それも仕方のないことだと首を振る。

守られていた砦の門番も兵士ももういない。住民達も逃げ出したり、降伏したり。夕暮れの風に吹かれることで、堅牢な砦の最後に僅かな物悲しさを感じる。命令遂行のための一コマを進めたのだという喜びよりも虚しさの方が勝っている。それでも命令から逃れられない我が身もまた悲しいものだ。

双陸に命じられたのは都を落とすこと。そしてそれを阻む者と戦うこと。カルディアという最後の砦は通過点に過ぎない。元より無力な住民達に刃を向けることは極力控えるように兵には命じている。だから交戦中も逃げ遅れた住民達は屋内退避でやり過ごさせた。別に人殺しをしに来たわけではないのだ。

「なかなか見事なものだね」

「エル……呪術師殿か」

久々に姿を見せた同僚は夕暮れの風と共に、いつものようどこからともなく現れた。いつものこの子供なら、甘いとかなんだの口にしそうではあったが、今回は珍しく此方のやり方を褒めている。それが少しばかり意外だった。それに驚き、何かを企んでいるのだろうか、僅かにそう感じてしまう自分を恥じる。振り返れば少年は笑ってはいたが、今日は此方を嗤ってなどはいなかったのだ。

「で、このまま追うんだって？」

「無論、ここまで来た以上……前進するしかあるまい。速やかに終わらせる方が、両国にとって被害は最小限で済む」

「そう。それじゃあ丁度だね」

「丁度だと？」

この子供は妙なことを言う。くすくすと小気味よく笑いながら混血の子供は見えないことを語り出す。

「ボクの計算では明日の昼頃。こつちがローザクアに着く頃に、奴らは即位式を行うよ。新たな王の誕生で、どん底まで落ちた士気を盛り上げようってことらしいね」

「……なるほど、そのためか」

極力戦力を減らさぬように、相手方の将は後退した。今にして思えば、それは退避のための時間稼ぎと言えなくもない。指揮すべき将が前線に出てきたことにも頷ける。それを双陸は捨て身の覚悟と受け取り応戦したが、そういうことではなかったようだ。

「まだ諦めてくれないということか……窮鼠猫を噛むともいうからな。より一層気を引き締めてかからねばなるまい」

「まあ、そうだけど本当に次で最後だ。その最後の芽を摘み取つたなら、カーネフェルはもうお終い。士気が上がることはない。カーネフェル王の初陣を大失敗にさせてやれるかどうか。それは貴方の采配に掛かってるんだよ双陸」

遠回しに頑張れと言われたような気分。本当に妙だ。この子供は何かおかしな物でも食べたのだろうか？

「即位式も王が居なければ出来やしない。南の砦を張っていても全然来ないと思ったら、あいつらもう都入りしてたんだよ」

「その言い方だともっと早くに気がついていたようだな」

「そりゃそうだよ。ボクの腕の怨み、たっぷり返してやらなきゃ」

やはり妙だ。いつものエルスなら、そんなことは言わないしまずやらない。場所を知ったならすぐさま乗り込み殺しに行っただけもおかしくない。それをわざわざ今日まで待つて、自分の所までそれを教えに来るなんてとてもおかしなやり方だ。その彼らしくない行動に、一抹の不安を覚える。

「王になる前に叩きつぶしても唯の一般人。希望の芽を潰すには、それを灯した後に吹き消した方が効果的だしね」

その物言いは確かに彼らしいが、不安はやはり拭えない。

「あ、そうそう。南の砦にボクが借りてた兵、貴方に返すよ。都攻めには一人でも多い方が良いでしょう？僕は一人の方が身動き取りやすいしね。都落としては貴方がやってよ。僕は内部から崩して隙を作る。大暴れだねえ……楽しみ楽しみ！」

「しかし……それでは流石に危険ではないか？相手は……」

「貴方なんか心配される義理はありません！ボクは誰の命令も聞かないよ！須臾がそれでいいって言うてくれてるんだから」

彼のみを案じた途端、突然突き放すような敬語。これまで嫌味としてしか活用されてこなかったそれが、今だけ聳え立つ壁のよう。礼儀の欠片もなかった口調の方が、身近に感じられていたというのも変な話だ。

「カーネフェル王……ボクに二度も屈辱を味会わせたあの男……！絶対に許さないっ！！」

ああ、そうか。ようやく悟る。

彼は今俺が哀れんだのだと思ったのだ。俺の言葉が彼にカーネフエル王へと向ける怒りを思い出させてしまったのだ。

そうじゃない。そうじゃないのだと、何と言えば伝わるのだろうか。こういう時、言葉を上手く作れない自分に呆れてしまう。

別にお前の力を侮っているわけではない。弱いと思っっているわけでもない。それでも心配なのだ。強さは認める。知っている。そう。出会った頃からお前は強い。村一つ、今よりもっと小柄な身体で焼き払ったお前だろう。その気になれば俺の磨いた剣技すらお前は凌駕するだろう。そういう理不尽な強さを持っているのが数術使いという生き物。

それでもお前は心にムラがある。やはりまだ子供なのだ。だからいつでも強いわけではない。その隙を突かれれば、またこの間のように大怪我を負う。

数術でそれは無かったことに出来るのかもしれないが、その傷を負うとき……痛くないわけではないのだろう。だからこそ、彼はこんなにもカーネフェル王を憎んでいるのだ。

「……………これを持っていけ」

「何これ……………」

「数術使いの弱点は接近戦だったな。俺の脇差しだがないよりはマシだろう。万が一のために持っていけ」

「へえ……………やっぱりボクの力を貴方は信用してないんだ。いや、わかるよ。……………いいえ、わかりますよ、ボクは人間じゃないから」

子供扱いなんてされたくない。いつも鬼として人に恐れられていたい。それでも力だけ、強さだけは信用して欲しい。そんな我が儘な言葉、子供以外の何だというのか。子供が傷つくところをあまり見たくはない。こんな戦場に似つかわしくないのだ、この子供は。

第一これはあの方のお気に入りだ。命令は絶対だが、主の望みを察し叶えるのも自分の役目。俺はこの子供を死なせてはならない。そのため王は俺とこれを同じ場所に送られたのだ。

「お前が鬼でも人でも些細なことだ。あの方にとってお前が必要なのは確かだ。万が一でもお前に何かあつては困る」

「双陸……」

「それは俺の大事なものだからな。返しに来てもらわなければ俺も困る」

そう恩義せがまし言い方をすれば、エルスが小さく微笑んだ。

「貴方はつまらない人間だね。……そしてこの上ない馬鹿だ」

いつもの人を小馬鹿にしたようなそれとは少し纏う空気が異なっているのが印象に残るような笑みだった。

「返しに来た時得物が足りなくて死んでたとかなくて、その時ボクに恨み言とか言われても聞いてあげないからね」

しかし生意気な口の利き方は相変わらずと言うべきか。子供だというのにまったくこれは素直ではない。子供らしい可愛らしさがまるで皆無だ。こんな弟がいたら今頃きつと手を焼いていただろう。俺の弟はこんな奴じゃなかったから、妹がいたらこんな風になっていたのかも知れない。タロツクの女は大抵性悪だ。甘やかされて我が儘で、自分勝手に傲慢で。

「そこまで言うんなら持って行ってあげるよ。……同僚のよしみでね」

そう言って笑うエルスは、何だろう。とても人間らしい笑顔を浮かべている。出会った頃のこの子供は、こんな風には笑わなかった。漠然とそれを思い出し、それがとても遠くそして妙に懐かしく感じられた。

O : Latet anguis in herba . (後書き)

いきなり道化師、それからタロックサイド。6章ヒロインジャンヌのジの字も出てこない。あらずじ詐欺とか言われたらどうしよう。

0章ゲー制作時のイベントを0章に付け加えるか6章に盛り込むかで悩みましたが心機一転と言うことで此方に。

何はともあれ6章はむやみやたらに恋ですね。タイトルが以上避けられん……

ところで彼方此方であらぬ方向に矢印出てるせいで、ノリで三角関係タグを入れてしまいました。誰と誰と誰を指しているのやら。なんかもうみんな何だかんだでいろんな線出てやがりますね。人間関係力オス鍋。そうだね、愛憎だね。

0 / 1 : Respicere , aspiciere , prospicere . (前書き)

0 が付いてる内はまだ0章軸。フローリプが死んでからが6章軸。
まだプロローグみたいなものです。

「アルドール様……」

一週間ぶりの主を目に、まずランスの口から零れたのはそんな言葉。扉の先の風景に、あらゆる言葉が霧散して、そう絞り出すのが精一杯だったのだ。

久々の王都。馬を奔らせ都へ急ぎ、城へと向かい、あの方が居ると聞いたその一室に駆け込んだ俺を迎えたのは二人の人間。あの方の傍には1人の少女が居た。

その人は俺が初めて見る人だ。彼女よりは短い金色の髪。伏せられた瞳の色はうかがい知れない。まだ小さな女の子だ。おそらく彼の言う、「妹」君なのだろう。

無事に道化師の魔の手から、彼女を救い出すことが出来たのだ。しかしそれにしては彼の表情がおかしい。目的を達成したにしてはそれはあまりに暗すぎる。

(そう言えば……ユーカーの奴も何か様子がおかしかった)

*

俺がいない間、王の護衛を頼んでいた俺の従弟。嫌々と言った口ぶりで護衛に付いたにもかかわらず、律儀にもここ数日寝ずの番でもしてくれていたのだろう。再会した従弟は少し驚いた様子で左目の下には隈が見える。隠されている右目もおそらく同様に。

「……んじゃ、後はお前の番だ。子守りなんて柄にもねえ仕事させられたんだ。戦まで俺は昼寝でもしてくるぜ」

軽く欠伸をしながら、背を預ける壁から身を離す。そして背を向けそそくさと消えていこうとする彼に、俺は違和感を覚える。

「ユーカー……何があつた」

「見りや解る。嫌でもな」

場合によつち俺はまたお前に殴られるかもしれないねえと、彼は小さくそうぼやく。

些細なことで喧嘩を繰り返していた昔は兎も角、近年では俺がこいつに手を挙げるのはそうそうない。その時点で俺は気付いた。誰かが死んだのだ。

俺にとつての最悪は、主を失うこと。ユーカーの語る言葉がアルドル様の死ならば確かに俺はこいつを殴らずには居られない。そして何故だと問い詰める。そしてそうしてしまった自分とまた何も出来なかつた自分を深く悔いることになる。

早く扉を開けてあの方の安否を確認したい。それでも何かが妙だ。何かあつたというのは誰かではなく、目の前のこの男自身のことのように感じられるのは何故なのか。

（違う。アルドル様じゃない）

その様子からそれを察する。けれどあの人に連なる物事……それ以外でこいつをここまで変貌させる何かがあつただらうか？

1人だけいた。しかし彼女はもういない。

（これではまるで……）

この様子は見覚えがある。彼女の死を知った時のそれによく似ている。此方が言葉を掛けることを躊躇ってしまうような静かな気迫。怒っているのか沈んでいるのか何とも言えない危うい均衡。迂闊に

触れれば何が彼の地雷になるのかわからない。彼とはそれなりに長い付き合いだ。粗方互いを理解している。そう、そのつもりだ。それでもこういう時、それは誤りなのではないかと思わせられる。それは唯の自惚れで、本当の理解には程遠い。

「それじゃあ……お前には何があつたんだ？」

「お前には関係ねえことだ」

言いたくないと彼はそう吐き捨てる。ぱつさりとそう切り捨てて関わることを許さない。

彼には元々排他的なところはある。それでもそれが自分に向くことは本当に稀だ。だからこそ彼にそう言わしめる程の事態が引き起こされたのだとは知る。

「いや、悪い。言い過ぎた」

そう言つてユーカーは目を逸らす。小さく息を吐いて呟く言葉は自暴自棄のそれとは違う。暗い中にありながら、明確な線、一本の芯を感じられる。何かの決意を感じさせるような言葉。

「……お前が死ぬまでは、俺がお前を守つてやるよ。仕方ねえから、あいつのお守りもしばらく付き合つ。ついでだけだな」

本来その言葉には安堵すべきだ。少なくともあの少年の無事は確定された。自分もアルドールも弱いカードだ。道化師などと対峙したなら間違いなく敗北するだろう。Aであるアルドールはジョーカーを殺せる唯一のカードではある。それでもそれには条件があるのだと神子は言う。

コートカードであるユーカーがアルドールの護衛を継続してくれらるといふのなら、それは助かる。その時が来るまでの時間を稼ぐま

でに彼が必要な人材だということは誰もが理解している。しかしやはり疑問を感じる。しかし繰り返される問いかけに、彼は答える気がまるでない。

「……俺は下から三番目のコートカード様だからな。いねえよりはいくらかマシだろ」

それは自嘲だろうか。彼が笑った。

「お前が必要としているのはカードとしての俺の力だろうか？それとお前に劣る剣技くらいだろうか？劣るとはいえあいつの護衛としてないよりマシだから」……彼の言葉にはそんな響きがあった。

（違う、俺は……）

そんなことを言わせたのではない。それでも彼はもう決めている。此方の言葉など介さない程頑なに。

アルドールを守るのはアルドールのためじゃない。お前がそういう俺を望むからだ。お前があいつを守れと言うならそうしてやるよと言う言葉。

騎士として主に仕えるのは当然のことだ。それでもユーカーはアルドール様に仕えてはいない。彼を主君とは認めていない。それでも護衛をしてくれるのは、偏に俺の言葉があつてこそ。それは俺を死なせないため。だからこいつはここにいる。

それでも俺の頼み事は、違う。騎士としては当然のこと。それでも、それはこいつにとっては当然ではなかったんだ。今までは同じ人に仕えていた。だから俺たちにとってそれは当然だった。それでも今、それはもう当然ではない。無くなってしまった。

俺はアルドール様のために自身の犠牲を肯定するが、ユーカーはそうじゃない。こいつもカード。カードとして他を殺めて生き残る道を選ぶのか、それとも自らの犠牲を肯定して願いを託すのか。こ

いつは自分の命の使い道をととうと決めたのだ。

こいつは今、お前のために死んでやる。そう言った。自身の願いを諦めるに値するのはこの俺だけだと言っている。その言葉の重さと、認識の違いに俺は言葉を失った。

こいつに騎士であることを求める俺は、「仕えたくもない子供のためにお前は死ね」と言っているようなものなのだ。こいつは俺に生きると言ってくれているのに。言葉の違いに、俺は俺が本当に薄情な人間なのだと思い知らされる。俺の言葉は消極的に、間接的にこいつの死を望んでいるようなものだった。

こいつはそれを嫌がった。それが嫌だったんだ。どうしてそれに気付いてやらなかったのか。今のこいつはもうそれを受け入れている。「そのために俺が死んでもどうでもいいんだろ。俺はそうじゃなくてもお前はそうなんだよな。別にそれでもいいけどよ」……そんな虚ろを抱え込んでしまっている。

俺がこいつを本当に何とも思っていないくて、大事な家族の命さえ使い捨てるような男だと認めた上で、こいつはそれでもいいと言ってくれている。死んでやるよと口にする。そこまで追い詰めてしまった自分に反吐が出る。

そうじゃないんだと思っても、伝えられる言葉が俺にはない。何とも思っていないはずがない。それなのに俺はいつもこいつを犠牲にしてしまう。忠義に私情を挟めるはずもない。俺は人である前に騎士だ。王のため、即ちそれは国のため。そこにたった1人だ。どんなに近しい親しい身内でも、俺はその命を肯定できない。

「ユーカー……本当に、何があったんだ？……それは俺に言えないことか？」

それでも諦めきれず、聞いてみる。しかし答えは変わらない。

「……言いたくねえことだ」
「そうか……」

そう言われてしまえばもう何も言えない。俺は今拒絶されている。当然だ。こいつはいつも俺を案じてくれている。そのため感情的なこいつは騎士としても将としても失格だ。それでも人間としては俺より遙かに優れている。俺は騎士として将としては優れていても、人間としては失格だった。俺は世界で一番嫌悪する男と同じ例えを背負ってしまったのに気付कि、胸の中に苦いものが込み上げる。

「……さつさとあいつの所行ってやれよ。お前の主なんだから。俺は昼寝でもしてくるわ。ここんとこあんま寝てねえんだ」

「……ああ、俺の主を守ってくれて……ありがとう」

今度こそ背を向けて歩き出した従弟が、ピタと足を止める。だが振り返らない。

「……まさか礼を言われるなんて思わなかった。殴られんの覚悟してたんだけどな」

「……あの方は無事なんだろう？それなら十分礼を言うには値する」
「お前って意外と淡泊だよな。……誰にでも優しいけど、実際はどうでもいい奴らも多い。お前は本当部下体質だな。主さえいりゃそれでいいんだろ」

そう語る彼は今、どんな顔をしているのだろうか。子供の頃からの付き合いの俺でもそれを察することは出来なかった。

俺に対してこんな風に棘のある言葉を吐く従弟は珍しい。見下している訳じゃない。それでも僅かに軽蔑している？いや違う。それは先程の笑み、自嘲に似ている。これはいつも強がっている彼の、捻くれた弱音なのだろうか。

「ユーカー……？どうしたんだ、本当に……」

どうにもこうにも彼らしくない。戸惑いを覚える俺に、彼は苛立ったように舌打ちをする。

命捧げてもいいつてくらい大好きな王様が待ってるんだ。そこらのゴミと大差ない俺のことなんか構ってる暇あったらさっさと会いに行つてやれ。そう背中を蹴られたようだ。

「……眠くて苛ついてるだけだつて。いいからさっさと行けよ」

「あ、ああ……」

部屋の扉に手を掛ければ、俺の頭が切り換えられる。仕事に私情は挟んではならない。俺の最優先事項はアルドル様なのだ。僅かに後ろ髪を引かれる様な気持ちも頭の中から振り払う。

部屋の中には長い金髪を結った少年と、寝台に横たわったままの少女。ここに来るまで出会わなかった人間はいるか？ユーカーのあの様子。誰かが死んだのはまず間違いない。

（イグニス様は教会にいるとの話だったが……）

彼らの中から失われたのは何なのか。皆が一様に虚ろを宿した表情。そつだ彼らからは明るさというものが消えている。

（そつ言えば……ルクリースさんを見ていない）

そこでランスは答えに気付く。そつだ、影のようにこの少年の傍にいつもべつたりしていた……彼の姉がどこにもいない。

（まさか……彼女が）

アルドールを見送る時、その傍には1人の女性が居た。長い流れのような金髪に、海色の青い瞳の少女。夏のような人だなと思った。その瞳は涼しげな色なのに、笑顔はどこまでも温かく、その目は炎のように燃える強固な意志を持っている。

カーネフェルは男が少ない。このご時世だ。この国における女性はずしも守られる存在というわけではない。彼女もそうだった。俺よりも多くの幸運に守られた最強の一角、コートカード。あの方を守るカードとして、俺たちの中で最も適任だったと言える。

彼女は笑っていた。最後まで笑っていた。此方に不安を感じさせることもないような、軽く明るい笑みで何時までも。

ユーカーのあの沈みよう。幾らかは彼女が関係しているのだろう。ユーカーは本当に嫌いな相手には口さえ聞かない。彼と毒舌合戦が出来ると言うことは、多少は心が開かれている証拠だ。

(ユーカー……)

アスタロットのことがあってから女性から距離を置いていた従弟だが、彼女とはなかなか気が合いそうに俺には見えた。……あれはこの少年だけの力ではない。あいつが昔をほんの少し取り戻したのは……その何割かは、あの女性の力もあったのだ。

彼女は俺たちの知る女性とはかけ離れたような性格をしていたけれど……それでも人を惹き付ける何かがある彼女には確かにあった。それが彼女の、王の血だ。

(殴れるわけ、ないじゃないか……)

彼はまた、目の前で王の血縁を失ったんだ。カーネフェリア俺はまた大事な時に何も出来ず、王の傍にいられなかった。

「アルドール様……申し訳ありません。俺は……貴方を守れなかつた」

「……………何言ってるんだよ。ランスはちゃんと役目を果たしてきてくれたんだろ？……お帰り。良くやってくれた。感謝してる」

此方を見向きもせず、主が喋る。その姿の何と痛々しいことか。

傍らの少女しか目に入らないと言うように、その寝顔を見守る姿は1人の兄だ。王などではない、唯の弱い脆い傷つきやすい少年だ。俺が今ここにいることはおそらく邪魔でしかない。2人の時間を妨げるだけの存在。その先続く沈黙に耐えきれず、俺は一言を残して部屋を後にする。

「いいえ、俺は守れなかつた」

それに対する答えはなかった。それは彼もその通りだと思ってくれていたからなのか。事実としておれは彼の心を守れなかつた。だからこんなには彼は傷ついている。

人間失格だつて？何を言っていたんだろう俺は。人間どころか……使命も果たせない。俺は騎士さえ失格だ。傷ついた主の支えにすらなれない。こんな俺に意味はあるのか？
無い。あるはずがない。

*

「アロングイト卿！わざわざ此方まで来て頂いてすみません」

「イグニス様……」

約束通り出向いた第二聖教会。俺を迎える神子の顔もまた明るいとは言い難いそれだった。

一週間。たかが。それっぽっちの時間で希望は容易く絶望へと姿

を変える。

「いいえ、確かに最善ではありませんが最悪ではありません。よく時間を稼いでくださいました」

王に代わってお礼を言わせてくださいと幼い神子が言う。その言葉は確かに勿体ないが、ランスにとってそれは喜びではない。何よりその言葉を与えて欲しかった人はもういない。その代わりの人も、今は深く沈んでいる。

「しかし流石ですね。よく一週間も時間を稼いでくれました。お陰でタロツクの奴らに立派な式を見せつけてやれそうです」

「策が見破られぬように、籠城の構えを見せ、私も何度か討ち死にを思わせる無謀な行動を取りました所詮は烏合の衆。そう思わせ瓦解したと認識させる風にバラバラに逃がしましたが先程全ての部隊が都入りを果たしました。タロツク軍はカルディアを陥落した勢いでこのまま都までやって来ます。おそらく明日には此方に辿り着くでしょう」

「そうですね。……それでは気を引き締めてもう一戦に挑みましょう」

一度そこで会話が途切れた。決戦前夜だというのに不安は尽きない。そればかりが雪のように降り積もる。真夏の暑さでさえそれを解かしてはくれない。

「……アルドールには、会われましたか？」

「はい……」

「……ルクリースさんのことは残念です。……彼女は、僕とアルドールを守ったせい……」

いえ、物は考えようですねと彼は首を振る。

「相手は道化師でした。彼女一枚で切り抜けられたことの方が奇跡ですね。痛手には違いありませんが」

「……………俺で、あの方をお守りすることが出来るんでしょうか」

「……………僕よりはあなたの方が適任ですよ。……………僕が行くと彼は空気を振る舞おうとして余計に痛々しいことになりますから」

「イグニス様……………俺は俺が情けないです」

沈んだ顔。表情一つ変えずに瞬きも忘れたように眠っている少女を見つめていた主の姿。その背中に幾ら言葉を投げかけても虚しさは拭えなかった。

「こんな時にあの人を……………俺は支えることすらままならない！」

聖堂に響く自分の言葉に、情けなさばかりが募る。自分の無力を実感する。どうしても自分はこののだろうか。大切なときに大事な人の傍に居ることが出来ない。そうしてその身と心を守ることもし叶わない。下された命令を幾ら果たしたところで、主を守れないのなら、騎士たる我が身に一体なんの意味があるのか。

「……………アロンダイト卿、貴方は多くの時間を作ってくれました。まだ今日の夜には時間があります」

俯いて頭を抱えるランスにイグニスは歩み寄る。その向かいに腰掛けて、両目を閉じて淡々と言葉を紡ぐ。ひっそりと囁くようなその声の中に何故だろう、憐れみか慈しみのような得体の知れない温かみを感じる。

「僕も神も貴方を救いはいませんが、貴方が貴方を救うための手伝いくらいなら喜んでさせていただきますよ」

懺悔をしる。悔い改める。自身を救う、そのために。聖堂を流れる夜の空気がそう、語りかけてくるようだった。

(後悔か……)

そんなもの、ある。幾らでも。

幾ら周りに持て囃されても自分も1人の人間だ。不可能事は幾らだってあるだろう。

力が足りないとは思わない。それを感じるのならそれを補う努力をすればいい。だから非力を嘆くことはない。

それでも無力を感じることはある。今更どうにもならないことを悔いる気持ちは尽きない。

被害は最小限に。民と兵を逃がすための時間稼ぎ。指揮官が前線に出るなんて無謀、それを犯した。捨て身の攻撃だとタロック側は受け取った。それに応じる潔さをもって彼方の将が前に出た。もうカーネフェルは虫の息。カルディアの砦もランスが散れば陥落。逆を言うならその騎士1人いるだけで、何時までもこの砦は屈さない。最後の1人になるまで戦い続けるだろう。

だからこそその指揮官が前に出るとは意味がある。大きな餌だ。それさえ撃てばいいよ王手。弓兵達の攻撃も、精霊に愛された数術使いを前には意味を成さない。数術使いの弱点は接近戦。ランスを落とすには接近戦を挑む必要がある。それを向こうの指揮官が悟るまでに一日。その力量を見極めるためにまた一日。翌日、三日目から将同士の一騎打ちへと持ち込んだ。それが無駄な犠牲を減らす術だと両者が認め合うことで。

しかしランスは唯の数術使いではない。あくまでランスは騎士。数術の才のある騎士。数術使いの欠点である接近戦を克服どころか、むしろ其方が本分だ。そこから三日間はランスの優勢。武人として

の礼儀を持ってそれに応えていた双陸も、相手が窮鼠ではないことをいよいよ悟り、これ以上の時間を割けないことを知る。武人の礼儀も誇りもタロツク王の命令には及ばないのだろう、方針を変えそれまで待機させていた弓兵が狙うのはランスではなく他の兵士。その全てを援護しながらの一騎打ちとなれば、数術の分も詰められる。剣技だけなら力は拮抗。こうなれば、ランスももう命令を下さなければならなくなった。

王都ローザクアへの撤退。それは要塞カルディアの陥落を意味した。

なじみ深い場所を敵に明け渡すのは非常に苦い思い。それでも俺にとつて王の命令は絶対だ。あの優しい少年は、王でありながら民や兵の命を尊ぶ。その優しさは先王と通じるところが感じられ、今度こそ守らなければと思わせられた。

「償いのつもりだったんです」

長い沈黙の後ポツリとランスの口から漏れた言葉。それにイグニスが問いかける。

「償い……ですか？」

「ええ……俺が俺を保つためには、俺には王が必要だった」

理由が欲しかった。あの人を死なせてしまった俺がやるべきことは何か。冷静な判断能力を失っていた。だから感情に振り回されて言わなくても良いことを口にしてしまいユーカーを傷付けた。あいつは俺の身を案じていてくれたのに。

……そんな俺たちを仲裁してくれたのもアルドル様だ。今は回数も減ったが、昔はそれなりにあいつとは仲違いをしていた。子供だった。お互いに。その度に間に入ってくれたのはあの人だ。そんなところまでアルドル様はあの人によく似ている。だからこそユ

「カーも文句は言いながらも彼を放っておけないのだろう。あいつと俺はよく似ている。あいつも求める物があるのだろう。償いか、死に場所か。それを思う気持ちはあいつにもきつとある。」

「アルドール様は、俺の希望です。死に急いでいた俺にあの方は生きるとお命じになった……そんなあの方に、俺はあの人を重ね見ていたんです」

そんな命令をされたのは、彼で二人目。込み上げる懐かしさと慕わしさ。それが俺に忠誠を誓わせた。口先だけのそれじゃない。あの時、俺の心が彼へと跪くのを感じた。

あの人を死なせてしまった俺なんかには彼は生きると言う。それは許しだ。同時に命令だ。俺を許した言葉が俺に忠誠を誓わせる。生きると命じる言葉は、俺に俺の死への決意をより強固にさせる。

「俺はアルドール様のためなら、この命を使っても構わない。そう思いました」

「アロンダイト卿、貴方は本当に立派な騎士ですね」

決意の言葉に、神子は含みをもたらず言葉。

「だからこそ僕は貴方を疑問に思います」

見開かれた琥珀色。その双眸は月明かりのような冷たい光を映し出す。その全てを包むような、それで居て突き放すような冷たい瞳に彼の言葉もよく似ている。魔に魅入られたようにランスはその言葉に耳を傾けるしかなかった。

「アロンダイト卿。僕は神子です。人を救うべき立場の人間です。それでも僕は多くの犠牲を肯定しなければならぬ立場の人間でも

あります。僕に求められているのは犠牲を上回る救済。最小限の犠牲で最大多数の幸福を実現させるのが僕の役目です」

博愛を義務づけられた役職に据えられた子供。それでも彼はまだ幼い。そんな子供に背負わせるにはあまりに重すぎる荷物。そんな重荷を抱えながらも彼はまっすぐ顔を上げ、しっかりとした口調でそれを言い切る。

「仮に僕の中に深い葛藤があったとしても、僕は見捨てなければなりません。ルクリースさんも、フローリップさんも……救える力があっても僕は彼女たちを救えません。僕は彼女たちを諦めた。フローリップさんも、もう長くはありません。どうにかする方法を知ってはいても、僕は僕の役目と考えるためにこの件に関してどうすることも出来ません。それでも勿論後悔はします。悔いてもいます。それでも僕は割り切っている。犠牲を肯定する以上、僕には前を、上を向いていなければならぬ義務がある」

「……この戦いが終われば、大きな戦が始まります」

未来を見据える瞳は、それは避けられないことだと此方に訴えかけてくる。タロツクをカーネフェルから追い出すだけでは神の審判は終わらない。カードというものがある以上、何度でも侵略者は現れる。今回の戦は殺すか殺されるかの泥沼だ。国の上層部にカードが生じてしまう以上、この戦争は世界を巻き込む。

「それまでにアルドールには持ち直して貰わないと……国も民もついてこない」

親しい者が死んだくらいで毎回毎回あんな風になっただけではいけない。ずっとあんな情けないままで居られたら困るのだと神子は言

う。そう語る彼の顔は僅かに困惑しているようだった。

「イグニス様……………」

「正直な話……………僕もあんな彼を見たのは初めてで。なんて言葉を掛ければいいのかわからないんです」

彼を奮い立たせるために、わざと傷付けるようなことを口にした。それは彼のためだ。それでも彼にはちゃんと伝わらない。それがもどかしいと神子は溜息。

「言葉って難しいですね。傷付けるのは簡単なのに、どうすれば救うことが出来るのか……………」

「……………それならアルドル様の傍にいてあげてください。今はきつと……………それが一番心強いと思います」

ルクリースのように、いつも彼の傍にはイグニスがいた。アルドルが誰より深く信頼し、心を預けている相手。それはこの神子以外にはいない。たぶんそれだけで彼は今より救われるのではないか？それが自分には無理でも、この神子ならば……………

「……………彼は貴方に傍にいて欲しいはずです」

「……………また、その言葉を聞くとは思いませんでした」

驚いたようなイグニスの目。

「え……………？」

「……………いえ、何でもありませんよ。そうだアロンダイト卿。同じ言葉を貴方にお返ししますよ」

聞き返すも、柔らかい笑みに流される。

「……セレストイン卿、いろいろありましたから、凹んでるんじゃないかと思えますよ」

「あいつが……?」

その言い方ならば彼は何かあったのか知っている。それでもそれを簡単には話してくれないだろう。神子とあいつは険悪でも、そこには漠然としたルールがある。口ではどんなに言い争っても、相手を行動で貶めることはしない。二人ともプライド高い性格だ。ある意味で互いを尊重しているとは言えるのか。言うなれば、忌み嫌いあつてはいるが似通っている箇所があり、深く理解し合っていると言えるのだろう。

もしかしたら俺よりも、あいつの本質をイグニス様は見抜いているのかも知れない。

これ以上彼の話題に貴重な時間を割くのも億劫、そんな風に頭振り神子は話の流れを引き戻す。

「……でも、貴方の言葉は有り難いですがそれは出来ません。暫く道化師は僕を狙ってくる。僕が彼の傍にいれば、彼まで余計な危険に遭わせてしまう」

話の本筋はあくまでカーネフェル王アルドル。それ以外は些細なことだと彼は言う。彼を失うことはカーネフェルにとつてもシヤトランジアにとつても痛手だと。そのための策を講じなければと神子は顔を上げた。

「……明日の即位式を最後に、僕は彼から距離を置きます。勿論彼への支援は続けますし必要ならば僕の部下も送ります」

「……それでは、イグニス様は」

「彼も、いつまでも僕だけじゃ駄目なんです。彼は王になるんだ

から」

彼を強く想っていることは此方まで届くのに、敢えて突き放すようなその言葉に戦慄を感じる。これがただか14、5の子供の言葉か？

「アロンダイト卿……僕が道化師を倒すまで……彼をよろしくお願ひします」

カードの強弱。前提条件としてまずそれはあり得ない。イグニス
はコートカードとはいえそれは」。道化師との間にはQとKを挟んで
いる。幸福値の差は歴然。強弱で言うなら圧倒的に不利。ルール
としてはまず勝てない相手。いくら彼が優れた数術使いなのだと言
つても、その言葉を信じることは出来なかつた。

いくら才があつても運に見放されれば勝てる勝負も勝てなくなる。
世界は非情。どんな努力も才能も、時に全てが無意味に変わる。

「お言葉ですが、コートカードと言えど相手が道化師では……」
「大丈夫ですよ策はあります。それに僕もいつまでも彼だけでは
いけません。僕には頼り甲斐のある部下が大勢いますから」

にこりと満面の笑みを浮かべるのは此方を安心させるためではな
い。これ以上文句を言わせないという脅迫だ。

「……………削れるところまで、削ってみます。僕では無理でも、ア
ルドールがあいつを殺せるくらいの所まで幸福値を削ります」

ルール上殺すことは出来なくとも、勝敗を分けるのは幸福値。道
化師の幸福値をルドールの所まで削ることが出来たなら、Aは
それを討つことが不可能ではなくなる。理論上はそうだ。それでも

最低幸福値を与えられたAの領域まで最高幸福保持者である道化師を落とすのは並大抵なことではないはず。

「……イグニス様、何故貴方はそんなにも……」

わからなかった。どうしてそこまで彼のために尽くすのか。この少年の寿命はそう長くはない。自身もそれを覚悟している。その上で躊躇いもなくこんな子供がその犠牲を受け入れている。

神子は騎士とは違う。騎士になったのは自分の意思だ。家が少なからず関係しているとはいえ別の生き方もあった。逃げる方法はあった。それでも神子は違う。誰でもなれるものでなければ逃げる方法もない。選ばれたら最後。生き方から全ての自由を奪われる。強要された生き方が求められる役職だ。

自らの犠牲を前提に、イグニスは話をしている。騎士でもない。主などいない。言うなればそれは世界だ。そんなわけのわからないもののためにどうしてそこまで尽くせるのだろうか？自分は一つの国で精一杯だというのに。

「……アロンダイト卿。貴方がアルドールを王と呼ぶのと同じですよ。これが僕の償いなんです」

その言葉にはつとめる。此方を見つめる神子の目は、癒えること無い悲しみを抱いている。その目をランスはよく知っていた。

「……昔、僕には大切な人がいた。僕はその人を守ることが出来なかった。僕が死なせたと言っても過言ではないくらい……」

償いという言葉がすんなりと溶け込んでくる。その亡くした誰かのために、彼は生きているのだろうか。

「これはその償いなんです。僕は僕よりアルドルが大切です。国のこともありますが、彼を死なせたくないのは確かです」

神子としてだけではない。人間として彼を死なせたくないのだと彼は言う。神子としての役目と彼の友人としての思いが同じ方向を向いているからこそ出来ること。だからこそより強く彼はいられるのだ。立ち止まらないし迷わない。これが逆方向ならば人は迷い身動き一つ取れなくなる。

「……貴方は、少しだけ僕に似ている。昔の僕に」

イグニスが目を伏せ笑う。

「貴方は世界がたった一人だけのものだと思っていませんか？」

彼は問いかけてくる。騎士としてではなく、人としてのお前の心は何処にあるのだと。

「昔の僕はその外側がどうでもよくてそれを省みることもありませんでした。貴方が僕と違ふところは、その外側を何の見返りも無しに本当に大切にしようと思えること」

自分は違ふ。その外側を愛することなど出来なかった。常に憎悪していた。外は敵だとそう頑なに心を閉ざしていた。だからそうならず居られることに感嘆さえ覚えると神子は言う。

「でもそれはたった一人のため。その人が大事にしている、守ろうとしていたものだから。その遺志を継ごうとしている。その一人を失った後も……貴方は幻影を見ている。……昔の僕もそうでした」

貴方はアルドールを見ては居ませんね。静かな口調で諭すよう、
そう告げられている。

神子と自分の違い。彼を支えられない原因はそこにあるのだと教
えられているようだった。

「すぐにはなくてもいいんです。いつかアルドールをアルドールとして……見てやってくれませんか？」

頼み事というよりは、願い事を言うような……悲しい響きがそこにはあつた。それだけそれが難しいことだと理解した上で、神子はそう頼み込んできている。

自分は彼の傍には居られない。自分の代わりに彼を理解して支えてくれる人間が必要なのだとそう言うように。

「彼は先王に似ているところも、似ていないところもある。一人の人間です。貴方がそんな風に変われたなら、きつと彼の支えになれるはずです。そしてそれは、貴方にとっても支えに変わることか
と思います」

「……変わるでしょうか、俺は」

先読みの神子は是とも非とも答ええない。代わりに別の言葉を口に
する。

「昔の僕は何時までも幻影を追い求め……取り返しのつかない罪
を犯した。僕はまだその後始末に追われている」

貴方にはそんな過ちは犯さないで欲しいと訴えられる。そのため
にもと神子は言う。

お前が生きているのは過去ではなく今なのだと彼は俺にそう告げ
ている。

「自分の心を貴方はもつと大切にしておいてあげてください。心に名付ける正しい名前を知らない……人は道を誤ってしまうことがある。貴方は貴方をよく知らずに生きている。それは貴方の周りを、貴方の大切な人々を苦しめていることに気が付きませんか？」

それが貴方の罪ですよと、俺は今イグニス様に糾弾されている。自分がどうでもいい。そういう姿勢は、そんな自分を思ってくれの人々を傷付けること。

そう言われて思い出すのはユーカーのこと。死に急ぐこんな自分のことを案じてくれる俺の従弟。考え方や生き方を改めようとは思わない。俺は騎士である以上、そういう風にしか生きられない人間だ。イグニス様もそれは解っている。だからこそ、人としての俺をこうして尋ねに来ている。

立場や役職はまず頭の中から捨て去れ。人として何を思う？大切な者は？出来る範囲で良い。自分の心を理解し、時にそれを省みてやれ。おそらく彼はそう言いたいのだ。

「……貴方が昔の僕と違うのは、世界の外側に自分を置いてしまっているところですね。貴方は人としての欲がない。自らの幸福を願う心が、その欲が……貴方の中には欠けている」

「幸福……ですか」

「聖教会の教えに背くようですが、僕は人に原罪なんてないと思っただけです」

神子は神子でありながら、自分としての考えを持っている。熱心な信者の耳に入れば問題になりそうな発言もこうして平気な口にする。彼は子供らしくはないが、人間らしくないわけではない。理由もない博愛も無償の愛もあり得ないとその顔には書いている。先程イグニスは自分とランスの類似点を挙げてみた。それは1人のため

に多くを守るといふことだ。

それはそもそも神子としては失格なのかも知れない。神子に求められるものは打算的ではなく平等に祈りを捧げる精神だ。それは自国やカーネフェルだけでなくタロツクやセネトレアにも向けられるべき慈しみ。戦争に荷担するといふことは、それを拒むといふことだ。聖教会が掲げるは平等、平和それから正義。多くの神子は自国の平和を重んじるばかり正義が疎かになっていた。この神子は自国の平和、その均衡を崩してでも行動へ打って出た。そのためには犠牲は少なからず生じるだろう。しかし救われる命もまた少なくともない。

自国の利益だけを求めるような人間だったなら信用は出来なかった。如何にシャトランジアがカーネフェルと協力関係にあるとはいえ、彼がシャトランジアの神子とはいえ、その役職だけでは味方だと受け入れることは出来なかつただろう。自分が彼を協力者として認めたのは、彼のその人間臭さだったのかも知れない。

混血という彼の外見は、神懸かり的な美しさがある。しかしその中身は自分たちと変わらない人間なのだと思わせる彼の自我。そこから生じる言葉は人の胸を打つ。彼が唯綺麗事を吐くだけの機械ならば、誰もそれには従わないだろう。けれど彼は違う。時に平気で企み、人を陥れる策を練る。常時はその可愛らしい外見にそぐわない毒舌を吐いたりもする。かと思えば、友人との関係に思い悩む節を見せたりもする。

(アルドル様がイグニス様を気に入っているのはそういうところなのかもしれない)

もつとも普通の人間からは程遠い立場にありながら、素の彼は何処までも人間くさい。彼の名前の前には役職の名が霞んで消えてしまふまいそうだ。

人前では立派に神子を演じるこの少年も、一目のない今では掲げ

られた偶像に忌々しげな視線を送るほどだ。その内舌打ち所か俺が居なければ唾くらい吐きかけそうな気迫があつた。その瞳からは、神への信仰心も畏怖もまるで感じられない。世界で最もそれに近い立場でありながら、神も教会も道具程度にしか捉えていないようにさえある。確か以前に「神なんかクソ食らえ」とか言っていたような気もする。そんな真つ向から神を否定するこの神子が、説く教えは神への反逆。罪の意識からの救済だ。

生まれることは悪ではない。そこに罪などあるはずがない。その言葉は俺に僅かの光を与えるようだった。

「人は確かに罪深く愚かで救いようのない者です。それでも生まれることは罪深いことでない。生きていくことが罪深い。人は生きる最中に罪を犯してしまうもの。貴方の父が、貴方の母が誰であれ……貴方は貴方ではないですかランス様？」

先読みと名高い神子は、過去まで見通す力があるのか？何処まで知られているのだろう。胸の内を見透かされているようで、少し気後れしてしまう。

しかし先程まで人間臭さを醸し出していたこの神子は、真面目な顔つきになっていて……そうしているとその辺りの精霊以上に神々しく見える。ここまで神の使いを名乗るに相応しい人間はいないのではないかと思うような風体だ。

「先王も、セレスティン卿も……そして他の多くの人々も。彼らが貴方を慕うのは貴方の血ではない。貴方が貴方だからなんですよ。貴方が人形みたいな顔をしていて喜ぶ人間は誰もいません。悲しむだけです。貴方の気付かない人としての一面。その素顔に彼らは惹かれてるんです。だから貴方はそれを殺さないであげてください」

本当に勿体ない言葉だ。カードとして死ぬべきこの身にさえ、幸

福の在処を探せと彼は言う。生の長さに幸福は比例しない。いつか自分が策のために平和のために死ぬと言うかも知れない。それを理解した上で、神子は言う。お前にも幸福になる権利はあるのだと。

「……………イグニス様のお話は、俺にはどうも難しいです」

しかしこれまで剣として生きてきた自分がいきなり人としてどうのこうのと言われても、あまりにそれが漠然とし過ぎていて理解しがたいものがある。

「ええ。ですからそちらもすぐにではなくて構いませんよ。唯、貴方に聞いて欲しかっただけです。これは僕の自己満足ですよ」

世の中にはどうしようもないことも、やはりあるものですからと神子は小さく笑った。

言わなければ後から自分が後悔しそうだから、その自己満足のために言っただけだと彼は言う。

「でも、本当に些細なことだと思いますよ。遅かれ早かれ人は誰でも死にますから」

だからこそ、後悔ないよう今を大切にしたいとも思うんですよと神子は最後にそう言った。

*

「俺の……………今、か」

教会からの帰り道、神子に言われた言葉が何度も思い起こされる。自分にとっての今とは何だろう。これまでは敬愛する王という道

しるべがあつた。アルドールという少年はまだ王としては未熟も未熟だ。それを支えていかなければとは思ふ。けれど今の彼は道しるべには成り得ない。となれば全体の指揮を執るのは自分かイグニスかということになる。

これまでは従つてくれればそれで良かった。けれど今はそれでは駄目だ。何時終わるとも知れない戦争。明日から始まるのは背水の陣。どんな小さなことが綻びになるかわからない。プレッシャーはある。しかしもうどうしようもないのではないかという思いもある。ここから巻き返すことなど本当に可能なのだろうか？自分は何処まで何時までこの国を見つめることが出来るのか。あの人が望んだような国が出来上がっていく所をこの眼に焼き付けることは叶うのか？わからない。そんなに簡単に国が世界が変わるとは思えない。

（だとしたら俺にとっての今は、そんな理想論ではないわけだ）

有事があれば戦つて。それがなければ剣技を磨いて。そうして都貴族に顎で使われて。本当に何のために頑張っているのか解らなくなりながら、困いが増えて頻繁には会えなくなつたあの人に仕事の報告をして。あの人の話を聞いて、それでまた俺が笑わせられる。本当にほっとする。あの人は。あの人は俺を憎んでも良いはずなのに、本当に俺を我が子のように可愛がつてくれる優しい人だ。それが俺の今だった。無論今はもうない。

あの人が俺の日常から欠けるなら、残されるのは砦での生活だけだろう。部下の教育が主で剣の扱い方を教えたり、時折戻ってくる従弟を宥めたりだ。

ユーカーは常時砦に在るといふわけではない。むやみやたらに危険な任務ばかりに飛びついて、やれ海賊討伐。やれ山賊討伐。生温い仕事は好まない質で、すれ違うことも多かつた。

アルドール様との出会いで、あの人の生存の可能性は潰えた。しかし彼が取り戻してくれたのは、ユーカーとの繋がりだ。

あいつの文句聞き流し、あいつをからかって遊んでみたり。文句を言われながらも無理矢理料理を食べさせてみたり。何処かですれ違っても仏頂面で適当な答えしか返してくれなくなっていたあいつが、感情を表に出すように戻ったのもあの方のお陰だ。それはまるで昔に戻ったような錯覚だ。つまりは全てに絡んでくるのはアルドール様。アルドール様が何時も通りになつてくれたなら、ユーカーもまたすぐに元通りになるだろう。

逆を言えば、ユーカーが感情的な姿を取り戻せば、それに釣られてあの方も感化されて元通りになるかもしれない。というか、俺とあいつはその恩返しのためにもアルドール様を今救い支えるべき役回りであるはずだ。

「……俺は本当に、最低だ」

あいつのためという考えから始まったことが、頭の何処かで置き換えられる。結局は仕事のことと頭がいっぱいになつてしまふ。何処までもあいつを利用することしか考えられない。

(俺は何時からこんな風になつてしまつたんだろう?)

王への忠誠が強まれば強まるほど、俺はあいつを蔑ろにするようになってしまつていた。俺はあいつに騎士を押しつけて、あいつ自身を殺してきたのだ。それはあいつの兄として、最低な行いなんだろう。やはり俺は人間としても最低だ。

昔はもつとちゃんとあいつを思いやれていたはずだったのに。今では「俺のために働け、そして死ね」とか「死ぬまで扱き使ってやる」とか言外に言っているようなものだ。だからこそあいつはあんなに追い詰められている。

自分としての自分と騎士としての自分。そんなもの両立できるはずがない。だから一方を殺して捨てるしかない。俺は今まであいつ

という犠牲を肯定してきた。あいつはいろんな大切なものを混在させてそれでも自分を守っていたのに。

王もアスタロットももう死んでしまった。となればあいつが守ろうとする者は俺しか居なくなる。その思いを利用しようと、きつと俺は考えていた。どう利用すればそれをより良く最大限利用することが出来るかと。騎士としての俺はそこで心が痛まない。それで傷つくのは人としての俺の心だ。……話せるはずがない。こんな俺には。

俺とあいつは別の人間だ。それを俺はちゃんと認識できていたのか？心の何処かで頭の何処かで、自分の一部だとか片腕とかそんなものだと思っではいなかったか？

同じように生きるのが当たり前。同じように死ぬのも当たり前。俺は一度だつてちゃんとあいつの話を聞こうとしたことがあったのか？俺は押しつけすぎではないなかったか？

それであいつが傀儡になったのを見て、それに不満を覚えるなんてあまりに理不尽ではないか？

俺はあいつを心配する顔で、何とも思っていないんだ。騎士としての俺を優先させると言うことは、俺が感じたあいつへの心配も全て切り捨てると言うことなのだから。

自分の心と見つめ合えと言う言葉はなかなか重い。考えたこともない。気付こうともしなかった、自分の醜い部分突きつけられる。イグニス様は俺が多くを守ろうとしていると言ったが、そうではなかった。一番身近な人間を守れていなかった。人を傷付けることに慣れた俺だ。そんな俺がアルドール様を誰かを支えることなど出来るはずもない。

(思い出せ。……思い出すんだ)

唯何となくの腐れ縁。そんな風に馴れ合って、気まぐれで弄ぶだ

け。それで入れ込むだけ入れ込ませた後、道具としての利用価値で物事を図るなんて関係、何かがおかしい。

昔はそんな無意識下の打算もなく、ちゃんと接していられたはずだ。

それをちゃんと思いつけたなら、俺は正すことが出来る。もつとちゃんと上手くやれる。不用意に傷付けたりしない。悲しませたりしない。大切だったのは嘘じゃない。本当だったはずなんだから。

*

フロアリップの部屋の前。ランスの姿はない。代わりに何人かの兵士が居たが、お疲れと片手を挙げれば下がっていった。ランスも忙しい奴だから、或いはあんなあいつを見てられなかったのか、ここに留まりはしなかったのだろう。襲撃は開戦までであり得ない。神子のお墨付きだ。それでも俺がここに居たのは俺の自己満足ってだけ。今こうしているのもそれと同じだ。

「よう、ボケ王。起きてつか？」

「寝てます」

ノックのそこそこに扉に手を掛けるが施錠済み。ユーカーは軽く舌打ちしながらそれを者ともせず片手で解錠。

室内の少年王はやはりまだ起きていた。満足に寝ていないのはこいつも同じだ。生憎俺はこういう時に自分だけぐーすか眠ってられるほど単純な神経と精神を持ち合わせてはいない。片手に乗せていた盆を机へ降ろし親指でそれを指さした。

「アルドール、少しは食え」

「今はそんな気になれない」

食材に謝れと殴り飛ばしたいところだが、このガキは暴力に従うような奴じゃない。言葉で言いくるめなければ駄目なタイプだと、ここ暫くの付き合いでユーカーも学んでいた。

「今日という今日こそ食べ！この俺が作ってやったんだから何が何でも食べ。食わなきゃ殺す」

「う、うわぁい……いただきます」

要は押しだ。こいつはへたれだ。基本的に押しに弱い。それでも頑固なところがあるから譲らないところは絶対に譲らない。それでもそこに触れなければある程度動かすことは難しくはない。

明日は即位式だというのに倒れられては困るのだ。希望の火が灯る前に皆のやる気が消し飛んじまう。

「げ」

黙々と食を進めていたアルドールが、突然何やら嫌そうな声を発する。何か好き嫌いでもあったのだろうか？これだからガキは面倒臭いと視線を向ければ、複雑そうな表情だ。

「げってなんだよ失礼な」

睨み付ければ渋々と、アルドールが理由を零す。

「ユーカーの料理の癖に普通に美味くてなんか腹立つなあ」

「お前は俺を一体何だと思っただやがんだ！！」

釈然としないと言わんばかりのその物言いに此方が釈然とするわけねえだろうが。怒鳴ってやりたいがここは病人もいる。出来るだけ控えめに怒鳴ってやった。

しかしこのガキ全然こつち見ていねえ！！眠りこけてる妹を見ている。かと思いきやぱあと明るい表情になり此方を振り返る。

「あ、フローリプが心なしか口元が笑った！もう一回頼む！お前が大笑いさせてくれればフローリプが起きるかも！」

「本当にお前は俺を何だと思ってるんだ馬鹿っ！俺は道化じゃねえっ！やつてられるか！」

「王な俺にここまで言うんだ。もう今日から爵位剥奪して宮廷道化にでもジョブチェンジしてみるとか？」

「誰がやるかっ！！」

こちとら地方出身とはいえ地方貴族だ。辺境伯の跡取りだ。それを今日からお前道化とか言われて誰が喜ぶか。俺にもプライドというものくらいはある。余裕である。

「でも意外だな。ユーカーって意外と何でも出来るんだ？料理なんてランスの担当だと思ってた」

「まあ、俺は凄えから当然だ。もっともやりたくねえことは死んでもやらねえけどな」

「うん、ありがとう」

「は？」

「何て言うか、ありがとう」

「意味わかんねえんだけど」

わからないなら別にいいよと奴はくすくす笑い出す。馬鹿っぽい面してる割りには何だかんだで育ちいいよな。笑い方一つ取ってもそうだ。ここで大口開けてあげたとかがははははとか笑い出したら一発殴っていたかもしれぬ。

こいつが笑うことで、少しは場も明るくなったような気がする。これじゃほんとに俺が道化の役回りみたいでなんだかなあとは思っ

た。

「ユーカー相手だと、何か吹っ切れるというかなんていうか。楽に話せるんだよなあ。意外と癒し系だったんだな」

「俺の癒し力を舐めるなよ。この俺に癒せねえ者なんてあのクソ神子と狂王くらいなもんだ」

「あ、イグニスは無理なんだ」

「ああ。まず俺に癒す気がない」

「ああ、そういう意味。あれでもイグニスも女の子なんだし少しは優しくしようよ」

「女だからってだけで誰彼構わず優しくされると思っなよ。俺は基本的に誰にでも厳しく行く派だから」

「そんなんだからモテないんだよユーカーは。ランス見習えよ」

「阿呆か。俺がモテねえのは実家から勘当されてんのと目の色が原因に決まってるんだろ」

「あ、そう逃げるんだ」

「てかおまえ馬鹿か？今のは違うだろ。今のは調子に乗るなとか比率真逆だとか突っ込む所だろ？この俺が敢えてボケに回ってやったつてのに気の利かねえ奴だなおい」

「自虐ネタですか」

「ちつとはレベルが上がったな。やれば出来るじゃねえか」

軽く背中を叩いてやれば、大げさに痛がりやがる。その反応に俺も思い出す。こいつは背中をフローリプに刺されたんだ。一応神子が回復したとはいえまだ違和感が残っているのだろう。そのくらい深い傷を負ったんだ。

「そっぴやお前もまだ病み上がりだろ？いい加減寝ろ」

「でも」

「……俺は数字は見えねえが、耳は割と良い方だ。数値の変化が

あつたなら、気付いてやれる」

「え？」

「何かあつたらすぐにわかる。その時はすぐに叩き起こしてやる。だから寝ろ。もう面倒臭いからお前もここで眠ちまえとっと。これ以上うだうだ言うなら昏倒させてやるうか一発殴って」

「お、お休みなさい」

脅してやれば、アルドールも寝台へと潜り込む。妹とはいえ元は他人だ。同衾に抵抗があつたのか。馬鹿かこいつは。こんな状況でやましい気持ちになんかなれるような度胸お前にあるわけねえだろうが。お前基本へたれだろ。

やっぱり疲れていたんだろう。すぐにあいつも眠ったようだ。部屋の戸締まりの確認をし施錠し外へ出た。

「ったく手間かけさせやがって」

これで明日は少しはまともな顔になるだろう。こんな面倒な役回り、どうして俺が引き受けなければならなかったのか。一言で言うなら義理だ義理。

「俺が過労死して死んだらお前のせいだからなランス」

その時は墓の前で手合わせるぐらいはしろよと独りごちてみたが、少し虚しい。

「ありがとう……か」

アルドールのその言葉に、数時間前のやり取りを思いだしてしまつた。

ランスの馬鹿は俺と話しているときに、誰がいないかくらい気付いていたはずだ。それなのに平然と、あんな顔で礼を言う。どうかしてるよ、あいつ。

ルクリースとかいうあの女。ちょっとはお前に気があつたんじゃないのか？そこそこ気が合ってる風に俺には見えた。綺麗な青目同士、お似合いだったな。

少しは驚くなり悲しむなりしてやれよ。そういうのは俺がするよりお前の方がきつとあの女は喜ぶだろう？

(その程度なのか?)

騎士の鏡とか呼ばれる男が。そこまでお前は欠けているのか？指針があればそれでいいのか？主が王がいれば……それでいいのか？本当に……

ランス、あいつは欠けている。傍で見えてきた俺がそれは一番理解している。あいつは立派だから、立派すぎて人間らしさに欠けている。それはあいつが天然だからとかそういう問題ではなく、あいつは自分をそういう風にしようとしていた。自分を律して頑張ってきた結果だ。それは俺には真似出来ねえ生き方だ。だから素直に尊敬している。凄いと思う。それでも時々、本当にそれで良いのかと思うときがある。

基本あいつは良い奴だ。欠点を探すことの方が難しい。その位良い奴だ。悪いところって言ったら料理がグロいところとなんだかなで俺の扱いが酷い所くらいなものだろう。

そうだ、あいつは酷い。基本俺がどうでも良い。俺は人間箸置きだろ。あれば使うが別になくても困らない。その程度さ。

(もし俺があいつ守って死んだとしても……お前はきつと俺の墓の前で礼なんか言うんだらうな)

そつだ。その程度だ。俺なんか。

(その程度でも……俺は)

俺はもう駄目だ。多分駄目だ。新しく何かを大切に思うことなんか出来ない。けどお前は違うだろう。お前はそんな生き方に縛られる必要はないんだ。

そんなに何かに追われるように過去に縛られて。どうしてお前は生き急ぐ。お前は俺とは違うじゃないか。お前は何も悪くない。勝手に罪を被ったような面をして、自分犠牲にして楽しいか？そんなことをするくらいなら、あることないこと全部俺に押しつけてしまえばいいんだ。八つ当たりでも何でも大いに結構。それでお前が今より楽になれるなら別にそれでいい。

アスタロットの声を聞いてから……俺は前ほど焦燥感が無い。

絶対に生き残ってやるだとか。そういう気持ちが薄れて宙ぶらりんの気持ちが浮いているだけ。唯漠然と……どうしていいのかわからない。

彼女は俺に自由に生きろと言ったけれど。俺はそれがよくわからないままなのだ。俺は今も囚われている。そしてそれを望んでいるんだ。失われたからってはいそれじゃあ次の女って切り替えられるほど俺は人間出来てねえし人間止められねえ。

アスタロット。俺が最後に望むのは……やっぱり彼女だ。だけどそれはランスが死んでからの話。俺じゃお前を殺せないよ。カードとしては殺せるのだとしても。

(この手でお前を殺したら。お前も俺の過去に変えてしまったら……)

最後の最後に俺は彼女を選べなくなってしまう。抱え込んではい

けない。これ以上何かを背負ったら俺は身動きが取れなくなる。こんなこと、今まで無かったのに。死なんか何処にでもありふれている。それをいちいち悲しむなんて馬鹿げてる。そうじゃ、なかったのか？

あんなちよつと数日話した程度の女の死を、未だ振り払えない俺がいる。たった数日だ。赤の他人だ。その数日の付き合いで、こうなっているんだ。それがお前なら俺はもう立ち上がることも出来ないくらい沈んでしまう。

いや、違うのかもしれない。俺はあの女の死が悲しいんじゃない。俺は驚いているのだ。そして感銘を受けている。

ルクリース。どうしてあんなことが出来る？ たかが姉弟。それもアルドールは自分のことを覚えていない。そんな相手に……命を賭けてあいつは守りきったのだ。

(俺には、同じ事が……出来るのか？)

俺はランスのために。俺の兄のために俺はあんな風に命を投げ出せるのか？俺はそこまであいつを大切に思えるのか？思えているのか？

口だけじゃ駄目だ。俺はちゃんと行動しなければならぬ。彼奴を死なせたくないなら、俺は本気であいつを守らなきゃいけない。

(くそつ……道化師の野郎)

植え込まれた疑いの種。それはまだ胸の奥に息づいている。それを取り去りたくて心臓を抉り出してしまいたいくらい。

なあ、ランス……いつそ、お前が殺してくれないか。

そうすりゃもう何も考えないで済む。彼女にもまた会える。それで終わりだ。もう何も思い残すことはない。だけど俺はJであいつは？。カードがそれを許さないなら……やっぱり俺は戦うしかない。

いのだろう。

お前が俺より先に死んだなら、俺は俺の願いのために殺して生きる。もし最後の二枚が俺とお前なら、俺はお前と戦うだろうか？そんな日、来るわけがない。いや、来ないで欲しい。だからお前と戦う日が来る前に、お前のために死ねればいいな。俺がその程度だつて、その方がずっと……たぶんそれは、その方が幸せなことなんだと思う。

だって俺はあいつを殺してまでアスタロットに会いたくない。あいつを殺した俺はもう、俺ではなくなってしまうような気がする。それなら俺は生きて死ぬ。いつか人間なんかみんな死ぬ。だから死にたくないとはもう言わない。死ねば俺は今度こそアスタロットに会えるんだ。だからむしろ死にたい。でも死に急ぎはしない。彼女に話す土産話は多いに越したことはない。それも彼女の願いだ。

そうなった時、新しく何かを大切に思えない俺は、必然的にあいつのサポートのために人生命を費やすことになる。

その間にせめてあいつの死にたがりだけは直してやりたい。そういう悪いものは全部俺に押しつけてくれて良い。死ぬのは俺で、生きるのがお前。それでいいじゃねえか。

俺はお前に夢見ている。希望を見ている。俺には見られないものをお前なら見てくれる。俺は限られた中を生きているが、お前はそうじゃない。俺が守りたいのはお前のそんな可能性だ。俺は託している。俺にはもうどうしようもないことを。

本当に昔から一緒だったから、近すぎて境界が見えなくなっている部分がある。あいつを見ると、もう一人の自分を見ているような気持ちになるんだ。もし何かを間違えたなら俺たちは逆の場所を生きていたかもしれない。例えば兄弟である俺の親父とあいつの親父が逆だったなら。その時俺はあいつとして生きていてあいつは俺として生きていたんだろう。

俺は俺にない物を持っているあいつに憧れている。あの青過ぎる程青い目がその象徴だ。目の色一つそれだけで、俺の人生はここま

で変わった。今更どうにもならない。それは仕方のないことだし、俺は俺を否定はしない。だからあいつを妬んだりはしない。

だから俺があいつを見る目は何というか、なんだろうな。そうだが、憧憬か。あいつが何もかも上手く行って幸せに生きて暮らしていきけるんなら、俺はそれでいい。

俺の幸せが必ずしもあいつのそれには結びつきはしないが、俺は履き違えている。でもそれでいいんだ。少なくとも俺にとってあいつの幸せが俺の幸せだ。

*

「ユーカー……？」

部屋の扉を叩く。返事はない。扉を開ければ鍵も掛かっていない。不用心というか何というか。しかし部屋の何処にもあいつの姿はない。

「もう遅い時間だって言うのに……」

全く何処に遊びに行ったのか。一瞬でもそう思った自分を心から恥じる。

アルドール様の居る部屋へ足を向ければ、その部屋の前にユーカーが居た。壁に背を預けて目を閉じている。

疲れて眠ってしまったのだろうか。それでも気を張り巡らせている。ここで殺気の一つでも発してやればすぐさま飛び起き斬りかかってくるはず。

イグニスへ様の報告の折、護衛は他の兵士達に頼んでいた。主の側を離れるのは不安だったが、眠っているあいつを叩き起こすことは出来なかった。

それが何だ。言ってもいない。命令なんかしていない。別に俺は

こいつの主じゃない。あくまで同僚だ。

「……………お前は、本当に……………何処まで馬鹿なんだ？」

馬鹿は俺だ。こいつにこうさせてしまっているのは俺なんだ。この気位の高い気難しい男がなんだこれは。何処の忠犬だという話じゃないか。

俺は差ほどお前を理解していないのに、こいつと来たら頼みもしない仕事を引き受ける。そこに見返りなんてない。あるとするならそれが俺にとつての何かに繋がるかどうか。こいつは俺の幸福を願っていてくれている。カードの願える願いは一つだけだからこそ、その他の願いはこうして行動しなければ叶えられない。こいつが願ったのは俺ではないのだろう。それでも俺を見捨てず切り捨てず、こうして支えようとする。

こいつは何時もそうだ。やる気がないだけで、俺には出来ないことを平然とやってのける。その癖いつも俺を立て、だらだらと適当に時間を送り、負けた気になっている。

そんな従弟の姿にふざけるなど殴りかかりたい気持ちと、もういいんだと優しく告げてその髪を滅茶苦茶になるまで撫で回してやりたいという気持ち。

(……………そういう、ことだったのか)

俺の中にも確かに俺が居る。騎士として以外の俺が居る。騎士の俺はこいつを心底嫌っているのだ。こいつは俺より優れている。全てにおいて才能がある。それは王からの信頼を根刮ぎ奪いかねないという恐れ。それでいてわざと才能を枯らし俺に負けを演じるこいつにプライドを踏みにじられたような思い。その俺はこいつが何処かで死んでくれないかとさえ思っているのだ。

けれどこいつの従兄としての俺は違う。俺を家族として慕ってく

れるこいつの好意は素直にありがたいと思うし、こいつが本当に俺を大切に思ってくれていることには涙さえ出る。

一緒にいれば楽しいし、からかうのも面白い。俺が何をやっても見放さず、逐一ボケを拾って小マメにツッコミを入れてくれる付き合いの良さも好きだ。何もかも適当なこいつの世話を焼くのが好きだ。才能を認めている振りをして、それでも基本駄目な弟分を、やれやれとか言いながらのが構うのが好きだったのかも知れない。

でもそれは基本的に俺がこいつを見下さなければ出来ない芸当だ。俺は確実にこいつを格下だと見ていたのだ。そうすることで俺は、こいつと良好な関係でいられる。

しかし……だ。悔しいが、こいつは天性の才を持っている。俺より後に剣を覚えた癖に、あっという間に俺を追い越し飛び越えた。幼い頃に打ち負かされた屈辱は、今だって忘れられない。だからこいつにだけは負けたくないという気持ちは何時でも持っていた。でもそれは誰だって同じはず。負け続ける人間の気持ち想像するだけでも耐え難い。そんな相手を再び打ち負かしたときの爽快感と言ったらなかった。

だからどうしてお前はそんなに適当なんだと言いながら、心の何処かでは安堵していた。それでも物足りなさを感じる俺は本当に自分勝手だ。負けたくはない。それでも常にギリギリの瀬戸際の勝負が出来る場所にはいて欲しい。それでずっと俺に負け続けて欲しい。自分が負けず嫌いだとは知っていた。それでも今の今まで自分がここまでプライドの高い人間だとは思わなかった。ここまで薄汚い心を持っていたとは知りたくなかった。

「お前は どうして……」

どうしてこんな早くでもない俺を守ろうだなんて、命を預けてやるだなんて平然と口に出るんだ？俺なんかの幸せを願ったところで、お前は何も得られやしないのに。どうしてこんな俺なんかをま

だ慕ってくれるんだ？お前を全く省みないこんな俺をどうして？

殴れもしない。撫でられもしない。抱き締めたりも出来ない。その腕を首をへし折ってしまうかもしれないから。

それでも涙は溢れる。俺は後悔している。今までの俺と今の俺に変わるだろうか俺は。

償いに生きること、更に償うべき相手を作ってしまった。それでもその相手はそもそも俺に償いを求めない。恨み言さえ口にしな。だから今まで気付けなかった。こいつは最初から俺を許してくれていた。怨みなんて概念俺との間にはあり得ないと言わんばかりに。

「ごめん……ユーカー」

劣等感なんてどうして抱いてしまっていたのか。それは何時から？お前の方があの人に愛され可愛がられていたように感じていたからなのか。

最初はこんなものではなかった。唯、……唯楽しいだけだった。そのはずなのに。

ヒロインまだー？野郎共の友情から始まるなんて聞いてねえぞと言
う方すみません。しかし友情からさくつと一目惚れのヒロインに流
れる薄情者の男を描くためには最初に友情書かないといけないわけな
で。

6章でいう恋愛三角関係はアルドール&ジャンヌ&ランスがメイン。
裏恋愛三角だとアルドールとイグニス（もしくはギメル）とジャン
ヌか。春の愛憎祭り（パン祭りみたいに言っな）万歳。舞台は今の
ところ8月っていう夏だがな。

暗い表情で闇に消えゆくように歩き出した騎士。その背中を見送るイグニスに、闇より声が投げられる。

「良かったんすか？」

振り向けば闇から輪郭を徐々に表す少女が1人。彼女は部下の中でもそれなりに腕の立つ数術使いの1人。風にそよぐのは、春を思わせるような薄桃色の髪。それは彼女が純血ではないことの証明そのもの。

「？はカーネフェルには……………アルドールには必要なカードだよ。そのためにも彼が唯の駒では困るんだ」

「マリアージュ、君はクラブの本質を知っているかい？」

「何すか？ハートなら知ってますけど」

あんなの農民か男の象徴物じゃないんですかと見下すように少女は嘲笑う。それを窘めるようにイグニスは答えを告げる。

「情熱さ」

「情熱っすか」

さしたる興味も無さそうに、彼女は言葉を鸚鵡返しに繰り返す。

「そんなもの何の意味が？私にや、よくわからないっすよ」

「そう言うだろうと思って君をここに派遣したんだ。しばらく僕の代わりに彼らのサポートは君に任せる。セネトレア慣れしてる君

ならカーネフェル程度の揉め事なら何とでもなるだろう?」

「そりゃそうっすけど、この国ほんとは何もなくてつまらないっただけありませんって」

「そう言うだろうと思ってそんな君にぴったりの任務を用意させて貰ったんだ」

「なんすか、これ?」

「最近死んだばかりの少女の情報。これを使って君は裏方からサポートをしてもらおう」

「お言葉ですけど、めんどくさいっす神子様」

「間違いない泥沼になるね。君の好きな揉め事が起こる」

「マジすか神子様!それってあれってあれすか!?三角関係?!痴情の纏れ!?痴話喧嘩でドッドロド口の昼ドラっすか!?やべえマジやべえ!」

「君の働き次第に因るけどね」

「はい!頑張ります!これでもかっつてくらいにやりますんで!」

僕の6番目の部下、マリアージュ。彼女は恋愛事に目がない。司りながら意味しない。矛盾した存在だ。外見は僕とそんなに変わらない年のに、中身は完全にあれだ。耳年増を通り越してもう何処かの家政婦的なポジションじゃないか?まあそれも仕方ない。混血は基本的に外見と年齢が一致しないものだから。女性の年をひけらかす趣味はないけれど、少なくとも彼女が僕より年上だということだけは事実。実年齢より遙かに若い混血の方が、有する力は大きいものだ。それだけの闇を抱えていると言うことなのだから。

「でもでもでもっす、ねえ神子様。あんまり引つ掻き回したら、それはそれでこの国やばいんじゃない?」

「マリアージュ、種を植えるだけで花が咲くとは思っ?」

「意味不的な」

「ああ、そうだよ。それだけじゃ駄目だ。綺麗な花を咲かせるた

めにはまずは豊かな土壌が必要だ。そのためには耕すことが必要だし、肥料も必要。水もあげないといけないね。まあ、つまりはそう言うことなんだ」

一粒の種を落としたところで死んだら死んでお終いさ。死んでも実など結ばない。だからこそ、収穫のためにはやらなければならぬということが幾らでもある。

「未来の修正っていうのはそう簡単な仕事じゃない。予言から世界を変えるためにはある程度の狂気も必要なんだ。今という概念を破壊するためにも」

「マジたりいっす」

口ではそう言いながら、彼女もようやくやる気を出してくれたよう。情報を取り入れて、その姿を変えていく。彼女の数術は他のメンバーではちょっと真似できない。同じように見せることは多くの者に出来るのだとしても。情報との同化も進み、彼女はなるほど小さく呟く。

「っにしても神子様マジ半端ねえつかマジパねえ。あの兄ちゃんこんな顔してたんすけど！イケメンが台無し的な！無駄イケメン的な」

「唯の飼い殺しの忠犬じゃ意味がない。歪みを生むのは人の狂気さ。未来を変えるためにもこれは必要なことだ」

あの騎士が、アルドールの命令を聞くだけの道具ならカーネフェルはお終いだ。だってアルドールは基本本人に命令なんか出来ない。絶対に正しい命令なんか出来ない。王としての器はお世辞にもない。絶望的なまではない。それは僕が保証する。

それでもアルドールは人を集める才がある。それを磨き上げ、掌

握ることこそが彼に求められていることで、僕が裏から支えていくべきことでもある。

別に全ての国民から好かれるなんて言わない。彼には無理だ。それも僕が保証する。なら周りの使える人間だけでも好かれる、人として。そして人として意見を気持ちぶつけ合えるような関係まで構築できれば……それがより良い道へと繋がる。そうなったなら……変えられるはずだ、何もかも。

「……っていうかマリアーヂュ、その口癖まだ直らないの？違和感しかないんだけど」

「お、おほほほほ！嫌ですわ、ごめんなさい神子様。いやあ、前の潜入先で演つてた人間がこういうキャラでこういう口調情報だったのでなかなかつい癖に」

「ここしばらくセネトレアに派遣していたのがいけなかったのか。やはりあの国一回滅ぼすべきだな、うん。マリアーヂュは工員としてはメンバー中1、2を争う力量だ。足での情報収集能力は彼女の右に出る者はいない。同じことを僕に出来ないわけではないけれど、支払う代償の重さを考えれば僕向きの技ではないことは確か。数術は出来る出来ない、それを越えた先に向き不向きという問題が横たわる。」

「まもなくユリスディカもこの国に来る。最近加わったエフエトスはともかくとして君でも彼女のことは……君たちは知らないよね？」

「？11？ええ。私は見たことありませんわ」

「？11は？2に次いで特殊な役職だからね。本人も自分が運命の輪に組み込まれているとは知らないだろうよ」

「それはまた、おかしな話ですわね」

「ああ。代々そう言うものなんだ？11は。彼女は常に正義で在

らなければならない。それを揺るぎなきものにするためには」

11番目の切り札は、少々特殊な環境にいる。彼女が僕の部下であることは変わりないけれど、他のメンバーも彼女自身も互いに互いをまず知らない。

そんな二人が同じ場所での任務に就くというのは滅多にない状況だ。カードの表と裏が向かい合うようなもの。つまりはあり得ない。そんなことが起きると言うことは、それだけ今が危うい状況なのだと言うこと。それは彼女も理解しているようで、マリアージュがごくりと息を呑む。

「それでも敢えて組み込むというのは？」

「指標さ、正義の」

「指標、ですか？」

「ああ。君たちに僕は残酷な命令を告げることがある。時に君の中の正義が揺らぐこともあるだろう。世界を憎み人を呪うこともあるだろう。それでも尚信じるに足るもの。それを示すのが彼女の役割」

「……神子様がそこまで言うだなんて、どんな子かちょっと気になつて来ました」

任務が楽しみな理由がもう一つ増えたと彼女は言つて笑う。しかしそれは今の外見にはそぐわない、もつと大人びた笑みだった。

「マリアージュ、今度の役は貴族令嬢なんだ。そこを忘れずにね」

「ふ、ふん！わかつたわよ！」

どうやら情報の方もインストールが完了したようだ。彼女の髪の色は混血のそれからカーネフェル人の金髪へと変貌している。別にこれは視覚数術などではない。これが彼女の数術だ。

彼女は凄い。彼女の役作りは完璧だ。情報さえ与えれば外見人格記憶さえも完全に模倣できる。上司への敬意も失われるほどに、今彼女は別の少女を演じている。

そしてもしものためにもう一つの台本を渡している。彼女をカーネフェルに置くのは、万が一のそのためでもあった。

「マリアージュ、……………」

「レディの名前を間違えるなんて、失礼な男性がいたものね！私はエレイン！覚えておきなさい！」

長い巻き毛をリボンで括った、幼い姿の少女が吠える。

そう言ったきり背を向けて走り出す少女の姿に、イグニスも言葉を引っ込める。

「……………本当に、ノリが良いね君は」

代わりに出てきたのはそんな言葉。大事な部下を死地へと送り出す上司に、こんな言葉しか言わせない。それが、彼女の優しさだったのだろうか。それに触れて、遅い溜息が口から漏れた。それに気が付いて自嘲する。よくまあ、感傷にまで浸れたものだ。

他の誰にその権利があっても世界にたった1人、イグニスという人間にだけはそれは許されないことだ。それは重々承知している。

入ってくる情報はどれもろくでもないものばかり。前回の審判とは大分状況が変わってしまった。先読みの神子とは名ばかり、全てを見通すことなどもう出来ない。ある程度の予測を立てるのは計算だ。如何に他人を犠牲にしながら王を生き残らせるか。簡単な話、神の審判というのはチェスのゲームそのものだ。そのゲームのおかしなところは元々手持ちの駒がないことくらい。だから駒を拾って育て、駒を配置しゲームに応じなければならぬ。その一つ一つが本当に生きている人間という駒だと思ってはいけぬ。それを哀れむ

のは僕の役目ではない。

「裏切って良い。裏切って良い。だから、どうか……裏切らないで」

願いではない。これは願いではない。唯の祈りだ。

心のままに生きてぶつかると分には構わない。それは大いに結構だ。問題はそうじゃない。心を押さえつけて、とんでもない後悔をしてしまうこと。そこから膨れあがる歪みは、とてもじゃないが正せない。なら初めからそうならないようにし向けるのが僕の仕事だろう。

セレストイン卿は油断ならない爆弾であり地雷だ。とてもイレギユラーな存在だ。時と場合によっては、最悪の敵がもう一人増えてしまうことになる。それでも上手く飼い慣らすことが出来たなら、あれほどアルドールにとって心強い味方もいない。

そしてその鍵こそが、アロングイト卿であり……^{ユリスデ}11枚目の僕の切り札^{イカ}。

この問題をどう片付けるか。それが次の難関へと向かう問題だ。あの山さえ越えられたなら、今度こそ変えられる、変えてやる。

(僕は間違えない、僕は間違えない)

幸福を願う権利があるのは生きている人間だけだ。最後の最後で慈悲を生み出すことが出来るのも彼らだけだ。

僕は無慈悲だ。僕は多くを見捨てる者だ。だからこそ僕は幸せを願う権利もない。鼓動の音は偽りだ。それを僕は知っている。僕は、……知っている。

*

部下から届けられた情報。ユリスディカと密かに名付けられた少女は海上にいた。その配置したのはイグニス自身。彼女がユリスディカに足るかどうかを見極めるために、或いは11枚目の切り札としての彼女を完全なものにするため。

カーネフェルの領海。それを守護する任に就かせた聖十字の兵士達。聖十字の船も武器も現代最強。それは間違いない。だからこそそれには多くの制約が掛かっている。僕は彼女に問いかけている。正義とは何なのかと。

「あの船……セネトレアの奴らだわ！」

兵士の1人が敵船を見つけた。その声に全ての兵士が身構える。

「セネトレアですって!？」

カーネフェルと戦っているのはセネトレアではない。タロツクだ。それなのに何故セネトレアが来るのか。それは誰もが知っている。奴らは飢えたハイエナだ。金の臭いを嗅ぎ付けて、世界中の何処にでも現れる金の亡者だ。

「くそっ……、厄介な」

奴らを止めるためには、これから彼らが奪ってくるだろうその総額よりも多くの金を差し出す他にない。しかしこれは氷山の一角。その金に更なる亡者が引き寄せられる。そんな風に平和を金で買うことは出来ない。そんなことを続ければ聖教会はおろかシャトランジアという国が財政破綻してしまう。唯でさえ移民と亡命者の受け入れで馬鹿みたいに金がかかるのに。

また、そんな無茶を愚行を犯したとして、それで奴らが引き下がる道理はない。金は受け取り、更なる宝島へと船を進めるだろう。

そんな無駄金誰が使ってやるものか。

今代のユリスディカは年若い少女だ。彼女はカーネフェル人。長く綺麗な金色の髪に、空海の浅瀬と水面に映る草木を混ぜ合わせたような調和の碧色の瞳。

騒ぎ出す同僚達の中、彼女は思い悩んでいるのか無言を貫く。その顔にはもう答えが決まっているようにも見えた。

「《これより先は、カーネフェルの領海だ！止まりなさい！！》」

許可無く他国の領海を侵すことは許されない。正義と平和を守る聖十字は国際警察のようなもの。けれど万能ではない。タロツク王が民を虐げているのだとしても、聖十字がタロツクに乗り込むことが出来ないように、聖十字は多くの法に縛られている。正義のために作った法が自分たちの足枷になるといのはなんと歯痒い。

しかしカーネフェルとシャトランジアは切っても切れない関係にある。そして戦争が再び起こってしまった以上、シャトランジアは十字法という観点から正義を行うことが許される。議会とシャトランジア王がそれを許さなくとも、神子である僕とそしてカーネフェルがそれを許している。問題は、正義の在り方だ。

「総員、衝撃に備えろ！」

金の亡者には聖十字の声など届かない。ならば他の方法を取るしかない。

船の指揮官達は、合図を送り予め指示されていたように船の配置を換える。相手は唯の船。それでも此方には教会兵器が搭載されている。速度なら負けない。敵船の進行方向に先回りし、それを迎え撃つ形へ持ち込んだ。

壁のように立ちふさがるシャトランジアの船。それに気付いた金

の亡者達が騒ぎ出す。恐れ戦き、ではない。金の臭いを察して、だ。

「おい、見たか!？」

「凄え早さだ!あの船、唯の船じゃねえ!!教会兵器つてのをわんさか積んでやがるに違いねえ!」

「おお!そいつを奪って売り捌けばいい金になるっ!これは幸先いいな!」

「聖十字なんて言っても、相手は女ばかりの兵隊だ。負ける気がしねえぜ」

「カーネフェリーの女は金にならないからな、奪うもんだけ奪ったら魚の餌にでもしてしまえ!船に積める宝の量は限られてるからな」

下卑た笑い声は次第に近づいてくる。それどころか速度を上げている。教会兵器が使えないことを見抜いてだ。

此方が動けるとしたらそれは正当防衛。教会は打たれたら反対の頬を差し出せということになっているが、聖十字はそうじゃない。打たれてからが戦争だ。右の頬を打たれたら、相手の左の頬を骨ごと粉碎し黙らせる。しかしそれはシャトランジアが攻められた場合の話。残念ながらここはカーネフェル。

その場合はどうなるのか、上に聞かなければ解らない。指揮官もどうしていいのかわからない。一発食らうまで待っていたら船が沈められてしまうかも知れない。今すぐ発射許可が欲しい。それでも焦って言葉が出ない。通信が途切れる。声も出なくなる。

しかしここで動かなければ自分たちの身も危ない。十分正当防衛と言い張れる。そのことに兵士達が気付くのはあまりに遅すぎた。法に縛られた場所で育てられた、法を守らせるための存在。それはどうやって範を示す?それは自らが頑なに法を守ることによって。

不遇に涙し悪を憎み正義を重んじればこそ、命令違反を恐れるようになる。だから誰も動けない。

その時だった。一艘の船が動き出す。

上がる轟音。大砲が向かい来る船へと伸びる。

セネトレアの船は油断していた。法の番犬達は吠えるしか能がないと侮っていた。その油断が後悔に変わった時、船はもう傾いていた。

「アーク三等星！貴様という奴は、なんてことをつ！部下のお前がこんなことをしてかしてつ……私は減俸か！？それとも降格か！？左遷か！？」

「お言葉ですが、隊長。貴方は何を言っているんですか？貴方の言う正義とは何ですか？私は貴方にそれを問いたい」

船を動かしたのはユリスディカ。砲門の傍に彼女は佇む。轟音で我に返った指揮官が駆けつけ怒鳴るが、彼女は毅然とした態度のまま彼を睨んだ。

「給料が減らされるのがそんなに怖いですか？今の地位を失うのが怖いですか？法を犯すことが恐ろしいですか？それは命よりも重いものだと思いますか！？」

動けずにいた多くの船員達も彼女の言葉に心を動かせられる。彼女の行動はカーネフェルだけではない。この船の、そして他の船の船員達の命をも救う行動だったと気付いたのだ。

「私は知っている。もっと怖いことを、恐ろしいことを！！だからこそ、私は教えたくないんです！私が知ってる怖いこと！それからカーネフェルの人達を守りたい！！あの船を見逃せば、カーネフェルは蹂躪される。多くの人の平和が壊されます。人としての尊厳も、命も失うかもしれない。それを知って見過ごせるんですか貴方はっ！！」

「そんなこと私には関係ないっ！俺は仕事だから、この任務が高給だって聞いたから名乗り出たんだ！カーネフェル！？あんなでかいだけの遅れた国どうなったって構うもんか！！」

よし、あの男は左遷させて減俸の上降格させよう。窮地になると人間本質が出てくるものだ。そしてそれを見せつけるには打って付けの場面。上官が屑であれば屑で在るほど、ユリスディカは光り輝く。彼女の正義が魅了する。

「貴方はそうでも私はそうは思えない。自然が豊かなことが悪いことだとは思わない。技術だけが全てだとは思わない。あそこには人が住んでいる。暮らしている。優しい人、厳しい人、でも……とても温かい人達。それは誰も替わることが出来ない、唯一で尊いもの。お金なんか！位なんかで購うことが出来ないものです！！」

少女の目にはうつすらと涙さえ浮かんでいた。奥歯を噛み締めるように息を吸い、ユリスディカは天へと吠える。

「十字法第一条“汝、殺すことなかれ”！十字法第二条“正義を行うべし、たとえ天が崩壊するとも”！十字法第三条“正義を行うべし、例え世界が滅ぶとも”！」

十字法の掲げる正義でもっとも重い罪は殺人。だから正義は二の次、そう解釈する輩が現れる。しかしそうではないのだ。殺さない、許すことが信じるのが正義なら、誰もが改心することが出来るなら、それは理想としての正義の在り方。けれど、そうじゃない。殺されるまで罪を犯し続ける人間はいる。十字法が問いているのは法を犯すな、ではない。どこまで正義を示せるか。それを問いかけているのだ。

教会には死刑がない。だから殺しても殺されないという不平等の

法ではない。その解釈は間違っている。

例えるならこんな話か。

その男を見逃せば、男は100人殺すだろう。その男を見逃せば、男は自分の命は助けしてくれるという。それでもその男は殺す。間違はなく100の命を殺めるだろう。男はどんな言葉にも従わない。提案をする権利は男にのみ存在する。

男を止める方法は1つだけ。問答無用でそれを殺める。たった1人を殺めるだけで確実に100は救われる。賭けるべきは自分の命。たかが1。それでもされど1。

見逃せば男は100を殺めるだろう。それを殺めることをしくじったとしても男が殺める人間が101に変わるだけ。たかが1。たった1だ。

今の罪を恐れて未来の罪を見過ごすか。未来の犠牲を憂いて今動くか。

殺人が最も重い罪だと知りながら、それでも正義のために罪を負う覚悟があるのか。それを十字法は問いかけている。ユリスディカは年若いながら、その解へと至ったその場の中で唯一の存在だ。彼女の発した言葉に上官はまだ理解できていない。今の言葉は彼女の覚悟だ。正義のためならどんな罪でも背負おうと天へと告げたのだ。

それをこの無能な男は、懺悔の言葉だと決めつけにたりと笑う。決して許してなるものかとその目は笑っていた。

「今すぐ船を戻せ！ここは危険だ！早く退避させろ！こうなったのは全てお前の責任だ！上には俺が伝えておいてやる！全てはお前の所為なんだ！！」

「……………」

敗北宣言を口にした。そう思い込んでいた相手がまだ燃えるよう

な意思を宿した目で睨む。それに男は震え上がった。その羞恥が怒りとして膨れ上がっていく。

「何だその目は！上官へのその生意気な態度に十字法に背く行為！お前達、こいつを捕らえろ！！」

指揮官を見る兵士たちの蔑むような冷たい目。それに彼は追い詰められていく。

「何故だ！上官命令だぞ！？今すぐ従えっ！」

ついに銃へと手を伸ばした男。彼はもう善悪の区別も付けられない。何より教会が禁じることを今正に犯そうとしている。

突きつけられた銃口にも、ユリスディカは怯まない。彼女は信じている。そしてその信頼が、彼女に伝えた。

一斉に取り囲まれた指揮官。彼が兵士達から銃を突きつけられる番だった。

仲間割れをしている暇はない。敵船の混乱もそろそろ静まる。他の船が逃げ帰るか向かってくるかわからないが、正義のためには逃がすわけにはいかない。それは確かだ。

馬鹿な男以外、誰もが解っている。けれどユリスディカという人質が居る。その凶器に恐れて誰も動かない。それを恐れてだ。しかし1人の兵士が縄を持って上官へと跪く。

でかしたと言わんばかりに、男が笑ったその刹那。甲板に転がったのは男の方だった。

「な、何いっ！？」

「馬鹿ねえ、この子が1人ならどうやって船を動かしたと思ってんだか」

「し、しまつたっ！！」

芋虫のように転がる男をくすくすと兵士が笑う。本当に馬鹿な男だ。船を動かした協力者が居ると何故見抜けなかったのか。

「命令違反が怖いんなら、この芋虫連れてボートで他の船へ逃げなさい！」

女の声に、全ての兵士が首を振る。

「私も行きます！連れて行ってください！」

「あんたらばつかにいい格好はさせないわよ！」

「カーネフェルは、私達を守るんだ！」

ここに配置した兵士はカーネフェルからの移民、亡命者ばかり。祖国の危機を間近で見せられて、黙ってなど居られない。そんな女傑ばかりの船だ。

この船の騒動が伝わり、あちこちの船で兵士達の歓声。指揮官にもまともな正義を持っている人間や、ユリスディカに魅せられた者がいたのか、反乱はこの一艘に留まった。

「だってよ、ジャンヌ？」

「……皆さん……ありがとう」

「あら、そんな号令じゃ駄目よ。余所の船どころかうちの船でも見張り辺りの子には全然聞こえないわよ」

「しょうがないから今回はあんたに花を持たせてやるわ」

銃を突きつけられても泣かなかった少女が感激のあまり、口ごもる。それに兵士達は優しく微笑み、彼女の背を叩く。

「正義を行うべし！」

ようやく6章ヒロインの登場。何か気付いた人……あくまでフィクションです。不審船っていうと密漁とかそんなノリでイメージしてたのに、0章ゲー完成間際にあんな事件が起こるから……もう苛立ちのあまりゲームのエピローグに急遽ぶっ込んだイベント。それを小説用書き直しました。それまでいつも何気なく何とも思ってたな。かつたけど、何だかんだでこの国が好きなんだなと思いました。好きだからこそ不満を感じてもっとより良くなつて欲しいと思うんだろ。うな。上の人とかはあまり好きではなくとも国の文化とか風土とか自然とか、そういうのは好き。そういう宝が侵略されて破壊されるんだとしたら、やっぱり許せないことだ。

最初はこんなじゃなかったはずだ。もつと普通に。もつと簡単に。唯、楽しくて……唯好きで。ずっとそんな風に馬鹿をやっていたら、るんだと思っていた。

だけとお前は俺とは違う。お前には俺がわからない。お前にだって言えないことがある。俺が何で、俺が誰か。打ち明けることも出来なかった。

最初に距離を作ったのは俺。俺がああだったから、お前は俺にも何も言わなくなった。

当然だ。自分のことは話さないのに、お前には話せたなんて、不公平にも程がある。

それなら。その最初以前は……どうだった？ そうだ。存在くらいは知っていた。父に兄が居る以上、その兄に子供がいるんなら、自分には従兄弟と呼ばれる相手がいることくらい。

それでも互いの領地はあまりに遠いから、会ったことなんてなかった。名前だつてよく覚えていなかった。興味もなかった。

あの頃の俺にとつてのユーカーなんて、その程度のものだった。

*

それはある日突然。母さんが居なくなった。

母さんは沈んでいったのだと、使用人達はそう言った。湖の中に沈んでいったと。俺は待ち続けた。母さんが浮かんでくるのを待ち続けた。

毎日家を抜け出して、朝も昼も夜も……母さんを待っていた。父さんは気にもしなかった。だって家にいなかった。騒ぐのも迎えに来るのも使用人の仕事だ。

そんな風に湖に通い詰めてどれくらい経っただろう？ ある日、俺

は新しい母さんと出会った。湖を覗き込む俺を、湖の中から見つめ返ってきていたのが新しい母さん。飛び込もうとした俺を止めるように飛び上がった彼女が、俺に理由を尋ねた。何時まで待っても母さんが浮かんでこないから、俺が潜って探しに行こうとした。

あの頃の俺は死の概念を正しく理解していなかった。もしくは受け入れられなかった。沈んだイコール死んだと結びつきたくなかった。そこに気付いた彼女は俺に、「ただいま、心配かけてごめんね」と微笑んだ。

だから俺は母さんが帰ってきたのだということにして新しい母さんを受け入れた。新しい母さんは小さな身体をしていた。水のような透き通る青色の瞳と不思議な羽を持っていた。だけど何より不思議なのは、新しい母さんはみんなには見えていないということだ。彼女が母さんじゃないことはすぐにわかった。それでも優しい嘘を吐いてくれた彼女を俺は大好きになった。だから俺は彼女を母さんと呼ぶようになった。何時しか心から。

だけど母の死を悲しんでいたと思ったら、ある日を境にへらへらと笑い出して独り言が増えた俺を見た人達はとうとう俺の気が触れたのだと思い込んだ。しかも何やら母さん母さん言っている。確かに端から見れば当時の俺は怪しかったかもしれない。薄気味悪かったかもしれない。恥や外聞を気にするのは何も従弟の家に限ったことでもなかった。滅多に帰ってこないこんな辺境領の主さえ、それは変わらなかつた。そしてそういう事を口にしないのもあの男のやり口だ。確か久々に帰ってきたあの男はこんなことを言っていた。

「そうだランス、ちょっと父さんと一緒に旅行に行かないかい？いい気分転換になるぞ」

そう言っつて父は無理矢理俺を馬車に乗せて船に乗って南部に下り、父の兄というセレスティン卿の領地まで連れ去った。俺をそこに預けたかと思うと父は数日後にはもう姿を消していた。慣れない土地

に1人送り込まれた俺は、肩身の狭い思いをしていた。どうしていきなりこんな遠い場所に置き去りにされたのか解らなかった。

周りはそれを養生だと言っていた。俺が疲れているのだと言っていた。正確には憑かれていたのだが、当時の俺がわかるはずもない。母の死でシヨックを受けた俺が有りもしない幻覚を見ているのだと、父も医者も言っていた。みんながみんな母さんを否定する。

《仕方ないわよランス。みんながみんな精霊を見ることが出来るわけじゃないもの》

こればかりは才能ね。そう言っただけで母さんは笑った。

「才能？」

《そうよ！ランスは凄いのよ！》

みんなは俺をおかしいと言うが、母さんはそういうみんなが可哀想なのだと言っていた。

そんな風に独り言を繰り返す俺を、屋敷の人々も気味悪がっていたのだらう。この家にも子供がいると聞いたけれど出会わなかった。いや、女の子が何人かいた。俺が顔を合わせたのは従姉妹の三人姉妹。

彼女たちは最初こそ俺と遊んでくれたが、みんな母さんが見えなくなると、母さんがふて腐れるので俺は彼女たちと遊ばなくなっていた。別に寂しくはなかった。俺には母さんが居た。

セレストイン伯父さんの領地は結構な自然があった。それでも南部は北部より大分暑い。母さんは日陰と水を常にご所望だった。母さんは湖の精だから水辺を好む。馬車旅の際は干涸らびそうになっていた。帰りはずっと船が良いと恨めしそうに言っていた。

《ランス！こつちから水の気配がするわ！》

「待つてよ母さん！」

《はあ、良い香りい〜これはきつと小川ね……南部の水もなかなか味があつて良いわね。無理してでも一生一度は旅を試みるものなのかもしれないわ》

「待つてつてば母さん！僕は飛べないんだよ」

すいすいと草木をかいくぐつていく母さんと俺は違う。裏庭はろくに手入れがされていないのか、それともこつというスタイルなのか、子供の足では歩き辛い道だった。そんな裏庭を一步一步懸命に歩く俺の耳に、聞こえてきた声があつた。

「とうとう幻聴まで聞こえてきたか……」

幻聴？むしろその声こそ幻聴ではないのかと自問自答。辺りを見回すが誰もいない。それでも溜息まで聞こえてくる。顔を上げれば二階の窓が開いている。そこから風に揺れる金色の髪が見える。二階には上るなと言われていたから知らなかった。それでもそこに誰か居るのは解つた。その人が今の言葉を言つたのだろうか。

《幻聴ですつて！？失礼なっ！》

「う、なんかさつきよりそばで聞こえる」

「……………母さんの声を、聞ける人がいるなんて」

母さんは二階の窓まで飛び上がりその声の主に文句を言っている。俺はそれを呆然と眺めるだけ。

「つて何か痛えっ！冷てえっ！」

母さんが実力行使に出たのを察し、俺も何とかしなければと近く

の木を伝い二階の屋根へ。

見れば母さんがその子の頬を思いきり抓っている。

精霊を認識できない人間は、精霊に触れることも出来ない。抓ることが出来ると言うことは彼は母さんを認識していると言うことだ。

「君も、精霊が見えるんだ!？」

そんな相手に出会ったのは初めてで、凄く嬉しかったのを覚えている。寝台に腰掛けていた彼の両手を掴んで真っ正面から向き合っ
てそこでやっと俺は気付いた。過ちに。

彼の両目は塞がれていた。グルグル巻きの包帯で光も通さないように隙間無く。

「精霊?何だそりゃ」

《この子、見えない分聞く方に特化してるんだわ。勘が良いって
いうか何て言うか……あ!避けるなんて見えない癖に生意気よ!!
って放しなさいっ!》

勘が良い。それは本当に。見えないすばしっこい母さんを手づか
みで捕らえるなんて並大抵の力量ではない。

「でかい蠅がいたもんだな。最近の数値異常は怖えな。言葉まで
喋るのか……」

《誰が蠅よ!私は精霊だって言ってるでしょ!早く放しなさいよ
!人間臭くなったらどうしてくれんのよ!》

「お前の飼い主は人間じゃねえのかよ」

《私は基本的にガキには興味ないのよ!早くその手を放しなさい
!童貞臭さが移るっ!!》

「む、むしろ褒め言葉じゃねえか!清らかつて意味で。っていう
か十にも満たないガキになんっ!ことを言うんだよ変態っ!!!っう

か仮にお前が精霊なんちゃらならむしろそついうの好きそつじゃねえか。やつぱお前蠅だる蠅。正体表しやがったな！」

《精霊的にも価値がある童貞のとそうじゃない無いのがあるのよ！ちなみにストライクから外れた奴はみんな価値無しだからっ！ていうか十にも満たないガキの癖に変な知識だけ何であるのよ気持ち悪いっ！子供の癖に純真さも無邪気さも無いのね！本当っ！可愛くないわ！うちの子とは大違いっ！》

「俺が暇だつっつたら嫌がらせのように爺やが発禁上等の官能小説とか変態小説ばっか音読しくさるんだよ！！わかんない単語あつたら手上げて発言しろつていう徹底鬼畜英才教育だこんちくしょう！！何がブリーズアフタミーだつてんだ！何で隠語ばかり書き方練習させられるんだよ！！俺だつて俺だつて……別になんも聞きたくねえやいっ！！見えないなりに俺も苦労してるんだよ！！」

《い、嫌だわ何よその言葉責めっ……今度ちよつと呼びなさいよ。面白そうだから見学したいわ》

「絶対呼ばねえっ！！ていつか出て行け！俺の昼寝の邪魔すんな！！」

「ねえ母さん、そのどなんとかって何？」

《ら、ランスには関係ないのよ？10年後くらいにあんたがいい男になった頃に母さんが手取り足取り教えてあげるから》

「来てくれ爺やっ！俺の部屋に変質者が現れたんだ。聖十字に通報……」

《まあ！可愛くないガキっ！精霊を通報しようだなんてっ！！》

「あ、つうかあいつも変態だっ！どうしよう……やつぱ来んな！！」

涎を垂らして笑い出した母さん相手にベッド横の隣室の壁を叩きまくっていた少年は、一瞬何やら思い出したのか思い直してそれを止める。しかし、止めた途端勢いよく隣の部屋から駆けてくる初老の男。助けの声には応えず来るなど言われた途端駆けつけるとは確

かになかなか変わっている。男は室内を見回すが、やはり母さんは見えていないのか俺で視線を止めて少しだけ驚いたような顔になる。

「坊ちやま、その子は変質者ではなく、ランス様ですよ」

「まあそうだよな。変質者は爺やの方だもんな。んでランス？誰だそりゃ」

「坊ちやまの従兄様ですよ」

「なんでその俺の従兄様々が俺の部屋の窓から現れるんだよ」

「遊びにいらしてたんですよ」

「聞いてないんだけど」

「聞かれませんでしたしね」

「何で言わないんだよ」

「どうせ言っても坊ちやまとは会いませんでしようし、必要ないと旦那様が」

「あつそ」

ふて腐れたように少年はベッドに潜り込む。そして気を悪くした八つ当たりなのか俺と母さんに向かって手を払う。

「早く出てけよ」

《まあ！礼儀のない奴だわ！》

でもなんとなく、窓から入ってきて突然頬を抓り出す母さんの方が酷いような気もした。そんな気がしたからなのか、俺は彼に謝った。

「ごめん、勝手に入ってきて……」

いや違う。口実が欲しかったんだ。もう少し話したかった。母さんを認識できる相手と、共通の話がしたかったんだと思う。

「……また、遊びに来てもいい？」

「別にどうでもいいけど、たぶんお前は二度と来ないぜ」

「え、何で？」

「そついうもんだからさ」

最後に彼は少し笑った。扉を閉め、外へと促す老人に連れられて廊下を歩く内、その理由が明かされた。

「ユーカー様は病を患っておいでなのです」

「病気？外に出られないなら僕が遊びに行くのは……」

「それも駄目です。坊ちやまの目を見ましたか？」

「目の病気なんですか？包帯してましたけど……」

「ええ。あれは空気感染の眼病でしたな。私のような老い先短い老人なら兎も角、ランス様のようなお若い方が感染して失明なさつては大変ですからな」

老人の話聞き流しながらこつそりと母さんに尋ねると、母さんは羽をパタパタさせながら首を捻った。

「ねえ母さん……そんな病気つてあるの？」

《さあ。感染はともかく……そんなにすぐ失明する？それも空気感染？あいつ目で呼吸でもしてるの？目息でも吐くの？目からくしやみを飛ばすの？聞いたこと無いわ》

その時は、物知りな母さんでも知らないことがあるんだなとぼんやりと考えた。そしてあれは食事が終わった後だったか。俺は伯父さんに呼び出された。そこで彼は唐突にこう切り出した。

「ランス君、君はあれに会ったそうだな」

「う、ごめんなさい」

伯父さんは表情が硬く目つきも鋭くいつもむすつとしていて怖いというのが第一印象。だから怒られるのかと思った。あれほど2階には上がるなど言われていたのに。それを責められるのかと思った。しかしそうではなかったようで彼は薄く微笑んでさえ居る。

「いや、構わない。本来ならすぐに失明していたもおかしくないところだったが、何ともないところを見ると君には抗体でもあるのかもしれない。あんな境遇だ。あれも暇しているのだから、いつも暇だと文句を言っている。君さえ良ければあれと遊んでやってはくれないか？」

おとがめ無しの上、その言葉はとても嬉しい。それでもやはり疑問は残る。

(ねえ母さん……そんな病気あるの?)

《さあ、聞いたこと無いわ》

小声で尋ねるとやっぱり母さんは首を振る。

「ランス君？」

「え、はい！喜んで！」

ただし絶対にあれを連れてあの部屋から外に出ては行けないと約束させられた。他の人間は抗体がないから大変なことになるということだった。何とも嘘くさい説明だ。こつちを子供だと思って馬鹿にしている感が漂っている。何処まで本当かわからないから俺の中に不満が残った。

それでも許可が出たのは嬉しい。俺は早速彼の部屋へと駆けてい

く。それは本当に彼にとっては予想外だったのか、彼は大口を開けて驚いた。

「マジでまた来たのかよ。お前失明希望者？」

「僕には抗体があるから大丈夫なんだって」

「ないないないない。んなもんねえから帰れ。俺は今絶賛だらけ昼寝中で忙しいんだ」

「限りなく暇そうな用事だね」

「お前馬鹿にするなよ。この明るさの中昼寝をするのって意外と根気と根性要るんだからな」

「そこまでして昼寝したいんだ？」

「だって他にやることねえだろ。外には出れねえ。本も読めねえ。爺やの勉強という名のセクハラ祭りにはうんざりだ。こんな目で何しろってんだ」

「じゃあ聞かせてよ」

「は？」

「君の話。僕は君のことよく知らないし」

「無論断る、やなことだ。大体他人に自分を語れるほどの密度が俺のこの生活に在ると思うか？」

従弟は口が回る。ああ言えばこう言う。此方の言葉をことごとく拒絶されていく。それでも此方が何かを言えば必ず言葉を返してくれる。本当の意味では拒絶されてはいないのだろうか。

「……………母さん」

《本当にもう、うちの子は本当に優しいんだから》

「うおっ！冷たっ！！な、何だよ放せっ！！」

母さんへ視線を向ければ、俺の意図することを理解しすぐさまユーカーの動きを封じる。空気中から水を取り出しそれを瞬く間に氷

に変え、彼の両手を拘束したのだ。

「おい、ちょっと待て。なんだよこれは」

「目が良くなれば一緒に遊んでくれるんだよね？」

「言つてない！もうお前帰れよ」

《ランスの数術は本当なかなか筋がいいのよ？回復数術をマスターしたなら、こんな片田舎の民間療法なんかよりずっと良い治療が出来るに決まってるわ》

「違つ……ええと、そうじゃなくて！止めるって！つかなんだその不確定要素満載の発言はっ！」

《何よ文句ある？まだマスターしてないってだけのことよ》

「最悪じゃねえかつ！なんかやばいことなったらどうするんだよっ！？」

《どうもしないわよ》

「最っつっつっつっつ低だなっ！！」

「あ、そっち窓っ！」

丁度俺が両目の包帯に手を掛けた時だった。暴れて後ずさったユーカー。背後に控えた窓へと身を躍らせる。窓から見下ろせば、蹲っている従弟の姿。

「だ、大丈夫！？」

「痛っ……………」

何処か捻ったのだろうか。彼を追って裏庭へと飛び降りる。腕の氷は衝撃で割れている。そう高くはないとはいえ、無理な体勢での落下。何処か痛めているかもしれない。怪我はないかと近づいて、俺はそこで初めて彼と目が合った。

「！？」

手を見れば、包帯は俺の手に握られていた。そのまま彼が落下したんだから、解けてしまったのも無理はない。

目が合うということは此方だけではなく相手も俺を認識視覚しているということになる。

俺がそれが彼だと認識するまで数秒かかったように、彼もしばらくの時を要した。それぐらい意外だったんだ。俺にとっては。

彼の目は俺のそれとは違っていた。父の目と伯父の目は同じような青だったのに。

遺伝とかそう言うものをあの頃はまだ知らなくて、それでもカーネフェルの人間はみんな青い眼をしていると思っていた。いや、でも個人差というものもあるんだろう。それくらいは解る。だって俺の目の色は父のそれよりもいくらか濃い色をしていたから。

それでも彼の目はあまりに薄い。それを青と呼んでもいいものだろうか？左目は辛うじて青。それでも俺のそれより遙かに明るい。そしてその右目は、青と言うよりもっと薄く明るい空色だ。この目の色素の異常こそ、彼の眼病なのだろうか。そう思った俺は彼の方へと片手を近づけ、数式を紡ぐ。

式の記述は上手くいつてる。そこまでは行く。唯展開が上手くない。だから望む答えを導き出せず、数字は奇跡を起こさず霧散する。だからまた失敗だとはわかった。それでも一応聞くだけ聞いてみる。少しは何かがあったのかもと期待して。

「…………一応、かけてみたけど何か変わったことか、ある？」

「全然変わんねえ」

「ごめん…………まだちゃんと使えないから」

「お前馬鹿か？」

俺の心配に、彼は盛大に溜息を吐く。心底呆れられているようだ。

「え？」

「あんなの嘘に決まってるだろうが。俺の目を他の奴らに見せな
いためだつての」

「どうして？」

「俺はこの家の恥なんだよ。Sweep the trouble
under the carpet してことだ。……にしても
“母さん”か……」

「あ、うん。こっちにいるのがヴィヴィアン母さん。職業は精霊
で普段は湖の精をやってるけど今は僕の養母さんなんだ。僕の数術
の先生だったりもするよ」

《別によくしくする気はないけど、ランスがどうしてもっていう
から挨拶してやるわ。感謝するのね》

「精霊に、数術ねえ……どっちも才能云々って話だろ？話くらい
は聞いたことあつけど、俺の親戚にその使い手がいたとはなあ」

俺が母さんが何か言う度に彼は呆れていくようだ。雲の上の話で
も聞いているような顔をしている。

「……信じられない？」

「信じられねえつうより何つーか、驚いたってか。俺には一生
関係ない世界の話だと思つてた」

《こらっ！聞こえてるのに私を無視するなっ！！》

従弟は左右を見回すが、やがて小さく首を振る。それが俺の期待
を裏切ることだと彼は察していたんだろう。

「悪い。聞こえるけど、見えはしないな」

「そっか……」

《ええ？聞こえるのに見えないの？どういう神経してるの？才能
微妙過ぎるわよ？やっぱり神は二物も三物も与えるって言うのかし

らあ？可哀想ねえないないないで才能一つもないなんて》

「母さんちよつと、黙ってて」

《ひ、酷いわランス！うん解った！》

「聞くのかよつ！？文脈なんか矛盾祭りじゃねえか！」

《嫌ねえ、この天然なのに鬼畜入つてるところがいいんじゃない。でもまだまだね。頑張つて私好みの男に育てなきゃ》

「随分と低俗な精霊がいたもんだな」

「ユーカー、今は母さんのことなんかどうでもいいよ」

《きやあつ、ナチュラルに素敵に鬼畜だわつ！！いいつ！！いいのよランス！母さんそういうプレイも嫌いじゃないから！》

話を脱線させる母さんを適度に放置しながら、俺はユーカーに数術についての話を行う。

「へえ。それじゃあ数術つてのが使えれば、いろんな事が出来るのか」

「うん。理論上は何でも出来るって話だよ。人間の限界つていうものがあるから出来ないことも多いってだけで」

「それじゃあその限界的にお前は回復術は出来ないっていうわけか？」

「限界つて言うか……どうなんだろ母さん？」

《大丈夫よランス！筋は良いわ！式も丁寧で可憐で荘厳で本当に綺麗よ！純血でその若さでここまでやれるのは十分凄いと思うわよ。唯……うん、展開ねえ……こればかりは練習ね。ランスは唯練習不足なんだわ》

「練習かあ……」

《ちよつとあんた！もつかい落としてあげるから今度はちゃんと怪我しなさいよ。それでうちの子の練習相手になりなさい！って無視するんじゃないわよ！！》

「……お前はいいな。あんな喧しいのでも、お前には母さんが居るんだろ」

彼にとっては酷いことを言っていた母さん。それでも俺への愛情がそこから感じられたのか、彼は今回はかりは母さんに言い返さなかつた。

それどころか彼は母さんを否定せず、俺を否定せず、俺を羨むようなことを口にする。それはとても嬉しいことだった。そんな風に言ってくれた人は今まで誰もいなかった。聞こえない振り見えない振り、ここにいる俺の言葉さえ父の領地では黙殺されてきた。

だから本当に嬉しかった。多少失望したとはいえ、喜びはそれに勝るものだった。

だから考える余裕が出来た。彼の言葉により俺の中に新たな疑問が生じたのはそのせいだ。

「母さん？ユーカーにだっているだろ？」

この屋敷ではユーカーの姉に当たる少女達が居た。そしてその母親という女性もいた。なら彼女は彼の母でもあるはずだ。

「いるけどいねえんだよ」

「何それ」

「何だろうな」

曖昧に濁す笑みで彼は笑う。

「つかそんなことはどうでもいいから、それさっさと返してくんな？早く戻さないと俺が親父に殺される」

「あの伯父さんがそんなことする？ちょっと怖い感じはしたけど、

俺の勘違いだったみたいで結構優しかったよ?」

「あいつが?……いや、お前にそう見えるんならそうかもな」

「そうだよ。ユーカーと遊んで良いって言ってくれたのも伯父さんなんだし」

「はあ……あいつが、ねえ」

信じられないという風に、彼は何やら思い悩む。けれどそんなことはどうでも良かった。俺は彼の悩みより、俺の都合を優先していた。だから現状への不満が更に膨らんだ。

「……じゃあ、それ病気じゃないんだ」

「色素異常が病気だって言うんなら俺も混血もみんな病気ってことになるけどな」

「それじゃあ何も悪くないのにどうして隠すの?」

俺は普通に彼と一緒に外で遊びたかったのだ。見知らぬ土地に遊びに来たのに、屋敷に籠もりきりというのは彼じゃないけどつまらない。それなのに彼は、俺の言葉に予め用意されていた解答を繰り返し唱えるだけ。そんなものは理由にならない。そんなもので俺は引き下がったりしないのだ。

「だから恥だからって言っただろ」

「そうかな……俺は好きだよ」

俺がそう笑いかければ、彼は口をぽかんと開けて目を見開いていた。

空の青は水とは違う。沈めて殺す青じゃない。吸い込まれそうな明るい空の色。それは見る者の悲しみも吸い上げて忘れさせてくれるような温かさ。その青にしっかりと俺が映されている。認識されると言うことはとても嬉しいことだから、俺はそんな風に驚いてい

るそいつの青がとても好きだった。だからだ。また驚かせたくなつたのは。

「せつかくそんな空みたいで綺麗な色なのに、隠すなんて勿体ないよ」

*

すべては偶然だ。偶然彼と出会って、偶然話し相手を任されて、偶然知った彼の目の色。

海の浅瀬のような左目とそれより明るい空色の右目。それは真純血として本来あり得ないほど薄い色。唯の純血だってここまで明るい色を現すことは難しい。

世間知らずの俺がそれを知ったのは、彼にそれを教えられてから。だから愚かな俺は、その色を綺麗だねと口にした。その時彼は俺の青を、どんな思いで見っていたのか。俺はとても残酷なことを口にしてしまっていた。

それはとても懐かしく、遠い日の思い出。それが今も色褪せることがないのは……俺にとつて大切な記憶だから。それをとても懐かしく思うのは、俺が悔やんでいるからだろう。

悔やんでも悔やみ足りない。いつも俺の言葉は至らない。だから不用意に傷付けてしまう。その解決策にと俺は会話自体を減らし、そして悔やむことも忘れてしまったのだ。優先順位が一位でないのなら、いくらだって傷付けても良いと俺は開き直ったのだ。

だけどあの人が死んでしまって、その亡霊を俺は求めているけれど……願いを使ってまであの人を蘇そうとは思えない。それは俺にも殺したくない相手がいるからなんだとそう思う。暫定的にはこいつが今のところ最も大切なんだろう。それはわかる。それは知っている。それなのに俺はまだこいつを傷付けている。

お前はアルドール様に仕えているわけじゃない。それでもこつし

て命令もないのに守っている。イグニス様は言った。俺が王への償いのためだけに生きていること、それは周りを傷つけると。そのもつとも顕著な例がこの従弟。俺の勝手に振り回されて、俺の八つ当たりをぶちまけられる。俺はほとんど顧みないのに、文句を言いながらそれでも俺の目的には従う。俺が頼みもしないことを、こうして勝手にしてしまう。

「ユーカー！」

「うあっ……って、ら……ランスいきなり何しやがるんだお前」

すぐ傍で怒鳴ればすぐに目を覚ます。背後が壁だったのが幸運か。あの時のように窓から転げ落ちるようなことはなかった。

起こしたのは自分の足で部屋に戻って貰うためだ。本当は部屋に運んでやれば良かったんだけど、こいつももう子供というわけでもない。引き摺るにしろ担ぐにしろ手間が掛かる。

それならせめてお疲れとかありがととか言えればよかった。でもそれは出来ない。そんな言葉でこいつは言い負かせない。負けて良い時ならそう言っても良いが、今はそうじゃないのだ。

「見張りなら俺がする。眠いなら戻れ」

厳しい口調でそう言うも、こいつはやはりその場から動こうとはしなかった。あくまで見張りは自分がやるという顔だ。

「そういうお前も眠そうな顔してるぜ」

「どうしてそう思う？」

「お前が機嫌悪そうな顔してやがる時は大抵お前は寝不足だろ。余裕がないって顔に書いてる」

俺以上に俺を理解しているような口ぶりだ。それは事実なのかも

知らない。それでも、それなら解っているはずだ。そんな言葉で俺が引き下がる男ではないことも。それなのにどうして解らない振りをするのか。

「変な時間に寝るもんじゃねえな。目が冴えて暇で暇で仕方ねえ。俺の夜目は馬鹿になんねえし、まあこいつに何かあっても目覚めが悪いな」

だからここにいて、そんだけだとユーカーはそっぽ向く。小さな欠伸は寝起きの所為だと言わんばかりの表情で。

それにランスは言われて気付く。コンプレックスの象徴であるその目を隠すことなく、彼の両目が開いている。それが意味するのは、今の彼が本気だということ。本気で王を守りに来ている。気を張り巡らせている。敵の気配を察すれば、瞬時に抜刀し斬りかかる。向けられる殺気は自分へのものではないとわかるが、その気迫に息を飲む。潜在能力の高さは知っていた。それでもこんな目を見ると、彼がどこまで嘘を吐いているのかわからなくなる。

「ありがとう、でもお前も疲れただろう？次は俺が代わるよ」

……だから俺も嘘を吐く。あちがとうだなんて少しも思っていないのに。優しくもないのに優しい振りをする。そういう甘い言葉をかければ、こいつが引き下がる奴だと知っているから。最初は本心からそうしていたはずなのに、いつの間にかこいつを知る内に、打算的な物になってしまった。こんな物もはや優しさなんて呼べもない。

それでもこいつは優しいから。騙されてくれるんだ。俺がそうやって微笑めば、こいつも軽く笑って……それは、いつもと違う笑い方。

「だが断る。暇で暇で死にそうだって言っただろ？」

おかしい。どういうことだ？いつもなら、ここで引き下がる。こいつはそういう奴なのに。何かが違う。これまでと。

(本当に……どうしたんだ、ユーカー？)

よく知った人物なのに、見知らぬ人間を見ているよう。何を考えているのかわからない。いや表面上はわかる。唯、もっと奥。心の奥底で何を考えているのが今は見えない。見えないというのは違うかも知れない。これまでこいつにはそういう物が何もなかった。空っぽだった。漠然としていた。

騎士なのに何を守りたいのかとか誰のために戦っているのかとかそういう意志が欠けていた。理由もなく、唯何かから逃げるように剣を振るっていただけだ。その先には多分何も無い。何も見えないままそういやってこいつは生きていた。見ていて危なっかしい。それでも迂闊に触れられない刺々しさ。

だけど今は、何かじつと遠くの方を見据えている。以前よりは印象が僅かに和らいだ？でも以前に増して沈んでいる。以前のこいつは沈没船を渡り歩いて息を繋いでいるような眼をしていた。それが今はもう、冷たい海の底。呼吸をすることも諦めてしまったような諦観がそこにはある。それでもその眼は水上の光を見つめている。希望を信じなくとも、希望に焦がれ見つめているのだ。

その苦しみの理由を知りたいと願っても、それが呼吸もままならないこいつから酸素を奪ってしまうような気がして気が引ける。だけどこのまま見つめていてもこいつが酸欠で死ぬのは目に見えている。この手で殺すか見殺しにするか。それが俺の手に託されているのでは？そんな予感が胸を過ぎった。

「多忙な人間はさっさと休め。大体お前は明日からだって忙しい

人間なんだ。休める時に休んどけ」

「それは大丈夫だ。俺もちゃんと明日からお前を馬車馬のように扱き使うからお前もスケジュールはびっしりだ。というわけで休むのはお前ということになる」

「残念だがそれは飲めねえ話だな。俺はこの糞暇な時には働くが、周りが働くときは何が何でもふけるさぼる逃げる隠れる！ろくな給料も出ねえのにやってられっか」

蟻の巣だって、蜂の巣だって怠ける奴は必ず現れる。そして人間社会で言うそれがこの俺様だと従弟は無意味にふんぞり返る。それが本心からの言葉ではなく、自分を引き下からせるためのものだと解る。けれどそれを指摘したところで彼が認めるはずがない。そういう奴なんだ昔から。

「どこまでお前は天の邪鬼なんだ……」

「馬鹿かお前？素直な俺とか想像してみろよ。全面的に全体的に総合的に気持ち悪いだろうが」

相手を言い負かすためなら自虐ネタも厭わない。どこまでこいつは捨て身なんだ。

普段貴族がどうかプライドがなんだとか喚いている癖に、こんなにあっさりどうでもいいと言わんばかりにそれさえ投げ捨てる。こいつのこいついうところがわからない。というかこいつのこんな姿を俺は知らない。

こいつが自分を自ら貶める事なんて……久しくなかった。その目の色を相手に忘れさせるほど、高圧的でいつも自信に満ちあふれていて、貴族らしい誇り高さと横暴さを身につけていた。そのこいつが、こんなことを口にするなんて世も末だ。何か変な物でも食べたのだろうか？

しまった、間が空きすぎた。そのせいでこいつがそれを肯定の限

りなく悪い意味の方だと受け取り始めている。別にそんなつもりじやなかった俺は慌てて否定する。

「……むしろそういう方が助かるんだが？」

「あ、悪い。気持ち悪いのはお前の発言の方だったな。夏だつてのに鳥肌立った。つつかマジ空気読めよ。今のは同意してそこで俺がツッコミ入れるところだろうが」

肯定をご所望だとは、これまた意味がわからない。それにしても何なんだ？

俺の行動を読み取ってそれを手伝うようなことをしたかと思えば、こうやって平気で俺を貶める言葉を作る。それなのにどうして、こんなところにいるのか。重んじているようにしているものが、実は心底どうでもいい。その癖普段馬鹿にしたり口汚く罵ったり軽んじているものが、本当は何より大切。自ら進んでその上辺に騙させて人の誤解を招いて、それで何が満足なのか。解る奴だけに解って貰えればいい？そんな風なこいつを見るのは初めてじゃない。妙な既視感。こんなこと以前にも思ったような気がするのは何故か。

（ああ、そうか）

そんなに似てはいないのに、どうしようもなく駄目なところばかりが二人揃って似通っている。俺もこいつもとても狭く息苦しい場所に生きているのだ。見ている場所は違くとも。

俺にとつての王は同時に存在成し得ない。だけどこいつの王は一人じゃない。それでも王のためにしか生きられないところは同じ。

こいつが彼女を失って、あの人も失って、……それでも死に急がないのはまだこいつの王がいたからだ。俺の王はあの人で、今はアルドル様だけど……こいつにとってそれはたぶん、俺なんだろう。あの人に仕えたときのように文句を減らず口を言いながら、それで

もこうして支えてくれる。

(そういうことだったんだ……)

今更になり、王がこいつを信頼したのがわかる。機械でも人形でもない。生きた人間として心を捧げて仕えてくれる。罪悪感とか金のためとかそんな気持ちで仕えているわけじゃなくて、純粹に慕って力になりたいと思ってくれている。こんな最低な俺を唯好きでいてくれるんだ。

不信に囚われそうになる敵ばかりのこの都で、王が笑っていられたのは、俺を許す余裕を持てたのは、こいつがそこにいたからなんだ。

命令に従わない騎士と、命令に従う騎士。

命令通り命令だけ守って王を守れない俺と命令を破って好き勝手するイレギュラー。いざという時、頼りになるのはきつと俺じゃない。だからあの人もこいつを側に置いたんだ。あいつの動きは敵も味方も予測不可能。あいつは賽子。良くも悪くもなる賽の目。

王はその勝負に出て、勝負に負けたのだ。王はこいつの6を信じた。6が出なければ勝てなかった。俺ではきつとどう足掻いても5しか出せない。だから1から6までの可能性。それに王は賭けて負けた。

それでも王はこいつを呪ったりはしないだろう。王はこいつに癒されていたんだ。王を恐れず、王を敬わず、それでも王を愛し慕っていたのはこいつだけ。

こいつは本当に真っ直ぐに人に心を捧げる。俺がどんなに酷い人間でも、俺を嫌わず、俺を憎まず、まだ俺なんかを支えている。俺がこいつに何をしてやったというのだろう？何もしていない。傷付けてばかり。それなのに何故？

アルドール様に仕えろと俺は言った。カードに仕えろと。それはつまり……俺は今日までお前に死ねと、それが騎士の在り方だと言

っていた。その程度だ。出会って間もない他人のために、家族のように大切だったお前に死ねと俺は言ったのだ。それが当然なのだと決めつけて。

自分の言葉の残酷さを、今更のように思い知る。それなのに、それに背いて……それでも俺に背かないこいつ。その青を見ている内に、初めて俺の中に迷いが生まれる。

(そうか……こいつが、死ぬ……。死ぬ……。のか)

何がお前を殺したくないだつて？自分の手を汚したくないだけじゃないか。

それはそう遠くない未来。こいつが死ぬ。俺のせいで。俺がこいつを殺すんだ。その命を使い捨てる。すり減らす。何も感じず犠牲に用いる。

イグニス様は道化師とやりあったと言っていた。俺たちの中で最も強いカードだったルクリースさんはもういない。イグニス様もしばらく此方と距離を置くと言っている。

となれば使えるカードはユーカーだけ。どんな策を取るにしろ、こいつの力が必要だ。

アルドル様、ひいてはカーネフェルという国のために死ねと俺は言った。それをこいつは拒んだ。それなのにこいつは俺を支える死んでやるのは国のためじゃないとその目が言っている。

俺が助けてくれと、お前の力を貸してくれと言ったなら、こいつは言ってくれるだろう。その命をくれるだろう。

それでも俺はそれを言わない。回りくどく国のためだなんて、そこに私欲が微塵もないと言わんばかりにお綺麗な言葉でもって。俺は言わなかった。それでもこいつはそれを見越している。だから言わない。認めはしない。それでもここにこいつがいるのは誰のため？それにも気付けないというなら俺は本当に最低だ。

「お、おい……」

そしてこいつは黙り込んだ俺を見て、言い過ぎたのかと焦り出す。情けなくも狼狽えている。その青。久しく見ていなかった空色の……その姿に思い出す。そうだこいつは、こういう奴だった。本当は誰より気が弱くて優しくて臆病で。いつも人の目に脅えていた。だから平気で嘘を吐く。大げさに大きな事を言っただけ見せたり、まったく逆のことを口にしたたり。

(思い出した……)

どうして忘れてしまったのか。こいつの嘘に慣れる内、知ったつもりで再び騙されていったのか？俺は絶対にそれを忘れてはならなかったのに。

こいつは弱い。とてつもなく弱い。剣とかそういう次元ではなく、それは精神的なもの。こいつは弱い。それは確かだ。俺はこいつのそういう弱さが好きだったんだ。

償いを知る前は、もっと普通にそう思っていた。俺が騎士に憧れたのは、強くなりたかったからだ。誰かを守る喜びに、希望と意味を見い出したから。

それが始まりだったのに、いつの間にか立場が逆になっていた。彼の願いを叶えたいと思っただけは、今は彼が俺の願いを叶えるためにこうして支えてくれている。

俺が気に入らなかつたのは彼が強くなることだったんだ。もう必要ないと言われるのが怖かった。だからずっと駄目でいて欲しかった。それはこいつが駄目だからではなく、そんなこいつを俺が望んでいたからなんだ。俺はそれが嘘なんだって気付きもせず、その優しさに甘えていた。それでいて同僚として情けないと罵ったりなんかして。こいつの身動きを取れなくしていたのは俺の方だった。

「ユーカー……」

「何だよ」

「一本勝負で良い。付き合ってくれないか？先にお前が一本取ったら俺は大人しくここを引き下がる」

得物を手に取ってそう提案すれば、数秒後に彼も応じる。言葉よりこれだ。結局は。

「…本気なんだな？」

「無意味な嘘を吐く趣味はない」

話が早いし、力で負けたなら文句も言えない。王の守りはより強い者が担うべきだ。

正直なところ、俺が勝てる保証はない。三本勝負なら、二本取れる自信はある。十本勝負なら七本は行ける。それでも一本と言われたら、俺はこいつに負けるかもしれない。両目のこいつとやり合ったことは確か一度もなかったはずだ。

「俺が勝つたら四の五の言わずに部屋戻れよ」

「ああ。その代わりに俺が勝つたら、戻るのはお前の方だ」

互いに得物を天井へと投げる。思い切りぶつけると落下速度も上がりキャッチも難しくなる。しかし軽すぎてもいけない。それでもこんな時間に騒げない。思い切りに欠ける投げに、交わる視線で共に笑った。落ちてくる得物、それを掴んで鞘を抜く。それは僅かに彼の方が早かった。これは得物の重さの差。先手必勝、速攻勝負と早速取りに来る攻撃を払い落とす。その衝撃に腕が震える。

「……っ、やるじゃないか！お前らしくもない良い太刀筋だ！迷いが抜けたな！」

「はっ、何様のつもりだよ!？」

再び攻勢に転じられる前に、得物の軽さを活かして今度は此方が突きを繰り出して行く。いきなり狙いには行かない。体勢を崩すための連続攻撃。それを彼も防ぎはするが、次第に隙が見えてくる。数度の突きとその反応から、故障の部位を見つけて出す。

「……っ！」

「軸足を庇っているようだが？」

余計な情報をくれてやるわけにもいかない、或いは喋る余裕も無くしたか。さっきまで立派なくらい張りぼての冷徹を装っていた癖に、ほらもうボロが出てきた。精神の乱れは剣にも現れる。そういった意味でなら、分は俺にある。気持ちにムラのあるユーザーはどんなに才能があっても本当に強くはなれない。俺がいつもある程度以上に剣を振るえるのは、感情をその分そぎ落としている結果とも言える。剣を極めることは、おそらくそう言うこと。

先程までの悩みもどこかへ消え去って、唯この一瞬。刹那だけがそこにある。

「ああ、悪い……言い間違えた、利き足だっ！」

傷めているその足を狙って鞘を振り下ろす。それを庇うのには間に合わない。そう踏んだのか、その壊れた足を振り上げる。

それはユーザーの咄嗟の判断だ。その中にも俺はこいつの成長を見る。今のこいつは逃げなかった。無謀にも勝負に打って出た。犠牲を厭わないその賭けは、その勇気を讃えるがごとく幸運は彼に微笑んだ。

「そこまでやるか………てめえ」

「嫌だな、言わない方が悪いんだ。痛いなら痛いって言ってくれないとハンドェのしようがないだろう?」

鞘を蹴飛ばしたユーカーは足の痛みに顔を僅かにしかめていた。もつとも、それは痛みのみでせいだけでもないのかも。今の攻防の勝者は彼だが、勝負の勝者は俺だった。足の痛みで跪いた、彼に向かって俺は剣を突きつける。……勝負あった。

「まったくお前は無茶ばかりして。診せてみる、今治してやるから」

「そうやって決めつけるの止めるよ。別に俺は足なんか痛くねえし」

「へえ、そうなのか」

足を変な方向へ軽くひねってやればすぐ傍で悲鳴が上がる。

「痛えっ！殺す気が馬鹿っ!!」

「黙れ馬鹿。アルドル様がお休みになっていらっしやるんだぞ」
軽く叱ってやれば、気に入らないとそっぽ向く。ふて腐れた顔なんかは本当昔から全然変わっていない。

「大体そんなコンディションで見張りなんて無茶だろう?俺が気付いたから良かったものの、もしここに刺客でも来ていたらお前だつて……」

「俺はコートカードだ。お前みたいな弱っちい数札と一緒にすんな。そのくらい幾らでも覆してやる」

たった今その格下のカード相手に負けたことを彼はもう記憶から抹消してしまっただろうか?

「……俺がいつそんなことを口にした？」

「ランス……？」

「勝手に俺の言葉を決めなくてもらいたいものだな」

此方が強い口調になれば、言い返せないのはもはや条件反射なのだろう。一見逆に思われがちだが結局我が儘を押し通すのは、最終的には俺の方。それを多少は悪いと思うから、小さな事やどうでもいいことは俺が折れる。唯それだけ。

「確かにカーネフェルには強いカードが必要だ」

それは認めるし、否定は出来ない。

「それでも、お前がカードじゃなかったとしても俺はお前の力を望んだだろう」

むしろそうだったらどんなに良かったか。俺が願いを諦めたがお前は何故だと思ってる？新しいカーネフェル王を殺せないから？それだけだと思ってるのか？

「お前は数術が使えないから知らないだろうが、俺が回復数式を作る時……何を思つかお前に解るか？」

「んなの解るわけねえだろ。お前の言葉、そっくりそのままお返しするぜ」

言われないのに解るはずがないと開き直って対話を拒否する従弟に俺は幼い頃を思い出す。

「……あの日のことだ。お前のその目を治したときの事を思い出

す。この数式を紡ぐ度にな」

*

俺は馬鹿だ。本当に馬鹿だ。だから彼のことを知りたがった。俺は初めて得た、人間としての理解者の登場を喜び有頂天になっていた。だからもつと多くを理解したいしてもらいたい。多くを共有したくなった。どうして見えるのに見えない振り演じているのか。眼病なんて失明なんてしてもいいのに両目を隠して隔離されているのは何故か。

見えない振りをする彼との遊びはせいぜい会話だけ。それも充分楽しいけれど、もつといるいろいろなことをしたかった。海と緑に恵まれた美しいその領地。母さんと二人で遊ぶのも楽しいけれど、三人ならもつと楽しいはず。幼い俺は、唯彼と一緒に遊びたかった。自分の暮らす領地なのに、その景色も彼は知らない。森の緑、水のせせらぎ、俺と母さんが見つけた風景を彼にも見せてやりたかった。

彼の青はとても綺麗なんだから、こんな部屋の中では勿体ない。彼の青は空の下で一番映えると思った。彼は誇るべきだ。そして羨まれるべきだ。そのすばらしい澄んだ色。心の憂いさえ吹き飛ばしてくれるような快晴。それを宿している瞳は、とても温かな色。それなのに、領地の人間達さえ、彼を知らないなんてあんまりだ。

俺は心底彼を気に入っていたんだろう。だから見せびらかしてやりたかった。知らしめてやりたかったのだ。ユーカーは母さんとは違う。誰の目にも映る。それなのにいないもののように扱われるのが不愉快だったんだ。

だから伯父からきつく止められていたにも関わらず、彼を外へと連れ出した。伯父は何故か俺には甘いから、バレたところで許されるだろう。そんな強かな計算をして。

俺の何時間にも及ぶ説得の末、彼は渋々了承をした。人目に付かない場所なら行ってやってやってもいいと。

みんなに見せることが出来ないのは残念だったけれど、大好きな友人と一緒に遊べるのは素直に嬉しい。使用人とは違う。仕方なくとか仕事だからそうしてくれてるわけじゃない。それがとても嬉しかった。

「おいランス、なんだこれ。水の中になんかいるぞ？」

「それは魚って言って……」

「ああ、たまに晩飯に置かれるあれか」

「うん、それ」

「で、こいつら何でこんなところにいるんだ？」

「え？……ええと、魚だからじゃないかな。魚が陸を歩いてたり空を飛んでたら魚って言わないだろうし」

「その理屈だとそこ飛び込めばお前も今日からめでたく魚類と言うことか。そうかそうか」

「そうだね。ていつ」

「突き落とそうとすんな馬鹿っ！全身びしょ濡れになってみる！どう言い訳すればいいんだよ！？」

「ああ、ごめん。よくわからないしユーカーが溺れている間に母さんにどうしてなのか聞いてみようかと思って時間稼ぎに」

「そんな理由で！？溺れること前提！？」

「それにユーカーの方が俺を突き落とそうと考えてたじゃない」

「何故バレた？」

「そりゃあバレルよ」

悪意のない悪意の押収。誰かと馬鹿をやるのがこんなに楽しいなんて思わなかった。母さんは俺には優しいけど、こんな会話は成り立たない。だから新鮮だった。何がだかよくわからなくて。

俺たち自身何がツボに入ったのかよくわからないのだから、それを端から見ている母さんはもつとわけがわからなかったのだろう。

《私あんたら何が楽しいのか全然わかんないわー……って何でそこで二人で吹き出すの!?これだから人間って嫌いなよ!あ、勿論ランスは別よ?ってなわけでユーカー!あんただけは許さないわ!ヴィヴィアン様の怒りの一撃を食らいなさい!》

「水は止めるって言っただろ!?!」

《ひひひひひ!いい気味よ!寝汗か涎とか世界地図とかでも言い訳するがいいわ!》

「くっ……この技だけは使いたくなかったが、秘技!ランスガー」

《くっ!うちの子を盾にするなんてっ!卑怯者っ!》

「黙れ、勝負の世界に卑怯もクソもねえんだよ!」

「あ、母さんが回り込んだ。今はあつちだよユーカー」

「あ、じゃねえよ!ちゃんと庇えよ馬鹿!抜け出したのバレたら俺本当やばいことになるんだからな!」

《ランスの馬鹿あつ!何でそいつに教えちゃうの!?でも愛してるっ!……ってランス?聞いている?聞いてないのね?……うん、そっくだよね。うん、あのね母さん別にスルーされるの嫌いじゃないわ。全然嫌いじゃないんだからね!!するならもっど!徹底的に無視しなさいよっ!!ちらちらこっち見ないでよ!!またバレちゃうじゃない!!!》

「母さん五月蠅いよ」

《ごめんなさい》

「でもさユーカー、それは絶対そんなことないよ。伯父さん親切だし優しいじゃないか。うちの父さんの方がもっど最悪だよ」

「あいつは外面だけは良いんだ!」

「へえ、ユーカーとは反対だね」

「………貶してんの?褒めてんの?」

《それは勿論貶してるのよ!》

「現れたな馬鹿めっ!秘奥義ランスバリアーっ!」

話の話から外れたのを良いことに、羽も使わずひたひたと無音のままにじり寄ってくる母さん。そんな母さんの犯した痛恨のミスにユーカーはすぐさま反応。俺を掴んで前に構える。そして自分は陰に隠れる。

「うわ、冷たっ」

《きゃあああああ！ごめん！ごめんねランス！！今焚き火とか竈辺りの火の精霊探してきて乾かしてあげるからっ！あ、……でも水もしたたるいい男、じゅるり》

「へ、変態だ！変態がいるぞ！！つか精霊つてもつと綺麗な心根なんじゃねえのかよ！？あれ絶対湖の精じゃねえよ、湖に浮かぶ水垢とか赤潮とかゴミとかへドロの精だろ。もしくは湖の性犯罪者を略して湖の性的な」

「ユーカー、それって偏見って言っただよ」

「な、なんか違えと思う」

「それはそうとそれでそれはこういう綴りなんだって」

「へえ……手に文字書かれるのと目で見るのって結構違うな」

飛び去った母さんを見送りながら、俺が木の枝でガリガリと土の上に文字を記す。すると、彼はそれをまねるように、自分の手のひらの上で文字をなぞる。

彼との会話は、母さんのそれとも違う。母さんからは俺が教えられる側。だけど今度は俺が教える側だ。俺以上に何も知らない従弟に、母さんから教えられたことを教えるのは、なんだか不思議な気持ちだった。俺の言葉に、感心したような声が上がると凄く嬉しい。素直じゃないこの友人が、俺を認めてくれているような気がして。

思えば誰かに認められること。それが俺の、そして従弟の……共通の願いだったのかもしれない。否定され続けて来たから、誰かに認められ受け入れられること。それに歓喜し胸が震える。だから、大切だったんだ。

「あの魚はね焼いて食べると美味しいんだよ、それに塩をかけるともっと美味しくくて、こっちはお刺身にして……」

「おい、これなんだ？」

「ああ、その花はね……よくお墓に供えられるものだよ。確か花言葉が……」

「へえ……聞いたことはあつけど、こういうものだったんだな。イメージと全然違う」

「どう違う？」

「もつとおどろおどろしい系の奴かと思った。墓場ってイメージの？思ってたより全然綺麗で驚いた」

「持って帰る？」

「……………ああ。ちょっと頼んでもいいか？」

彼に頼まれるままに、俺はその花を手にとった。先に部屋に彼を戻した後、頼まれた場所を探して、領地外れの墓地へと向かう。そして、教えられた名前の刻まれた墓の前にそれを供えた。それは女性の名前だった。名字は彼と同じだったから、彼には死んだ姉さんが妹でもいたのかと悲しい気持ちになった。

《ねえランス、あのユーカーって糞ガキは確かあんたより少し年下よね？》

「うん、確か1歳だか2歳だか……」

けれど母さんが首を傾げる。言われて俺も気づいたけれど、墓に刻まれた時を示す数字は少しおかしい。少なくともその人はユーカーの妹ではない。おそらく姉でもないだろう。それなら彼女は誰なんだろう？

食事の席の後だった。ユーカーの部屋に向かおうとした俺を、伯父は呼び止めた。もしかして連れ出したことが知られてしまった？

だけど息を飲む俺に、伯父は礼を言う。バレたのは墓参りの方だけだった。

「君を見かけた領民が君のことを感心していたが、私もそう思う。本当にランス君には感心する。よくもまああの愚弟からこんなに出来た子が生まれたものだ」

「いえ、そんなことは……」

「うちの馬鹿息子にも見習わせたいものだまったく。いつそ君が私の息子なら良かった」

「伯父さん……」

家を空けてばかりで死んだ母さんと俺を悲しませた俺の父が最低なのは全面的に同意するが、ユーカーを否定されるのは彼の父親でも許せなかった。

そもそもそれは俺の手柄じゃない。彼がそういいたいと言ったから、それを頼まれたからそうしただけ。でもそれを告げることは出来なくて、褒められたのに悔しさだけが残された。

俺にとって彼はとても大切な友人。誰にも見えない母さんの声を彼は聞く。彼は俺を馬鹿にはしない、俺と母さんの否定もしない。お前は疲れて居るんだとか、気が触れているんだなんて、彼は一度も言わなかった。だからこそ、俺は彼を否定したくないし、否定されれば自分のことのように悔しくて、悲しくなる。

扉の向こう、聞こえていたのだろうか。自らを縛めたその両目で、覆われて見えない窓の外を眺める彼。その横顔はとても悲しげだった。

「……あれ、誰のお墓だったの？」

「母さん、か……」

「え？」

「人間じゃなくても、血が繋がってなくてもお前には母さんがい

ていいよな」

「ユーカー？」

「悪い、何言ってるんだろうな俺」

ユーカーは俺の母さんを否定しない。それどころか羨ましいとさえ言った。それを口にしたのは二度目。

不思議だった。ここには普通に彼の母親が住んで暮らしているはずなのに。それを尋ねれば、彼は笑っていた。それは以前のようない曖昧な笑みではない。だから彼は今回こそ誤魔化さずに教えてくれた。とびっきりの笑いが浮かべられた口元が自虐の笑みなのだ。知ったのは、その内容を知ってから。

「あれは俺のお袋じゃなくて、姉貴達の母親なんだ」

俺の屋敷には死んだ母さんしか居なかった。だからとても驚いた。領主が複数人の女を娶っているなんて、俺の常識では考えられないことだったのだ。

「それじゃあ本当の母さんは？」

興味本位で話をするべきじゃない。彼は笑いながら死んじまったと口にする。

「死んだよ。お袋は親父に殺された」

「……………」

どうしてとは聞けなかった。それでも俺の顔にはその言葉が記してあったのだろう。彼は笑いながらそれを告げる。

「こんな色だろ？認められるはずねえんだ。俺の父親が自分なん

だつて」

「カーカー……」

「いや、俺がもつとちゃんとした色だつたつて……怪しいもんだけどな」

その色は突然変異などではない。色素異常をもたらししたのは、そこに明確な罪があるからだと彼は暗に告げている。それでもその理由を彼は語ろうとはしなかった。

「それでも生まれた男は俺だけだ。他の女が見栄えのいい跡継ぎを産むまでは生かしておいてやるつて温情さ」

そんなことを父親に言われたなら、俺は立ち直れない。それでも彼は何も気にしていないような顔で笑い出す。

「そしたらさ、遺伝情報調べさせたらマジでめえの子だつたつて話で、ざまあねえぜクソ親父」

それにより処刑から逃れることが出来た彼。伯父はそれ以降他の妻との間にも子宝に恵まれず、こんな色でも希少なカーネフェル人の男児だからと、外から隔離し“大切”にされている。

「考えようによつちや俺ほど幸せな奴もいねえしな。一日中だらけてていいし面倒くさい仕事なんか回されることねえし？それでいて立派な家で美味しい飯食えるんだ。まあ、見させてはもらえねえけどな」

へらへらと笑う言葉は、心底自分は幸せだと言わんばかり。それがあまりに上手すぎて、こちらまで騙されそうになる。……というより俺は騙された。彼を尊敬したものだ。そんな境遇でも不貞不貞

しく強く生きる彼が凄いと思った。同じようにはなれなくても、少しはそんな風に強い心が手に入ればいいのにと俺は思った。

俺は馬鹿だ。彼が捻くれて素直ではないことくらい知っていたのに。俺の前でも精一杯強がって見せていた。それこそが拒絶なんだって気付きもせずには懂れた。

彼と自分は全く似ていない。だからこそだ。俺は彼を羨んだ。

彼の周りの環境は、決して羨むべきものではない。それでも俺は羨んだ。俺が羨んだのは彼自身。俺よりも年下なのに彼はとても強い人間で、弱音を吐いたりしなかった。泣いたところなんか見たこともない。それは彼が強いからに他ならず、弱音を吐いてばかりの俺はそういうところに惹かれていたんだ。彼のそういうところは俺を変え、俺の日常さえも変えていく。

でもそうじゃない、そうじゃなかった。彼はとても弱い人間で、臆病な人間。自分の弱さをひけらかすことを何より恐れ、強がつて生きている。自分にも他人にも嘘をついて生きている。それは人生における最大の逃避。彼自身誰より彼を否定している。嘘の彼を崇めると言うことは、最大級の侮辱で、彼の否定で彼の拒絶だ。彼を知ったつもりで俺は何もわかっていなかった。

それはあまりに唐突に。何も無い日に起きた事件。その日の俺たちは……いつものように二人で窓から外へ抜け出して、いつもと変わらず馬鹿をやって遊んでいた。

だけど彼は、そのいつも通りを続けられないほど心をすり減らしていた。それに俺は気付けなかった。唯、俺を見るその目がとても悲しそうだったのには気付いた。俺は馬鹿だ。見えない振り気付かない振りが出来ない程子供だった。年下の従弟に出来ていることなのに、俺には出来なかったのだ。だから聞いてしまった。

「どうしたの？」

「どうもしねえよ」

「嘘だ、絶対何かあったって顔してる！」

俺が問いただすと、彼は小さく呟いた。

「……俺は、お前が羨ましい」

俺が心から羨んだ人間が、お前が羨ましいと口にした。彼は俺の青を羨んだ。その色こそが彼に望まれていたもの。彼は言ったよ、いつそんな目なかつたならと。薄すぎる青の瞳が、すべての災いを招いたんだと。

「俺はこんな貴族らしくもねえ目！そこの領民だって俺よりマシな色をしてるんだ！！」

遊びに行く最中に、通りすがって身を潜めた。そして木陰から覗いた先……領地で暮らす人々、その姿に彼は絶望したのだ。

「あいつだって！真純血でもねえような奴らより、俺は……劣った目をしてるっ！！」

「そんなことない！お前の目は綺麗な色だよ！！それだけで十分価値はあるっ！！」

「んなもんねえよっ！！こんな出来損ないっ！！こんな目っ……人前に出せるわけがねえんだ！！みんな俺を馬鹿にするに決まってるっ！！」

「そんなことになっても俺は絶対馬鹿にしない！！」

「お前なんかに褒められても全然嬉しくねえんだよっ！！」

好かれて嫌だとは思わない。それでも自分の嫌いなものを褒められて嬉しいはずがない。ましてや自分に欠けている物を持っている人間にコンプレックスを褒められても、その好意を真っ直ぐの意味

で受け取れるわけがない。彼は俺にそう告げた。

「何でお前なんか俺なんかと一緒にいてくれるんだ！？嫌味かよ、哀れんでるつもりなのかよ！？お前みたいな綺麗で深い色の青……そんな目でそんなこと言われても、俺は嫌な気分になるだけだっ……！」

理由がない。自信がない。そんな人間に好意を与えたところで、信じられない。唯、それを拒絶できる力が無かった。唯それだけ。それだけで彼は俺と遊んでくれていた。

俺はそれさえ気付かずに、日々彼を無神経にも傷付けていた。見たくないものばかりをその目に刻ませることを強いて。

俺は馬鹿だ。でもそれ以上に、彼は本当に馬鹿だ。

そんなことをしたところで何も変わらない。余計悲しくなるだけだ。そんなもので人の心は得られない。見放されていくだけだ。でもあの日のそれだけ追い詰められていたんだろう。そこまで俺は追い詰めてしまっていた。

本当にこの目が何も映さなかったなら……こんな目なくなっしまえば。そうなったならきっと、親父は俺を見てくれる。認めてくれる、胸を張ってお前は俺の息子だと。そんな風に言ってもらえる夢を見ていたんだろう。願いを祈りを抱いていたんだろう。俺なんか生まれてこなければ良かった。俺なんか死んじまえばいい。俺なんか……俺なんかと繰り返す彼。その右目に祈りを捧げるように握りしめた、刃を掲げてうつすら微笑んだ。

俺の青が俺の存在が、彼にとってコンプレックス。比較され見下されて、傷ついてすり減って。それでも彼は俺を憎まず、自分自身を呪った。無神経で最低な俺のことを呪わずに。

心配されたかったんだな。家族からの関心なんて、他人からどう見られるかなんて全く興味がないような、そんな素振りをしているのに……狂おしいまで求めていたんだろう。与えられる心を。それ

が痛みや傷で購えるなら喜んで彼は支払う。迷い無く振り下ろされた彼の右目を抉るナイフ。彼はこんな時まで笑っていた。それでも流れる赤色に、泣いているように俺には見えただ。

羨んできた彼を、俺は初めて哀れんだ。弱々しいその姿に、俺は打ちのめされていた。格下だと見下したわけじゃない。彼が弱いのなら、自分が強くなりたい。今まで支えられてきた分、それ以上に彼を支えて守りたい。虚勢の強さでも、彼が今まで与えてくれたものには本当に感謝しているから。

彼の幸せ。それを願って、俺は数式を完成させた。これまで成功したことのない、回復のための数術を。

*

「つまるところ、ここ最近俺がお前を全く顧みることが出来なかったのはお前の所為だということだな」

「責任転嫁もいいところだぜ」

ランスの発言に、従弟は何でそうなるんだと苦い表情だ。

「お前は弱いカードなんだ。振り分けられてる幸福値だつてものもつぞ低い。俺なんかのために使つていい数はひとつもないはずだ」

「その、俺なんかつて言うの禁止だから。今後一回言う毎にお前に新規のトラウマを一個ずつ植え付けようと思うから」

「その言い方だと今までのも全故意的なものだったのか？ああ！？」

「そんなわけないだろ。お前が俺にトラウマ製造器とか不本意な称号を贈るから言ってみただけだ」

無論言われたからには頑張るけどと付け足せば、頑張らないでと従弟が左右に首を振る。

「俺は嬉しかったんだよ」

償いの忙しさがそれを忘れさせてはいたけれど。

「あのさユーカー、俺は別に嫌々お前の怪我を治してるわけじゃない。それは解るな？」

「……………わかんね」

「なら解れ」

「んな無茶な……………」

「お前なら出来るよ何だって。俺の自慢の従弟なんだから」

「その修飾は最終的にお前にかかるんだろどうせ。素晴らしいランス様のおまけ的なあれ」

「俺はいつから自己愛者になったんだ？」

「胸にて当てて考える。ヒントは三択、三十年前、百年前、五百年前」

「そうだなユーカー……………とりあえず生まれてねえよと俺は突っ込むべきなのか？」

下らない馬鹿げた言葉の押収。それにどちらともなく吹き出した。それが少し、懐かしい。昔の俺はこの空気のこの感じが、とても好きだったな。いや今だって、十分好きだとは思える。

「実は先程イグニス様にな……………俺らしさというものをもっと大事にしると咎められてな」

「お前らしさ？んなもんあれだろ。要モザイクグロ料理を爽やかな笑顔で量産したり、間の抜けた天然発言したりとかナチュラルに鬼畜外道になるとかか？」

「お前は俺をそんな風に見ているのか？」

「それ以外に何かがあるよ？それともあれですか？高名な騎士様は

美辞麗句の方がお好みですかって俺にんな薄ら寒い台詞言わせる気か？」

「お前が嫌なら、言ってくれて良いな。言いたいなら言わないでくれ」

「そんなに俺の嫌がる顔が見てえのかお前はっ！！」

「ああ」

「爽やかに言うなボケっ！！」

「……まあそれはさておき、俺らしさというものを俺はお前に預けてしまっていた気がしてな。端的に言うとな、返してくれ」

「もらつてもいねえもん返せるか馬鹿っ！！端的に理不尽過ぎるぞお前はっ！！」

「仕方ない。それなら別件で手を打とう。それじゃあキリキリ歩いてもらおうか？」

「……え？お前も帰んの？」

背を押して歩みを進ませる俺を、従弟が焦つたように振り返る。

俺が見張りを代わるものだと思っただけに、俺まで帰ろうとしているのが理解できないようで彼は混乱していた。

「今は誰かあそこにいねえと……」

「アルドル様が心配か？」

「……あいつがどうかさういふ次元の話じゃねえだろ。単に目覚めが悪いっただけだ……何かあつたら」

こいつが人に関わらないのは、こいつが弱くて優しいから。

一度関われば、もうこうして気にして見捨てられない。だからずるずると守る相手が増えて、身動きが取れなくなる。それを自分で理解しているから、こいつは人に関わらない。

本当なら俺はここで、計算通りとでも笑えばいいのか。アルドル様を押しつつ、見捨てられない程度に状を植え付ける。そうす

ることでカーネフェルはコートカードの一枚を保有することが叶う。頭では解っている。それでも……扉の中の人間が心配だと視線を送る彼に、少し苛立つ。そんな自分に救いようがないなと思った。ユーカーは何だかんだ言いながら、関わった人間をそう簡単に見捨てられない。俺より余程広い場所をこいつは生きているのかもしれない。俺の苛立ち……それはその領域を羨むと言うより、もっと別のもの。

その認識は俺が最低だという証明だ。こいつをちゃんと一人の人間として見てやれていないのだ。だからいつも振り回していた。俺がアルドル様に仕えるのなら、こいつだって当然仕えるべきだと頭ごなしに信じていた。そうなるものだと言いつけていた。

俺はこいつを自分の分身か何かだと……もつと酷い言い方をするなら付属品か所有物かとも思っていたのだ。だから俺の言葉に従わないこいつに苛立ちを覚える自分がいる。それに気付いて自分を深く、嫌悪する。

それは否定よりもずっと酷い。存在を無視しているようなもの。母さんを否定され続けて俺は悲しい思いをした癖に、自分がそれをしてしまっている。目に見えている相手のことを。

それでもそんな俺を未だに大切だと言ってくれる、見放さないでいてくれるこいつには、胸の奥を締め付けられるような悔恨を覚える。

「良いんだ」

「は？」

「彼はまだ即位もしていない。カーネフェル王じゃない。唯の少年だよ。ちよつと目の色が深い青ってだけの」

「何言ってるんだお前……？」

お前がそんなことを言うなんてと、空色の瞳を彼は見開く。信じられないようにその目は俺を見ている。それも仕方ないだろう。今

の言葉は、王よりも今はお前の方が大切だ。そう言っているような問題発言。お前の信じる馬鹿真面目の忠義の騎士はそんなことを口にするものか。要は俺がそんな人間ではなかった、それだけのこと。アルドール様は大切だけれど、実際どうでもいいという気持ちも大きい。俺に必要なのは俺の主であるカーネフェル王。あの人の代用品。それは別にあの少年でなくとも構わない。イグニス様が言うように、俺はまだあの人をあの人として見ていない。

「お前の言うことももつともさ。ああそうだな、まだ彼に仕える必要なんか無い。こんなところで死ぬようじゃ、仕える意味もない。その程度の希望だ」

一晩目を離したくらいで、そんなにすぐ簡単に死んでしまうような王なら要らない。どんなに犠牲を捧げて守つてもすぐに死んでしまつたろう。そこに守る価値はない。そんな価値ない王のために、それを失って俺が後悔したりするのは嫌だ。それでまたこいつを責めるようなことももう嫌だ。

俺は何もこいつに与えられていない。唯搾取するだけ。俺の償いのためにその命まで利用しようと俺はしていた。俺のために死ぬと言う癖に、お前のために死んでやるとは絶対に思えない。嘘でだつて口に出ることが出来ない。その違いが気持ちの差だろう。俺は思われている以上に、こいつを大切には思っていない。

それでも俺だつて大切なのは、嘘じゃない。どうでもいいとは思えない。手の掛かる俺の弟。何でも出来るのに何もしない、何でも出来るのに何も叶わない、何をやっても報われない……可哀想な子。いろいろ思うところはあつた、一言では言い表せない。それでもこのままこいつの命を使い捨ててしまつたら、俺は後悔するような気がする。

戦いが始まるその前に、俺は俺と折り合いを付けなければならぬ。これから迷うことがあつてはならない。そのためにも俺は俺が

何を思い生きているのか。それを見極める必要がある。

思えばここ数年、ゆっくりと話す暇もなかった。過程が抜けていて始まりと今だけがそこにある。その両端にいる俺がまるで違うことを考えていて、見つめる俺の心を惑わす。俺はその両方を見据えて、自分というものを探らなければならないのだ。

でなければいつまでも俺はここに立ち止まったまま。何も変わらず、何も解らず、それっぽいを口にしてそれらしくなんとなく生きる。本当にやりたかったこと、本当の自分の気持ちも見失ったまま。

王はいない。あの人はもういない。そして今、俺は何を思う？俺の償いは、一人だけに向けられるものだったのか？違う。それは違う。

(その目……)

薄すぎる青。その空の瞳が、もう雨に泣かないように。祈ったよ。祈っているよ。祈りだけはまだ俺の中に冪している。

お前が幸せでいらればいいのに。そう祈っていたはずだったのに、その俺がお前を一番酷く扱っている。お前の不幸の大半は俺が原因なんじゃないのか？お前が呪ったその目さえ、俺の責任と言われてしまえば否定は出来ない。お前は責めない。だから謝らない。肝心なことは何も俺は……

いつそ詰ってくれたなら、今何かが変わっていたらどうか？

(馬鹿だな本当に……)

俺なんか優しくする必要はない。別に俺はお前に優しくしていないんだから。そう見えているのなら、お前の目は昔よりも何も見えていないことになる。でも違うか。お前は違うな。お前は見ええない振りかとても得意だった。聞こえない振りは出来ない癖に。

それでしつかり傷つくくらいなら、ちゃんと声に出して言葉を作ればいいのに。お前はいつも最後の最後まで何も言えない奴だった。それで痛い目を見るのが自分だって痛いほどわかっているはずなのに、まだお前は懲りないのか？

そんな馬鹿を本当に救いようがないと嗤う気持ちと、そんな馬鹿がどうしようもなく愛しくてその髪を思い切り撫で回したくなる衝動。そう、俺は好きなんだ。家族としては弟としては本当に可愛くて可愛くて仕方がない。ずっと唯の弟だって思わせてくれるなら何も困らない。だけど、こいつは俺の同僚で立場も身分もあるから……私情で全てを測れない。だから割り切れないものがでてる。割り切れない思いは、酒で流してしまおうか。現実逃避もたまにはいいか。

「死ぬほど暇なんだろ？奇遇なことに俺も死ぬほど暇なんだ。それなら暇人同士一杯やろう？食料庫にいい酒が隠れていたのを見つけたし」

「お前警備さぼって何やってんだよ……」

呆れたような言葉を発し、ずるずると荷物のように彼は引き摺られていく。抵抗する気力も失せたらしい。

「失礼だな。見つけたのは前に城に来た時だよ。都貴族に嫌味を言われたのが腹立たしかったんで、噂されていた秘蔵の一本とやらを隠させてもらっただけで」

「お前って変なところでアクティブだよな」

俺のそれも誇れるものではないけれど、彼の生い立ちはとても羨めるものじゃない。

彼の目の青。その色素異常は彼の血が濃すぎる故だ。それは両親が共に代々真純血の家系だからとか、そんな単純な理由でもない。

それは十数年前のことだった。すべては一人の女性を巡って引き起こされたこと。彼女の周りには三人の男がいた。一人は彼女の夫、今は亡き俺の主、先代カーネフェル王。そして彼に仕える兄弟、二人の騎士。その一人は俺の父親、もう一人が彼の父親。

王は二人の騎士を本当に信頼してくれていて、都貴族に持ち上げられた親族との覇権争い……それが王妃が巻き込まれぬよう俺の父親にその守護を任せた。アロンダイトの領地は北部にある。ザビル大河を超えてまで王妃に危害を加えることはないと踏んでのことだった。

もう一人の騎士は王の傍で戦いを続けた。彼はとても奮闘し、とうとう反逆者を討ち取った。そこで王から停戦が宣言された。まだまだ討つべき者はいくらでもいたが、そうせざるを得なかった。戦いは内乱が長引いたことで、タロツクの侵略の機会を与えてしまった。今は唯でさえ少ない兵力を失わせることが出来なかったのだ。

王の言葉に都貴族達もしぶしぶ従って、カーネフェルはタロツクの侵略への抵抗を開始した。王は信頼できる部下に辺境領の守護を任じ、彼らの活躍もありなんとか侵略を阻止出来た。

しかしこんな時でも悪巧みを忘れないのが悪人の性だ。忠臣達が都に戻るその前に、都貴族達は議会を開き、王の忠臣達の地位と権力……それを底辺まで貶めた。王一人ではその決定を覆すことも叶わない。

これでも最悪だというのに、俺の父親はもつと最悪だった。事もあろうちに、守護を任された王妃と互いを想い合うようになる。それ

が俺の母さんをどんなに悲しませたことだろう。

王妃の心変わりにより、王はとても辛い思いをしたらうに、それで俺の父親を責めることはなかった。

その件でも一人の騎士は俺の父親と不仲になった。敬愛する王への背徳行為が許せなかっただけではない。血を重んじる貴族間の結婚など、そこに自由はない。忠義の騎士である彼が王を裏切ることはなかったが、彼もまた王妃を慕っていたのだ。それでも忠義の前にその思いを殺していた。それを自分の血を分けた弟が、とんでもない裏切りを働いた。それは絶対に許されないことだと憎みながら、行き場のない羨みが浮かんただのだろう。そしてその羨望は怒りに変わる。怒りのままに荒れ始めたその騎士は罪を犯した。

その報いがどうして彼の方へ向かったのか。嗚呼、神子様と言われるまでもない、神なんてクソ食らえだ。何度だって言ってやる。お望みならば本人の前で最高の笑顔で言っただけでやる。

*

「……………愚かところはあの女譲りか」

俺が運んだ彼を見て、まるで一つの取り柄もない。そう言い捨てるような伯父の言葉。そんな言葉を言った後に、彼は俺に笑いかける。そのとても優しい笑顔に俺は戦慄を覚えた。

「手間をかけさせてすまなかったな、ランス君。どうせこれが駄々を捏ねて無理を言っただけで外へと連れて行かせたのだろう？」

「え、……………？」

その言葉に硬直した俺の背中から、ひょいと彼を伯父は奪う。そのまま部屋に運ぶのかと思ったら、階段を上らず下り始める。彼の部屋はそこじゃない。彼のいる階ともう一つ。地下が立ち入り禁止

とされていた。その地下へ彼は下っている。何のために？わからない。

「私の監視不足だ。もう二度とこんなことはないように監視体制を改めよう。この馬鹿にもわかるように躡を施す。君にはもう迷惑をかけないから安心して欲しい」

「何、言ってるんですか？」

彼があんな怪我を負ったのは。この男に愛して欲しいからじゃないか。我が子として認めて欲しいからじゃないか。

想像できない。眼球に刃物を突き刺す痛みなんて。同じことが自分に出来るとは思えないししたくもない。その痛みでショック死を引き起こさない彼の精神力。それは願いを信じていたからだ。希望を夢を見ていたからだ。それを超えればすべてが手に入るのだと。

犠牲を捧げても願いが届かないのなら、彼は今まで何のために生きていたのだろうか？見える目を見えないと言い、病もないのに人を遠ざけ、寂しいと口にすることも出来ない。それでもまだ生け贄は足りない、痛みまで捧げたのに……何一つ彼の願いは叶わないと言っただろうか？

（そんなのあんまりだ！）

俺はもう泣いていた。そのまま見送ることなど出来ず、揺らぐ視界の中彼を追いかけるけれど、辿り着くのは施錠を施された部屋の前。扉はもう閉められていた。

「お前はどこまで俺に恥をかかせれば気が済むっ！？俺の名誉をっ！俺を辱めて愉しいかっ！？何だその目は、それが親を見る目か！？糞生意気なガキめっ！！」

聞こえるのは、打ち据える鞭の音。音と怒鳴り散らされるその大声。悲鳴は上がらない。上げる気力が無いのか、それとも彼が耐えているのか。

「泣いて許しを乞えば許されるとでも!? そういう甘い考えがあるの女にそっくりだ! ! 不貞不貞しいお前のことだ! どうせ反省などしていない! 自分は悪くないと思っっているのだろう!? 顔に書いてあるわっ! !」

それは後者だったのだろう。奮われる暴力の音が増した。それでも声は聞こえない。唯言葉から、彼が泣いている。それだけは理解した。

彼は弱いけど、強いからそんなつもりでは泣きはしない。それを父親である男は正しく理解もしていない。数週間に満たない付き合いの俺だって、それくらいはわかるのに。

彼は今悔しいんだ。悲しいんだ。どれだけ願ってもどうにもならないことを痛感している。醜くも浅ましくも、嘘をついて自分を誤魔化して幸せだよと口にした、その仮面が剥がれ落ちているのだ。どんな犠牲を払っても欲しいものは手に入らない。例え命を投げ出したって、この男は顧みない。愛してなどくれないのだ。諦めず縋ってきた希望を断ち切られた。諦めてしまった。だから、彼は泣いている。それが手に取るようにわかるから、俺も扉の前で泣いていた。

お前の何もかも。すべてが気に入らないのだと、男は罵る。打ちのめす。心も体も虐げる。

数術で治したとはいえ応急処置だ。今は安静にしておかなければいけないのに。涙は傷に染みるだろうか。それは痛くはないのだろうか。

いや、痛くないはずがない。それなのに彼はまだ何も言わない。言葉の力なんか信じていないから。何も変わらないのだとそれも諦

めて。

彼の世界は残酷でとても無慈悲なもの。だから見ていられない。俺は耳を塞いで蹲る。まだ強がっているんだ。何も受け入れられなくて。拒絶されることがわかっていいるから、その前に拒絶する。それが自己防衛。これ以上傷つかないように幸せに生きるために。彼はああなつてしまったんだ。助けてなんて言えない。苦しい痛いなんて言えない。誰にも何も話せない。

それでも彼はもう耐えられなかったのだろう。遅すぎる反抗。父親へと牙を剥く。

「……っ、笑わせんなよ糞親父っ！」
「の変態野郎っ！腐れ」
「！てめえでてめえの」に手え出しといて！？
やることやって傷つけて！？それで全部俺の所為かよ！？俺がこんな目になったのは、母さんの所為じゃない！全部てめえの所為だろうが！！」

すべては目の色の所為。自分の目の所為。そう逃げ続けた彼が向き合っている。自分は何も悪くない。悪いのは目の前の男の方だ。隔離されていたのも、見えない生活を続けたのも、外にさえ出かけられないのもすべてこの男が犯した罪。その罰を何故本人ではなく自分が払わなければならぬのか。それはあまりに理不尽だ。その理不尽を受け入れてきた彼が今、声を上げて反抗に出た。

彼は俺じゃない。その痛みは彼のもので俺のものじゃない。それなのにそれが自分のことのように痛くて堪らない。彼が他人とは思えない。なにもかもが違うのに、どこか通じている。その所為だ。彼の幸せを願って止まない。

仮に彼一人の支払う代償で足りないなら、俺も犠牲を捧げれば、願いは届くのだろうか？

痛いのは嫌だ。苦しいのは嫌だ。でも、彼をあんな自虐の嘲り笑いなどじゃない……本当の笑顔で笑わせてあげたい。どんな願いで

も叶えてやりたい。

「もう、止めてくださいっ！」

手に携えるのは彼がその目に突き刺したナイフ。拾っていたのだ。なんとなくそのままに出来ずに持ち帰った。

「これ以上ユーカーを傷つけるなら……俺も俺に同じことをします」

伯父は俺には甘い。何故かはまだ知らなかった。それでも俺は俺が人質に出来ると悟ったのだ。そしてそれは効果的だった。俺の言葉に扉の向こうがしんと静まるのがわかる。

「片目じゃ足りませんか？両目に突き刺して、決して決して決して決して！そうすれば止めてくれますか？」

高すぎてこちらからは覗けない格子越しに伯父が俺を見る。ナイフを構えた俺を見て、その顔色が瞬時に青ざめた。

そして願いは叶った。俺の願いは。こんな簡単なことで。実際俺はナイフを振り下ろしてもいないのに。それはあまりに不公平で、俺は釈然としないものを抱えていた。だけどそのむしゃくしゃも、彼が目を開けた喜びの前には霞んでしまう。

「ユーカーっ！！良かった！！」

喜びのあまり抱きついたせいだ。ぼんやりとした口調で痛えと抗議されてしまう。ごめんと謝り離れば、寝台の上半ば焦点の定まらない空色の瞳が俺を見る。

「何で……あんなこと、したんだ？」

「今度はさ、ユーカーが俺のこの領地においでよ。伯父さんから許可は貰ったから」

「……………何でそうなるんだよ」

「俺がそうしたいから」

「わけがわかんねえ」

「ユーカーと一緒にいると楽しいし」

「あつそ、悪趣味だな」

「そんなことないよ！」

「どうだかな」

相変わらず素直じゃない。どこまで自分に自信がないのだろう。

それでもこの面倒くさい性格も、回りくどい会話も楽しんでいる自分が居る。こんな風に俺を話をちゃんと聞いて言葉を返してくれる人間がいるということが、どんなに幸せなことか。俺の周りは一方的な人間ばかり。自分のことばかり考えている。そんな人々はそれを俺に押しつけてくる。だけどユーカーはそうじゃない。

「俺のところって本当つまらないんだ。使用人は俺の相手なんかしたくないって顔だし父さんはいつつも都に出張だし、母さんはそれが苦で身投げしちゃったし。今の母さんは湖の精で母さんが入水したその湖で出会ったんだよ」

「お前なあ……………さらつとそういうこと言つなよ」

「俺は好きだよ、お前の青。空みたいに綺麗で」

「話題飛びすぎ。あと俺が連続で同じ返答するような語彙のない奴に思われそんな発言は控えてくれねえ？不名誉だ」

そう言つて彼はそっぽ向く。

「目……………治つちまつたんだな」

《ちょっと！うちのランスの頑張りを何そんな嫌そうに言うわけ？！》

「余計なこととしてごめん。あと母さんはちょっと黙ってて」

《え！？ううっ………ユーカーの馬鹿っ！人間の癖に生意気よ！あの時私が助けてやったのも知らないでっ！》

俺の言葉でユーカーに、八つ当たりのような言葉を残し窓の外へと飛び去る母さん。でも母さんが火の元素を減らしてくれていたのは本当だ。本当は母さんも嬉しかったんだろう。見えもしないのに自分を認めてくれる人間の存在が。

「だけど、俺はお前の青はお前だけが持つてるお前らしさなんだと思うんだ。だから俺はお前の青が凄く好きだし、俺の他にもそう思う人が居る。人間ってそういうものだよ。みんな違うから、みんな違うものが好きなんだ。人が百人いたとして、誰もが好きな色なんてあるわけないだろ？」

そんな色はあり得ない。皆が違う色が好きで違う色を嫌い。その統一化を図ろうというのは横暴で傲慢だ。好きなのは悪い事じゃない。嫌うことも悪い事じゃない。唯それを他の人まで押しつけるのが悪いこと。それは許されないことだ。だから俺はそれを許さない。こいつが嫌いな人間がいるならそれは仕方ない。気が合わない人間はどこにでもいるものだから。それでもそれを他の人まで広げるのは酷いことだ。伯父さんのしていることは、たぶんそういうこと。身分のある人がそんなことをすれば、下は従わざるを得ない。だから偉い人は、そういうことをしてはいけないんだ。何かの可能性を潰すことがあってはならないのだから。そしてそれは彼にも言えること。

「それなのにさ、そんな綺麗な目を隠すなんて勿体ない」

その目を潰そうだなんて。抉ろうだなんて、もつともつと勿体ない。何も持たない人間を誰が好きになつてくれるだろう？引き出しが空っぽ。引き出しの取っ手すらない。それじゃあその人がどんな人なのかさえわからない。

「仮にお前が悪趣味なんだとしてもそれはお前くらいだ。他にそんな変人いるもんか」

「いなかったら何だよ？」

俺一人じゃ不服かと問いかければ彼は返答に困つたのか視線をまたそらす。

当然不服だろうさ。俺は父親代わりにも母親代わりにもなれない。精々やれるとしても兄代わり兼友人だ。別にユーカーはそんなものが欲しかったわけじゃないんだ。それでももらえるものはもらつておくべきだと俺は笑う。

「俺はお前の目が好きだ。自分で歩けるお前と外を歩くのも楽しい。だからそうして欲しいっていうのは俺の我が儘かもしれない。だけど我が儘で何か悪い？人間ってみんなそういうものだろ？みんな我が儘。自分の勝手に自分の都合で生きてる。なのにどうして俺やお前が我が儘言っちゃいけないんだ？」

開き直るような言葉を口に出ることが出来るのは、彼と出会って感化された所為。引いて駄目なら押してみる。願いがあるのなら、手段は選ばない。我慢したって耐えたって何も願いは叶わない。それなら我が儘に貪欲に欲しがって手を伸ばすべきだろう。彼にそれが出来ないのなら、彼の分まで俺が手を伸ばす。

「俺だけじゃ不服だって言うんならもつとユーカーも我が儘にな

ればいいんだ。もつといろんなものを欲しがっていい！そのために
も自分は大事にしてあげないと」

俺が開き直すことで、簡単に願いが叶うのなら。ずっと傍にいて、
どうしようもなく報われない彼の代わりに叶えてやりたい。

外はもつと広いんだ。領地の外にやって来て、俺は初めてそれを
学んだ。別れを惜しんでいつまでも過去に囚われる。それじゃ駄目
だ。だから外へと連れ出してやりたい。今までの悲しみも些細なこ
とだと思えるくらい、もつと広い場所へと。

俺は感謝している。母さんの死で沈んでいた俺を、周りに見えな
い母さんと俺を否定され続けた俺を、笑わせてくれたのは彼なのだ。
だから俺は彼を否定しない。いつも味方でいてあげたい。

「まあ、でもとりあえず今日のところは俺で手を打っておいてよ」

「なんかもう……お前の言ってることわけわかんない過ぎて笑える。
何なんだこの状況は。何なんだこのわけのわからなさ」

何がツボに入ったのかわからないけれど、彼はしばらく咳き込む
程に笑い出す。笑いすぎて彼は泣いていた。そこまで喜んで貰える
と、こちらとしても気分は晴れやか。自然と口元が笑みの形へ変わ
っていき、俺も一緒に大笑い。何が面白いのかよくわからない。そ
れでもとてつもなく愉快的な気分だったのだ。

「お前、本当に変な奴だな」

ひとしきり笑い合った後、彼がそう言った。

「それが俺の個性なら有り難く受け取らせて貰うよ」

そうあることで、彼に気に入ってもらえたならこんなに嬉しいこ

とはない。

その時は確かに、そう思った。

*

酒を呷っても忘れられないことはある。それでも半ば夢見心地。少しは口も軽くなるだろうか？ランスは一人考え込む。

別に彼を哀れんでとか、そんなことで優しくしているわけじゃない。実際あまり優しくできていないとかそういうことは置いておくとして。

借り部屋に戻って二人でちびちびと酒を飲み始めたが、こいつはあまり強くはなかったと思う……殊酒に関しては顕著に俺より弱い。だからこそその酒だ。寝付きの悪い彼を、少しはゆっくり眠らせてやりたい。

「なあ、ユーカー……」

「何だよ」

「逃げてても良いんだぞ？」

どこにとか誰がとか。ツッコミどころはあつただろう。それでも彼は何も言わずに怪訝そうに俺を見る。

「……お前が逃げたいなら、逃げてても良いんだ。お前の王はもういない。これまで俺の我が儘にお前を付き合わせてしまっていた。お前には、アルドール様に仕えなければならぬ理由も義理もない」

そう、振り回していただけだ。お前の命の使い道も、俺の手の中にあると決めつけていた。そんなはず、なかったのに。

「お前が逃げねえのに俺が逃げられるかよ」

「そうじゃない。そうじゃないだろう？お前はそれでいいのか？」
「っていつかコートカードの俺がここ離れたら、たぶんこの国終わりだぜ？」

イグニス様はタイムリミットが迫っている。そうなればコートカードはユーカーだけ。そうなれば負担が増すのはユーカーだ。

「ああ、そうだな。だから俺が道化師ならお前からまず狙うな」
「……………そうだな」

何か心当たりでもあるのか、彼の顔に翳りが浮かぶ。既に危険な目に遭っていたのか。

「俺さ……………あいつに会った。アスタロットに」
「……………え」

「気をつけるよお前も……………道化師の奴には。あいつ、死霊使いみたいな技使いやがる」

告げられた名は彼の婚約者だった少女の名前。少女との面識はランスにも何度かはある。彼女を失ってからのユーカーの様子から、婚約を蹴ったものの……………大切な人だったということを理解した。あの頃のユーカーは本当に酷かった。

失った人にもう一度会えるという奇跡。道化師の見せる夢。そこから抜け出して来た彼は、現実に何を求めるのだろう。悪夢は此方の方だろうに。

(まったく……………俺なんかつて言いたいの余程俺の方だというのに)

嗚呼、俺なんか。お前が悪夢に戻ってきたのは、そこに残る俺を憂いてのことだろう。考えればすぐわかる。そこまでの価値が俺に

あるとは、俺としてはどうも思えないのだけれど。それだけのことをこいつにしてやれたようにも思えない。

気分的には飼慣らした犬に、ブーメランを放り投げているような感覚。取って来いとか言いながら面倒な仕事を任せられ、それを成し遂げたとしてもよしよしと頭を撫でられる程度の報酬。こいつの言うこともそんなに間違っていないのが何とも言えない気分だ。確かに俺は外道で鬼畜だ。

「アスタロットは俺に自由に生きろってさ。だから俺はここにいる。土産話が後悔ばかりつてのは嫌だしあいつにも愛想尽かされる」

人間ブーメラン犬改め俺の従弟は首輪で鎖に繋がれたまま、自由なんぞを語り始める。ちなみに説得力は皆無に等しい。

俺がそんなことを考えているとも知らず、綺麗な空の瞳は目覚めたことを後悔していないと言わんばかりに小さく笑う。彼はこれまでのような生ではなく、生き方に執着を始めたのだ。

何で生まれたとか、何のために生きているのかとか、そんな悩みを打ち棄てて。唯自分はどうしたいのか、それをたぐり寄せる。

「俺はあいつにもう一回会いたかった。だからカードになった。

……だけど俺は死んでも願いが叶うんだ。だからお前を殺すような馬鹿やるうなんて思えない」

彼は笑う、夜に似合わない明るい空色で。その目の中に雲一つ無い。迷いの色などあり得ない。

ある種の諦めの境地？それは死を見据える瞳だ。だけどそれは自暴自棄だった俺やお前のそれとも違う。人の限界、終わりを認め諦めている。永遠なんてあり得ない。それを知っている瞳だ。

その諦めを知り抗わない潔さ。その中に宿る生の色の何と美しいことか。

(……ユーカー、お前……)

自分の心その方向。何を思い悩み考えるのか。それを正しく理解して、歩く道をもうお前は見つけたのか。やっぱり俺はお前が羨ましい。俺は道こそ見出したとて、理由が未だに彷徨っている。心の在処も行方不明。なんとなく生きているのは俺の方。

「いいかランス、俺がここにいてやるのはアルドールの阿呆のためでもあのクソ神子のためでもねえ。俺のためだ」

そして、そう言い張る。そう言い切る。それでお前は良いのか？

「俺のためじゃなく？」

「自意識過剰じゃね？これだからイケメンはナルシーで困るってのはアルドールの妹の口癖らしいぜ？」

そうやって鼻で笑う。お前なんかどうでも良いと言っただけ、晴れ晴れと。

「お前を見てれば誰でもそう思いそうなものだが」

「見んな馬鹿。観察すんな呆け。俺は夏休みの朝顔とかになったつもりはねえぞ？」

「そうだな。お前の髪は向日葵っぽいな」

「論点そこじゃねえよ、向日葵に謝れ」

「お前じゃなくて？」

「ボケてやったんだよ。最近お前のツツコミの切れ味が下がってるからな。てめえは基本ボケとツツコミの両刀だろうが。何俺はボケ専門ですって顔してんだよ。腹立つ」

「なかなかそれっぽい言い訳だけど、今の絶対素で間違えてたよ

なお前は」

「何でそう思うんだよ」

「1、俺がそれを期待している。2、俺はドジっ子属性に弱い。

3、その方が面白いから」

「4、俺をからかって遊んでいるに来月の給料半分」

「流石だな。何故わかった？」

「わかって堪るかっ！っていうか何で当たってるんだよ！？そうだったら嫌だなつてのを敢えて言ってみたのに！！っってお前も何だよこの空気っ！俺せっかく真面目な話してたのにつ！！なんでそうやっていつもいつもいつもこっとう変な感じにするんだよ天然馬鹿っ！天然笑い探求馬鹿っ！」

「ああ、別に深い意味はない。唯の八つ当たりだから」

「八つ当たりかよ！？てか意味ねえのかよ！？ならやるなっ！！」

「些細なことだ。気にしないでくれ」

「気にするわ阿呆っ！！」

再会して違和感を感じたのは、たぶんこいつ自信の変化。

押しつけない。恩を売らない。自分がやりたくてやっているだけ。そのことでお前がどう思おうがどうでもいい。

迷惑だつて気にしない。文句を言われても止めない。嫌がらせのように押し売りのごとくお前を支え助けて守る。だから感謝だつて受け入れない。そんな言葉は言わせない。

墓の前でだつて泣かせて堪るか。これはそういう勝負なんだと彼は言っているようだ。命が燃え尽きる刹那まで、仕える人に馬鹿な奴だと最後の最期まで笑わせるのが道化の仕事。こいつは騎士だと騎士じゃない。主を恐れず敬わず……時に主さえ馬鹿にする、道化のような不思議な騎士。

でも俺もひねくれ者だから、そんな風にされたらその勝負、負けられない。俺は負けず嫌いだから、何が何でも泣いてやるさ。お前に笑わせられたりしない。ちゃんと悲しむ。悲しみたい。お前のこ

とでそう在るのが今の俺らしさの一つ。一つに過ぎなくても欠けてはならない大切な欠片の一つ。お前のことで悲しめなくなつたならそれはもはやたぶん俺ではない。

(お前が逃げてくれないなら、俺は見ている)

お前という人間がカードとして道具として使われて……目の前で傷付いて使い古されて殺される姿なんか見たくない。だから遠い何処かで死んで欲しいだなんて、これも俺の我が儘。お前はそう言っているんだ。

目をそらしたりはしない。最期までお前を見ている。先に倒れるのがどちらかはわからないけど。

それが礼儀だ。それが俺にしてやれる唯一のこと。お前にありがとうなんて届かないだろう？受け取って貰えないんだろう？悲しんでも聞いてはくれないんだろう？それなら俺はずっと見ている。

それでも最後に、俺はもう一度聞いてみる。この疑り深い性格には、ほとほと呆れてしまう。

「でも本当にいいのか？」

「何が？」

「俺はまだまだ未熟で至らない人間だ。それは俺の仕える人も俺以上にそんな感じだ。それはお前を困らせて、傷付けて、嫌な思いをさせることにもなる。お前は別にそんな思いになる必要はないんだから……」

「お前はともかく……アルドールか。そうだな、考えとく。それでも俺は借りは返すぜ。じゃないと俺の気が治まらねえ」

「あの女には借りがあるんだよ。それ返すまで面倒見てやるさ」

「ルクリースさんに、お前が？」

「出会い頭に跳び蹴りくらって、その後脳天延髄蹴り食らって吊

されたし、俺はあのクソ女に代わってアルドールの阿呆を二回もを助けてやったし、それで足捻ったし……恨みはまだまだ尽きないぜ。この恩を全部アルドールの馬鹿にきっちり三倍返して払って貰うまで仕方ねえからなあ、あいつの傍にいてやんよ」

恩返しをしると言いつつ、それは守つてやると言っている風にか聞こえない。それはそうとして、俺はこの従弟を弄るネタを一つ見つけた。こいつを弄ぶことはもはや俺の趣味というかライフワークというかそんな領域に来ている。どうしてそんなことになったのかは俺にも良くわからない。

「なるほど。そういう趣味だったのか」

「……？趣味ってなんだよ？」

「出会い頭にそんなことをされたルクリースさん相手に仄かに未練を持ったり、手酷い扱いしかしてこなかった俺なんかになんて懐いてくれるのかと思っただが……そうかそういうことだったのか」

「おいこら待て。なんか変な勘違い妄想してねえか？」

「思えばお前には昔から自虐やら自傷やらの癖があつたな」

「失礼だな！俺の何処がMだ！ええええ！？どつからどう見ても俺はSだろ！お前は人間磁石でSNだけだな！！」

「えー……？」

「その不服そうな声はなんだよ？」

「やっぱり俺の身内鼻屑目無しに見てもお前は絶対Mだと思う」

「つうか自分のよりそつちが不満なのかよっ！！」

別に本気で言っているわけではないが、言っている内にそんな気もしてきた。あ、何だ。俺悪くなかったんだ。そう思わせる酒の力はやはり凄い。

こいつは怒り上戸と泣き上戸が混ざっているのか、「俺はMじゃねえし」と半泣きで啜り泣いて拗ねていた。その内うとうとし出し

たようなので、俺はユーカーの部屋を退散することにした。

気分はそんなに悪くない。適量の酒を飲むに留めた。それでも足下はおぼつかない。それはきつと、酒だけの所為ではなく……あいつの言うよう俺にも疲れが貯まっているのだろう。

「たまには忠告にも、耳を傾けてみるか」

神子に言われたように、従弟に言われたように。自分に充てられた部屋まで辿り着けば、とてつもない睡魔が襲ってくる。それに抗つても明日きちんと働けるのか解らない。

いつものように、一介の騎士として、最低の部屋を用意されているのではない。今回は、新たな王の使い。用意された客室は上等で、部屋に飾られた花の香りは素晴らしいし、寝具の清潔な匂いと寝台の柔らかさと言ったらもう……それに抗うなんて馬鹿らしくて、馬鹿らしくて……それ以外の感想を抱けないままに、泥のように眠りに就いた。

*

願い事が叶うのなら。カードとしての運命を受け入れるなら、チャンスが与えられるという。禍々しいような輝きの恐るべき星の降り注ぐ夜、俺は夢に魘された。

あの頃は噂に惑わされながら、北に北に馬を奔らせていた。

北部出身の俺が南部に。南部出身のユーカーが北部に。故郷と別の場所に向かわせられたのは指揮の関係上という事だったが、家との確執を知る王が、それを気にせず力を奮えるようにと考えてのことだったのかもしれない。久々に会った伯父さんは、以前より年老いていたが……俺には相変わらず甘かった。兵達の連携も悪くはなかった。だから南端から攻めてきたタロツク軍を追い払うことに成功もした。

それでも胸騒ぎは止まらない。北へ戻れば戻るほど、悪い噂が聞こえてくる。

俺が願ったのは“カーネフェル王の無事”。そうだ、その願いは叶えられた。でも、そのカーネフェル王はあの人じゃない。俺はあの人死んだなんて信じられなかった。だから、あの人を蘇らせるなんて事……願いたくもなかったんだ。認めたくない一身で、俺は都を目指していた。

ユーカーとの再会は、絶望と希望。

カーネフェルはまだ終わらない。あの人願いを俺は守れるチャンスを与えられた。それは紛れもなく希望。それでも俺はまだ償いから逃げることは出来ないのだ。まだ死んで楽になんてさせてもらえない。この命の最後まで磨り潰されるまで、最後の血の一滴まで償いのために生きると言われるが如き絶望。

それは仕方ない。そうも思った。

俺がそれを知ったのは、王に仕えるようになってしばらく。それまで俺は何も知らずに脳天気罪深く年月を貪っていた。

城に出入りするようになって、時折聞こえてくる噂話。都貴族達のひそひそ声。それは俺や俺の従弟を貶めるための根も葉もない噂なのだと思っていた。

だけどある時、それが本当だったのだと俺は知った。目の前が真っ暗になり、上手く息も出来なくなる。がくがくと身体が震えた。苦しくて堪らない。

だけど従弟は強かった。いつも平然と毅然として。何を言われてもその三倍は言い返し、相手を打ち負かしていた。

でも俺はそんな風にはなれなくて、言い返せずに口ごもった。だってそれが本当なんだって俺はもう知ってしまった。彼だって俺の方は唯の噂なのだと思うている。自分が傍にいる所為で嘲笑の的に加えられて風評被害に合っているだけなのだ信じ、俺のこともよく庇ってくれた。

庇われれば庇われるほど、俺にはそんな価値がないと思ってしま
う。同じ志で王に仕えられるはずもない。彼の父親も確かに最低だ
けど、王に対する忠誠心は本物だ。だけど俺の方はそうじゃない。
どんな顔をしてこれからあの人に仕えればいいのか、どうつ
むいてばかりになった。そんな俺を心配してくれる、従弟にも何も
話せない。

彼のそれも誇れるものではないけれど、俺の生い立ちはもっと羨
めるものじゃない。

俺の目の青。その色の深さは俺の血が許されないことだから。昔
の俺は俺のことを何も知らずに生きていて、だから平然とあんなこ
とを口に出来たんだ。あいつのことを本当の弟みたいに思っていた。
面倒くさがりで手のかかるところまで目に入れても痛くなかつたく
らい。出来るのにしない。手を煩わせるその行為は家族からも放置
されていた俺のことを、確かに必要してくれていた。そう言われて
いるようで嬉しかったんだ。

でも俺は知ってしまった。俺はお前とは違う。どんな顔をして領
地に戻ればいいのか。どんなつもりでこの名を名乗ればいいのか。
胸を張って家名を掲げることが出来ない。俺なんかがどうしてお前
の兄貴面をしていられるのだろう。

お前はその目のために自分を追い詰めたけれど、もっと本質的な
過ちは俺の方だ。俺は本来あつてはならない。そもそも俺がいなけ
れば、お前がそんな風に生まれることはなかったかもしれない。そ
れくらい、俺の罪は重い。

ここでこうして何食わぬ顔で生きて息をしていることの罪深さ。
それをどう打ち明ければいいのか。お前にだつて話せない。

このままじゃ俺も母さんみたいになつてしまふ。湖が俺を呼んで
いる。でも、その前に言わなければならぬことがあった。父が王
に謝らないというのなら、俺が謝る。父が償わないというのなら俺
が償つ。

生まれてきてごめんなさい。泣きながらそう告げた俺をあの人は、お前のせいじゃないと小さく笑った。俺は信じられなかった。俺なんかを許すその人の……広すぎる心に胸を打たれた。

彼女の心変わりを招いたのは自分が至らず不甲斐ないから。それは彼も彼女も悪くない。ましてやお前が悪いはずもない。悪いのは全部私だよ……王は少し寂しそうにそうつぶやいた。

俺はそんな、あの人の懐のでかさに惹かれたんだ。これが王の器かと、彼を見上げて呆気にとられた。そして俺は騎士として生きることを決めたんだ。騎士の家の子だから騎士になるんじゃない。この人に仕えたいから騎士になる。俺はそんな器を持たない。俺では王にはなれないから。だから俺は騎士になってこの人を支えたいと思ったのだ。

そんな大きすぎる人を失うことは、世界が逆さまになるような衝撃。地が落ちる。空へと落ちる。俺ももう立つてはいられない。もうお終いだ。終末だ。もう笑うしかない、狂い出しそうな俺を、つなぎ止める者がまだあった。それが希望と絶望、そしてその運び手。そんないかれた世界にもまだ、変わらない者がある。前進している。成長している。それでも本質はなんら変わらない。そんな彼が変わらなさは、ある種の永遠だ。天地が何度入れ替わっても彼はそのままなんだろう。それは指標だ。俺の心の。北を南を東を西を、俺に教えてくれる光。その温かさを慈しむ気持ちを思い出させてくれたのは、希望と絶望という名の王だ。その凱旋の名はまだ未定。彼が潜る凱旋の門が天か地獄かはわからない。このままついて行っているのかという不安もある。それでも俺はあの少年に、かの人の面影を見た。許し慈しむ、あの人の優しさを信じたい。その強さが変えられるものがきつとあるのだと信じている。あの優しい人ならば、一枚を除いて全てが死に絶えるまで続くという悪魔のゲーム、神の審判。それを覆してくれるのではないか？

あの人はユーカーをあんな目に変えたんだ。俺では片目を外させるのが精一杯だったのに。それはなんだか悔しいけれど、凄いなと

も思う。感嘆もする。

あの人は、俺も変えてくれるのだろうか？迷わずに生きられるように、そんな揺るぎなきものを……心に宿せるようにと。

でもあの人はまだまだ成長過程。しっかり支えて守ってやらなければ。彼は与えられる者にはならない。彼が立派な王になれるかは、彼自身だけではなく周りの人間達にも関わってくることなのだから。夜が明けたら、眠りが覚めたら、気を引き締めていかなければ。そう眠りの淵で言い聞かせる自分の脳裏に蘇るのは、自分のそれによく似た声。

(俺が、道化師なら。俺が狙うなら……まずはお前から)

そう言ったのは確か自分だ。

「……っ!!」

暗い室内。飛び起きる。カーテンを開ければ、もうすぐ明け方と
いった時間帯。

何時間かは眠っていた。それでもあの言葉が蘇る。足は勝手に扉
の外へ。足音を忍ばせる余裕もなく、向かう先は飲み明かした人の
部屋。

鍵は掛かっている。あの寝ぼけた従弟が自分でかけたのだろうか
？かけるとは言ったが聞こえていたのか？それとも誰かが入って締
めた？

(くそっ……)

どうして俺はちゃんと施錠の音を聞かなかった？こいつは最初に
狙われる。道化師にも目を付けられているという話だった。一人に
してはいけなかったのに！

それでも冷静な部分の頭は、もし唯寝ているだけだったらどうするんだと騒ぎ出す。せつかく熟睡しているところを邪魔したら最悪だよと。しかしそんな声は聞こえない。もしそうだったら俺も安心できる！それでいいじゃないか。ここで確かめなくて引き下がるよりは余程良い。」

俺と出会う前の従弟は、もう少しばかり聞き分けがなかったように、大人しく病人なんか演じる子ではなかったそうだ。その時に身につけたという特技。使う機会なんかあるものかと聞き流したが、一応記憶の端には留めていた鍵開け術。それを従弟よりは時間を掛けて、それでも出来うる限り素早くこなし、扉を開く。

床にもテーブルにもいない。ベッドにもいない。ソファーにもいない。

焦って混乱しそうになるが、クローゼット、机の下……ベッドの下一つ一つしっかり確認。血なまぐさい臭いはしない。ここで事件は起きていない。そう自分に言い聞かせた。

「……あれ？」

やがて気付く違和感。ベッドにはいない。そう思ったがいた。夏だというのにしっかりと頭から布団を被って丸まっているらしき膨らみ。

南部の下の方育ちの彼には、南部最北端の夜は夏といえども寒いのかも知れない。北部のアロンダイト領に来たときは、よく夏でも長袖だったのを思い出す。

それを恐る恐る捲れば、彼の何と馬鹿そうな顔。どんな夢を見ているのか。へらへらと笑っている。馬鹿みたい“に”可愛くはないが、馬鹿みたい“で”可愛いが、馬鹿“だからこそ”可愛いが、それが少しばかり憎らしくて、その頬でも抓ってやるうかと思う。こっちの気も知らないで。酔っていて判断能力の鈍った自分のことは

棚に置いておく辺り、酷い発言なのは自覚している。それでもどうせ聞こえていないんだし別にいいんじゃないか？

「まったく……人に心配ばかりかけるなよ」

そう呟いて、ああそうか。俺は心配していたのかと遅れて知った。いやでもそれは普通だ。普通に心配くらいするだろう。だってこいつは俺の大事な弟みたいなもので、同僚でそれで友人だ。その心配をしない方が非常識だ。俺はこれまでその非常識に傾いてしまっていた。

だからそんな普通のことか当たり前のよう感じられる。今に少しだけ感謝を覚えたが、その感謝の相手が神などではないことだけは確かだった。

世話を焼くのは割りときだ。分かり易く、力になれている気がするし、とても簡単に必要とされているような錯覚に陥る。それが迷惑なんだって言われたなら、何も出来ないししないだろう。それでも本当に嫌ならこいつは年甲斐もなく本当にマジ泣きするか、或いはぶん殴つても止めさせる。もしくは全速力で逃げるかだ。

前にとあることを頼んだら、本当に泣かれて困った。その翌年は流石に殴られた。その次の年から逃げられた。

それはそれとして、面倒臭がりのこいつは誰かが世話をしてやらなきゃいけないし、こいつはこいつで構われるのが好きみたいだし、世の中バランスつてもものはそれなりに取れているのかとも思う。むしろ構われないがためにこいつは何もしないんじゃないかと時々疑うほどだ。

それでも心配はする側より、される側の方が幸せだという。そんなものが幸福の定義なら、俺たちも少しは報われているのかもしれない。父や母が心配なんかしてくれなくても。もう出来なくても。それでも、まだ……心配出来る、心配してくれる相手はいる。

「イグニス様はそう言いたかったのかな……」

自分を心配してくれる人がいることは、十分幸せなこと。幸せとはそんな、本当につまらない……些細でどうでもいいような、そんな小さな事なんだって。

そろそろ0章軸の話終わりにしたい。でも0、なんとかかやつち
やったからこれ9までやらなきゃならんのか？馬鹿ですネこの人…
…。いきなり次から1とか振っちゃ駄目ですかね…。駄目ですネ。

はじめまして。彼はそう言って、私に手を差し伸べた。けれど幼い私はその手を振り払い、彼に冷たい言葉を浴びせた。

「あんたなんか、私のお兄ちゃんじゃない」

*

(暖かい……)

それは私の見ている夢だろうか。フロアリップは今日にしているものが信じられない。

すぐ傍にアルドールが居る。一緒に旅をしたけれど、こんなに側に寄ったのは数える程しかなかった。彼を私が殺そうとした時に一度抱き締めただけ。そうあの時だけ、私が愛しい人に近づけたのは、でもその人は本当に脳天気な顔で寝ているから、そんなことなかったんじゃないかとさえ思う。辺りを見回すと、部屋はまだ薄暗い。私は見知らぬ場所にいる。ここは何処だろう。トリオンフィの屋敷だろうか。それでも違う。私の部屋はこんなのではない。でもそうならば、どんなに良いか。全部嘘。そう全部嘘。

この部屋を抜けければ父様母様姉様が居る。私の隣で爆睡しているアルドールを見て、あのメイド女が大騒ぎをする。姉様も少し機嫌を悪くする。それでもこれは私の特権。妹の特権だ。女として見られていないからこそ、こうやって誰よりも近くにいられる、守って貰える。そう、傍にはいられないけど。

今見つめ返せば、何処か虚しい。私は何がしたかったのか。私が欲しかったのは、何だったんだらうか。アルドールは私に付きつきりて看病してくれたのだらう。それは私の望んだ気持ちではないか

も知れないが、私が大切に思われていることには変わりない。

「ルクリース……………」

あんな女。最初は嫌いだった。気に入らないところばかり、それなのに……………それなのに。私は彼女を死なせた時、とても大きな後悔を知る。もう帰らないのだと知れば、途端に慕わしさが募る。その思いは恋のように突然燃え上がったりはしない。それでも一瞬で冷めて消えることもない炎。じりじりと私の身を内から焦がしていく。私は彼女に恋こそはしないが、私は彼女を愛している。だからこんなに後悔をしている。もしこの場で首を吊れば、腸を引き摺りだしたなら。それで奇跡が起こるのなら、彼女生き返るのなら、私はその苦痛を受け入れる。でもそんなことはあり得ないと定められている。

「……………なあ、アルドール」

小さな震える声を、絞り出して縋ってみるけれど……………泥のように眠る兄には、何も聞こえてはいないようだ。或いは彼にもわからないのか。だから何も言わないのか？

「償う相手を失った、私は誰に……………何をどう償えばいいのだろう？」

償いとは本来、傷付けた相手に行くもの。復讐とは本来、傷付けられた相手が行うもの。

だけど私が傷付けた人は、私を許して死んだ。その復讐を望んでも、彼女が私を殺す日は来ない。もう終わってしまったことだ。

それと同様。私の償いは、宙に浮いている。何も出来ないままに、唯罪だけが残されるのだ。

夜風に誘われるよう、見知らぬ部屋の窓を見る。星々が散りばめられた空に、船で見た景色を思い出す。私は半ば上の空で、彼女の話聞いていた。アルドールのことばかり私は考えていたから。もう彼女は私に何も教えてはくれないのだ。

「私は馬鹿だ……私は馬鹿だ」

今ならまだ間に合う。今なら、まだ。

これで終わりにしよう。彼の中では始まりもしていない思いでも、私の一方的な思いでも。

アルドールは優しいから。私を好きになんかなれなくても、なるための努力はしてくれるだろう。

それがどんな意味の好きだとしても、失えば辛いのだ。その好きが大きくなれば、なるほど……なくした時に辛くなる。

(それなら……)

私に出来ること。最後に出来ること。それは……それは……、これ以上彼に近づかずこれ以上親しくなる前に、私が消えることなんだ。それがアルドールにしてあげられる唯一のこと。この優しいお兄ちゃんが、これ以上傷つかないように……早急に、迅速に私を失わせてあげること。

私の幸福値はもう尽きかけて。常に誰かが傍にいてくれなければ、ならない。それは彼にとつてとても負担だし、ずっと続けられることではない。

でも幸福値は減り続ける。生きていること、それは幸運。呼吸をするように幸せは減っていく。だからまもなく私は不幸に見舞われ死んでしまう。この手を放したなら何分後？何時間？それでも私はこの手をもう放すべきなのだ。これは私の物じゃない。この国の物なのだ。

「アルドールは私の、お兄ちゃん……なんかじゃない」

そんな枠に留まっただけではいけないと世界が言う。私のお兄ちゃんには王様になる人だから、みんなのもので私のものじゃない。そんな風には生きられない。欲しがってはいけなかったのだ。

だから手を放そうとする。けどどしつかりと握られていて、力では敵わない。私はその手から抜け出せない。

そんなことを続ける内に、また急速な眠気と目眩。

今私が目覚めたのは、脳への負担を一時的にアルドールが治してくれたのだろうか。でもアルドールは零の数術使い。それをなかったことには出来ない。

チャンスがあるとするとするなら……この手が離れたその瞬間。私は瀕死の身体に鞭打つてでも、そこで自力で目覚めなければならぬ。残り僅かなの力と幸せを、振り絞って……意識が途絶える直前に、私は私の脳を癒す。

*

「アルドール、フローリップさんが心配？」

視線が俯きがちになった俺に、イグニスが声を掛けてくる。

「え……？」

「僕の部下に見張りを任せておいたから大丈夫だよ。すぐに何かが起こったりはしない」

今は即位式に集中しようと、叱られている。久々にイグニスに会えたのに、心配なんかさせられない。俺はいつも通りを装って、笑顔を作って笑う。

「そつだよな、ありがとう」

「……………」

そんな俺の虚勢を見透かすような冷たい目で、イグニスが見る。

「これから、忙しくなるんだ。感傷に囚われるなどは言わないけど、君は王なんだ。それを……それだけは心に留めておいて欲しい」
「ああ、わかってる」

俺が深く頷くと、イグニスはそこで話を終わらせる。

「それじゃあ行こうかアルドル？ 群衆と歴史が君を待っているよ」

バルコニーから見える景色には、沢山の人、人、人。王を待ち望む人の声。それに自分は応えられるのだろうか。

途端に生じる不安に、アルドルの足は竦んだ。

「痛っ！」

「アルドルの癖に何一丁前に緊張してるの？ 何様？」

それを見かねたらしいイグニスに、足を思いきり踏んづけられた。

「この僕に恥かかせたら承知しないから」

「よ、余計緊張するんだけど！」

「いいかいアルドル？ この誰も別に君には期待してない。期待してるのは王に対してだよ。だけど僕は君に期待してる。僕だけが君を期待している。そんな僕の期待を裏切ったら絶交物だからね」

真正面から顔を覗き込まれる。よく見ると睫が長い。本当に綺麗な目だ。作り物みたいに彼は……彼女は綺麗だ。

あれから何も聞いていない。イグニスは何者なんだろう？昔から彼は彼女だったのか？それとも……彼は彼女のなのか？

（いや……イグニスは、イグニスだ）

今まで俺が友達付き合いしてきたのはこの目の前のイグニスだ。喧嘩をして仲直りして……そうやって俺を支えてきてくれたのはイグニスだ。それは彼女が彼女であっても揺るがない。揺るがせてはならないものだ。

本当に大切な友達だ。彼が彼女だったと認識しただけで、いきなりそれが崩れてしまう程度の友情だったのか？

ギメルにそっくりの顔で覗き込まれて、心臓の高鳴りが緊張以外の意味を孕む。だけど、それはあってはならない。これは緊張なんだと言いつける。それでも少しだけさっきより、緊張は和らいでいる。当たり前だ。その質が別物にすり替えられたのだから。

「ああ、頑張る。俺はイグニスを裏切りたくはないから」

「よし、言ったね。それじゃあ精々頑張つて。その頑張ってものがどの程度か見せてもらおうじゃないか」

すぐ傍で見ているとあげると言われて、安心する心がある。何があってもきつと大丈夫だと思える。イグニスが傍にいてくれたら、きつとなんとかなる。俺は、それだけで大丈夫。

イグニスは間違わない。彼女の言うとおり、そのままの道を進めば……きつと俺は何も間違わない。これ以上……もう何も。

カーテンの隙間から、差し込む朝日に無理矢理眠りの底から意識が浮上させられる。

眩しいのはあまり好きじゃない。普段隠してる分、特に右目は光に弱い。しかし光以上に不快なのはズキズキと痛む頭痛だ。

「頭痛え……」

ユーカーは、小さく呻く。やっぱり酒は苦手だ。何で酒なんか飲んだんだっけ？この怠さは間違はなく酒だ。しかし寝起きの頭ではまだはつきりと思い出せない。

それでも身支度を調えなければ。そうすりゃ嫌でも気が引き締まる。眠気も少しはマシになるだろう。

「……って俺の眼帯がねえっ!!」

やべえ。何処かに落としてきたのか？あれがないと、あれがないと、この部屋からも出られやしねえのに。っていうかもう何が何なんだか。何もかもが面倒臭い。怠い眠い二度寝してえ。そもそも何で気い引き締めねえといけねえんだっけ？その理由も分からなくなる。眠い。眠い。唯眠い。

再び寝台に倒れ込んだ俺の耳に、届くのは誰かの声。聞き慣れた男の声。

「お早うユーカー！」

朝っぱらから聞きたくない奴の声だ。そりゃ爽やかオーラ纏ったお前なら朝日とかの下にも絵になるだろうさ。しかしこれから二度

寝をしようとしている俺の前にそんな爽やか物質が現れてももはや公害だ。せつかく怠惰に傾いたこの部屋の空気が汚染される。

「ぐっないぼんぬいぼおなのつて。つうわけで俺は寝るから」

もぞもぞと毛布にくるまれば天国だ。この至福の一時を邪魔する奴は相手が誰であつても許さない。そう、この日の出と共に床に就く気分は最高だ。これから愚民共がせかせかと働き出すというのを見下ろして、俺は颯爽と昼寝に勤しむわけだ。堪んねえ。

「こら、今日が何の日か忘れたのか？」

くるまつてる布団ごと、床に引き摺り下ろされた。強かに腰と頭を殴打した。頭痛はよりいっそう痛みを増した。

「なにしやがんだよあ……らんすのばかやろうが」

「ほら、水持ってきたから飲め。少しはすつきりするだろう？」

手渡された容器の水はよく冷えていた。確かに次第に頭もはつきりしてきたようにも思える。

「つか何でお前がここにいるんだ？」

確かこいつには別の部屋が割り当てられていたはずだ。それ以前に俺は鍵を掛けて寝たはずだ。しかしこの男は、にこりと人の良い笑顔で笑い、それに似合わぬ言葉を紡ぐ。

「ああ、気にするな。唯の不法侵入だよ」

「ああ、なんだ。……つてさらつと何言つてやがるんだ!!」

俺が遅れて突っ込めば、ランスが真面目な顔になる。何だっ
て言うんだ。

「どうにもお前が気になって眠れなかったんだ」

「は……？」

その一言に様々な推測が頭の中を駆けめぐる。意味が分からないなりに、脳内検索で弾かれたのは、昨日こいつと話したことだ。

（もしかしてこいつ……道化師に狙われるのが俺だと思って心配してくれたのか？）

そんな風に誰かに心配されること何て、久しくというか殆ど無かったことだから……嬉しいようなこぼれのような、そんな気持ち
が浮かんでくる。この時の動揺のおかげで、眠気など何処かへ飛んでしまった。

お礼を言うべきだろうか？ いや、こいつなんかそんなこと言うなんて俺のプライドが許さねえ。大体俺の方が強いカードなんだ。それなのに心配だなんて俺を馬鹿にする行為じゃないか。

だから不満は覚える。それでもこいつが俺にアクションを返してくれることなど滅多にない。それは純粋に嬉しいのだ。なんたって俺はこいつの墓に手を合わせる図を想像できず、俺の墓にそうされることしか思い描けない。その時にこいつは泣きもしないとそう簡単にイメージできる。こいつはそれくらい俺なんか、基本的にどうでも良い人間だ。そうなんじゃないかと、思っていた。

（……………でも）

段々と思い出す。酒を飲みながら交わした会話。あいつは、逃げても良いと口にしてた。俺に意見を押しつけずに、何かを迫るこ

ともしない。そんなあいつを見るのは初めてだった。俺の意思をあいつから、聞いてくれたのは気に掛けてくれたのは……本当に滅多にないこと。でもあれは夢じゃなかったのか。それともこれも夢なのだろうか。だって今もこいつは俺の身を案じてくれている。何て言い返せばいいのかわからずに視線を上げれば、心配していると言ふより、少し怒っているというか呆れているか、従兄はそんな顔になっていた。

「お前のことだ。やはりと思って来てみれば、この一週間で洗濯物を貯め込んで！クローゼットの中のシャツも上着も皺だらけだし我慢ならないというわけで、クローゼットの中身は洗濯に出させて貰った」

「……………はあ！？」

俺のモノローグを返せ。ちょっと感動とか感謝してた俺の純真さに謝れ。

ユーカーがクローゼットへと走ると、そこは蛻の殻。このままなら人1人くらい隠れられそうな十分すぎるスペース。昨日掛けておいたはずの着替えがそこにはない。

「お前は、何てことをっ！！俺に何着ろっつてんだ馬鹿！！今着てる服しかねえじゃねえか！！」

「今日は天気も良いしな。その内乾くだろう」

「そういう問題じゃねえよ！もうすぐ敵攻めて来るんだぜ！？洗濯物なんか暢気に取り込んでる暇あるかっ！！」

「問題ない。大体あれは冬服じゃないか。久々に城に着たら、夏服が支給されていたぞ？はい、これお前の分」

「くそっ……………八月に入ってからって軽く嫌がらせじゃねえ？衣替えて六月とかだろ。もつと早くに寄越せよって話」

「まあ、俺達はその頃から遠征に行っていたわけだから仕方ない

だろ」

「そりゃそうだけだよ。つうか俺暑いのか嫌いなんだよ」

南部出身とはいえ、元々幼少時代は引き籠もり生活していたわけだ。長時間の日光には慣れない。たぶんこの夏の炎天下の中荒野越え有りの南部遠征に行ったら俺は倒れていただろう。溜息を吐けば相方が、椅子の上に着替えを降ろした。

「それなら夏服に文句はないだろ？」

「ある。日焼けする。それから擦り傷切り傷増える。つか夏服って癖に全然涼しげな色じゃねえのがもうほんと嫌がらせだよな」

しぶしぶ着替えを手にとって、俺はあることを思い出す。

「そういや俺の眼帯とりボンまで持って行ったのもお前か？」

「ああ。あれはすぐに乾いたぞ？アイロンも掛けておいたから」

「お前、ほんと何処のおかんだよ。お前もう騎士止めて家政夫もやれば？」

手渡されたそれをセットするため鏡の前に移動する俺の、背後とそれから鏡の中でランスが不満そうな顔を浮かべた。

「頭の結び目曲がってるぞ、直してやるからちよつとそつち向いて」

「曲がってるのがいいんだよ」

「またそう言っって上手く結べないのを棚に上げてわけのわからない言い訳を……」

「ていつか曲がってるのが好きなんだよ俺は。好きって言うかもはや愛してる」

「はいはい、わかったから貸してみる」

そのお節介焼きの行動に半ば呆れて俺は半眼になる。俺の頭の後ろで陽気な鼻歌が聞こえて来る。こいつはやっぱり矛盾している。基本どうでも良い癖に、暇さえあればこうして構いたがる。こいつは俺をペットか何かと勘違いしてる節がある。基本的には優しいが、人権はあんまりない。

(あー、でも……そんなもんかもな)

言い得て妙だ。死ねばそれなりには悲しいけど、すぐに代わりは見つかる。こいつがあんなに慕ったカーネフェル王でさえ、今は代わりがいる。それならそれには及ばない俺なんかもつとどうでもいいし、いくらでも代わりは見つかるだろう。友情とか、そういうものでも好きになった方が負けなんだろう。俺は何一つだってこいつに勝てるものはない。

(逃げても、いい……か)

それもそういうことだ。

俺はお前を見捨てられないから、ここから逃げられない。だけとお前はそうじゃない。だからそんなことが言えるんだ。俺の意思を尊重とか、そう思ったのは勘違いだった。

別にお前じゃなくても使える駒はいる。サボリ癖のある俺よりもつと剣が強い奴はいる。俺が必要とされているのは、俺がジャックでコートカードだからに過ぎない。

アスタロットはこんな俺を笑うだろうか？ 愚かだと。こんな愚かな俺まで彼女は許してくれるだろうか？

自由に生きてと言われた俺が、この様だ。自由に生きているはずなのに、俺は今もとても不自由だ。こいつを見捨てられれば、きつともつと自由になれるんだろう。しがらみも過去も捨てられる。願

いも叶えられる。

(……………だけど)

長く一緒にいすぎたんだ。だからしがらみと切り捨てることが出来ない。そう簡単に見捨てられるような相手ではない。

俺じゃ王になれない。守られはせず、使い捨てられる。俺はそういうカード。

下位カードは国にとっては必要ない人間だ。現にそうだ。ルクリースが死んでもこの国は、この世界は変わらずそこにある。

だけど上位カードはそうじゃない。死ぬべき人間じゃない。アルドールの阿呆はどうだか知らないが少なくともランスはカーネフェルになくってはならない。下位カードの幸運と命を犠牲に捧げてでも、守らなければならぬカード。

こいつは自分自身の命をどれだけ軽く見ているかは知らないが、エースカードのアルドールのためなら他のカードの犠牲を受け入れるだろう。俺がここから逃げない限り、こいつはその中に俺を組み込む。そうせざるを得ない。その時こいつは俺を助けてはくれないのだ。それまで俺が何度こいつを助けたとしても、こいつは俺を助けない。見返りなど無い。思いを捧げても、報われるとは限らないのがこの世界の在り方だ。心は目には見えない。だから金ほど分かり易く、何も表せはしない。

こいつが俺をその内、見捨てるんだとは知っていても……………それでも見捨てられないのが、俺の抱える弱さなのだろう。

椅子に座らされながら鏡中を見上げると、きつちりと整えられたリボンを見て満足そうに笑う従兄がいて……………その姿に馬鹿みてえと俺も笑うしかなかった。

*

「あいつがへまやんねえように、ちょっと渴でも入れてくるか」

着替えを終えた頃ようやく目も冷めたのか、何だかんだで面倒見の良い従弟はそんな事を言い出した。別にそれを断る理由もなかったため、ランスもそれに同意する。

昨日は俺も疲れていたのだろう。だからあの方を心配するこいつが気に入らなかった。でも落ち着いてみれば、浮かんでくるのは別の心だ。

「……………？何笑ってたよ」

「いや、何でもない」

「あつそ」

「……………くっ……………」

「何笑い堪えてんだよてめえ！明らかに今日え逸らしたろ！何かやましいことでもあるんだな！！」

「いや、親切なユーカーなんて面白い物を見たら流石に俺の笑いのツボが……………くくく」

「お前って時々っていうかいつも俺に対してほんと失礼だよな」

不機嫌そうに先を急ぐユーカーに、やってしまったなとランスは思う。

唯単に微笑ましいと思ったただけなのだが、そう告げて馬鹿にしてるのだと勘違いされても困る。それを誤魔化してみたが、結局怒らせてしまった。

「ユーカー……………」

彼の後を追いつ、フォローでもしよう。そう思ったが、追いつけばユーカーは何者かといがみ合っている。

「は？何言つてんだてめえら」
「だから申し上げたとおりだ」

アルドール様の部屋に続く、その階段の前には数人の兵が居る。それはユーカーを通さないように道をふさいでいた。

「これは一体？」

「ああ、アロンドイト卿。丁度いいところに」

兵の1人が一礼した後、ユーカーを一瞥する。

「セレストイン卿に言つて聞かせてくださいませんか？どうぞここはお引き取り下さいと」

「何で俺が雑兵風情の言つこと聞かなきゃならねえんだよ」

「……ユーカー」

視線で、堪えろと訴える。それに彼は不服そうな顔になり、それでも言葉を呑み込んだ。言いたいことは解る。それでもここは都だ。ここでは俺たち地方出身の騎士の身分は限りなく低い。中には一般兵以下に数えている輩もいるだろう。

「それで彼は引き下がらせるとして、私も通行不可と言つことですか？」

「はい。誰も通すなどのご命令で」

「つざけんな！誰の命令だつて！？どうせあいつの命令なんかじゃねえんだろ？」

吠える従弟の肩を押さえて落ち着けと告げるが、気持ちは俺も同じだった。

(……厄介な)

新しいカーネフェル王をここまで守り連れてきたのはユーカーだ。昨日までこいつが見張りをしていたのは、アルドール様が心配だったから……それだけではなかったのだ。

こいつは都で頼れる相手がまずいない。それは俺も似たようなものだが、ユーカーほどではない。あの人に目を掛けて貰っていた分、やっかみを買うのは仕方ないとして、こんな緊急事態までそれを続ける者がいるとは呆れてしまう。イグニス様の言うとおり、一度都を明け渡す荒療治も必要なかもしれない。

あいつは他の奴に見張りを頼んでも、おそらく誰も引き受けない。そういう風に言われている。それでアルドール様に何かあれば、全てはユーカーの責任となる。

だというのに即位となれば、こうして邪魔をする。昨日までは唯の少年である彼も、即位する今日からカーネフェル王。先代に引き続き、今代の王にも俺たちが親密になるのが気に入らないと考えている奴が居るのだ。

「何の騒ぎですか？」

「イグニス様」

涼やかな声に振り返れば、幼い混血の神子が居る。彼は俺たちと同じく王に会うためにここにやって来たのだろう。式典でカーネフェル王を即位させるのは彼の仕事だ。王とは事前に話すことが幾らもあるだろう。

イグニス様は微笑んでいる。でも目が笑っていない。この状況が何を意味するのかを察して、苛立っているようにも見えない。

「その方々、邪魔です。消えていただけませんか？」

「み、神子様！？失礼いたしました！！」

シャトランジアの権力者である彼には一介の兵は逆らえない。カーネフェルがどうなるかは、この神子の匙加減に掛かっている。彼が支援を打ち切れれば、この国が終わってしまうという危機感、流石にこの兵達も持つてはいるようだった。

波を裂くように、さっさと彼は階段を上る。そして再び戻ろうとした人波相手を一睨み。

「僕は人払いをお願いしたはずですが？」

有無を言わせぬその迫力に、兵達は逃げ帰るよう走り去る。命令をもらった相手の元へ帰るのだろう、不測の事態の対処に困り。

「まったく……この状況に及んでまだ派閥争いとは救えませぬね」

「返す言葉もありません」

「今騒ぎを起こしてまた厄介事が増えるのは面倒ですから、今日のところは僕に任せてください」

派閥なんてまもなく何もかも壊して差し上げますよと神子にはこりと笑う。

その笑顔に何やら思うことでもあったのか、ユーカーはそのままイグニス様と階段に背を向ける。

「……んじゃ、任せませ」

「ユーカー？」

会っていかないのかと問いかければ、いいんだと彼は言う。

「今はあの神子があいつにとって何よりだろ」

その言葉に、俺は納得をする。

(……そうだ)

今行つて何が出来る？何が言える？あんな状態のあなたの方に。多分何を言つても届かない。今あの方が、傍にいて欲しいのは俺じゃない。そしてそれはユーカーでもないのだ。

傷ついたアルドル様を、誰よりも深く理解しているのも、それを今一番支えることが出来るのも、それはイグニス様だけだ。

水を差す趣味はねえよと引き下がるユーカーの言葉に、俺も頷き頭を下げてイグニス様を見送った。

やがて即位式が始まつて、それを限りなく遠くから俺たちは見せられていた。王ではなく会場の警備なんかを王宮騎士にさせるのだから、侮辱も良いところだ。だからユーカーの言うことももつとものだ。それは俺の心の代弁でもある。

「つたく……つまんねえ仕事させやがって」

「ユーカー」

それでもそれを宥めなければならぬのが悲しい俺の性だろう。

「大体見たかよ？あの都貴族共。あいつを利用してやろつて顔してやがったぜ……？」

その言葉から感じる静かな怒り。彼も怒っているのだ。守れなかった自分たちと、王を生け贄に捧げたこの都の人間達を。権力を奪われた哀れな王の末路を、一番傍で見て見届けたのはユーカーだ。その言葉からはもう二度と、同じことは繰り返させない……そんな強い決意が漂う。

(もしかしたら……)

こいつは俺なんかいなくても、アルドール様に仕えてくれたのかもしれない。むしろ俺がそのための弊害になっている。その可能性に気がついた。

(……………それでも、俺は)

イグニス様は俺に欲がないと言ったがそれは誤り。欲ならある。王に信頼されたい。でも長らく所有してきたこいつが王に奪われるのは気に入らない。そしてこいつが俺より王に信頼されるのは嫌だ。騎士としての俺と、俺としての俺の対立。

こいつに立派になって貰いたいと成長を見守る心と、必要とされたいからずっと駄目なまままでいて欲しい。だから甘やかして騎士としても駄目にしてやろうという邪な心がある。

「ランス？ やっぱお前疲れてるのか？」

黙り込んだ俺に向かって、ユーカーが問いかける。その青は俺を心配そうに見つめている。それなのに俺は何と言っことを考えていたのだろう。今の自分を悔い改める。

「え、……………ええと」

俺はすぐに答えを返せず、その場で二人足が止まった。街は騒がしいが城の中はそうでもなく、遠くの喧噪を聞きながら俺たちは少し黙り込んだ。

するとそれを見計らったよう、現れた人間が居る。通路の向こう側から、聞こえてくる足音の正体。それは人間。金色の髪に青い瞳のカーネフェル人。このご時世に珍しい、まだ年若いカーネフェル

人の男だ。年は俺たちとそう変わらない。

「あ！」

久々に会う同僚との再会に、俺は気持ちが悪くなったが、従弟は対照的に途端に嫌そうな顔になる。

「……げっ」

そしてユーカーのその嫌そうな顔を見て、満足そうに青年は笑った。

*

ぶっちゃけるなら俺は、そいつがあんまり好きじゃない。派閥だなんだって言う前に、馬が合わないそれに尽きる。

「お久しぶりですねセレストイン卿？それにしても相変わらず不貞不貞しい顔をしていらっしやる」

即位式が終わり、城の中にも緊張が宿る。

タロツク軍はもう都の前まで来ているし、アルドールの空元気は遠目に見ても痛々しい。一見人らは何もわかつちゃいねえようだったが。

まあ、兎に角だ。そんな危機感を誰もが持っているはずのこの状況で、それを微塵に感じさせないその声に俺が苛立つのはごく自然の感情。そういうことになる。よくよく考えなくとも、第一声がこんな奴を好くような阿呆はまずいない。いたら余程の変態だ。少なくとも俺はそうじゃない。

ユーカーはそれを聞こえない振りで、さつさとその男の横を通り過ぎる。後ろから何やら声が聞こえたが、俺は何も聞こえなかった。しかし執念深い男だ。わざわざ嫌いな相手に近寄って嫌味を言いに来るとは本当に都の人間はろくでもねえ。つかつかという足音が背中から迫ってくる。俺はそれに競歩になりながら颯爽と距離を離す。すると男は全力疾走。そこまでして嫌味を言いたいかこの糞野郎。そこでお優しいこの俺様もそろそろ我慢の限界だった。仕方ないから足を止めてやれば男は嬉々として俺に嫌味の言葉を向ける。

「へえ、帰って来てたんですね。噂には聞いていましたが、どの面下げて城までやって来られたのだから」

しかしその程度にへこたれるユーカー様じゃねえ。

「どちら様？」

俺は本気でお前誰？そういう顔で奴を見てやる。男は小綺麗な顔の、その口元と眉をひくひくさせながら、わなわなと両肩を振るわせていた。

「悪い、俺基本的にモブキャラの顔は覚えらんねえんだわ。なんかさーもう少し特徴っつーか？キャラ立てしてから来てくんね？サラ然りそこらの髭のおっさんの方がまだ存在感あるわ」

唯イケメンってだけでキャラが立つと思うなよ。俺に覚えて貰ってるとかそういう前提がまずおかしいよな。そう言っただけじゃあそいつは怒り狂った。悲しみを映したような美しい青い瞳だとかなんとかで、女兵士やら街娘達はもう一つ渾名をつけていたが、これのどこが悲しみの君だったんだ。今日から怒りの君とかに改名しちまえ糞野郎。

「この私を忘れたと!？」

「ひよるモヤシ系吟遊詩人はさっさと消えろよ。ここ戦争始めんだけど?」

「音楽を理解できないとは、これだから地方貴族は野蠻で困りますね」

「てめえの豎琴の弦全部ピアノ線に変えてやるつかあ!?!ああ!?!ピアノ線舐めんなよ!?!」

「お前達、同僚同士少しは仲良くできないのか?」

睨み合う俺とその男を、仲裁するように近づいてくるランス。俺たちの騒動を目にして、それでも廊下は走らない。それがランスという人間だ。先代カーネフェル王が廊下は走るなと言った命令を未だに守っている阿呆だ。

「出来るかボケ!糞ランス!?!このリストラ野郎のせいで俺がどんな目に遭ったと思っただやがる」

忘れたとは言わせねえ。こいつはその軟派な趣味が効を成し、都貴族に気に入られていた王宮騎士の1人。だからこそ、常時城に住まうことが許されてる。こいつは俺たちの同僚にして敵だ。

「リストラされたのは彼ではなく、お前の方だからその名称は些かおかしいかもしれないが、まあ少し落ち着け」

そのはずなのに、こともあろうに……何故かランスとこいつは仲が良い。

(ランスの阿呆っ!?!)

俺じゃなくてこんなチャラ男の肩を持つのかよ。

「まったく、少しはアロンドンナイト卿を見習ったら如何です？貴方はとても従兄弟とは見えませんよ」

爪の垢を煎じて飲ませてもらえとしたり顔のその男。その澄ました面に右ストレートでも叩き込みたい。しかしそんなことしようものなら、俺がランスから腕ひしぎ十字固めくらいは食らいかねない。おまけに「すぐに暴力で解決しようとするのはお前の良くない癖だ」とか言われながら矛盾した笑顔でやられかねん。あの野郎は本外面は良いが身内に容赦ないから。

(つとなれば……)

陰で殴ったりしたら普通にランスの耳に入りそうで殴れないのは悔しいが、俺も舌先三寸。この口で招いた窮地をことごとく脱して来た男。そしてよく任務をサボっていた男。どうでもいい街の噂話と無駄話の情報量で、俺に勝る騎士はまずいない。

「黙れうつせー！トリシュたん！！」

ブランシュ卿トリシュ。俺から言わせれば唯のいけ好かない変態だが、城下においてこの優男は宮廷騎士の中でもランスに次ぐ勢いの人気騎士様だ。もっとも宮中だけならランスをも凌ぐ。そのイケメン野郎が俺の発した単語ひとつで、顔は青ざめ足はふらふらし出す。

「ぼ……僕をその低俗な名で呼ぶなっ！！」

「低俗も何もてめえのファンの女共が影でこそこそ付けてた渾名だぜ？へえ、流石モテ男は違え。女のあしらい方も最低だな」

「僕はそんなセンスのないネーミングの女は嫌いだ！付き合う女性の理想が高くて何が悪い！唯条件は性格と顔と身分とそれに名前が加わっただけじゃないか！それなのにどうして僕のイズーは何故現れない！？」

このイケメン騎士様は、女の理想が糞高え。やれ髪は輝かんばかりの金でやれ賢くやれ性格は良くてやれ顔はとびきり美しくやれそんな燃えるような恋がしたいなどクっソふざけた妄言を宣っているような御仁だ。起きてても目が覚めないならいっぺん死んでしまえばいいと割と本気で俺は思う。

(んな女いるか阿呆……)

時代が時代ならカーネフェルのお姫様になつていたかもしれぬあのメイド女。ルクリースだつてあんな野蛮なんだ。アスタロットは性格はこの時代のカーネフェリー女にしては珍しいほどお淑やかだが、この男からすれば外見がアウト、チエンジとか言いかねない。もし言われたら今度こそぶん殴る。鳩尾狙いで。

「そうやって現実と非現実の区別も付かねえからしまいにや、得物にも馬にも女の名前なんて女々しいもん付けてんだろうが！最近聞いた噂じゃ豎琴の名前までイゾルなんちゃら、なんちゃらゾルデつて話聞いたが正気かよ！？」

「う、五月蠅い！運命の人に出会えない欲求不満くらいあつても仕方ないだろう！？」

「何年前に出版された本を語つてんだ阿呆つ！名前にも流行くれないあんだろが！このご時世にんな名前の女がいるもんか！本の中のお姫様に一目惚れとは高名な騎士様の考えることはわっかんねえぜ。つかあんなヒロインヒロインしてる女が現代にいますと思ふなよ！！現実見ろよ糞野郎！」

何を隠そう、この男が惚れたのは本の中のお姫様だ。そのヒロインと名前まで同じ女をリアル世界に探しに行くという愚行を青春と履き違えている十代後半。どうかしてるぜ。

「本には媚薬飲ませらんねえしなー、可哀想な野郎だぜ。特に頭が」

「な、何だと!! そんなのわからないじゃないか!! 本の挿絵に浸せば、そこから私のイズーが飛び出してきて私の胸に飛び込んできてくれるかもしれないじゃないか!!」

「来ねえよ馬鹿っ!!」

「……っ、そこまで言うのなら私にも考えがあります」

言葉で負けたのがそんなに悔しかったのか、イケメン騎士は俺に向かつて指を突きつけ指図するようなポーズをする。

「セレストイン卿ユーカー! 王には私から進言し、貴方には危険な外回りの任務を命じさせましょう!」

口で負けるなら、権力で物を見せてくれる。その言い草がまた勘に障る。だから俺は試合を投げる。

「けっ、やってられっか。誰があんなガキに仕えっかよ」

「こら、ユーカー」

ランスに叱られるが、別に俺は悪くない。そっぽ向けば、自分の勝ちを誇るように騎士が去っていく。本当に何しに来たんだあの野郎。このクソ忙しい時に。

「確かに都貴族に懐かれてはいるが、トリシュは今まで都を守っ

て居てくれたんだ。あの方への忠誠は本物だ。そこまで噛み付くことはないだろう?」

それはそうだが、気に入らない。ランスは知らないだろうが、俺たちが都に着いた頃……まだこの都は貴族共が宴会やらダンスパーティーやらやって遊んでいたんだぞ?こいつも守りどころか、度々奏者として呼ばれていたとかそんな話も良く聞いた。褒めるより叱るべき点の方が余程多い。

「だから礼を言えってか?んな義理ねえよ。大体お前の言うあの方ってのは、アルドールじゃねえだろ?あいつだってこれからどう動くかわかったもんじゃねえ」

「……そうだな。何だかんだトリシユも人が良いからな。都貴族に踊らされているところがないとも言えない」

「何でそんなにあいつばっか庇うんだよ」

やたらあの騎士ばかり持ち上げる相方に、不満を漏らせば、意地の悪い笑みが俺を見ている。いや、笑顔だけなら爽やかなんだけど、なんか気に入らないから爽やかに分類してやりたくない。別に劣等感とかそういうあれじゃねえんだけどっこは意地悪い系に分類してやるう。うん。

「お前も庇って欲しかったのか?」

「んなわけあるか!!鳥肌立つわっ!!」

ここまで来ると俺をからかうためだけに、敢えてあいつを持ち上げていたようにさえ思えてくる。俺の被害妄想なんだろうか?でもランスが性悪なのは事実だ。以上。

「さて、イグニス様の言葉だと……隙を作れとのことだったな」

「んだな。どうするんだ？」

「よし、俺はケーキでも作るか」

「はあ!？」

「即位はめでたいことだしな。ユーカーお前はお茶でも淹れてくれ」

「隙つてそつちの隙かよ!？」

敵陣に隙を作れそう解釈していた俺と違い、ランスはこのカーネフェル側に隙を作れと解釈していた。

「何だ？あつちというとライクの方が？」

「その好きでもねえよ!！」

「なるほど魚か」

「それは鱧だろ」

「以前の話は覚えてるか？」

「……っ、いきなり真顔に戻りやがって」

ランスが言っているのは、カルディアで神子イグニスが口にした策。俺たちは敢えてこの都で敗れる。それを知っているのは限られた人間だけだ。

「……話したのか？」

「いや？まさか」

それとこれとは話が別だと、ランスが小さく笑った。トリシユと仲が良い癖に、仕事に私情は挟まない。立派と言えば立派だが、何だかんだでやつぱりランスは薄情な人間だ。俺が微妙な目で見るのに気付いたのか、奴はいつも通り笑って見せる。そう言う顔は優しげだ、嫌味なくらいに。

「実はさつきな、お前達が全力疾走バトルをしている時に、兵士の女の子から季節の果物を貰ってたな」

「なんでそうなるんだよ」

「いや、食料調達係だったみたいなんだけど、美味しそうだねって言ったら分けてくれた」

「なるほど、お前が時々何処からともなく食材を入手してると思ったらそんな経路があったとは。税金はこうして無駄に横流しで消費されていくのか。通りでこの国傾くわけだ。この傾国のクソイケメンが」

「そう言うな。俺の作る物は大抵お前の腹に入るじゃないか。それだと税金の隠し金庫はお前と言うことになるぞ？それに今の季節柄、フルーツケーキも悪くないかと」

「俺はアップルパイが良い。それがねえならミートパイ」

「今何月だと思ってるんだ？まだ八月だぞ？」

「んじゃ洋梨のタルト」

「そうだな、それじゃあ間を取って白身魚のパイ包みでどうだ？」

「てめえの言う間の次元がわかんねえよ！！ていうか紅茶と一緒に食いたくねえ！！大体果物何処に使うって！！」

「大根下ろしの用量で使おうかと。林檍はないけどすり下ろし林檍とかそういうニュアンス」

「お願いだから止めてくれ。ベリー系が血みどろ加工に見えてグロくなること請け合いだから」

都まで届けてやったのが誰かっつても忘れたような、薄情な城の人間達。新たな王の傍に仕えることも許されていない俺達は、戦争が始まるまで暇を与えられている。始まればすぐに前線で死に物狂いで戦わせられることになるのは目に見えていた。勿論今回の策があれな以上、そんなことをしてやる義理は俺たちにはない。その時が来るまで王には神子がついている。いくら彼女が性悪だからって合図くらいは出してくれるだろう。

がらんとした談話室で茶を淹れている俺の背中に届くのは、皿を運んできたランスの声。

「俺は、ちよつと彼が羨ましいと思うんだよ」

「……ブランシユが？」

「ああ、それでちよつと面白いんだ」

「あの野郎が？」

「彼は俺の知らない世界を生きている。俺の知らないものを知っている。それが興味深いつていうのかな」

違うからこそ話していて面白いのだと奴は言う。

「お前が知らないこと……？音楽か？」

絵面的にはこの男にも十分似合いそうではある。しかしそうじゃないよと奴は首を振る。

「絵に描いた餅とはいえ、それを追い求める姿にはある種の情熱を感じるよ」

「その例えなんか違う。水に映った肉じゃねえ？橋の上から犬がそれ覗いてる図」

互いになんとも色気のない例えだ。それでも言いたいことは解った。

「馬つ鹿みてえ。何寝言言つてんだ？お前みたいな男なら、その気になれば1人でも2人でも100でも200でも女囲えるんじゃないの？」

「馬鹿言え。俺は騎士だぞ？剣の道に生き、剣の道に死ぬ。それが騎士としての在り方だ」

「その話だと、あの野郎は邪道に外道にも程があるんだがな。お前みたいなご立派な騎士様が、あんな脳内彼女といちゃついている可哀なチャラ男を羨む理由がわからねえ」

「……そうだな」

その言葉に、ああと思った。確かにこの男は縁遠い。精霊に育てられたからなのか、俺が過保護過ぎたのか。本人が天然だからなのか。本人が剣と忠誠に情熱燃やし過ぎてストイックすぎたのか。そういう浮ついた話が聞こえない。

砦やら街やらを歩けば解るが、女共にモテてはいるのだ。これでもかっつくくらいには。それをこの女殺しの阿呆はボケ殺しでそれをひよいひよいかわしていく。人の好意はドッジボールの球じゃねえんだよとツッコミ入れてやりたい。

恋なんか俺にとつては箸置きさ。あつてもなくても困らない。ていうかむしろ置き場所に困る。むしろ邪魔。だからこそ理解も出来ない。だから、興味深いんだよ……こいつの言葉はそんな風に俺に聞こえた。

「なるほど、お前の精神もようやく思春期つてところか」

「馬鹿にしているのか？」

「いやお前も人の心が解るような年になったと思うとな。感慨深いぜ」

「俺の方がお前より年上なんだが」

「それで？カードになつて自分の死期を突きつけられてるような気持ちで、種の保存本能でも芽生えたのか？」

「いや、別に」

ランスは首を振る。皿は並んだがまだケーキは焼けないらしく空。せっかくの茶が冷えるのも嫌で、俺はティーカップを手を取った。

「唯、そうだな。俺は死ぬだろ？」

「……そりゃ人間だし、いつかは死ぬだろうな」

俺が曖昧に肯定してやれば、ランスも茶を啜り始めた。そして一口含んで……また再び口を開く。

「俺は俺の生き方を迷ったり後悔はしないが、それでも……一度も誰も思わずに生きて死ぬというのは、人としてどうなのだろうなと思っただけだ」

「何でいきなりそんなこと……」

「お前の世界は、俺のそれより広いだろう？それが少しだけ、羨ましく思えたんだ」

「は？」

何故そこで話題が自分に飛ぶのか解らず、口から変な声が出る。

「あの頃の俺はさ、少しだけ……寂しい思いをしたものだよ。お前が別の生き物になったようで、置いて行かれるようだった」

そこまで言われ、ユーカーはようやく理解する。この従兄はアスタロットの事を言っているのだ。彼女に恋した自分が、彼の言葉も聞かなくなる。彼女を失ってから、自堕落に陥った俺を彼はそんな風に見ていたのか。

「馬つ鹿じゃねえの。そんなの別腹だろ。ジャンルが違えよ」

友情と愛情を同じ天秤にはかけられない。どちらだって大切だ。その意味は異なるけれど。……唯どちらも忠誠の前には廃れるものではあるのかもしれない。

「お前は立派な騎士だから、私情を挟まねえで判断できる。だからわざわざ剣を鈍らせるようなことしてこなかったってだけだろ」

そつだ。俺は忠誠を一番に選べなかつた騎士失格の騎士。俺は駄目な騎士だから、剣にサビを作つたつてだけだ。だけど切れなくなつたその剣を俺は別に疎ましくは思わない。

「お前はわざわざ敵に付け込まれるような弱さを作らなかつたんだ。それがお前の強さだし誇つて良い事だと思つぜ」

強くて立派な理想の騎士。奴を見れば誰もが憧れる。俺が同じようになれるとは思えないが、こいつが俺の誇りなのは間違いない。

「わざわざ弱くなる必要はない……か。確かに、それはそつだ」

「だろ？ほんと大変だつたんだからな。あの道化師の野郎に一杯食わされて。俺なんか時間数術とか何とかつて奴で退行させられて弱体化するわ背が縮むわで」

「そつか、やはり俺も付いていけば良かったな。それは一見の価値があつた」

「ねえよ！！」

しまつた。墓穴を掘つた。この自虐ネタが出る癖を改めなければ俺に幸せな明日はない。ずっとこいつとかにからかわれるのがオチだ。嫌だそんな人生っ！

しかし心の中でどんなに後悔してももう遅い。従兄はすっかり俺をからかうモードに入っている。

「いや、昔のお前は結構可愛かつたじゃないか」

「そついう言い方止める！！」

「ああ、ごめん。今もそれなりに可愛いよ」

「そういう催促でもねえよ！！たく……せつかくの茶が冷えちまった」

「でも夏だし冷えた方が美味しいな」

「そんな風に褒められても嬉しくねえし」

からかいすぎたと反省したのか、フォーローに入ってくるランス。それでも俺だつてそこまで単純ではない。結構繊細なんだから俺は。褒められたくらいで機嫌を直してやるものか。第一それ俺の功績じゃないし。

「……でもお前に女ねえ。タイプくらいは決まってるのか？」

「さあ、どうなんだろうな」

「エレンとはどうなんだよ」

「流石に俺は、あんなに年の離れた年下相手にそんな感情は持てそうにないよ。そういう才能が俺には皆無みたいだ。……父さんなら兎も角」

「……ランス」

余計なことを言ってしまった。俺はまた墓穴を掘った。ランスがそういうことを避けているのは、未だ根強く残る父親との禍根のよるものだ。

「……あの人の見境のなさは本当に酷いからな」

「まあな。お前の所の親父さんも俺の親父とは別ベクトルで最低だよな」

「まだ生きていたか？」

俺が北部に行っていたときに、援助してくれたのはランスの父親であるアロンドイト卿だ。女たらしで有名なお人だが、何処か憎めないのはこいつに顔がよく似ているからか。その明るい人柄なのか。

俺のことも歓迎してくれるし、叔父としてはいい人だ。人柄はいい人なんだけど、でも女から見ればやっぱり最低だと思う。

「ん、まあ元気そうだったよ。まだまだ現役って感じで」

「そうか……」

「え、えつとな！何処で変な噂聞きつけたんだか知らねえんだけどよ、あの人例の祭りのこと聞きつけて……俺の着替えとか支援物資にとんでもねえもの送り込んでなんか来たからやっぱり俺も苦手だな、うん……」

「……あの男、とうとうそこまでストライクゾーンを広げたのか」

「いや……まあ、うん。俺もう時間数術かかりたくねえよ。今だから冗談で済んでるけど……」

「そう言えば今年はどうなるんだろうなああの祭り……时期的に毎年そろそろだったか」

言われてみれば確かにそうだ。毎年夏にやって来る恐怖と狂気の祭典。そして俺のトラウマの宝庫の一つ。

「いや流石に、今年は無しだろ。もう敵が目と鼻の先まで来てるって言うのに……ここでまだあんなことさせるっていうなら完全に都貴族はいかれてやがるぜ」

「それもそうだな」

「って何でちよつと残念そうなんだよお前は。そんなに俺の嫌がる顔を見たいのか。悪趣味にも程があるぜ」

「いや、お前は基本的に嫌そうな顔をしている時が一番輝くし可愛じゃないか」

「本当にお前最低だなっ……」

俺をからかうのが本当に、この男は好きなんだな。現に俺が心底嫌そうな顔をしているのを見て爆笑している。それでも顔の美形度

が揺るがないのがこれまた嫌味だ。いや、それを嫌味と感じさせないのが逆に嫌味だ。

「いや、あれは年に何度あるかないかの俺とお前の大勝負じゃないか」

「まあ、俺も死ぬ気で逃げてるからな。こここのところ俺の連勝だったな」

「ああ、だから今年こそはお前を無理矢理参加させようともう城から街からお前の行きそうな場所の至る所に罠まで仕掛けていたのに」

「……お前、天然だからって公害やって済まされると思うなよ？ どうかのガキが引つかかっていたら通報もんだぞ？」

「まあ、いいじゃないか。あんな所に仕掛けた罠に掛かるのはお前かタロツク軍くらいかだろうから」

普通の人間が行かなそうな場所に仕掛けましたと、澄ました顔で相方は言う。

「それに付近の精霊に頼んでおいたから、もし一般人がかかったら助けてくれる手筈だよ」

「なんか俺の中で忠誠がゲシユタルト崩壊してるんだけど」

最高の騎士と謳われた男が、何をやっているんだか。

それはあまりに唐突な終わりだった。

窓の外を呆然と眺めながら、ランスは考える。それまでなんとなく、曖昧に捉えていたカードの終わり。それが今突きつけられている。

幸福値がなくなれば、人はカードは死んでしまう。それは今まで自分が考えてきた死とは違うタイプの終わり方。

戦って死ぬんじゃない。戦いを越えた先……それでもこうして、カードは死ぬのだ。幸福値が無くなれば、不運に襲われ事故として死ぬ。それは本人がいくら強くてもどうしようもない、逃れようがない終わり。

*

「今、何か聞こえなかったか？」

久々にこいつとくだらないやり取りをしていると、昔を少し思い出す。懐かしさからか、妙な慕わしさが胸を刺す。俺は知っていた。こいつが逃げてくれないのなら、こいつと俺の別れは最悪なものとなる。俺はこいつの命を食い潰す。消費する。カードとして利用する。それでもここにいてやると言ってくれるその優しさに、罪悪感を覚え始めていた。

その時俺は何かを聞いた。とても小さな音だ。だけど言い方が悪かったのだろう。従弟は少し替えて、そしてそれを隠す虚勢でもって俺とその何かに噛み付いた。

「お前はすぐそうやって」

俺をからかって楽しいかと睨み付けてくるユーカー。

「……ん？でもほんとに何か聞こえて来んな。上からか？何やってるんだあいつら」

しかしそんなユーカーの耳にも何かが聞こえたようだ。いや、俺にも聞こえる。今度の音は大きかった。ここの部屋の階の上にはアルドル様の妹……フローリップさんがいる。道化師との戦いにより、数術の使いすぎで脳を酷使、結果昏睡状態に陥ったという話だった。ルクリースさんを失っただけでなく、フローリップさんもそんな様子だ。道化師に攫われていた彼女を無事に助け出したとは、言えない代償をアルドル様達は支払っていた。

「……フローリップさんが目覚めたのか？」

それなら多少騒ぎなくなる気持ちも解る。俺がそれを示唆すると、それでも素直じゃない俺の従弟は窓に向かって歩き出し、言い放つ。

「おい！うつせーぞお前ら……」

しかしその言葉は、途中で止まった。彼は窓の外に何を見たのだろう。俺が見たのは、破損した外壁の一部。それからバルコニーの装飾の金属。先程の音はこれが原因だったのだろうと、そんなことを思った。とりあえず次に思ったのは、城の老朽化の懸念。暇を見つけて改築工事を提言してみよう。そこで一旦俺は窓から視線を外した。念のためフローリップさんを他の部屋に移すべきだと思った。だからそれをアルドル様に伝えに行くつもりで部屋の外へ向かうとした……その時だ。俺はまた、音を聞いた。

それはユーカーが黙り込んでから、ほんの数秒……時間にして2、

3秒の出来事だったと思う。俺の頭は回転してはいたが、その方向性と目の付け所はあまりに遠かった。

今度の音は先程までのものとは違う。金属や石材が石畳にぶつかる音ではない。それより軽く、それより鈍く。脆い何かが叩き付けられぐちゃと潰れる音。へしゃげる音。それなあまりに簡単に、何かが折れて壊れた音だ。ここまで来て俺は、それがただ事ではないと思いついた。普段はあれだけ騒がしいのに……窓枠に縫いつけられたように、手を掛けてそのまま微動だにしない従弟の姿が今起きたことの異常性を醸し出している。

「ユーカー……?」

「……お前は上に行け。早くっ!!」

振り返らずに彼はそう言う。それはまるで、俺に窓の外を見せたくないと言っているようで。だからこそ俺は窓へと向かう。

「……っ!?!」

それを見た俺は従弟を押しつけ窓から飛び出す。咄嗟に回復数術を展開しかけ……それが無意味だと知る。辛うじて息はある。それでも……これはもう助からない。言うなればそうするだけ俺の数術代償が無駄になる。それを見越した上で、従弟は上へ行けと言ったのだ。

「……お前っ、まさか!」

振り向けば、遅れて外へと出てくるユーカー。

「お前は?、こいつは?。ルールがいまいちわかんねえ内は、どうしようもねえだろ」

ユーカーは」。コートカード。ルール上、数札を殺すことが出来るし殺して良いと明言されているカード。俺はフローリップさんより上位カード。こんな弱っている彼女さえ、安らかに眠らせてやれない可能性がある。唯悪戯に痛みばかりを押しつける。それならいっそ……彼はそう考えた。

「汚れ役は、俺の仕事だ」

少女はもう助からない。何人もの死を見てきた自分たちだからこそ解る。少女の顔は青白く……その肌に張り付いた赤い色はこのまま放置していても彼女を死は襲い来る。

あちこち骨も折れている。手や足が、本来曲がらない方を向いている。息をする度、身体に突き刺さった骨が痛いのだと涙に濡れる瞳が訴える。

「……悪いな」

「……………」

ユーカーが剣を構える。それに少女は目を伏せる。悟っているのだ。もうどうしようもないことを。最期の時に、少女は唇だけで小さく笑う。ありがとうと言っているように、俺には見えた。

聞き慣れた肉を裂く音。命の糸を断ち切る鋏。後は音の止まった時計が一つその場所に転がるだけ。もう戻らない魂を嘆くように赤い涙を流しながら。

「ユーカー……………」

「完全には直さなくて良い。だけどあいつが見られる程度には整えてやってくれねえか？こいつだって……アルドールにこんな姿は見られたくねえだろうからさ」

影を映した青の瞳で、従弟が辛そうに一言、絞り出した。それに、ああと頷きかけて……俺は俺が彼女よりも弱いカードであることを思い出していた。数術代償、そして幸福値。それを使い果たせば……俺もいずれ。

「ランス……?」

動きを止めた俺を不審がる従弟。そんな俺をみて、ユーカーは言おうとして……それを制止するような、掻き消すような爆音が響く。それは近くと遠くで。遠くの方からは歓声のようなものまで聞こえる。

「……!? な、何だよ今度は!?!」

「……っ! 来たんだ、きつと!」

「ああっ、くそっ!! 早すぎだろうが!!」

舌打ちするや否や、ユーカーは近くの木に登りそこから一気に上の階まで飛び移る。

「お前はそいつをなんとかしてやれ! 状況が状況じゃ葬儀上げてやる時間もねえっ!! ついでに暇があつたら外の情報探つて来てくれ! こっちは俺と神子でなんとかする!」

ユーカーは上方からそんな言葉を降らせて、問題の場所まで走っていく。

何を勝手なことを。そう叫びたくなつたが、従弟の言うことはもつともだ。万が一、この少女の亡骸が敵に手にでも渡れば、あの人はまた辛い思いをするだろう。今の内に葬つてやることで、あの人の心が軽くなるなら、俺はそうしなければならぬ。何をするにも情報は勿論要るが、彼女を何とかするまでは……敵に見つかつては

いけない。しかし事切れたばかりのそ体を運ぶのはなかなか難しい作業だ。身体の中身の一部なんて飛び出して飛び散っているものだってある。

「くそっ……」

今上で何が起きているのか心配だ。早く王の元へ駆けつきたい。それでも、このまま彼女を放置するのは……王の願いに背くこと。それを理解している。だから俺はまた、目先の仕事に縛られる。舌打ちしたいのは俺の方だ。とりあえず拾えるものだけを拾って、彼女を抱きかかえれば、服に張り付く赤が肌に嫌な生ぬるさを伝える。

そのまま走れば、街はちょっとした混乱に陥る。街を混乱させるわけにもいかず、彼女を隠すにしても、街を突っ切るのは難しい。第一城壁の外にはタロツクの軍勢がある。都の外に運べれば、それが一番安全なのだと思うが俺は神子様のような空間転移など使えない。

(それならせめて……水の元素が必要だ)

城の傍には小さな森がある。そこには一つ、小さな沼があったはず。あそこなら何とかなるかもしれない。

「母さんっ！助けてくれっ！」

水辺に着くなり俺は母を呼ぶ。ここに母は棲んではないが、これだけの淡水と水の元素があれば召喚出来る。

俺の声に呼応するよう、水面は震え……底からごぼごぼと泡を作る。そして泡と共に光る数字の群れが浮かび上がって、水面から浮かび上がる小さな青い髪。透き通るような水で出来た羽を背に、精

霊は現れる。

《……ランス！もうっ！只今が遅いわよ！！都に帰って来てたらちゃんと母さんに会いに来ないと駄目じゃない！》

俺が都の傍に住処を移してからは、母さんもカルディア近くの湖に落ち着いた。母さんは湖の精だから、基本的に一定量の真水のある場所になら移動することが出来る。今はその応用で呼び出させて貰った。久々の再会に、母さんはいきなり俺を叱り付ける。それも……

「ごめん母さん、それどころじゃないんです」

この一言に尽きた。

《……ってあんた血生臭いわね。どうしたのそれ》

母さんは鼻をつまみながら、嫌そうな顔になる。精霊は基本的に汚れや血生臭いことを嫌う者が多い。水の精霊は特にそういうところが顕著だ。割と精霊としては変わり者に入るとはいえ、母さんもその例外ではない。それでもだ。他に頼れる相手もいなかった。

「彼女は新しいカーネフェル王の妹君です。今は城が奇襲を受けていて、落ち着いて眠らせてもやれそうにない。だから母さん、しばらくこの子を預かってくれませんか？」

《別に良いけど、そのままじゃちよつとねえ。私も私の家に水死体浮かべたくはないし、魚の餌にしたところで、そんな魚をあんたに送ったら、あんただって嫌でしょう？》

「……………ええ、まあ」

俺は兎も角ユーカーとアルドル様が泣きそうだ。

《まあ、そういうのが得意な知り合いの家にはばらく預かって貰うけど、落ち着いたらちゃんとして引き取りに来なさいよ》

それでも俺が困った顔をしていると、母さんは渋々引き受けてくれた。しかし小さな身体の母さんにこの頼み事は、いささか大きい。

《でもそのままじゃ運べないし、何とかして貰えない？》

「……………そうですね」

俺は彼女だったものを大地に降ろし、横たえる。それから俺が展開したのは、回復数術でも視覚数術でもない。それは発火数術。

カーネフェルは炎の元素の多い土地。だからよく燃える。そして城の石材は、火を閉じこめる。ここで大きな炎を上げても、城は無事のはずだ。

俺が上位カードになった所為なのか、以前より炎の威力が増している。それに土地の力も加わって、炎はあつという間に少女の身体を包み、嫌な匂いを立ち籠めて……………彼女を骨へと変えていく。時間にして一時間。とても長く感じられた。

それでも時間は来るもので、俺は骨になった彼女を小さな箱に閉じ籠めてそれを母さんへと託す。それに母さんは、任されたわと小さく溜息を吐く。

《そう言えばあなた、皆の戦いで……………大分無茶したって聞いたわよ。あんたまだ……………》

「母さん、俺は別に死ぬ戦いはしていません。……………これは守るための戦いです」

どうしてそんな言い方をしてしまったのか。俺は初めてカードの

死を目の当たりにして……自分が関わっていること、その事の重大さをようやく理解し始めているのか。
(そうだな……たぶん、そうだ)

俺は今まであんな死に方、想像したことがなかった。

「母さん……」

《何、そんな顔して……》

憂い顔も様になつてゐるわと満更でも無さそうな笑みを湛えている母さんは、相談相手としてちょっと心配だ。それでも俺のことまで親身になってくれる相手は他にそうそういない。

「努力しても、どうにもならないことって……母さんはどう思いますか？」

《何よ突然……》

「俺はそういうのが嫌だなんて思っんです」

どうにもならないこと。どうしようもないこと。それをそうだと認めるのは辛いこと。だけど諦めなくても認めなくても、そういうものは絶対にこの世の中には存在するのだ。

「昔の俺は……あいつに負けて、凄く悔しかった」

あいつは何も知らなかった。当たり前だ。あんな部屋に閉じこめられていたんだ。

俺が何か教えると、物知りだなんてあいつが褒めるから。ついつい俺も良い気分になって、いろいろ教えてやった。剣だつて歳者は俺が教えてあげたのに。元々は俺の方が先に学んでいたのに。あっという間に追い越されて、初めて勝つたと喜ぶあいつのその成長を

喜んでやれる余裕もなくて……どんな顔をすればいいのかわからなかった。唯負けることはとても悔しいことなんだって、それを思い知らされた。

「だから必死に剣の腕を磨いて、……あいつにまた勝てるようになった時は本当に嬉しかった。だけど……母さんも覚えていますよね？」

《そうね……ユーカーの馬鹿は、笑っていたわね》

俺はあいつに負けて、影で泣く程悔しかった。だけどあいつは俺に勝った時と同じ笑顔で「参った」と笑っていた。俺はそんなあいつに、また負けたような気がした。それはとても理不尽な思いだった。いろいろあってあいつが更に怠け癖を出すようになり、そこから俺が負けることは殆どなくなった。だから俺はいつまでも負けた気持ちを引き摺りたくなくて、努力に勝るものはないと強く信じるようになった。少なくとも、騎士としては俺の方があの人に信頼はされていた。だから無駄な努力なんてきつと何処にもない。やがてそれが確信に代わり始めた頃にまたこれだ。再びどうしようもないことが、俺の前に現れている。

「別に俺はあいつが嫌いなわけでもないし、嫌いになりたいわけでもないんです」

それは昨日のことで確信した。別にそういうわけではないのだと。唯昔みたいに、唯一緒に連んでいて、それで満足出来なくなってしまうだけで。あいつはそれでいいみたいなのに、俺は違う。俺だけ変わってしまったのだ。あいつは何も悪くない。悪いのは俺の方だ。だから優しくしたいと思う。大事なのは本当だから。それでもまた違いを知る。カードという数が俺とあいつを引き離す。互いに劣等感を植え付ける。

「それでも俺は……あいつに負けるのが悔しい。俺が勝っているはずなのに、いつも勝っている気がしない」

最初にあいつを守ったのは俺の方だから。それが俺にとって当たり前になっていた。だけどあいつはそれを理解した上で、俺の力になりたいと言う。自分より弱い相手に守ってやると言われる理不尽、歯がゆさ。今だつてきつと、危険から遠ざけるために、敢えて俺にこの仕事を託した。

それを俺が飲んだのは、あの人の思いを汲んでだけではないのだ。目の前でお前は役立たずと言われるのが怖かった。アルドル様が今一番、必要としているのはイグニス様だ。そしてその次に頼りにされているのはユーカーだ。剣技があいつより強くても、指揮があいつより得意でも、それだけでは足りないのだ。俺が倒せるカードは限られているから。

お前のために死んでやると口にする彼を止めるには、俺はどうすれば良いのだろうか？同じ事は言つてやれない。そして死なせないとも言つてやれない。俺ではもうあいつを守れないのだと、決められている。

今さつき……フローリップさんの時のように、敵だけでなく味方まで殺させる、後味の悪い仕事をあいつに押しつけることだつて……もう二度と無いとは言い切れない。身震いした。戦慄を知った。あいつは俺のためなら、たぶん何でもやってのける。際限なく与えられた、所有権に俺は今……戸惑っている。彼はカードとしては心強い。でも何かが違うんじゃないか。そうも思うのだ。

フローリップさんの最期を見て、俺が恐れたのは……不運に襲われれば、それまでの過程など全てなかったことになって……今まで頑張ったことだつて、全て無意味に変えられてしまふということ。その絶望の中息を引き取るという想像が生み出す震え。それから……彼女よりも弱い、幸福値の少ない俺やアルドル様を守るあいつは

……その幸運を犠牲にしてで俺を守ってくれるだろう。俺はそれがありがたく、そして腹立たしいのだ。

「母さんは下らないって笑うかもしれませんが。でも俺は生きたいとか死にたくないとか、そうじゃない。負けたくないんです。俺はあいつの兄代わりで！あいつを守って助けるのが俺だったのに……こんな悔しいことがありますか!？」

《ランス……》

「俺だってあいつを……死なせたいわけじゃ、ないんだ」

俺は人としても騎士としても、あいつに負けたくない。だけどカードは俺の全てを無駄だと嘲笑っているようで……

《……無駄な事なんてないと思うわ》

カードのことも審判のことも知らないはずの母さんが、力強くそう言い切った。慰めだろうか。顔を上げれば、彼女は俺を労る様子など微塵も感じさせない笑みを浮かべる。どちらかというと、胸を張って満足気なご様子で。

《あんたがそうね、無駄を嫌って怠けてばかりの男だったら、あの馬鹿はここまであんたに懐かなかつたはずよ》

人を手懐ける魅力と人望、そして手駒の優劣も強さと才能の内だと母さんはほくそ笑む。

《あんたが一見無駄だと思えるようなことも誠実にこなす男だから、あいつはあんたに懐いたの。あのじゃじゃ馬を乗りこなすんだからあんたはやっぱり凄いわ、私の自慢の息子だわ》

負けたくないというこんな俺でも、そのまますべてを慕ってくれる。こんなどうしようもない俺で良いと、彼は言ってくれているのだと……母さんはそう言っている。そしてそれは自分も同じだと母さんは俺に微笑んだ。

「母さん……」

《何?》

お礼を言おうとした。だけど駄目だった。今そんな事を口にしたなら、とても情けない顔になってしまいそうだから。代わりに俺の口から出たのは……やはりというか薄情な言葉だった。

「そろそろ城のみんなが心配なので帰ります、では」

《ちよ、ちよつとお! 何で変なところでクールなのよあなたは! ！! ！そういう照れ隠しってどうなの!? 私は全然好きだけどっ! ！!》

しかし心配なのも事実だ。そこまで嘘というわけでもない。もう一時間以上も経っている。

カードとしては一番心強いユーカーとイグニス様が付いている。それでも時間が長引き距離が離れるほど、強迫観念に襲われる。早く戻らなくては。感謝もそこそこに、俺の心は城へと向かい出す。

《……………仕方ないわね》

あなたは口で言って解る子じゃなかったわねと母さんが溜息を吐く。素直に見えて誰より頑固なのだと彼女は思いだしたという口ぶりだ。

《これ、持って行きなさい》

彼女は自分が首からさげていた、首飾りを俺へと投げる。日の光に透かしてみると、それが水入り水晶なのだと解る。

「母さん、これは？」

《お守りよ。肌身離さず持つてなさいよ。じゃないと母さん泣いちやうんだから！》

「よくわからないけどわかりました」

《よろしい。それじゃ、あんまり無茶しないでって言っても無意味だろうから無茶は程ほどにしないよー！あんたももう十代後半なんだから、いつまでも自分が若いと思ってたら失敗するわよー！怪我してからじゃ遅いんだから！》

自分で自分の回復をするなんて、自給自足にも程がある。それなら最初から怪我などするな。怪我するような危険と悪行は犯すな。そついう話ですと母さんが俺を戒める。

《……ってちょっと待ちなさい！》

「まだ何かあるんですか？」

《違って！何か聞こえるわ！》

「え……？」

母さんに言われて、俺も耳を澄ます。すると確かに何か聞こえる。森の向こう……街の方から。

聞こえてくるのは些か愉快的なパレードの行進曲。

《そう言えば今日即位式だったんですって？それで街はお祭り気分なのかしら？》

「そんな馬鹿な……いくら浮ついた都の人々も、そこまで楽天的なはずがありません。もうタロツク軍は目と鼻の先まで来ているんですよ？」

《……………ねえ、ランス。あんたの新しい王様って何て名前だっけ？》

「アルドール様です」

《あのね……………これが私の空耳ならいいんだけどね？》

母さんはそう前置きをして、言い辛そうに言葉を紡ぐ。

《向こうから“アルドール饅頭”やら“アルドールソー”やら“アルドール焼き”やらっていう意味深な単語と値段が聞こえてくるわ……………》

「とりあえずこれが平常時なら、恐れ多くも王の名を許可無く商標利用してるといふことで城へ連行していましたね……………」

相方は俺を散々ボケだと言っけれど、俺はそこまでボケではないと思う。あいつほどツッコミのキレはないかもしれないが、敢えて言わせて貰うなら……………

「三つ目は、一体何を焼いてるんでしょうね……………」

O'8:Omnes aequo animo parent ubi di

エルス君がなんか後半エロス君になってる注意報。カーネフェルの夏の暑さは異常。暑いから変なテンションなんです、きっと。

ユーカーが飛び上がった先、そこから煙が上がって見えた。もう少し上の階だ。ランスへ彼女のことを頼んだのは、その新しい厄介事に彼を近づけたくないからだだった。

この耳鳴りの感じを、俺は知っている。ユーカーは確信を持って、室内を潜り抜け階段を飛び上がる。

そして爆発音のあつた部屋に向かえばそこは、落ちてきた少女が居た部屋だ。

「イグニスっ！アルドールっ！！」

扉を蹴り開ければ、そこには二人の他に……少女と見紛う様な面持ちの少年が一人。艶やかな黒髪はタロック人のそれ。しかしその薄すぎる赤。紅水晶の瞳は彼が混血と呼ばれる生き物であることを示す。

「……やあ、セレスティン卿ユーカー。久しぶりだね」

「エルスIIザインか……とうとう来やがったな」

少年の周りはゆらゆらと揺れる小さな炎が浮かんでいる。先程の爆音はこれの仕業だろう。カーネフェルの石材は炎を囲い込む。城の中で燃やしたら……それは外には広がらない。しかし城の中はとんでもないことになる。それをなんとかするために神子は今数式を描いている最中のようなだった。アルドールはその時間稼ぎをしようと思っただけなのだが、完全に劣勢だ。精神状態の所為もあるとは思わが、相変わらず情けない。一度エルスIIザインに勝ったとか聞いたが、おそらくまぐれだろう。

「いい加減そろそろここで決着付けようぜ」

俺は得物の混血剣セレスタイトを抜刀。俺に居合いなんて概念はねえ。これで戦闘態勢つてもんだ。しかしよく辺りを見渡せば、何人かの兵士が倒れている。数術発動までの時間稼ぎに使われたのか。しかし、エルスⅡザインも数術使い。数式が完成する前なら、普通の兵士でもなんとかなる可能性は高い。エルス本人は唯の非力な子供のはず。

(それとも何か、隠し持ってたやがんのか?)

迂闊に距離を詰められない。詰めようにも倒れた兵士達が邪魔だ。まだ息はあるようだし踏みつけるわけにもいかないだろう。それが止めになったらちよつと俺のトラウマになる。

流星はカーネフェル。ヘタレ兵士達は王を見捨ててどこかに隠れている。僅かに勇敢さを持ち合わせた男達もこの様だ。都の連中は都の自宅警備もとい王宮警備に忙しく、実戦経験が怪しい奴ばかりだったのだろう。王の前で恰好付けて出世狙ったか、何処かの貴族に頼まれて、そのコネ作りの手伝いのために送り込まれた奴らなのか。まあ、下心があつても逃げなかつただけ立派だ。これでエルスの一人や二人、倒してくれたなら俺だって勝手に出世してくれて構わないと思うのだが。生憎あいつはカード。これで一般人はカードの相手にもならないことがよく分かった。それを証明してくれただけでも、十分感謝してやる。

「遅いですよセレスタイン卿」

俺の戸惑いまで……相変わらず全部お見通しを言わんばかり。クソむかつくが色だけは綺麗な琥珀色の目で神子は俺を睨み付ける。文句ならトリシュ辺りに言えよクソ。俺はこの階段上るのだって、

緊急事態まで駄目だったんだ。

「おいクソ神子。お前は本当に俺を馬車馬か何かと勘違いしてねえか？」

「失敬ですね。そんな風に思われていたなんて。僕は唯貴方のことを……アルドールの奴隷だと思っただけです！」

「余計悪いわっ！俺にだって基本的人権の一つや二つあるんだからな！」

「ふっ……貴方にしては面白い冗談ですね。最大多数の幸福の前に貴方一人位の人権なんて僕の権力で幾らでも握りつぶせますよ」

仮にも聖職者がこういうこと言っちゃいけないと思う。しかしまあ……短い間とはいえ、この神子……イグニスという少女の性格を俺も多少なりとは理解した。別に相手が女だって解ったから多少加減してやってるとかそういうわけではない。こいつが何考えてるのか何て未だによくわからないが、その苦しい表情から数術を酷使させてはいけないのは見て取れる。

「……つたく。仕方ねえ」

俺は兵士達を踏まないように飛び越え、二人の前に立つ。それに意外そうな声を出したのはアルドールもとい新カーネフェル王。

「カーカー……」

「にしてもお前は本当になあ。またそうやって情けねえ面してる」

なんでこんな情けない子供が、カーネフェル王なんかになってしまったんだか。従兄への義理とはいえ、こんな子供を守る俺の立場にもなってみて欲しい。いや、ほんと。ろくな仕事じゃねえよ。

「仮にもカーネフェル王ならもうちょい踏ん返り返ってる！無意味にな！てめえは守られる価値があるって周りの馬鹿に思い込ませたもん勝ちだ！」

「そうか。でも大変じゃない？荷物背負って戦うのってさ」

黙りこくったアルドールの代わりに、エルスⅡザインが俺を嘲笑う。そんな奴を、俺も余裕の笑みで嘲笑ってやる。

「なあ、自称道化師さんよ。お前は他のジョーカーを知ってるか？」

「何？心理攻撃ってわけ？」

「俺は会ったぜジョーカーに。完全に遊ばれてた。見えない俺でも理解した。幸福値が桁違いだったのに。……俺はあいつに敵わねえ。対峙してるって何時心臓握りつぶされるかって気持ちになったもんだ」

そうそれは事実。あの得体の知れない影と対峙したときのような恐怖がこの少年相手には微塵にないのだ。十分油断ならない相手なのは解っている。それでも……ここに絶望はない。

「だけどな、てめえにはそれがねえ。あん時は空気の飲まれたよ
うなもんだが、なんとかかなりそんな気がするんだよ」

「言ってくれるじゃないか」

エルスⅡザインが真顔に戻る。怒りのボルテージが大分上がった来たようだ。よし、良い感じだ。別に俺たちはここでこいつを倒す必要はない。目的は余所にある。エルスⅡザインがそれを知る由は勿論ないが。

「お飾り王！本の虫！説明してやれ！タイトル『トランプとタロットの違い』」

かけ声としては妙な言葉だ。俺はそれを唱えて走り出す。

「え？」

「言つてやれ！アルドール！」

俺の付けてやった愛称では自分が解らないとは、何とも個性と自己分析の足りない男だ。

エルスの周りを浮遊することを止め防御に回った炎を切り裂きながら、俺はそんなことを考える。しかしどういう絡繰りか。切れれば切るほど炎の数が増えていく。これは本体を仕留めるまで終わらないっていうことが。

「ええと……トランプと小アルカナは似てるけど、まずスーツが違つて……それからコートカードの枚数に決定的な違いがある」

妹からの受け売りだろう。先程のことを思い出すのは俺もこいつらも辛い、そうも言つていられない。荒療治だが、教えて貰ったことを有効活用させてやれ。それで感謝でもしてやれ。それが今お前に出来ることだアルドール。

「なるほど、そこに気付きましたか」

神子は初めて俺を少し褒めるような口ぶり。知つてたならもっと早くに言えと怒鳴つてやりたいが後からにしよう。俺はそこまで空気の読めない男じゃないからな。

この場で空気の読めない奴は、部外者である一人に絞られる。鎖国された国にいたんだ。外に来てまだ間もない。此方の文化など余

り知らないことだろう。博打にトランプは使われるが、タロットのそれも小アルカナなんて持っている奴はセネトレアの船には一人もいなかったことだろう。だから、やはり解らない。

「……何勝手に内輪ネタ走ってるの？」

術者の戸惑いに、炎も揺れ動く。これは良い傾向だ。俺は押しを強める。

「そうか。わかんねえなら更に教えてやろう。俺の知るジョーカーは、空白のカードなんかじゃなかった」

「え!？」

これにはアルドルも驚いている。それが如何にもそれっぽい。

こういう馬鹿には最初から教えるよりも、教えずにいて天然サクラとして用いるのが有効活用。こいつが驚けば、エルスもこいつが演技で上手に嘘を吐けるような人間じゃないのは知っているからなのか、それを信じて疑わない。神子だけが、僕は何でもお見通しですみたいな不敵な笑みを湛える。それが受け取りようによっては俺の肯定にも見える。勿論俺は道化師の掌も手の甲も見てなんかいないわけだが、不審と自信喪失を植え付けるには持ってこい。

道化師からやられた分、他の奴の精神いたぶってストレス解消でもしなきゃ俺もやってられん。そのため話術があいつに似てしまっているかも知れない。

「タロツク生まれのお前にゃわかんねえだろうがな、小アルカナにはナイトクイーンキングの他に、もう一枚コートカードがあるんだよ。そいつはペイジ。言うなれば小姓、見習い騎士ってところだ。そしてトランプのジャックはまあ召使いやら騎士やらいろいろいる言われているんだが……もしこの審判が、トランプじゃなかったらお前

は一体誰なんだろうな？エルス「ザイン？」

もしもジャックがナイトなら、ページはナイトに敵わない。つまりこいつは俺や神子が倒せるカードだと言うこと。勿論確証はない。唯の俺の勘だが、神子が何も言わない辺り、少し信憑性を増している。俺の間違いがあれば、あの神子が正さないわけがない。あいつは常に俺の粗探しをしているような奴なのだから。

無意味に自信たっぷりに言っただけでやれば、その空気に飲まれるのは今度は奴だ。俺の言葉に、これまでの絶対の自信を失うエルス。集中力を奪えば、数術使いなんて恐れるに足りない。数式を完成させられない子供は俺の敵じゃない。

(馬鹿だぜ本当に)

敵の言葉に耳を傾けること自体が間違いなのだ。俺は道化師と対峙して、それを痛烈に学んだ。何も聞かずに敵は叩き斬れ。理由も言い訳も後から考える。

これで終わりだ。迷い泣く、振り下ろす一閃。それは手応えと呼ぶには、些か硬いもの。

「……っ！」

俺の殺気に我に返って、あいつは咄嗟に飛び退いたのだろう。それでも俺の得物のリーチから完全に逃れることは出来なかった。肩から胸にかけて、白いあいつの着物に一線の赤い色が滲む。しかし致命傷には至らない。隠し持っていたらしい小太刀が床へと落ちる。その鞘に急所を守られたのだ。

斬られた衝撃でふらついて床に、座り込むエルス。小太刀を拾い上げて、負けじとそれを構えてみせる。まだやる気らしい。

それどころか、その口元には再び笑みが浮かんでいる。怒りの余

り狂ったのか？いや違う、逆に冷静になっているようだ。

「……そうだな、ここは一つ礼を言っておこうか？」

「おいおい、どんな変態だよお前は」

とりあえずツッコミはしたが、空気が飲まれていく。空気から伝わる殺気に肌が震える。あ、死ぬなこれ。とは思わないが、少々やばいなと思う。

「契約数術って、君たちは知っているかい？まあ、代償を支払うことで、大きな数術を使えるようになる特殊数式のことだね。そしてこれは本来の数術とその代償とは独立した契約だ。それは契約相手によって代償が異なる」

専門用語を連発して、疎い者を迫力で飲ませる。理解出来ない気持ちが生む軽い混乱に乗じて、こいつはやる気だ。

「さあ、おいで……代償は支払った」

「下がりなさい！ユーカーっ！！」

名字で呼ぶのも時間が惜しいと、神子が大声で怒鳴る。それは今から起こることを知っているかのようだ。っていうか何時も思うんだが、解るなら教えるよ。勿体ぶらずに。

「いいよねえ、カーネフェルって。この国の夏ってこんなに暑いんだ。タロツクとは大違い」

笑うエルスⅡザインの足下から生じる耳鳴り、不協和音。何か、来る。とんでもないものが。

「くそっ……」

ランスの手前、恰好つけただけに俺は逃げ帰れない。まだその時じゃないんだとしても、こいつはここで暫く動けない程度には痛めつけておいてやりたい。

「てめーから逃げろっ！」

「この頼りないアルドールを僕だけで無事に逃がせると思うんですか!？」

なんとも回りくどい“助けて”があつたものだ。

俺が何かを言い返そうと思つたときだ。耳障りな雑音が不意に聞こえてくる。それは何処から? すぐ近く。エルスの足下だ。それは視覚的にもノイズ。目の前が黒くて小さい何かで所々遮られている。

「夏の悪魔力の一端。その恐ろしさ。とくと見せてあげるよ」

「お、おい! 何だあれ!! 俺にも見えるぞ!？」

「そりやそうですよ! あれは、空間転移の数術です! 唯対象の情報量が少ないからあれだけのことを引き起こしているだけで!！」

「少ないってあれがか!？」

耳障りなそのノイズは羽音だと俺は気付いた。唯その数が尋常じゃない。部屋中黒い点だらけ。それは群れを成しながら俺たちへと襲い来る。その数、ざっと……

「数えられるかあんなのっ!！」

「そうですね。10万匹くらいいるんじゃないですか?」

足が遅い神子を面倒臭いが抱えて走つてやると礼も言わずに後ろを振り返り、襲い来る漆黒の数を数える。そんな場合か。

「てめーももたもたすんな！走れ！！」

「あ、う……うん」

何ちよつとその役目は自分がやりたかったみたいなの顔してんだ馬鹿ドール。鍛えてもいない元引き籠もりのお前が、神子抱えて走れるわけねえだろうが。そう言うのは一丁前になってから言えっただ。

「運が良かったねセレスティン卿ユーカー？君がボクに致命傷でも負わせていたら、こんなものでは済まなかったよ？」

アルドールをすぐに殺すつもりがないのか、エルス＝ザインは追ってこない。追ってくるのは黒い風。いや、風なんてものじゃない。これは害虫の凱旋だ。

*

「……………騒ぎを起こすとは聞いてはいたが」

城の方は混乱の渦に包まれている。次々と城から逃げ出してくる人間達。それを追うのは黒い風だ。双陸はその光景に言葉を無くす。唯何となく、夏の暑さを思っていた。そうだな。夏だな。だからか。夏の風物詩だな。十分恐ろしい策だが、あの数術使い殿にしては可愛い悪戯だ。そう思うのは自分が慣れてしまったからなのだろうか？

やがてその風は散り散りとなり、街の中へと溶け込んでいく。そうして街のあちこちから上がる、悲鳴……悲鳴。

「やあ、双陸」

やがて背後から聞こえてくる声。振り向けば只今と言わんばかりの満面の笑みを湛えたエルス。

「何をした？」

「別に。唯ね、沢山人質を取っただけだよ」

少年はくすくす笑う。

「後はもう少しすれば、カーネフェル王の方から首を差し出しにやってくるよ。もしそこで彼が逃げたなら、国民は彼を見捨てる。タロツクへの服従の方がマシだと考えるかもしれないね」

そう言いながらエルスが合図を送れば、関所の門は開く。具合の悪そうな兵士達が、助けを求めるように頭を垂れる。それは全員金色の髪を持つ、女ばかりだ。

「本当にカーネフェルには女しかいないのだな」

子供ほどではないが、女人を切るのも些か抵抗がある。無血開城がなるならそれに越したことはなかった。

「それにしてもエルス……お前は一体何をしたんだ？」

「カーネフェルの人口の大半は女だ。それはカーネフェル軍も同じ事。ボクはその全員を人質にしたんだ」

事も無げに彼は言う。彼の先導に続いて、双陸率いるタロツク軍も都に入場。即位式のその日にこんな事になるなどと、彼らも思わなかっただろう。出来ることなら即位の前に終わらせられれば良かったのだが、もはや過ぎた話だ。

辿り着いた城は蛻の殻……とまではいかないが、殆どの男兵士は逃げていた。残っているのはやはり怠そうな女兵士やら、倒れ込んでいる女兵士やら。

「……ここが都か」

「これはまた……色っぽい歓迎だな」

「おい、あつちの姉ちゃん見てみるよ！すげえポーズで倒れてやがる」

「そうか、据え膳とはこういう時のためにある言葉だったのか」

それを見て目の色を変えた兵士もいたが、双陸は一睨みしてそれを黙らせる。タロツクには女が少ない。女を手にかけることが出来るのは上流階級の者ばかりで、多少飢えている輩がいることは否めないが、自分に任された者達のなかから、そんな不届き者は出したくなかった。そんなことを許しても、どうせろくな事にはならない。

「今度そこらの女に色目使った奴、ボクが直々に去勢してあげるから並んでね？ちゃんとチェックしてあげよ。ボクってさあ結構地獄耳だし？」

何が気に入らなかつたのかわからないが、エルスの微笑みに不届き者が震え上がる。この少年の恐怖もこういう時は役に立つのだなと少し感心した。

「しかし何が気に入らなかつたのだ？」

むしろこの少年なら煽り立てそうなものだが。唯の気まぐれだろうか？

「ボクみたいな可愛い子がいるのに、女だからって理由だけで他

の奴がちやほやされてるのって苛つとするんだよね。」

そういう問題でもないとは思うがプライドの高いこの少年のことだ、そういう問題だったのかもしれない。

「まあ、それでもねえ。うん、気持ちはよく分かるよ。もう我慢できないって奴がいたら後でボクの部屋においでよ。ボクがすごいことしてあげるから」

「俺の部下に変な色目を使わないでくれ」

「五月蠅いなあ。別にいいじゃないか。減るものでもないし」

「そう言う問題でもないだろう。お前がそういう怪しげな言動をしているから、何かタロツク軍への語弊が広まったんじゃないのか？」

自分たちがここまで進軍するまでに結構酷いことを言われてきたのだ。何処の誰が広めたのかわからないが、タロツクはこの偏った人口減少、少子化の所為で男ばかりが生まれる。そのため嫁を手に入れない男が多いとか、そのため衆道に走る輩がわんさかいるだとか。根も葉もない噂なのだがそれがカーネフェルでは偏見として根付いてしまっているようで、兵士でもない一般人が、人を悪魔みたいに罵って唾を吐きかけてくるわ石を投げってくるわ。正直温厚な方な自分も少しばかり……泣きたくなかった。ここまでよく我慢したと思う。後でこっさり泣いても良いと思う。

とか思っているのにこの少年と来たら……

「実はボクの性別気になってる人いるでしょー？二人つきりならあんなところもこんなところもじっくり見せてあげよう」

お前は男だろうと、言い返したくなかったが何やら疲れてきたので止めた。多分口調から少年だろうとは思っていたが、華奢な外見は

少女のようだし確信はなかった。最終的に知ったのは双陸もつい先日。手当をした時だ。だかそれとこれとは今は関係ない。俺の頭も支離滅裂だ。

「だから、いい加減にしてくれ。お前達もそこで生唾を呑み込むのは止めるんだ」

おかしい。ここまで進軍を続けてきて疲れているのか皆は。最初はエルスを胡散臭いだとか混血は信用できないとか薄気味悪いとか言っていた兵士まで、何やら息が荒くはないか？カーネフェルの夏は確かに物凄く暑い。タロツクの夏とは比べものにならない。その長い距離を超えてきたのだ。多少おかしくなってしまうても仕方がないのだろうか？しかしそこで拍車を掛けるような言動は慎んで貰いたい、切に。

「金髪巨乳の美女が良いって？このマザコンがつ！そんなに乳が好きなら酪農でも始めたら？毎日絞り放題じゃないか！っていうか時代は黒髪ロリに決まってるよ。組み敷いたときの犯罪臭と背徳感と征服欲が堪らないだろう？今同意した奴、後でボクの所に来るように。頭と頭の文字が付く別のものをなでなでしてあげる」

「正気に戻ってくれ呪術師殿っ！！お前もこの暑さに参って居るんだろう実はっ！！その店主！氷菓子を一つ頼む！！」

「へい、まいどありー！アルドールフラッペ一つお買い上げですね」

「ああ、幾らだ？……………アルドール？」

それが新たなカーネフェル王の名前か。しみじみとその名前を半数。

「いや、あの憎きカーネフェル王も、かき氷になると少し可愛く

「思えるよ。うん美味しい」

さくさくと氷菓子をぱく付くエルス。彼は暑さで頭の螺子が何本かやられてしまっているようだ。まだ何時も通りには程遠い。兵士達に一口ずつ配り歩いている。何あの優しさ。いつものエルスならそんなことしないのに。なんだこれ。何なんだこれ。俺は悪夢でも見ているのか？いや、いつものエルスの方が悪夢的存在だとは思いますが、それがなとないで何か腑に落ちないものを感じるのは何故なのだろう。

しかし何ともカーネフェルの人間は暢気なのだろう。何事もなかったかのようにまだ商売を続けている。一応俺たちは敵国の人間で、もう攻めて都まで攻め落とすというのに。平和呆けというのだろうか。違うと思うが、何にせよこの国は危機感が足りていない。敵ながら、心配になった。もう終わる国のことではあるが。

*

「それで人質とはどういうことなんだ？」

カーネフェルの王宮にタロツクの旗を掲げて、完全に攻め落とし、たことを知らしめた方がいいが、この都の人間の何割がその意味を理解しているだろう。まだ街の中では、アルドルクツキーやらアルドル饅頭やらアルドル煎餅やらが売り出されている。俺たちタロツク軍が攻めてくるのを知っていて、敢えてアルドル煎餅や饅頭まで販売したのかと思うと感慨深いものがある。そこまで売りたいか。何故その前に逃げないのだ。意味が分からない。

とりあえず城の物を物色して、久々にまともな食事にありつけ、兵士達は少し落ち着きを取り戻した。しかし今度は戦が終わった興奮から、また妙な熱狂に包まれる。

倒れた女性達は、第一聖教会に運ばせて、其方で面倒を見て貰う

ことになった。しかし原因は不明だという。それもそのはずだ。それはエルスが引き起こした数術による呪いなのだから。

「まあ、唯滅茶苦茶にして良いなら別にボクもさ、兵士の兄さんやらおつちゃん達が張つちゃけてくれてそれで良いと思うんだけど。今回はそうじゃないんだ。慣れないことはするものじゃないね。ちよつと疲れたよボクも」

あのおかしなテンションは彼が何時も通りを封じたがための空回りであり反動だったらしい。

「希望として祭り上げられた王様を、惨めな人間だってこの人間達に思い知らせてあげなくちゃいけない。もう夢も希望も見ないように、現実つてものを教えてあげるんだ。そのためには僕らが悪役になつちゃいけない。僕らはあくまで紳士的に物事を攻略しなくちゃいけない」

まあ、後は双陸に任せれば自然と上手く行くと思うけどと、嫌味が褒め言葉がよくわからない言い方で彼は俺を持ち上げた。そうして今回のネタを明かし始める。

「タロツクは毒の王国と呼ばれるだけあって、いろんな毒を持った虫がいるよね。その中には特徴的な蚊も居てね……君も聞いたことくらいはあるんじゃない？」

「……ああ、女だけを刺す蚊が居たな。確かに。しかし、あれはそんなに寿命の長いものではないだろう？」

男は刺されない。だからタロツク軍に問題は生じない。戦力低下が著しく現れるのは女兵士の多いカーネフェル軍だけ。そんな便利な物があるならもっと早く使ってくれればいいものを。そうは思っ

だが、別にカーネフェルの民を根絶やしにしろという命令が下っているわけではない。侵略は侵略をして終わりではない。支配した後
の事を考える計画性も大事。だからそう考えるなら、使い所は
今しかない。

「だからこそその温暖なカーネフェル様々だよ。ここは冬なんてないよ
うな土地だよ？そしてボクはちよつとした伝手でその蚊の全ての確立を
引き上げた。まあ、病気の質を高めたってことだね。この意味がわかる？
刺されれば女は必ず発病する。そういう仕掛けを仕込んだ」

簡単に言ってくれるが、さらつと凄いことを言っではないか？そんな
ことはあり得るのだろうか？万物が数字であり、その数を操る数術使
いにはそういうことも可能なのか。なるほど、にわかには信じられない
が呪いとは恐ろしい物だ。しかし毒と薬は使いよう。

「詰みということか？」

「あははっ！正解！王手だよ」

エルスは腹を抱えて笑い出す。少しいつもの彼らしくなってきた。

「そうだね、潜伏期間に個人差はあるけれど即日から一週間くらいで
発病。そこから一月以内に必ず死亡する。治療が遅れば、脳や身体に
後遺症が残ることもある」

「つまり……一週間以内に王が降伏しないなら」

「カーネフェルの人々はばったばった死ぬことになる。そしてその
病気の治療はボクにしかできない。ここからは噂祭りだよ、双陸！
ボク、そういうの大好き」

今まで言いがかりを付けられた分、沢山復讐出来るよとエルスは

くるくる回って喜びの舞を披露する。そしてにやりと悪い笑みを浮かべる顔が一番、彼らしいなとなく思った。

「聞いた話だと、あの少年王はシャトランジアから渡ってきた。そしてこの病が広まったのは彼が都に来た後だ。後は解るね？」

「……………我が軍の数術使い殿はなんとも恐ろしい事を言う」

「自分で病気を運んできて、それで逃げ隠れ。民を見捨てて逃亡するような王なら、民の方から願い下げ。無実の罪であろうとも、彼はもう有罪なんだよ。民のために首を差し出して当然。犯人は、彼なんだから」

味方が敵に、敵を味方にしてくれようと呪術師は言う。それはまるで奇術。魔法だ。恐るべき、言葉の魔術だ。

民のためにと無実の罪を被っても、民はカーネフェル王を崇めない。それが当然の務めだと言う。無実を主張して逃げれば、民が敵になる。逃げ出すことは許されない。王とは国と共にあり、共に生き共に死ぬべき定め。その役目を放棄することは、王の資格を失うこと。

「ま、逃げるならそれでもいいよ。唯、民は彼を見捨てるだろう。そしてタロツクに靡く」

机に方杖を付くエルスは、上機嫌。椅子の下で両足プラプラさせている。

「タロツクは毒の研究が進んでいる。だから自然と医学の方も発達している。だから偶然ボクらはその治療法を知っていた。王が彼らを見捨てるなら、可哀想だからって救いの手を差し伸べてあげるわけ。そうすればたちまち僕らはカーネフェルを救った英雄さ。これで人心までの侵略完了。ここで完全に王手ってわけ」

なんともまあ、呆気ない終わりだ。長らく続いた戦争の終止符がこんなあっさりしたものだとは誰が思っただろう。誰も思わない。だからこそ、城の外広がる異国の景色は……今もまだ暢気に騒がしい。侵略が終わった実感がまだないのだ。だから彼らもまだ負けた気がしていない。しかしそれもあと一週間だとエルスは笑う。

「ここまで来れば後はカーネフェルの民が王を虱潰しで探して吊し上げてくれる。君はまあこの都を支配してくれているだけでいい」

「これで、めでたしめでたしだよ」

O · 8 · Omnes aequo animo parent ubi di

相変わらず正々堂々戦わない奴ら。こんな侵略って……侵略って……

0 9 : Q u i s c u s t o d i e t i p s o s c u s t o d e s ?)

女装とか注意回。

俺はあいつの押しに弱い。それでもそれじゃあ駄目だと言うことをあいつと過ごした年月の内に学んだ。だからこそ、いつしかノーと言えるカーネフェル人になっていた。っていうか俺が基本否定姿勢になったの8割方こいつの所為だ。

「セレス！ここは一発今年もやろうよ！」

「だが断るつつつつっ！」

「というわけだ。頼むよユーカー」

「嫌だ。どういいうわけだ。あとセレス言うな」

ほら、また来た。基本相手にした時点でこいつのペースになる。しかし無視をしても勝手に了承に解釈されるから困る。

相手にしないように茶を片手に逃げ場確保のため歩いていけば、道の譲り合いで通せんぼ状態の均衡。ちよつと違うのは譲り合いのためそうなっているのではなく通せんぼの方が主旨として機能していると言っことだろうか。

「お前しか頼りに出来ないんだ」

「そんなこと言われても嫌なものは嫌だ」

どうして俺が待っているようなことは頼まない癖に、こつこつ小さなどうでもいいような事ばかり俺に押しつけようとするんだ。

このままじゃ茶が危ない。ティーカップを机へと避難。その隙に肩を掴まれる！やられた！しかしそのままやられっぱなしじゃ居られない。押し返すため奴の肩を押し返し距離を取る。

「俺とお前の仲じゃないか。今ならそこで買ってきたアルドール

飴も付けてやる。お前好きだる林檎飴」

「唯の身内だろ。そんなんで丸め込もうたってそうはいかないからな。っていうか明らかに着色料使ってるような真っ青に染めやがって！林檎と言えば赤だろうが！なんで無理矢理アルドールなんかにあやかかって青にしやがったんだよ！明らかに毒入りっぽいじゃねえか！むがつ……」

「よし。食ったな。返品不可だから。いや代金は要らないから気にしないでくれ。というわけで後はよろしく」

なんとという外道。林檎飴を取り出す、一瞬の隙を与える振りをして拘束が緩んだことで逃げ出すチャンスを見つけた俺の、その口に思いきり林檎飴を叩き込む。そのまま壁際まで有無を言わず押しつける。顎が外れるかと思った。口から林檎が抜けない。俺が藻掻いている内に、話を完結させやがった。だが、そうは問屋が卸さねえ。

俺は得物を仕方ないから口の中にぶっ込んだ。下手すりゃ口の中が真っ赤な洪水だ。しかしそうも言っていられねえ。愛剣で林檎丸ごと一個を切り分けて何とかティーカップへと吐き出した。レモンティーがアツプルティーになっちまった。しかも何か着色料で青い。何これ。泣きたい。

「だれがよろしくされるもんか！っていうか窒息させる気か！こんなでかい林檎飴丸ごと咽に突っ込みやがって！」

「生憎それはノークレームノーリターン商品なんだ。悪いな」

爽やかに手を振るな。これから準備をしてくると言わんばかりの良い笑顔。この時ばかりは軽く殺意を覚えた。

「殺されかけたのにクレームなし強要か！？悪いのはお前の性格だよな」

「それからお前の往生際の悪さとか？いい加減観念してくれ。俺の願いなら何でも叶えてくれるって言ったじゃないか」

「この卑怯者！つか俺にだって出来ることと出来ないことがあるんだよ！」

「大丈夫、お前はやれば出来る子だよ。唯やらないだけで」

「やりたくねえもんはやりたくねえんだよ！」

この時俺はもう情けないけど半泣きみたいな顔になっていたと思う。もう嫌だこいつ。なんでカーネフェル人なのにカーネフェル語通じないんだよ。

そんな口の中も気持ちもブルーな俺の傍らで、何やらきゃっきゃきゃっきゃ騒いでいる奴らが居る。一応言っておくが別に猿ではない。比べること自体猿に対して失礼だ。

「嫌だ。このアルドールかき氷微妙にいける。これアルドールの癖に美味しい。レモンとブルーハワイがハーフになってて一つで二味楽しめる。なかなかいいねこれ」

「ていうかイグニス、ハワイって何処？っていうか何味？」

「さあ？そんな細かいこと気にしてたら君将来禿げるよ？でもこれ溶けるとシロップ混ざって変な感じになるね」

「お前らも止めるおおおおお！っていうか現実逃避してやがんなアルドールの阿呆っ！！何陰でいちゃついてやがんだこのバカツプル！！」

その人間猿擬きはアルドールと神子だ。城からの逃亡の際に露天で菓子買う余裕があるんだから本当何なんだこいつら。大物なのか馬鹿なのか。

何はともあれ俺が林檎飴殺人未遂事件の被害に遭ってる最中に、こいつらはかき氷ついていちゃついていたかと思うとやっぱ軽く殺意が沸く。こいつら俺の知ってる親友と違う。俺は親友のはず

の男にリアルタイムで殺されかけてたんだぞ？

「心外ですね。僕とアルドールはそんなんじゃありませんよ」

やれやれと溜息を吐く神子。舌が不健康に青い。ブルーなんちゃらアルドールの所為だ。

「そうだそうだ俺とイグニスとは唯ちよつとかなりとてつもなく仲の良い親ゆ……」

「そうですね僕とアルドールは唯のご主人様しゅじんぎょうと犬ですよ（勿論僕が前者）」

「何か嫌な副声音聞こえたぞ、おい」

この神子の照れ隠しは、割と鬼畜だ。こんな照れ隠しは嫌だ。しかし俺の相方と比べてどちらがマシかと言われたら、1分以内には答えられない自信がある。俺って対人運悪いのか。っていうか俺がましな運つてあるのか？何も無い気がしてきた。

しかし馬鹿にされたら三倍返し。聖職者としてそれってどうよな神子様は、俺に言葉の刃を投げつける。

「大体此方からすればあなたの方が余程いちゃついているように聞こえましたか？故アスタロット嬢に男はノーカン浮気おくとでも言われたんですか？」

「いちゃついてねえっ！！耳腐つてんじゃねえの！？」

この脳味噌お花畑が。殺人未遂見ておきながらあれがいちゃついていただと？お前の言う世界が俺には全く理解できない。

「そうですねイグニス様。あれは俺がこいつをからかっていただけですよ」

「からかってたのかよ！やっぱお前最低だな！」

俺の相方の照れ隠しも割と酷い。俺を下げることで基本的に世界の均衡を保とうとする。俺は存在謙譲語人間か。

「大丈夫だ、9割は本気だったよ」

「何爽やかに言ってくれたところでお前は10割最低だけどな」

第一、その本気の内容自体が俺をからかい舐めているようにしか思えないのだ。

「いいか。よく考えてみる。俺は今何歳だ？」

「17だな。おめでとう」

「ありがとう。で、俺は17の野郎だ。それはちゃんと理解しているな？」

「ああ。勿論。でもお前は背が低いから十分まだまだこなせるさ」
「こなしたかねえんだよ！！第一せつかくあのふざけた祭りが中止になったっていうのに何であんなことしなきゃならねえんだよ！……そりゃあ城に忍び込んでエルスの野郎捕まえるには必要かもしれないけど俺より適任いるだろ」

「え？中止？」

「になっただら？」

「え？」

「え？」

「なつてないって」

「は？」

「うん、だから“女装男装フェスティバル”は今年も例年通り実施するって」

「馬鹿だ！馬鹿の巣窟だこの国っ！いつペン滅びろっ！！」

「現にもう一回乗っ取られてますけどね」

＊

「……つとまあそう言うことなんですよ」

「クソ神子、煎餅食いながら喋んな」

ユーカーは呆れていた。何とも緊張感に欠ける絵面である。美少年改め美少女神子がばりばりと異国の菓子を貪りながらやる気無さそうにそう言ったため流石の俺もスルーは出来なかった。

ここは第一聖教会の一室。運び込まれてくる患者達の治療で修道士と聖十字兵達は忙しい。階下の大騒ぎを聞きながら、俺たちは今後のことを話し合っている最中だった。そんな時に神子はこの様だ。

「五月蠅いですね……何か怠いんですよ」

神子的にはかき氷の方がヒットしていたらしい。食べ慣れない煎餅は薄味で特徴に欠ける。しかしその歯ごたえと特徴的な音がツボに入ったらしく無意味に音を立てて嚙っている。ストレスのために飼い鳥が止まり木を嚙っているそれとよく似ている。

「逃げる分には良いんですが、逃げたら逃げたで問題が起きてしまふ。流石に彼方も簡単には騙されてくれませんね」

「それである虫の治療ってお前でも無理なのか？」

「タロツクとの外交は限られていますからね。本当に山奥の方の風土病なんて持ってこられたらどうしようもありませんよ。回復数術にしてもそうです。仕組みを理解していなければどうしようもない」

お手上げですと神子は言う。

「まあ、もっとも虫による感染症だというなら虫が移動する前に

この街ごと焼き払うのが一番じゃないですか？タロツク軍も言うこと聞かない都貴族も全滅させられますし」

「そんな策があつて堪るか！適当なこと言うなよな！」

本当に疲れているのか、神子は頭の螺子がぶっ飛んでいる。

「つて怠いつて……まさかお前刺されたのか？」

俺がそれを尋ねればやっと気付いたのかこの阿呆共がと言わんばかりの目で見下された。やっぱりこいつは可愛くない。可愛いのは顔だけだ。人間は顔じゃない。顔が良ければ性格も良いなんてことは絶対にあり得ない。顔が良くて性格が悪いか、顔が悪くて性格が悪いかだ。それ以外の人間に出会えたら、それは多分奇跡か、自身自身が奇跡的に愚かで馬鹿であるかのどちらかだ。

「どういう条件でどういう症状なのかを知るにはサンプルが要りますからね。一匹捕まえて僕に刺させました。お陰で大分解りました。ああクソ怠い」

「い、イグニス……大丈夫？」

おろおろと声を掛けてくる親友アルドールを相手に、神子は忌々しいと言わんばかりに舌打ちをした。俺は親友という意味を一度辞書で引いてみたくなった。たぶん俺の知らない意味が書いてあるに違いない。

「被害者の統計データから見て、専らこの蚊は女性だけを狙います。そして怠さに吐き気、高熱、頭痛などの症状を引き起こします」

淡々と神子は言う。そして彼女はこんな言葉で締めくくった。

「そして……死に至らしめます」

これには室内の人間すべてが絶句した。

「これは由々しき自体です。カーネフェルの温暖な環境にこんな害虫あんなに持ち込まれたら最悪……カーネフェル人は絶滅しますよ」

「イグニス様……何とかする方法はないのでしょうか？」

神子の言葉に言葉を返すことが出来たのはランスだけ。それに神子は、しばらく考え込んで小さく息を吐く。まあなんとかありますよと。

「……事態の収束はまもなく始まるでしょう。彼らの目的はあくまでカーネフェル侵略であり、カーネフェル人根絶ではないのですから」

「んじゃ放置で問題ねえって？」

「はい。ただしこのままではアルドールの名は出ても逃げても地に落ちます。まあその辺はおいおい何とかしましょう。情報工作は教会や僕の部下に頑張らせていますし、其方でなんとか凌いで貰うしか無いでしょうね。とりあえず都の外にあの虫が拡散しないよう、境界数式は張りました。最悪都から人々を避難させれば問題ありません」

解決策はある。しかし、その妨げがあるのが問題なのだと神子は表情、言葉を洩らせる。

「本当はそこに冷却数式を流して全滅させるのが一番なんですけど、都の関所をがっちりとタロックにガードされているのが痛いんです」

「俺らが前線送りになる前だったしな……関所の奴らなんであっ

さり通してやったんだか」

「それは勿論都貴族の派閥争いですよ」

「……はあ？」

ユーカーの呟きに、イグニスはそのような答えをもたらしした。

「今日、アルドールに近寄ってきた貴族達が居たでしょう？そこに入れなかった人間達……つまりは先王の時代から派閥争いに負けてきた都貴族達ですよ。彼らは革命を求めている」

「か、革命……？」

「自分たちに権力が回ってくるならば、国を明け渡しても構わない。王が別の人種になっても別に良いという人達ですよ。おそらくあのふざけた祭りを開催に押し切ったのは彼らでしょう。普通ならそんなことやれっこありません。開門に関わったのも正直彼らが怪しいと僕は睨んでいます」

タロツク軍よりある意味厄介ですよと神子は大きく嘆息をする。

「つまり今僕らに必要なのは、カーネフェルの味方です。ついてきてくれる民が居なければ王も国も話になりません」

「そうはいうけどよ、都は捨てるんだろ？」

「この性根の腐った人々は手に負えませんよ。双陸殿とやらのお手並み拝見させていただきましょう。そこで良い感じに人格者に矯正してもらったところで奪い返します」

「それじゃあイグニス……俺たちこれから、どうすれば？」

神子からの外道発言を貰ったところで、アルドールが不安そうに指示を仰いだ。それに対して神子は胸を張って答える。しかしあまり胸はない。視覚数術で誤魔化しているのだから当然か。

「そこです。北部へ行きましょう」
「はあ!？」

素っ頓狂な声を出したのは俺。目を瞬いているのがアルドール。絶句し石化したのがランスだ。そうだよな。こいつにとって、北部は地雷だ。

「都を落としたことで、まあ北部攻めの軍勢も都に向かうか、国へ帰るか。各地の守りは手薄になります」

神子は卓上の地図を指さす。

「僕らはそれを迅速に各個撃破。タロツクの魔の手から北部の人々を救い出し、支援者を増やしていきます。そうですね、新たに北部に都を設けるのも良いでしょう。そして南部に宣戦布告するのです」

言葉で言うのは簡単だ。しかし宣戦布告なんて言われても……そういう気持ちは拭えない。どうにもならないのではないか。それは俺もあいつも、アルドールもきつと抱えている不安だ。しかし神子は、ここで切り札を表に出した。

「そしてそこで僕はシャトランジアを介入させます。聖十字の介入はそれだけで意味を持ちます。ここまで長らく中立をしてきた我々がカーネフェルの味方になる、それはすなわちタロツクが悪だとシャトランジアが認識したということ」

奴はさらつと云つてのけたが、奴が黙ると場はしんと静まりかえる。誰かが息を呑む音。それは俺だったのか別の誰かだったのか。それもわからないほど、俺は興奮していた。腹の底から湧き上がる

のは早すぎる歓喜。こいつはなんとかなる。なるんじゃないか？ そう思わせる才には……確かにこの神子は長けている。煽動者としての資格は十二分だ。アルドルなんか見開いた目からポロポロと涙を流して泣いている。鼻を嚙りながら神子の名前ばかりを繰り返しながら。

「おい、そいつはまさか……」

「イグニス様……」

「それまでの、悪評すべてが無かったことになります。アルドルへの悪い噂、その全てがタロツクの情報操作！人々を騙していたとそうなるわけです。下手に人格者であればあるほど、疑われた時は胡散臭いものですよ。そうやって今まで我々を騙していたのか……なんてね」

神子の自信たっぷりの言葉に、北部に行きたくないはずのランスもそれを忘れたように微笑んでいて、自然と俺の表情も軟らかくなる。それを見計らったかのように、神子は満面の笑みになる。

「だからそのためにも都からどう逃げ出すか。話はそこに戻ります。勿論僕の空間転移という手もありますが、それはエルスIIザインに気付かれてしまう可能性が非常に高い。そしてアルドルの空間転移は不安定。前回のは唯のまぐれみtainなものですし、話になりません」

泣き笑いをしていたアルドルが、また泣きに帰りそうになっている。怠いのは解るが少しはセーブしてやれ。こいつも病み上がりなんだから。つい数時間前に妹亡くしたばかりなんだぞ。

「そのためには都貴族に親しい人間をたらし込む必要があるわけです。そうしてまんまと外へと逃げ出すためにも……あの祭りを利

用しない手はありません」

無理矢理話を冒頭へと戻す神子。いちやついてた癖にしつかり俺たちの会話をキャッチしていたらしい。侮れないガキだ本当に。

「んじゃ神子お前頑張れ。いけるいける。お前混血だし美形だろ頑張れ。そのままでも十分女装みたいなものだろ」

「生憎今日の即位式で僕とアルドールの顔は多くの人に知れ渡ってしまいました。視覚数術はモブに溶け込む作戦で僕らはやり過ごします。となると消去法であなた方に頑張ってもらうしかないんですよセレスティン卿？」

「ならランス！お前やれ！お前の方女顔だろ！お前美形だし！」

「そうしたい所なんだが、そろそろ俺は背が問題かなと」

「いけるいける！長身の美女つて設定でいいじゃねえか！」

「まあ、それはそれで良いんだが、俺はあの人の顔を立てるためにも毎年参加していたわけだろ？お前が逃げてたから。別に責めるわけじゃないんだが、二年交替で出ようって譲歩してもお前は逃げたよな？だから俺は毎年出てて？女装のレパトリーももう粗方尽きてきたんだ。わかるよな？俺の女装姿は割と晒し者にされてたから？俺が化けたら簡単に気付かれてしまふと思うんだよ」

責めてる。絶対責めてる。目が笑ってない。

「でも、嫌だっ！！」

この年で女装だなんて、屈辱以外の何物でもない。俺のプライドにヒビが入る。

俺は部屋から飛び出して、逃げる、逃げるっ！追ってくる足音がある。本気のあいつなら最悪屋内でも馬呼びだして追いかけて来る。何か背後で長つたらしい愛馬名を叫んでいるあいつの声がする。遠

くからパツパカパツパカ何かが駆けて来る音がする。そして窓硝子
を突き破って何か飛び込んでくる音。来た！完全に最強装備で来
やがった！とんでもねえなああの騎士は！常識とモラルはどうした！
目的のためにも手段は選んでくれ。

（くそっ！このままじゃ時間の問題だ）

俺は息を忍ばせ、教会の一室へと逃げ込んだ。地獄に仏だ。衣装
部屋をここで引き出した俺は幸運だ。流石は俺様コートカード。い
や、こんなことで幸運消費したんだったら泣きたい。いや、そんな
はずないよなきつと。だってこの部屋……

「女物の服しかねえ……」

俺は何処までも割と、不運だった。

*

所用のためにのために第一聖教会を歩いていたトリシユは、知人
の顔を見つけて声を掛けてみた。あの小五月蠅い相方とは、今は一
緒にいないらしい。なんとなく珍しいと思っただが、よくよく考えて
みればここ数年はそんなものだったかもしれないとも思う。むしろ
今朝が珍しい部類に入ったのだ。

「おや、ランス。奇遇ですね」

「ああ、トリシユ！ユーカーを見なかったか？」

「いえ、見ていませんが」

仮に見ていても眼中から無意識の内に削除していたのかも知れな
い。そんな風にトリシユは思う。あの男は好きじゃない。いつも喧

嘩腰で、貴族らしさが欠片もない。同じ地方貴族なのに、この従兄の青年と比べてどうしてあそこまで品性がないのか。本当に血縁なのか疑ってしまいそうになる。

王からも信頼されていたこの立派な騎士が、どうしてあんな小物のことを構いたがるのかわからない。ここ数年は、昔ほどべたべたしなかったとはいえ、何かにつけて彼のことを考えているのはすぐ解った。この騎士が一目置くくらいだ。何かあるのかと思つたこともかつてはあつたが、僕の思い過ぎだった。それでもランスが彼を構つのは、彼が身内だからに他ならない。この騎士は親馬鹿ならぬ従弟馬鹿なのだきつと。

「何かあつたんですか……」

と聞きかけて、風のように走り行く友人に手を振る暇もない。あの邂逅は一瞬。残されたのは馬の嘶き、蹄が床を蹴る音。

「……セレストイン卿ユーカー。恐ろしい男だ」

あのアロンドイト卿ランスをここまで狂わせるとは。冷静沈着で真面目で規則と命令を忠実に守るあの男が、静寂を重んじる教会内を愛馬で駆けさせられる男は、恐らく世に彼一人だけだろう。何があつたらあんな風になるのかわからない。容姿に性格、家柄才能、欠点の一つもないはずの友人が唯一持つ欠点は、彼絡みの問題だけだろう。しかしあの人を舐めた性格の男のどこにそんな力があるのか僕には全く理解できない。あんあ身内が居ても僕は可愛いとは思わないだろうと断言できる。というかまず縁を切るね。

誰に言うとも無しに、僕は頷く。頷いていた。言うなれば前方不注意。だから此方に駆けてくる少女の姿に気がつかなかつた。それに気付いたのは後ろばかりを注意していたらしいその少女とぶつかった時。その衝撃に傾ぐ彼女の身体を支えた時だ。

「ああ、すみませんお嬢さん」

思わず彼女の手を掴んだが、彼女は僕を見上げるなり手を振り払い少し青ざめた顔で僕を見る。見れば彼女の姿は修道女のそれ。男慣れしていなくて、男性恐怖症の気でもあるのだろうか？

「え、ええと……お嬢さん？あの、怖がらせてしまったのでしたらすみません」

一応相手は女性だ頭を下げ、軽く会釈するが……彼女の僕を見る目は決して好意的な物でない。初めて会うはずの相手に、ここまで拒絶されるなんて……こんな初めてだ。何故だろう妙な気持ち胸に湧き起こる。

美形と謳われる僕を相手に、頬を赤らめず狼狽えもせずここまで冷たい絶対零度の視線を向ける女性なんてあり得ない。女性として何か欠陥品なのではないだろうか。

(ああ、そうか……彼女はよく見えていないのか)

彼女はあの憎き男のように……いや違う。あいつは右目だ。彼女は左目を隠している。眼病でも患っているのだろうか。その右目はスカイブルーよりもうすい水色。氷のような微笑みを湛える彼女によく似合っていた。その目は外の光を眩しげに見つめていたから、やはり目があまりよくないのだろう。

「お怪我はありませんか？」

ぶつかった時の彼女を案じるように、彼女の目を覗き込む。この至近距離なら……少しは違う色をその目に映してくれるだろう。そ

う思ったばくを襲ったのは、予想だにしない痛みだった。彼女に頬を打たれたのだと気がついた。いい加減離せという意味だったのか。言われてみれば確かに僕は彼女の片手を掴んだままだった。

怒り気味の彼女の表情は、何故だろう。初めて会う気がしなかった。理不尽な痛みに呆然としている僕を残し、彼女は僕から離れる。

「……………」

そして彼女は最後まで無言のまま僕をすり抜け走った。ベールから覗く金髪がとても綺麗だった。

「ま、待ってくれ！君っ！君の名前は……………」

振り向いて、走り去る彼女の背中に追いつがるよう叫んだが、彼女は何も答えてくれない。唯、足のスピードを更に早めただけだった。

「……………う、嘘だ」

僕は歓喜に震えていた。間違いない。彼女は僕のイブーだ。この妙な既視感は、僕と彼女が以前出会っているからだ。そうだ。あの男は本の夢物語だと馬鹿にしたが、そうじゃない！そうじゃない！あれは本当にあったことだったんだ。言うなれば前世の記憶という奴だ。今度こそ僕と彼女が幸せに寄り添うことが叶うようにと、そのために語り継がれた物語なんだ。そうだ。あれが出版されたのは数十年前だけど。それは元々あの作者のオリジナルではなく伝承にあった物語だ。あれは僕に前世の記憶を呼び起こさせるための鍵だったのだ。

彼女はそれを知らないから、あんな風に僕を拒絶したんだ。可哀想に。今頃自分でも気付けない無意識の海その深き海溝、彼女は自

分を責めている。嗚呼、そんな必要はないのに。僕はそんなことで君を嫌ったりはしない。何もかもを許せるんだ私のイズー！！
そう、多くは望まない。唯この腕の中に君を抱き締めさせて欲しいと思う。そう願うのはいけないことかい？私のイゾルデ！！

*

「何かすげー寒気したわ。あの馬鹿完全に目が逝っちまった」
「それは大変でしたねセレスさん」

俺が身震いしながら先の出来事を語れば、騎士見習いの少年はくすくすと笑みを溢した。プラチナブロンドの金髪は光のように柔らかで、美しい色をしている。その対比と言わんばかりに深い青色はサファイアを溶かして固めたような深みがあった。まあ、絵に描いたような美少年。将来はランス並にモテる男になるんだろうさ。別に羨ましいとは思わんが。

「お前までセレス言うなパー坊」
「パー坊言うの止めてくれたら僕も止めてあげます」
「なら諦めるか」
「そこで諦めないで下さいよお……」
「ならシヴァルで」
「縛らないでください」

泣きそうな顔をされたので流石にこれ以上は苛められない。悪い悪いとユーカーが笑ってやれば、少年も笑みを溢す。ここまですごいものやりとり。悪びれなく呼ばれる分には嫌味だとは思えない。そもそもそれが何故侮蔑か、この少年は知らないのだから。

最近人間関係に悩まされてたから大分癒される。年下ってこういう物だよな本当は。やれ某神子、やれ某カーネフェル王。あいつら

がおかしかったんだ。

「ま、お前も無事で良かったよパルシヴァル。しかし久しぶりだな。俺ここ一週間くらい城にいたんだが、全然会わなかったな」

「はい、僕は僕の任務に行っていました」

「そうか。お使いか」

「お使いって言わないでください」

「で？今度は何を任されたんだ？」

「はい！今度のお祭りのために皆さんお洋服を仕立ててらっしゃるみたいで、リボンやレース、フリルといった素材が不足しているって言うので」

「街から貴族街まで届けさせられていたのか」

「はい！」

阿呆かと怒鳴りなくなつたが、この少年に怒鳴っても仕方がない。こいつはこいつでそれが仕事だと信じているし、外の状況も知らなかった。与えられた任務を疑うことなく純粋にこなせるその子供らしさがある意味羨ましい。

教会を無事逃げ出して街をぶらついていた時だ。この騎士見習いに声を掛けられた。他に行く充てもなかった。だから暫く身を潜めるためにこいつの部屋を借りたのだ。勿論あんな事があつた後だ。城には帰れない。タロツクにもう乗っ取られている。

ついでに言うなら王宮騎士ですら砦に住まいを移されるご時世。城勤めの騎士見習いですら、街に家を借りさせられている。だからこいつの家はまだ無事だったのだ。

砦住まいで遠出の任務ばかりの俺とこいつはその合間、城で時々顔を合わせる程度だが、その度にパタパタと駆けてくる何だかんだで可愛い奴だ。弟が出来たみたいで結構構っていた気もする。

「にしてもパー坊、よく俺だつてわかつたな」

「はい！僕はいつつもセレスさんを見てますから」

「はあ？」

「僕はセレスさんみたいな騎士様になるんですよ」

「いや、あのな。俺よりランスの馬鹿とかトリシユの阿呆あたりのが妥当だと思うぞ？一般論的なあれでは」

「そんなことないです！セレスさんは凄いです！普段はただらしててもやる時はびしつとやってくれるセレスさんは恰好良いです！」

純粋な目でキラキラとそう褒められるのはこそばゆい。流石の俺も少しは照れる。

「それにセレスさんみたいに女の人寄せ付けない気迫みたいなのが凄いです！」

「ああ……そう」

「俺は女なんか興味ないぜみたいな斜めに構えてるところが格好いいです！剣一筋つてところがクールです！」

でもこんなに純粋な子供に、お前童貞だろたぶん一生と褒められた時つてどうすればいいんだろ。ちょっと泣きたい。俺だつて婚約者が死んでなければその内卒業してたかもしれないんだよ。もういいよ。お前がそこまで言うんなら、もう俺一生清らかさんでいいや。どうせそんなに余生長くないし。フラグ立つてる女もいねえし。

「それに僕、セレスさんのその目好きです。格好いいです！」

「ああ、眼帯な。結構便利だぜ？暇なときに片目ずつ向こうの山の木の数数えて鍛えて視力アップとか……あ、やべ。そういやお前これ黙ってるよ？男と男の約束だからな。一応これ見えないつて事で通してんだから」

「見えないんですか？」

「まあ、昼間はあんまり見えないな。今はちょっとチカチカして辛いぜ」

「ああ、それでだったんですね？」

パルシヴァルが両手を打ってにこりと笑った。

「さつきから後ろにいるランスさんに気付かないなんておかしいなって思いました」

しかしその笑みが見ている俺の背後が恐ろしい。振り向けずにいる俺の肩にぼんと手が置かれる。置かれた瞬間、びくつと身体が震えた。手は張り付いたように離してくれない。

「お前がここまでやるとは思わなかったよ、なあセレス？」

「その目は今となっては俺とお前だけの秘密みたいなものだから？まさかねえ？何があってもお前が右目を晒すことだけはないと思っっていたんだよ俺は」

「勿論俺とお前の仲だろう？両目を出してしてくれたなら俺だっですぐに解ったと思うんだ。だけど右目だけだろう？それじゃあ俺もすぐには気付かないよ。おまけにそんなに髪までまっすぐ整えて？結構伸びたんだな似合っているよ」

「そうそう、お前がなかなか見つからないからお前と仲の良いこの子の家を訪ねてみたんだったかな。お前はあんまり人付き合いが多いタイプじゃないからね。これで万が一トリシユの所にでも逃げ込まれていたらと思うと見過ごしてしまっていたかもしれない」

「いや、でも俺より付き合いの浅いこの子がお前に気付いたというのに俺が見過ごしたと思うと俺は俺が自分で情けなくてね。まだ

まだお前を見足りないと言っことなんだろうな」

変なところで負けず嫌い発動しないでくれ。そう叫びたいが、声も出ない。首が石になってしまったように動けない。っていうか身体全体が。蛇に睨まれた蛙の気持ちってこんなだったんだな。落ちて着け落ち着け。深呼吸深呼吸。よし、咽に張り付いていた何かは取れたような気がする。

「ところでセレス、俺に何か言うことはなかったか？」

「いい加減放せよ。セクハラで訴えんぞ」

もうこの空気に耐えきれず、いつそ殺せと振り返る。そうして睨み付ければ……あいつが軽く目を見開いている。

「……失礼、これは訴えられても仕方ないかもしれないな」

「は……!？」

「お前、気合い入り過ぎだよ！一人でそんなメイクまでして、そこまでして逃げたかったのか？そんなに嫌だった？」

「い、嫌に決まってるだろ馬鹿!!」

「あはははははははは！嫌なのに、そんなに気合い入れて女装してたんだ……っはははははは!!」

本末転倒だとランスが笑う。

「え、マジ……そんな笑うほど俺おかしなメイクしてたか？」

「いいや、これじゃ解るはずがないってことだよ」

お前の本気の女装を甘く見ていたと、相方が忍び笑いをもう忍べていない。似合ってるよと整えた髪を撫でられるがそんなに嬉しくはない。やっぱり馬鹿にされている感の方が強い。

「でも僕わかりましたよ！」

ランスに撫でられている俺を見て、自分もされなくなったのか褒めて褒めると寄ってくるパー坊。とりあえずよしよしと頭を撫でてやると満足げ。ほんとこいつは可愛いな。どこぞの神子とは大違いだ。見てて癒される。やっぱ年下はこうじゃねえと。年上連中に囲まれてきたし、こういうのは新鮮だな。

俺が癒されていると、耳に何か聞こえた。それは本当にすぐ隣から。

「何やってんだお前」

何故か相方が舌打ちしていた。相方が俺の変装を気付けなかったように……俺も時々相方がよくわからない時がある。唯何となく割と大人げない男だなあと思った。

0'9:Quis custodiet ipsos custodes? (後

ジャンヌがなかなか出てこないの。6章前半ヒロインはセレスち
ゃんでいいや。

“ねえ、お兄ちゃん”

“何？ギメル？”

“私、アルドル大好き！”

勿論お兄ちゃんも大好きだよと彼女は言ってくれたけど、僕は世界が揺らぐのを感じていた。嗚呼、地が落ちる。天が降ってくる。僕が空へと堕ちていく。

“僕とあいつ、どっちが好き！？”

僕はそう食い下がった。好きにもいるんな好きがある。幼いながらにそれは理解していたみたいな妹は……

“どっちも！”

と笑った。好きの意味が違う。それでも同じくらい大切だよと言ってくれた。ただどあの日の僕は恐怖した。

だってこんなにも恐ろしいことがある？生まれたときから一緒に生まれる前から一緒にいる僕。その僕と同じところまで、出会って間もない彼がやって来たなんて認めたくない。本当ならあり得ないことだよ。彼は一瞬で、僕の大切な宝物を奪っていった。世界の誰より妹が可愛かった僕は、それはとてもショックを受けた。

その反動から、僕が彼を憎むようになったのは極々自然な流れだろう。最愛の妹を憎むなんて発想僕にはなかったからね。

そういうわけでねアルドル。僕は君が嫌いだよ。大嫌いだ。少なくともあの日まで僕は君を世界の誰より怨んでいたよ。

“大好き、お兄ちゃん”

彼女の言葉だ。別れの言葉だ。それが今も耳から離れない。それは多分僕だけじゃない。だからこそ……一度だけ、チャンスは僕の手にはある。

*

憂鬱な昼下がりの白昼夢。頭痛を感じるのは、何も熱の所為だけじゃない。

イグニス は頭を抱えていた。

うとうととしていた頭に届いた、部下からの情報は、酷使している脳を更に痛める問題だ。

騎士二人が消えたことで、静けさを取り戻した教会の一室。その溜息だけが響いて空気の中へ。そんなことを何度か繰り返した頃だろうか？即位したばかりの、そしてその日の内に玉座を失った少年王。彼はうとうととしていた僕の隣で本を読んでいる。いつの間にか肩を貸してくれていたらしい。軟弱者だと思っていたけど、やはりと言うべきか。時間の止まった僕よりずっと、しっかりした肩だ。だけどその双肩に一国は重すぎる。だからこそ僕が支えているのに、こうして僕を支えようとする。憂いるべきは国の未来だろうに、自信の不幸だろうに、悲しみからまた目を逸らしている？

(いや違う)

乗り越えたわけでもない。唯、考えないようにしている。大丈夫だと思い込んでいる。僕が傍にいれば、それを乗り越えられると信じてくれている。その上での余裕。余裕なんかあるはずなのに、あると思いついて入っている馬鹿な男だ。そんな虚勢の余裕で僕を哀れむ。

劣る優しさに、僕は頭痛が悪化するのを知る。

「イグニス、大丈夫？」

僕の目覚めに気付いて、心配そうに僕を見つめるアルドール。そういう視線を送られる度に、僕がどんな思いに苛まされるか君は何も知らない。それが君の所為だとは言わないけれど、言いたくなる葛藤くらいは気付いて欲しい。ああ、気味は何も悪くない。悪いのは僕だよ。それでもねアルドール、僕だって苛立つことはあるんだよ。例えば思い通りにならない不測の事態とか……

「……君の悪運には本当参ったよ」

「え？」

ここで君を突き放すのは簡単だ。だけど、物事にはタイミングがある。迂闊なことは出来ない。だけど君がそうやって僕にだけ依存するような人間じゃ駄目なんだ。

後は部下に任せて僕はシャトランジアに帰ろうと思っていたのに、このタイミングでフローリップさんが死んでしまった。ここで僕がアルドールの元を離れるのはまずい。精神的にかなり来ている。僕の代わりの人間を見つけるまでは、僕はここにいなければ。

僕の策としては、あの状態のフローリップさんを連れては逃げられない。だからそこで投降。アルドールの処刑の際に彼女を送り込む。そこで一気に命の恩人として彼女と上手いことくつつける。僕の代わりに彼を支えて貰う。これで良かったはずなのに。

それでもフローリップさんが死んだ以上、その場での投降はあり得ない。あまつさえあのエルス＝ザインが面倒なことをしでかしてくれた。人質の桁が違う。

（おまけにユリスディカと来たら……僕の見込み以上の、善人過ぎ

る)

都まで着くのが僕の計算より遅い。何処で道草食っているのかは大体解る。

彼女なくして策はならない。ある意味では良かった。彼女まで病に倒れられては困る。そうだ。そう考えるなら彼女の行動は最善。僕らは北部まで逃げればそれでいい。そこからまた立て直す。唯、僕のお守りが長引いただけ。アルドールを北部まで、或いはまたこの都を攻め込むまで支えなければならぬのは正直痛手だ。タロツクと道化師の問題を同じ場所に集めるのは。出来ることなら道化師の問題は僕が遠くで片付けたかった。そうすればアルドール達は戦争だけに集中できる。だけど今はそうもいってられない。ユリスデイカが間に合わなかった以上、僕はされない。コートカードがセレストイン卿一枚だけでは心許ない。万が一彼までこんな序盤で消費されたら、アルドールの手札が足りなくなる。これ以上の無駄遣いは出来ない。彼には何が何でも、覚醒して貰わなければ。……この勝負僕の負けだ。

「…… だけど参ったな」

「イグニス？」

「あの二人だよ。アロンドイト卿とセレストイン卿はなんとも面倒臭い間柄だなと思って」

あの騎士二人はなんとも扱いづらい駒だ。性格、思考に難がありフラフラフラフラって、まっすぐ歩けないのかな本当に。チェスの駒じゃないんだからさ。そんなところまでナイトナイトしないで欲しいものだよ。僕が溜息を吐けば、彼と来たらきよとんと目を瞬かせている。

「え？そうか？…… 普通に仲良くないか？そりゃあ時々喧嘩くら

いはするだろうけど、それは互いが大事すぎるからの軋轢であつて」
「そう思ふんなら君の目は節穴なんだね」

僕の言葉にアルドールが驚いたような顔になる。

「あのねえアルドール。世の中には打算無しの綺麗な感情だけの繋がりなんてあり得ないんだよ。幾らあの二人が仲良く見えても腹の底ではお互い思っていることはあるだろうさ」

「でも俺は別にイグニスのこと騙そうだとか利用しようだとか全然思わないけど」

「それは君が馬鹿だからだよ。彼らは君ほど愚かではないって事だね」

君がそうであることは僕も疑わない。君はそう言う人間だからね。知っているよ、痛いほど。君がそう言う奴だつていうことは僕は何度も見せられてきたんだから。

でも自分がそうだから他人もそうだとは思ふな。自分の物差しで他人を測るな。これまで何度か言つてあげたのに、まだ理解してくれていないようで全く残念だ。後何度言えば理解してくれるんだろうね君は。少なくとも僕は君を利用しているよ。君のためにと言えば聞こえは良いけどね。

「いいかいアルドール？好意のみで表される好意は好意と呼ばない。好意というものは何らかの負の感情を引き連れて現れる。想うことは憎むことだよアルドール」

僕だつて君を憎んでいる。目で語つておいてあげた。わざわざ言葉にするほど僕は残酷じゃない。そこまで優しくもないよ。君の理解力なら気付けるはずだと見込んであげたんだ。

だというのに君と来たら、どうしてそこで笑うのかな。

「……そうなんだ」

僕は別に君が好きだよなんて言ってあげていないんだけど。忠告の言葉にまるで告白でもされたような反応されたらどうすれば良いんだよ僕は。

そりゃあ裏返すなら、憎む心があるなら確かにそこに愛はある。それは確かだ。けどどうしてそう都合の良いところだけ取り出して喜ぶことが出来るのかな君は。どこまでお気楽な脳味噌なんだ。

僅かに照れくさそうな彼の様子に、僕はひよつと思つて。確かにあれから弁解はしていないから要らぬ勘違いをされていそうではある。制約に触れずに何処まで説明できるかは怪しいけれど、このままっていうのも気分が悪い。精神が犯されているみたいだよ。

「……もしかして君ってさ、僕がギメルか何かだとか勘違いしてない？」

「そ、そんなことない！イグニス……イグニスだよ」

横目で睨めば、彼は大げさにぶんぶんと両手と首を振る。

「男だとか女だとかそんなの関係ない。イグニスが、俺の親友なんだ！」

そりゃあ初恋の人が男だったならちよつとショックだけど彼は笑う。混血の双子は男女の双子と決まっている。僕とギメルの二人とも女ということはあり得ない。僕が女なら消去法でギメルが男だと、そういう発想に落ち着いたというわけか。

「今更それで何が変わるわけでもないだろ？イグニスはイグニスだ。イグニスが自分を偽ってるのは何か理由があるんだろうし、俺

はイグニスと秘密を全力で守……」

「調子に乗るな」

女は神子にはなれない。僕が女と知られれば、僕はシャトランジアでの地位を失脚する。その懸念は彼にもあったのか。だけどアルドールの癖に一丁前にいっぱしの男ぶりやがったのが気に入らず、僕は友人の頬を思いきり抓ってやった。あはは、変な顔。

「痛っ」

「君、何様のつもり？王様？笑わせないで欲しいね。さっそく城も玉座も奪われたって言うのに」

「そ、それはイグニスの策の一環だろ？」

「ほんと馬鹿だね君。この僕を守るだって？馬鹿言わないでよ。僕は強いし凄いな。君なんかお呼びじゃないよ。君だってセレスタイン卿だって不慮の事故がなければ気付かなかったんだ」

視覚数術に今度は触覚数術までやっている。数術の消費を防ぐためだ。部下に数式を護符化させて持っているから問題ない。これで常時発動。僕はどこからどう見ても立派な男だ。

「っていつかそんな変な顔して僕のこと笑わせないでよね。そんなに機嫌直してあげないし」

「それはイグニスの所為だろ、痛てて。ていつか美形混血のイグニスからすればどんな顔しても俺なんか基本変顔みたいなものだからデフォルトでも」

なんか室内が変な空気になった。何これ、何だこれ。いや別に普通のことだよ。アルドールがこうやって僕を褒めるのはいつものことだし。別に当然のことだし。そうだよ僕ハイスペックだし。混血ってだけで問答無用で美形設定付いてるんだから。

だから何当たり前のこと言ってるのって言い返せば良かったんだ。だけど……

「……………」
「……………」

言い返すタイミングを逃した。だからなんか妙な間が生まれていく。何か気まずい。アルドールの馬鹿なんか相手に僕は何気まずさなんか感じて居るんだろう。大体アルドールもアルドールだよ。フローリップさんがあんなことになったっていうのに……まだぐすぐす泣いてるなら可愛げってものがあるのに。ってというか君のデフォルトってそっちだったのに。何勝手に急に凜々しくなってるわけ？やばい、まずい、どうしようこれ。これ吊り橋効果とかなってないよね？なんか補正で僕への好感度既にマックスが限界突破してそうで怖い。なんかもうお前さえいればどうでもいいやっていう悟りの境地入ったりしてないよね？止めてよ本当そういう薄ら寒く暑苦しい真似は。とか思ったら、何か近い。やけに近い。覗き込まれてる。顔を。真正面からじっと、彼の青が僕を見ている。

「イグニス？」

「な、何!？」

ただそれだけなのに、何だか落ち着かない。目を逸らしたい。だけれどそうしたら負けのような気がして僕は彼を睨んだ。残り僅かの僕の鼓動が、大きく響く。消える前の蠟燭みたいだ。炎が燃え上がるみたいに、強く痛く胸を打つ。

(何だよ……これ)

そりゃあ好きだよ。そう言う意味じゃないけど。だけど、これじ

やあまるで違う好きみたいだ。僕は……浸食されているのか？

(違う、僕は違う)

僕が好きなのは、友人としてのアルドールだ。これは僕の気持ちじゃない。引き摺られているのか？僕はギメルに。

おかしいよ。彼は僕が何であつても変わらずに僕を親友と呼んでくれるのに。僕もそれに応えたいのに。なのにどうして？僕はそんなに弱くない。引き摺られて堪るか。

(僕は僕、ギメルはギメルだ)

そう思う。そう思うのに、彼女の悲しみが喜びが……僕の胸へと流れ込む。何故だろう、唯目の前に彼が居るだけなのに泣き出してしまいそうになる。もう二度と、会えないと思つていたんだ。君がここにいる。それだけで……僕は泣いてしまいたい。

そんな僕の様子を見て、彼は目の色を変える。また僕を氣遣う瞳に戻る。

「やっぱり熱出てきたんじゃないか？顔真っ赤だ」

「ああ、そうだね！！怒つたせいかな！？」

「もう少し休んだ方がよいよ」

「……そうも言つていられないんでね」

僕もあの蚊に刺された。エルス・ザインとは顔を合わせてしまった。ここで僕が刺されたことが知られては困る。僕が女と知られれば、神子の座を他の者に奪われかねない。そうなつてしまえばカーネフェルへの支援も難しくなり、カーネフェルもシャトランジアも滅んでしまうことになる。

とりあえずは冷却数術で体温を下げているから死ぬことはない。

期限が来ても。だけどそれは自分の身体だから出来ることだ。他人のデリケートな身体を弄るのは難しい。病人全員を僕ら教会で面倒は見られない。見たとしても解決にはならない。延命措置しかできない。

「……とりあえず何とか隙を作らないと」

エルス・ザインがあんな手を使ってきたのは始めてだ。彼はもつと手っ取り早い方法を好む。そして無意味に残酷だ。それが影を潜めているのは……おそらくアルドールのことを理解されすぎたことが原因だろう。そう攻めた方がアルドールが苦しむと理解して。

全く残念だよ。彼はタロツク軍にとけ込めていない存在だ、適度の飴と鞭で手懐け使い捨ての手駒化でもしてくれようと思っていたのだけど、残念ながら世の中上手くは行かないようだ。

「イグニス、北に行くのって本当に必要なのか？今ここでもう一度タロツクを追い返す事って……」

僕の体調を慮ってのことだろうか。だけど王にそんな考えは不要。僕がどうかじゃなくて、国として王としてどう動くか。僕が求める答えはそれだ。僕が傷ついたって、仮に死んだって、君は王として最善の行動をすべきなんだ。玉座を奪われたとはいえ君はもう即位した。僕がさせた。王なんだ。その自覚を持ってくれ。

「無理だよ。僕はこんな状況だ。まともに戦えるのはあの二人の騎士くらい。双陸とランス様、エルスとセレスティン卿ユーカー、それぞれ相打ちに持ち込むことくらいなら出来るかも知れないけど、彼らまで失ったらアルドール、君は完全に裸の王様だ」

セレスティン卿ならエルス・ザインには勝てる。唯そのためには

大分幸福値を削らなければならない。それはあまりに勿体ない。エルスⅡザインが厄介なのは知っているが、早めに摘むには痛手の多いカード。しばらく放置して向こうの幸福値が減ってから刈り取るのが上策。刈り取るなら双陸の方が先だ。彼が下位カードであることはまずあり得ない。上位カードなら僕とセレストライン卿が居れば絶対討てる。

（そのためにもまずは二人を引き離したい。都を取ったことでタロツクの軍勢は減る。今がチャンスなのはまず間違いない）

タロツクにエルスⅡザイン以外に優秀な数術使いはいない。一度彼がタロツクへ帰還したなら、向こうに情報を届けられる人間がない。エルスⅡザインが再びカーネフェルに戻る前に僕らは体制を立て直し、双陸を討たなければならない。

「タロツクを追い払うだけじゃ戦いは終わらない。そのためには戦力、カードの補充が必要。このカーネフェルの地にはまだまだ他のカードの気配がするよ。それをタロツクに奪われる前に回収したい。そのためにも戦力強化、北へ遷都は必要なんだよ」

「でも……」
「君だっけ見ただろ？腐りきった欲集りの都貴族達が君に群がるのを」

「ただど都の腐った奴らを正すには、双陸の支配も必要だ。この都の人間達にはお灸を据えてやった後に上手いこと飼いやしてやる手筈。」

「それに北部には心強い味方もいるよ」

「味方？」

「ランス様の……正確にはその父親のアロンダイト卿。彼の領地

は北部にあるんだ。北部では結構力のある人でね、彼の所にも厄介になるう。ここらで彼らの親子喧嘩も終止符討たせて貰うためにも」

「え？ランスって実家と上手く行ってないのか？」

「だからこそセレスティン卿を猫可愛がりしてるんだって。彼が家族代わりだから」

「なるほど……」

「せつかく生きてる親子なんだ。生きている内に仲直りくらいさせてやりたいだろ？何が起こるか解らないこのご時世なんだ」

「イグニス……」

そこまで言えばこのお人好しは乗り気になった。でもそこでイグニスつやっぱり優しいんだなみたいなお勘違いは程ほどにして置いて欲しい。別に優しさから提案してるわけじゃないんだよ？完全に君を丸め込むための計算だつて言うのにこの馬鹿は。

「そうだよな」

まだ引き摺っている部分はあるのだろう。トリオンフィ家との確執。そして今の言葉は、今朝のフローリップさんのこと思い出させる大きな引き金。彼の瞳が揺れる涙の水によって。

それでも彼は笑顔を浮かべるから、見ない振りをしてあげた。

「ランスには、そういう思いさせたくないよな」

「うん、そうだね」

「ユーカーとも、早く仲直りしてくれればいいな」

そうだ。それでいい。君は君の優しさを僕以外にも向けるべきだ。そうやって彼らにも心を開いてうち解けていってくれれば……たぶん悪いことにはならないよ。

そうやって少しずつ関心が余所へ移っていけばいい。君は大丈夫。その内僕なんか居なくても、ちゃんと歩けるようになる。逆を言えば僕が傍にいる限り君はずっと駄目なままだから、出来るだけ早いに……

*

「……あれ」

なんか増えてる。アルドールが最初に思ったのはそんなこと。そしてその次に浮かんできた言葉は……

「ど、どちら様？」

ランスが連れてきたのは二人の人間。一人は少女、一人は少年。いつも爽やかな微笑みを湛えているランスらしかぬ、ちょっとやさぐれたような表情。それにイグニスだけが納得している。

「ああ、なるほど」

(どづいうこと?)

小声でイグニスに聞いてみれば彼女も小声で、「?、キャラが被ってる。?、何だかんだで独占欲。?、なんか釈然としない」……と答えてくれたが主語が抜けていたので俺のよくわからない状態継続。

「ああ?見せもんじゃねえぞ?」

可憐な少女と思わせて、そこからヤクザキックを決めてくるなんて誰が予想しただろう。

「も、もしかしてユーカー!?」

「声以前にまず見て気付け」

「気付かないだろそれ普通っ!」

そんなことを言われても。服装は女物。ユーカーはそこまで身長があるわけでもないから、まだ十分自然に変装出来ている。髪を下ろした上にいつも匆ねっばなしの髪を手入れしてストレートにしてあって、それがいつもより長めだからあれっと思う。眼帯の位置を入れ替えているから目の色から受ける印象も違う。目の色素がより薄いからだろうか。少し儂げに思ってしまったのが間違い。油断するとヤクザ蹴りが飛んでくる。

「セレスさん、今年は優勝ですね!」

「俺は参加しねえからな」

そんな偽装少女の横でにこにこはしゃいでいる少年は、イグニスよりも幼く見える。フロリープと同年代くらいだろう。ユーカーのぶつきらばうな物言いは相変わらずだが、相手が子供だからだろうか。少し優しい感じもする。え、何か狡い。俺なんか初対面の時結構酷い扱い受けてなかった?

っていうかそれを言えばイグニスや俺だって年下なんだけど、子供としてカウントされていないんだらうか? まあ、イグニスはしっかりしているし仕方ないか。

それはさておきランスとは言えば、そんな二人のやり取りに無言で怖い。笑顔を浮かべてはいるのだけれど、それがちょっと怖い。イグニスの言っていた意味はよくわからないが、この二人のやり取りを快く思っていないようなのは俺でも解る。

「ら、ランス……?」

何かあったのと声を掛けてみれば、彼は俺に気付いたようでも通りの顔になる。

「何を隠そう、王宮騎士団秘密兵器にして幻の切り札女装騎士セレスです」

「俺としては永遠に隠して置いて欲しかった黒歴史なんだがな」

ランスの発言が何故か自慢げに聞こえたのが不思議だったが、その横で相方のユーカーが心底嫌そうな顔をしていたので、ああと思つた。この人は本当、ユーカーからかうの好きなんだな。基本優しい人なのに、どうして彼だけこんなにからかうんだらうな彼は。それが親しみつてことなんだろうか？それなら俺とランスの関係は、まだまだ他人行儀ということらしい。

「ええ、そうですね。有名ですよ。ランス様のように騎士としての働きに関してセレスタイン卿の名前は殆ど伝わってませんが、かつてカルディアの女装コンで初出場初優勝を遂げたにも関わらず、そこから二度と出場しなかったという幻のセレス嬢の噂はシャトランジアの一部の間では生きる伝説とまで……」

「要らん情報他国に漏らしたの何処の何奴だ!!」

まあ、当然こうなるか。イグニスは何れもユーカーをいびる隙を見つけたらそれを徹底的に叩く子だ。なんかもう、一回りしてお前ら仲良いよね。イグニスの親友としてはちょっといやかなり複雑な気持ちだ。イグニスは勿論大好きだし、ユーカーのことだって嫌いじゃないんだけどね。

(あ、そっか)

俺は理解する。ランスもそういう気持ちなんだろう。自分の友達が（俺も人のことは言えないけれど、決して友達が多いとは言えそうにない二人が）仲良くしてるのは微笑ましいとも思うけど、ちょっと内心微妙な感じになるものだ。

そう思うと、当たり前のことなんだけどランスも人間なんだなあとしみじみ思う。何でもそつなくこなす立派な騎士様って印象の所為で、神格化とまでは行かないけれど凄いて言うイメージ、先入観を持ちすぎていた。その辺改めないと。俺は立派な王にならないといけないんだから、俺に仕えてくれる彼のことを誤解したままではいたくない。そんな俺はきつと、イグニスと望むような王ではないはずだ。

もつと頑張らないと。そう自分に言い聞かせている間も、イグニスとユーカーの口論改めじゃれあい続けている。

「いえ、先代様がよく話のネタに出してまして。うちの国の上層部の人間なら、一度は耳にしたことがあるとかないとか。僕はそれを人伝に聞きましたね」

「あのおっさんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん！だ、大体、あれは当時の俺が最盛期だったからってだけだろ。今はもう無理！女装なんて歳じゃねえ！全然似合っでねえし！」

「嫌ですね。好き好んで女装するような奴にやらせてもつまらないじゃないですか。貴方のようなプライドの塊である貴族を無理矢理嫌々させるのが楽しいんですよ！ぶっちゃけ貴方の女装に興味はありません。似合っでようとなかろうと、僕はその過程の方を楽しむ派です」

「お前っ、本当っ！最低っ！！それでも神子か！クソ野郎っ！！」
「そしてついでに言うなら、今どんな気分ですかセレストイン卿？そんな恥ずかしい恰好を僕に見られている気分の方は？」

「……くそっ！」

常時男装女に言われたくねえ！彼はたぶんそう言おうとしたのだ。けど彼は呑み込んだ。

それは一応最高機密。口外して良い物でもない。それが例え親しい間柄の人間でも。その咄嗟の判断と氣遣いに氣付いたのか、イグニスもそれ以上は言わなかった。だからユーカーが口で負かされたような形になった。何だかんだ言いながら、実は良い奴なんだなとはシャラット領でのいろんなことで教えられた。

「何にやにやしてんだよ？ええ？」

だけど短気だ。俺が感心してたのを、今の姿を馬鹿にして居るんだと思いついで言いがかり。被害妄想の氣があるのは、彼がいるんなトラウマとコンプレックスを抱えている所為だろう。とりあえず彼にはいろいろ借りがあつた。どうせ本気で殴つたりしてこないし適当にしばかれておこう。

「……何はともあれ、ご苦労様でしたランス様。それとセレスタイン卿」

「お前ランスは名前なのに俺は意地でも苗字呼び？」

「呼ばれたいんですか？」

「ベーツーに。どうでもいいけどよ。んで？俺が礼を言われる理由がわからねえな」

「だってその子、カードですよ」

「え？」

室内でキョロキョロと辺りを見回さなかつたのはイグニスと、もう一人だけ。必然的にその子が今の言葉が指す相手となる。

「え？」

その子は沢山の視線を一度に向けられて、恥ずかしそうな表情で、遅れて辺りを見回した。

「嘘だろ？パー坊の奴がカードだつて？んな馬鹿な。ちょっとお前手え見せてみ？ほら見る両手とも何もねえ」

少年の両手にの無事を確かめて、ユーカー（女装）はほっと安堵の息を吐く。それでもイグニスとは軽く首を振る。

「セレストイン卿。小アルカナには何枚、ページがありますか？」

「は、そんなの剣に金貨に聖杯に棍棒……って……おい」

「そういうことです」

イグニスは小さく笑う。エルス＝ザインの手にも、何もなかっただろうとその笑みは暗に告げている。

「先程の貴方の推理は正解ですよ。エルス＝ザインはページです。スートはわかりませんけどね」

「そ、それじゃあ……」

イグニスの言葉に、俺も息を呑む。こんな小さな子供がまたカード？

（フローリップ……）

思い起こされる彼女との思い出、記憶。今は哀愁に囚われている場合ではないのは解っている。それでも彼女と年の近いこの子まで、巻き込んでしまうのは心苦しい。そりゃ誰が死んだって悲しい事には変わりないけれど、自分より年下が自分より早く死ぬというのは

とても堪える。本来の寿命なら、俺より長生きするような相手を、俺のためにその命を使い古すというのは……

俺の躊躇い。それに気付かないふりでイグニスと言う。王ならばその位受け入れると俺へと示すため。

(イグニス……)

どんな悲しいことがあったって、傍に彼女が居てくれるなら。俺は何度でも立ち上げられる。彼女の言葉があるのなら。俺は確かにイグニスがいればそれでいいけど、十分救われている、支えられているけれど……本当に、それで良いのだろうか？

俺はイグニスに訴える。答えを求める視線を送る。それでも彼女が俺にくれるのは、先程の質問の答えだけ。

「そうだね。普通の人が見たくらいじゃ一般人と区別は付かない。僕だって目の前に現れるまではページの存在には気付けない。そういう特殊カードなんだ」

「パー坊っ！お前なんか夢見なかったか！？変な夢っ！」

「え？夢ですか……？いつですか？僕、あんまりよく覚えてないんですよ。毎日疲れちゃってぐっすりです」

イグニスの解説に慌てふためくユーカーが、少年の両肩を揺する。危機感を全く感じていないのか、少年は始終笑顔だ。肩を揺すられているのだって遊んで貰ってるような感覚らしい。ある意味大物だ。

「イグニス様、ページとは？」

あの場になかったランスの問いかけに、イグニスはカードと審判についてをもう一度語る。

「これは模様はトランプですが、カードとしてはタロットカードの小アルカナに近いものなんです」

「だからそう言うことは早く言えっ！」

「余計な混乱を避けるためにも情報開示には時期というものがあるんですよ」

食ってかかるユーカーをさらっとかわすイグニス。

「つまり、カードはスート毎に十四枚。全てで五十六枚、そこに道化師が加わり五十七枚というわけですか？」

「さしあたってはそうです」

「また妙な言い方じゃがって……」

「基本、ペイジのカードは発現が遅いのと例外もありますが基本的には十五才以下の低年齢者に現れるのが特徴です。本人の願いがはっきりしていない場合や、心に背く願いを語ったりするひねくれ者である場合。彼らはペイジになる。カードとしての強弱は」と同程度かそれ以下です」

「同程度……？」

俺の疑問にイグニスは頷いた。恐れるには足りない。唯味方となるならそこそこ心強いと彼女は言う。

「うん。現状では？より強くて」より弱い。10、5みたいなものだと思ってくれて良い。だけど幸運値は」と同じだから序盤でエルス・ザインをどうにかしようっていうのは今となっては難しい」

Qであるルクリースを失ったのは痛かった。そう責められているわけではないけれど、胸が僅かに痛んだ。これ以上俺の傷口を掘り返さないようにと、イグニスは今の話を先に進めることにしたようだ。

「唯、模様が現れてからが怖い」

「こ、怖いだって？」

目の前の少年か、それがエルスⅡザインを思いだしてか。ちよつと少年から距離を置くユーカー。それに気付かず離された分以上に近づくと少年。懐いてるんだなあの子ユーカーに。

「ええ。ページのカードは願いと感情のシンクロが最高値になった時だけ模様が現れます。この時一時的にですが10、5から11、5くらいになります。つまりセレスティン卿じゃエルスⅡザインを倒せる可能性と倒される可能性を持っているということですね。ですからあそこで逃げたのは正解です」

「うげっ……11、5だって!？」

そんなの倒せるカードは、キングとクイーン、それにジョーカーしかない。そしてそんなカード、今のカーネフェルにはあり得ない。

「つまり、パルシヴァルの存在は今の我々にとって大きなものであると言つことですね」

「そうなります」

ページに對抗できる可能性があるのはページだけ。ジャックのユーカー一人じゃ危ない場合、彼の手助けがあつた方が心強いのは確かだ。

(だけど……)

相手はまだ子供だ。洪る俺にその子は、初めてユーカーから離れ、

とてとてと近づいてくる。

「な、何？」

「お兄さん、もしかして王様ですか？」

キラキラと青い眼を輝かせている少年の笑顔が眩しい。記念に握手してくださいと言われ、動揺しつつそれに応えようと、また嬉しそうに笑って去っていく。

「セレスさんセレスさん！王様と握手しちゃいました！」

「あっそ。俺の手で上書き保存してやるうか？」

「や、止めて下さいよ！」

さつそくユーカーの所に誇らしげに報告に行く少年。少年を迎えながら、意地の悪い笑みを浮かべるユーカー。珍しくからかう側の相手がいるからか、生き生きしている。

「何！この俺様の手を握れないとでも？俺が憧れとか言ってたのはどの口だ！？ええ？そうやって簡単にアルドールの阿呆なんかに乗り換えるとはお前は……」

「セレスさんのはこっちです」

からかっているつもりだったユーカー。それでも少年は一枚上手。俺と握手した方ではない、もう片方の手で片手を握られて、完全に不意を突かれたらしい。微妙な悪人笑みのままユーカーは固まっている。少年の満面の笑みにやられてしまったらしい。まあ、あんな純真な子が相手じゃ悪態も吐けなくなるよな。

「僕この手宝物にします！洗いません」

「お、大げさだな」

「全くこれだからガキは」

はしゃぐ少年に俺とユーカーが苦笑する。その無邪気さに部屋の空気が一瞬和らいだ……と思ったその刹那、何かどす黒い気配と寒気を感じた。

「ら、ランス？」

その寒気の方にはランスの姿。彼はくすくすと笑っているというか嗤っている。目が嗤っていないのが怖い。

「パルシヴァルは無邪気だね。でも現実問題それはちょっと難しいと思うな。いいかい？手というのは雑菌だらけでね、その汚さと言ったら黒い悪魔と謳われる某昆虫と同じくらいの汚さだって言われているんだ。それを一生保ったとしたなら君の手はとんでもないことに」

「お、大人気ねえぞランス！てめえ！パルシヴァルが涙目になってんじゃねえか！」

言っていることは正論っぽいけど、どうにもいつものランスらしくない。

（なあイグニス、さっきからランスちょっとおかしくないか？）

（まあ、夏だからね）

そう言う問題だろうか？でもイグニスがそう言うならそうなのかもしれない。

「ほら泣くなって。俺もあの馬鹿も握手くらい何時でもしてやっから。手なんか勝手に洗えばいいだろ」

「ううっ……セレスさん……ほんっどうっですが？」

「あーまじまじ。本当ほんと。アルドールの奴なら俺が脅せば大
体のことすっから」

「しかしその際二人の手から君は雑菌を譲渡されるということ
万が一二人の手に何らかの病原菌があつたでしょう。しかし今は緊
急事態。水源の確保も出来ぬまま食事、そこでナイフやフォークを
使える状況下になく手づかみと言うことも十分起こり得る。その先
君は……」

「またお前は！そんなにこいつ苛めんなって！！っていうかお前
どさくさに俺まで貶めんな！俺はちゃんと手とか洗う派だからな！
人の名誉を失墜させる発言は止める！そんなに言うなら手袋投げん
ぞ箱毎束でっ！」

「その君、怖いお兄さん達はまあ放って置いてこっちでお菓子
でも食べよう？」

「そうそう。あの二人はほっとけばその内また関係自然修復して
るから大丈夫大丈夫」

少年を挟んでの口論が、いつの間にかスライドし少年無しの口論
に発展。目をぱちくりさせている少年が可哀想だったので俺とイグ
ニスは顔を見合わせ手招きした。

「へえ、君パルシヴァル君って言うんだ」

「は、はい！」

「何歳？」

「12です！」

「そっかー、若いね」

「アルドール、君なんか変な質問してない？っていうか僕らと2、
3才しか変わらないでしょ？」

「仕方ないだろ、俺はついこの間まで引き籠もりみたいなもんで

家族とも上手く行つてなくてコミュ障みたいなものでろくな友達作りもしたことがないんだよ！」

「ああ、それで僕のこと大好きなんだ。奇跡だね。良かったね。僕と友達になれて」

「ああ、もう本当っ！ありがとうっ」

「だからあんな変な質問してたんだ。君、身の丈に合わないことはしない方がよいよ。無様だからさ」

「ああ、よろしく！俺駄目だ。年下の子なんてどんな話したらいいのか全然わからないよ。今若い子達の間で何が流行ってるのかもわからないし」

片手を上げるイグニスに、心からのありがとうを籠めてバトンタッチ。後は任せた。

「ああ、ごめんね。こっちは基本ツッコミ担当なんだけど、本人も所々ボケてるからさ。どっちもいけるんじゃないかって勘違いも甚だしいのね。調子乗ってあの様なんだ」

「そうなんですか」

イグニス、冷たい。だけどそれでこそイグニスだ。むしろそんなところも大好きだ。でもパルシヴァル君だけ？君、そこは同意してくれなくて良いんだよ？

「なるほどね。君は騎士見習いだったんだ」

「はい！」

何この就職試験とか面接みたいな空気は。でも下手にツッコミ入れてまた滑ったら困るし黙っておこう。

「でも何で騎士なんてなりたいの？あの二人見れば解ると思うけ

ど、給料分割に合わない仕事だし、名誉職みたいなものだったのに最近それも地に落ちてるし、犬死に万歳とか賛唱させられそうな職になりつつあるよ?」

「あの、あのですね！僕は……騎士様に憧れて……」

「憧れねえ。いるんだよね、そういう子って。結構多いんだけど、それだけじゃこの業界なかなかやっていけないよ?」

あれ？イグニスさん、さっきまで優しくお菓子を勧めてたのに何それなんですかそれ。いきなり鬼面接官化してませんか？若い子いびりですか？自分より若い子出てきたのが気に入らないんですか！？そんなことしなくても俺はイグニス大好きだから！ダントツで一番だから！

あとそのスルメとさきイカ何処から出したんだ？それ絶対紅茶のお菓子には合わないと思う。もしかしてツッコミ待ち？でも違かったら怒られそう。黙っていよう。

「ってイグニス、言い過ぎだろ？もう、この子涙目じゃないか！」

と思っただけど流石に無理だった。だってなんか小型犬みたいな可愛さで両目に涙を一杯溜めてぶるぶるしてる。これは流石に庇いたくなる。

「若いっていいよねえ。泣けばなんでも許されると思ってるのがまた……」

「あ、あのさ！憧れってどんなのだったのかな？詳しい切っ掛けとか教えて貰えると俺も嬉しいな」

イグニスの発言を遮って、少年の目の高さ顔に合わせて俺は笑いかけてみた。少しは落ち着いてくれたのか、ごしごしと袖で両目

を拭いながら、少年は何度も頷く。

「騎士様は、馬に乗ってて剣を持ってて……優しくて強くて、格好良くて……」

「そつか。確かになあ。俺も昔本を読んで憧れたりしたよ。いいよな騎士って格好良くて」

たどたどしい言葉だ。それでも俺が頷く内に、少年は息を整えていく。

「僕、前にセレスさんに助けられたことがあるんです」

「ユーカーに？」

「はい！凄く、凄く格好良かつたんです！」

「へえ、聞きたい聞きたい」

「僕が昔森で遊んでいる時に、迷子になって……躓いて転んで、その拍子に木にぶつかって蜂の巣を落としてその蜂蜜の匂いに熊がやって来て」

流石はコートカード。地味に不運属性が入っている。

「もう駄目だっと思って時に、セレスさんが助けしてくれたんです」

「ああ、そりゃあ惚れるよな」

両目を輝かせて思い出話を語る少年に、俺も思い出したことがある。視線をイグニスへと向けると、何か用と彼女は睨むけど。

「イグニスだっって昔、狼に襲われた俺とギメル助けてくれたことあったじゃないか。懐かしいなあ、本当あの時は格好良かつたよ」

「あれはたまたま……ギメルを助けようとしたらおまけで君まで助けてしまっただけだよ」

「おまけでも何でも俺は感謝してるよ。ありがとう」

昔話にイグニススの空気が若干和らいだ。だから少年もそこに割り込むことが出来た。そんな彼が言うには……

「違いますよ。セレスさんは熊を倒してないです」

「え？」

今の話の流れ的にはそうなるんじゃないの？

「セレスさんは僕を馬に乗せてくれて、そのまま大急ぎで逃げ出したんです」

少年は胸を張ってそう言うが、俺とイグニスは白けた気持ちで今なお口論を続ける騎士を見やる。

「ユーカー……」

「今の話の何処に憧れる要素があるのか不明だね」

「僕はセレスさんの、そういう優しいところが大好きです」

「あ、そ……そうなんだ」

殺さないために逃げるといふ。その行動に胸を打たれたのだと少年は言うが、それは普通の人が考える理想の騎士像からはかけ離れてはいないだろうか？

（いや、でもさイグニス。ユーカーも一応戦争経験者なわけだからそれなりには殺してるよな？）

（だろっね。まあ、子供の目の前で血生臭いことはやらないっていうのは評価できるかもしれないけどさ。或いは唯のへたれか）

（或いは唯面倒臭かっただけかもしれないな……ユーカーのこと

だし)

「僕はそれまでお城には、一人……強いけど乱暴で素行も態度も悪くてとても騎士らしくない騎士様がいるって聞いていました」

あ、それユーカーだ。たぶんきつと絶対。

「だけど僕が会ったその人は、とても優しい人だったんです」

そう言っつて少年が笑う。人の噂より、目で見たものの中から真実を見つけたと。

「そ、それだけじゃないですよ？門限を破ったつて母様に怒られそうになった僕を、セレスさんが助けてくれました。自分が道案内につて連れ回したつて。母様に箒と塩で追い払われて二度と来るなつて言われながら帰つて行くセレスさんはとつても格好良かったです！」

「セレスさんは帰り道、ずっと王様の話をしてくれました。セレスさんがそんなに大好きな人ならきつと凄いい王様なんだろうなつて思つてました！お会いできて光栄です！」

「あ、あのさそれは俺じゃなくて、俺の前の王様なんだよ」

「え？でもセレスさんの王様なんですよね？」

「あ痛っ！」

笑顔のイグニスに、机の下で足を踏まれた。その笑顔はお前は余計なことを言うなと物語る。そしてがしつと少年の両手を掴み、憂いの微笑を送るイグニス。本当役者だ。イグニスは。

「そっか。そういうことだったんだね。さっきはごめんね……君

の覚悟を試していたんだ」

「そ、そうだったんですか？」

「でも君の覚悟はどうやら本物だったらしい。王様はね、今は一人でも信頼できる相手が欲しいんだ。パルシヴァル君、君は騎士だ。君のそのまっすぐな心はどんな騎士より騎士らしい」

褒め殺しに入ったイグニス。飴と鞭が効いている。最初に冷たくした分だけ、優しい言葉は大きく響いて聞こえるものだ。

「君は十分懂れた。そろそろ夢を叶える時期だと僕は思うよ。もう懂れるだけじゃない。同じ場所に立つて、今度は君がセレスティン卿を助けてあげる番だよ」

「僕が……セレスさんを？」

「ああ、そうさ。彼は見ての通り素直じゃないから敵も多い。誤解もされやすい。そんな時に君の助けがあれば、彼はどれ程心強く感じることだろう？あと同僚になればランス様もあそこまで君にずけずけ物を言えなくなるよ」

「そ、そうなんですか？」

「ああ、勿論！君さえ良ければ今日から君も騎士にならないかい？いいよねアルドール？」

いいよねの言葉と同時に有無を言わさぬ勢いで、もう一度足を踏まれた。口答えすんじゃないかねえその意っばい。

「え、……あ、イグニスが良いんなら別に良いけど」

そうなった以上俺はこう言うしかない。カードの子を野放しにしておくより傍に置いて置いた方がまだ守る術はあるだろう。カードは基本推理小説とかと同じだ。固まっていればその分幸福値があり安全。単独行動が危険で狙われるというのは道化師との一件で証明

済みだ。

「よし。それじゃあ君にも剣と鎧と馬をあげよう。今は状況が状況だから教会の中の物になっちゃうけど、落ち着いたら改めてアルドールから贈らせてもらうから。それじゃあ行くところか？」

「は、はい！」

そう言っただけでイグニスとパルシヴァル君を連れて部屋から出て行った。去り際のイグニスの横顔は、してやったりと言っような人の悪い類の笑みを浮かべていた。

扉の閉まる音で、我に返ったらしいユーカーが……

「ん？そっぴやあいつらどうした？」

と聞いてくるので。今あったことを教えろ……

「てめえっ！何で止めなかった！！！」

理不尽にも一発殴られた。結構痛い。本気で殴られたようだ。

「ユーカー、アルドール様に手を挙げるなど、無礼だろう？すみませんでしたアルドール様」

さして申し訳なくも無さそうに、ランスが頭を下げる。そりゃあランスが俺を殴ったわけでもないからそうだよな。

「第一その場において止められなかった俺たちにも責任はある」

「お前、図つたな！？俺の意識を完全にこっちに集中させるために俺のことあそこまで苛立たせたんだろ！？くそっ！あの神子と共謀してやがったのか！？」

「ユーカー！」

「ふざけんな！お前がそこまで最低だとは思わなかった！あんなガキまで巻き込むつてのか！？俺はそんなの認めねえぞ！」

「……お前は昨日の今日で、自分の言葉を違えるんだな？それなら俺もお前を見損なつたよ」

「ちよつと、二人とも落ち着いて！……って何かこれと似たパターンがどこかで……」

「もうお前なんか知らねえ！勝手にしやがれ！！もう何処で野垂れ死んだつて助けてやらねえから！」

「そうだな。俺も勝手にする」

どうしてみんなこんなに怒りっぱいんだ？別に俺たちは蚊に刺された訳じゃないのに。

「あ！！そ、そうだ！！これは嗅覚数術の時のと同じだ！」

一週間前だ。シャラット領で使われた数術。あの数式は数術使いではなく、道具……匂いを媒体とした物により引き起こされると言う話だった。

(何か居るのか？この部屋に……)

俺は室内を見舞わず。何も無い。もう一度。今度はじっくりと……

……あれ？

「あ！」

天上に張り付いているものがある。あれは虫だ。蝶か蛾か。見たことのない種類だ。その羽からパタパタと鱗粉をまき散らしている。

(もしかして、あれが……?)

じつと見る。睨み付ける……すると微かにその鱗粉から数字の群れが見える。もっと目を凝らせ。集中して。

辛うじて俺にも見える。それが何を意味しているかは解らない。それでもそれは数式だ。

「……ごめんっ！」

俺は手近な花瓶を投げつけて、虫を潰す。虫が死んだことで、数式が解除されていく。

「やった……」

これで二人も落ち着いてくれたことだろう。そう思って振り返る。しかし、一人足りない。

「ランス！ユーカーは!？」

「………お、俺は一体何を。何故あんな事を……」

「いや、それはいいから！仕方ないから！で、まさか出て行ったの!？」

正気に返ったランスに詰め寄れば、彼は蒼白。動揺している。俺が目を離している間に余程酷い言葉を口にしてしまったようだ、それに怒った彼が部屋を飛び出したらしい。言われてみれば部屋のドアは乱暴に開け放たれたまま。

「大変です！神子様！教会にタロツク軍の者が……」

室内に駆け込んでくる、聖職者と聖十字兵。しかしイグニスはいない。俺は咄嗟に判断を下せない。

コートカードが側から離れただけで、この不運。図ったかのよう
にやっつて来た。

(ゴ、ゴ、ゴ、ゴ、ゴ……)

「くそっ……ランスの野郎」

ユーカーはここにはいない従兄への悪態を吐く。その言葉が自分の耳に虚しく届き、何も言えなくなった。思わず外へと飛び出してしまったが、外の空気を吸うにつれ、頭が冷静さを取り戻す。そうなれば自己嫌悪が生まれる。

「はあ……」

売り言葉に買い言葉。そうだったならどんなに良いか。例えあれが嘘でも本当でもやはり堪える。それが本心なのだと思ってしまう。分かり易い様でいて、元々何を考えているかわからないところがある男だ。長年一緒の自分にも、近くに居すぎた自分だからこそ見えていないものがある。

(しかし何だっつてんだ……)

神子が言うには、エルス・ザインが呼びだした虫により、女達は病に伏せつついるという。そのわりに、街を歩く華やかな女が何人も。どちらかというと男を見かけない。ユーカーが不審に思っていると、その答えは目ではなく耳へと届く。耳障りなその声。無理矢理出している甲高い声。出せずに開き直って低音の声。時折間違う言葉遣い。

(こいつら全員男か!?)

自分も人のことを言えないが、それはこの際棚に上げておこう。

例年通り開催されてしまったらしい魔の宴。この時期になると生死を賭けた鬼ごっこを相方と繰り返していたような気がする。逃げと隠れに関しては俺の方が上。毎年上手いこと撒いてやっていた。でもそれだつてどうだつたんだろう。

あいつが折れてくれていただけなのかも知れない。そりゃああいつの立場もわかる。嫌なものは嫌だけど。だからチャンスはくれてやっていたんだ。見つけたら仕方ないから出てやるって妥協を。それを放棄したのはあいつだ。それなら俺は悪くない。うん、そうだ。でも今年は……

(見つかつちまっただっけ……)

「……………」

謝りに行つてまた拒絶されたら立ち直れない。でもよくよく考えてみれば、あの場にアルドールとランスだけを残してきてしまった。二人は数札。それも？と？。かなりの上位カードだ。神子とアルドールが一緒の時にですらエルスⅡザインは現れた。神子の幸福値は既にペイジ以下。アルドールの阿呆と足してもペイジ以下。コートカードが一緒でも危ない。俺が離れたことであの二人は危ない状況に陥っているかも知れない。

(……………でも)

棘が抜けないんだ。突き刺さっている、言葉の剣。

“俺より弱いお前が俺を守るだつて！？俺はお前なんか必要ない”
部屋を飛び出す前に、あいつにそう言われた。重荷だつたんだろう。俺の言葉も行動も。もううんざりしているんだろう。そりゃそうだ。俺はカードだから必要なだけで、俺自身はあいつのために何の力にもなれない。あいつ一人で何でも出来る。

「……………」

戻らなければ後悔する。それは解ってる。でも教会へと戻る足は、近づけば近づくほど歩幅は狭まり遅くなる。それでもじりじりとその場所は近づく。

(ん……?)

教会の前は騒がしい。物陰から様子を見れば、黒髪の男達の姿が見える。タロツク軍が教会まで手を伸ばしたのか？

教会は基本的に治外法権エリア。カーネフェルにありながらシャランジア、そして十字法の支配下だ。タロツクだつて好き勝手に悪さは出来ない。……はずなのだが、相手はタロツクだ。過去に一度シャランジアに仕掛けてきたこともある上、友好のため嫁いだ姫とその子供を処刑するような国だ。何とも言えない。最悪アルドールがここにすることがバレたなら、強行突破もあり得ない話ではない。

今の俺の恰好がシスターなのは好都合と言えば好都合。しかしこの騒ぎの中正面突破は難しい。

(どうしたもんかな……)

「イズーっ!!」

不意に抱き付かれて、身体が強張る。この寒気を感じさせる声。間違いない。

(と、トリシユの野郎……!)

さっき教会で会ったのだ。まだ教会にいてもおかしくはない。し

かし何故？こいつが教会にいた理由が分からない。街でようやくまともな男に会ったと思ったが、残念ながらこの男は中身がまともではなかった。

「会いたかったよイズーううううう！！」

ちげーよとツツコミ入れたい。でも喋れない。裏声なんかで誤魔化すわけにもいかないだろう。不審がられても困る。バレても困る。一生こいつに馬鹿にされる。そんなのは嫌だ。

「何処へ行っていたんだい！？教会中を探し回っても見つからないし、君のことを知っている人も殆どいないし！それでも諦めきれなくて引き続き教会警備に回して貰ったんだよ」

しかしこのままでもまずい。言い返せないのを良いことに、こいつの脳内妄想をそのままぶつけられてしまうことにもなりかねない。そういうのも絶対に嫌だ。何を血迷ったのかこの男は、俺の変装を理想の空想上の女と重ねたらしい。どんな目してやがるんだ。二次元を三次元に持つてくるなってんだ。

（って教会警備？）

どうしてこいつが？っていうかよくよく見れば黒髪連中以外に金髪兵士が教会の前に何人が配置されている。しかし戦う様子はない。

（……………まさか都貴族の奴ら）

王が教会にいる可能性。それを指摘しこいつらを使って探しに来させた？それでタロツクの奴らも教会に何かあると嗅ぎ付けたのか？

「本当はさる高貴な方を探す任務だったんだけど、どうしても君のことを忘れられなかったんだ」

こいつは馬鹿だろうか。馬鹿かも知れない。っていうか馬鹿だ。絶対そうだ。これは十中八九あいつのことだ。カーネフェル王アルドール。あのガキのことだ。

「そんな目で僕を見ないでくれ！確かに仕事を真面目にしなかった僕は駄目な男かもしれない。それでも僕をそんな駄目な男にしたのはイズー！君の所為なんだ！」

責任転嫁にも程がある。それはお前の自己責任だ。あきれて溜息を吐けば、こいつはまた勝手な解釈を始めたようだ。

「……………？」

その解釈の結果俺は何故かこのクソ野郎に抱きかかえられている。クソ野郎は颯爽と教会警備を投げ出して、愛馬の鞍に跨った。ええとこれ、どういふ状況？

「預言書によれば……………」

そう言っつて男が胸元から取り出したのは一冊の本。別段珍しくもない。嘘だか本当だかわからない伝説やら伝承の類をまとめた本だ。こいつの中ではこれが預言書と言うことになっているらしい。

「このまま君を教会に帰すわけには行かない。教会には王がいるという話もある。王と君を引き合わせれば、また前世の時のように君は王と愛のない結婚をすることになってしまっ！そんなのは君も嫌だろっ！イズー！！」

そりゃあ嫌だ。だってあいつ男だし。っていつか俺も男だし。だからってアルドールとトリシュなんて二択真つ平ごめんだ。どっちも野郎じゃねえか！俺にはアスタロットっていう歴とした婚約者がだな……いるっていつかいたっていつか。

「僕が思うに君は彼の元へ送られて来た遠縁か何処かの姫君なんだろう。それで今はシスターに扮して逃げてきた所だったんだろう？可哀想に、好きでもない男に嫁がせられるなんてあんまりだ！それでも君は優しいから。そんな男でも見捨てられずに戻ってきた。いや、違う。そうか！君は僕に会いに来てくれたのか！気付けなくすまなかった。やはり君も僕を愛してしまっていたんだねイズー！！」

っていつか何でそうなるんだ。俺が言い返せないのを良いことに話を勝手に進めるな！

「幸い私はまだ新しい王には仕えていない。つまり彼を守る義理はない。イズー……今の僕はこれからの僕は君のためだけに生きる」と今ここに誓おう！」

何て反吐の出る言葉。しかしそこには妙な錯覚。何処かで聞いたことがあるような。

(そつだ、これは……これは、俺の言葉だ！)

俺はアルドールには仕えていない。守る義理はない。俺がここにいるのは、ランス、てめえを守るためだ。

それは昨晚自分が口にした言葉。思い返して吐き気を催す程。端から聞くと自分の言葉がここまで酷いものだと。心のままに口に

しているはずなのに、エゴにしか聞こえない。
それじゃ、あいつも迷惑だって思うよな。

(あいつはあの人の影を追ってるだけなんだ)

守っても虚しいだけ。あいつは死を見据えている。生きるためには戦わない。生かすために戦う奴だ。俺があいつを守るのは犬死にだ。守っても、あいつは……生きちゃくれねえんだ。

(……………でも、だからって！)

こいつが俺の話を聞かないように、俺だってあいつの話を聞かない。何言われたって構わない。俺が守るって決めたんだ。あいつの方が俺より強かるうが、そんなのお構いなしだ。

それならこんな所で時間潰してるわけにはいかない。暴れて無理矢理、飛び降り……ようとしたのだが。

「っ!？」

いつの間にか手足が縛られている。縄を持ち歩くに留まらず、こんなに素早く縛るとは。しかも乗馬しながらってどんなスキルだ。っていつかなんて危ない奴なんだ。もう嫌だこの同僚。

「いや、逃げたくなる気持ちも解る。僕も怖いくらいだよイスー。ああ。夢みたいだ。幸せすぎて僕も怖いよ」

俺が怖いのはお前の思考回路のぶっ飛び具合だ。

「大丈夫さイスー！二人の愛の逃避行の邪魔は誰にもさせないよ！君の生きたい場所まで一緒に逃げよう！」

俺、コートカードなのになんでこんなについてないんだろう。

何かもう何もかも嫌になって来た。そんなやるせなさで涙腺が緩んだが、この阿呆はそれをうれし泣きとかと勘違いするから質が悪い。

しかしこのまま運ばれていったらどうなるんだ俺。数術なんか使えないし流石に縄抜けしようにも変装中で道具がねえ。胴体縛られているならまだ関節とか外すって方法あるけど、手首と足首を思いきり縛られてちゃどうしろっていうんだ。無理だろこれ。

ランスの阿呆。そんなに俺に助けられるのが嫌ならしばらく自重してやる。だから……むしろ助けてくれ！

「おい！そこのお前！ここは今通行禁止……」

「と、止まる気ねえのかあいつ!？」

タロック兵が慌てふためく。

「黙って通すなら良し。しかし私とイズーの邪魔をしようとするのなら……」

トリシユは鞍から腰を上げ、得物の長剣を手にとった。そりゃこいつも一応騎士だ。騎馬戦は得意だろうが、相手の数がまず違う。

それに今は文字通り俺という荷物もある。

「ば、馬鹿！無茶だ!!」

その無謀な行動に、俺は思わず声を出してしまった。それにこの男は、驚いたと言うよりも嬉しそうに笑って見せる。恋は盲目とか言うには言うが、声で男だっけ気付くだろう普通。どこまで盲目ってんだこいつ。

「覚えておいてくれ私のイズー！僕は君のためならどんなことでも成し遂げる！見ていてくれ！」

とりあえず一人称統一しろよと思ったが、突っ込んでる暇は無かった。馬ががくと揺れ、スピードを上げたのだ。喋ったら舌を噛んでいた。

危ないと抗議すら出来ず、抱きかかえられたまま、間近でこの騎士の戦いっぷりを見せつけられた。駿馬で駆け抜ける一瞬、すれ違う兵士達を薙ぎ払う風。それは自然の風ではない。こいつの剣が撫でた合図だ。駆け抜けた後方から遅れて悲鳴。

(は……速え)

楽器が似合いそうな綺麗なその指に握られれば、剣さえ歌うように見える。でも正確には違う。歌うのは、敵対者だ。

余計な動作は一切無い。殺すための剣。一瞬の隙を突いて急所を襲う一撃。無駄な力は要らない。流れるような優雅な仕草。剣がまるで指揮棒だ。

(ま、……マジかよこいつ)

良く見れば、こいつの得物はレイピア。噂だと、それに掲げられた名前はイゾルデ。こいつの憧れの本の中のお姫様だ。それはどうでもいいとして、レイピアだって？あり得ねえ！

俺の剣であるセレスタイトは混血剣と呼ばれる片手半剣。扱いづらいが攻撃力は最高だ。切れるし刺せるし、両手でも片手でも使えて便利。戦法を幾らでも考えられる俺の相棒だ。あと普通の剣よりリーチも長いのも特徴。

しかしレイピアは、貫くことに特化している剣だ。下手な使い方

「……………」

見殺しにされそうにしか思えなくて、ちょっと涙腺が潤んだ。神子は俺の不幸万歳だし、ランスは俺邪魔だって言ってたし。

(……………終わったな)

これ、完全に見捨てられたわ。

*

「……………」しかし、カーネフェルとは妙な国だな」

双陸は思い悩んでいた。支配したは良いが、カーネフェル王はただ投降してこない。街の現状を知らないわけではなかるうに。そして大勢の人間が伏している。自分たちがやったこととはいえこうして教会に運び込む程度の手伝いはさせて貰っている。

しかしカーネフェルの男達と言えば、奇妙な祭りに忙しい。目の前で婦女が伏せつているといのに、馬鹿騒ぎをするとは不謹慎な輩が居た者だ。その祭りに参加しているのは貴族の連中ばかりだとは言いが……

「双陸？浮かない顔だね」

ボクのやり方が気に入らなかつたとエルスが聞いてくる。しかし、そうではない。そうではなのだと首を振る。

「そういうわけではない。唯……………」

「唯？」

「この都は我が国よりもある意味狂ってはいないだろうか？」

「まあ、国が違えば勝手も違っつて言うけどさ。確かにいかれてるね」

彼は俺の言葉を全面的に認めてくれる。

「まあ、半分はボクの仕業ですけど」

そう言っつて彼は指先に蝶を止まらせ遊ぶ。

「それは一体？」

「この子ですか？この子はさっきのあれと同じでボクの契約している夏の悪魔の使役しているものですよ」

「すまん、意味が分からん」

「まあ要するに、ボクと取引している神様が居て、その取引の恩恵として簡単に借りることが出来るものってところかな」

「御利益のようなものか」

「まあ、そんなところです」

エルスが妥協したよう苦笑い。それでも俺は数術使いなどではないからよくわからない。

「双陸、数術っつていうのは世界の現象、事象を故意的に起こすための計算式なんだ。だから自然現象にも生物の生命活動にもある種の式は働いている。それは故意的なものではないけど、式はあるんですよ」

「なるほど」

「だからこの子は数式展開装置なんかじゃなくて、唯生きてるだけ。唯、生きてるだけで害になる生き物なんですよボクと同じで」

エルスは自分は鬼だと、出会った頃に口にした。そして先日もそんなことを言っていた。

「そんな言い方は……」

「貴方にボクの何が解るんですか？」

「……そうだな」

そうだな、わからない。でもわからないと言えば……

(何故こいつは俺にそのような事を言うのだろうか?)

解らないなら触れるな。踏み込むな。そう口にしながら、少しずつヒントのように自分のことを俺に話し出す。それは何を意味しているのか。自分は鬼だと言いながら、人である俺に言葉を打ち明けるのは何故?それではまるで、わかって欲しいようではないか。

(こいつは……子供だ)

ああそうだ。きつと寂しいのだろう。誰にも理解されず、忌み嫌われるだけの生は。鬼でも人でも、それは寂しく辛いことだ。きつと俺の似た匂いを嗅ぎ取って、同族だと思っっているのかも知れない。

(俺も、鬼か……)

そうだな。そうかもしれない。

「俺はお前のことはわからない。だが、自分のことは多少は知っている」

ゆっくりとそう言えば、僅かに彼の興味を惹いたよう。何を言い

出したのかと驚いたような顔でエルスが俺を見る。思えば俺は自分のことを何一つ、こいつに教えていないような気がした。確かにそれは不公平かもしれない。

「お前が人が何を持ってして、鬼を語るのかはわからんが……少なくとも俺は人とは思っていない」

「……え？」

「肉親殺しがまだ人を名乗っているのは些かおかしな話だからな。俺もそれなりには外道だ」

「………なんで、殺したの？」

「王の命令には逆らえん。あの人の言葉は絶対だ」

後悔はしていない。命令を果たせたことは俺の誇りだ。それでも……悲しくないわけではない。だからだ。だから、抵抗はある。こんな風に話をしてしまうの、きっとその反動だ。

「………そっか。鬼………か。双陸も………」

エルスが笑う。少し寂しそうに、それでも嬉しそうに。その何も言えない笑みの後………会話が途切れて困った俺は先の話思い出してみた。

「ああ、この子の話だったっけ。そうですね、この子は人の感情を引き出す鱗粉を出す。その鱗粉に触れたり吸い込んだりすると、感情のたがが外れやすくなって沸点低くなったり、涙もろくなったり、やりたいことを優先するようになる」

「それは何の役に立つんだ？」

「これでカーネフェル人同士が街で騒動起これば、それを鎮めた分だけタロツクの株が上がるってこと。この子達は明るい色に集まる習性があるから金髪を見つければ付いていくよ」

エルスが窓を開ければ、蝶がパタパタと飛んでいく。

「なるほど。先程部下達の様子がおかしかったのは」

「まだ城の付近を飛んでたのが結構いたんだろうね。でも大分散らばったと思う」

「だ挺好的のだが」

あれが部下達の本心だと思うと少し情けなくなった。まあ人間ってそういうものだよと頷くエルスが妙に大人びて見えた。

「でも、その抑制が外れた結果何をしたかって言うのが……まさかお祭りだとは思わなかったよ」

それは確かに。窓の外からは陽気な音楽が聞こえる。露天の店もまだいくらかも出ている。それどころか増えたようにすら思う。

「うわー！あれなんか酷いなあ！カーネフェルの貴族の家には鏡っていうものがないのかな」

「確かに好き好んで見たいものではないが、お前に人のことが言えるのか？」

「ちよつと、これボクの趣味だと思ってるわけ？」

「違うのか？」

「これは貴方の大好きな須臾王がさせてるんだよ。似合ってるからって」

「わ、我が君が……？」

「華が欲しいんだってさ。周りに堅物の野郎ばかりじゃ飽きるって」

「あ、飽き……」

「お姫様もセネトレアに行っちゃったしね。城のむさ苦しさと言

つたら無いよ。あ、だからって思い詰めて双陸まで女装とか止めてよね。似合わないし」

「……そうか」

「なんでちよつと残念そうなの？」

「我が君の力になれず無念……」

「どつちかかって言うつと貴方の脳味噌が無念だよね」

「……そうか」

俺の言葉に、エルスが少し狼狽える。まさか俺が落ち込んだとでも思ったのか？ 限りなく正解に近いが、この少年が俺を気遣うなんて珍しいこともあるものだ。

「いや、ボクが思うに女装が許されるのは10代までだよ。似合うなら20代もよし。30代は余程の才能が必要だよ。4、5がなくて60越えたらもはや変装しなくてもどつちか解らない人居るしねえ」

「……？何が言いたい？」

「見てよ、ほら。また増えた」

窓の外、城下を指さし手招くエルス。まるで愚者の行進だと彼は笑っている。

「要するに公害成分が多いって言うてるんだよ。仮装行列みたいで面白いけどさ！ 服装とか装飾品は立派なのに中身が酷いからもう笑えて笑えて。貴族のおっさんたちってナル入ってるから自分が世界一美しいとも思い違いしてるんだよ。それで美しい自分なら女の服も着こなせるとか勘違いしてて笑える」

そして、本当人間って馬鹿だなあと彼は小さく呟いた。

双陸も確かに窓の外の風景には絶句したが、タロツクでも処刑を

逃れるために少年達が変装するのは日常茶飯事。それでもいい年をした大人があんな恰好はまずしない。そんな日常はちよつと嫌だ。しかし自分がおかしいと言いたかったのは其方ではない。咳払いをし話の流れを引き戻す。

「都貴族と言う者達は、余興に忙しく国の存亡になど興味がないうだ。即位したばかりとはいえ王への忠義も愛国心もない。他国とはいえ見ていて悲しいものだ」

目的もなく街を練り歩く仮装行列。国の終わりの狂気とも呼びびがたい代物。国のことなどどうでもいと言わんばかりの人間達は、国の支配者、名前が変わる程度……どうでも良いと考えるのか。金のある人間は他の国へも逃げられる。だからどうでも良いのだ。そう思うのかも知れない。今を生き、過去を生きない。刹那の享楽を至上のものとする。今日が刹那、明日も刹那。人生とはその積み重ね。何とも、愚かなことだ。哀れなことだ。そんな風にしか生きられないとは。

(まるで、亡者の群れだ……)

生きている？生きているのに彼らは生きてはいない。自ら生きることを放棄しているような、生きた屍。何の目的もない生。それでも生にしがみつく。寄生する。そして……こうして国一つを傾ける。この国を攻め落とすことが出来たのは、敵の中に味方が居たからだ。彼らは味方になるうとして味方になったわけではない。私欲に走った結果、自然とそうなったのだ。

そこにいてだけで害を与える。それが鬼だとエルスは言ったが、そんなエルスが可愛く思える程に彼らは醜悪だ。鬼などよりも恐ろしい。その寄生虫たちは、息を吸うように国を蔑ろにし、腐らせる。可哀想なカーネフェル。民に見捨てられた国。

「そういう奴はもう前線に出て死んでるんじゃない？世の中悪役と良くない奴ばかりが生き延びるものだよ双陸」

少年はけらけら笑う。その理屈だとボクは最後まで生き残ると言わんばかりに。

「貴方も適度に悪い人にならないとね、あっさり死んじゃうかもよ？不慮の事故とかで」

「……呪術師殿には言われたくはない」

少年の嫌味に、そう答えてやれば……彼は不機嫌な顔になる。そうしている、本当に子供だ。

「な、なんだよ！そうやってまたすぐボクを馬鹿に……」

溜息を一つ吐いて、彼の腹部に目をやった。元々血の気が多く返り血の多いこいつの白い着物は所々が赤に染まっている。それでもまだ色が新しい模様がある。それは返り血とは違う。よく見れば内側から滲む赤。

此方の視線に気付いたのか、エルスが押し黙る。逃げられるその前に、此方から踏み込んだ。そういう事、構われることに慣れていないのだ。だから、彼は上手く言い返せなくなる。常に自分が人の優位に立っていないなければならない、そういう態度をしてきた奴だ。

「血の匂いがする。また怪我でもしたんだろう？手当がまだなら暫く休め。お前は今日存分に働いてくれた」

「……………」

「薬はあるか？」

聞けば首を振る。手当をしないのではなく、呪いで治す余裕がなかったのか。或いは別の理由かわからない。それでも大人しく、彼は怪我を見せてくれた。急に借りてきた猫のように大人しい態度には少々驚いた。

「出血のわりに傷は浅いな。これならばらくすれば治るだろう。一応薬を渡しておくから痛みがあった際に使つと良い」

「……………」

大人しいというか、手当の際ずっと無言だ。その表情は明るいと見えそうにない。

「どうかしたか？」

「どうかしたかじゃないよ！これ、すつごく染みるんですけど？嫌がらせ？」

「意外と物を知らないのだな。薬は多少染みて痛い方が効くと言うだろう？」

「言わない！絶対言わない！ボクはそんなの聞いたことありません！」

「それだけ騒げれば十分だ。直に良くなる」

ふて腐れた少年の頭を叩けば、そっぽ向かれた。どうやらまた機嫌を損ねてしまったようだ。やはり俺は子供の扱いというのが下手だ。そんなことを思っていると、貸した小太刀を返される。

「……………そうだこれ」

「少しは役に立ったか？」

「ぜ、全然？や、役立たずも良いところでした」

確かに使われた様な跡はない。唯鞘に僅かに傷が一本入っていた

だけ。

なるほど、だからあんな妙な怪我をしていたのか。双陸は傷の途中で刃の切り口が止まっていたのを思い出す。

「そうか。それなら役だって貰うまでは預けておこう。そいつも何の働きも無しには俺に会わせる顔がないだろう」

十分役立つてくれている。なら無理に返して貰う必要もない。あの人にはエルスが必要なから。もし万が一こいつに何かがあつては困る。

「タロツクにはいつ戻るんだ？」

「……そんなに早く追い出したい？」

「そうじゃない。しかしお前はあの方への報告があるだろう？ それにあの方はきつと心配して……」

「双陸はそう思うんだ」

「？どういうことだ？」

「そのまんまの意味だけど？」

エルスは、何か妙な口ぶりだ。そこには含みを感じる。

「勿論報告はしに戻りますけど、別に須臾王はそこまでボクのと好きじゃないよ」

「……何？」

「少なくとも今の王は、昔の王とは違う。それは貴方だって解ってるんじゃないですか？」

「王は王だ。須臾王様がどんなに変わられても俺の主があの方であることには違いない」

「……………」

「エルス？」

「貴方って……凄い、馬鹿ですね」

感心しますを肩をすくめられた。しかし他人に呆れられるほど、主馬鹿と呼ばれるのはむしろ……

「俺にとつては褒め言葉だが？」

「言うと思った」

*

「……………アルドル様、ここは私が」

「ら、……………ランス？」

「この部屋はイグニス様の数術が効いていますし、ここにならイグニス様は戻って来られるはずですよ」

「でも！」

「良いですか？何があっても貴方はここから出ないでください。」

イグニス様が戻られるまで」

そう言つて、ランスが部屋を飛び出そうとした時だった。俺の言葉じゃ止められない。どうすればいいんだ？と俺が狼狽えていた。その時に声は現れた。

「待つてくださいランス様！」

「イグニス様？」

室内に飛び込んできたのはイグニス。その顔は悪巧みが成功したような、嬉しそうな微笑みだ。

「イグニス！？」

「セレスティン卿がやってくれました。餌が見事に食い付いてく

れましたよ！門が壊滅状態です。今すぐ追えば僕らも抜けられます！」

「し……しかし、下にはタロツク軍が来ているとのことでしたが」「あれは病人の看護を頼みに来ただけみたいですよ。まだアルドールがここにいることをタロツクには気付かれていません。都貴族の手の者には気付かれていましたが、それも彼が追い払ってくれました」

「あいつが……そうですか。後でちゃんと褒めてやらなければ」

「それは結構ですが、唯……早めに追わないと厄介な問題になりかねないのでさっさと行きましょう！こっちに抜け道を用意してあります」

室内に設けられた抜け道から外へと脱出。その先には三頭の馬と着替えたパルシヴァル君がいる。さっき貰ったばかりの馬と、もう仲良くなっている。

「イグニス、俺は？」

「君無理でしょ？ランス様の馬にでも乗せて貰ってよ。体重重いつていうなら数術でちよつと一時的に軽くして馬への負担減らしてあげる」

「そ、そりゃあ俺はイグニスよりは重いかもしれないけどさ……」

そんな言い方あんまりだ。

「大丈夫ですよアルドール様。俺の—blanlumia?rearcenciellprintempsaristocrate(プランリュミエールアルカンシエルプランタンアリストクラット)号は二人乗せたくらいでへばるような子ではありません。なあ？そうだろうか？」

ランスが愛馬を撫でてやればそれを肯定するよう白馬は嘶く。つていうか何て言った？長くてわからなかったんですがその名前。

「あれ？イグニスそっち乗るの？」

パルシヴァル君にあげたはずの馬にイグニスが跨っているのを疑問に思っただけ聞いてみると、彼が乗っているのはユーカーの馬らしい。

「久しぶりだね、元気にしてた？リンガーレット？」

顔見知りらしい一人と二匹は何やら会話をしている。

「飼い主に似て気性の荒い馬みたいでさ、運んであげたいんだけど僕を乗せたがらないから顔見知りの彼に頼んだんだよ。ちなみに白からここに移すまでに僕の部下が何人が回復数術師の元に送られることになったよ」

気品あり優雅で落ち着いているランスの何とか号と違って、ユーカーの愛馬はかなりの暴れ馬らしい。

「それじゃ、行くうか。大きな数術を使ったらエルス＝ザインに気付かれるからね。都をで得るまでは素早くかつ慎重に！」

「しかしイグニス様、それでは目立ちすぎませんか？」

「とりあえず視覚数術で全員女装させておきますので、街を通っても問題はありません。今は祭りの最中です。馬に乗っていても仮装行列の一環だと思ってくれますよ」

*

「やっと二人きりになれたね、イズー……」

「……………」

向けられた爽やかな笑みに、俺の表情は引きつり、凍り付く。

(つか、タロツクの連中ももう少し頑張れよ)

ユーカーは都の門一つを壊滅、突破したトリシユに連れられ都の外へ来ていた。追跡者を恐れてか、奴は近くの森に身を潜めた。いや、そんな理由ならむしろいい！大歓迎だと言ってもいい！っていうかそうであってくれ。唯単に勢い余って、もうアウトドアな感じのあれでもいいかなとか思ったとかそんなことないよな。こいつも仮に騎士様だ。そこまで節操無しではないと信じたい。っていうか信じさせてくれ。

「本当は喋れるんだろう？また君の素敵な声を僕に聞かせてくれ、イズー」

「……………」

「……………拗ねているのかい？そうか、確かにいきなり縛ったりして悪かったと思うよ」

なら解け。無言で睨み付けると、奴は足の方の縄を切ってくれた。

「手の方も解いて欲しい？」

当たり前だと睨み付けるが、こいつは急に行動を惜しみ始めた。心底うざい。

「それじゃあ僕を好きって言ってくれたら解くよ」

思わず、はあ？とか言いそうになった。そうなるほど……………何とい

「c、l o : s e : : y : o u : : r e、y : e s か。なるほど目を閉じれば良いんだね。イスーは本当に照れ屋だな」
(かかったな間抜け男！)

へらへらと笑いながら従う男に俺は内心ガツポーズ。それもそのはず。この阿呆は俺の足は解放しているのだ。目瞑って聞いてない振りしたらこいつこそ所望の言葉を言っつてやると見せかけて……当然そんなの誰が言うか。すきはすきでも隙ありだ馬鹿が！

(はばぐつらい！永久にさらばだクソ野郎！)

俺は阿呆一人残して全力疾走すれば良い。逃げ足の早さで俺に敵うと思うなよ。このまま逃げて変装解けばこつちのもんだ。あとは撒くなりなんなり出来る。何処かで着替えだけ調達できればいいんだが。一番手っ取り早いのは、こいつの身包みでも剥ぐことなんだろうが、両手縛られた状態で脱がせるってまず無理だろ。ってことでここは逃げるが勝ちだ。

俺の足音に気付いたのか、背後で何か聞こえたが……そんなの無視だ。断然無視だ。

それでも慣れない恰好で走るのはかなり疲れる。適当に距離を取ったら、後は身を潜めるのが一番だ。俺はそう考えて、隠れられそうな場所がないかと辺りを見回す。

その際、道の向こうから走ってくる白い何かが見える。耳を澄ませれば、それは聞き慣れた蹄の音だ。そしてその音が大きくなるにつれ、見えてくる姿も次第にはっきりしてくる。

「ランス！」

「良かった。無事だったか？」

見捨てられたと、見放されたと思っただけに、これは不意打

ちだ。

「酷え目に遭ったぜ。もっと早く来いよな馬鹿」

「そうか、元気そうで何より」

相方は苦笑して、愛馬から飛び降りる。

大してして心配して無さそうに見えるのは、こいつなりの信頼なのか、それとも本当に実は俺のことがどうでも良かったのか。ぜ、前者だと思いたい。

「ユーカー、はい」

遅れて馬から下りるアルドール。あ、お前も居たのか。アルドールから手渡されたのは俺の得物。置き忘れていたそれを持ってきてくれたらしい。反射的に礼を言いそうになったが、次に現れた奴の声にそれを止めた。

「まあ、今回ばかりはお礼を言ってあげますよ。貴方のお陰で、無事にローザクアを脱出できました」

遅れて現れたのは神子。その言葉から俺はこの神子に踊らされていたことを知る。

「てめえ、俺を嵌めやがったな？」

「さあ、何のことでしょうか」

すつとぼけてやがるが、おそらくここまで奴の計算の内。俺が女装を嫌がって逃げ出してその裏をかいて女装するのも、そこで外に飛び出すのも……更にはトリシュに門の警備を破らせるのも。未来が見えなくなつたとか言っていた割りには、こういう嫌味なことに関しては、十分見えているような気がする。

「僕は唯、教会警備に来たあの方に、貴方の名前を尋ねられたんですが、僕としたことが貴方にもあまりにも興味がなさ過ぎて、ついというっかり名前を忘れてしまいました。適当な女性名を教えて差し上げたままですよ。イゾル……なんでしたっけ？」

「8割方てめえの所為じゃねえかつ！あいつ俺のこと変な設定付けて完全に例の空想彼女と勘違いしてやがるんだが！？っていうか普通に声で気付くだろあいつ！お前視覚数術とか聴覚数術とか俺に使ってないだろうな！？」

「そんな数術の無駄遣いはしませんよ。僕は今省エネ期間中なんです。だからこそ貴方に感謝していると言ってあげてるんですよ」

「何でいっつも上から目線なんだよてめえは！俺は年上だぞ！？」

「生憎僕は年上だからって理由で踏ん返り返るような輩を崇める趣味はないんですよ。身分的には一介の騎士と一国の権力者である神子の僕とどっちが上か貴方の乏しい脳味噌でもそれくらいは理解出来るのではないですか？」

「セレスさああああああん！！！」

「うぐっ」

神子と口論していた俺に向かってくる声。割り込むようにそいつは現れる。腹部に思いつきりタックル食らった。鳩尾に頭突き食らった。急に飛び出してきたりすると怒ろうとしたが……

「セレスさんのリンガーレット連れてきました！」

「あー、偉い偉い！あんがとな！だけでもうちよい登場の仕方つてものを考える」

パルシヴァルは眼をキラキラさせて、褒めて褒めての表情だ。まだ腹は痛いがる気力も消えてしまい、語尾に行くほど力がなくなる。

「……………ん？ところで俺の馬は何処に置いたんだ？」
「セレスさんの後ろですよ？」

言われてみれば背後から何かの鼻息と、咀嚼する音が……
振り向こうとするが頭が引つ張られているように動かない。ぎぎぎと無理矢理首を曲げ、横目で見てみれば……俺の馬が俺の髪をもしゃもししゃと貪っている。

「だああああああ！この馬鹿馬！俺の髪はそんなにオレンジじゃねえだろ！ニンジンじゃねえから！食うな！！こら！止める！お前飼い主に向かって何んてことを！髪が馬くせえ！」
「涎塗れですね」

それに気付いた途端、パルシヴァルが俺から離れる。ちゃっかり安全圏に退避しやがった。言いようのない怒りに打ち震える俺。寄越された助け船は、確かに俺を解放してくれたが……

「ガレット、その辺にしておこう？ほら、ニンジンならこっちのあげるから」

「何で飼い主の俺じゃなくてランスの言うこと聞くんだよてめえ……………」

「よしよし、そんな不味いもの食べてはいけないよ」

「何で俺の髪が不味いつて決めつけてんだよてめえ！なんかむかつく！食べたこともねえ癖に！」

よくわからないことで俺が腹を立てれば、ランスは苦笑して俺の髪に触れる。

「ああ、悪い。そういつつもりじゃないんだ。ところでそういう

だしいわ。俺がトリシユに内心毒づいていると、ランスが顔を上げ勝利時の願いを口にする。

「……それじゃあ、トリシユもし俺が勝ったら」

「……………彼女に近づくなと？」

「いや、別に彼女に近づくのは構わない」

構わねえのかよ。たぶん俺と同じ事をアルドールとトリシユ辺りは思っている。神子だけは、いつものように全てお見通しといった表情。そりゃそうだよな。これお前の悪巧みだもんな。

「トリシユ、お前もアルドール様に忠誠を誓ってもらおうか？」

「構いませんが……………ますます貴方に負ける気がしませんね」

アルドールとランスを一瞥し、トリシユが二人を鼻で笑う。

「私はイズーに仕事と私どっちが大事なのと聞かれたら彼女だと即答できる！彼女より仕事を取るようなそんな男に、僕らの愛は壊せない！！」

愛も何も俺はお前のこと何とも思っていないからな。むしろ嫌ってからのな。その辺いい加減気付け。

もう疲れてきて、その場に座り込む俺。近寄ってくるパルシヴァルは俺のガムテープを興味深そうに見つめている。さっきまで静かだったのは俺の背後に隠れていたかららしい。それもそうか。もう少し早くトリシユが現れていたなら、手袋を投げられたのはこいつだったかもしれないのだ。

大人げないあの野郎が、こんなガキを脅えさせるとはとんでもねえ話だ。まあ、ランスに任せとけ。あいつが負けるなんてことはないだろう。自分にそう言い聞かせながら、パルシヴァルの頭を叩い

た。それでこの少年も、少し肩の力が抜けたようだ。

「大丈夫ですか？」

「んんーんんあうん、んーんん（大丈夫なわけねえだろ）」

首を振れば、考え込んだ少年が、それを引きはがそうとしてくれる。しかし痛いだけで剥がれない。あの神子本当に何してくれただ。都脱出のみならず、味方増やしたいからって俺を人身御供にするなんてこいつは鬼か、悪魔か。横目で神子を睨み付ければ、俺の無様な姿に神子はとつても良い笑顔。清々しいまでにこいつは、鬼畜な外道だった。さっさと聖職者辞任すればいいのに。

割と本気でユーカーはそう思った。

2 : A m a n t i u m i r a e , a m o r i s i n t e g r a t i o

6章ヒロインなかなか出てきませんね。彼女が出るまで、ユーカーが女装ヒロインやらなきやならんとか可哀想すぎる。イグニスが腹黒いですね。どんな窮地でも嫌がらせは忘れない。そんな味方キアラを味方と呼んでいいのだろうか？

3: Cras amet qui nunquam a MAVIT; Qui

もはや恒例の問題回。これでやっと女装騎士による前半ヒロイン降板か。長かったね。何？BLだって？本編に至ってはギャグですよ。

薄暗い森の中央、拓けた場所があった。ある程度の広さはある決闘には丁度いい場所だ。王都からもそれなりに離れてはいる。追っ手がやってくることもないだろう。

そこまで来ると、ようやく俺は肩車係から解放された。お役目放棄ということらしい。さっさと俺の肩から降りたイグニスは二人の騎士の間に立って、決闘のルールなどの説明を始めた。

それにしてもイグニスは、一体何を考えているのだろう。アルドールは考える。

(ブランシュ卿って言ったっけ?)

城で何度か顔を合わせたことはある。一言で言うなら、ランスとはまた違うベクトルの美青年だ。

少し影を感じさせるような、深い青色の瞳は悲しみを湛えたような色。流れるような金髪はしなやかに美しい。物腰は穏やかで優しい微笑を浮かべる人だから、泰一印象はてつきり優しい人なんだと思っていた。それがどうしたことだろう。ユーカーなんかを相手に、穏やかのおの字もない。

「んんぬぬ？」

まじまじとユーカーの方を見ていたら、“なんだよ？”と睨み返された。

腕の縄は先程解かれたから、余計なことを言ったら殴りかかってこられるかも知れない。

余計なことは言わないでおこう。

それにしても変装一つでここまで……一人の男を狂わせるとは恐

ろしい。その原因が彼の内にあるのだろうかと見てみたがよくは解らない。

上手く変装しているからか、普段とのギャップがありすぎる所為なのか、確かに外見は女の子に見えなくもない。

しかしその決定的なものとしては、感じる雰囲気の違いだ。何か違和感がある。それはそうだ。相手は男。唯女装しているだけだ。それが妙に似合ってしまっただけで。それでも相手は男。だからこそ妙な違和感がある。

カーネフェルの女の子達は、何とというかみんな逞しい。簡単に言くと男勝りで、多くの男が憧れるようなお淑やかさとか女の子らしさなんてものは皆無だ。おまけに彼には、都で見た貴族達みたいに女装を楽しむような才能もない。だからこそカーネフェリーの女の子や女装祭りの貴族達ともまた違った雰囲気がある。

女装への抵抗、恥じらいそういったものが全面に滲んでいる。それがブランシュ卿の理想の女の子とやらのイメージとばっちり符合してしまったのだろうか？

確かに、この偏った少子化でカーネフェリーの男は少ない。案外カーネフェリーの女の子より箱入りで大人しくお淑やかなものなのかもしれない。少なくともカーネフェル男は基本的にへたれで消極的ではあると言われている。それが妙な女装の化学反応でも引き起こして、上手い具合彼に惚れられてしまったのだろうか？

例えば物言えぬ彼は、喋れないからこそその魅力がある。それは此方が勝手に妄想を押しつけても言い返せないと言っことで、彼を否定しない。だから理想通りそれが膨れあがりあつという間に理想の彼女のできあがり。それでこんなことになってしまった様にも思う。イグニスがユーカーの口を封じた以上、その点は絶対絡んでいる。

(でも何で……?)

確かに味方は多いに越したことはないけれど、カードでもない人間を引き入れる意味はあるのだろうか？イグニスのことなんだから無意味なんてことは勿論ないとは思う。

だけど答えが見つからない俺は、今度は視線を騎士の方へと向けてみる。すると彼が抱えるそれが目に入った。それは戦うには少々過ぎた荷物だ。

「ブランシュ卿、それは大切なものなんですよね。俺が預かっておきましょうか？」

「これはアルドール様、申し訳ありません」

小脇に抱えられた本。それをブランシュ卿から預かった。なかなか味のあるカードカバーの本だ。

（随分読み込まれているな、本当に宝物なんだ）

でも傷んではない。大事にされているのが解る。そこに気付いて本の虫である俺は、この騎士に少し好感を抱いた。ユーカーは面倒くさがりだし、ランスは多忙で暇があれば料理に時間を費やすような人間だから、読書を布教できるような相手でもない。騎士は戦う人間だから、そういう机の前でじっと座っているのが苦手なタイプの人間なのかも。ルクリースは18禁とかのエロ本やら官能小説にしか興味がありませんと言っていたし、フローリプは黒魔術みたいな呪いの本とか拷問とか凌辱とかのDS小説ばかりが好きだった。俺はもつと普通の本を語り合える相手が居ない者かと思っていた。イグニスは歴史書とか数術関係、宗教関係の学問書とかそういうのにしか興味が無いというか仕事で文献読まされるのに趣味でまでそんなことはしたくないという様子。俺は読書というこの一点において親友にすら見放されている。

そんな中にこの、ブランシュ卿。一筋の光明に見えた。本好きに

悪い人間はいないとまでは言いきれないが、本を読むような心のゆとりがある人なんだなと思うと、好感くらい覚えもするよ。

タイトルくらいは聞いたことがある。一度くらいなら俺も目にしたことがあつたかも。

(……へえ、悲恋の話って感じだな)

パラパラと本を少し捲ってみた。決闘の行く末を見守りつつ、少しパラ読みしてみようか。そう思っていると隣でユーカーが呻いている。

「んーっ！んーっ！んんんんっ！」

「え？何？ふざけんだって？」

手招きされ従えば、そのまま本をユーカーにひつたくられる。座り込んだ彼はおもむろに本を閉じ膝の上。そして両手を離せば……本は、ある頁を開く。読み込まれている頁なのだろうか？

「え、何々？ここ見るだって？」

頬に額に冷や汗が浮かぶ。読書仲間が見つかったというさっきまで興奮が、さっと冷めていくのを感じた。

「え、ええと……」

言うなればそれは、密会というか所謂濡れ場。

勿論そんなに嫌らしい露骨な文章などではない。しかし人の想像力は恐ろしい。この頁から彼が何を受け取ったのかは俺などでは到底理解も及ばない奥深さ。あとあんまり触れたくない。

「んー……」

次にユーカーが見せてきたのは何故か付箋の挟まれた頁だ。その頁は赤ペンでびっしり線が引いてある。そんな参考書でもないんだからとツツコミを入れたくなった。

「ええと……これは間違っつて媚薬を飲んでしまっシーンだなっつてび、媚薬うっうっうっ!？」

それは、物語の三角関係の始まりとなる事件。そこが予習済みっつてどういふことなの？思わず俺まで釣られて身震いをした。何か寒気が身体を襲ったのだ。ユーカーを見ればうっすら涙目。わけのわからないままイグニスの方策に使われて、怖かったんだろっうなあと今更ながらに感謝と共に同情した。せめてもの償いに今度彼に何かあったら、進んで力になってあげよう。

「びやくっつて何ですか？」

「ええと、君はまだ知らなくて良い言葉だと思っつ」

「んー」

横から興味深そうに本を覗き込んできた少年、パルシヴァル君。

俺が言葉を濁すと、彼は不思議そうに首を傾げるが、ユーカーも頷くのでわかりましたと頷いてくれた。助かった。

しかし彼はフローリプと同じ年とは思えない。俺の妹が大人びていたのか、斜めに構えていすぎたのか。彼は本当に子供らしい無邪気さを持っている。

ユーカーの回りをうるちよろしているのは兄弟みたいで微笑ましくはあるけれど必要以上に近づくと、向こうの怖いお兄さん二人から大人げない視線が飛んできそう。片や妄想騎士、片や従弟コン騎士。どちらを敵に回しても厄介そうなのに二人一度に敵に回すな

んでそんな恐ろしい話、俺だってお断りしたい。だって二人は本物の騎士だろう？まず間違ひなく負ける。今日即席で騎士になったばかりのバルシヴァル君だつて似たような者だ。

彼もそれを理解しているのか、本当は膝にでも座つて本を読ませて貰いたいところを我慢して、隣にちょこんと腰を下ろすに止める。

「それではそういうルールで構いませんか？」

「異論はありません。望むところです」

「イグニス様がそうおっしゃるのであれば、精一杯やらせていただきます」

向こうの方も話がまとまったようだ。ルール確認も終わり、これから決闘が始まる。

証人役のイグニスが二人の決闘を取り仕切る。

「制限時間無し、禁じ手無しの問答無用真剣勝負。それでは相手を参つたと、降伏させた方が勝ちと言うことで」

「イグニス、そのルールだと……」

俺は驚く。イグニスの口から発せられた言葉は、俺が予想だにしないもの。そんな俺の驚愕さえ見越したように、イグニスは平然と言葉を返す。

「そうだね。最悪死人が出るよ。両者負けを認めない場合は、相手を殺した方が勝ち」

「だ、駄目だよそんなの！危ないじゃないか！」

「馬鹿だねアルドール。中途半端な決闘じゃ勝つても負けても納得いかない。何度も同じ事を繰り返されるのは面倒だろ？後腐れ無く行こうよつてことで彼らは同意したんだ」

「な、なんでそうなるんだよ！？」

「文字通り、真剣勝負さ。二人とも腕は確かだ。そんな二人がまともにやり合って、唯で済むと思うの？」

念には念を入れたルールだとイグニスと言う。それでも、それじやあみすみす目の前で人が見殺しにするようなものじゃないか。

「馬鹿のアルドールにはわからなくとも、そちらのお嬢さんなら解るんじゃないですか？貴族に騎士にとって誇りは何より大切なもの。汚されてはならないものです」

「誇り……」

俺にもっとも欠けているもの。それをいろいろな人から俺は責められたことがある。誇りは戦う理由。信念であり生きる意味。俺がまだ見いだせていないもの。あやふやで不確かなもの。それでも彼らはもう既にそれをすっかり掴み取っているのだと、イグニスがそれを指摘する。

「アロンダイト卿はアルドールへの忠誠から、ブランシユ卿は愛しの姫君への愛のため。それは彼らにとって紛れもなく命を賭けるに値する誇りなんだ」

「お、俺のため……？」

ランスがあの場合に立っているのが、自分のためだとは思わなかった。てつきり俺はユーカーのためか、イグニスのためかと思っていた。

「ランス……」

じっと彼を見つめれば、彼は優しく笑み返す。貴方のためにも負けませんと言ってくれているようで少し気恥ずかしいが、とても嬉

しい。

彼の信頼が嬉しくて、感動している俺の横から頭突きを噛ましてくる乱暴な少女（偽）が一人。言うまでもなくユーカー改めセレスちゃん改めイズーさん。

「痛っ……！何するんだよ」

かなり痛かったので、彼の方も多分痛かったんじゃないかと思う。だからだろうか。余計怒ったような顔で彼はそっぽ向いていた。

「イズーうつつう！そこで僕の活躍を見ていてくれ！君に無様な所は見せないと約束するよ！」

もう一人の騎士は、ユーカーに向かつて手を振っている。ユーカーが本当にイズーさんなら応援してあげても良いのだけれど、別人だしそもそもユーカー女の子じゃないし。もう亡くなったとはいえ婚約者のアスタロットさんもいるし。第一ユーカーが心底嫌がっているから、あまり応援は出来ない。ブランシユ卿がそこまで悪い人には思えないからちよつと可哀想だとは思っけど、このまま放置していたらユーカーがもつと可哀想なので、ランスには頑張っ欲しいなと思う。

だけど殺すなどか言って、余計な気を使わせてランスが殺されてしまつても困る。だから俺は……「頑張れ」と言うことしか出来なかった。

「それでは構え」

緊迫して来る空気。湧き上がる緊張感の中、俺は心臓がばくばく言っつていった。狼狽えている。けどどうすればいい？どうすることも出来ない。今は見守るしかない。いざとなつたら数術を使っつて

でも何とかしよう。っていうかイグニスが貴重なカードであるランスを死なせようとするはずがない。それなら勝算があるのか？

(あ、そっか！)

カードはカードにしか殺せない。確かそう、聞いた。ブランシユ卿がカードではないのなら、ランスが彼に殺されることはあり得ない。ああ、何だ。そういうことだったのか。

俺はほつと息を吐く。

「準備は良いですか？」

「はい」

「ええ」

しかし二人の騎士の同意の言葉に、再び心臓が騒ぎ出す。

「……始めっ！」

イグニスの凜とした声が辺りに響いた。と思った瞬間だ。もうブランシユ卿の姿はない。構えの体勢から一気に距離を詰めた。しかしランスは動かない。それを迎え撃つ気なのだ。

ブランシユ卿の得物はレイピア。対するランスの剣アロンドイト装飾の美しさこそそれに似ても、分類するならブロードソード。重さはそう変わらずとも、長さではレイピアに分がある。ブロードソードは切る剣だが、レイピアは突く剣だ。リーチの差を埋めるにはランス自身が彼より素早く動かなくてはならない。それでも冷静さを失わない所作で、ランスは一撃目を受け流す。しかしそれでは終わらない。再び突き出される付き。それに今度は間に合うのか。

「防戦で私に勝てるっても!？」

「何でもありの勝負だったな」

それでもランスの笑みは消えない。今度の微笑みは、少し意地悪そうな笑みだが、それも嫌味なくしつかり決まっている。本当何やっても絵になる人だな。恐るべし美青年。隣からユーカーが文句を言っているのが聞こえて来るようだ。「嫌味じゃないのが嫌味」とか「欠点がないのが欠点」だとか。

しかし何故ランスは笑ったのだろうか？俺が不思議に思った時、俺の上を影が通過した。上を見ればもういない。視線を下ろせば、ランスの元に馳せ参じたなんとかなんちゃら号という名の彼の白馬。

「要するに機動力を上げれば良いんだろう？」

ランスは颯爽と愛馬に跨り、次なる攻撃をかわす。これにはブランシュ卿も苦笑い。

「なるほど、考えましたね」

そこで彼も続くのか。そう思ったが彼はそうしない。騎士は馬を得てこそ本領発揮。しかしハンドと言わんばかりに、彼は一人で立ち向かう。その姿は確かに格好いいかもしれない。彼を嫌っているらしいユーカーですらハラハラしたような表情になっている。

「愛しのイズー。君は……貴女は覚えていないかもしれない。しかしこんなことは昔もありました」

「……あつたの？」

視線をユーカーに向けると、彼はぶんぶんと首を振る。否定の意だ。先程までの心配そうな顔もはやあきれ顔に変わっている。

そんな俺たちに彼はおもむろにページ数を口にする。それにユ-

カーが俺から本を奪って、一度本を閉じ……ゆっくり自然に開く本から二番目に読み込まれたページを見つめる。それこそそのシーン。ここも赤ペンで予習済みだったようで、俺は思った。もうあの人の本一冊丸暗記してそうだな、後書きまで。

「覚えていないのも無理はない。あれは私と貴女の前世のことです。私は貴女を得るために竜を討ちましたが、卑小な騎士に貴女を奪われてしまった！これはその再来なのです！！嗚呼！歴史は何度私と貴女を引き離すのでしょうか！！」

ここまで痛いことを言い出す人だとは思わなかった。それでもやっぱり彼も美形だから妙な台詞でも様になってしまうのがとても理不尽だと思う。でも俺がそう思うのは俺の心が汚れていてもはや純真とは呼べないのだからなのだろう。

「か、可哀想ですトリシユさん……。イズーさん！もう結婚しちゃいましょうよ！可哀想です！！」

「んんんうううううう！！」

涙と鼻水を垂らした、少年に泣きつかれても、これだけは退けないと頑として嫌だと叫ぶユーカー。

すっかりこの男の妄言を信じてしまった、純粹少年パルシヴァル君は、もらい泣き状態で二人を哀れんでいる。ギャラリーから埋めるとは、ブランシユ卿はなかなかの策士だ。……偶然かも知れないけど。

「……………卑小、ですか」

ランスはランスで何かが逆鱗に触れたようで、邪悪なドラゴンも顔負けな毒々しいオーラのようなものを出している。でもやっぱり

笑顔だけは爽やかで、その温度差に急激な寒気を感じた。

そしてそれは正解だった。ランスの怒りに呼応するように……辺りの空気が冷えていく。それは彼の剣にまわりついてその姿を変えていく。

水のヴェールの包まれた剣はゆらゆらと長さを変える。

「それじゃあ俺も本気で行かせてもらいます」

すれ違い様振り下ろされた剣。それをブランシュ卿はかわしたが、彼の攻撃はまだ終わらない。始まったばかりだ。

振り下ろされる瞬間剣を離れて噴射された水は、それ自体が恐るべき刃に変わって彼をめがけて飛んでいく。

その存在に気付くまでのタイムラグ。それがあれば避けるまでは行かなかっただろう。現にブランシュ卿は動けなかった。つまり、ランスはわざと外して見せたのだ。背後の木が切り倒されたことを、音で彼は遅れて知った。これは牽制だ。ここで降伏しなければ次は当てると言っ脅し。迎え撃とうにもあんなもの当てられたならレイピアは折れてしまう。とてもじゃないが、耐えきれない。ならば避けるか？しかし人と馬。機動力の差は歴然だ。

「……………流石はアロンダイト卿」

友人だからこそ、本気での殺し合いなどしたことがなかったのだろう。ブランシュ卿は自分の失策を知る。相手が馬で来るのならプライドや見栄など捨ててでも自分もそうするべきだったのだ。ランス相手に一つでも後れを取るのは無謀過ぎた。

「しかし、私は貴方の知らないことを知っている」

「ああ、そうだな」

ブランシュ卿が笑えば、ランスも小さく微笑した。殺し合いの最中にも通じるものがあつたのだろう。

「私は知っている。貴方は彼女を愛していない。貴方の目は真実の愛を知らない人の目だ！」

「……………好きか嫌いかで言うならかなり好きだとは思っただけだな」

好きの意味が違うから仕方ないと言えば仕方ないのかとランスが苦笑。

そんな中途半端な好意の者に負けるわけにはいかない、青い瞳を燃え上がらせるブランシュ卿。ここまで来るとユーカーも若干申し訳なさそうな感じになっている。なんか俺、お前のイブーじゃなくて悪いかユーカーの顔に書いてあつた。

「友人のよしみで一つ教えて差し上げます。最後に勝つのは正義でも悪でもなく、愛と呼ばれるものであると」

「そうか。それじゃあその忠告、ありがたく受け取っておくよ」

ブランシュ卿は構える。あくまで迎え撃つ気だ。

それを誇りと受け取ってランスもまた構える。このままぶつかればブランシュ卿が死んでしまう。それはイグニスと違はず。助けを求めるようにイグニスに駆け寄るが、彼はじつと二人の行く末を見つめる瞳だった。

(だけど……………こんなのって)

もう見ていられない。俺は駆けだした。その俺の横を通り過ぎるもつと足の速い少女の影。

二人の激突の間に割り込むように、ユーカーは走った。そして愛

馬で駆けるランスの前に立ち塞がる。

愛が最後に勝つというのは、ここで負けて例え死んだとしても……彼女の心に残るだろう。忘れられない者になるだろう。だから最後に勝つのは愛だ。ブランシユ卿はそう言ったつもりだったはずだ。だから彼は彼女の助力を期待して言ったのではない。それでもユーカーは動いた。それは何故だったのだろうか。

「い、イズー！！危ないっ！！」

背に庇われたブランシユ卿が取り乱すが、ユーカーはたじろかない。イグニスに何かやられてまだ喋れないその身体で、ランスに制止を訴える。

「退け！ユーカーっ！！」

ランスの叫び声に、どうやっても剥がれなかった口の封印が剥がれ落ちる。

「やってみやがれ！お前の忠誠！どれだけのもんか見せて貰おうじゃねえか！友人、同僚、それから俺も殺すくらいの覚悟はあるんだろうな！？」

響き渡るユーカーの声。それにランスが顔をしかめた。そして一陣の風は、二人を飛び越えていく。

ランスは馬から下りてはあと重い息を吐き、小さくそれでもはっきりと降参の言葉を口に出す。

「……………参った」

「え…………？」

あんな無謀なことをしておいて、こうなるとは思っていなかったのか。彼らは最後の最後で信じられていないのだ、互いに。ユーカ―は自分が死ぬものだと思っていた。ランスが忠誠を証明するのだと信じていた。

でもそれは自分たちの繋がり全てを否定する。積み上げてきたものの全てを否定する行為。過去の全てに意味がないと思われているのは心外だとランスは悲しそうに苦笑。

「……………なるほど、確かに愛は偉大だな。俺にお前は斬れないよ」

「へ、変な言い方するな！」

お前には敵わないと褒められたユーカーは、褒められ慣れていないのだから、照れたように視線を逸らす。

その視線の先で彼は、地に伏せているブランシユ卿を見つけたようだ。がっくりと肩を落としたその様子を見かねてか、ユーカーは彼の傍に歩み寄る。

「イズーが……………私のイズーが……………セレストイン卿だったなんて」

「あ、……………えっと、何か悪いな。でも元はと言えばお前の勘違いが悪いんであつて俺はそこまで悪くない……………っていうか庇つてやったんだからこれでチャラつてことで。あと俺が女装してたとか言いふらすなよ。その時はもう一回ランスにお前襲わせるからな」

「……………解りました」

「あ、そっか？意外とお前物わかり良い奴だったんだな」

「つまり、私のイズーはランスの恋人ではないわけですね！？」

「あつて堪るかボケっ！！つてお前まだ何か勘違いして……………」

「いいえ、ちゃんとわかっています」

「本当か？嘘臭いな」

「そうですね。恋に障害は付きものです。よもや今生はこんな悲

劇が待ち受けていようとは思いませんでした。通りでなかなかイブに出会えないはずですよ」

話の流れが妙な方向にきていると、ユーカーが視線を彷徨わせる。その視線が俺の方に来た。でも俺もどうすればいいのかわからず、その視線をイグニスへとパス。

俺とユーカーの視線を受けた、イグニスは満面の笑み。それを訳すなら……してやったりと言う笑みだ。

「ご苦労様でしたランス様。これで一件落着です」

「勝てずに申し訳ありません」

「いいえ、あれが正解ですよ」

「イグニス、何であんなことを？」

ランスに労いの言葉を贈るイグニス。そんな彼女に俺は質問。俺にはさっぱり解らないことだらけだ。

「なんとなくそうじゃないかとは思っていたんだけど、彼さつき手袋投げたでしょ？見えたんだよね、カード」

決闘の申し込み。確かにあの時彼は手袋を外した。しかし俺たちはそこに気がつかなかった。

「ええ！？だ、だから！？」

「ぶつちやけセレスティン卿が止めなければランス様の方が危なかったよ。あそこからどんでん返しは幾らでもあり得たからね」

あのまま続ければ負けたのはランスの方だとは、どうも思えない。しかし結果としてはランスは負けている。ユーカーの妨害は、彼自身の心によって引き起こされた行動。しかしそれが勝敗を分けた。カードの幸運の差を見せつけたと言っても良いのかもしれない。だ

ってイグニスにはランスよりブランシュ卿の方が強いカードだと言っているみたいだから。

(それって……)

何か、怖い。恐ろしい。心のままに動くことさえ、幸運不運に組み込まれている。幸福値と言うもの。それがとても恐ろしく思えた。俺が一番幸福値の少ないカード。俺は何処まで……やっていけるのだろうか？幸運じゃ誰にも勝てない。みんなが俺の所まで幸運を磨り減らしてきてくれるのを蟻地獄の中で待っているような俺だ。道化師を倒すというのは、つまりそういうこと。姉さんのように、ルクリースのように、フローリップのように。みんなの命と幸せを糧にして俺は生き延びていく。

今だって上手く転ばなければ誰かが死んでいたかもしれない。そしてそれは俺には止められない。庇ったとしても俺では死んでいたかもしれない。ランスが止まろうとしてくれても、事故で俺は死んだかもしれない。不運とはそういうものだ。

恐れ戦いた、俺の気を紛らわすように、イグニスは大げさに溜息を吐き肩をすくめる。それは素直にありがたかった。

「いや、でもイケメン補正って怖いね。みんな彼の顔ばかり注目してて手の方誰も気付かないんだから」

そんな馬鹿なことがあるか？と思ったが……確かに言われてみれば結構みんな遠くに居たし、状況が状況だからそんなところまで見ていなかった。手の甲は袖で隠れるし、掌は剣を握れば見えなくなる。後は素早い動作の所為で残像が生じ、手なんかブレブレ。模様なんて視覚出来る動体視力が誰にある？

「よ、要するに？」

「手持ちのカードの幸福値を極力使わずに、なんとかブランシユ卿を絡め取れないかなあって思ったんだけど、まったく良い仕事してくれたよランス様もセレストイン卿も」

イグニスはくすぐすと悪戯っぽく笑いながら三人の騎士を眺めている。その笑顔は天使だが、言っていることは悪魔というか大魔王レベルだ。でも俺はそんなイグニスが大好きです。

「イズー！私を守ってくれた貴方に僕は心を奪われました！」

「ち、違う！俺は唯あいつに友人殺しなんかさせたくなかつただけでお前を守ったわけじゃない！あといい加減一人称と二人称統一しろ！気になるんだよ！！」

「気になると……？やはり貴方も私のことを……」

喋れば喋るほど追い詰められていくユーカー。これ以上拒んだら、その内ブランシユ卿予習済みの媚薬が持ち出される可能性すらほんのりと漂い始める。

「意味が違ええええええええええええ！助けてくれランスっ！！」

「いや、お前とトリシユが仲良くなるだなんてなんだか感慨深くてな。いつも喧嘩ばかりしていたお前達が……」

「感動っばいこととしてないで助けてくれ！俺はこいつとなんか仲良くなんざなりたくねええええええええええええ！！」

ランスを盾にぐるぐると逃げ回るユーカー。しかし盾は働く気が無さそうだ。そんな茶番にイグニスは痺れを切らしたのが、やれやれと肩をすくめる。

「まったく心の狭い男ですね。アスタロットさんも男はノーカウ

ントだとか言ってるかもしれないよ」

「言うわけねえだろうが！お前がアスタロットの何を知ってるって言うんだよ！！」

アスタロット。その名はユーカーの許嫁だった少女の名だ。彼女と彼女は家の揉め事に巻き込まれ、両思いなのに双片思いで死に別れてしまったんだ。彼女への思いがあるから、ユーカーは基本恋愛事には無関心。なのに今は何故か同僚男に迫られているという謎。彼は本当に不運なんだなあ。コートカードなのにカバーできない不運が結構多い様な気がする。

「でもまあ、確かユーカーが誰を好きでもアスタロットさんはユーカーが好きですって言うてくれてたし、別に止められてはいなかったよな」

「馬鹿かお前！そこまで言うてくれた女に対し心変わりなんて失礼だと思わないのか！？っていうはそういう所にお前記憶力使うな馬鹿！忘れる阿呆っ！」

ついアスタロットさん絡みで思いだしたことを口にしたら、ユーカーに叩かれた。

「ところでイズー、そんなに怒鳴っては咽を痛めてしまいますよ。丁度冷たいお茶を用意していたのでどうぞこちらへ」

「ぜ、絶対飲まねえからな！！」

「何をそんな不審そうな目で私を見るんです？まさかこの私がこの茶の中にムラムラと燃え上がる情愛の媚薬を仕込んでいるとも思っているのですか！？私がそんな事をするはずがありません！この私が信用出来ないのですかイズー！！」

「出来ねえ！！今までの何処に信頼出来る要素があったんだ！」

「私は今まで必死に耐えたんですよ！？森で貴女に目を閉じてと

言われた時はてっきり口付けでもされるのかと思っただけで貴女の可愛さ勢い余っていつそのことあの場で押し倒してしまおうかと思っただけだったんですが！？そうしなかつた私をむしる褒めていただきたい！」

「そこまで考えてたのかよ！きめえよっ！！もう嫌だ……お前もう都に帰れよ」

「それは無理ですね。愛しのイズー、貴方が私の愛を受け入れてくれるまで私は貴方の傍を離れません」

ブランシュ卿の暴走気味の発言に、イグニスだけがほくそ笑む。

「つとまあこんな感じでブランシュ卿ゲットってことだね」

しかしユーカーはもう半分死人のような顔色だ。

「こいつがいるんなら俺は逃げるぞ。地の果てまでだって」

「なるほど。他の四人が邪魔だと？」

「お前だけが邪魔だつて言っただよ俺は」

「そんなに照れなくてもいいでしょう？私と貴方の仲ではありませんか」

「犬猿の仲っていう奴か？」

「そうですね、別に二人で愛の逃避行に行きたいっていうなら僕も止めませんが、その時はいろんな所にこればらまこうと思っただけですけどいいですよ？」

威嚇するユーカーに躍り寄るブランシュ卿。そこに追い打ちを掛けるイグニス。イグニスの手に握られていたのは一枚の写真だ。それは女装ユーカーとブランシュ卿の2ショット。

「イグニス、カメラなんて持ってた？」

「一人であいつに会いたくないんだ。一緒に来てくれないか？」

相方に頼られたのが嬉しかったのか、みるみるユーカーの顔が明るくなる。それでもはっと思いだしたようにそっぽ向く。先程の仕打ちのことを思いだしたのだろう。

「……トリシユの野郎なんとかしてくれたら考えても良いぜ」

切実な悩みでもある。自分の言葉は届かなくとも、友人であるランスの説得には応じるかも知れない。っていうか脅してでも止めさせろという懇願。

余程一人で実家に戻るのは嫌なのか、ランスはブランシユ卿に向き直る。

「トリシユ、こいつは俺の可愛い従弟だ。だからあまりこいつの嫌がることはいくらお前でも見過ごせないことはある。第一結婚もせずに関係を結ぼうなどは、ふしだらだ。そんなことでは聖なるコウノトリも困るだろう？」

「お前……何言ってるの？」

途中までは頷き、照れながら。それでも話を聞いていたユーカーも、途中で話がおかしくなっていることに気付いて、見過ごせずツッコミ。

「いや夫婦間の営みは、子宝のコウノトリを呼び出す神聖な召喚の儀式なんだろう？この間会ったときにもう一回聞いたら母さんがそう言っていた」

「前より悪化してんじゃねえかお前！お前の中の保健体育はどうなってやがんだよ！！っていうかそこまで解ってるならもうコウノトリとかキャベツ畑とか要らないよな普通っ！」

「なるほど、つまり結婚さえすれば何をしても良いんですね？」
「トリシユ！なんてでめえはやること前提なんだよ！！大人し
そうな顔してどんだけ肉食なんだ！」

目的と手段が入れ替わってしまったっているブランシユ卿の発言に、
ユーカーはもううんざりした表情。

「セレスさん、よく分からないですが元気出してください」
「パー坊、俺なんかもう疲れた」

パルシヴアル君に泣きつくユーカー。また一つ彼の悩みの種が増
えてしまったようなのは俺も少し心苦しい。言えた義理ではないけ
れど、言ったら怒られそうだけど、元気出せよくらいは言いたくな
った。が、言えなかつた。それはくるりと顔の向きを変えて此方を
振り返るブランシユ卿があつたからだ。

「アルドール様！いいえ我が君！忠誠誓いますので、イズーと私
の結婚をお許し下さい！法律的な意味で！」

「え……え？えええ！？ど、どうなのイグニス！？」

ユーカーの合意じゃなくて、まずは法律から責めてきたブランシ
ユ卿。当面の問題は法律であり、本人の意思をそこに入れていない
のが恐ろしい。そつちは何とかなるとでも思っているのだろうか？
今の拒絶反応を見ながらよくそこまで自信を持てるものだなと感心
した。

「そうして差し上げたいのは山々なんです、生憎国がこんな状
態ではどうにもなりません。そうですね。カーネフェルを平和にす
るまでそれはちょっと難しいのでは？」

「アルドール様！北へ参りましょう！すぐに参りましょう！そこ

で味方を得るのですか？それでさっさと南を攻め滅ぼしましょう！こんな事もあるつかと、船を用意しておりました！！」

何という変わり身の早さ。荷物を整えテキパキと旅支度を始めるブランシュ卿。

「ねえ……もしかしてイグニス」

「そうだね、逃避行ってくらいだから船の手配くらいはしてあるとは思ったよ」

でも何より恐ろしいのは、もう未来とか見えないよとか言いつつここまで人を踊らせる、俺の親友の先読みだった。

3: Cras amet qui nunquam avertit; Qui

本編の薔薇は基本ギャグ。裏本編はガチ。本編は魅了邪眼使いとか
いないしね。仕方ないね。

と言うわけでようやく次回からカーネフェル北部編。敵やら味方や
らまた増えたり減ったりです。

「さあ、イズー！この辺りは木の根が多いですから足下に気をつけて」

「だからその呼び方止めるって言ってるんだろ」

「なんなら私が抱きかかえて」

「話し聞けよおい」

「……つかもう俺この恰好止めていいだろ？こいつ丸め込んだんだし神子、お前の企みも終いだろ？」

「いいえ駄目です」

「ふざけんな！」

「嗚呼、流石は神子様！なんと慈悲深い！！」

「俺にとつちや悪魔の化身だ！」

「ランスさん、僕の頭グリグリするの止めて下さいー！」

「あ、いや……ごめん」

何だろうこのカオス。アルドールはそんなことばかりを考えていた。

トリシュを味方に引き入れて、北へ渡る船を入手。今はその船のある場所へと向かっている途中。

もう意味を成さないはずの女装を無理矢理続けさせられているユーカーと、そんな彼に心酔してしまったトリシュの暴走。ユーカーの嫌そうな顔を見て満足そうなイグニス。

相方が自分以外の人間にからかわれて弄られてるのに複雑な心境っぽいランス。その精神安定のためかストレスからか丁度手を置くのに丁度いい高さらしいパルシヴァルの頭を怖い笑顔で撫でている。

「それなら俺も視覚数術でいいだろ普通に」

「嫌です。僕は今、数術代償の省エネ中なんです」

そこでユーカーが折れてあげる必要は無いとも思うんだけども、そこで折れてくれる辺り、なんだかんだでお人好しだ。これ以上こねてもイグニスが要望を受け入れてくれるはずがないと解っているのかもしれない。最終的にこうなるなら、それならいつそのこと最初から文句言わずに従ってくれれば楽なのに。そうは行かないのが真純血貴族のプライドって奴なんだろうな。

「そんならランスでもトリシユでも良いから服脱げ！俺の変わりに女装しろ！」

「セレスさん、僕で良ければ代わりますよ？」

「気持ちは嬉しいが、お前の服じゃサイズ合わねえんだよ」

ユーカーにがつくり肩を落とされて、困った顔のパルシヴァル。かと思いきや、苦悩の表情のトリシユが踊り出る。

「私とイズーが衣服の好感着用。それはつまり先程まで彼女が羽織っていた、彼女の白魚のような肌を包んでいた服を私が纏い、私の服を彼女が！サイズが合わず着せられている感のある私の服を彼女が！嗚呼……そしてこの一体感！まるで疑似せ……（以下自主規制）！……」

彼女じゃねえよと多分、全員が心の中でツッコミ入れたと思う。ユーカーもドン引きの様子で、ランスの方へと逃げていく。

「やっぱこいつきもいから無しだわ。ランス、てめえの上着貸せ。なんなら下も貸せ」

「お前はどこの追いはぎなんだ？」

過酷な要求を突きつけられても苦笑で流す、そういう顔は何時も通りの格好いいランスに見える。でも今となってはどっちが素か端から見ている俺には、よくわからない。

無茶な言葉でも、久々に相方に構って貰えて嬉しそうでもある。そういう解釈をすると、彼も意外と子供っぽいというか可愛らしいところがあるんだなあとしみじみ思う。

「大丈夫大丈夫。ほらお前は自他共に認める美形だろ。美形は何しても美形だから半裸でも全裸でもなんら問題ないだろ。どうせあのクソ神子が視覚数術かけてくれるんだし。っていつか夏場で暑いだろ？これはお前のためを思つてのことなんだってことでさっさと脱げ。そして服寄せ」

「その理屈だとお前も問題ない。もつと自分に自信を持て。あと暑いだろ？」

鸚鵡返しの恐ろしさ。言いくるめようとした言葉全てが自分の方へと返される。相手を言いくるめるための言葉だ、反論されるなんて思わない。故にそれを言われたときの返答に困る。それでもそこですかさず言い返せるユーカーは口が達者だ。

「馬鹿かお前？俺が半裸だの全裸になつてみる。問題しかねえだろうが。トリシユの馬鹿がどう出るかもわかんねえし大体……」

どうせ男しかいないのだし問題はそんなにないんじゃないかと言うランスに、ユーカーが押し黙る。神子は女だろうがと言いかけてそれを咄嗟に飲み込んだのだ。

ああ、そうだった。ランスはイグニスが女の子だつての知らなかつたんだつた。

「んなこと出来るか。俺は騎士だぞ貴族だぞ？そんな屈辱に耐えられるか」

「それなら俺も騎士だし貴族なんだが」

(これは並行線だな……)

何気にどっちも石頭なんだこの二人。流石は親戚。流石は従兄弟。似てないようで似たもの同士だ。

「解った。それじゃあ俺が代わるよ。俺とユーカーならそんなに背丈も変わらないし服のサイズも何とかなるだろ」

「ったく、最初からそう言えよな」

「ってユーカー、何で俺が怒られてるの？」

「気の利かないお前が悪い」

「あーはいはいそうですねー。ってなわけで視覚数術の対象者切り換えよろしくイグニス」

「別に良いけど……君って本当プライドないね」

南部から都までの旅で、もう女装に慣れたと言っのだろうか。最初の頃みたいな抵抗も薄れた。でもあの頃はフローリップが、ルクリースがいて。俺の髪を弄って遊んでいたなと思いつと……涙腺が緩んでくる。嗚呼、馬鹿だな俺。こんなこと思いつすなら安請け合いいしなきゃ良かった。

「……はあ」

そんな俺の目に気付いたのか、ユーカーは「やっぱいい」と俺から離れる。

「え？」

「もういいつつつてんだよ。もう着いたみてえだし着替えてる暇もねえ」

丁度その時、光が見えた。森を抜けたのだ。そこには小さな、それでも立派な屋敷がある。

景観は素晴らしい。屋敷は高台にあり、その下には大河が見える。

「……ここは？」

俺の疑問を受けて、ユーカーが意見する。

「都貴族の別荘か？」

「ええ。時折晚餐会などに呼ばれていまして。その際にいざというときの脱出用の船が用意されていることを知りまして」

トリシユは頷いて、ささと俺たちを誘った。なるほど、確かに屋敷の裏の岸边には一艘の船が用意されている。

「そんなことよりだ。橋は俺が落としてきたし、船があるって言うてもザビル河の激流をどう突っ切るかって話だぜ」

「セレストイン卿にしては建設的なことを言いますね」

「神子様、如何に神子様と言えど私のイズーを貶める発言、軽んじる発言は慎んでいただきたい」

「今朝までお前も似たようなキャラしてたけどな」

ユーカーのツツコミを全力でスルーするトリシユ。

「そうですね。船はなかなか丈夫ですし突っ切るって事も出来ると思います……ランス様？」

「はい？」

「ランス様は確か水の精霊によく懐かれる方でしたよね」

イグニスには水の精霊の力を借りて、海路を切り開いて欲しいとランスに頼む。ランスは火のクラブのカードだが、何かと水と縁がある。彼の養母が湖の精霊だということが関係しているのかも知れない。

もともと本当なら水属性のハートカードのイグニスの方が合っているような気もする。でもコートカードは元素の加護が薄いと言うし、適役とは言えないのかも。

「しかしイグニス様。俺は淡水精霊は呼び出せますが、海水精霊とはあまり」

どうにもランスらしくない返答。てつきり快諾が返って来るとばかり思っていた俺は驚いた。

「え？でも前にランスの養母さんと海の精霊は知り合いだって言っただけじゃなかった？」

「……精霊同士は仲が良いですよ。でも俺は人間ですから、俺を拾ったことに関しては余所の精霊との折り合いも悪いんです」

カルディアに届いた魚介類の山。あれは海からの贈り物であったはずだ。しかしこの間の贈り物は、ランスの母さん宛に送られてきたものの横流しであって、ランス本人に送られてきたものではないと言っ。

「水の精霊にもいろいろあるんだな……」

「まあ……水の精霊は、同族にはべったべたに甘い分、他族には風当たり冷たいって言うかそういうところはあるよ。特に僕らの殆どは天敵の火の人間だし」

「あ、そつか。俺もランスもユーカーも火だったよな」

イグニス of 解説に俺は納得。数術マスターの神子が言うからには説得力がある。それに水 of 人間であるイグニスもそう言うところあるから凄く合点がいった。

「……あれ？でもイグニスは水だろ？あとパルシヴァル君とトリシュさんは？」

「パルシヴァル君はペイジだからね。発現するまでは何とも言えないけど……お二人の出身地は何処でしたか？」

「こいつはカーネフェルだと思うぜ。だよなパー坊？」

「はい！」

「それなら恐らく彼もクラブでしょうね」

「ほんと、カード偏ってるなあ……」

パーティの殆どが火属性ってどうなんだ？弱点突かれた場合コトカード以外は危ない気がする。

不安げな俺の隣で、イグニスはトリシュに同じ質問を投げかけていた。

「それでブランシュ卿は？」

「私は……シヤトランジアですが」

「ああ、なるほど。だから紋章がハートだったんですね。これで合点が行きました」

そう言えばまだトリシュのカードを俺は見えていなかった。

「なんか今更だけど、これからよろしく。トリシュ」

俺は手袋を外して、カードの裏表を彼へと見せる。

まさか王が一番弱いカードだとは思っていなかったのだろう。トリシユは青い眼を見開いている。

「アルドール様はAなんですか」

「俺以外の王もそうだよ。Aだからっていう理由で、俺はイグニスから王に推薦されたんだ」

王が最も弱い。それは革命……下克上、反乱混乱を招く要因。そんなものを部下になる者に見せるなんて思うかもしれない。けど、だからこそ俺は見せたい。

「俺は王としてもカードとしても頼りない人間だけど、それでも……俺を王と呼んでくれますか？」

仕える気がなくなったというのならそれはそれでも仕方ないことだと思う。

……暫くの無言。その後彼が跪く。

「ご謙遜を」

トリシユは笑っていた。

「貴方が価値なき人ならば、我が友が貴方に仕えることはなかったでしょう」

ランスが俺を認めたなら、それだけで俺が賢君に足ると彼は言う。

「それから私のイズーを従えるほどのお人です。そんなことが出来たのは先王様と我が友くらい。そしてそのどちらも素晴らしい人だと私は考えます」

だからあの一筋縄では行かない彼を上手いこと従えている（ように見えるらしい）俺を王と扇ぐことに疑問はない。彼はそう言うてくれた。

「別に俺はアルドールに仕えてねえけどな」

ユーカーがふて腐れているが、トリシユはくすくす笑っている。

「失礼。彼の我が儘を受け流すアルドール様に器の大きさを見ました」

「俺は我が儘じゃねえ！！」

ユーカーは大層ご立腹だが、庇われたことで心底胸を射抜かれたのが、そんな表情も堪らないとトリシユはご満悦の表情だ。

「此方こそよろしくお願いします、アルドール様」

手袋の下、彼も見せてくれる。手の甲のハートの紋章に、？の文字が刻まれた掌。1スーツがペイジを入れて14枚 なら丁度中間のカードだ。可でもなく不可でもなく。元素の加護と幸福値、そのバランスに優れていると言えるかもしれない。彼自身の騎士としての強さも期待できるから、心強いとも思う。

イグニスがあんな無茶（主にユーカー的な意味で）をさせてまで味方に引き入れようとしたのだから、やはりなにか意味があるのだろう。

ユーカーは嫌そうだが、都を追い出されて心細い身の上。味方になつてくれる人がいるというのは本当にありがたいことだ。

「ああ、よろしく」

俺は彼と固い握手を交わして……彼を立ち上がらせる。何時までも跪かれていますというのも気が落ち着かないし照れる。

「ただし我が君。万が一この予言書のように私のイズーを娶ったりなんかなさいませんように。その際は誓いを破棄し貴方の首を取りに行きます」

「ああ、それなら大丈夫。未永く仲良くやっていけるよ」

例の恋物語の本を片手に脅迫してくる新しい騎士。面白い人だなと思うが、自分がその妙な三角関係に組み込まれては堪らない。ユーカーは嫌いじゃないし人としては好きだけど、それはトリシユのようなあれではないし、ごめん被りたい。

「王様ー！僕も僕も！」

トリシユの真似をして膝をついて手を伸ばしてくるパルシヴァル君。うん、この子癒される。片手で握手をしながら俺までしゃがみ込み彼の頭を撫でたくなった。

「痛っ……ってこのパターンはイグニスだな」

頬を抓られる痛みに横目を向ければ、そっぽ向いたイグニスの手が見える。

「君ってさ、そういう無邪気系の子に弱いよね。ギメルとかギメルとかギメルとか」

「そんな俺をどこぞの馬の骨を見るような目で見なくても」

流石はシスコン……あれ、イグニスが女の子ならブラコンになる

のか？つていうか結局ギメルって何者？イグニスが女ならギメルが男？…でもそう言う言い方をしたらイグニスは怒っていたし。それならギメルも女の子？でも混血は必ず男女の双子で生まれるんだろ？姉妹だったら……それじゃあ二人は純血？駄目だ。頭が痛い。

(…でも、今のなんでイグニス怒ったんだ？)

ギメルというものがあいながら、余所見をするなってことなんだろうか？

イグニスは本当に妹（もしくは弟）想いだな。

「何にやにやしてるの？気持ち悪いよ君」

「いや、やっぱりイグニスは優しいなって」

いや今の話の流れからどうしてそうなるんだよっていう、呆れてもう声も出ない様子のユーカーの冷めた視線のツツコミが見えたが俺は気にしない。

イグニスは俺の言葉に咳払い一つ。聞かなかつた振りで話題を元の方向へと戻す。

「…まあランス様の精霊加護が使えない以上仕方ありませんね。突っ切るしかありません。この船壊す覚悟で帰りは余所で船を手に入れるしかありません」

名も知らぬ都貴族の人ごめん。でもユーカーとかランスの話聞く限り、都貴族の人ってあんまり良いイメージないし、この一週間ですその認識も強まった。あんまり心は痛まない。

「緊急事態ですし」

「お前王様だろ？しゃんとしてる」

ランスもユーカーも何だか良い笑顔。ユーカーは屋敷から着替えをかつぱらおうとさえしていたが、悪趣味すぎてろくな服がないと愚痴をこぼしていた。

「まあ、徴収ってことでいいよね。どうせこれ国庫からくすねた金で豪遊してたんだろうし」

イグニスもいい気味だと笑っていた。小一時間かけ、運べる程度の必要最低限の物資を積み込んで、ようやく俺たちは船を出す。

激流の中スピード何とか舵を取るのはイグニスの計算だ。波の動きを読み取って自動運転をさせている。それもいろいろ消費する数術なんじゃないかって心配すれば、「契約だから大丈夫」と言っていた。

イグニスは神子を継いだ時、先代とか先々代とかその前からとかの神子を祝福していた精霊の加護を得たとか何とか。

「まあ、僕の精霊はいろいろ触媒に関して五月蠅いから使い勝手悪いから、出来ればランス様みたいな精霊に好かれてる人の方が効率よく使役できるんだよ。あれは純粹に好意だから触媒とか代償払う必要ないし」

「おまけに僕水属性でしょ？水属性って火の次に風の精霊と相性良くないんだよ」

風の精霊を使役するには神経を使うとイグニスは溜息を吐く。

「風の精霊と一番相性いいのは火の人間だから、君らの誰か気に入ってくれたら僕も楽なんだけど」

「え？風の精霊は風属性の人間と一番相性良いんじゃないの？」

「見た感じエルス・ザインはたぶんタロック出身だろうし風のスペードのページだとは思うよ。彼もそれなりに風の精霊使いこなしてたし」

でも一番の相性ではないとイグニスと言っ。

「風と一番相性良いのは火。つまりクラブの君たちだ。前に言わなかつたっけ？」

「いや、聞いたかも知れないけどあの時は……火と水が相性最悪って聞いたので頭がいっぱいだったというか」

しかし聞けば聞くほど、妙な話だ。イグニスが言うには、風は火、火は風、水は土、土は水と最も相性が良いのだと。

「納得いかないって顔だね」

「そりゃあ。だってその話だと水の中に住んでいる魚より、水に好かれてる生き物が居るみたいなお話だろ？」

「動物で考えるから駄目なんだよ。自然現象で考えるのがベターだよこの場合」

豊かな土壌を作るのは水。火を熾すのも消すのも空気、つまりは風。水を塞ぎ止めるのは岩、つまりは土。空気を燃やすのは炎。まあそんな感じで相互作用で世界を構成している。だから相性が良いと考えられているらしい。

「精霊ってというのは数術学では元素の塊が集まりすぎて意思を形成した形状のことを表す。つまり心があるってことだね」

「心か……」

「うん。精霊はある程度は自分大好きだけど、そこまでナルシストってわけでもない。だから自分と違ふところがある者を好むんだ」

「なるほど、面白いな」

「ランス様の凄いとこころは天敵と言っても良い水の精霊に懐かれていますってところだね。まあ、正し淡水に限るって条件が付くらしいけど」

「まあ彼は例外中の例外。基本的には君たち火の人間は風の精霊に懐かれやすい。その逆で火の精霊は風の人間と相性良かったりするんだよね。だから風のカードの多いタロツクがカーネフェルに踏み込むと、それだけであつちが有利になつたりつてあるんだよ。精霊に懐かれたりなんかする前に、片を付けたいところだね」

「あ、だからか。エルスが最初にあの村を焼いていたのつて、もしかして……」

「生け贄でも捧げて、でっかい火の精霊呼び寄せて契約でもする気だったのかもね。生憎その前に君があ村の炎を従えたからそうはならなかつたけど」

「それはそうとイグニス……」

「何？」

イグニスが得意げに知識をひけらかすのを見ているのは好きだ。だって楽しそうに彼は、無知な俺に教えてくれるから。君は馬鹿だなあとか言いながら、意外と律儀に丁寧に教えてくれるイグニスの笑う顔。それを見ているのは楽しかった。昔からそうだ。屋敷にいた頃だって、俺が家庭教師の先生に教えて貰つて解らなかつたことを、窓の外から聞いていたイグニスが俺を馬鹿にしながら教えてくれたことがあつた。あの頃に帰つたような気持ちになれるのが好きで、だからもう少し聞いていたい俺は……ちよつと無理をした。

「調子に乗つて話してたら……何だか気持ち悪くなつてきた」

「君、馬鹿？」

最初こそ船には慣れたと思いがついていた。しかし酷い揺れだ。船酔い地獄。

俺に至っては乗船五分程度で……立っていることもままならなくなった。それはユーカー、パルシヴァルも同じだ。ランスが少しだけマシというか、一度の嘔吐もなく美形イメージを保持している。別次元としては水属性のイグニスとトリシユだけが、平然としている。狡い、羨ましい。

「嗚呼、大丈夫かい私のイズー！今水を持つてくるからね！」

「てめえ……妙な薬持ってきたら海の藻屑にしてやっからな」

「はいイズー。水だよ」

「あからさまにつ！毒々しい色合いじゃねえか！！こんなシヨツキングピンクな水があつて堪るか！どこの汚染水だ！？全世界の水に謝れ！」

激怒のユーカーがコップごと床に叩き割る。介抱する振りして媚薬を飲ませようとは、油断のならない騎士が世の中にはいたものだ。

「何を言つんだイズー！船内は私と君のフラグスポットじゃないか！この本にもそう書いてある。君はここで誤って飲むべきなんだよこの媚薬を！」

「だから俺をお前の脳内彼女に具現化するなつて言つてんだろ！」

「げ……元気ですね、セレスさん……トリシユさん……」

具合が悪いにも関わらず、青い顔でトリシユとやり合うユーカー。その言い争いが頭に響くのか、辛そうなパルシヴァル。

死屍累々とした船内。ユーカーも無茶してる。俺だったら無理。

あんなに騒いだらまたリバーズしそう。見ているだけでも吐き気が移る。

「まったく情けない男だね君は」

イグニスはその言いながらも、背中をさすってくれる。そうしてくれるイグニスの手は冷たい。俺のために冷却数術でも使っていてくれるのだろうか。

「イグニス……俺はもう大丈夫だから、パルシヴァルとかの方……頼む」

俺だって船酔いで辛いんだ。俺より幼いあの子はもっと辛いだろう。そう訴えれば、イグニスは小さく笑う。優しい笑みだ。その目は俺を馬鹿と言っていたが、それでも……優しい笑みだった。

「解った」

彼女はそう言って笑うから、それを見た俺は何だか安心して……急に眠くなってしまって。流れるよう、流されるよう……睡魔に身を預けた。

*

気持ち悪い。頭痛い。吐き気がする。だけど眠れない。眠ったらお終いだ。最悪人生の終わりだ。

ユーカーは二つの理由で魔されていた。船酔いを免れたトリシユの相手をしていた所為で船酔いが悪化し、もう起き上がるのも億劫で。

かといって油断している内に得体の知れない液体なんか飲ませられたら堪らない。この世の中に人の心まで操るような惚れ薬なんてもの存在するとは思えないから、この怠さに加えて発熱という症状

を招き悪化させるような代物だろうあれは恐らく。そうじゃなかったとしてもあんなもん毒物と紙一重だ。そんな表に出回らないやばそうな薬飲ませられて堪るか。

(こんなことになるんなら庇わなきゃ良かった……)

どうしてこうなったんだしかし。俺は唯、ランスに友人殺しをさせたくなかっただけだ。俺ほどじゃないにしろ、あいつだってそこまで友人の多い奴じゃない。俺はトリシユなんか嫌いだ、あいつは認めるところもある友人だと言っていた。

(いや……でも、まだマシか?)

あの決闘の際にチラ読みしたあいつの本曰く、あいつの前世の恋人もとい空想脳内彼女は金髪で、回復魔法の使い手だった。俺はそんなもん使えないから、もし女装してたのがランスか神子だったらと思うとそれはそれで問題だったと思う。

あの神子は自分とそれからランスに火の粉が降りかからないように、俺を人身御供に差し出したわけだ。

そりゃあ俺だって、自慢の従兄が揉め事に巻き込まれるよりは俺が身代わりになった方がマシだとは思う。あいつの経歴にヒビが入ることがあってはならない。そのための俺なんだから。

「お前が黙っている時は、大抵ろくなことを考えていないときだな」

「……ランス」

いつの間にか従兄が、俺の隣に腰を下ろしていた。蹲っていたからか、寝台にはスペースもある。その手には盆があり、その中にはコップがある。

まさかこいつ友情のためにとうとう身内の俺まで売り飛ばす気が？トリシユの言いなりになって何食わぬ顔で妙な物飲ませに来たんじゃ……恐る恐るそれを覗き込む。しかしそんなに変な色はしていない。覚えのある果物の香りだ。

「神子様が言うには、船酔いには林檎がいいそうだ」
「へえ……」

自分だって体調悪い癖に、わざわざ摺り下ろしてきてくれたのか。どっかの馬鹿とは大違いだ。一瞬でも変なことを考えた自分が恥ずかしい。

「もしかしたら俺がお前達ほど酔わなかったのはお前のおかげかもしれないな」

「は？」
「作ったケーキ、結局食べる暇なかっただろ？」

言われてみれば、俺はこいつに何かリクエストしてたよな。アツプルパイかミートパイとかって……

「お前は味見したって事か」

狡いと睨み付ければ、食意地張りすぎだと笑われた。

「そりやするよ。失敗なんかしたら人に食わせられないだろ」

「お前の料理は味は美味いぜ。時々っていうかいつもっていうか8割方、見てくれの方が発禁レベルだけだ」

「だって、それは勿体ないじゃないか。味が問題ないなら別に捨てることはないだろう？」

「お前の価値観が俺は時々わかんねえや」

俺も小さく吹き出した。笑うと少しだけ気分的にも楽になると林檎美味え。

「そっぴゃあいつらはどうした？」

「アルドール様は寝込まれて、イグニス様はパルシヴァルの看病をして下さっている」

「……………あ、そ」

「トリシユは」

「別に聞いてねえ！」

「そうか？ちなみにあいつは甲板で豎琴を弾いている」

「殴つて来ても良いか？」

俺が肩を振るわせると、ランスが笑う。

「そう言わないでやってくれ。あいつなりに心配してるんだよ。」

お前やアルドール様のために何かできないか考えた結果の行動で」

「音楽で船酔い治るんなら俺だって考えてやるよ」

確かに耳を澄ませばポロンポロンと聞こえてくる旋律がある。あいつ何処から楽器なんか持ち出したんだ。馬に乗っていた時はそんなの持つて無さそうだったのに。あの屋敷でよく演奏させられていたみたいだし、常備していた楽器でもあったのだろうか？

「……………まあ、曲はいいけどよ。あの歌詞なんかなんねえのか？」

さつきからイズーマイラブとかつて聞こえてくる歌詞が腹立たしいし、一回聞くと耳から離れず寝苦しい。

「ああ、俺も歌うならせめてお前の本名にしてくれと抗議はした

んだが」

「抗議のポイントが違えよ」

「だが、代名詞的な意味合いが大きく聞き入れて貰えなかった」

「お前も俺の話聞いてくれねえよな結構」

「ああ見えてもトリシユは照れ屋で、お前を名前で呼べないらしい」

「何処の世界の照れ屋が寝込み襲って媚薬飲ませようとするんだかな。小一時間あいつに問い正してえところだ」

「そうか」

「何笑ってんだよ？」

「いや……俺を止めてくれてありがとう。お前が居てくれて助かった」

「……………おう」

突然礼を言われるなんて思わなかった。だから変な答え方しか出来なかった。しかし考えてみれば礼を言われるなんて妙だ。

「どうかしたか？」

「……………むしろ俺はお前に嫌な思いさせたんじゃないかって思った」

「どうしてそう思ったんだ？」

「カードだよ。お前の方が優勢だった。誰の目から見ても明らかだ。だけどトリシユの方が下位カード。幸福値でお前はあいつに負けている」

そう、俺の行動は……こいつにとって嫌味に映っても良いはずだ。礼を言われるようなものじゃない。

「俺があいつを庇ったのは……お前にカードの幸福値の差を見せつけたってことだろ？俺は俺がコートカードだから何とでもなると

思ってあそこに踏み込んだんだ」

「違うな。お前は、例え上位カードでも同じことをしただろうさ」
妙な確信めいた言葉遣いで奴が言う。俺を買い被りすぎだと笑っても、その目は引き下がらない。本気の目だ。

「俺は本当に何というか……先日イグニス様にも叱られたんだが」
「神子に？」

「お前は自分という物がなさ過ぎる、だったか」

ランスが何を言いたいのか。よく分からないが、それは本人も解っていないさそうだ。だからこんな言い方しかこいつは出来ないんだろうな。

「つい仕事とか命令をされてしまうと、俺は余計自分が見えなくなる」
「お前は真面目だからな」

別に悪い所じゃないんじゃないか？不真面目より余程いいだろと言ってやるがあいつは首を振る。

「俺も片目を隠せば何か見えてくる物があったりしないだろうか」
「は？」

「お前は俺より見ないようになっているのに、俺より多くを見ているような気がしてならない」

「ランス……？」

突然何を言い出すんだろこいつは。時々突拍子のないことを言う奴だとは知っていたが。

「お前がああしてくれなければ……俺はトリシユを殺していた」

私情ならそんなことはしない。止まっただけだそのまえに。それでもそれが仕事なら。立ち止まれない。立ち止まらなかった。そこから私情に戻させたのはお前の力だとランスは言う。

「俺は本当に馬鹿な奴だよ。お前がいてくれなければ、俺は俺がなんなのか、俺の心さえわからなくなる」

その言葉だけで救われた気分になった。例えそれが嘘だって、俺は救われたことだろう。少しでもこいつの支えになれたなら俺も本望だ。他に何も望まない。

俺の笑みに気付いたランスは、俺が何故笑っているのか解らないと俺を見る。俺は別にランスを笑っているわけではない。こいつもそれは解っている。だから、解らないと俺を見る。

その視線に答えたのは、気分が大分良くなったから。言っても良いような気がした。

「……昔、お前が言っただろ」

「え……？何を？」

「要らない物は全部捨てて、時間全てを剣に捧げて……立派な騎士になるうって」

それは確か、忘れもしない。俺がアスタロットを失ってしばらく惚けていた。何も手につかず、いつもぼーっと時を無駄に送った。空虚だった。毎日が。

そんな日にこいつは、俺に目標をくれた。俺が怠けている内にこいつはどんどん強くなった。その背中が遠かった。憧れになった。いつか追いつきたいと思った。

「だけど俺はお前ほど何にも出来ないから……やっぱ無理だったんだわ。捨てきれない物も、嫌なことも多くて、ずるずる引き摺って……結局立ち止まっちゃった」

頑張ろうと誓ったはずだ。だけど寄越されたのは下らない任務。最初は耐えた。だけど、俺は短気だった。お前ほど我慢強くない。そして……怒りに負けてしまった。

「俺はずっとお前みたいになりたかったんだ。だけどあんなつまらない任務……お前と同じことをしてはお前に追いつけるとは思えなかった」

そう思うとまた虚ろ。日々が意味を無くしていく。お前に殴られ喧嘩して、距離が溝が広がった。お前はつまらない任務をこなし、着実に信頼を勝ち取った。都貴族がお前を貶めようとしても、都の民がお前を守った。お前が彼らをいつも守ってきたからだ。

だけど俺は都を空けていつも何処かを渡り歩いていた。民の目に着かない場所で、破落戸達を始末する。任務をこなす度に、敵ばかりが増えていく。それは敵だけでなく味方内からも。

自分たちはぬくぬくと簡単な仕事しかしない癖に、嫌味だけは一人前だ。命懸けの任務をこなすのは、てっとり早く王の力になり、信頼を勝ち取り出世するためだとか、そんな馬鹿みたいな理由で僻まれた。別に俺はそんな望んじやいなかったから、素行を悪くして騎士らしくなさを求めた。粗野な言葉遣い、何も恐れぬ不遜な態度。王の傍に置くには相応しくない男になった。

だけどそうならそうなら、嫌味を言う奴は後を絶たない。こんなもんが騎士かと思うと馬鹿らしくて、何もかもが嫌になった。

「結局、別のことをしたってお前にはなれないんだよな。俺は俺だから。お前の青を羨んでも、俺は俺以外にはなれないんだ」

「ユーカー……」

「けどな、そう思った瞬間から……腹括ったんだ、俺」

お前みたいになれないなら、俺は俺のやり方で王を守る。お前になれないなら、お前に出来ないことをしよう。俺が騎士で居続けたのは王とランスのためだった。二人の力になるための汚れ役なら幾らでも、喜んで引き受けてやる。自分が惨めになればなるほど、俺の理想は輝き出す。それはそれで、俺にとって……幸せなことだったんだ。

「俺は俺が認められるより、お前が人に認められる方が嬉しい。お前が褒められるのが嬉しい。お前が民に慕われるのが誇らしい。俺の自慢の従兄が立派な騎士でいてくれるのが……」

踏み台になつてでも、こいつが高く飛べるなら俺は笑って見送れる。憧れとか理想とか、そういう奴を少しでも支えられたなら……それって凄く幸せなことだろ。

「俺は自分が同じところで同じ扱い受けたって、そういうの想像出来ねえんだよ。だから全然嬉しくもねえ」

俺は自分を立派な騎士だと思えないし、それは一生かけたとしてもそう思える日は来ない。

「俺は俺の青を未だに誇れない」

こんな薄すぎる青。素行や言葉遣い直したところで、真面目に働いたところで……認めらほしないんだ。分かり切ったことなんだ。

「だから俺は全員に認められたいとは思わねえし、認められても

嬉しくねえ。俺は俺が認めた奴に、認められたらそれでいい」

「…………お前、本当にそれでいいのか？」

そう聞いてくるランスに向かって俺は笑えていただろうか？よくわからない。この部屋には鏡がないから。たぶん、あいつにしかわからない。

「お前に救われてたんだ。こんな目をお前は…………褒めてくれただろ」

綺麗な空だって。そう言ってくれたのはランスとアスタロットだけ。俺はそれだけで良かった。他に何も要らない。他の奴が俺の青を罵ったと見下したとしても、俺は胸を張って俺の誇りを纏っていられる。

「…………ああ。綺麗な色だと思う。俺はお前の青が好きだよ」

「そんな酔狂、世界に何人いるんだろうな」

あいつは綺麗な青で微笑を浮かべる。惨めな俺は溜息と共に自嘲の笑み。

「…………俺はそんな酔狂な奴が気に入った。だから、そんな馬鹿のために俺は騎士でいるんだ」

何もお前を守ると言ったのは、お前が血縁だから身内だから、そんな理由からじゃない。

気に入ったから、救われたから。だから救う者でありたいと思っただけなんだ。

「俺は俺の理想のお前が、道を踏み外すところを見たくなかった

ただだ。俺の知っているお前は友人殺しなんてしないから」

それが王の命令なら兎も角、あれは神子の命令だった。いつものお前なら、あそこでアルドールに指示を仰いでいたはずだ。そうしなかったのが、おかしかつたんだ。何かが、変だったんだ。

「って何長々と語ってんだろな俺は。悪い、忘れてくれ」

話したいことを出し切ってしまうと、急に恥ずかしさが浮かんでくる。俺はランスに背中を向けて、壁の方に寝返りを打つ。

「……………俺は」

そんな俺の背中に奴が言葉を溢していく。

「俺はずっとお前になりたかったし、お前に憧れていたよ」

「……………は？」

幻聴だろうか？思わず首を向ければ、あいつは少し悲しそうに笑う。

「お前は不思議と人の心まで入っていける奴だ。何にも捕らわれず自由気ままに、動けるお前が羨ましい」

「それは単に俺が……………命令違反ばかりするっただけだろ？」

「お前は騎士としては確かに未熟だ。だけど、お前は騎士の中にお前自身を持っている」

自分との対比をするような、ランスのその言葉。

「……………違うな。俺は騎士になりすぎて俺を見失ってしまったが、

お前は騎士になっても騎士になれずお前のまま騎士でいるんだ」

どっちが良いことで悪いことかは解らない。しかしこいつは見失ったその自分というものを探しているようだった。

俺からすれば、騎士というか今のこいつが既にこいつのような気がするのだけれど……言われてみれば昔と何か違ってしているような気もする。心の中にぼっかりと空いた穴が垣間見えた。

こいつは鎧を纏った騎士。だけど鎧の中に誰もいない。理想の騎士という言葉が鎧の中に響くだけ。さながら偶像崇拜だ。こいつは何処にもいない。それが悲しいのだと空っぽの鎧が泣いている。血と肉と、骨は何処に？鎧が泣いている。

「アルドール様がお前を信頼しているのだから、トリシユがお前に惚れたのだから、お前がそういう奴だからだ」

「なんか後半の方は聞かなかったことにしてえ個人的に」

茶化してみたが、こいつは笑わない。笑えないのだ、そんな言葉ではこいつを救えない。

こいつを救うのは多分言葉じゃなくて、行動なんだろうなと、ぼんやりと考えた。

「……そんなら、傍にいてやる。お前が嫌がってもいてやる」

「……………」

「俺の知っているお前と違うお前が現れたら、お前が何か間違えそうになったらぶん殴っても止めてやる」

「……俺が、ちゃんと立ち止まらなくてもか？」

「その時はその時だ。もっと修行しとくんだったぜって笑って死んでやる」

「どうしてそんなことが言えるんだお前は！何があってもそんな風で居られる保証なんか……！！」

「だつてお前はお前だろ。何かあつても、変わつても所詮お前は
お前だろ。それとも何だ？ 凄え騎士様はお前以外の何かにでもなれ
るつて言うのか？ そりゃ凄え！」

そう言つて嘲笑つてやれば、ランスは言葉を無くす。言い返せる
わけがないだろう。この俺がここまで言つてやっているんだから。

「いいか、俺はお前が気に入つたんだ。お前がお前である以上、
この俺が気に入つてやつた奴はお前以外には成り得ないんだ」

「……………でも」

「俺は一回気に入つた奴を、見限るなんて阿呆なことはいねえ。
そんなことをするくらいなら、最初から気に入らねえ！ こつちはそ
のくらい覚悟して、てめえを気に入つてやつてんだ！ だから自信持
て！ 誇れ！ お前は凄え奴なんだ！」

「……………ありがとう」

そう呟いたあいつの両目が光っていた。船が揺れた瞬間、その輝
きが涙に変わり落ちていった。

こいつが泣く所なんて何年ぶりに見ただろうか。本人も恥ずかし
いのか苦笑して視線を逸らした。

「馬つ鹿じゃねえの。お前はそういう理想像というか固定概念が
まず駄目だ。男だろうが立派な騎士だろうが辛い時とかは余裕で泣
くもんだぜ。そういうのの我慢のし過ぎで、お前は自分見失つてん
だろ馬鹿が。こういうのはオンとオフの使い分けてのが大事なん
だよ。お前は常時オン過ぎるから疲かれるんだよ」

「常時オフのお前が言つと説得力があるな」

「馬鹿！！ そういう言い方すんなよな」

「それじゃあお前はスイッチだつたんだな」

「は？」

「騎士の俺をオフにしてくれるスイッチってことだ」

今度は子供みたいな笑顔で笑い出すランス。そうだ昔はこうやってころころ表情の変わる忙しい奴だった。それが何だ今は。クールぶりやがって。いつも爽やかな微笑を浮かべてるなんてこいつらしくもなかったんじゃないか。

「そうか。言われてみれば、ここ数年お前と距離が空いてからいろいろよく分からなくなっただ。なるほど、つまりこれはユーカ一の所為ということだな」

「どうしてそうなるんだよ」

「責任取って、俺が戻ってこられなくなったらきっちりスイッチ切り換えに来てくれよ」

「どうやって切り換えるんだよ、殴ればいいのか？殴られればいいのか？」

「時と場合に依るな」

「めんどくせえメカ騎士様だな……ったく」

仕方ねえ。仕方ねえから、傍にいてやるか。

アルドールから少年騎士の看病を任されて、それも一段落着いた頃。僕の所に現れた奴が居た。

「おい、神子」

振り返るイグニスに、仏頂面のユーカーは黙り込む。

用があつて来たならさつさと喋ればいいのに何とも面倒臭い人だ。どうしてこう、カーネフェル男はどいつもこいつも精神的にへたれなんだろう。船に乗っている自分以外の人間の顔を思い出せば自然と口から溜息も零れる。たぶん彼らの中で一番マシな精神を持っているのはここで寝ている少年だ。幼いが故、痛みに愚鈍。それはある意味、屈強な精神とも言える。まあ、それでもだ。

「少しはマシな顔色になりましたねセレスティン卿」

人を支える余裕があるだけ、今の彼はかなりマシな部類に入る。アルドールが僕の次に今のメンバーで心を許しているのは彼だろう。更には他の騎士二人も彼への依存が酷い。一人は元々。一人は僕の策により。もう一人は依存というどろどろした物はないが懐いているのは確か。

セレスティン卿自身もへたれではあるが、虚勢だけは立派な物だしそれに騙されるへたれ阿呆もいる以上、馬鹿には出来ない。空元気で彼の強がりは今アルドール達にとって必要な物なのだ。

だから僕も一応は、感謝めいたものを感じてはいる。だから僕にしては友好的な言葉が口を吐いて出たのだろう。

「ところで僕に何か？」

「そいつの調子はどうだ？」

「貴方よりは随分と良いはずだと思いますよ」

「そうか」

そこで会話が途切れる。この騎士は他人に感心を持たない風を装いながら、なんだかんだで抱え込んでしまふタイプだから、まあ利用し易いよね。だから途中までは上手く行く確信が僕にはある。最大の山場はあそこをどう越えるか。このまま進んだとしても、ぼつと出のアルドールが彼の依存面でアロンドイト卿を上回るのとはたぶん無理だ。

彼は実に四分の一の確立で頼り甲斐のあるカード。だからこそ、敵に回った時が恐ろしい。

厳密に言つと僕は間に合わないだろうから確立は三分の一まで落ちる。

「それで用事はそれだけですか？」

どうしたものかと考えながら、僕が尋ねれば……それだけではなかったのだらう彼がぼそと呟いた。

「……………今ここにあいつが出るつづう話はないのか？」

あいつ。それだけですぐに分かった。それは道化師のことだ。

「どうしてそう思うんですか？」

「あいつの出現条件は水場が多い。俺が初めて見た時、それからアルドールに聞いたが船にも現れたそうじゃねえか。シャラット領以外の全てにそれは当てはまる。なら今が絶対安全だって保証は…」

彼の言うことは確かにもっともだ。あいつはギメルを装うためにわざと水場に現れる。アルドールを精神的に追い詰める作戦で、自分がハートのカードだと匂わせるためにそつという事を繰り返す。

「そうですね。ですか確率は低いですよ。カードが六枚。その内コートカードが三枚も固まっているんですから」

ジャックにページだけとはいえ、三枚も集まれば流石の道化師もそう簡単には手出しが出来ない。総幸福値という面においては道化師をも上回る。

だから狙うとするなら……幸福値とカードがもっと削れた後だ。

「それに道化師にとってもカーネフェルとタロツクの戦争、つぶし合いは喜ばしい所だと思えますよ。4枚あるエースカードが戦争により減らされると分かっているならばらくは傍観に勤しむことでしょう」

そう。計算上で考えるならそうなる。唯そこに感情論を入れればわからない。僕自身、あいつを誘き寄せる餌に等しい。だからこそ僕は早急に彼らの元を離れる必要があるのだ。

唯、タロツク側の一手のせいでそれが出来なくなってしまった。もうしばらくは僕も此方にいなければならぬ。

これは僕にとっても想定外だ。いつものエルスIIザインなら、あんな手は打たなかった。僕はアルドール達が北部を平定そして南部の都攻めを行う際にまた手を貸しに戻る予定だったというのに、今の彼はどんな手を使ってくるかがわからない。迂闊にここを離れられないのは事実。

第一ユリスディカが遅れている。僕は彼女とマリアージュにこつちを任せて帰るつもりだった。ユリスディカがあの時城にいたなら、あそこでエルスIIザインは殺せていた。それだけで随分と戦況は変

わっていたはず。双陸に都を支配させるといふのは手筈通りでも、エルスⅡザインのあるなしはかなり話が変わってくる。

（はあ。僕も立場上。あまり国を空けるわけにはいかないんだけどな……）

シャトランジアから離れて一ヶ月。シャトランジアには僕の存在を知らない者も多い。先代の寿命もまもなく尽きる。そうなった場合僕が表舞台に出なければならぬ。彼の訃報を聞いたなら、一度は帰らなければ。そうなったらそうなつたで問題は山積みで、今度は何時カーネフェルの支援に戻るかもわからない。

国王派を黙らせるための駒の懐柔さ成功すればその辺は何とかなるのかもしれないけれど、今はそれも未定だ。

「……ならてめえも休んどけ。こいつは後は俺が面倒見てやる」
「……………え？」

「こんなガキまで巻き込んだお前らのことはどうかと思うが、まあ……こいつもぼんと一人で置かれてるよか安全かもしれねえしな」

もしかしてこの人は僕にお礼を言っているんだろうか？それはあまりにらしくない。

それに第一僕がこの少年をスカウトしたのは、彼がコートカードだったからに他ならない。

ペイジは探し出すのが難しいレアカード、僕だって対面するまではわからなかった。それに何とも特殊なカードだ。故に毎回所持者が変わる。現にこれまでエルスⅡザインは他のカードだった。この少年パルシヴァルに至っては、前回まではカードですらなかったはずだ。

（…………アルドールとセレスティン卿を友好的にさせた成果なのかな）

カードは上から下から選ばれる。だけどペイジはカードであつてカードではないカード予備軍。彼らは願いをまだ持つていないカードであり、星に願いを託していない。だからペイジの出現はゲーム中いつ訪れるかわからない。もし誰もペイジの存在に気がつかず、そのままゲームが終了したとしたら……これは誰の願いも叶わない。ペイジは願いを持たないが故、殺されなくともゲームが終わる。勝たなくとも生き残れる特殊なカード。だからこそ、ペイジを殺せたときのメリツトも大きい。

まあ、僕はあの子を最大限利用するため拾っただけなので、そこを感謝されるとほんの少しばかり僕も良心の呵責を感じるよ。

「雨が降りそうなことを言わないで欲しいですね。奴が現れる可能性が増えますよ」

それでもそれを嫌味で返すのが僕という人間だ。

「まあ……それでも一つだけ僕からもお礼を言わせていただきますよ。僕が今もここで神子でいられるのは、貴方のお陰です」

お言葉に甘えて休ませて貰いますねと微笑めば、視線を逸らして僅かに顔を赤らめる。男社会で生きてきた分女に免疫ないんだな。いや、単に褒められるのに慣れていないのか。

まあ、どっちでも良いけど。どっちにしたって、とんでもない甘ちゃんだよなこの男は。いっそ呆れるほどに。

僕が女とわかつたくらいで何？途端に反抗的な態度が弱まった。以前感じた殺意も弱まった。部下であるある子の言葉を借りるなら、正に“馬っ鹿じゃないの？”の一言だ。

同情してるわけ？哀れんでいるつもりなの？お貴族様が。まあ僕もお綺麗な人間じゃあないからね。付け入る隙があるなら大いに利

用させて貰うに越したことはない。

精々僕を哀れむが良いよ。僕は残りのタイムリミットの少なさも、アルドールへの服従の糧に使わせて貰うだけだ。

そうだ。考えようによつては彼に僕の正体がバレたことで良い方向に転んでいるのかもしれない。彼の件に関してだけなら。

僕は唇だけで小さく笑いながら、船室を後にする。アルドールの側を離れるのは結構僕にとつても不安なことだから彼が来なくてもあの子の容態が落ち着いたら後は契約精霊の誰かに任せて戻る気ではいた。

「……馬鹿みたいな顔してる」

寝台で眠り惚けているアルドールの平和そうな寝顔。馬鹿みたいだなと思う。船酔いが完全に治ったわけでもないのに、僕の言葉一つでこの馬鹿はこんな顔になる。それは嬉しいけれど、心配なことでもあった。君は少しは自分と自分の考えという物を持つべきだよと言って聞かせるべきだろうか？

(いや……)

今は無理だ。昨日の今日だ。フロオリプさんまで死んだんだ。忘れたわけではないだろう。唯、よく考えないようにしているんだ。視野を狭めて。もっと落ち着いてからしっかり悲しもうとそうやって……アージンさんの時も、ルクリースさんの時も先延ばしにした。そしてそこに新たにフロオリプさん。君は後何人親しい人間を亡くしたら、ちゃんとその悲しみと向き合っただろう？先延ばしにすればするほど、荷物は重くなつていくのを君は気付いていないのかい？

……いや、まだいいか。何時か必ずその時は来る。君は向き合う。そしてそれに打ち勝ってくれなければ僕が困る。それを越えれば……今度こそ、君はちゃんと憎んでくれるだろう。

「……………大丈夫。今度こそきつと上手く行く」

僕はこの馬鹿の、この馬鹿みたいな緩みまくった表情を失いたくないと思うのだ。例え僕がそこにいなくても、それでいいんだ。

「君は殺されるべき人間じゃない。アルドール……………殺すのは、君なんだ」

*

「ふああ……………思いの外ぐっすり眠れたな」

「もしかしたらトリシユがずつと豎琴を弾いていたからかもしれない」

「アルドール様にお慶びいただけたなら私も幸いです」

「ずつとつて何やってんだお前……………阿呆か？」

「な、何てことを！イズー！私は8割は貴方の安眠を願って歌っていたんですよ！？」

「あ、……………俺2割なんだ」

多いと言っべきか、それっぽつちかと突っ込むべきか。アルドールは少し判断に迷った。

「……………にしてもこんな夜中に着くなんて」

「船が沈まなかっただけでも十分幸運だと僕は思うよ。それにこの暗さなら敵の目にも付きにくい」

「ああ、なるほど。流石イグニス」

俺が目覚ませば、もうすぐ対岸に着く頃だった。川の流れて流されて、大分東寄りの岸に停泊することになった。

出発が夕暮れだったし仕方ないのかも知れない。夜中の内に渡り

切れたのだから、敵の目にも止まらなかったはず。それなら上々と
言ったところか。

「いやぁそれにしてもいい夜空ですね。こういう時は咽が渴きま
せんかイズー？」

「渴くかボケっ！」

北部について早々、ユーカーに絡みに行くトリシュ。二人が犬猿
の仲だったという話がわかには信じられない。ユーカーの方だけ
見れば何となく信じられる気もするけど。

「それにしても……懲りない人だなぁトリシュって」

つていうかももうユーカー女装止めて着替えたのに、まだイズー呼
びなんだ。変装解いただけでここまで可愛気がなくなるとはある意
味才能だ。

「つかパー坊が寝てんだから静かにしろ！」

「面倒見の良いイズーも素敵だ……」

「本気で打たれたいか？」

「それが貴女の愛の鞭なら喜んでっ！！」

「つか故意に変換ミスすんの止める！俺は男だって言ってるんだろ
！」

「一発でも打たれた時点で私の愛を受け入れてくれたってことに
なりますのでその辺りをご了承下さい！さぁ！何時でもどうぞ！」

「そんなこと言われて誰が殴るか！」

「殴れない……？はっ……それはやはり貴女が私を愛しているから
ですねイズー！愛しい者に手を挙げるなんて、そうです……出来ま
せん！私が貴女を殴れないようにっ！！」

「誰かこいつに常識ってもんを叩き込んでくれ！なんで夜中なの

に元気なんだよお前は！」

「お言葉ですがセレストイン卿、恋狂いの人と変態は24時間体勢で通常営業らしいですよ」

「要らん情報くれんな馬鹿神子！」

船が岸についても目覚めないパルシヴァル。彼を背負ってるユーカーは、彼に気を使ってか小声で喧嘩をしている。あれはお兄さんっていうかなんか小さな若いお父さんみたいだ。不良って婚期早いつてイメージあるし。

「痛つ……！何で殴るんだよユーカー！」

「お前今なんか要らんこと考えただろ？俺そう言うの聡いんだからな弁える！」

「お前が弁える。アルドール様に手を挙げるなんて流石に無礼だぞ」

俺の頭を叩いた直後に、ランスに打たれるユーカー。これも段々パターン化してきたな。こうなるのが解っても俺を殴るのを止められないんだろつかユーカーは。もしかして逆にランスに殴られたくて俺を殴ってるんだろつか。いや、まあユーカーに限ってそんなことはないか。幾ら構って欲しいからってそんな面倒なことをする人じゃないよな。

「俺はこいつに仕えてねえからいいんだよ！あとこいつ打たれるの好きって顔に書いてあった」

あ。そういう理論ですか。やっぱりユーカーはユーカーだった。

「そりゃ誰だって打つよりは打たれる方がマシだろ」

「アルドール、それはSには通じない発想だよ。僕は打つ方が好

きだな」

流石イグニス。聖職者失格の発現いただきました。でもそんな酷い言葉を笑顔で語るイグニスはとっても輝いて見える。

「ところでセレストイン卿。貴方の部下の方々を対岸で見ませんでしたか、彼女たちは都に居たんですか？」

「ああ。待機させていたのは橋のあった場所だからな。城の近くだ。一週間前に落ち合って引き続き都の警備に当たらせただが……あの騒動だろ。多分あいつらも虫に刺されちまった可能性はあるな」

ユーカーは平然とそう言うけれど、そんな日があっただろうか？ 彼はこの一週間の殆ど、俺の傍にいてくれた。俺の部屋の前に居てくれた。朝も夜も昼も。何も言わず、扉も叩かず。昨日までずっとそうやって何もしないで、それでも多くをやっていてくれた。

(ユーカー………?)

彼は何かを隠している。俺はそれに気がついた。

「でもまあ、逃げてくる途中に作った拠点はこの近くにもある。とりあえずそこに向かおうぜ」

ユーカーが背中を向ける。歩き出す。それを俺は追いかける。何か言いたくて。何も言えなくて。俺の変わりにその背を呼び止めたのはランスだった。

「お前は全員で橋を渡ったのか？」

「馬鹿言つなよランス。狂王と間近でやり合っただんだけ？ 生き残

ったのは少数だ」

そこまで言っただけで彼は左目を見開いた。自分の言葉で何かを思い出した。そんな表情だった。

ユーカーは狂王……タロツク王に会ったことがあったのか。前線に出ていたのだからそういうこともあるかもしれない。俺はその言葉に驚きと僅かの興味を抱いた。だけど他のみんなは俺みたいな馬鹿な考えを抱いたりしなかった。彼らが抱いたのは、恐怖と危機感。

「……それでは北部の戦には、須臾王が来ていたんですか？」

言われてみれば、それは初耳の情報だ。そもそも先代カーネフェル王がどんな死に方をしたのかさえ俺たちは聞いていない。

カルディアで話した時のユーカーはまだ俺たちを信用してくれていなかったし、ユーカーも辛そうで多くを語らなかった。けど今……ユーカーは否定しない。これにはイグニスも険しい表情になる。

「それならどうして……彼は今、何処に？」

「イグニス？」

イグニスが何を焦っているのか俺にはわからない。タロツク王がカーネフェルに来ていたなんてイグニスは想定していなかった。それはイグニスの先読みですらなかったことのように……

「もしそれが真実なら、タロツク王が南下して来ない理由がありません。そしてその場合エルスⅡザインが、ローザクアを離れる隙が極端に短くなる可能性すらある」

タロツク王が近距離にいたなら、報告へ行く距離も時間も短縮さ

れる。

「狂王の存在それひとつで、今回の計画の根底から覆されるかもしれない。そんなこと……あつてはならない！」

「イグニス……」

「……俺が見たものがまやかしだったとでも言うのかよ？」

辛い記憶を思いだしても、信じて貰えるか解らない。その戦場から帰った者がここにはユーカーの他にいないのだ。

俺はイグニスとユーカーの間で視線を彷徨わせる。二人とも嘘を吐いているようには見えない。だから出来ることなら二人とも信じたい。それでも俺には情報が少なすぎる。それはイグニスにとっても同じだった。

「それは詳しく聞いてみないことには解りません。それでも……彼の代になってから、タロツク王がカーネフェルの土を踏んだことは唯の一度きり。彼の初陣の時のみです。それ以来須臾王は唯の一度もこの地を訪れてはいない」

「お言葉ですがイグニス様。それは今回のような侵略戦争ではなく略奪のための戦争です」

「……セレスティン卿。貴方の見たタロツク王は、どんな男でしたか？」

「言わせるのか？それを俺に……思い出せっていうのか！？あんな……、あんな化け物っ……」

「言ってください。思い出してください」

泣き出す寸前、そんな悲痛なユーカーの声。詰め寄る冷たいイグニスの声。

「……………」

ユーカーは無言のまま、歩みだけは止めない。何かを思い出すように、戻ってきた忌まわしき北部の土地を歩く。

(ユーカー……)

心配になって彼の隣まで走る。暗くてよく見えない。だけど、とてもじゃないけど喋れない。喋れるはずがないのだ。彼の頬を伝う透明な雫。それが微かな星に月に照らされ冷たく光る。それを見ていたら、俺も何も言えなくなる。つられて泣きそうになる。

ユーカーはこの土地から、南部へ逃げてきたんだ。ランスよりもっと……一番ここに来たくなかったのは彼なんじゃないか？

(それを……俺が、イグニスが……)

人が死ぬのは辛い。俺もその痛みを知っている。人の上に立つことは人の命を食い潰すこと。俺が今、ここにいるみんなを死なせてしまう。ユーカーはそれと限りなく同じ思いをこの土地で味わったんだ。

「……………ユーカー」

「……………馬鹿だな、お前」

縋るように彼を見れば、情けない顔するなと笑われた。でもそういう彼だっけ似たような顔してるに決まっている。

草原を越え森の中へ少し進めば、野营地跡が見えてきた。以前も同じ場所で夜を過ごしたのだろう。慣れた様子で、焚き火の跡に再び火を灯す。その間に俺たちはテントを組み立てて、パルシヴァルを預かって寝かせることにした。それが終わる頃には、簡素な食事まで用意されている。野宿に慣れてるんだな、何だかルクリースを

思いだして……またちよつと泣きそうになった。俺はユーカーの隣の、椅子代わりの丸太に腰を下ろして、彼を習って空を仰いだ。星の光を見ているとやっぱリシャトランジアからカーネフェルまでの旅のことを思い出す。ルクリースとフローリプとこうやって星を見ていた。星の灯りがもつと温かかったなら、もつと早く涙を渴かしてくれらるるうに、星は冷たいから……まだ俺の目は潤っている。

「ユーカーも星見るんだ」

なんとなく口を吐いて出た言葉。それに彼は小さく答えてくれた。

「そりゃあ見るぜ。こんな広い大陸行き来するには星くらい読めねえと」

「何を見てたんだ？」

「……蠍の心臓」

ユーカーは空の赤星を見つめているのだという。明るく瞬くそれに重なる色があるらしい。

それを尋ねようと思ったけど、その頃にはもうみんなが火の傍に集まっていた。ユーカーの話がイグニスは待っている。ランスはユーカーを見守る形で、トリシユは少し心配そうだ。

「あの男の赤は……あの星よりももつと赤い。血の色みてえなどす黒い、不気味な赤だった」

ユーカーは、語り始める。蠍火に思い出すのは、憎い男の双眸だと彼は言う。

「…………久々だけどな、あの時も思ったぜ。もし俺がお前だったらなつて」

視線を一度だけランスの方へ向けて、ユーカーが自嘲する。重いため息と共に。

「あいつは……漆黒の黒髪、に深紅の赤眼。歳は中年つてとこか。だが妙な迫力があつた。どう年を取ればあんな風になれるのか俺には皆目見当も付かねえ。普通の人間と一線を画す、狂気に触れた人間の顔だ。なんら躊躇いが無い。恐れもない。だからこそ……すげえ、怖いんだ」

その視線を思い出したように身震いしながら、ユーカーは恐れ戦く。

「あの男はそこにいるけど何も見ちゃいねえ。俺たちを取るに足らない、ゴミみてえな虫螻みてえな物みたいに眺めてやがった」

そこには怒りと憎しみ。そしてそれをも上回る恐れが介在していた。

「風が吹くんだ。ぶあつと……そいつが剣を薙ぐ度。薫る血の臭いに吐きそうな位だ。そいつの服に身体にもうこびり付いてやがる。何人殺せば、あんな死臭纏えるんだ？相手が女だからって躊躇いもない。優しさもない。それがむしろ優しさなのか？よくわからない。わからなくなる。死んだ方がマシなんじゃないかって、あいつと眼を合わせただけでそう思う」

誰もが逃げ出したくなる。それでも逃げられないのは、足が動かないから。まるで金縛りにあつたかのように、その場所に縫い止められると言う。そうやってしまえば後は、唯殺されるのを待つだけの行列。吹き荒れる死の風を見つめることしかできない。

そんな悪の風を追い返す、守る者があつたと彼は言う。

「あの人は凄え人なんだ」

普通の王は、守られる者であり守る者ではない、けどあの人は守った。

悪の王は、奪う者で壊す者で殺す者。けどあの人は違う。ユーカーはそう叫ぶ。

「どうして俺なんかって思った。俺はカーネフェリアじゃない。そんな価値、俺にないんだ!!!」

目の前に迫った刃。魅入られたようにそれを見つめる。訪れた死は意外と長く、その時が来るのを待っていた。

「俺はあの人に肩を叩かれて、名前を呼ばれて我に返った。あの戦場であの狂気に臆することなく居られたのはあのおっさんだけだった。凄え人だったよ……やっぱり。だから悔しかった。あのおっさん、こんな腐れた国じゃなきゃ……立派に戦って勝って、歴史に名を残せたような立派な奴だったんだ。それが都貴族共に踊らされて……っ！あんな場所まで送られて!!!俺なんか……俺なんかを庇って!!!」

言えなかった。ここに来るまで、誰にも話せなかった。彼が今までその胸に閉じこめてきた言葉。或いは忘れていたのだ。辛すぎて耐えきれなくて、脳が書き換えた。彼を守るために、自分を守るために。約束が先走り、脳を書き換えた。

彼の眼が見た悪夢が今ここに甦っている。彼がどうしてあんなにもランスの身を案じたのかもそこにあつた。

死ぬために戦っていたのはランスだけじゃない。死にたくない

生きていたいと彼が追い求めたのは、死んでしまいたいから。

約束に縋らなければ立つても居られなかった。いつかそんな日が来ることを彼女は知っていたんだろっか？だから最後に彼に約束を送った。愛する人に生きていて欲しいと祈りを願いに託して。

「死ぬのは俺だったんだ。俺が死ねば良かったんだ。庇われる価値なんか無い！！」

「ユーカー……」

俺が彼の名前を呼んで、他に誰も何も言えなかった。ユーカーを責めようと握りしめられた拳。ランスはそれを振り上げることが出来ず震えている。トリシユは仕えた王の真意と、ユーカーの悲しみを察することが出来ず、瞳を迷わせている。イグニスには驚かず、それでも一言も聞き漏らさぬよう……琥珀を光らせている。そして俺は彼の名を一度呟いたつきり何も言えず彼を眺め、彼の代わりに泣いた。ユーカーはもう泣かない。声を肩を震わせても。眼の青を光らせて、闇を見つめて吠える。

「落ち着いてくださいセレストイン卿。以前僕は言いましたよね？全ては幸福値。彼は死すべきして死んだんです。貴方を庇わなくとも彼はその日に死んでいた」

「そういう問題じゃねえんだよ！俺はあの人の騎士なのに……っ！傍にいたのに守れなかった！何も出来なかったなんて……」

「いいえ、相手が狂王なら誰でも同じです。おそらくランス様でもトリシユ様でも同じです。誰だってそうなっていました」

イグニスがユーカーを庇うようなことを言うなんて。俺は少し驚いた。だけどその言葉にランスが少し苛立つのが見えた。自分なら何とか出来た。そう思ってしまったのだろうか。それでもイグニスは貴方でも無理でしたと眼で告げる。

「毒の前に全ては無力です。剣の腕も才能も努力も全て水の泡。人が人である以上、毒には抗えません」

「毒……ですか？」

何故そこで毒の話になるのだろう。ランスがイグニスに疑いの眼差しを向けたが、すぐに思いだしたことがあったのかそれを驚愕に改める。その変化を見取ってイグニスは深く頷く。

「タロツクは毒の王家です。王家の者の武器は刃物以上に毒です。動けなくて当然です。そういう毒を盛られたんですよ貴方がたは。死臭でそれに気付けない程度の毒を嗅がされたんです」

「しかし神子様、彼らが毒を内政で用いることがあってもそれを戦争で用いたなどは……」

トリシユの疑問もイグニスは一刀両断。切り捨てる。

「今回の戦争はいつもと勝手が違います」

王はこれまでほとんど前線に出ていない。先の戦では毒を使わなかった。だからその手の内をカーネフェルは知らなかった。

戦争の是非。勝てば官軍。終わらせるための戦。彼がそこまで考えたかは解らない。狂人は狂人であるが故、平然と禁じ手、狂気を操る。そこにルールも法もない。彼らが歩く法なのだ。

「セレスティン卿、……その場にはエルス＝ザインがいたでしょう？」

「あ、ああ」

「彼は風使い。毒を運ぶエキスパートです。以前僕らもそれをされたことがあったでしょう？タロツク王族やエルス＝ザインとの戦

いで風上を取られたらまず勝てません。戦うなら屋内、これが鉄則です」

イグニスとは外で戦った時点でもう負けだったのだと吐き捨てる。これまで毒など使わない割と善良なタロツク勢としか戦ったことが無かった騎士達は、イグニスの言葉に絶句する。

「あなた方はエルス・ザインの戦い方が卑怯かと思われるかも知れませんが、彼はタロツク王の側からすれば風情のある殺戮を行っているんですよ。だからこそ王の傍に置かれるほど寵愛されているのでしょうかね」

より残酷に、苦しめて殺すことが王の喜び。人に恐怖を与え、罅り殺すのが美学。だからこそ、毒を用いるのがもつとも美しい殺し方と狂王は考えている。イグニスにそう言われ、俺は腹の底から怒りが湧いてくるのを感じた。それは俺だけではないはずだ。

「貴方を庇った後、先代様も体調を崩されたでしょうか？」

「ああ。……っ!？」

「ええ。彼の剣には毒が仕込まれていたのだと思いますよ。カーネフェルは毒の知識に疎い。おまけに相手方のトップが開発したような毒です。その辺の医者では解毒さえ出来ずに匙を投げ出すでしょう。それなら先代様が撤退命令を出したのは懸命な判断です。まだ毒の行き届かない場所の者は逃がすことが出来たでしょうから」

イグニスの言葉にユーカーは疑問の表情。それが確かなら、自分が動けるはずがない……

「……でも、どうして俺は」

「先代様に頼まれましてね。戦の前にいくつか数式の施したもの

を渡していたんですよ」

「え……?」

「その中の一つに、教会の知識を詰め込んで現代で考え得る限りの解毒数式を施した道具がありまして。使い捨てですけど一度は殆どの毒を解毒できる代物です」

「おっさん……馬鹿だ」

一度だけ解毒が出来るなら自分に使えば良かったものを。どうして俺なんかにとユーカーは俯き頭を抱え込む。

「セレストイン卿……最後に彼は何か言っていますませんでしたか?」

「ランス……ランスを守れて」

「あの方が……俺を?」

最愛の王から自分に遺された言葉があったことを知らなかったランスは、ユーカーの言葉に眼を見開いた。

「もし自分が死んだら、新しい王はランスだって言った。だからランスを絶対に死なせないでくれ……だから俺……」
「……そうですか」

イグニスはその顔を見て、ランスは複雑そうな顔になる。

ランスが南部に送られたのはそういう理由からだったからだったのか。ランスの器を見込んで、もしもの時の王にするために……わざと傍に置かなかったんだ。けどそんなことを知ってしまうと、俺も少し思ってしまう。

(……俺なんかが王になって、良かったのかな)

ランスの方が強い。ランスの方がしつかりして人望もある。

彼が王になった方が人もついてきたんじゃないか？ランスは俺をどう思っているんだろう。こんな男に国を任せられないと思って居るんじゃないだろうか？

何となく彼の方を見られなくて、空に視線を逃がしても……そこに答えは書いてはいない。

*

「何だお前さつさと寝ろよ」

「俺。船で結構寝てたから」

地の利があるからと今晚の見張りを買って出たユーカー。パチパチと火の音とたまに聞こえる溜息に俺はこっそりテントを抜け出した。案の定怒られたが、別に拒まれてはいないようだ。

「ユーカーが俺を認めたくないのって解るよ」

「は？」

「俺だつて俺を認められそうにないんだから」

「何言つてんだ？」

「……だつて俺じゃあ前の王様に、勝てっこない」

同じ状況で、俺に出来るだろうか。わからない。たった一つ選べと言われたら。

その場所にユーカーだけならきつと俺は選べる。だけどそこに他の人がいたらわからない。

瞬時に拾い捨てるその選択が出来ない。俺は迷う。迷ってしまう。何も鴨を救いたくて全部取りこぼす。

その人はユーカーを助けた。そのことで自分自身、そして大勢の命を一瞬で見捨てた。そうしてまでユーカーを助けたのは、ユーカー自身を助けたかったから？ランスへの伝令のために？

「俺はそこまでして託された言葉を退けて王になってしまった。前の王様の気持ちも蹴って俺はここにいる。それが申し訳ない気持ちになるんだ、少し……」

「……そんな弱音を吐いてる間は絶対認めてやらねえぞ」

「あはは、そう……そうだよな」

ユーカーならそう言うよな。

(でも少しは認めてくれたんだろうか?)

以前の彼なら、こんな事は言わなかった。俺が何を言っても言わなくても、絶対認めないって言ったはずだ。一見否定しているようなその言葉にも、少しの譲歩が見える。

「でも別に良いんだ。俺はユーカーに仕えて欲しいわけじゃないし」

「……この俺が役立つまでみてえな言い方だな」

仕える気がない癖に、仲間はずれにされると不満を言う。彼は本当に面倒な人だ。だけどそれにも慣れてきた。

「そ、そうじゃなくて！俺はこういうのが好きなんだよ！」

「は？」

「面と向かって悪態吐いてくれたり文句言ったりしてくれただ方がありがたいんだ。みんな俺には良くしてくれるけど、陰で何か言われているか、心の中で本当は何考えてるんだろうって思ったりするんだよ」

都に来ては特にそうだ。みんな俺を王としてみる。王だから寄っ

てくる。都貴族なんて典型的なその例だ。だけどユーカーは俺を王とは呼ばない。アルドールと呼んで、人間として見てくれる。そして対等な人間として俺を罵ってくれるんだ。罵りながらもこうして付いてきてくれている。それは本当にありがたいことだった。彼は正直じゃない。だけど嘘は吐かない。素直でも嘘を吐く人はいる。だから、彼みたいな存在は本当には救われている。ユーカーのそういうところは、昔のイグニスに少し重なる。今のイグニスは神子という役職と重すぎる責任からか、俺に言えないことも多いし……嘘も吐く。俺はイグニスになら騙されても良いし嘘を吐かれても構わない。それでイグニスを嫌いになることなんて絶対にあり得ないけど……だけど俺は弱いから、凹んだり傷ついたりする馬鹿だ。

イグニスはイグニスとしてじゃなくて神子として俺の傍にいくれる。ユーカーは騎士としてじゃなく、ユーカーという人間としてここにいてくれるんだ。

役職のない人間同士、気楽に話が出るのは……今となっては彼相手だけだ。もうルクリースもフローリップも俺の傍にはいないから。

「だから俺はユーカーに感謝してるんだ。俺に仕えていないのに、俺を守ってくれてありがとう。傍にいてくれて……って、なんでそこで蹴るかなあ」

こっちは割と真面目にお礼を言っていたのにユーカーに足を蹴られた。彼は目も合わせてくれない。

「勘違いも甚だしいぜ。別に俺はお前のためになるようなことは一つもしてねえ」

「そりゃランスのためかもしれないけど、俺はユーカーのしてくれたことに感謝してるんだよ」

「別にあいつのためでもねえ！」

明らかに嘘だなあこれは。ユーカーの嘘は分かり易いから本当助かる。

「……………つかてめえ、そんなことを言うために起きてたのか？
違えだろ？他の奴らに聞かれたくねえ話でもあつたんじゃねえのか？」

そして勘も鋭い。これは助かる時と助からない時があるけど、今日に限っては前者だ。

「ユーカー……………あのさ。ユーカーはこの一週間ずっと俺を守っていてくれただろ？だから……………ユーカーは、部下の人達に会いに行く暇……………無かつたんじゃないかなって」

「……………お前馬鹿か？俺なんかのこと気取る暇あつたら、もっとしつかり妹のこと見ててやれば良かっただろうが」

「……………違うよ。だからだよ」

ユーカーに睨まれる。それは聞きたくない糾弾だ。今更の言葉だ。だけど、俺は耳を塞がない。自分で守っているつもりでも、俺は守られていた。馬鹿みたいだよ。気付かなかった。今日と昨日までの違いは、部屋の外に彼がいたかいないか。フロリープの不運は……………起こるべきして起きたのだ。最低幸福値のAカードが傍にいたって何も変わらない。彼女の命を繋ぎ止めること、俺には出来なかった。

「フロリープが今日まで死なずに済んだのは、ユーカーがいてくれたからだ。俺一人の幸運値じゃ駄目だった」

「……………それは俺を責めてるわけか？」

「違う。だって不可能だ。ユーカーにずっとフロリープの傍に付いていてくれなんて頼めないだろ。別の人間なんだし。好きなところ歩いていく権利があるよお前にもあいつにも」

フローリップはもう、幸福値が殆ど尽きていた。不幸をはね除け生命維持を行うのも困難なほどに。コートカードはその理をねじ曲げる存在なんだ。そこにいてくれるだけで、不運をはね除ける。

「俺は……お前のお陰で、今日まで彼女と一緒にいられたんだ。本当なら、もっと早くに失っていたかもしれない彼女と」

「……………」

都を脱出しながら、ランスから聞いた。フローリップの亡骸は隠してきたと。ユーカーがランスに、あいつを静かなところで眠らせてくれるように頼んでくれたって聞いて……俺は安心した。二人に感謝した。教会に逃げる間中……ずっと気掛かりだったんだ。目先の問題を見つめることで嫌な想像から俺は逃げていた。もし彼女の死体をそのままにして逃げていたら。あのまま彼女は野晒しのまま？それとも俺の縁者と知れて死して尚辱められることになったのだろうか。そんな不安から二人は俺を助けてくれた。

「ユーカー。俺は何も言わない。誰にもだ。お前がこれから喋ること何も俺は聞かない。聞かなかったことにする」

彼が辛いなら、俺が助けになりたかった。少しでも感謝の気持ちり返したかった。だけど俺は本当に弱くて何も出来ないから、こんなことしか出来ない。唯、傍にいるだけだ。

置物みたいな俺だけど、置物だって何かしたいとは思っただ。

「だからもし……口にして楽になることがあるなら、好き勝手に言ってくれ。俺は何も知らないから」

言っただけになることってある。胸の中に貯め込まない方がいいこ

とだって。

俺はユーカーに背中を向けて空を見上げる。しばらくはパチパチと焚き火の燃える音だけが聞こえた。だけど……やがて、それに混じって微かな声が聞こえてきた。

「……橋を越えたのは俺だけだ」

カーネフェル軍全ては騎馬隊ではない。馬の数は限られている。都貴族に国庫の金を流されて、国防の経費も削られて……歩兵がその大半を占めると聞かされた。だからこそ奇襲を仕掛けるタロツクをろくに迎え討てなかったのだろう。

「一般兵なんて歩兵ばかりだ。連中に速度を合わせてたら、敵に追いつかれる瀬戸際だった」

「……」
「全員渡りきるのを待ってたら敵が来ちまう。何処かで見限らねえと……どうしようもなかった。けど俺は言い出せなかった」

「……」
「俺の部下は優秀だった。立派な……兵士だった。そして……やっぱ馬鹿だった」

とんと、ぶつかった背中が肩が小刻みに震えていた。たぶんまた泣いてるんだろう。声にはそんな色を出さないように彼は強がっているけど。

「変なとこばかり俺に似て平気で命令違反しやがる……」

「……命令、違反？」

ユーカーの策では橋を渡りながら、爆薬を仕掛け……渡りきった後に橋を壊していくものだった。そうすれば、追っ手も一緒に始末

できると考えた。そしてそこからは、渡り来る船を待ちかまえて討つものだった。

しかし兵が橋を渡るのを拒んだ。説得しても従わない。命令だつて従わない。

「逃げるのかと思つた。それならそれでも良いと思つた。南部が安全だつて保証もなかつたしな……好きにしるつて言つてやった」

都を目指す敵の進路から逸れば、比較的安全な場所が北部には幾らでもある。これから危険になるのは南部の方だと誰もが思う。

他の場所から河を渡りだした先遣隊より先に、河を越えなければならぬ。時間は残されていなかった。

「もう戦いたくないという者を無理に従わせる意味はない。もう傾いた国だ。誰がどう頑張つてもたぶん何も変わらない。狂王に会つた時から、もう俺たちはこの国が終わりだつて悟つていた。あいつは絶望そのものだ」

そして希望と呼べる王が、死んでしまったのだから……もうこの世界に光はない。朽ち逝くのを待つだけの土地。それならばと、仕方なしに置いてきた。

「北部の居る四六時中俺はあの赤に見られている気がした。あの狂った眼に追い立てられるように逃げて逃げて逃げて来た。立ち止まればその瞬間、目の前にあいつが現れそうな気がして、立ち止まることが怖かつた」

赤は嫌いだ。赤い色は。見たくもないとユーカーが吐き捨てる。そう告げた時彼は、上手く呼吸が出来ないように咳き込んだ。

「敵の手に渡った死体は王じゃなくて影武者だ。本当の王の居場所を俺は知っていると思っただらうな。現に奴らは俺を追っていた。俺から離れれば……それだけで安全だった。妥当な判断だと思っただよ」

人の言葉の裏を読むような余裕がなかったのだろう。彼はそんな土壇場で嘘を吐けるような器量のある部下が居るとは思っていないかった。追い詰められれば人なんか、国より自分の命を取る。そんな奴らばかりだと頭ごなしに信じていた。

「……渡ってから、気付いた。俺は本当に間抜けだ」

一心不乱に駆け抜けて南部へと至る。そこで初めて振り向けば、兵はちゃんと付いてきていた。兵士達は橋の中腹まで至っている。そこで手を振っていたという。

「最初は馬鹿みたいに嬉しかった。早く走って来いって足を止めて待つてやった。けど、そうじゃなかった。あいつらは俺に別れを告げていた」

振られた手。振り返そうと、手招きしようと手を挙げた。

それを合図に爆音が鳴る。橋が半分から向こうから煙が上がり、崩れていく。一人で運べる量には限界があった。仕掛けることが出来たのはほんの数力所。橋を壊すことなど出来なかった。けれど残された爆薬を使い、兵士達はそこまで罨を仕掛けてきたのだ。

追ってきた、敵兵共々自分共々……橋を壊すため。

止めると叫んでも、付けられた火が導火線を走り出す。

「煙が消える頃には綺麗なものだ。何事もなかったみてえに、……河の流れる音だけ聞こえる」

全てが流されていく。飲み込まれて消えていった。敵も味方も、何も残らない。

導火線に火を付けた。

「あいつが俺を騎士失格だつて言ったのは正しいんだ。自分の隊の奴らも守れねえような奴が……どの面下げて騎士だつてんだ」

「ユーカー……」

「それでも俺があいつみたい立派な騎士ならそこで……死んだあいつらのためにもこの国を守らねえとつて思えたんだろつが、生憎俺はそんな大層なもんじゃねえ」

人を殺すことよりも、自分の判断ミスで死なせてしまう方が怖いものだと言つ。

守ることも、その死を割り切ることも出来ない自分に将の資格はないと呟いた。

ユーカーが俺に仕えないのは、俺を認めていないからだけではないのだとぼんやりと……そう思った。彼は自分に守れない程、人命を背負つのを拒んでいる。だけど一つだけを選んだなら、全神経使つて守ることに集中できる。ユーカーはその相手にランスを選んではまっている。だから俺には仕えられないと、そういうことだったんだ。

「怖くなった。馬鹿らしくなった。こんな国に命を賭けるなんて愚の骨頂だ。あいつらがそこまでする意味のある場所だとはどうしても俺には思えなかった。俺はこんな馬鹿な国のために、最高で馬鹿な連中が死んでいくのが理解できなかった」

愛すべき価値のない、守るべき意味もない。そんな国をまだ愛している人間がいる。

ユーカーはカーネフェルという国自体が好きではなかった。そこにいる一部の人間が好きだったんだ。だからその殆どを失って自分を見失った。

「俺はもう抜け殻みてえなもんだった。いや、多分その前。狂王のあの狂った赤に眺められた時からだ……、俺は俺の頭が心が壊されるような気がした。俺が考えていたのは二つだけだ」

「二つ？」

「死にたくねえ……死なせたくねえ」

タロツク王の狂気に触れて、感じた本能的な恐怖。それが死にたくないと言き喚く。どうしてこんな馬鹿な国のために俺が死ななきゃならないんだ。こんな国、好きなんかじゃない。好きだったのは仕えた主だ。死ぬべきはその人のため、国のためじゃなかった。

そこで託された言葉。ユーカーにはあと一人だけいた。この国に、守りたい人間が。

「ランスが死にたくねえ。逃げ出したって言うんなら、俺は何やってもあいつを外へ逃がそうと思った。だから都なんかカーネフェルなんてどうでも良かった。滅ぶなら滅んどまえて思ってた」

「でもユーカーは先遣隊を倒したんだろ？」

「たまたま出会って俺の邪魔して来やがったから殺したただけだ」

カーネフェルにまだ未練があるんだろうと尋ねても、彼は怒りしか存在しないと吐き捨てる。王を守れなかった。その悲しみと怒りから、タロツク兵を切り捨てた。そこに愛国心も正義もないと彼は言う。

「だから橋のこつち側で部下を待機させてたっつのは嘘だ。正確には橋の上……河の中だからな」

ユーカーが自身を嘲笑う。

「カルディアまで来たはいいが、馬連れじゃ南砦が通れない。あいつは都へ返して、俺一人で砦を越えた。そこからはお前も知ってるだろ？」

「ああ、そうだったよなそう言えば……」

ユーカーと出会ったのはカルディア付近。そこから今日までの一月に満たない短い付き合いだ。

「あの頃のユーカーは本当にランスの心配してたよな」

「俺にとつての守るべきカーネフェルは、もうあいつだけだからな……」

悔いるようにそれでもそれを誇るように彼は小さく笑っていた。

「続いて船が渡ってきたらそれでもいい。さつさと滅びる。そうすればあいつもこの国への未練がなくなる。そんな風にさえ思った…… だけど、あいつはそういう奴じゃなかった。俺があの人を守れなかった時点で、俺はあいつに死に行く道を選ばせちゃった……」

死なせたくないのに、彼を死の道へ追いやったのは自分の不甲斐なさ。そう思うと彼はどうにもこうにもやるせないのだろう。

「あいつは本当に…… 今まで誰よりもこの国のために尽くして来た男だ。あいつは幸せになるべき人間なんだ。それだけのことをして来た。…… けどあいつは自分の幸せってもんを知らねえ」

幸せになつて欲しいと彼は言う。自分の幸せを差し出してそれで

彼がそうなれるなら彼は恐らくそうするだろう。だから彼はここにいる。幸福値を、彼の代わりに賄うために。

それを当たり前のように彼は言うけれど、相手が親戚だからってそのくらいでそこまでの言葉を紡げるだろうか？

「ユーカーは……どうしてそんなにランスが……」

「あいつは俺の理想なんだ。理想の騎士なんだ」

逆さになったってなれっこない。妬む気持ちも吹き飛ばくらい、清々しい憧れを与えてくれる。あいつはそういう相手なんだとユーカーの青が物語る。

「あいつ程の人間が何にも報われもせず、こんな蛆の湧いた国のために犬死にするなんて俺は認めねえ。認めて堪るか」

「……あいつは今までずっと無理して生きてきたんだよ。誰もが憧れるような騎士。そういうものになろうと頑張って……自分の頭で自分の気持ちを考えられなくなっちゃった。何時だって自分の中の騎士に支配されている」

それは彼に憧れた自分の責任でもあると、彼は言っている様だった。

「それって結構辛いことだと思うんだよな。あいつだって人間なんだから」

「……………そう、そうかもしれないな」

言われて俺も考える。誰もが役職を持っていてそんな目で見られる。生きることが、自分に嘘を吐くこと。演じること。心を見失うこと。何が悲しいのかも分からない。そういう人形だった記憶が俺

にもある。

(ランスも……辛かったんだな)

俺は彼を優しくして強い立派な騎士として見ていた。彼自身のことと言えば、ちよつと天然気味の言動と無差別魚料理くらいしか思い浮かばない。

それは彼自身俺と向き合うときに騎士の顔をするから。だから俺は彼の顔を見ることも知ること出来ない。それは俺がアルドールとしてではなくカーネフェル王として彼を従えているから。でも、それじゃあ駄目なんだ。

俺はもつと俺の言葉で、俺の素顔で彼と向き合わなければならぬ。俺も鎧と仮面を付けていた。彼は凄い人だから、俺もついつい身構えて……気に入られたくて、嫌われたくなくて……よそ行きのいい顔をしていたんじゃないか？ちよつとでもボロを出せば、彼は優秀な人だから俺の駄目さに馬鹿さに呆れてしまふと思ったんじゃないのか？無意識に。

そんな俺には出来ていないこと。ユーカーはそれをやろうとしているんだ。

「だから俺は人としてのあいつの願いを叶えたい。あいつ自身が言葉にしなくても。気付いていなくても。あいつが助けを求めているなら、力になりてえ。どんなことでも」

「……………そっか」

その願いが俺と対立するかも知れない。だからユーカーは俺に仕えない。いつでも自分だけは彼の味方でありたいと言う。彼のそんな切なる願いに、俺は逆に憧れる。

俺は幸せになって欲しい人はいても、その人が口にしない願いまで読み取れないし探ろうともしない。それが嫌かと思ってと逃げる。

そつだ。俺は嫌われるのが怖い。イグニスに嫌われたくない。

都合の悪いところは触れないようにして、目を逸らして……何も聞かない。本当に彼女のことを考えるなら、俺は嫌われても彼女の真実を探らなければならぬ。

ユーカーは……最悪嫌われても構わぬ。そういう覚悟があるんだ。それで傷つかぬはずないだろうに、それでもいいんだと彼は笑つていらぬ強さがある。俺のイグニスに対する大切と、ユーカーのランスに対する大切は、似ているようである。俺は彼らに負けている。それを俺は痛感していた。

(俺はずつとイグニスの友達でいたい。でもそれは……本当にイグニスのためなんだろうか?)

それは俺の一方的な思いであつて、本当に彼女のことを考えていると言えるのか?

彼女は言つていた。シャラット領の教会で。言えないことがある。それでもそれを見つけて欲しいと俺に……俺に、言つていたじゃないか。

(イグニス……)

俯いて言葉少なになつた俺に、ユーカーがテントに戻れと目で言つた。

「お前もさつさと寝ろよ。夏つつても夜は冷えるしお前なんかに倒られたらそれこそお荷物が大荷物だ」

「なあユーカー……」

「何だよ?」

「何て言うか、人間っているいろ……大変だね」

「……馬鹿かお前」

俺の言い方が悪かったのか彼は怪訝そうに俺に言う。

「てめえも人だろ」

当たり前のことだ。でも目から鱗だ。そして彼からそんな言葉が贈られるとは思ってもみなかった。

「……そっか」

それだけのこと。当たり前のこと。それでもそれが誰かに認められるのは、少し心が軽くなる。彼は俺を本当に……カーネフェル王として見ていないんだな。俺を俺として見てくれている。それが、なんだか嬉しかった。……少しだけ、救われたような気がした。変だよ。彼が救いたいの俺なんかじゃなくて、ランスだけのはずなのに。それなら俺なんかそんな言葉くれなくてもいいのにさ。

何でだろうな。嬉しいのに、少し悲しい気もした。

人の心って言うのは複雑な物なんだなと俺はまた学ぶ。昔はもつと嬉しいとか悲しいは別の場所にあるような気がしたのに。

6:Qualis pater talis filius・(前書き)

変態回……なのか？

エルスが俺達の所から去ってから……何日後だっただろう？その情報が入ったのは。

「お頭、お頭！レーヴェのお頭！山の麓に人間が！」

「しかもありゃあ……エルスちゃんが言ってた奴らに似てるねえ」

眠い。起きたくない。怠い。面倒。俺は惰眠を貪っている。しかしエルスのその名前は、俺を覚醒させるには十分だった。

エルスの飯は美味い。エルスの声は綺麗だ。眼も綺麗な色だし肌も白いし嫁にするには最高だ。俺の知る村での女達は、ろくな女がいなかった。そこら辺歩いてるのは年増とか婆ばっか。全然可愛くない。塀の中にいた若い女は、凶暴だった。あいつ凶暴だから閉じこめられてたんだなきつと。

だけどエルスはそうじゃない。俺のお袋より綺麗だし、料理も上手い。俺はあいつより綺麗な女を知らない。そんならあいつに人生賭けて、惚れる価値は十分ある。ここで俺が男を見せれば、エルスも俺と結婚してくれるって言った。

エルスが嫁に来れば俺の変わりにこいつらまとめてくれるだろうし、毎日美味しい飯作ってくれる。考えるだけで涎が出そうだ。

「うっし！行くぜ野郎共！」

俺は涎を拭いながら、得物を手に取った。

「このレーヴェ様の庭に踏み込むとは良い度胸だぜ！身包み剥いで、全部奪って、今日もいっちょ宴会と行こうぜ！」

空は青く澄み渡り、世界は……少なくともこの景色だけなら十分こんなに美しいのに……それなのにどうして俺の周りにはこんなに空気が不味いのだろう。

不味い。まずいというかむしろ気まずい。どうしてこんなに気まずい？それは多分……あの二人の所為だ。

ユーカーとランスは昨日の一件でまた距離を置いている。めんどくさい従兄弟だ。何で俺があの人のために悩まないといけないんだ。そう思えるなら思いたい。アルドールは少しばかりそう考える。ザビル河を越えて北部。南部とはちょっと変わった風が吹く。南部ほど乾燥していない。緑草木と海の香り。北部は北部で自然が多い。そして南部よりも懐かしさを覚える気がする。案外俺は昔、北部にいたのかもしれない。

そんな癒しの風だって、現実逃避は五秒と持たない。ランスは心が広いように見えてユーカー相手だと時々かなり偏狭になる。そこに絡んでくるのが先代カーネフェル王のことなんだろうけど。

「おい！そこのお前ら！」

「ああ？」

突然響き渡る声。木陰からぞろぞろと現れる人相の悪い男達。苛ついているユーカーが、喧嘩を吹っ掛けるそいつらを半眼で睨み付けた。

「人の縄張りに土足で上がり込むとは良い度胸だな」

その言葉にイグニスは吹き出している。多分「土足もなにもこっちはこの国の王なんだけど、王相手に随分おかしなことを言うんだね」とかそんなことで吹き出しているに違いない。

「うわ、凄い訛り。セネトレア訛りだねあれは」

……そう思ったが違っらしい。男達は色の薄い黒髪……外見はタロツク人に見える。しかし話しているのはカーネフェル語。その訛りが酷いのだ。

「混血に、カーネフェリーの野郎がひーふーみーの……五か。一匹値段の付かなそうなのがいるがまあ、良い金になるだろう」

賊の言葉にユーカーの肩がわなわなと震える。それは地雷だ。安い釣り針に掛からずにはいられない……貴族のプライドって言うのは悲しい性なんだな。

「良い度胸だなてめえら。誰が不良品だつて!?!」

「私のイズーを侮辱するとは。万死に値する!?!」

もう一匹釣れた。そんな釣り糸で釣られて良いのか? トリシユは本当に残念な方向に走って行っている。沸点温度の等しい二人の同僚を交互に見ながら、ランスは少し遠くを見やるよう……寂しげに眼を伏せた。

「……ユーカー、お前何時の間にそんなにトリシユと息が合っようになつたんだ?」

「合ってねえっ!?!」「ありがとうっ!?!」

全く別のことを言っているのに最初の発音が同じだと言うだけで、何か息が合っているように思うのは多分気のせいだ。

「ていうかイグニス、視覚数術してなかったのか?」

「今省工ネ中。数術代償の無駄使いはしたくないんだ」

欠伸を噛み殺しながらイグニスがそう言った。その不意打ちの表情は少し子供っぽく見えて可愛い。いつも年相応より大人びている彼女だからこそ……

「セレスティン卿の得意分野じゃないですか。山賊海賊退治の任務をよくやっていたと聞きましたよ？五分で壊滅してきてください。戻ってこなかったら置いていきますんで」

「無茶言っちな！」

そう怒鳴りながらも早速抜刀。敵に向かって駆けていく。ユーカ一の剣は混血剣。両手でも片手でも扱える武器。そこまで長身でもない彼がそれを使いこなすのは難しいように思う。しかし……

「……… 凄い」

「セレスさん、素敵ですっ！格好いいです！サイン下さいっ！」

「まあ、腐っても騎士だし彼も。あの位は出来て当然だよな」

俺とユーカ一のファン一号みたいなパルシヴァルの絶賛に、イグニスは彼を見下すように肩をすくめる。

それでも俺は凄いと思う。俺じゃ真似しても真似できない。彼は一瞬の判断で持ち方を変える。そして踏み込み、斬り込み、薙ぎ払う。あんな長剣重いだろうに、彼はその質量を感じさせない。ユーカ一だってそこまで馬鹿力というわけでもない。それを補うのは彼の素早さだ。振るうその勢いが、重さを軽減。まるで剣舞だ。踊るように彼は戦う。……… と思ったら本当に何か曲が流れてきた。

「戦う貴女も美しい。そんなイズーのために一曲捧げます」

「阿呆っ！んなことやってる暇があったら戦えっ！」

トリシユは美声だ。決して悪い曲ではないのだが、タイミングが悪い。

先程怒りのトリシユが取り出したのは剣でも槍でもなく豎琴だった。それを奏でて愛しのイズーなんちゃらかんちゃらか歌われたらまあ……ユーカーもキレルだろう。しかし皮肉にも、そのおかけと言つのか……怒りで攻撃力が上がっているようにも見える。

大分ユーカー一人で片付けてしまったようだし、俺が加勢に行く必要も無さそうだ。っていうか俺が行ってもたぶん邪魔。余計足を引つ張る。

「……でもさ、イグニスはどうしてそんなにあいつに厳しいんだ？ユーカーも話してみれば結構良い奴だと思っただけだ」

「君が彼を気に入ってる分、誰かが彼を嫌わないと世界の均衡つてものが崩れるんだよ。つまりその均衡を守る僕は世界平和を守ってる。ね？神子として当然のことだよ」

「……なるほど」

「なるほどじゃねえよっ！！」

イグニスに言いくるめられた俺に、ツッコミが飛んで来る。

「地獄耳……」

「アルドールっ！てめえ後で一発ぶん殴るっ！！覚悟しとけ！！」

俺の方を振り返りユーカーが怒鳴る。最後の一人。それももう追いつめた。だから振り返るだけの余裕……油断が生じる。そこに生まれた隙がある。それを見逃さず斬りかかる敵。

「ユーカーっ！後ろ！！」

「アルドール、そういう時は志村って言っただよ」

「え？」

「ああ、ごめん。今の時代には無い単語だった。不便だねファンタジーってのも」

「……え？」

「先読みしか知らない未来の情報だよ。君にはまだ早いね」

年下相手になんか俺が子供扱いされていた。何なんだその謎の単語は。

イグニスとの謎のやり取りをしている間にもユーカーに白刃が迫る。俺の言葉に反射し、振り返ることには成功。しかしそこから避けるにはもう一動作が必要。逃げられない。それならと振り上げる剣。届くか。怪しい。そこに現れる数術の壁。それは水で作られた数式。攻撃で壊れた壁が、その水飛沫を針に変え、敵に向かって降り注ぐ。

「それならお前はその後三発殴られる覚悟をするんだな」

「……いつもあいつの肩持ちやがってっ！」

いや、今の言葉はそうだけど行動はどう見てもユーカー助けてるって。それがわからないはずないだろうに、ユーカーは本当捻くれている。

それでも十人程いた敵をほぼ一人で倒したんだから十分凄くはある。

「大体お前は……」

「俺が？」

ランスに掴みかかろうとして……昨日の気まずさを再び思い出したらしいユーカーが口籠もる。先代のこと。口にされないだけで怨まれている。そんな被害妄想で彼は固まる。その一瞬を見逃さず、

風が吹いた。吹き抜けた。

「!」

見えない分、人より聴覚が優れている。その僅かな音に反応したユーカーは、反射的に相方を蹴り倒す。

しかしそのために、自分が屈む暇を失った。飛来するは一本の白矢。ユーカーの腕を掠めた矢が背後の木に突き刺さる。それを確認するよう現れる者がいた。

「やるじゃねえか」

その声は、これまでのタロック人よりはつきりした響き。

「……え?」

しかしパルシヴァルは大きな瞳を瞬かせている。他の騎士二人はわからないでもないが、聞き取りづらそうと言ったところ。ユーカーに至っては蹲っている。これはタロック語だ!

「ってユーカー!大丈夫!?!」

思わず俺が駆け寄ると、彼はよると立ち上がる。

「足手纏いは下がってる」

「そうは言うけど、顔色悪いよ」

ほっとけないと俺が言うと彼は面倒臭そうに舌打ちをする。

「今のは毒ですね」

「毒!？」

冷静なイグニスの情報分析。俺を含め全員がその言葉に驚いた。

「ああ、そうだ。そのまま放置してつとそいつ死ぬぜ?」

乱暴な言葉遣い。結わえた長い黒髪。黒の瞳はそいつがタロツク人である証。双陸ほどではないがこれまでの賊より深い色合い。こいつは本当にタロツク人だ。

「お前がカーネフェル王だな。俺のエルスを苛めてくれたそうじゃねえか」

「え……?」

いきなり告げられたエルスという名前。その名はタロツク王の側近、天九騎士が一人。混血でありながらその地位に収まる少年の名だ。その名を呼ぶそいつは、俺を睨み付けている。

「そいつの解毒剤が欲しければ、俺に従え」

「わかっ……」

「お断りします」

苦しむユーカーを見ていられない。俺がそれに従おうとした時…

…イグニスが笑ってそれを遮った。

「イグニス!」

「神子様! イズーがつ!」

「セレスさんが大変なんですよ!？」

「何を言っているんですかあなた方は? 一国の王と一介の騎士の命。どっちが重いと思ってるんです?」

すたすたとイグニスはユーカーへと歩み寄り、彼を冷やかな視線で見下す。

「それにわざわざ其方の要求を聞く必要もないんですよ」

「性格悪い……」

しかし見下されたユーカーが小さく笑った。このために俺を利用したなと若干の恨み言を秘め。

「なんだかんだで触れちゃいけない逆鱗に、あなた方は触れてしまった」

遅れてイグニスも笑う。その言葉に俺は思い出す。先程一人だけ反応しなかった男がいやしなかったかと。顔を上げる。その刹那、ぶつかり合う金属音！

イグニス以上に冷たい眼をしたランスが剣を手に踊る。優雅さ上品さは相方よりも彼の方が上。そして滲み出る殺気も桁違い。

しかしその攻撃を、相手は難なく受け止めた。とてもじゃないが、信じられない。

「お、女の子がランスと渡り合ってる！？」

乱暴な男のような言葉遣い。だけど現れたのは少女だった。

身体の一部を鎧に纏った鎧。男物の鎧では隠せない、ルクリースと渡り合えそうな豊かな胸囲。そしてその顔に残る幼さは、彼女よりも年下。たぶん俺と同じ年くらいか？そんな少女がカーネフェルの最高の騎士とやり合って、一步も引いていない。そんなことがあり得るのだろうか？

「地の利だね。ここは彼らのテリトリーだ」

風の吹き方。それを上手く読んで敵は矢を飛ばす。それをかわしても、その先の地面に仕掛けられた罠がある。それを避けたって、そこをまた狙われる。

「それにランス様は今ちょっと我を忘れている。攻撃が雑になっているのは否めない。だけど……一般人に出来る事じゃないよ」

「それじゃあ、あの子も？」

「ああ。十中八九彼女もカードだ」

イグニス of 解説を聞いている内にも、徐々にランスが押さされている。ランスは長剣、敵は短剣。リーチならランスが勝っている。しかし毒矢を持つ少女には迂闊に近づけない。となれば得物のリーチは彼女が勝る。不意打ちの一撃を受け止められた時点で、不利な勝負は始まっていたのだ。

「セレスさん、痛くないですか？薬草摘んできました」

森の中で暮らしていたというパルシヴァルが、ユーカーに毒に効くと思われる葉を差し出した。

「しかし煎じて飲ませるには水がありませんと。代わりと言っては何ですが、ささっ……イズーこれをどうぞ！ぐいっと思いに」

さっとその葉を奪い、薬品片手に忍び寄るトリシユの姿。それにふらつくユーカーが無理してでも蹴り飛ばす。

「どさくさに、てめえは……！てめえもランス手伝って来い！」

「トリシユさん、それは飲み薬じゃなくて傷口に塗るんですよ？」

本当に僅かな隙を見つけては、私のイズー化計画を押し進めようとするなあの人。背景で命を賭けたコントをしている他の騎士達の姿を見ると、真面目に戦っているランスが少し可哀想になる。戦いに余裕が出てきたのか、少女はその背景会話にも加わって来た。

「無駄だぜ！その毒は創作毒だ！薬草一種でどうこう出来るような柔な出来じゃねえんだよ！大体俺を倒したら、毒の隠し場所もわかんねえ。違うか？」

今は自分が解毒剤を持っていない。それを告げる少女に、ランスも攻撃の手を止める。

「俺はカーネフェル王以外に用はねえ」

「……俺に何をさせたいんだ？」

「腕の二、三本置いていつて貰おうか？止めはエルスが刺しただろうしな」

少女はにやりとほくそ笑み、俺を招くよう得物を向ける。

「あと俺様の部下を苛めてくれたんだ。他の奴らも相応の礼に慰謝料くらい置いていけ。身包み全部剥いでやる」

「お嬢さんがそんなことを言うものじゃない」

一瞬それが誰の声か解らなかった。俺は辺りを見回して……それが仲間内の物ではないと知る。じゃあ誰だ？そんな疑問を打ち破るよう、蹄の音がすぐ傍で鳴る。それはたぶん上方から。

「そしてどちらかと言えば私は、野郎の裸になんか興味はないのね。そんな君のはち切れんばかりの胸の方をじっくり観察させて

貰いたいものだ」

近くの崖から飛び下りて来たのは、中年と呼ぶのは憚られる、年齢不詳の色男。甲冑に身を包んだ様は彼も騎士なのだと思うが、その言動はあまりに理想の騎士から遠く感じる。綺麗な金髪に、かなり深い青。彼が真純血だと信じるには十分なその外見。

ならば俺達の敵と言うことはおそろくない。無いはずなのだが…
…何故かその中年色男は少女に言い寄っている。

「俺の胸筋が気になるのか？ すごいだろ。俺様くらい身体鍛えればお前もこのくらいなれるかもしれねえぜ？」

しかしこの少女、ただ者ではない。中年男のセクハラを爽やかな笑顔で回避。その言い回しだけなら少女の方が男らしくさえある。

「嗚呼！ なんと嘆かわしい！！ 可憐な異国の乙女が自らを男と思
い込んでいるとは！」

「え？」

唯言葉遣いの悪い子なんだと思っていたが、この変態親父が言うにはどうにもそれだけではないらしい。確かに彼女はあまりに無防備だ。恥じらいがない。計算高さもない。女らしさはその外見一つに留まっている。中身は完全に男だ。しかし、あの胸の膨らみを胸筋と信じて疑わないなんて、彼女の中での男女という概念がどうなっているのかと疑問に思う。

「どこからどう見ても俺様は男だろ」

「いやいやいやいや！ 大丈夫だよ君、おじさんが君に女の喜びを
教えて君が女の子だっですぐに手取り足取り教えてあげるからね。

さあ、その辺の茂みなんか都合が良さそうだ。一緒に楽園の扉を開

けに行こうかお嬢さん？」

「いい加減にして下さいっ!!」

少女の肩を抱き寄せて、すたすたと森の中へ連れ込もうとする変態相手に、そう叫んだのはランスだった。何故か涙眼だ。

「ん？その顔は……おお！ランス！ランスじゃないか！北部に帰って来るなんて何年ぶりだ？母さんに似て美人になったな！いや、私に似てイケメンになったと言うべきか」

「……………そうですか」

心底嫌そうに視線を逸らしてランスが答える。まさか、まさかとは思うがこの中年色男……二人並ぶと確かに顔立ちがよく似ている。ユーカーへと視線をやれば、青い顔が更に青くなっている。地面に倒れ泡まで吹いている。あれは毒の所為なのかこの中年を見たシヨックなのかはわからない。

「そうだ親子の感動の再会ということでお前も加わるか？タロツク女は稀少だからな。これを逃せば一生相手に出来ないかも知れないぞ？息子の息子と言う名の孫がどれだけ成長したかも観察させて貰いたい気分でもある」

「遠慮します。今はそんな状況では……」

「大体お前は騎士道を重んじる所為でろくに女性との付き合いもないのだろう？折角の私譲りの顔が勿体ない！大体そんなことでは将来結婚でもしたときに嫁に愛想尽かされるぞ？イケメンたる者、性技を極めてこそそのイケメンと言うじゃないか？男は顔だけではない。技あってこそ……」

「本当に、どうして貴方はそうなんですか！？大体また領地ほっぽり出して！こんな所に何しに来たんです!？」

「いや、この辺に暴れ回っている山賊がいるという噂とそのお頭

がロリ顔巨乳の少女だというじゃないか。これは行くしかないかなと。行ってイカせるしかないかと」

「明らかに後者が目的でしたよね……？」

「私がお子さんを攻略すれば、流血沙汰など起こさず物事の解決が出来るだろうしな。いや……この少女が新品なら無血とはいかないか。ははははは！」

朗らかに笑う中年色男。しかしその発言内容は最悪を既に越えている。

「さ、最低だ……最低だ、この人……」

ルクリースより酷い下ネタに、俺は目眩すら感じていた。ランスはそれに、これまで俺が耳にしたこともないような、深い悩みを宿した溜息を吐く。

下ネタを理解していない、パルシヴァルだけきよとした顔。

イグニスはその危険を感じてか、俺の背後に隠れている。トリシユは泡を吹き出したユーカーの傍で慌てふためいていた。

俺の眩きが耳に入ったのかようやく此方側にも気付いた中年色男。彼は背景の中から顔見知りを見つけ出す。

「むむ？そつちで死にかけているのはセレス君じゃあないか！いや、この間会ったばかりだけど全然変わってないな」

「セレス言うな……」

そう言い残し、がくりと気を失ったユーカー。その肩を中年男はがくがく揺さぶる。

「待つんだセレス君！噂の女装姿を見せて貰うまで叔父さんは君を死なせないぞ！死ぬのは女装を見せてくれた後にしてくれ！女装

祭り優勝者の底力を見せてくれ！！かなり化けると噂は北部まで流れて居るんだ！ここで死んだら死に装束で女装させるけどいいかな？」

駄目だこの人。何処までも何処までも、最低だ。呆れて俺も溜息……しかしがくがく揺すられていたユーカーが……

「だからセレスって言うなっ！！」

突然怒鳴り返す。その顔色は血の気を取り戻していた。

「……あれ？」

「イズーっ！！！」

「良かった！セレスさん！！」

自分が助かったことに驚いているユーカーに、トリシユとパルシヴアルが安堵の息を漏らした。

「解毒数術か。タロツクと長年戦ってる以上、その位は使えて当然かな」

イグニスはその中年騎士が、あの一瞬で解毒を行ったのだと俺に言う。しかし数字は見えなかった。凄い早業だ。

「さて、叔父さんとしての仕事も終わってたし……いや、待たせたねー君……ってしまった！逃げられたっ！！」

「そりゃ逃げるだろ。俺があいつでも逃げるわ余裕で」

復活早々ツツコミが忙しいユーカー。病み上がりなのに可哀想だな。

まあ、それはどうでもいいとして、逃げたのは彼女だけではない。致命傷を逃れた山賊達も皆、この場から消えていた。

「何ということだ……貴重なら若き黒髪乙女の穴が」

「だからどうしてそう言うことを平気で口にするんですか貴方はっ！もう止めて下さいっ！」

「それはそうと、アロンドイト卿。本当に何故こんな所にお出でになられたんですか？」

ランスの悲痛な声を庇うよう、意を決したイグニスが進み出る。そのイグニスを上から下まで舐め回すよう眺める中年色男。

「……この方は？」

「聖教会が神子、イグニス様です」

「……なるほど。混血の神子様か……顔は少女のようだが胸はない。残念ながらこれは男か。いやしかし混血ならやれる気が……むしろ胸がないのもまた別の味わいがあつてあれだな」

ランスからの紹介に、小声で何やら物騒なことを言っている。ていうかこの人さつきから常にやることしか考えてない。この人なら脳味噌が頭部ではなく下半身にあると言われてもすぐに俺は信じるだろう。

「神子様相手にそんな不敬罪になるような事を言うのは止めて下さい……！」

「仕方ない。可愛い息子がそういうならば私も諦めよう」

「息子って言い方止めて下さい。貴方が言つと違つ意味に聞こえます」

「それじゃあ何か？お前は私の可愛い娘だったりするのかい？それは大変だ！一度父さんが調べてやろう！さあ、今すぐ服を脱ぎな

さい！せつかくだし今日は親子水入らずで風呂でも入ろう！孫の成長を見せてくれ！さあっ！！」

突然の方向転換に俺は吹き出した。これは酷い。こんな父さん嫌だ。ランスが北部に行きたがらない理由はこの人の所為だったんだな。

「おい、叔父さん。さっきあんた野郎の裸に興味ねえって言うてただろ。後いきなりそんなに溝埋めようとしてもトラウマになるだけだから止めてやれよ」

無理矢理服を脱がされようとしている従兄を庇うよう、ランスの前に出るユーカー。しかし中年色男は、自然の摂理を説くように不自然なことを口にする。

「確かに野郎の裸に興味はない。しかしこれは私の息子だ。私の分身、私の一部も同然。ならば十分観賞に堪えうる。そうは思わないか？」

「思わねえっ！！あんただんだけナルシスト入ってんだ！あとランスはランスだ！叔父さんとは全然違えよ！！」

「私の方が色男だと、つまりはそう言いたいんだな。まったく、息子の前でそう言うことを言うのはよしてくれ。あの偏狭馬鹿息子が怒り狂うのが目に見える」

「……一回目と耳医者に掛かった方良いと思うぜ」
「そうか。なるほど。叔父さんがランスばかりを構っていてセレブ君は寂しいのか。よしよし。可愛いじゃないか。それじゃあ女装をしてくれると約束してくれたら叔父さんが君と遊んであげよう！」

遊ぶの響きが何か怖い。たぶんそれ、やっちゃいけない遊びだ。とんでもない火遊びだ。

「……………嫌だ。昔より嫌悪感しか感じない」

「最近ずつとこんな感じだぜお前の親父さん。女遊びし過ぎて感覚麻痺したって言うか、穴があれば何でも同じだとか言い出したのが三年前くらいに遊びに行った時で。あれ以来顔が良ければ何でも良いって言い出して……………見境無く食いまくってる」

涙目のランスの肩を優しく叩くユーカー。諦めると首を振る。

「あんな調子だからエレインがどうなってるか心配なんだよ俺は」
(エレイン……………?)

以前にも何度か聞いた名前だ。確かユーカーがランスに対して怒っていた時に口にした女性名。ランスの婚約者だとか何とかって……………

(そつだ。確かアスタロットさんの妹だ！)

ユーカーの死んだ婚約者。その妹がランスの婚約者だと耳にした。彼女は今北部のアロндаイト領にいるのか。

「彼女のことは俺には関係ない」

「関係ないってお前なあ……………助けておいてそれはねえだろ？あいつ完全お前に惚れてるし」

この様子だと北部に帰りたくない理由の一つにその婚約者のこともカウントされているようだ。

「そつだぞ。お前があまりに彼女に冷たいから、私が慰めてやっているんだからな」

「あんたが言うつとどっちの意味かわからねえよ。いくら何でも息

子の嫁に手え出すなよ叔父さん」

「あはははは！セレス君はおかしな事言うな。誰がそんなことを決めたんだい？」

「倫理的に考えて当然のことだろうが」

「それはあまりに無粋だ。飢えた獣の前に肉が落ちてくれば誰でも食べるだろう？それだけのことを、若さ故お前達は面倒臭く考えすぎだな」

多分、慰めたってあつちの意味だ。絶対そうだ。

「な、何を考えてるんですか！？彼女はまだ子供だ！見境がないにも程がありますっ！！」

「何を言っただランス。男と女。二人の間に年齢なんて壁を作るのは無粋だよ。……というわけでその可愛らしいお坊ちゃん？おじさんがお菓子でも玩具でも買って上げるからちよっと一緒に街まで行こうか？」

パルシヴァルの肩を抱き寄せ何処かへ歩き出そうとする中年色男。すかさず男から弟分を助け出すユーカー。よくわからないでも何か嫌な悪寒はあつたのか、パルシヴァルも涙目だ。

「パー坊まで毒牙にかけるな！！つか今男と女とか言ってただろ！言つた傍から男口説くなっ！！」

「いやいやいやいやセレス君。男だ女だそれは些細なことだ。唯そこに愛があるか。ないか。全てはそれだけだ」

「確実がないよな愛。あんたこれまで何人の人間捨てて来たんだよ。やり逃げ記録が毎年更新されて国内記録本に載ってるって噂だぞ？これ以上何かするならもう身内だからって容赦しねえ！おい神子、こいつ十字法でしょっぴけないか？」

「そうしたいのは山々なんです、残念ながら北部の支援者が彼

である以上、あまり無下にも出来ません」

イグニスという言葉にユーカーは舌打ち。その怒りを宿した目で、必死にメモを取っているトリシユを睨み付ける。

「あとトリシユ」

「は、はい！」

「その変態に尊敬の眼差しを送るのは止める。調子に乗るから」「なんだい？その憂鬱イケメン君。なるほど憂い顔も美しい。まるで若い頃の私のような。君には何か悩みがあるんだね。よし私で良ければ幾らでも聞こう。ふむふむ道ならぬ恋か。わかる。わかるぞその気持ち。よし！全面的に私は君をバックアップしよう！この恋愛達人のテクニク全てを君に伝授しよう！これで君の恋は成就したも同然だ！」

何故か意気投合したランス父とトリシユ。がしと手を合わせ、弟子と師匠と呼び合っている。

「そんなの俺が不幸になるだけだから止めてくれっ！！」

トリシユの思い人にされてしまったユーカーは毒を食らった時以上に青ざめた顔で絶叫するが、二人は聞く耳を持たない。

「なるほどそう言うことか。それなら授業料は女装公開プレイで手を打とう」

「お安いご用です！見られた方が燃え上がるとは言いますからね」「俺をお前ら変態と一緒にすんじゃねえっ！！あと女装に食い付きすぎだ！いい加減忘れろ！！あれ俺の黒歴史なんだから！」

「ああいう性格の子に限って禰に行く性格が変わるものであつてな……」

「勉強になります」

「もう嫌だ！ランス、やっぱ一緒に南部帰ろうぜ！俺もこっち来るんじゃないかったっ！！」

話を聞かない変態相手に、ユーカーも脱力後涙目。相方に弱音を吐いた。

その言葉に応えるよう、彼を庇うように立つランスの眼差しは刃物のような輝きを宿している。それでもそれが何故かとても綺麗だと俺には思えた。

「……ユーカーをからかうのは止めて下さい、それは俺の特権です」

「一言多いっ！！」

平然と酷いことを言うランス。そんな相方の後頭部を叩くユーカー。その流れに中年色男は吹き出した後、俺の方へと目を向けた。

「それで？お前が北部に来るほどのことだ。向こうでは余程のことがあったんだろう？それにあの少女は先程、カーネフェル王と言っていたね」

俺は周りの面々からすると、平凡な顔立ちだし埋もれてしまったのか。好みではないのかで彼からは見ていないんだと思っただけだ、ちゃんと見えてはいたようだ。

ランスの父親、アロンダイト卿は俺の方へと近づいてくる。

「その様子だと、南部をタロツクに落とされて……王を連れ命から逃げ出してきた。そんなところか？」

アロンダイト卿は俺をの目をじっと凝視。少しその視線が怖い。

これまでの怖さとはちょっと違う。僅かの怒りのようなものを俺はそこから感じ取った。

「なるほど……君が新たなカーネフエリアか」

そして彼は視線を俺からランスへ移し、初めて真顔で言葉を発する。

「ランス。お前はそれで良いのか？」

「俺は貴方とは違う。俺の主はアルドール様です。俺はこの方に仕えると決めただ。何があっても……俺はアルドール様を裏切らない」

「そうか……」

その言葉は俺のためと言うより、自分のため。そしてこの父親との確執から。そんな風に聞こえていた。

「いや、うちの馬鹿息子がすまないね。迷惑かけてはいないかい？」

「え？」

先程の視線は何処。突然朗らかな笑みで握手を求めるアロンダイト卿。

「いやしかし噂には聞いてはいたが……次の王がこんなに若くいらっしやるとは思わなかったよ」

突然の態度の変わりように戸惑う俺の背中をイグニスが叩く。しつかりしろと言っているのか。

「は、初めましてアロンダイト卿。俺はアルドル……」

そこでうつかりトリオンフィと名乗りかけ、もうその名前を名乗ってはいけないのだと気付いた。嫌いだったはずの家名が、今となつては……名乗れないと言ふことに、過去の全てを奪われたような気になつて、少しだけ悲しかった。

「……アルドル^{ダルト}。D^{ダルト}カーネフェリアです」

「これは数々の無礼申し訳ありません。私はヴァンウィック^アアロンダイト。そのランスの父親です。本人は認めたくないでしょうがね」

その発言を受けたランスは肯定の沈黙を送る。この親子間も決して良好と呼べる間柄ではないらしい。

俺とトリオンフィの家もそうだったし。ギメルとイグニスの家だつてシングルマザーで大変だったし、ユーカーは婚約者を殺されたことで実家と縁を切っているようなもの。それにランスも加わつて……本当何処の家も大変なんだなとしみじみ思う。

このヴァンウィックという人はランスには好意的に見えなくもないが、ランスの方は彼を嫌悪している。見境のない軽さ……それは十分嫌う理由にはなるだろう。それでもこの性格だけが問題とはどうも思えない。ランスは彼と視線を合わせない。それでも其方を向くランスは本当に……冷たい目で彼を見るのだ。ランスは湖の精が母親代わりだと以前言っていたし、その辺と何か関係するのだろうか？

「近場の街までご案内しましょう。今日はそちらで休まれては？」

どうするべきか。イグニスに視線で訴えれば、とりあえず行くところのこと。

「彼は巫山戯てはいるけど、実力は確かだよ。山賊達が帰って行ったのを見るとあの少女以外は彼を知っていたんだと思う」

ここでヴァンウィックから離ればまた山賊達は出てくるだろう。イグニスはその言った。

「ま、変態でも虫除けくらいにはなつてくれるなら使つべきだよ
ね」

なんとも素敵な言葉を本当良い笑顔で言うイグニス。そんなところもやっぱり好きだ。イグニスはやっぱりこうじゃないと。

彼の馬に続いて俺達も馬を飛ばす。平地を抜け森を抜け……そこそこ賑やかな街に出る。

「このトリフォリウムの街は、北部でも発展している場所ですね。うちの領地より栄えているかもしれないなあ」

アロنداイト卿ヴァンウィックは自嘲も感じさせない爽やかな笑いを浮かべるが、ランスは領地をそんな風に語る父親が許せないようだった。

「当然ですよ。領主がいつも領地にいないんですから」

「いてもろくでもねえことしかない阿呆もどつかにいるけどな。某南部に」

「ユーカー、ちょっといいか？今日は俺の愚痴を聞いてくれ」

「今日もの間違いじゃね？……まあ聞くけどよ。あそこの店なんかどうだ？美味そうな料理の匂いがするし」

「そうだな、そうしよう。アルドル様、イグニス様、少しばかりお暇を頂いてもよろしいですか？」

「パー坊、ついでにトリシユ、あいつらの護衛頼めるか？」

「貴女は酷い女だ。私の気持ちを知っていてこんな試練を与えるんですか!？」

「俺は酷いが貴女でも女でもねえよ。つかお前はお前の師匠と酒でも飲んで来ればいいだろ。色々悪巧みがあつたんじゃねえのか？」

「行つてきますね私のイズー! そうか貴女は私に罠を仕掛けられたがつていたなんて!! 貴女の気持ちに気付かない私をどうか許してくださいね!」

「あつそうか。んじゃ気付いて欲しいな。お前いい加減にしろ。お前いい加減にしろ。いい加減いしないなら死ね」

「刺々しい言葉から、その真意を探れと言つことですね。イズーは本当に照れ屋だ……しかしそんなところも愛しています!」

もう相手にしていらねえと、ユーカーも疲れ顔。ランスの腕を引いてめぼしい店へと向かいかけ……思い出したように此方を振り返る。けど別に俺に声をかけるためじゃない。声をかけられたのはパルシヴァル。……うん、だと思った。

「パー坊、やっぱあいつと一緒だと悪影響だからお前もこつち来い。向こうは危険だ」

無邪気で無垢な少年に、アロンドイト卿ヴァンウィックは少々刺激が強すぎる。関わらせてはいけないと、ユーカーが彼を手招き。しかしそれを拒むのは本人ではなく、何故かイグニス。

「駄目ですよ。コートカードが二枚もアルドールから離れるなんて危険です」

「だからどうしてこんな子供まで危ない目に遭わせなきゃなんねえんだよ。ほら、こつち来いパルシヴァル」

「……………」

俺とユーカーを交互に見比べて……暫く考え込むパルシヴァル。決め手となったのはユーカーの背後に控えるランスだったのかもしれない。

「僕は王様の護衛やります。僕も騎士ですから」

お勤め頑張りますと微笑む様子は心が洗われる。彼は本当に癒しだ。今俺の周りにはなんだか殺伐しているし……それにこの無邪気さは、昔のギメルを彷彿させる。

(ギメル……)

彼女は今どこにいるんだろう。そもそも俺の知っていた彼女とは何者なんだろう？道化師は彼女ではない。それなら道化師は誰？ギメルは何処？何処にいる？教会で眠っているとイグニスと言っていたけれど、俺はギメルにまだ一度も会っていない。彼女はどんな風に成長したのか。それさえ俺は正しく知らない。

そして俺がギメルのことで悩む時、一緒に浮かび上がるのがイグニス。

イグニスはイグニスだ。昔より俺に対する対応は柔らかくなったけど言葉のきつさや態度や雰囲気、それはずっと変わらない。だけど俺の親友は少女ではなく少年だったはずだ。いや確かめた訳じゃないけど、その位で揺らく間柄だとは思わないけれど。

イグニスは俺に嘘を吐いていると言った。そして本当を見つけて欲しいとも言った。

俺の中でイグニスとギメルが合わさり、答えが見えなくなる。そもそもイグニスは……別れ際あんなに俺を憎んでいたのに、どうしていきなり俺を頼るようになったのか。今のイグニスから俺に対する確かな友情を感じてはいる、それが嘘だとは思わない。

(だけど……)

立場がある癖に、俺なんかのために……命を投げ出すような素振りまで見せる。昔のイグニスにはギメルのためならそうしただろうが、俺のためにそんなことはしなかったはず。そもそもイグニスが世界平和を語る神子になるなんて思いもしなかったのだ。昔は本当に狭い世界を生きていた彼が……いや、彼女なのか？ こんがらがって来た。

その絡んだ思考の糸を解く一つの答えがある。

今俺の目の前にいるイグニスは女の子だ。ギメルは女の子だとイグニスが断言した。ギメルは正の数学を使える。イグニスはそれを扱えるのを隠して、零の数学ばかりを使ってきた。必死にイグニスであることを演じていた。

(……イグニスが、ギメルなのか？)

そう考えれば全てがわかる。俺のために必死になってくれるのも、多くを救おうと考えるのは……心優しい彼女ならあり得ること。

だけどそう考えると……俺の親友は。イグニスは何処かへ消えてしまう。そう思うと、怖いんだ。イグニスが俺を許してくれたことも、俺を大切な友人だと認めてくれたことも……全てがなかったことになる。本当のイグニスは俺を今も憎んでいるのだと、想像するだけでも背筋が震える。

「しかしセレス君、それはあまりに色気のない選択だ。もう少しムーディな店に叔父さんが連れて行ってあげようか？」

「いや、あんたの愚痴するのになんであんたと一緒に行動しないといけないんだよ？」

「なるほど。色気より食い気か。その不等号を覆してみたくなる

……しかしだなランス。お前もお前だ。少しは空気を読んで艶っぽい店にでも連れて行ってこそその親友だろうに」

「なあ叔父さん、なんで俺とこいつがそんな艶っぽい空気に包まれないといけないんだか全然わかんねえんだけど」

「あはは、いやそっちの艶もいと思うけれどね。叔父さんが言いたいのはもっとピンクな店とかむちむちお色気うっふんなお姉さんが出迎えてくれるような店に共に乗り込めという意味だったんだよ」

「行こうぜランス。これ以上構ってるとなんか変な病気移されそうだ」

「ああ。そうしよう」

セクハラ親父と化したアロндаイト卿ヴァンウィックに、従兄弟コンビはさつさと背を向け定食屋へと消えていく。確かに色気のない字もないが、此方に漂ってくる料理の香りは堪らない。

「おや、アルドール様も腹が空かれましたか？なんなら良い店紹介しますよ」

「うわっ……！」

アロндаイト卿に、肩に腕を回されて……今度は俺が何処かへ連れて行かれそうになる。

「た、助けて！イグニスっ！」

「は？」

イグニスに手を伸ばす俺に、彼女は俺を心底見下す笑みを送り付ける。

「君何様のつもり？君はさ、自分が何処にでもいる平凡なカーネ

フェル人だつて自覚ないの？ちよつとモテたからつて調子乗つてない？君は唯カーネフェリーの男が少ないからちよつとカーネフェリーのお姉さん達にモテただけなんだからね？その辺勘違いしてない？何？君何様？王様？そつカー王様かあ」

「い、イグニス？な、何か怒つてる？」

「別に。何で僕が君なんかのためにわざわざ時間裂いて怒つてあげないといけないの？理解に苦しむね」

「そ、それもそうだな。ごめん」

「まったく。アロンドイト卿が君みたいな平均顔に興味持つわけないじゃいか。身の程つてのを弁えて欲しいね」

返す言葉がない。そうだよな。イグニスは混血だからそれだけで美形設定付いてるようなもんだし実際可愛い。ランスはランスで美青年つて文字が服来て歩いてるようなもんだし、ユーカーもそんなランスの親戚なんだから顔は悪くないんだ、顔は。目とか性格の所為でそういう風にはならないだけで。

他にもそうだ。トリシユは都のお姉さん達にランスと二分する人気があるんだから、顔は悪くないんだ彼も。パルシヴァルは無邪気なところが可愛い美少年だ。あれ？何時の間にこんなことなつただ俺の周り。

ルクリースやフロリップがいた頃が懐かしい。カーネフェリーの若い男つて稀少だつたんじゃないのか？都周辺に密集してただけ？

「ははは、そんなに身構えなくとも君主に無礼は致しませんよ。

今日はアルドール様をもてなそうかと思ひまして」

「あ、そうだつたんですか」

「アルドール様は飲めますか？いや、この辺に若くて良い娘のいる酒場があります。アルドール様もこちらで一発男を磨きに行きましょう。何私の言うとおりに口説けば最後までやらせてくれますよ」

「よ」

「え、ええええええ！？お、俺そう言うのはちょっと……す、好きな子いますし。今喪中ですし」

「嫌なことを忘れるのも、好きな女に手を出せない憂さ晴らしをするにも酒と女は良いですよ？さ、今日は私の奢りです！それに腹が減った時はもっと腹が減るようなことをしてその限界まで行った時に美味しい店に食べに行くのが最高ですよアルドル様」

「行つてらっしゃい。勝手にすれば？でもまあ国王にもなつて死因性病とか情けないこと止めてよね」

「え？ご、護衛はどうするんですか？」

イグニスが俺達に手を振ると、パルシヴァルが戸惑いの声を上げた。しかしアロンダイト卿ヴァンウィックは足を止めない。そして俺だけではなくもう片方の腕でトリシユの肩を引つつかむ。

「弟子ー！君もおいでー！秘伝の技を伝授してあげよう」

既に酔っぱらっているようなテンションだ。大丈夫なのかこの人

……

「しかし師匠。私は……いえ僕はイズーという運命の人がいる以上他の人と遊ぶなんて出来ません。僕は生涯イズー一筋です」

これで相手があのユーカーじゃなければいい話なのに。何を血迷つて女装ユーカーなんか惚れたんだらうなこの人。

「馬鹿者が！技を磨かずに本命を満足させられると思うなよ！真実の愛のために、偽りの愛を重ねる！これぞ男の生き様というものだ。解るか？」

「解りません」

「ならば解るような男になれ。その頃にはあれも君にぞっこんだ

「…………ふ、ははははは！面白い！いや、君は面白いな！！まさかあの男と同じ事を言うなんて、あはははは！いや、いや！いいね君！気に入ったよ実に！」

突然俺の背中を叩いてランスの父ちゃんが笑い出す。

「え？」

「桃色なお店は止めだ！後ろの二人も一緒に来ると良い。タダ酒タダ飯ほど美味しい物はないと教えてあげよう！」

俺がよく分かっている内に彼は今日の計画を変えたいらしい。付いてこい！護衛続行との解釈で、初仕事だとパルシヴァルは舞い上がる。

「はい！護衛頑張ります！」

「そこまで言ったからには高い物食べさせてくれるですよねアロンダイト卿？」

しゅ、守銭奴来た！イグニス……神子になってまでまだそこ直らないのか？つてやつぱりそれじゃあ彼女はイグニス？依然としてそれは不明だが、イグニスと一緒にいてくれると言っただけで心強い。このランスじゃない方のアロンダイト卿はちよつと何考えているか解らないから。

*

連れて行かれた店は、確かにそこまでいかかわしくはない。と言うか屋敷で食べていた料理よりも豪華な物が並ぶ高級料理店。メニューの桁の多さに俺は面食らったがイグニスは躊躇せずに人の金だと思っただけで豪遊している。タッパー持ってくれば良かったとか数術で

非常食化出来ないものかとか考えてそんな横顔が、イグニスらしくて少し笑った。

店のジャンルが変わったことで今日は教えることはないと言われたトリシユは「まずは外堀を埋めるべし」との助言を受け、ユーカに懐いているパルシヴアルの面倒を見ている。注文を取ってあげたり料理を切り分けたりマナーを教えてやったりと下心があるとはいえ面倒見は悪くは無さそうだ。でも外堀の方向性が違う。パルシヴアル落としてもユーカーは落とせないと思う。まずランスを何とかしないと駄目じゃないか？

「さて、それでアルドル君」

人前で様々呼んでると面倒臭いことになるからねという前置きの後、ヴァンウィックがそう言った。

「君は先代のことをどれくらい知っているのかな？」

「いえ……全然。ユーカーとランスにとって大事な人なんだなっ
てことくらいしか」

「アルトは……彼は私の友人でね、名前はアルトリウス「C」カーネフェリア。気さくで良い奴だったな。時代が時代なら賢君と呼ばれたのかも知れない。生まれた時代が悪かった。だから彼は道化だった。皮肉なことだが、道化王という彼の二つ名の方が有名かも知れない」

「道化王？」

「彼は人を笑わせることが好きでね、よく城でも馬鹿なことをやっていたよ。逆を言えばタロツク攻めてくるまで何もやることが無くて、何もさせて貰えない役職だった。だから暇すぎてそういう場所に落ち着いたんだろう」

内政に関わらせて貰えない。外の敵とだけ渡り合え。それはシャトランジアでのイグニスの立場に似ている。イグニスはその仕事を上手くこなして、最終的にシャトランジアを我が者として動かせるように策を練っている。シャトランジアを動かせなければ、この戦争はタロツクが勝つ。カーネフェルは滅んでしまふ。そうなればタロツクはシャトランジアにも攻めてくる。それがわからないはずなのに、国王はイグニスと対立しているという。

しかし先代カーネフェル王はイグニスのような人ではなかった。国でのお飾りの地位に甘んじて、その空いた時間でユーカーやランスの父親代わりを務めたのだ。あの正反対の二人から好かれるような人なのだから、余程の人格者だったのだろう。それを隠しているからこそその、道化王。ヴァンウィックの言葉の端々からも、彼への親しみが感じられる。初めてこの中年色男が人間らしい顔をした。

「アルトリウス王の名を知るのは彼の傍にいる者か、彼を陥れようとしている者だけだろう」

俺も名前を聞いたのは初めてだ。平和呆けのシャトランジア暮らしをしていた俺には、海の内側の王の情報など殆ど入らなかった。今生きている人を語る歴史書など無い。恐れ多くて普段は口にもしない。だから記憶に薄い。

しかしそれはタロツク王も同じはず。だが悲しいことに人にその名が広まるのは良い王ではなく悪い王。悪名高さがタロツクの須臾王の名を内外に広めた。ここでカーネフェル王がタロツク王を討つとか、大勝利を遂げたとかならまだ話は別だ。英雄として語り継がれる。しかし小競り合いのような戦。それもどんどん足場を失っていくような、勝ちの見えない戦ばかり。

「……貴方はそのどちらなんですか？アロндаイト卿ヴァンウィック様？」

イグニスに冷たい笑みを湛えながら、グラスの液体を転がしている。グラスの中身が店内の照明、光と影に照らされて、異なる色合いを映す。

「……………どちらも、でしょうな」

イグニスの質問に中年騎士は苦笑した。

「先代様よりむしろ貴方の話の方がシャトランジア上層部では有名でしたね。彼は波風立てない男でしたが、貴方は波瀾万丈すぎる人生を送っていらつしやるようで」

「これが神子様か。いや、怖い怖い。何処まで何を知られているのやら」

「流石に貴方がこれまで相手にした人の名前を片っ端からなんて情報には興味がないので知りませんが、調べようと思えば調べられます。その程度には僕は何でも知っていますよ。先読みですから」

「はっはっは！それは怖い」

「ランス様がああなつたのは大体貴方の所為みたいなものですからね。彼には僕も同情しますよ」

「いや、私のふしだらな生活があれをあそこまで立派な騎士にさせたのならば、親としては本懐でしょう」

「……………え？」

イグニスとヴァンウィックの会話に俺は入っていけない。それでもそこからなにか拾える物はないかと耳を澄ませてはいた。

父親の女性関係のことでランスが反面教師的に成長した。そういう話？大まかにはそういうことなんだと思うけど、どうにも裏がありそうだ。イグニスが含みのあるような声のトーンで話している。俺に何か気付けと訴えるよう……………

じつと二人を見つめる俺に、ヴァンウィックは軽く息を吐いて苦笑した。

「アルドール君、君はアルトによく似ている。顔はそこまでではないが、雰囲気と性格がとても似ている。だからこそ一つ忠告させて頂きたい」

「忠告、ですか？」

「ああ。私は私がしたことについて反省も後悔もしていないがね、それでも大事な友の心を傷付け裏切ったという自覚はある。その点だけは今も後悔しているよ。だから君とあの子が我々と同じ道を辿ることがないように。それを願わずにはいられない」

何をしたんだこの人は。国王相手に裏切った？傷付けた？それでも友達だったんだろう？それを俺とイグニスに置き換えてみたが、よくわからない。裏切る？傷付ける？……知らず知らずにそういうことはあるかもしれない。だけど、ここまで強く認識する裏切りとは一体どんなものなのか。俺にはまだわからない。

「まあ、大丈夫だとは思うのだが。あれは私とは違う。そうそう馬鹿な真似はしないでらう。あれは愛よりも美しい生き方があるのだと思っっているからね。あいつがそう思うのなら、いっそのままずつとそう思い通して欲しくもあり……父親としてはそれさえどうでも良くなるような相手に出会って欲しいとも思う。親父心は複雑な物だなあ……」

その言葉の響きから、ランスへの愛情は感じる。嫌われてはいないけれど、嫌ってはいないのだ。唯この男の人は、無数の顔を持つ。父親としての顔、男としての顔。そして騎士としての顔。その生き方の中の一つを選んだ結果が今なのだろう。

「どうかあの馬鹿息子のことは決して友人だと思わぬ事だ。常に家来と家臣と……なんなら道具か何かと想ってくれて良い。それがあの馬鹿息子のためにもなる」

「……どうして、ですか？」

俺はランスを……まだ友達とは思えていない。埋めようのない距離を感じる。だけど道具だなんて思えない。いつかは友達になれたらいいなとは思っていただけに、その言葉は衝撃だった。

「それはあいつから敬いの心を奪う。王が人に見えたらお終いだ。王は王でなければならぬ」

「でも、ユーカーは……」

「あの二人は似てないようで似ているが、似ているようで似ていない」

そんな謎々みたいな回し文句で言われても、余計俺が悩むだけ。そのはずなのに妙に納得してしまう。

「セレス君はあれで良いんだ。うちの馬鹿息子と違って捻くれてはいるがまあ中身は分かり易く素直な子だ。ランスの馬鹿は素直に見えて頑固でどうしようもない意地っ張りだ。それが悪い方向に出ると何時までも悪いままになる」

あの二人の騎士の外見と本質は正反対だと男は言った。唯共通点もある分似たもの同士にも見える。例えばそれはネガティブに走るのに、妙な諦めの悪さだろうか。

「王が相手ならあれは折れるが、セレス君相手だと日頃はどうでもいいくらい折れる癖に、大きな揉め事では絶対に自分からは折れ

ない。王への敬いを無くし親しみだけ残せばそれと同じ事が起きてしまう」

ランスにとつてのユーカーと同じものになつてはならない。俺は今、そう忠告されている。

王になれとはイグニスに何度も言われた。でも王であれ、王でいると言われるのは初めてだ。そう言われて俺は、もう王になったのかとしみじみ思う。

一日前の出来事が、今は夢のように遠い。都を無くした俺が王だつて…… 本当に笑話。

「あれに親しまれる王になつてくれることは大いに結構、私も君を期待している。それでも君は君が王であることを忘れずにいて欲しい。あれを従えるつもりなら、上下関係だけはつきり明確に頭の中に入れておくことだ。でなければ…… ろくなことにはならない」

数術騎士のランスの父親だ。彼に数術が扱えるのならその父親ヴアンウィックも数術が使えてもおかしくはない。しかし…… イグニスのような予言の力はないはずだ。それでも今の彼の言葉は…… 妙な確信を宿していた。

「目を見れば解る。君はとても優しい少年だ。だからこんなことを頼んでも君には辛いだだけだと思つ。…… しかし私もあれの父親だ。例え相手が王でも出会つたばかりの少年と我が子ならどちらが可愛いかは明白だ」

だからこれはランスのためのお願いなんだと彼が笑つた。

「必要以上あれに優しくしないで欲しい。甘やかさないで欲しい。あれを哀れむ日が来るのなら、氷のように冷たい瞳で突き放して貰

いたい」

とんでもないそのお願いに、俺は返す言葉も失った。

愛しの我が子のためにと紡がれた言葉が、こんな酷い言葉で良いのだろうか？この男は本当に我が子をランスを愛しているのか？それがまたわからなくなる。その目はとても優しいのに、その言葉に愛は感じない。

「あれは鞭の味しか知らない子供なんだ。飴の味を覚えれば、あつという間に駄目な人間になる。厳しさと逆境の中でしか、あいつはあんな風に生きられない男だ。平穩があれば敵。不幸せでなければ幸せを感じられない哀れな子供なんだろうな」

幸せが墮落へ繋がる。墮落は今のランスにとっては耐え難い屈辱。騎士としての幸せとランス自身の幸せの在処。それが離れていること。違う場所にあること、それを彼は認められていないのだろう。ランスが何を望むのか、俺には解らない。カードになったその願いだって、騎士としての願い。人としての彼自身の胸の内が明かされることはない。少なくとも俺に吐露されることはない。

それは彼が俺を王と仰いで、愚痴を離せるような友人として見ていないから。それはユーカーの役目だ。俺だってイグニスにしか話さないようなことがある。だからそんな俺がランスの真意を知りたいななんて探りを入れるのはとても失礼なことだと思う。

それならそんな話が出るくらい親しくなればいい。言うのは簡単。ただ彼に近づくには俺から？彼から？どちらから歩み寄ればいいのかと、考えたことがあった。けれど彼は俺に必要以上に近づかないし、俺が近づいても逃げられる。一定の距離を保ったまま、俺と彼との間の壁は隔たつたまま。その向こうで彼が呟く言葉を俺が聞くことはない。唯彼が傷ついたような顔をするのが、見えてくる……見ているだけ。

口々に言う。誰もが口を揃えて。彼は立派な騎士様だ。ストイックに生きること、戒めを心に持つことで、立派な騎士を演じている。それが自分なのだと同一化を図っている。

だけどその言葉が繰り返される度、彼の鎖は重くなる。理想像を押しつけられて、自分との乖離に気付いてもそこから逃げ出すことは許されず、それを演じ続けなければならない。

ランスも父親同様いくつかの顔を持つ。騎士として、息子として、それから従兄として。ヴァンウィックは一つを選んだ。男としての自分を選んだ。そのために父親としての自分、騎士としての自分を葬った。その際引き起こした行動が、幼いランスを傷付けることに繋がった。

ランスはだから父親のように利己的な自分を選ばずに、騎士としての自分を選んだ。そして騎士という生き物として生きている。でも騎士って言う生き物は、たぶん人じゃない。そういう生き方は彼の心を磨り減らす。その心の安らぐ場所が、アルトリウス王でありユーカーだった。その王が失われた以上、今はユーカーにもたれ掛かり。ユーカー一人でそれを支えきれぬのか？支えきれずに一緒に彼も、何処かへ沈んでしまいやしないか？二人が少し、心配になる。心配したところで俺に出来ることなんて限られているんだろうけど。

「……………それでも俺は、二人が心配です。何も知らないで友達だなんて烏滸がましいこと言えないけど……………大切な、仲間だとは思っていますから。向こうにどう思われてようと、俺はそう思っています。

俺が勝手に」

「……………そうですか」

俺の答えにアロングイト卿ヴァンウィックは小さく笑い、椅子から腰を上げた。宿の手配をしてくと口にして、彼は支払いを済ませ店を出て行った。

緊張していたんだろうか。その糸が途切れたように、俺は深く溜息を吐く。そんな情けない様子の俺に、イグニスが助言をくれる。

「アルドール。それなら君はセレスティン卿の強化を図る。そのために彼に重心を置いて支えてあげると良いよ」

「え……ユーカーを？」

「彼が強くなれば、その分ランス様も支えられる。君が直接ランス様にどうこうするのは余計話をややこしくする。間接的支援が一番だと僕は思うけど」

「ゆ、ユーカーを支えるかあ……地味に難しそうな仕事だな」

「いや、それは簡単でしょ。彼に対しての対応は今まで通りがベストだよ」

「ランスってどうしてそんなに素出さないんだろう？ランスが自分を出すのってユーカーの前だけだよな？」

「信用されてないんじゃないの君」

「ええ!？」

「まあ冗談だけど、1割くらいは」

「9割本当なんだ」

「そりゃそうだよ、君が彼をゲットしたのは前王の七光り補正みたいなもんだよ。それがなかったら君なんかゴミだよ糸くずだよ生ゴミだよ粗大ゴミだよ」

俺自身にランスがこれっぽっちも興味がないとイグニスは言う。そこまではつきりとそう言われると流石にちょっと俺も凹む。

「僕が思うに彼はそこまで自分に興味がないんだよ。父親への反感心と、王への忠誠と、それからセレスティン卿との友情くらいしか彼の中にはない。立派な騎士をやっているのが前二つの理由から。セレスティン卿の前では騎士ぶる理由がないことが多いからちらほ

ら素が出る。それだけのことでしょ？」

「うーん……だからってどうしてそこまでユーカーに思い入れてるんだろ？ ランスは。ユーカーがべったりな理由はまあ何となく解るんだけど」

「どんな感じ？」

「俺の自慢の兄ちゃん格好いいだろデレデレ。たぶんこんなの」「君にしてはいい洞察力だね。限りなく真理だ」

イグニスが俺の答えに頷いた。否定されてもイグニスはだなぁと思うけど、たまに褒められるとそれはそれで嬉しい。俺は本当イグニスなら何でも良いんだな。でも彼女の正体もはつきりしていないというのに、何でこんなに好きなんだか。自分で自分が時々わからないくなる。

「セレストイン卿は自分へのコンプレックスが深いからねえ。理想なんだろ、ランス様がさ。ランス様は……外見は真純血として完璧だし、一部残念な面もあるけど基本的にはパーフェクトだ」

イグニスは割りとランスのことはさらっと褒める。純血だとか貴族様だとかイグニスが嫌いそうな属性はあるのに。それを持ってしてもケチの付けようがない。それに感心、負けを認める意味で褒めているのか？

「そんな彼がどうしてセレストイン卿なんかには肩入れしてるのか、それは僕も理解できないよ。それは君や後ろの二人の方がまだ理解してるんじゃないの？」

「ユーカーの良いところか……」

いきなり言われても、ぱっと思いつかばない。つい彼の行動は悪いことの方がすぐに思い出せるから。よく殴られたりするよな俺。

次に思い出すのは彼の弱さだ。シャラット領では彼はポロポロだった。そう言うところに人間臭さというか親しみを感じて少し好きになっただのは確かだけど。

(ああ！)

ここまで来てやっと思い出す。

「たぶん、行動だ」

「行動？」

「だってユーカーは俺を助ける義理も理由もないだろ？本人も口ではそう言ってる。だけど俺を何度も助けてくれたよ」

パルシヴァルがユーカーに憧れたのも彼に助けられたから。トリシユが彼に本格的に傾いたのは、ランスの凶刃から彼を庇った瞬間からだ。

「ユーカーって一番とか守りたい者を選んでるのに、結構すぐ他人のために命張るっていうか……見捨てられないって言うか、そんな感じで助けてくれるよな」

「単に馬鹿なんじゃないの彼」

そしていつになく辛辣なイグニス。世界の均衡警備お疲れ様です。

「でもずっと傍でそういうところ見てくれば、嫌いになんかならないだろうし……ランスとはちょっと違うけど、ユーカーもユーカーで立派な騎士に映るんじゃないかな」

「……つまりランス様にとってはあのセレスティン卿なんかよりもよって理想の騎士ってこと？」

「じゃないかな。だから王の傍に配置された彼に怒ったり嫉妬し

たり……それってランスはユーカーみたいになりたかったって意味もあるんじゃないかって……」

「まあ……それも勿論あるだろうけどね。ランス様は一筋縄じゃないよ。本人自身自分がどんな爆弾抱えてるか解らない時限爆弾みたいなもんなんだから。セレスティン卿はその通訳係みたいなものだね」

「爆弾？ランスが？」

「普段怒らない奴がキレるとどんな風になるかわからないって言うだろ？彼はあれだよ」

感情的なユーカーと、穏やかを装うランス。その対比に俺は自分とイグニスとの関係を思い出す。

そうだ最初は、抜け殻だったような俺が……イグニスの理不尽な怒りとか嫉妬とか苛立ちとか、そういう負の感情に惹かれたんだ。それがとても人間らしいなって憧れて。傍にいと自分も人間になれるような気がしたんだ。

（そっかランスは……）

ランスは昔の俺と同じだ。だからユーカーが好きなんだ。
ランスは人間じゃない。人形なんだ。

6:Qualis pater talis filius. (後書き)

山賊レーヴェと、北部の領主ランスの父ちゃん登場。もう少し進めばユリスディカ（ジャンヌ）とマリアージュ（エレイン）出せそう。女分が足りなくて枯渴しそう。

0章は女の子沢山だったので、野郎ばかりじゃ潤いが無い。ヒロインまだかー！

え？イグニス？レーヴェ？身体は女の子ですが精神が野郎みたいなものなんで華がありません。

シヨタ分女装分と変態分と補充しても、やっぱり女の子もいないと小説書いてる気がしない。野郎だけの世界なんてファンタジーでもクソ食らえます。

本編は百合分が枯渴してきた。戦争メインだからか、野郎が増えてきたな。

戦う女の子も好きですがインフレしすぎると良くないからな……

7: Fides, ut anima, unde abbit, eo n

女装注意回再び。

ヒロインがなかなか出てこないからこんなこと……

昔からそうだ。父はそうだ。

美しい女と見ればすぐに口説いて、そうでない女はスルーする。嫌悪し暫く会っていない内に男まで守備範囲を広げていたとは思わなかったけれど、あいつが屑男だということには違いない。

いつも遊び歩いて女を作っては捨てて。母さんをいつも泣かせていた。妻なんて肩書きだけで、母さんは捨てられた女も同然だった。俺がいるからたまに帰って来るだけの家。

母さんは段々あの男に似ていく俺に愛憎を持つ。俺が母さんに優しくしようと精一杯良い子を演じても、あの男と似た顔が彼女の心をえぐり取る。同じ顔で別のことをする俺が解らないのだと言っ。同じ顔なのに自分を口説かないお前はおかしいのだと彼女は言う。

そんなことを幼い子供が言われても解らない。唯、俺のすることやることは全て母さんを怒らせる。だから母さんが俺を、嫌いなんだと思うようになった。

だから時々帰ってくる父を真似て騎士の真似事。剣を習って、馬術を習って……そうしているときだけ母さんは遠くから俺を見てくれている。だけど褒めてはくれない。

母さんは俺の中にあるあの男の影を見ている。あるのはそれへの愛憎だけで、俺自身への関心がない。

彼女は俺が父のようになる日を待っているのだろうか？いたのだろうか？今となってはわからない。

それでも俺はあんな最低な男になりたくなかったから、その思いが俺を父から遠ざけていく。年々面影は似ていくのに、内面は別物になる。その乖離が許せなかったのか、耐えられなかったのか母さんは身を投げた。彼女を湖へと鎮めたのは、あの男への愛憎と……俺が期待に応えられなかったそのことからの失望だろう。

だけど仮にだ。俺が母さんの期待通りの男になったとして……俺がずっと母さんを愛したら、それはそれで裏切りなのだろう。

俺が父のように母さんを捨ててこそ、俺はあの男の複製品として完成する。裏切られて初めて、母さんは俺を認めるだろう。そして繰り返す。一度の逢瀬のためだけに何度も何度もあの男の模造品を作ろうとするのだろう。そんなことを考える彼女は狂っている。狂うほど、あんな男を愛しているのだ。

俺の母さんは母親じゃない。母になってもまだ娘でいる。女として生きているから、母として俺を愛せない。子が出来てからも男として生きる、身勝手な男を愛する女。

そこに俺は本当に必要だったのか。わからなくなる。俺は唯、あの男を連れ戻すための道具でしかなかったのか。

(俺は……)

本当に、誰かから……必要とされていたんだろうか？それが怪しい。とても怪しい。だから俺は彼を求めめるのだ。

今朝だって昨日のことで揉めていたのに。危なっかしくてつい庇ったら、そのすぐ後に庇われた。守るつもりで守られている。俺に頼っているのはあいつに見えてあいつじゃない。もたれ掛かっているのは俺の方。

酔っても酔えない。嫌なことが忘れられない。そんな俺に付き合っつて、酒を頼んでくれる彼。面倒見が良いとよく俺の方が言われるが、それは実際彼の方だ。愚痴なんか聞いても楽しくなんてないだろうに……彼は俺から離れない。

俺の中にそれに足る理由なんか在るのかどうかわからないけど、彼は……俺から離れない。

誰が俺を、見捨てても。喧嘩をしてもまたここに帰ってくる。

*

「どうしてあの男はああなんだ……」

血が繋がっていること自体が許せないと、恨み言を言うランス。相方のそういう姿は珍し部類に入るとユーカーは思った。

「今日は気が済むまで喋れよ。付き合っただけから」

同僚の肩を叩きつつ、俺は空いたグラスに新たに注いでやる。元々飲んでいたのは、そこまでアルコールの強い酒じゃない。それでもランスが酔っているのはかなり大酒飲んだからだ。空いた酒瓶に水やら茶やらを入れて持ってきて貰えるよう店員に頼み、先程から別の物を飲ませている。それに気付かぬほど酔っている。駄目だこいつ。

「おい、ランス。もう閉店時間だつてよ。場所移そうぜ？」

ふらつく足の同僚に肩を貸し、店を後にした。そこそこ美味しい料理屋だったと思うが、相方の愚痴の所為でそこまで料理を楽しめなかったのが少しばかり残念だ。まあ……だが、それも仕方ない。ランスのためだ。

「しかしあいつら何処に宿取ったんだろうな……つておい、ランス！寝るな馬鹿」

不意に肩が重くなった。自分より背の高い男を支え歩くのは結構大変だ。しかもこいつはもう自分で歩く気がない。背負うことが出来ないわけではないが明日の筋肉痛は避けられない。第一ここしばらくらくらくに寝ていない俺には苦行だ。

「え……?」

不意に肩が軽くなる。見上げればランスによく似た顔の叔父がいた。俺に向ける優しげな笑みなんかとてもよく似ている。

「この子は私が預かるう。何、気にしないでくれたまえ。可愛い甥っ子のためだ」

それは素直にありがたいのだが……何自然な流れでお姫様抱っこなんだ。相方が目を冷ましたら発狂してしまいそうだ。

「でもなおっさん……いや、叔父さん。流石に18にもなる息子相手にそれは止めてやれ」

「だがなあセレス君。背負って楽しいのは基本的に胸の感触が楽しめる女の子なんだよ。となれば野郎はこれに限る。恥ずかしがる様と嫌がる様を眺めるのが楽しいじゃないか」

「いや、そんな同意求められても困るんだけど」

「ははは、君は若いねえ。まあいい、宿まで案内するよ。付いて来なさい」

そう言って連れて行かれたのは、普通の宿で安心した。ほっと息を吐くと、それを残念の意味で解釈したのかセクハラ親父が絡んでくる。

「いかがわしい宿じゃなくたってがっかりしたかな?ん?どうなんだい?」

「俺にまで絡むのは止めてくれ」

「いやいや、セレス君はあいつに比べれば何百倍も可愛い部類に入るよ。あいつは本当に私を糞に集る蛆を見るような目で見るから

ね

「……………」

「さ、君もあの馬鹿息子の相手をして疲れただろう？叔父さんが食後のデザートに何か甘い物でも奢ってあげよう！それとも苦い物が好みかな？」

いつの間にか両手がフリーになった下ネタ叔父が、俺の肩を掴んだ。

「ちよつ……おい！叔父さん、ランスはどうするんだよ？」

振り返ればソファーに置き去りのランス。何時の間に!？」

「あ、この子部屋まで運んでおいて貰えるかい？これチップだよ取っておきたまえ。いや、悪いねえ、頼んだよ」

そして通りすがりの従業員に金を握らせ部屋を教えて、叔父はランスを見送った。

「さ、邪魔者は消えたし叔父さんの部屋でルームサービスでも頼もう」

「じ、邪魔者……?」

最愛の息子とかなんとか言ってなかったか？なんて薄情な。あいつはその場のノリで生きているような男だと、以前父が言っていたようなことを思い出す。

「時にセレス君、うちのランスの秘密を知りたくないかい？」

「あいつの秘密？」

「ああ。君ほどあの子を知っている子はいないとは思っけどね、

あの子の本当の悩みを君はまだ知らない。あの子は例え君相手でもそれを話さないだろう。だけどそれを知らなければ君はあの子を支えられない。それでは困らないかセレス君？」

俺がランスを慕っている前提で、叔父は俺に取引を持ちかける。否定してやりたいが、否定できる程の理由を俺は持っていない。

「……一緒に酒飲むだけでいいんだな？」

「いや、何でも好きな物注文してくれて良いよ。唯、一つお願いがあるんだけどね」

*

「あんただんだけ食い付いてんだよ！」

お願いは一つだった。けどその一つが最悪だった。

「ははは！ぬかったなセレスちゃん！この宿は一見普通の宿に見えて、ルームサービスにこそその神髄がある！」

「何でルームサービスに衣装なんてあるんだよ！畜生っ！！」

「ははは！北部の文化を舐めるな。南部ほど豊かではない分、無い知恵絞り出す。これが北部の生き様だからね」

「無い知恵絞ってなんでこうなるんだっ！！」

ルームサービス一覧に、料理と酒以外に妙な分類があった。ある事かこの叔父はそれを片っ端から頼みやがった。

それであいつのことを知リたかつたら、とりあえず女装しろと来た。もう嫌だこの叔父。ていうかなんで俺がランスなんかのためにこんなことしなきゃいけないんだ。いらん所で人に迷惑かけやがってあの飲んだくれ。

「しかし何だ。ブランシュ君がとち狂うのもわからんではない。なかなか可憐に化けるものだな君も。普段の印象が強すぎる分、ギヤップなんちゃらって奴だろうかね」

「今度尻触ったら決闘申し込むからな」

「どうせ申し込まれるなら結婚を申し込まれたいな。言葉の響きも似ているだろう?」

「似てるから何だっつてんだ」

「いや、君の言いたいことは理解した。次は後ろではなく前の上か下を触って欲しいと、つまりはそういうことなんだろう?遠回しに誘って来るとは君もなかなか」

「んなことしやがったら決闘なんか言わずに俺も本格的に騎士止めてあんたを夜道で刺し殺す」

「それは困った。それでは可愛い甥……いや姪を愛でて心も潤ったところで、そろそろ本題に入るとしよう」

「姪じえねえよ」

「ちなみにセレスちゃん、揉むのとか舐めるとか挿れるのは触るに入らないと叔父さんは思うんだ」

「完璧アウトだそれもっ!つか早く本題入れっ!つか穴なら何でも良いのかあんた!?そんな好きなら鼻穴ファックでも耳穴ファックでも勝手にやってろ!」

しかしここまで俺のツッコミを殺す相手も珍しい。ツッコミをろくに聞かずに隙あらばセクハラ。女泣かせの上にツッコミ泣かせとか止めてくれ本当に。

ランスがこの人嫌がるのも解る。俺だってもう嫌だ。俺も涙目なっつて来る。

「いや、少々おいたが過ぎたか。悪かったねセレス君」

俺のそんな顔に気付いてか、叔父は少しだけ申し訳なさそうな顔で俺の頭に触れる。

「唯私は純粹に……強気な君をちよつと泣かせて見たかっただけなんだよ。あと耳穴と鼻穴は試したことがあつたが私のが大きすぎて無理だつたな」

「あんた最低だな。つか試すな」

ここでそんな台詞が出るなんて、外道と変態以外の何者でもない。

「まあ、落ち着いて。このデザートはなかなか美味いんだぞ？」

俺の機嫌を取るように、皿にケーキを切り分けてくれる。そんなことで俺の機嫌は……

「美味え……」

「ははは、セレス君は馬鹿みたいに可愛いね」

「くそっ……」

単純だと言われているのは癪だが、美味いもんは美味い。このおっさん料理に関しての舌は確かだ。それに目も良い。ランスと違って自分で作つたりはしないけど、任務で近場を通りかかる度、味も見目も楽しめる料理を俺に食わせてくれる。

勿論タダじゃない。その度にあいつの近況を俺に尋ねる。だからあいつを心配しているっていうのは本当なんだと思う。……俺はあいつの通訳じゃないんだけどな。

でも、この叔父の方から俺に話をするっていうのは珍しい。俺が付いてきたのはそこが気になったからであり、別に料理に釣られたわけじゃない。

頭の中で文句を良いながら、上品な甘さのあるケーキに舌鼓を打

つ。悔しいがやっぱり美味しい。

俺の隣から、俺と向かい合う形でテーブルの向こう側のソファ―に叔父は移動して、やっと本題に入ろうかという素振り。でももしかしたら悔しげな俺の顔を見たかっただけかもしれない。だがそれでは困る。

「それで、話って？」

「……君は何故あの子が私を憎んでいるか知っているかい？」

「浮気者だから。変態セクハラ魔だから。下ネタしか言わないから。領地を空ける領主だから。父親らしいことを何もしない糞親父だから」

「うん、要約すると正にその通りなんだけどね」

叔父は爆笑していたが、すぐにまた真顔に戻って低い声で囁いた。

「だが私はその浮気の中で、とんでもないことをしてしまったことがあってね」

「……何したんだよあんた」

「これはまだあいつも知らない話だ。これを知ればあいつは今のままではいられなくなる。だから私は今日までそれを伝え倦ねて来た」

そんなものをどうして本人すつ飛ばして俺に話すのか。解らないという俺に、叔父はそれが信頼だと口にする。

「これを君に話すのは、君がこれからもずっと誰よりあの子の近くにいて、あの子を支えてくれると信じるからだ」

それはとても狡い言い方。枷を生む言葉だ。信じる、そう言いながらこの人は……俺をあいつに縛り付けようと企んだ。開き直りの

良い下衆だ。馬鹿息子の幸せのためならば、可愛い甥を犠牲にすることも厭わない。本当は父親がすべきこと、その役目まで俺に押しつける。やっぱ父親として最低だなこの男は。

「君の目から見て、それをあの子が知る方が幸せだと思える日が来たら、これをあの子に話して欲しい」

「……………」

この男は自分であることを選び、そのため家庭を顧みず、ランスの心を傷付けた。それでもこの男がランスの不幸を願っているわけではないのは解る。あいつを不幸にした張本人が何をとは思う。

そんな男があいつの幸せを願うのは、懺悔だろうか？ 救いを求めてだろうか？ 解らない。だがこいつは、これ以上ランスを不幸にたくない。そう思っているのは確か。

（俺だって…………）

あいつを不幸にしたい訳じゃない。なれるものならなつて欲しい。不器用な生き方しか出来ないあいつには………… 本当は、誰よりも幸せに。

「俺がこの話を聞くのはあんたのためじゃねえ。ランスのためだ。それでも良いなら勝手に話してくれ」

「ああ、ありがとう。それじゃあ話すよ」

でも何て切り出せばいいかななんて叔父は苦笑を浮かべた後、すうと息を吸い込んだ。それは何か、覚悟を決めるようだった。

「あの子の母親は………… 死んだ私の妻ではないんだよ」

「え…………？」

「私が生涯で最も愛した女があの子の母だ」

噂なら都で聞いたことがある。この女漁りの色男は高貴な人まで毒牙にかけたに違いない。そう言っつて父の罪でランスを貶めようとする質の悪い騎士見習いは何人もいた。だが……

「本当……なのか？それじゃああいつは……」

どうして先代が、アルトのおっさんがあいつを次の王だと言ったのか。それは指導者としての才覚から？人望から？そうなんだろうと思っつた。だけど……それだけじゃない。

「あいつの母親つて……カーネフェリア王妃様なのか！？」

叔父は何も言わず、それでも一度だけ……首を縦へと振る。その様子に俺は、強い目眩を感じていた。

*

「わりい、エルス」

レーヴェは両手を合わせて調理場を盗み見る。心地良い包丁とまな板の音。それは怒つていようには聞こえない。

しかし数日ぶりに遊びに来たエルスに、こんな失態話するのは辛い。ああ。空腹なのに飯が出来上がるまで待つていなければならぬ。今と同じくらい辛い。それが同時に来て二重に辛い。腹減つた。

「いや、いいよ。そんな大物がこんな所ふらつてゐるなんて誰も思わないよ。コートカードも連れ歩いてるんだ。その位の幸運が向こうに味方しても仕方ない」

実力の又じゃなくて運が悪かったただけだとエルスは言う。やつぱりエルスは優しい。この詫びにあいつらの腕、今度は全部切り落としてやらねえと。

「都探しても見つからないからもしかしてと思っただけで来てみれば…
…やつぱり河を越えていたか」

エルスが料理の味を確かめながら、何かブツブツ言っている。俺はそれが少しエルスの機嫌の悪さを表しているような気がして、手下達を睨んだ。

「大体何でお前らあそこで俺を連れ戻したんだよ？」

「お頭あ、そいつは……」

「ああ見えてあいつは先代カーネフェル王の側近中の側近。チャラチャラしてるように見えてあの中じゃ頭幾つも抜き出てやがります」

「なんだお頭！あの男に捕まった奴は死ぬより酷い目に遭ったって話聞いた」

「何言ってるんだ。死ぬより辛いことなんかあるわけねえだろ。死んだら飯食えなくなるんだぜ？」

俺は物事の判断基準が食の一点に占められている。その俺がそれ以外のことで怒るのは珍しい。それでも苛つくことはある。カーネフェル人。金髪族、あの悪魔らに馬鹿にされるのだけは許せねえ。

「第一俺らの土地を土足通行したのはいただけねえ！」

俺の声に、すぐ傍でエルスが頷いてくれた。

「そうだね。タロツクがこの国を落とした以上、今悪いのは彼らの方だ」

「だよな！あいつら昔からほんと最悪だったけどな」

そうか、やっとあいつらが悪者だつてことになったんだな。そりゃそうだ。人にあんな酷いことする奴ら、いつか罰が当たって当然だ。

「そう。都落としが叶った今、王は支援者たる君たちをタロツクの一員として認められた。今日から君は天九騎士団第七師団長、それからタロツク貴族の地位を与える」

エルスは俺の手を取って、立派な刀を俺に捧げる。

「何だ、これ？」

「王からの贈り物。これで君も立派な騎士だ」

エルスがにこりと微笑むと……皆のあちこちから歓声が上がった。

「す、すげえ！お頭！あっちこっちに立派な馬が！」

「馬だけじゃねえ！高そうな武器に防具で武器庫がぎっしりだ！」

ささやかな贈り物ってレベルじゃない。一体何事かと思えば……
エルスは俺をいつもと違う名前で呼んだ。

「レーヴェ……君は今日から獅鷹じおの名を名乗ると良い」

「しおっ？」

「獅子に鷹たかって書くんだ。王が直々に名付けて下さった名前だよ」
「漢字の名前って……」

「言つただろう。君は今日からタロツク貴族だ」

ぼかんとしている俺を余所に、手下達は大騒ぎ。

「うおおおおおおお！すげっ！凄えお頭！！」

「俺達が天九騎士の部下になれるとは！出世したもんだなあ！」

調子の良い野郎共に、エルスは苦笑しながら、褒美はまだこれだけじゃないと俺達に言う。

「タロツクに屋敷と領地を用意させる。それにこの北部でのカーネフェル人相手の略奪含め全ての行為を認めるとのこと。今までと同じだとは思うけど、君たちの方が今となっては正義だ。好きなだけ暴れてくれて良いよ。王の許しが出たからね」

「俺様がタロツク貴族……」

「今君たちにはカーネフェル北部の守護の任が下っているけど、必要な物があれば僕を通じて送らせるって言うてたよ」

「いや、十分だ」

「でもお前ら馬なんか乗れるのか？俺は乗れねえぞ？」

「ああ、それは大丈夫。ちゃんと躰の行き届いてる子達を貰ってきたから。基礎知識さえ覚えて貰えば、すぐに乗れるようになる」

略奪に出かける幅が広がったと大喜びの手下達。でも俺の関心は別の所にある。

「それはエルスが教えてくれるってことだよな？」

「まあそうだけど？」

「その間エルスの手料理食い放題ってことだよな！？」

「そうだけど、だからってゆっくり覚えるとか止めてね？」

「ですぜーお頭！カーネフェル王殺すまで結婚お預けって話じゃねえですか」

「そ、そうだった！よし！俺すぐに覚える！」

異国の空。異国の山。故郷とは全然違う。それでも住めば都という。今の暮らしも十分楽しい。

決して裕福な暮らしじゃなかった。毎日腹が減っていた。今は毎日たらふく食べられる。それでも胸の中に空いた穴。それが埋められないのだ。だけど美しい言葉を話すエルスを見てみると、それが埋まるような気がする。彼女は俺にとって故郷タロツクその化身。彼女さえ自分の物になったなら、俺は今よりもっとこの飯を美味いと感じることが出来るだろう。

(フォース……、グライド………ロセツタ)

あいつらはもう何処にいるのか解らない。生きているかも解らない。なら新しく俺が、大切なものを作っても良いはずだ。

俺様は強いから、過去を振り向かない。うじうじしない。いつも前と未来だけを見て生きる。それが山賊レーヴェ様つてもんだらう。

「ああ、そうだ。君たちこの馬は非常食とか刺身にして流さないですよ。食用じゃないから美味しくないとさういう風には高く売れないよ」

「お前らエルスからの頂き物を、勝手に流したら殺してやるから覚悟しろよ」

山賊の性分で、売り捌くことを考えてしまっていた連中は、俺の言葉に震え上がる。本当油断ならない連中だ。

「いいか？俺達は山賊だ。売っていいのは奪ったもんだけ！貰っ

たもんを売るのはあんまりにも礼儀知らずだ。売るくらいなら貰うな！奪え！解ったか？」

一睨み聞かせれば、途端に大人しくなる。俺が目を光らせてないと、こいつらは本当に駄目だ。こいつらは元々商人やその手下。目の欲に流されて、それで商売失敗した奴らばかりだろうに、まだその癖が抜けないのだ。

「米が炊けるまでもう少し掛かりそうだな……ねえレーヴェ、お風呂借りて良い？カーネフェルってクソ暑いっていうのに最近水浴びばかりで嫌になるよ」

「ああ、好きに使ってくれ」

着替えにと浴衣とタオルを渡して俺は彼女を見送った。

「よし。お前らは米を見ている。俺は仕事に行ってくる」

「お頭！そっちは風呂場ですぜ」

「馬鹿かお前ら。男子たるもの惚れた女の風呂を覗かずに胸を張って男と言えるか！？」

「お頭が飯と昼寝以外のことに興味を持つなんて！」

「いや、お頭は女じゃ……」

「どっからどう見ても俺は男だろうが。それ以上俺を馬鹿にするならこいつで相手をしてやるよ」

貰ったばかりの刀は良い案配に手に馴染む。抜き払った刀身の輝きは美しく、振るう際の自然な流れは身体の一部のようだ。

(良い刀だ。これならあいつとも……)

あの金髪の騎士。あいつを負かすには丁度いい武器だ。中途半端

が俺が一番嫌い。さつさと白黒付けてやる。

「よし！いい汗かいたぜ！これなら俺が風呂に行っても何の問題もない！」

刀にひるんだ隙に手下達を伸したは良いが、真夏の気温も相まって汗がダラダラ。タロツク生まれの俺にはカーネフェルの夏は辛すぎる。

「エルス！俺も風呂につ……」

「うわ！レーヴェ？」

「くっそおおおおおおおおおおおおおお！！遅かったか！！」

もうエルスは風呂上がりだった。そつだ夏場はそんな長風呂出来るわけがない。俺は怨む、夏という季節を怨む。いや、でもエルスに着せた赤い浴衣はよく似合っている。故郷の祭りを思い出す。

「エルス……林檎飴作れるか？」

「白米には合わないと思うけど、一応作れるよ？」

だけどもうしてと聞いてくる彼女。

「いや、なんかエルスの浴衣見てたら祭りっぽい物食いたくなつた」

空気を読むよう鳴る俺の腹に、エルスは大きく吹き出し笑う。

「いいね！僕も祭りは好きだよ。昔は花火とかやったなあ……」

「あと蛸取りとかしなかつたか？」

「ああ、取りはしなかつたけどよく見ていたよ、懐かしい……う

ちの神社の傍によくいたなあ」

「……………そう考えると、カーネフェルの夏って暑いだけでクソつまんねえな」

「まあ、異文化圏だしね」

「食材が美味しいのは良いんだけどなあ」

タロツクはそんなに良い思い出のある場所ではないけれど。それでも俺にとっては大切な故郷だった。帰郷を願う心はある。

「やっぱりレーヴェはタロツクに帰りたい？」

「そりゃあまあ」

「そつか。この仕事が終わったら、たぶん叶うよ」

「カーネフェル王さえいなくなればってことか」

「そう、あいつさえいなくなれば」

長い金の髪、青の瞳。俺の大嫌いな色。みんな消えてしまえばいい。あんな冷たい目の奴は。みんな俺に石を投げる。俺を悪魔と呼んだ。そんな奴らの方が、俺には悪魔に見える。そんな悪魔みたいな奴らの親玉だ。カーネフェル王とか言う男は最低最悪に違いない。そう思うのだが、王らしき少年は影が薄かった。思い出すのは俺と対峙していた青年騎士の顔。深い青の瞳は思い出すだけで吐き気がする程だった。ああクソっ、せつかくのエルスの飯がまずくなったらどうしてくれる。

*

「……………ユーカー？」

ランスが目覚めたのは違和感が原因だ。定食屋の机にもたれ掛かっているはずが、机はこんなにも柔らかかっただろうか？

薄めを開ける。ここは何処だ。俺は確か酒を飲んでいたはずで。周りを見れば見知らぬ部屋。

ここが宿だと理解するまで数秒を要した。愚痴を聞いてくれたいた従弟が何故いないのかはわからない。別の部屋にでもいるのだろうか？

「……………」

宿と言うことは、ここにあの男もいるのか。

「気に入らないのは確かだけど……………」

愚痴を吐いてすつきりした。だから少し余裕が生まれた。あの男がユーカーの解毒をしてくれたのは確かだ。そのことについてだけなら礼を言ってくるべきだろうか？

これは俺のためじゃない。あの男と歩み寄ろう何て気持ちはない。ユーカーのためなんだ。

そう自分に言い聞かせ、出汁にしてしまった従弟に心の中だけで詫びる。宿の従業員に尋ねて、あの男がいるという部屋まで向かう。部屋の中は妙に静かだ。扉の外から叩くのが躊躇われるくらいに静か。

「……………起きてますか？」

小声で扉を叩く。返事はない。寝てしまったならそれでもいい。言うだけ言って帰るだけだ。そしてもう二度と言わないだけ。

「今日はユーカーを助けてくれてありがとうございます……………」

…“父さん”」

その言葉を発したら、室内で何か物音がした。皿の割れる音だ。何かあったのだろうか。

扉に手をかける。鍵は掛かっていなかった。

「な、何事ですか!？」

俺はその瞬間固まった。薄暗い証明。見知らぬ少女を抱き締めたあの男の姿。

「……こらこらランス、空気を読んでくれ。子連れと知られると女の子を口説くのが大変なんだからな」

「あ、貴方という人は……どうしてそう、いつもいつもそうやって!死んだ母さんに悪いと思わないんですか!?薄情者っ!人でなしっ!」

「お前が空気をぶち壊してくれるから、この子も固まってしまったじゃないか。もう少しで口説き落とせそうところだったのにまたく……」

「貴方なんか大嫌いだ!もう二度と父さんなんて呼ぶものかつ!」

信じられなかった。息子との再会、その日くらいは体裁がある。そんなことはしないだろうと思っていたのに。俺との親子関係の修繕をするどころか、亀裂が走るようなことを平気でやる。また何処からかあんな女の子を連れてきて。自分より何歳年下相手にしてるんだあの変態っ!!

俺は怒りのまま、部屋を飛び出し元来た道を引き返す。あんな男死んでしまえばいいと思いつながら、進める足は酔いも抜けていないのにかなりしつかりしていた。

*

「……つたく、何でああいうこと言うんだよ」

「いや君がこんな姿をあの子に見られたくないかと思つてね」

「そこは普通あいつの方優先してやれ」

「いや、それは出来ないな。君を脅してこんな格好させていたなんて知られば、あれの三倍は怒られたよ、うん」

ユーカーは床に落ちた皿の欠片を拾う。これは動揺したこの叔父が、誤つて落としてしまった物だ。それにしても言い逃れのために俺を抱き寄せるなんて何馬鹿なことを。

(幾らあの話をあいつに聞かれたくなかつたからつて……)

あいつがこの部屋まで来たのは、あまりに大きすぎる話に俺が言葉を失つた……その時だつたのだ。

「あいつはそこまで俺に関心ねえよ。唯自分以外が俺をからかうのが気に入らないつてだけだ。あいつああ見えて心狭いからな」

「なるほど。そんなところばかり私に似て、駄目な子だな全く」

「……せつかくあいつがあんたに少し歩み寄ろうとしたつてのに、一回ああなつたらあつちからはもう絶対近づいてこないぜ？」

「まあ、それも仕方あるまい。私はあの子にこれまでそれだけのことをして来たんだからね。簡単に許されようとは思わないし、許されたいとも思わない。私とあの子はこれでいいんだよ」

「……大人げないのもそつくりだ」

「世の中そんな物だよ。大人だから年上だから親だから折れてやるなんて決まりはないんだ。そしてそんな広い心もない。親だつて人間なんだよセレス君？」

「……」

「君も南部の実家にはもう暫く随分と帰っていないようじゃないか」

「いつそうちの親父とあんたが逆だったら良かったよ。息子がランスならあのクソ親父も喜んだだろうからな」

「なるほど。君が私の息子なら、多少の浮気……100股や1000股くらいは大目に見てくれると？」

「そこまで行くともう呆れて何も言えねえよ。俺だったらな。俺と俺の女に手え出してこない限り好きにしろよって背中押してやる」

「それは心が広い。浮気公認とは君が女だったなら理想の嫁だな」

「まあ、でも国法触れたら任務で殺しに行くかもしれないけど」

「ははは！10才以下には手を出さないように気をつけるよ」

「そのボーダーラインが既に犯罪だろうが。変なところばかりセネトレアに感化されてんなあんた」

「いや、あの国は愛の国だと私は思うよ」

「馬鹿かあんたは」

俺が小さく吹き出すと、叔父も自嘲気味に笑った。

「そうだな。君となら良い親子になれただろうな。だけど残念ながら私の息子はあの馬鹿であり、君の父親はあの偏屈男なんだな皮肉なことに」

「……あいつ早く死なねえかな」

「君を相手にしていると、あの子が私についてどう思ってるのかなんとなく解りそうで怖いな、ははは」

俺が親父に思っていることは、ランスがこの叔父に思っていることに似ている。そうなのかもしれない。俺は俺の親父ほどこの叔父を憎くは思わない。実害が俺に及ばない限り面白い人だと思う。だけどランスにとっては酷い父親であるのは確かで、ランスを傷付けたという点では俺もこの人は嫌いだ。

「ロジアン兄さんは私と違って、真面目な男だからねえ。その真

面目が裏目に出ると酷いことになると言っ例だ。あいつは案外あの馬鹿息子と似た系統なのかもしれないな」

「はあ？あのクソ親父とランスを比べるなよ。ランスが可哀想だ」
「君は本当にうちの馬鹿息子のファンだねえ。いや、喜ばしいことだが」

聞き捨てならないと噛み付く俺に、叔父はにたつく。何だかんだでランスのことは自慢の息子なのだろう。褒められると自分のことのようにこの人は喜ぶ。でもこの変態に息子息子言われると、俺が褒めてるのはランスのはずなのに、このおっさんもしかして自分の下半身褒められてる気になってるんじゃないかっていう疑念に刈られる。日頃の行いって大事だな。

「そうだな。あれは道を間違えなかったからこそ、道を間違えた未来のランスの姿だろう」

「間違えなかったから、間違えた？」

「ああ。私は騎士としても父親としても失格だが、兄は父親として男としては最低だが騎士としては忠義者だ」

自らは男として生き、兄は騎士として生きたと叔父が言う。俺の親父が騎士として？アルト王のために支えるために領地のためにシヤラット領を滅ぼした。アスタロットを手にかけた。俺を息子として見ない。家の道具としてしか見ない。欠陥品めと冷たい視線を注ぐ。人目に見せては家の恥。見えるはずの両目を隠されて俺は生きた。あの家で。

生き方を決めることは、他の何かを捨てること。俺は親父に捨てられて、ランスもこの叔父に捨てられたのだ。

「兄は決してあの女性に思いを告げることはなかった。想いさえ否定した。だけど私には同じ事が出来なかった」

「……そういうことかよ、なるほどな。よく解ったぜ」

あのクソ親父は母さんを、家のために娶ったんだ。姉貴達の母さんは、女ばかりで男は全然産めなかった。だから跡継ぎが欲しかったんだ……だから新たな妻を娶った。

軽度の女取っ替え引っ替えも家のため。跡継ぎのため。王のため。

「あいつが母さん殺せたのは……ほんと何とも思ってたか
らなんだな」

兄弟揃って救えねえ。よりもよって王妃なんか惚れるか？

それでこの叔父は王妃に手を出して、ランスを傷付けた。俺の親父は手を出さなかったからこそ家庭を家族を愛せない。俺がこんな薄い色の目じゃなくても、俺を道具としてしか見られなかったことだろう。

「……はあ」

屑具合は兄弟揃って同レベルだが、俺としてはこの叔父の方がマシなのだ。こんな目の俺でさえこの男はこうして可愛がる。少なくとも人としては見てくれている。

セレストイン領にランスが遊びに来たときは、クソ親父も本当ランスを可愛がっていた。褒めちぎっていた。俺はそれをどんなに羨んだことだろう。

だけど親父はランスのような息子が欲しかったという気持ちだけじゃない。ランスの中の血と面影からあいつを可愛がったんだ。そりゃそうだ。惚れた女の子だと思えば、表には出せないが主の息子のようなものだ。それは可愛いだろう。道具じゃなくてもつと神聖な者としてあいつを見ていたに違いない。それに比べて俺の何と惨めなことか。

「やっぱあの親父早く死なねえかな……」

「ははは、やっぱり駄目か」

ランスとクソ親父が似ているとこの叔父が言ったのは、俺がランスを好いているなら、あのクソ親父のことも好きになれると言いたかったのだろう。だけどそうはいかねえ。ランスとあいつは別物だ。

「……でも、安心しろよ叔父さん。少なくとも俺とランスが同じ女に惚れることはねえ。あんたらの二の舞にはならねえよ。アルドールとランスがどうってのはわかんねえけど、それも無いんじゃないか？アルドールにも惚れた女はいるしな」

この場合その相手はあの道化師を指すのか神子を指すのかどうにもよくわからない。惚れた女に化けてるのが道化師で、でもそれと同じ顔した神子は完全にアルドールに惚れてるだろうし。アルドール自身がどうなんだかはわかんねえが、ランスが道化師や神子に惚れるとはどうにも思えない。それなら多分そういうことは無いんじゃないかと俺は思う。

「なるほど。君は私の自慢の息子にぞっこんということか。確かにそれなら私達のような争いは避けられる」

「なんでそうなるんだよ！俺はあんたらとは違う。死んだからつてすぐに他の女に乗り換えたりしねえ。俺の心は生涯アスタロット一人のもんだ」

あとわざとらしく自慢の息子とか言うな。絶対下と掛けてるだろこのおっさんは。

そして俺の誇りを吹き出して笑うな。これだから女と交わったことの無い男はみたくない哀れみの目を俺に送るな。

ううー！何て愛らしい格好をー！」

「ぐえっ」

そこをたまたま通りかかったらしいトリシユに思いつくそ抱き締められる。もう嫌だこんな人生。なんで俺野郎とばかりこんななるんだ。アルドールなんか一時期女ハーレム作ってたらしいじゃねえか。何で俺には野郎しか寄って来ないんだ。いやまあ、アスタロットの手前それでいいんだけど。だけど女が寄ってきてそこで惚れた女がいるんだとか断らせてくれても良いじゃねえか。この野郎はそんな断り文句で引き下がるほど頭が良くない。あのセクハラおっさんを師匠と呼ぶほどアホだ。「大丈夫です、男なら浮気の内に入りません！さあ！」とかその内言い出しそうだ。何がさあ！だってんだ。

「私は……いや、僕はとても嬉しいよ」

物語の配役口調が突然消えた。感激のあまり素の言葉が出てきたのだろう。どうでもいいからさっさと放せ。俺はもう疲れたんだ。今日は飲んだくれ二人の相手をして来たんだ。いい加減どうにかならないものか。本当にこの所俺は睡眠不足なんだぞ。

「女装をあんなに嫌がっていた君が、どうしてこんな所でこんな格好をしているのか！答えは一つ！この僕のためなんだろう！？きつとそうだ！そうに違いない」

そしてどうしてある程度顔が良いと言われ、厄介な自信を得てしまった残念な野郎はこんなにポジティブな考え方が出来るのか。その無駄イケメン面を鉄板にでも押し当ててやりたいもんだ。

「んなわけ……」

あるかと否定しようとして、俺はここで気付く。もし違うと言ったなら何故こんな格好をしているのか言及される。そしてランスの耳にそれが入ったなら、あの叔父の言うとおりまたあの親子仲が悪化したら……それはランスの不幸だ。

嫌だ。嫌だ、嫌だ。物凄く嫌だ。だけどここはこう言うしかないのか？こいつに口を割らせないためには、そうするしかないのだろうか？俺は諦めの息を一つ吐いて心を決める。頭一つ分俺よりでかいトリシュにちよいと手招き。

(……黙ってるよ。他の奴にこんな見られたくない)

怖気を必死に抑えながら耳元でこそつとそう伝えてやれば、馬鹿な男が感涙の涙を流している。いい年してみつともねえやつがいたもんだ。

(ああ、イズー！！解りました！早く部屋へと行きましょう！)

よっしゃ！馬鹿で良かった！こう言えばこいつは言及などしない。おまけに俺の小声に付き合ってくれる愛想の良さ。馬鹿と鉄は使いようってこういうことか。後は力業でもカードの力使っても、変な展開から逃げる！部屋に戻ってからが戦いだ。

足取りの軽いトリシュを盾にして、顔見知りが見ていないかを伺いながら俺も逃げる。何とか誰にも見つからずにトリシュの部屋まで逃げることに成功。問題はここからだ。

「い、イズー……君から僕を誘ったと言うことは……つまり、そういうことだよな？」

案の定この阿呆は迫って来た。お前物憂げな美形面っていう設定

何処に置いて来やがった。こんな鼻息の荒い物憂げ美形がいて堪るか。

「あ、悪い。俺婚前交渉はしない主義なんだ。悪いな」

「ええ!？」

「単にお前にこの格好を見せたかったただけだ。それ以上の意味はない。何勝手に勘違いしてやがんだてめえは。んで俺の女装はどうだった?ああ?」

「か、可愛かったです」

「はい、あんがとな。はい、この話ここで終了!」

悔しかつたら法でも変えて来い。それを伝えてさっさと着替え。それを残念そうに見つめる同僚。

「それはつまり、僕がアルドル様にもっと忠義を示して信頼されなければならぬということか。名実共に優れた騎士にならなければ、君は心を……いや足を開いてくれないということなんだね」

「言い直す必要あったのか今の?お前あの中年男の悪いところ真似るなよ。むしろ好感度下がるからな下げるからな。はい、マイナス。よって今日は俺とお前には何のイベントも無しだ」

俺は同僚の手を引っつかみ扉の外へと放り投げ、さっさと鍵を閉めてやる。これで俺の平和と平穩は守られた。一人部屋最高。

「アルドル様ああああああああああ!こんばんは私が扉の前で見張りをさせていただきますううううううううううう!いえいえお構いなく!これは私がやりたくてやってることですからあああああああ!」

廊下から何かそんな声が聞こえたが俺には関係ない話だ。アルド

ールやあの神子がそんな阿呆な法案通すはずがない。しばらくこの手を使えばトリシユは良いように使えそうだな。

「疲つれた……」

風呂に行きたいが、トリシユが羽虫のように室内に入ってきても困る。

窓からの移動をするなんて、面倒なことはしたくない。それでも降りられない高さでもない。クソ暑いところ移動してきたんだ。シヤワーを浴びたいのは本当だし……迷いながらカーテンを開く。

「……つつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつ」

窓の外に顔がある。生首が浮いている。ずささささと扉の前まで後ずさる俺に、その顔は手をも出現させ、ここを開けると叩いている。恐る恐る近づけば……それは見慣れた相手の顔だ。

とりあえず一度カーテンを閉め、女装服を隠してから俺は再び窓へと近づく。

「こんな夜中に何してんだお前は」

「いや、お前が何処の部屋にいるのか解らないから一部屋一部屋こつして回っていたんだ」

「お前自分がイケメンだからって何でもかんでも許されると思っ
なよ??」

「大丈夫だ。これが一部屋目だったから」

「何でお前は低次元リアルラックだけ無駄に高いんだよ。くそつ
……」

窓を開ければそそくさと室内に上がり込むランス。思えばこいつ

との出会いもこんな感じだったと思い出す。こいつなんでいつつも窓から現れるんだよ。しかも一階なら解るが複数階まで上がってくるな。

「んで？俺に何の用だつてんだ」

「飲み足りないから付き合ってくれ」

「いい加減にしるよなお前」

「そう言われると思って手土産を持って来た」

「ぬ、抜かりねえ！その抜かりなさが腹立つわー……」

そう言つて差し出されるのは、夜中に食いたくなるような、こつてりしていない素朴な料理だ。煮物とか漬け物とか、小さなライスボールとか。タロツク料理でも妙に癖になるよなあいつらは。

「お前にしては珍しく見た目も良い料理じゃねえか……どれ」

「ちよつとむしゃくしゃして凝る気になれなかつたんだ」

「つて……不味っ！！」

「ちよつとむしゃくしゃしたからわざと砂糖と塩を間違えてみたんだ」

「確信犯かよ！夜中になんて嫌がらせだ！？」

ソファーに腰を下ろし、唯一無事だった漬け物メインに咀嚼。俺は咽の甘ったるさを飲み込んだ。それを見計らったかのように、向かいに座つたこの男は変なことを口にする。

「……誰かを好きになるって、どういふことなんだろう」

「い、いきなりなんだよ。お前までトリシユみたいなこと言い出して」

思わず咽せた。漬け物の塩分と米の砂糖が胃の中で反応、暴れ回

っているようだ。

「俺にはよく分からない。人を傷付けて、不幸にしてまでそれは意味のあることなんだろうか？」

それでもランスは真剣に下らないことを悩んでいる。あの叔父の所為でこんなにも。

「俺はそんなものがなくても生きてても死んでもいけると思う。俺は今の……以前の生活に満足していたし、あの人さえいれば……俺は歩いていけると思ってた」

「ランス……」

「あの人がお前を庇ったことでお前を責めないよ。あの人はお前を……俺達をそれだけ大切にしてくれていたんだ。だったら恥じる事じゃない。あの人の信頼を裏切らないよう、俺達は立派に生きて立派に死ぬべきなんだ。そのために生かされたんだ」

「……そうなのかもな」

「……カードは一枚しか生き残れない。それならたぶん俺もお前も高確率で死ぬ定めだ。そんなカードが誰かを好きになつたつてろくなことにはならない。短い余生を剣のために国のために生きるの、間違つたことではないはずだ」

逃げるようにランスはそんな言葉を口にした。

「それなのにこの土地は……俺に嫌なことばかりを押しつける」

「……でもエレインはお前に惚れてる」

「あんな年の離れた女の子、異性として俺は思えない」

「まあ、そうだろうけどよ」

でも何年か後なら。そう言いかけて俺達にはその未来がないこと

を知る。消えるカードが未来を思い描く事なんて……

「……まあな。無理して好きになる必要もねえかもな」

「だろう？」

「でもまあ……お前にだって幸せになる権利はあるだろ。気になる女がいるんならちよつとくらい夢見たって……良い思いしたっていいんじゃないの？」

人のため国のためそうして戦い続けたところで、それはお前の幸せにもう結びつかない。命が磨り減らされていく。何の見返りも与えられないまま。そんなのは苦しいだけだ。少しくらい楽になったっていいんじゃないかと俺は思う。

「だってお前さ。今まで生きて来て何が楽しかったよ？あつたかそんなもん」

「楽しかったこと……？」

「仮に死ぬときになって、そんなのが何も見つからないってなったら何のために生きてたんだってなるだろ。そういう後悔していいのかお前は？」

「そういうお前はどうなんだ？」

「俺は楽しいから良いんだよ」

「お前のこれまでの人生だって俺と大差ないじゃないか。そこまですれすれには俺には見えない」

「あのなあ！人の生き方にケチつけんな！俺を哀れむな！俺は俺でこれでも楽しく生きてるつもりなんだよ！」

「でもお前は実家からも勘当されてるようなもので縁切ってるよ。うなもので、大切な人だって何人も亡くして来たじゃないか。それで何が幸せだって言うんだ？俺には解らない」

「そ、そこまで言うか？」

正論だ。正論故に少し胸が痛い。本当こいつ、俺に対して遠慮とか配慮つてものがまるでない。無神経男が。でもそんな風に言われても、やはり傍にいるのが嫌だとは思わないから不思議なもんだ。

「俺は馬鹿みたいな奴と馬鹿なことするのが楽しいんだよ。くだらねえと思いつながら、何にもならねえ無駄な言い争いで時間を消費するのが馬鹿みたいでたまんなく笑えるんだ」

それはとても変な感じだ。見えるし聞こえる。見られてるし聞かれてる。

あの部屋では何時も毎日、一日がとても長く感じていた。それでもこいつに連れ出されてからは毎日があっという間になった。

誰とは言わないが、ここで気付かないような馬鹿の名前を呼んでやる必要はない。

ちらと横目で従兄を見れば、深く綺麗な青を真つ青に見開いて俺を見る。

「……何かを作ることが怖いなら無理に作る必要はねえ。何にもならないことにも何らかの意味はある。少なくとも俺はそう思う」

何も解決しないこの言葉の交換だって、俺に一つの感情を伝えてくれる立派な行為。下らないこのやりとりが楽しくて、掛け替えなほほど大切に、守りたくて、無くしたくない。

音のない世界に飛び込んだのがお前。広がる世界の中心は未だにお前のまま。根強くお前が残る。こうして話せることが何よりも幸せで。認識される。生きている、それを強く感じられるんだ。

だからお前が死ぬのなら、せめて俺の後にしてくれ。俺からこの喜びを奪わないで欲しいんだ。だから俺は俺のためにお前を守るんだ。俺が幸せだって笑って死ぬるその日のために。

「だけどな……自分の心否定してもろくなことにはならねえぜ」

俺だって逃げ出した。逃げ出して失った。だからこそお前には同じ間違いをして欲しくない。俺の失敗を見て、お前は正しい道へと進んでくれ。何時だってそう。間違うのが俺の専門。栄光へと至るのがお前の役目。それが俺達の正しい在り方だったはず。

お前は俺とは違うから。俺とは違う幸せを追いかけろべきだろう。俺は置いて行かれ忘れられる。たぶん音は消えていく。いつかそうなる日が来るんだって知っている。

お前が俺にこうしてもたれ掛かってくるのは、本来別の人に向かうはずの分の好意。その好意ごとまとめて代用品としてここにいる。誰も好きになりたくないから、現状維持で俺を可愛がる。弟として猫可愛がり。弟でもないのにさ。俺は多分こいつにとってペットみたいなものなんだ。飼い猫でも飼い犬でも他の奴に懐いたなら、それは腹立たしいことだろう？こいつの俺への好意はその程度のものなんだ。死ねば悲しいけど、幾らでも代わりは見つかるような。

「……俺も楽しいよ」

向かいの席から上がる声。現状維持という選択。

俺なんかよりもっと楽しいことが世界にはあるだろうに、馬鹿なことをこいつは言う。人間不信から人を人として好きになれない。王は神で人ではない。だから崇められるし慕いも出来る。俺は人間だけどこいつにとって人じゃない。犬か猫か鳥かなにかだから可愛がれる。人を人として好意を抱くことが出来ないこいつは可哀想だ。あの叔父がこいつをこんな風にしてしまった。

だからこそ、こいつがこのままで良いとは俺には思えない。誰でも良い。誰かこいつに人としての喜びを生き方を教えられる相手がいるんなら。俺はこの楽しみも投げ出してやれる。

(いや……)

むしろそれがなくとも俺は投げ出すべきだろうか？そうすればこいつは考える。俺の代わりを見つけに行く。

だけどそれがアルドールに向かうのだけは避けたい。そうなればこいつは余計自分の幸せを考えない道具に落ちる。それでは現状維持以下だ。

考え込む俺に、机の向こうでランスが笑う。飼い犬を撫でるような俺の髪を弄ぶ。奴は優しく笑うけど、その目に映る俺は多分犬の姿だ。こいつは可哀想な捨て犬を拾ってやっただけのお優しい人間様だ。その人間様に懐いた俺が馬鹿だというだけで……

「……何だよ？」

「俺は騎士として生きる。騎士として死ぬ。それを……俺は決めた」

前々から思っではいた。それでもとうとう決意した。父にあったことで意固地になって自分の道を固めてしまった。未来も可能性も全て捨てて、死を見つめる青い眼だ。

「こんなこと、お前に頼むのはおかしいと思う。だけど……」

「……言ってみるよ」

「お前なりの騎士で良い。だからお前も、どうか騎士でいてくれ。最後まで」

それはつまり、こういうこと。お前は人になるな。人として幸せにならないでくれ。一緒に傍にいてくれ。お前は俺の飼い犬だろう？最後まで同じ道を歩いてくれ。付いてきてくれ。何とも我が儘な言葉。

一人で何にもならない、道を歩くのは耐え難い。もうその道は喜

びじゃない。あの人が失われたから。アルドールじゃ代わりにならない。意味はあるけど無価値な道。あの人の亡霊を追うだけの悲しい旅路だ。その度の道連れになつてくれと奴は言う。

「ただ俺がこいつから我が儘を言われることなんて殆ど無い。いつもこいつが我が儘な俺を立ててくれたから。我が儘を言われたのなんて子供の頃以来かも。」

「お前は俺を騎士以外の何かにしたいのか？無職か？ニートか？仙人か？」

「そ、そういう意味じゃない！」

「俺だつて生きてる以上職は要る。そりゃ死ぬまで騎士ではいてやるよ。アルドールの阿呆には仕えないけどな」

「お前はまったく……どうしていつもアルドール様で落とすんだ」

ペットの役目は飼い主の気持ちと和らげ、笑わせてやることだろう。それなら俺は一級品のお犬様に違いない。悩みがどうでも良くなるようにと道化を続ける。嗚呼、阿呆だな俺。そう思っても止められない。

「こいつが下らないと笑ってくれる。それだけで埋められるものがある。代用品にしてるのは俺も同じだ。同罪だ。家族でもない癖に俺はこいつを家族にしている。居場所にしている。情けないほど傷の舐め合いだ。」

でもこれで良いとは思えないから、お前は何処かへ行つてしまえばいいのに。

俺はもうどうしようもないからこれで良いとして、お前は俺が傍にいてそれで前進できるような奴じゃない。俺を捨てるべき時期が来たんだ。少しはあの叔父を見習って、人を渡り歩く術を身につければいいのに。それがお前を前進させることなのに。

叔父への敵意と憎しみから、こいつは人を俺を捨てない。何時までも留まり続ける。もたれ掛かる。

どうしたら俺を嫌ってくれるんだろう。離れてくれるんだろう。考えても解らない。あの人がいいた頃は勝手に離れてくれたのに。あの人が消えてからは俺にべったりだ。嗚呼、やっぱり俺は代用品。今じゃ王の代わりに抛り所。

どうしたもんかと悩んでも、この馬鹿は何も解っていねえ。俺を馬鹿だと思っているから、俺がここまで考え悩んでいるなんてちつとも気付いてくれやしねえ。

賢い俺は嫌いだろうか？そう思っただけで賢くなるうとしてもこいつは俺を優しく見下すだろう。俺は何をしてもこいつには馬鹿としか映らない。だって種族が違うから。幾ら犬猫が賢くても、人間様と同列には考えないだろう？

俺を褒めるこいつは、そういう見下したものを可愛がるそれと似ている。俺は何時になっただけ人間に進化出来るのやら。

俺の溜息の意味さえ、こいつはまったく解っていない。結局こいつも叔父とは別方向に最低野郎な屑男。それは俺も認めよう。

横目で睨んだら今度は俺の髪を弄って遊んでいる。勝手に変な結い方をしている。人が大人しくしていれば……

呆れてもう一度。溜息一つで悩みが解決すればどんなに良いだろう。もし来世があるのならそんな世界に生まれてほしいものだ。

*

「アルドール、ブランシユ卿が五月蠅いから何とかしてくれない？……ダウト！」

「うわああああああああああ！！イグニスさん強すぎです！……」

「うん、この勝負終わってからにしようよイグニス」

「そうは言っけどね」

「……………」

「トリシユー！今勝負中だからちょっと待ってー」

「いきなりどうしたんだらうね彼」

「……………」

「そうだなー。またユーカーと何かあったんじゃないのか？」

「……………ていうか彼もなんだってあんな人に惚れたんだらうね。まあ僕がそう仕組んだんだけどさ。はい、上がり！一番ふかふかのベッドは僕が貰った！うわあ！すごいふわふわ。ふかふか！ねえ羨ましい？御貴族様だった癖に、王様なのにソファか床になるってどんな気分？」

「……………」

「にしてももう少し賭けるモノあつたんじゃないか？」

「ダウトっ！」

「うわっ！ぱ、パルシヴァル……………この短時間で腕を上げたな。くそお……………あと一枚だったのに」

「そりゃあ確率的に手札が減れば怪しいよね」

「……………」

「あ、パルシヴァルもこれで上がりか。させるか！ダウトっ！」

「王様、残念でした」

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああ」

「君上位カードなのにリアルラックも低いよね、あはははは！でもこれでアルドール床決定っ！！あ、パー君は可哀想だから僕とベッドで寝ようね」

「それじゃ俺ソファーに」

「は？何言ってるの君？」

「え？」

「君は負けたんだから誰が何と言おうとこの部屋では床以外には寝かせない。それが嫌ならこの部屋から出て行くんだね。正統派美形にして天然鬼畜ランス様に隠れ女装属性のセレスティン卿、それから残念美形のトリシュさんにセクハラ中年色男のアロンダイト卿選り取りみどりの野郎が君との添い寝を待ってるよ」

「何かユーカー辺りが待ってねえ！ってツツコミ入れそうな気が

する」

「でもランスさんのお父さんなら歓迎してくれそうですね」

「歓迎っていうか歓迎ゲイっていうか姦ゲイっていうかなんだろかね。全裸かバスローブ姿で布団に入ってる、布団を捲って陛下へいカモンとか言っちゃいそうなイメージはあるよね」

「片手にワイングラス持ってそうです」

「ちよつとアルドール、行って確かめてきなよ」

「ちよつ、お前らもう少し王様を労ろう？護衛なんだろ？俺の貞操を守ってくれよ」

「君は野郎なんだしどうでもいいだろそんなの。そういうの言ってる良いのは美形か美少年だけって相場が決まってるんだよ。君平凡顔の癖に調子に乗ってるから少し痛い目見て来なよ」

「うわっ……！」

イグニスに連続的に蹴りを食らい、部屋の外まで運ばれる。

扉はすぐに閉まって鍵まで掛けられた。イグニス酷い。でもそんな酷いところがイグニスっぽくて良い。やっぱあれイグニスだ。ギメルじゃない。

「……流石我が君。上級者ですね」

「え？」

「部屋を追い出されてそのような顔を瞬時に浮かべられるとは……私はまだまだ修行が足りないのかもしれないかもしれません」

何故か扉の前で警備をしていたトリシュが口惜しげに端正な眉を中央に寄せている。

「トリシュ、俺追い出されたんだけどランスの父さん以外の部屋で空いてる部屋ってある？」

「そうですね。私の部屋はイズーに占領されてしまいましたし……」

…」
「ユーカーか。ちょっと頼んでみようかな」

ランスやトリシユよりはユーカーは気楽に相手が出る。この二人みたいなこれでもかって言うくらい的美形とかでもないし変に緊張もしないしな。

「ユーカー！俺だけどちょっといいか？」

「帰れ阿呆。どうせお前の傍に変な虫が飛んでるだろ」

「アルドール様相手に無礼だぞ。はい、今すぐ開けます」

「ば、馬鹿！」

室内からはユーカー以外にランスの声。鍵が開くより早く、俺は背後で物凄い殺気を感じた。

「いいいいいい、い、い、イズーうううううううううううううううううううう！何でランスが部屋にいるんですか！どっから湧いて来たんですか！？」

ガクガクと両肩を揺すられるユーカー。何も答えられない彼に代わってランスがにこやかに窓を指さす。

「ああ。それは窓から」

何やってんのあの人。意外とアウトドアなんだ。インドアの虫の俺にはちよつと考えられない。窓から脱出は考えたことあっても窓から侵入なんて発想まず湧かない。ていうか何で適確にユーカーが居る場所がわかるんだ。数術使いだからなのか？イグニスならそういうことも出来るだろうけど、ランスも出来るのか。気付は驚愕と感嘆がいつのまにかすり替えられている。これだから顔と性格の

良い男は得だなあと思った。

「それでアルドール様、何事ですか？」

そういうランスは何時も通り落ち着いているように見える。ユーカーを愚痴に付き合わせたおかげで精神的デトックスでもできたのだろう。毒素の行き着く先であるユーカーの精神状態だけがちょっと心配だ。まだトリシユに尋問されている。

「トランプで部屋決め勝負に負けて、イグニスとパルシヴァルの部屋になっちゃって、今日の寝床に困ってるところなんだ……情けない話だけど」

「そういうことでしたか」

「俺には害はないと思うんだけど、ランスには失礼だと思うんだけど俺……アロンダイト卿と同室はちょっと無理かなって……それでこの誰かの部屋に泊めて貰いたいんだ」

「まあ、あのおっさんは誰だって嫌だよな。俺だって御免被る。

あいつバスローブ姿でヘイカモンとか言ってるさうだし」

「いや、全裸かも知れませんが。それで布団を捲って待ってそうです。バスローブの場合はグラスに赤ワインとか入れて揺らしてそう感じがします」

みんなに同じイメージ持たれてるあの人って一体……

「というよりそれが幼少時代の俺のトラウマなんです……」

リアルでやってたのか！？どこまで予想通りなんだあの方は……

「久々に家に帰ってきたと思ったら、父さんと一緒に寝ようとか言われてちよっと喜んでたのにその図ですよ。お前は我が子をなん

だと思つてゐるのかと小一時間……」

「あの頃の叔父さんはあれだな。子供の可愛がり方が解らないとかぼやいてたような気がするぜ」

「解らないにも程があるだろうが!!」

「まあ、そうだよな、うん」

ランスもランスで大変な家庭にいたんだな。ちよつと可哀想な気がしてきた。

「んじゃここで二人組に分けて、そのペアと嫌なら野宿なりあのおっさんと添い寝しに行くなりするつて流れでいいか？俺はトリシユじゃなければランスでもアルドールでもどつちでも良い」

「それを意識すると、私でなければ嫌……そう言うことですねイズー。本当に照れ屋なんですからもう」

「こいつのこういふところが嫌なんだ。よし、お前ら友人同士仲良く寝ろよ。俺はアルドールでいいからアルドール残してお前ら出てけ」

「アルドール様あつ！アルドール様はセレストイン卿なんて大嫌いですよね！？同じ空気を吸いたくなんかないですよね！？虫唾が走るつて顔に書いてありますよね！？それじゃあここは是非私にそのお役目をお命じにっ！！ランスっ！僕らは親友でしょう！？親友の恋路の邪魔だてなんて無粋な真似っ！君のような男がするはずない！そうですよね！？」

「お前俺を貶めてまで俺と同室なりたいのか？」

「時に嘘を吐いてでも真の愛を掴み取る。惚れ直しましたか？」

「ああ、見損なつた。やっぱお前は無しだわ。まだあのおっさんと添い寝した方マシな気がして来た」

「イグニス様とパルシヴァルがいない以上……カード的にはやはりユーカーが適任か。トリシユ、俺の部屋に戻るう？」

「嫌ですっ！！昨日も見張りの所為で殆ど一緒にいられなかつた

んですよ！！おまけにパルシヴァルガードとか作って私は近づくとままならないという苦行を味わいました！」

「ったく、仕方ねえな」

このままこじれては何時までも俺の寢床が決まらない。俺の困った様子にユーカーは、心底嫌そうな顔で溜息を吐いた後、トリシユの腕を掴んだ。

「ランスとお前出てけ。これ以上騒がれたら迷惑だ。こいつは俺が引き取ってやる。たまには主従同士親交でも深めやがれ」

「い、イズーうううううう！！やはり貴女はなんて優しい人なんだ！！」

よくわからないまま俺とランスはトリシユに外に追い出され、俺は本日二度目の廊下入り。

隣のランスから感じる殺気が凄い。穏やかな笑みを湛えているがどす黒いオーラが出ている。

それが少し昔のイグニスに似ている。そんな風に思ったら、怖さも半減。可愛いところもあるものだなんて好意的に解釈してしまう。ランスにとつてのユーカーは、イグニスにとつてのギメルなんだろうな。俺の視線に気付いたのか、ランスもようやく我に返った。

「失礼しましたアルドール様。すぐにご案内いたします」

だけどその口調はやっぱり固い。気を使わなくて良いのにな。そう思うけど……ランスの父さんに忠告されたことを思い出す。俺がランスを友人だと思ふことがあつてはならない。彼はそう言った。

でもそれはこんな風にずっと気を使われ続けることで……俺は今の空気がどうにも肌に馴染まない。ランスやトリシユとも、ユーカーのように言いたいこと言えるような間柄になりたい。そう思

うのはいけないことなんだろうか？

「ランスはさ……」

「はい」

その部屋はそう遠くない。鍵を開けて中へ招かれ……彼が灯りを付けた時、俺はそう切り出した。

「くだらないと思わない？俺みたいなガキに仕えて」

「アルドール様？」

「ランスはそれでいいの？本当は俺なんかじゃなくて、他のものを守りたいんじゃないの？今だってそうだ。ランスは笑ってるけど、本当はまだユーカーと話したいことがあったんだろ？」

あの殺気。あれの正体。それがこの人の素顔。

俺にはそれを向けはしない。感情を殺して唯微笑む。でもそれで本当に良いの？俺にそんな価値はないのに。

「俺はランスより何も出来ない。強くもないし頭も良くないし馬も剣も満足に操れない。そんな子供に仕えて、ランスは本当にそれでいいの？」

俺の言葉に彼が青い瞳を見開いた。だけど俺はここで言わなければ、何時までも言えないような気がした。だから言葉を続けて行く。

「ランスは俺が好きで俺に仕えてくれているわけじゃないんだろ？だから俺はランスに認められるような王になりたいと思う。だけど……そうなるまで、ランスには嫌な思いばかりさせてしまうと思うんだ」

だって俺はこの人に何一つ勝てないんだよ。彼だって何一つ負けていないと自負しているだろう。そんな格下の相手を崇める理由が何処にある？何処にもない。あるとしたらそれは先代アルトリウスさんの栄光だ。俺の力じゃない。

「だから俺はランスに遠慮をしないで欲しい。助言をして欲しい。俺の駄目なところは駄目。嫌なところは嫌だって言っただけじゃない。俺が立派な王になるには、唯言うことを聞いて貰えるだけじゃ駄目なんだ」

情けない言葉だと思う。それでも俺は至らないところばかりで……自分一人の力で立派な追うに慣れるとは思えない。周りに俺より何でも出来る人達が置かれているのは、彼らから学んで吸収しろというイグニス的心遣いなんだと思う。

「俺は……ランスにもう少し、思ったことをそのまま言って欲しい。それが俺のためになると思うから。……それに困ったことがあるなら俺も聞きたい。一緒に考えたい。それが国を救うための第一歩なんだと思う」

国なんて膨大なものどうやって救えばいいのか解らない。だから俺はまず俺の周りの人を、周りのことを変えていきたい。ランスとランスの父さんのことも解決したい。そんな簡単な事じゃないのは解ってる。だけどそれさえ出来なくて、どうして俺に国が世界が救えるんだ？一人を救えないものは全てなんか救えない。全てはその積み重ね。俺は一人を救い続ける。諦めたらそこで終わりだ。きつと何も掴めない。どこにも辿り着けずに落ちていく。

「ランスはどうしたいんだ？親父さんのこと、ユーカーのこと……もしそれでランスが悩んでるなら俺も一緒に考えさせてくれ」

「アルドール様……」

俺の言葉にランスは笑う。綺麗な笑顔だけど、それはやっぱり拒絶なんだ。ランスがこういう風に笑うときは騎士の顔をしている。理想の騎士だ。俺の言葉ではその仮面を剥がせない。

「お気持ちはありがたいですが、俺は何も悩んでいませんよ。悩みがあるとするばあの山賊のこと、それからカーネフェルのこれからです。ここからどのような策を取ればいいのか……」

立派な騎士らしい立派な言葉。国を憂いるその言葉。そこにランスはいない。いるのは騎士だけ。国のため人のため唯それだけを考える。

「……うん、そうだね。それはまた明日、イグニスを交えて話しかけよう。それ以外は何も悩んでいませんよ。悩みがあるとするばあの山賊のこと、それからカーネフェルのこれからです。ここからどのような策を取ればいいのか……」

「……うん、そうだね。それはまた明日、イグニスを交えて話しかけよう。それ以外は何も悩んでいませんよ。悩みがあるとするばあの山賊のこと、それからカーネフェルのこれからです。ここからどのような策を取ればいいのか……」

「……うん、そうだね。それはまた明日、イグニスを交えて話しかけよう。それ以外は何も悩んでいませんよ。悩みがあるとするばあの山賊のこと、それからカーネフェルのこれからです。ここからどのような策を取ればいいのか……」

「ええ。明日も忙しいでしょうから、今日はもう休んで下さい」

そう言って俺に寝台を渡して自分はソファへと向かう。何を言っても多分聞いてくれない。命令だって言っても駄目なんだろう。

俺はまだ、ちゃんと彼の主には認められていないのだから。

*

俺は間違わない。俺はあの男とは違うんだ。

そう強く自分を戒める。それでも真っ直ぐな言葉が胸に突き刺さるのをランスは感じていた。

(アルドール様……)

下らない。あんなこと。あんな最低な男のことで騎士の俺が揺らぐわけにはいかない。何時でも同じように戦えなければならぬ。何時も強くあれ。常に勝ち続ける。

地の利だカードだ、言い訳だ。

俺はユーカーのことでさえ、揺らいではならない。何時も冷静に判断を下さなければならぬ。あいつを見殺しにしても俺は騎士でいなければならない。

だから俺はあいつにも騎士として生きて欲しい。あいつが人として俺を見ているなら、それは間違いだ。俺がお前を見殺しにするように、お前も俺を見殺しにすればいい。感情で生きるな。心を縛れ。身体を全て剣に変えろ。それでこの身が折れるまで戦えばいい。

そつだ。俺が見るべきはあいつでもあの男でもない。俺の主はアルドール様だ。この人のために俺は生きて死ぬんだ。

弱くて心優しいあの少年。俺なんかの個人的な下らない悩みなんかには付き合わせてはならない。共有すべき悩みは国のように大きいもの。あの人は間違っている。俺を救っても世界は国は救えない。

身近な者を見捨てても犠牲にしても、前に進むことが大事だ。ひび割れた世界をその手で受け止めるためには。犠牲を最小限に、そのためになりふり構わず進めるか。それが王のすべきことだ。

この点はアルト様も間違っていた。その間違いが取り返しの付かないことをした。だけどその取り返しの付かないことがユーカーを守ってくれた。

俺は考える。もし死んだのがユーカーで帰ってきたのがアルト様だったなら。

……それでもやっぱり俺の心は半分死んだ。俺は完全に騎士になり、自分の心を無くしてしまう。その場合俺はユーカーにそうしたようにアルト様を殴れないから、他の者を殴るようになっただろう。アスタロットを失った頃のユーカーみたいに、人を斬ることでしか生きられないものへと落ちる。

アルト様はユーカーを生かすことで俺の心を生かした。完全な騎士になるなど俺に最後の忠告を送るように。その忠告を俺は受け入れる。あの人が最後に俺にくれたものなんだから。だから俺はあいつの前だけでは騎士にはならない。

でもアルドール様相手なら別。アルドール様をアルト様のようにはしない。

アルドール様にはあの方に出来なかったことをして貰わなければならない。あの人の愛したこの国を守って貰わなければならない。俺に向けられる視線が悲しみを帯びていても、俺は……あの人に近づいてはならない。

俺はあの男とは違う。王との距離を見誤らない。無礼を裏切りを働かない。俺は忠実な僕で在り続ける。それこそが、騎士の鏡というものだ。

俺は騎士なんだ。騎士になると言うことは国に魂を売ることだ。それなら俺はもう死んでいる人間だ。死んだ人間は何も感じない。怨んだりしない、憎んだりしない、悲しんだりなんかしない。命令通り誰が相手であっても剣を振るうだけ。それが騎士だ。

何も考えられなくなる位、忙しさを塗り潰して欲しい。そんな命令が、命令が……命令が欲しい。

8 : A m a n t i u m i r a e , a m o r i s i n t e g r a t i o

6章サブヒロイン、エレイン登場。

だというのに何故か野郎共の絡みの方が強いので注意回。

女装有り、変態有り、なんでもあり。

ランスの父ちゃんのせいで本編までおかしな事になってきた。メイ
ンヒロイン登場までの辛抱。

「昨日の彼女は、— Z i r k u s z e i t (サーカス小屋)と言
う名の山賊、そのお頭にしてうら若き乙女だ」

翌日の話し合いでアロンドイト卿ヴァンウィックはそんなことを
言い出した。今のは後半部分はいらないじゃないかとアルドールは
少し思った。

「彼女はタロツク語しか理解できないようだな、あることないこ
と他の連中に吹き込まれているようなんだ」

「……レーヴェが現れたのはいつ頃なんですか？」

「元々この辺りに山賊は居たんだよ。セレスちゃん……いや、セ
レス君が北部に討伐に来ることは多々あっただろう？」

言い間違えにユーカーが叔父をぎりつと睨む。その目が寝不足そ
うに見えるのは、たぶん俺達の知らないところでトリシュとの攻防
があったからだろう。ていうかここにトリシュの姿がないのは何故
だろう。

「ユーカー、そう言えばトリシュは？」

「あの馬鹿なら問答無用殺戮血染め枕投げで沈めてやった」

「何やってんだよユーカーは……」

「だってあいつ五月蠅えし、スキンシップの一環だって言って気
絶するまで枕投げでやったんだよ。あいつはイズーを傷付けること
など出来ませんだのなんなのってやり返してこねえし。気絶した隙
に縛って適当に転がしといた」

「なのにお前は眠そうだな」

「あいつ何気に避けるの上手えんだよ。沈めるまで時間食った。」

あいつ沈める前に俺の体力尽きて気絶するかと思っただぜ」

「ああ、そつか……」

「つまりあれだな。私の弟子は最終的に息遣いの乱れるセレス君に辛抱堪らんとデレデレになり卒倒したのか」

「ああ、血染めつて鼻血だったんですか」

「あいつこの数日でほんと人生と周りの信頼の坂降りまくりだよな」

「でもユーカーなんだかんだで付き合い良いよな」

「俺はあいつは嫌いだ、あいつをいたぶるのは好きなんだよ」

「そうですね、セレスティン卿はこう見えてSっ気ありますからね」

「こう見えてってどう見てたんだてめえは」

ああ、言われてみれば。登場当初はそんな感じだったな。でもルクリースに負かされて吊されたりしてたから、すっかり忘れていた。

「セレスティン卿、トリシュさんを連れてきてください。彼にも話聞いて貰わないと困ります。同室引率者としての責務を果たしてください」

「はあ？寝惚けたあいつが何してくるかわかんねえだろ」

「それもそうか。それじゃ可愛い甥っ子のためだ。叔父さんも付いて……いや、突いて行ってあげよう」

「無理に誤変換に言い直すな。朝っぱらからセクハラ止めるよ。パー坊、お前も来てくれ。どうせこんな話聞いてもちんぷんかんぷんだろ？」

俺にいいよなと視線を送ってくるユーカー。確かにパルシヴァルはよく分かっている上に眠そうだ。俺は頷き許可を出す。イグニスも文句を言っただけだから問題はないはずだ。

「パー坊じゃないです」

「はいはい、んじゃパルシヴァル」

「はい！一緒に帰りますよ！」

アロンドイト卿ヴァンウィックは、叔父さんも連れて行ってみたいなことを叫んでいたが、ユーカーに足蹴にされて扉を閉められたところで、急に真面目な声色に戻った。

「さて、癒し系の二人が消えたところで殺伐した話に戻ろうか？」

「い、癒し系？」

パルシヴァルは解るがユーカーはどうなんだ？あれは卑しい系の食意地系じゃないのか？いやでもランスとかこの人がユーカーからかって癒されてるのは確かみたいだからアロンドイト家専用癒し係ではあるのかもしれない。

「おじさんとしてはいやらし系の方がもっと好きなんだけどね。」

この中で一番のいやらし系は実は神子様なんかじゃないかと思うんだ。その露出度の低いストイックな修道服の中にはどんなエロスが隠れ潜んでいるかと思うと興奮するね」

「ははは、アロンドイト卿は冗談がお上手ですね。本気ならこの国が落ち着いた後に僕の手下に暗殺させますよ？」

「ははは、神子様もなかなか冗談がお上手だ。不殺の聖十字を使つてなかなかいい皮肉をおっしゃる」

「神子様への無礼はほどほどにして下さい。第一誰も貴方の好みなんか聞いていません。さっさと本題に戻ってくれませんか？」

父親に向かうランスの視線も言葉も冷たく刺々しい。それにヴァンウィックは乾いた笑いを漏らして小さく溜息。

「やれやれ。まあ、つまりだな。この辺りの賊はセレス君がストレス解消相手ってことでそりゃあぎったぎたんにして来たんだ」

「でもタロツクの欲しがる物資は南部に集中しているって話だったよな、だよなイグニス？」

「都があるのも南部だしね。南部の守護は結構厚い方だったんだよ。セレストイン卿……ああ、これはユーカーのお父上の方ね。彼が失脚さえしなければもう少し渡り合えたと思うんだ。彼は酷い父親かも知れないけど、忠臣であるのは事実だからね」

シャラット侵攻により都貴族から非難を受けて軍事力と支配権を削られた。その結果が今回の敗北に繋がるのだとイグニスは言う。

「その浮いた金で都貴族達は遊んでるんだからほんと腹立たしいよね。死ねばいいのに」

「ははは、今度の神子様は過激でいらっしやる。夜の方も過激だと面白いんですがな」

「……下らないことを言う暇があればさっさと話して下さい。ユーカーが帰ってくる前に終わらせられるものは終わらせておきたいです」

下世話な話に入る度、ランスが苛立ちを顕わにする。俺の視線に気付いては、何時も通りを演じようとするけれど、苛立ちが大きすぎてそれが隠しきれていない。仮面の下からどす黒い感情が滲んできてきている。

「はあ……多少の冗談を嗜まないと女性も寄って来ないぞランス」

「国の大事に女性と遊ぶ暇などありません」

「どうしてこんな堅物になってしまったんだか。いいか息子よ。」

男で固くて喜ばれるのは性格でも意思でもなく三本目の足くらいだ

ぞ？」

「二足歩行になりたいのでしたらこのアロンドイトで切り落とすて差し上げましょうか？」

「ははは、それは遠慮したいな。生憎私はそういう趣味はないんだよ」

笑顔で得物に手を掛けたランスにヴァンウィックは目を逸らした。こうして見ると本当、似てるのは顔だけなんだなと感慨深い。

「さて、何の話だったかな」

「南部と北部の警備の話ですよ」

イグニスの助言を受け、ヴァンウィックはああと頷いた。

「神子様言うように、南部はカーネフェルにとって要所だ。だからそれなりに警備も置いている。だから略奪者の数で言えば、被害は北部の方が多いんだ」

地図に印を付けて、沿岸に丸。山脈にも丸。そして数値を書き込んでいくヴァンウィック。北部と南部のその差は歴然。

「南北を繋ぐ橋の周りには、北部に積み荷が運ばれるのを待ち受ける者がいる。あの山賊達の居城は丁度いい場所なんだ。レーヴェが現れたのは、ここ1、2年のことだ。それまでこの一帯は山賊同士勢力争いをしている狩り場で……それをまとめ上げたのがあの可憐な少女というわけだ」

「しかし噂は聞いてもお頭自身山から下りてくることは少ない。だから昨日のはとても珍しいことだ」

「それなのにどうして噂が？」

「レーヴェは気紛れだがとんでもなく強い。それは実際戦ったお前が一番よく知っているだろう。その手は暫く使い物にならないはずだ」

「……………見てびつて貰っては困ります。俺だって数術使いだ。あの程度の痺れ、もう消えました」

「え！？ランス怪我してたのか！？大丈夫?!」

「心配ありませんアルドール様。もう完治しました」

にこりと笑って手を見せるランス。確かに怪我は見られない。

「彼女は女とは……………人間とは思えない怪力でした。この剣だから刃こぼれしませんでしたか……………迂闊にやりあえばアロンダイトも折られていたかもしれない。鬼と噂されるのも理解しました」

彼女は短剣。それでもそこまで力を込めてきていたのだと言う。俺はランスが劣勢だったのは地の利と怒りの所為だと思っていた。しかし、それだけではなかったのだ。

「ランス様より下位カードということはアルドールはまず無理。やり合うなら僕がセレストイン卿かパルシヴァル君つてことになりそう」

「……………そう、ですね」

イグニスの言葉に少しランスが悔しそうに呻いた。

「でもまだ見習い騎士も同然のパルシヴァル君が現役山賊とやり合えるかは難しい。となれば僕と彼でやるしかなくなる」

「あのさいグニス」

「何？」

「でもさ、ユーカーは北部に何回も討伐に来てたんだろ？レーヴ

「エとやりあったことってないのか？」

昨日の様子だと顔見知りという感じは全くしなかった。それでも手下達とぶつかったことくらいはありそうなものだ。

「アルドル様。討伐任務をしていた頃のあいつはとても荒れていたんです。山賊さえ震え上がるよう、手加減無しで片っ端から殺していたんですよ」

「ゆ、ユーカーが？」

ちよつと信じられない。ユーカーはなんだかんだで甘いから、半殺し程度で済ませてそんな印象があった。

「そんな事が続けば山賊側からは目撃者無し。それでも住人達の噂を聞き、セレスタインの名くらいは知ったんだろうね」

互いに名と評判は聞きながら、遭遇したことがないユーカーとレィヴェ。そんな二人が真つ向勝負をしたならば、どんな結果になるのだろうか。

（でもランスが押されてた相手だ。ユーカーに何とか出来るとは思わないんだけどなあ……）

ランスが戦ったところを見たのは昨日が初めてだけど、剣の扱い方からしても騎士としてはユーカーよりランスの方が上だと思う。

そんな俺の表情に気付いたのか、ヴァンウィックは苦笑する。

「ここだけの話、セレス君は夜は凄く強い。普段の三倍くらいはやり手になる」

「え？」

「何故だか知らないが、彼は夜襲をことごとく返り討ちに出来る技量がある。だからセレスタインの名を聞いて夜に襲ってくる馬鹿はいない。任務でこの付近を通る時、彼は夜間の内に通るようになっていたんだろう」

そうか。ユーカーは片目を隠しているが、別に視力を失っている訳じゃない。片目を夜目に慣らしているのだ。他にも何かあるのかもしれないが、よくはわからない。よくわからないがユーカーは暗いところの方が強いらしい。

だから一昨日は見張りを買って出てくれたのだろうか？見張りの交代を彼が他の騎士に頼んだのは早朝になってからだったと思う。

「その噂が一人歩きして、あの辺ではセレスタインと唱えれば山賊が寄つて来ないとまで言われています」

「でも昨日山賊達の前でイグニス、セレスタインって口にしてなかった……？」

「毒に倒れてへばってるような本物だと思うわけじゃないか。向こうのイメージでのセレスタイン卿はあんなちびでもないし屈強な猛者みたいな先入観があるんだよきつと」

「なるほど……」

「昨日のはアロンダイト卿の噂の方を恐れての撤退だったようですね」

「ははは、私などあの甥っ子に比べれば大したことはありませんよ。捕らえた山賊は私ルートに入って朝チユン迎えるだとか18禁通り越して180禁くらいのことをされるだとかもう昨日までのようには生きられないとか色々言われていますがね」

それは確かに怖いと思う。実際この人昨日も片っ端から口説いていたしユーカーよりも現実味に溢れている。

「だから北部は嫌いなんだ……」

ランスが遠い目をしている。北部でアロンドイトを名乗るとそういう目で見られると。南部じゃ騎士様騎士様ってあんなに人気なのに……お父さんがこんなのだってだけでランスも可哀想なことになっているらしい。

「でも……それっておかしくありませんか？討伐ではなく、ユーカーにも避けさせるなんて」

「あいての技量が解らない以上下手に軍勢も向けられません。かといってあいつ一人でどこまでやり合えるかもわからない。被害を最小限に留めるには最善かと」

先王の判断に異論を唱える俺に、ランスがその説明をしてくれた。

「僕もランス様の意見には同意ですね。アルドル、今はあそこを無事に切り抜けられただけでも良かったと思つてよ。今は山賊退治より先にやるべき事がある」

「やるべき事？」

イグニスはそう言うが、俺にはわからない。北部に来たものの、ここからどうすればいいのかまるで見えない。

「僕らは都を取り戻すために、まずは北部の結束を固めなければならぬ。そのためにはアロンドイト卿のお力添えは必要不可欠。協力していただけますよね？」

「都には私も忘れ物がありましたな。そうですね喜んで」

アロンドイト卿のその言葉から、しばらくはアロンドイト領に身を預け、そこから北部をまとめていくという方向に決まった。

「あの山賊のことが気になりますか？」

まだ前の話題を引き摺っている俺に、ヴァンウィックが尋ねて来る。

「レーヴェが居ることで、賊は一種の節度を守っている方ですよ。彼女はまだ子だ。だからそこまであくどいことを思いつかないんだろう。一時期より被害は収まったものだ。彼女があそこにいることで北部への海賊被害が減ったことは確かです」

「だから王は彼女には手を出すなと？」

「ええ。そういうことです」

頷いた後、ヴァンウィックは小さく微笑を浮かべる。あくどい笑みだ。

「それに昨日はあっちこっちで北部にセレス君が来たことを言いふらして来ましたからね」

「ランスっ！匿ってくれ！」

「ユーカー！？」

ヴァンウィックが言い終わるか否かのところで室内に飛び込んでくるユーカー。その後ろからは歓声めいた声が聞こえる。

「なんなんだあれ！何なんだよあれ！！おっさんてめえ何しやがった！！」

「こつ見えてセレス君は北部では人気があるんだよ。君が滞在する場所は賊に襲われないからね。あと女装祭りでの君の武勇伝を尾鱗を付けて話してあげたところ、妙なファンも付いてな」

「尾鱗付けんっ！！！！歓声の半分が野太い声ってどういうこと

だ！！」

「いやいや、君は良い客寄せパンダ……げほん、兵寄せパンダだな。男の少ないと言われているこのカーネフェルからあれだけの支持者を集めるとは。家で死ぬのを待とうとしていた老人も、布団を被って震えていた中年層も君に一目会いたくてこれだけ書類を集めてくれたんだぞ？」

「こ、これって……」

「私も唯北部を遊び歩いていただけではありません。女を時に男を口説く傍ら、兵の志願を募っていたんですよアルドール様」

分厚い書類の山を俺とイグニスの前に叩き出すアロンダイト卿ヴァンウィック。そこには老若男女の名前が書き連ねられていた。

そのどや顔は格好良く見えるが、ユーカー苛めもここまで来たか。親子揃ってまあ鬼畜。

「ランスの持っていた幻のセレスちゃんの一枚を、最後の帰郷の際に奪っておいて、それを複製して配ったんだがこれがかかなり反応良くてね。カーネフェルの女から失われた清楚さがそこにはあると人気者だよセレス君」

「野郎にモテても嬉しくねえっ！！っかランス！あの時のか！あれは捨てるって！捨てたって言ったじゃねえか！！」

「初出場で優勝まで輝いた女装祭りでのお前の雄姿じゃないか。そんな捨てるなんて勿体ない。ゴミ箱に捨てたのをアルト様が拾ってきて下さったんだ！言うなればあれはお前だけではなくあの方との思い出でもある俺の宝物だ！」

「っていうかアルトのおっさんまで……！！どうしてはそんなにランスに甘いんだっ！！俺をからかうのが楽しかったのか！？酷えっ！！」

「ちゃんとアルバムに入れて保管して持ち歩いていたのに……いつの間にか最盛期の一冊が消えたと思ったら！！貴方が盗んでいた

んですね！？返して下さい！！」

「返して欲しくば“お父様愛しています大好き”の後にほっぺにちゅーを所望する」

「よし、頼んだユーカー」

「なんで俺が代役なんだよ！？」

「元はと言えばお前の写真じゃないか」

ぼんと肩を叩かれて、ほら行けよと視線で促されるユーカー。ほんとランスはユーカー相手だと素で鬼畜入るなあ。

「うう、嫌だ。死ぬほど嫌だあ……」

「そうだなあ。そのままでは君も恥ずかしいだろう。それでは女装してきてくれても構わないぞ？」

「もつと嫌だ！！」

半泣きになってヴァンウィックに噛み付くユーカー。そんな彼に跪き、レースのハンカチを差し出し、にこりと優しく微笑むのはトリシュ。

「わかりました、愛しのイズーのためです。私がやりましょう」

「と、トリシュ！？」

「見ていて下さい愛しのイズー。このトリシュ＝ブランシュの生き様を！！」

おお。初めてユーカーがトリシュを見直したみたいな目で見ている。今のは好感度が1位は上がったんじゃないのか？

「というわけで師匠。僭越ながらやらせていただきますが、私にもその幻の一枚、いえアルバムごと譲って下さい」

「やっばてめえも俺の敵だっ！！信じた俺が馬鹿だった！！」

*

窓の外の群衆は本当に凄い数だ。宿の外では更に志願者と書類が増えていく。

「い、いやでも凄いよユーカー」

「褒めたって何も出ねえからな」

ユーカーはすっかりふて腐れている。そりゃそうだ。客寄せパンダよろしく、また女装させられたのだ。向こうからはこっちの声が聞こえない。だから恥ずかしそうにしてる所やふて腐れている様も女装姿だと僂げとか物憂げに映るから不思議だ。これはユーカーなのに。

「でも別に女装の力だけでもないんだろ？ユーカーが北部で頑張ってたから、みんなお前を信じて頼って来てくれたんじゃないか」

「……んなの重いだけだ、俺は最悪この国捨てるつもりだったってのに」

どうして俺なんかにしがみついてくるんだよと、ユーカーは本当に嫌そうに溜息を吐く。それすら窓の外からは違った風に映るらしく、国の行く末を憂う切なげな眼差しとかそういう解釈がなされているようだ。

「俺にはもう……あいつ以外守るものなんか……」

「ユーカー……」

俯くユーカーに俺が言葉を無くしたその時。扉を開けて室内に入ってくるイグニス。

「セレストイン卿、貴方にお客様ですよ」

「次は何させようってんだよ……」

嫌々後ろを振り向くユーカー。その動きがそこで止まった。

「お帰りなさいませ！セレス様！」

「よくぞご無事で……！」

「お、お前ら……」

室内に流れてきたのは、二人の女性兵士。ユーカーの前に跪き、報告をと口を開いた。

「……数は減りました。それでもセレス様の留守を預かるうと今日まで戦って参りました」

「お噂を聞き、ここまで参った次第です」

橋を壊した時に、ユーカーは全員死んだと言っていた。しかし、そうではなかったのだ。涙を浮かべるユーカーに彼女たちは不敵に笑う。

「勝手に殺さないで下さいよ。そんな簡単に死にませんよ。セレス様の部下ですから」

「逃げることとしぶとさには自信があります」

「おや、そう言えば言い忘れていたな。すまないすまない」

女兵士達の後ろから現れたヴァンウィックがわざとらしい笑みを浮かべる。

「彼女たちは北部でザビル河沿いの警備に当たってくれている。」

タロツクはこの北部に二分し滞在しているからね」

これから南部に渡ろうと河の前で立ち往生している者。それから北部に居座り北部の支配を固めようとしている者。

言われてみればここまで、北部のタロツク軍については何も聞いていなかった。南部へ向かうため北部は通り過ぎるだけの者が多かったとは聞いていたが……都が落とされた今、無理に河を越える必要はない。北部の足場を固めるため、また北上して来る者も出てくる。ヴァンウィックはそう言った。

「敵が今居る場所は解りますか？」

「ええ。アロングイト領より北。今捨て置かれた古城を奴らは陣取っています」

「それじゃあ河を渡るのを諦めて……南と北から攻められたら」「今度こそ背水の陣だね」

イグニスという言葉に俺もユーカーも息を呑む。だけどイグニスは違う。そこで不敵な笑みを浮かべた。

「でも、だからこそその双陸だよ」

地図の上で都を指さして、イグニスはにたりと笑う。

「教会から入った情報だ。双陸は都の法整備の他、橋の建設計画を打ち出した。北部の支配を行うためにも、物資を送るためにも橋は必要だからね」

双陸は人格者だ。彼に支配させること、それがカーネフェルにとって良い方向へと変わってくれる。彼が北部の人々を兵をそのままには出来ない、見越してのイグニスの策。彼のその正しさが、背

水の陣を打ち破る。

都を落とすのが彼の役目。落とした以上、それ以上の被害を望まない。新たな命がタロツク王から下らない限り、彼は敵だが敵じゃない。

「だからザビル河流域に駐屯している奴らは北上しない。南と北から建設作業を行い、短期間で橋の修繕を考えるはずだ。僕は橋が完成するまで待って、その間に北部の支配を進めよう。兵達の訓練もその間でどこまでやれるか解らないけどやるしかない」

「唯、セレスティン卿が会ったタロツク王。彼がこの北部にいるかの所為もまた否定できない。その古城には彼がいる可能性もある。油断は禁物だよ」

まず討つべきはエルスⅡザインだと、イグニスが口にする。狂王と双陸の間の情報の運び手。そこを断ち切らなければ駄目なんだとは、彼が再三言ってきたこと。

「……んじゃアロンドイト領で、その古城とやり合う。そこからまず北の敵をやつつける。そこで一緒にエルスⅡザインの野郎をとちめる。そう言うこつたな」

「言うのは簡単ですがね……」

「カードとしては狂王もAなんだろう？幸福値の差なら……俺なら余裕で殺せはする。そういうことだよな？」

「理論上はそうです。ですが、王の所まで簡単に辿り着けるとは思いません。いずれにせよ、簡単な仕事ではありませんね」

やる気を取り戻したユーカーの言葉を、遮るイグニスは何かの不安を感じているようだった。

「でもとりあえずはアロンダイト領に向かう。それで間違いはないんだよな？」

「……まあね」

俺がそう言うと、イグニスはとりあえずは頷いてくれた。

「セレストイン卿のお陰で、北部の人はアルドールにもそこまで反感はないみたいだよ。あのセレストイン卿が仕える人だって」

「別に仕えてはいねえけどな。仕方ねえから表向きはそう言うことにしてやるよ。カーネフェルとランスのためだ」

部下の無事を知ってか、ユーカーもほんの少しこの国に未練を取り戻してくれたらしい。だからいつもより俺への風当たりも冷たくない。

次第に日も暮れ……外の人垣も収まってきた。この街だけでも志願兵もかなりの数が集まった。後は明日……アロンダイト領に向けて旅立つだけ。

狂王とやり合うかも知れない。そう思うと脅える気持ちは、不安は俺にもあるけれど。イグニスが不安がっている、こんな時くらい俺がしっかりしなきゃ。俺がイグニスを安心させてやれるような……そんな、立派な王に。

緊張を和らげるため深呼吸を俺が始めた時……廊下を駆ける慌ただしい足音。そして室内に飛び込んできたのはこれまで見たことが無いような危機迫る顔したランス。

「ユーカーあああああああああ！」

「う、うあ！な、何だよランス！？」

「匿ってくれ！頼む！」

匿う？そう言いながらランスがしたことは、何故か女装ユーカー、

セレスちゃんに思いきり抱き付くことだった。

いきなり尊敬する従兄に抱き付かれて目を白黒させているユーカ
ーは、しどろもどろになりながら、今の状況を分析している。

「は？お前まで何か……？確かにお前は人気あつけど叔父さんが
はっちやけ過ぎてるせいで、北部じゃそこまで……」

「そうじゃないんだ！」

「ラ・ン・ス様ああああああああああああああああああああ
ああああああ」

その声は、甲高い。幼い女の子の物だ。そしてその台詞全体的に
ハートマークというか好意が思いきり乗せられている。

「き、来た！彼女が来たんだよ！！うちの領地からっ！！」

「あ、あの声まさか……」

その声に脅える騎士二人。目を見合わせて、ほぼ同時に頷いた。

「解ってくれたか。頼んだぞ、俺に合わせてくれ」

「くそっ……」

舌打ちし、ユーカーは眼帯を右から左に付け替える。それが済む
と同時に、ランスが鍵を掛けた扉が開けられた。

「嫌ですわぁランス様だったらぁ！お帰りになられたのなら恥ずか
しがらずに私の所へ来て下されば良いのに」

「や、やぁ……久しぶりだねエレイン」

金の髪に青い瞳。その青はユーカーのそれよりもずっと濃いがラ
ンスよりは大分明るい。それでも美しい金髪だ。彼女も恐らく真純

血。巻き毛の髪をリボンで結び、可憐なドレスに身を包む……明るい笑顔の素敵なお嬢様。フローリップと同じくらいの年だろうか？

俺がフローリップを恋愛対象に思えなかったように、ランスも彼女をそんな風には見られないようで、熱い視線を送られても全く嬉しそうではない。

「あら？セレスお兄様は？お二人が一緒ではないなんて珍しいこともあるものですね。……というか噂ではこの街にセレスお兄様もいらしたとお聞きしたのですけど？」

この子がエレイン♡シャラット？彼女は確かユーカーの婚約者アスタロットさんの妹。だから彼を義兄と呼ぶのか。もしこの二組の男女の婚約が上手く行っていたならランスとユーカーの関係がまたややこしいことになっていたのか。

「まあ、どうでもいいですわ。お兄様がいないのなら私とランス様が二人つきりということですよものね？」

うわ、この子凄。俺とイグニスとランスの父さんスルーした。存在そのものをデリートしに来た。

「ら、ランス様！何をなさってるんですか！？」

そしてセレスちゃんも今まで眼中に入っていなかったのか。言われてみれば彼女はさつきからずっとランスの顔だけロックオン。未だに顔ばかりを見ている気がする。

「婚約者の私というものがありません……この泥棒猫っ！売女！私のランス様から離れなさい！！」

そしてその過激な暴言。お嬢様の割りに気性が荒いなこの子。シヤラット領で見たアスタロットさんとは全く違う。

ユーカーの背中をぼかすか殴るその少女の攻撃からユーカーもといセレスちゃんを庇うよう抱きかかえるランス。

「な、何故そのような雌豚を庇うんですかランス様!!」

「言うなあ……あの子」

「……………」

乾いた笑いを漏らす俺の横で、イグニスはなんだか微妙な顔をしている。

「あれ?どうかした?イグニス?」

「いや、何でもないよ」

毒舌家のイグニスがこんなに吃驚?するなんて。自分と似たタイプの人間が苦手ってことなんだろうか?

「すまないエレイン。俺は君とは結婚できない」

「どうしてですか!?ランス様がお帰り下さらなかったこの三年間!エレインは女を磨いてきましたのよ!?小柄身体!華奢な肢体!マニアには堪らないこの胸囲!ランス様に相応しい女になりますよ!」

「それまだまだ子供って事じゃないのかな……?俺はマニアでもないし、君のような年下の女の子と結婚だなんて出来ないよ」

「エレインは、もう年だって二桁になりましたもの!何時でも結婚出来ますわ!そんな女と遊ばなくとも私が満足させて差し上げます!」

「そうじゃない……そうじゃないんだ」

子供だからそういう風に思えないっていう断り文句じゃ通じない。それを予測してのランスの行動。

「俺が君と結婚できないのは……この子を愛してしまったからなんだ！」

「っ!?!」

セレスちゃんが口をばくばくさせながら身体を震わせている。話を合わせるには言ったがここまでドストレートな手法で来るとは思っていなかったわけでもないだろうに動揺している。顔が真っ赤だ。

「信用できません」

しかしエレインはランスの言葉を真っ向から否定。

「その様子じゃそっちの女の方はランス様に惚れているようですが、ランス様がその子を愛しているようには見えませんわ。所詮口だけです。私にそのような嘘が通じるとでも思ってたっしやるの?」

惚れてねえよというユーカーの心の叫びが俺の元まで届いてくる。頑張れユーカー。見る分には楽しいよ！親指を立てて頑張れよーと心の中で声援を送ったら涙目で睨まれた。女装中だからあんまり怖くない。むしろ怖さが減るからいっつも女装してくれてればいいのに。

イグニスはいグニスでユーカーが面倒事に巻き込まれているのが面白いのか、いつもの余裕を取り戻し、失笑しながら彼を見下している。

ランスの父さんアロンダイト卿ヴァンウィックは最初こそ神妙な

顔をしていたけれど、今はイグニスと同様、若い三人を見つめてにたにたしている。

「そうだぞ馬鹿息子。愛は言葉より行為。そんな言葉誰でも言える」

そして悪ノリし出した。これはランスへの嫌がらせなのかユーカへの嫌がらせなのかはたまた二人への愛なのかはよく分からない。

「いえいえアロンダイト卿。言葉は言葉。愛の一步も百里の道も言葉から。エロスは行為、愛は言葉に宿るものかと」

「イグニス!？」

イグニスまでイグニスらしかぬ変なことを言い出した。

(まさかこれって……)

二人を實際飲み会のノリで何かをさせて苛めたいヴァンウィックと、言葉攻めの羞恥プレイをさせたいイグニス。二人とも酷いけど、酷い同士で対立している。

「エレイン、君はこの馬鹿息子がこのお嬢さんにあんなことやらこんなことまでいかないにしてもキスくらいは見せてくれないと納得出来ないんじゃないかい？」

「いえいえ、婚約者の方を蹴るくらいなんですから、求婚の言葉辺りを言えるかどうかは鍵ではないですか？」

いや、違う。この二人、共闘している！極論二つを押しつけて選択肢二つのどちらかから無理矢理選ばせようとしている。どちらに転んでもそれなりに楽しめるランス父に、ユーカーの嫌がる所が見

られるイグニス。

「……わかりました。それで俺のことは諦めてくれるんだね？」

解るな馬鹿！とか思ってたそうだなユーカー。ランスは本当何とも思ってた無さそうだ。野良犬に舐められるというか野良犬を舐めるって言うか飼い犬って言うか。何とも思ってた無さそうだからこそユーカーの独り相撲が可哀想だ。動揺したり緊張したり嫌がったり嫌がったりして相手が傷つかないだろうとか考えてるの彼だけだ。ランスは精霊に育てられたから、色々と浮世離れしてるのかもしれない。しかしユーカーはそうもいかない。アスタロットさんの一件もある。

(嫌だ！何もそこまでしてやる必要ねえだろ？)

(しかし今後の面倒事を避けるためには。北部にいる間中ずっと彼女に突進される俺に身にもなってくれ)

(ふ、ファーストがお前とかになりそうな俺の身にもなってくれ！)

(挨拶みたいなものじゃないか)

(場所がちげーよ！！っていうかお前はあんのかよこんなん……)

(俺は母さんにされたことある。精霊の世界では挨拶なんだって話だった)

(あ、あの精霊……何処まで俗世に染まってんだ)

俺、数術使いじゃないのに大体二人が小声で言い争っていることが伝わってくる。そこまでエレインと言う子は解らないようだが、二人が揉めているのは解ったらしい。

「……そのご様子だと、やはりランス様はその方のことを何とも思っていないんじゃないかな……」

皮肉を口にした少女が固まる。それを見た俺が視線を其方へ向ければ、俺も固まる。そしてその先でセレスちゃんも石化していた。俺の隣で咳き込むほど笑っているイグニス。そして景気よくシャッターを押すヴァンウィック。

「イズーちゃん！もつと色っぽく！目付きは悩ましげに！そう！いいよ！その調子だ！馬鹿息子！そこで舌をだな！顎に添えた手で下唇を撫でて！片手は腰へ！そうだ！お前もやれば出来るじゃないか！」

もう一回石化で意識が飛んで、自棄になっているセレスちゃんはノリノリだ。どうにでもなれという捨て身のテンションだ。

「いや、いい絵が撮れた。これならカーネフェルの腐ったお姉さん達を軍に引き摺り込むのも手堅い」

「やりましたねアロンダイト卿」

イグニスとヴァンウィックはがしと固い握手を交わしている。…これ、募兵のためだったんだ。国のため何て言われればそりゃあランスだってやる気出すよね。あの人カーネフェル大好きだから。でもあれの最中って息できるのかな。鼻で息するのかな。俺腹式呼吸苦手なんだよ。みたいな感じ半狂乱なユーカーも怪しい。その内酸欠起こしそうだ。

俺がそんなことをぼんやりと考えていると、引き千切られたドアノブに疑問を浮かべるトリシュが現れた。

「神子様、書類は向こうの部屋に移しておきました。そして今日はお疲れ様でしたイズー……」

無論、絶句。その手が両肩がわなわなと震えている。

「ば、僕を裏切ったなランスつつつつ！！僕のイスーに手を出すなんてっ！！決闘だ！決闘を申し込む！！」

「セレスさん！夕飯の前に一緒にお風呂に……」

得物を手に泣き喚くトリシュ。その背後からひょこつと顔を出したのはパルシヴァル。

「……セレス？……まさか、貴女、ユーカーお兄様！？」

目の前の光景の真実に、石化が解けるエレイン。

「ふ、不道德！不潔ですわお兄様！ランス様！と、殿方同士がそんな……そんなっ！」

「エレイン、法的には問題ないよ、従兄弟は結婚出来るじゃないか」

「野郎は出来ねえよ」

妙なボケを発するランスにユーカーがツッコミを入れる。ツッコミすることで平常心を取り戻しているようだ。でもうつすら涙目だ。

「どれどれ、可哀想なお嬢さんは未来のお父さんが慰めてあげよう。ほら、あの馬鹿息子そっくりの顔だよー」

「私はそこまで安い女ではございませんわ！」

抱き付こうとしたヴァンウィックを近くに立てかけてあったモップで撃退する少女。しっかり汚れの付いている箒部分で顔を狙うという見事な技だ。

「どういっことですのお兄様！お姉様がお亡くなりになったから

つて、今度は殿方に走るつもりですよ!？」

「ご、誤解だエレイン!」

「元々お二人は妙に仲良しだと思っただけで、勝手にそう思ったらそういっていいんですよ!？」

「ああ、実はそうだったんだ。だから諦めてくれ」

「お前なあ!この期に及んでまだ言うか!？」

あくまでしらばっくれる気であるランスは父親とは違う意味で質が悪い。しかしそれに釣られる奴が一人だけ居た。

「決闘だランス!もはや君は僕の友ではないっ!!僕の最愛の人の純潔を汚すとは!!!」

ユーカーには似合わないような形容詞の羅列にとっとうイグニスが発作寸前まで笑い転げている。

「セレスさん、早くお風呂行かないと夕飯の時間なっちゃいますよ」

「もう嫌だこいつら。うつつ……行こうぜパルシヴァル」

「はい!」

「お前は本当可愛いな。あいつらみてえな変な騎士にはなるなよ」

「イズー!わ、私も……いえ僕も一緒にッ……」

「てめーは決闘なんだろ。頑張れよ」

てめえは付いてくるなとユーカーが決闘を盾に持つ。それでも嘘でも頑張れと言われれば頑張るしかないのが彼の悲しい性だ。

「……で?どうするんだトリシユ?」

「け、決闘だ!!!」

「よし。それじゃあ外でやろうか。室内じゃ宿に迷惑だ」

「ら、ランス様！そうやってうやむやにしてまた逃げるおつもり
ですのね！！お待ちになって！！」

ランスとトリシュ、それからエレインが消え、室内は随分と静か
になった。残されたのは俺とイグニス、それからヴァンウィックの
三人だけ。

イグニスは特殊な身の上だから男湯にも女湯にも入れない。後か
ら夜中に借りることになるんだろう。俺は俺であんまり人前で肌を
晒したくない。イグニスとユーカーにはシャラット領での治療の時
に見られたから仕方がないとして、他の人達に傷を見られるのは抵
抗がある。となると夕飯まで暇だ。

「それでは私も食事の前に風呂に行つてきます。失礼」

鼻歌を歌いながら出て行く中年騎士。ユーカーが居るから大丈夫
だとは思うが、あれはパルシヴァル狙いだろうか。やっぱり止める
べきだろうか。

「どうする、イグニス？」

「そうだね……確かに中途半端な時間だね」

「それじゃ、街でも見に行こう！よく考えたら昨日着いたのは遅
かったし、昼間は忙しかったしあんまりこの街回れてないよな」

「ここはどんな街なんだろう。昨日夕飯を食べた店くらいしか俺は
知らない。見聞を広めるには良い機会だ。」

「……確かにね。それじゃあそうしようか」

「やった！んじゃ行こうぜ！」

つい昔のように気軽にイグニスの手を引いて、宿を出て、街の中

を歩いて……呼び止められるまで俺は気付かなかった。

「そこのお二人さん」

占い師だろうか。道に座った老婆に声を掛けられる。

「微笑ましいねえ。デートかい？」

「え？」

イグニスには外見だけならどつちにでも見える。口調で男だと気付くが、喋らなければ話は別だ。修道服も見ようによつてはスカートだ。スカート補正で知らない人から見れば女の子に見えるのかも知れない。ってというか女の子だし。

「14、5にもなつて男友達が仲良く手なんか繋ぐわけないだろ、馬鹿」

イグニスに睨まれる。

イグニスの外見だけではなく俺の軽率な行動がその勘違いを引き起こしたのだと彼女は言う。見れば少しイグニスの頬が赤い。嫌だったのか。そうだよな。こんな恥ずかしいよな。俺は何て馬鹿なことを。イグニスと二人で出かけられると思つて嬉しくて……つい、はしゃいでしまった。

「ご、ごめんイグニス！」

俺は急いで手を離す。イグニスの手は相変わらず冷たいけど、俺の手が熱かったのか、それで彼女の手も温まり、俺に返ってくる温もりは暖かだった。

「あらあら。照れ屋さんだねえ彼女は」

下手に否定をするとややこしくなるだけだとイグニスは無言。でも俺と視線を合わせてくれない。

「それじゃあ二人が仲直りできるように私が何か占ってあげようかねえ。いや、お代は結構だよ。私の所為で二人が喧嘩してしまったんだものね」

手相を。そう言われ俺は、利き手にカードの紋章が刻まれていることに気付く。右手は出せない。左手を出す俺に、老婆は不思議そうな顔をする。

「俺、両利きなんです」

でも本当は左利きだと言って手を見て貰った。だから色々見当違いのことを言われてちよつと笑えた。

「あら、生命線長いわねえ。貴方長生きするわよ」

「ははは、そうですか」

出来るわけ無いよ。俺はカードだし。頭の中に浮かんでくる。幾つもの死の場面。姉さん……ルクリース、フローリプ。みんな、死んでしまった。今俺の傍にいる人達だってカードばかり。いつか死んでしまう。殺される。そんなの嫌だ。守りたい。死なせない。死なせたくない。だけど最弱の俺に一体何が出来る？

俯いた俺を伺うイグニス。俺を心配してくれているようだ。

「すみませんが僕は占いを信じませんので」

イグニスには右も左も老婆に見せず、俺の手を掴んでその場を後にする。立ち去る間際老婆に笑いかけたイグニス。その顔を見て、老婆が蒼白の面持ちになったのが少し不気味だった。まるで、死相が出ているわと言わんばかりのその顔が……

「アルドール」

「な、何？」

「僕アイス食べたい。買ってきて。五秒以内に」

「五秒は無理っ！」

「それじゃあ一分待つてあげる。シャーベットとクリーム系のダブルね。勿論君の奢りで」

ベンチに腰を下ろし、近くの屋台を指さすイグニス。その命令に何故か逆らえなくて俺は走り出す。

「か、買って来ました」

「うん、ご苦労」

俺の手からご所望の品を奪い、イグニスはぱくついた。そして俺に小銭を渡す。

「物欲しそうに僕の見られても困るし、買ってきなよ君の分」

何だかんだ言ってやっぱりイグニスは優しい。俺は笑って頷きもう一度屋台に走る。

「あ！すみませんお姉さん！俺このクッキー&クリームにそれから洋梨のシャーベット！」

「申し訳ありませんがお客様、其方の代金ですとシングルになります」

ベンチでイグニスがくすくす笑っている。や、やられたあつ！イグニスが、あの守銭奴イグニスがダブル料金など俺にくれるはずもなかった！

俺は苦笑し自分の財布から追加料金を支払う。しかしベンチに戻った俺を、イグニスは冷たい視線を溜息で迎える。

「……君って気が利かないよね。どうして僕と同じのにするかな」「いや、イグニスが美味そうに食べるからその味当たりだったのかなって」

「意地汚いなあ元貴族の癖に。君が同じのにしたら僕が他の種類を味見出来ないじゃないか」

「ええええ！？俺の奪うの前提！？」

「文句ある？」

「ありません」

ああ、やっぱりイグニスはイグニスだなあ。こういう所を見ると本当にそう思う。

苦笑しながら隣に腰を下ろす。そんな俺に目を瞬かせ、疑問符浮かべたイグニス。

「……何？」

「俺、イグニスと友達になれて良かったよ」

イグニスが何であっても、俺の親友はこのイグニスだ。それは揺るがない。俺はこうしてイグニスと話をするのが好きなんだ。もう二度とこんな事出来ないかもと恐れていた二年。それに比べれば今は、夢のよう。

だけどイグニスが居るのに、悲しい気持ちが浮かんでくるのは……俺も変わってしまったから。きつとそうだ。イグニスとギメルだ

けが大切だった俺ではなくなった。

「なにさ、突然……」

「なんていうかさ。ありがとう、傍にいてくれて」

ルクリースが死んでから、イグニスとは俺から距離を置いた。俺がイグニスにこれ以上依存するのを恐れてだろう。だけどフローリプを亡くしてから……イグニスは俺から離れずに、傍にいてくれる。俺がここまで歩いてこられたのは、平気な振りが出来たのは……イグニスがここにいてくれたからだろう。

「本当はイグニス、シャトランジアに帰って国をまとめなきゃならなかったんだろ？それをこんな所まで付き合わせて……悪いと思う」

何時も俺がイグニスに頼ってばかりで情けない。イグニスがシャトランジアが安心して頼って来られるような俺に、カーネフェルにしたいと思う。

「君が頼りないからだよ」

「うっ……」

「でも……頑張ってるのは解ってる。君はちゃんと周りの人を見てあげてるね。セレスティン卿のこと、ランス様のこと。そうやって少しずつ背負うものを増やして……大事な物を増やしていく。それが王に一番必要なことだよアルドール」

「君はこの国が好きかい？」

「まだよく分からないよ。だけど……」

俺を守るために死んだ人がいる。俺はだからここから逃げたりはしない。俺はカーネフェル王。殺されるその日まで、そこから逃げない。それだけは俺を守ってくれた三人の俺の家族のためにもしてはならないことだ。

(それに……)

ユーカーが悲しんでいて、ランスが苦しんでいる。俺は二人にとって先代のアルト王のようにはなれないけれど、それに代わる場所を探して行きたい。

都を捨てるなんて無謀な策に乗っかってここまで来てくれたのだ。それに報いてやりたいと思う。

「ランスが、ユーカーが……必死になって守ろうとした場所なんだ。取り戻してやりたいと思う。あいつらの……カーネフェルを」

「……気に入ったんだ。彼らのこと」

イグニスに珍しく穏やかな笑みで俺を見る。

「そりゃあユーカーには世話になったし、ランスも俺の力になってくれてるし。俺も何か出来たらって思うんだ」

「まあ王様って言っても多少はそういう謙虚な思いは大事だね」

イグニスがうんうんと頷く。

「まあ、セレストイン卿が気になるのは解るよ。君は人が弱ったところを見せると気にしてしまう所がある」

シャラット領でのユーカーを見たことで、親身に感じてしまっているのだとイグニスは言う。確かにそうかもしれない。ユーカーの

弱さを見て、そこに好感を覚えたのは確かだ。

「ユーカーはさ、俺とは違って必死に生きてるって感じがして、気がつくで見ちゃってる」

「それじゃあランス様は？」

ランスは……。そう言われて昨日のことを思い出す。意地でも俺に頼らない。寄り掛からない強情な人。俺は唯の人間なのに、そこまで崇めなくて良いのに。俺との距離を彼は欲しがる。俺はもつと彼に近づきたいのに。

「ランスはさ……。俺より何でも上手に出来るのに、昔の俺みたいに見えて……。ちょっと心配なんだ」

人形は、人の心が解らない。だから人を傷付けてしまったり、人に傷付けられたりする。その内、嬉しいことも悲しいことも解らなくなつて……。本当の人形になる。

「俺は……。ランスには……。俺にとってのイグニスになりたい」

「……。何それ？」

「イグニスは俺の前で怒ったり泣いたりしてくれた」

ギメルが俺にくれたのは優しく温かい感情で、イグニスが俺にくれたのはいつだって激しい感情だった。

「ユーカーは、ちょっと違うけどランスにとってのギメルなんだよ。だからランスも少しは解ってるんだ、人の心が」

ユーカーがランスの癒しなのは、ユーカーがランスを傷付けるよくなことは言わないからだ。だから居心地が良い。だからランスも

ユーカーを気に入っている。

「だけどユーカーは逃げるだろ？ランスに嫌われたくないから決定打になるようなことは言わない。ああ見えてイグニスみたいな遠慮なさがないんだ」

「失礼な物言いだけど言いたいことは解るよ。続けて？」

「だからランスは解ってないことも多いんだ。ユーカーがそれをぶつければ、ランスも悩んで考えて……もっと多くを理解していくんだと思うんだ。だけどそれをユーカーがしないなら……誰かがそれをしなくちゃ駄目だ」

それを言うことで嫌われても、嫌がられても俺は言う！俺がイグニスを好むように、それでランスが俺を好きになつてくれるとは思わない。それでもいい。俺はランスのイグニスになる！何でもまずけと口にする。そうして彼に考えて貰うんだ。

「俺はランス相手になるべく臆さない！頑張る！思った通りのことを言う！そうやってランスにランスの心を引きずり出させる！」

拳を固めて決意を語る。俺が顔を上げれば……

「あれ？」

イグニスがいらない。俺の話に嫌気が差したのか、また先程の露天でアイスのお代わりを頼んでいる。

「イグニスー……」

俺ってそんなに暑苦しい？話聞いてて嫌になる？

「嫌になるって言うならそういう被害妄想だね。まあ調子に乗れるよりはそっちの方が良いけどさ」

「え？何これ？」

「君にしてはよく考えた方だと思ったから」

「ご褒美。そう言って差し出されたのはカップに入ったアイスが一つ。ああ……イグニスには元々、ここで俺にくれる予定だったのだ。それを俺が勝手に自分でダブルを頼んで……馬鹿みたいだ俺。」

イグニスの手には別の種類のカップが一つ。流石イグニス。俺のを一口貰う気ているな。っていうか既にスプーンで一口頂かれていた。俺が手を付けたのからは貰いたくなかったんだな。うん、そうだよな。

「……あ、美味しい」

ほんのりと香る紅茶。これはミルクティーのアイスだ。

「……君たち貴族はそういうの、好きだろ？最近旅ばかりで紅茶なんてあんまり飲めてないかと思って」

「イグニス……」

違かった。これはイグニスが毒味したんだ。先に食べて俺の口に合うかどうか見極めて。その上で自信を持って俺に差し出した。

言葉にしないけれど、言葉では嘘を吐くけれど……俺はイグニスのこういふところがとても好きだ。言わなくても解る。だから俺が彼女を嫌いになることはない。何を言われてもそこから真意を探り取れる。取れなくても諦めない。見つかるまで探し続ける。

こういふ気持ちを他の人にも持ち続けられるかどうか。諦めない。信じてるから、真意を探す。そう言う姿勢が大事なんだろう。

ランスのことも、俺が諦めなければ……いつか良い方向に転ぶ。

それをまず俺が信じる。信じて突き進む。

だけど見つけたからってわざわざ口に出す必要はない。俺が解つていて、こうして笑えばきつと俺が解つてるって相手も解る。その上で嘘の言葉に俺も乗っかる。そんな言葉遊びも楽しいと思える。それがイグニスなら。

「イグニスのも一口貰っても良いか？」

「いいよ」

差し出されたカップ。その真つ赤なシャーベットは何かの果実だろうか？一口すくって口の中に放り投げた途端……っーんと喉と鼻の奥を突き刺す痛み。

「イグニス……」

「百倍唐辛子ペッパー。面白そうだから頼んだら、失敗だった。勿体ないから食べるけど。君も手伝ってよ」

「何で甘い物と辛い物混ぜるんだよ……」

「北部の知恵らしいよ」

北部の特産品の一つがこの辛子なのだという。

「カーネフェルの夏は暑いからね。夏バテに効くんだってさ」

アイスを食べるイグニスは少し疲れ気味。怠そうにも見える。…

…そこで俺は思い出す。一昨日、イグニスはエルス・ザインの虫に刺された。そしてその治療もまだ受けていない。

「……イグニス、身体の具合はどうなんだ？」

「北部まで虫は来てないし、僕は数術で体温変えられるし、熱は抑えられてる」

「でも数術使うの疲れるんだろ？」

「簡単な数術だからそんなでもないよ。常時展開ってセットすれば良いだけだし」

高熱で死に至る病なら、熱を抑えれば死ぬことはない。簡単なことだとイグニスと言うが……

「ごめん……イグニス大変な時に。俺……」

「いいんだよ。君が僕のことを忘れるくらい忙しいってというのは良いことだ」

ユーカーやランスのことで気を取られていた自分を恥じる。だけどイグニスはそれでいいと首を振る。

「それに心配されたところでどうしようもないこと悩まれるより、まだ何とかなりそうなこと考えて貰った方が僕としてもありがたい」

「でも！……俺は……」

「それじゃ、ちよつと肩貸して」

甘い物食べたなら眠たくなつたと俺にもたれ掛かるイグニス。頼んで欲しいとは言つたけど、それは精神的な意味だっただけだな。いや……同じ事か。イグニスがこんな風に寄り掛かるなんて……おいそれと出来る事じゃない。もたれ掛かつてくる身体と一緒に心の一部を俺に預けてくれている。そんな気がする。

「イグニス……アイス溶けるけど……？」

「勿体ないから残りは君が食べて良いよ。残したら怒るから」

「う、うわぁ……」

唐辛子アイスは辛かった。でも後味はふわりと甘い不思議な味わ

いだ。鼻が喉がつーんとするけれど、少しイグニスに似ているなあなんて思いながら、俺は重くなる手を動かした。

*

「はあ……一番風呂って良いな。昨日はゆっくり風呂は入れなかったからなあ」

「はい！貸し切りって良いですね」

邪気のない子供を相手にしていると心が洗われる。風呂から出てやっと男の格好に帰ることが出来た。ユーカーは一息吐いて、ロビ―でパルシヴァルと寛いでいた。

「ほら、何か買って来いよ」

「あ、ありがとうございます！」

「俺にも牛乳頼む」

「はい！」

売店でじつと飲み物を見つめていた姿に折れ、小銭を与えると、明るい笑顔で走り出す。

「ん？お前も普通のにしたのか」

「はい！僕はセレスさんみたいになりたいんです」

だから同じのにしましたと笑うパルシヴァルは可愛い。

「お前はほんと良い奴だな……」

「？」

濡れた髪を撫でれば、きよんとした顔で大きな瞳を瞬かせる。

「でも俺より身長伸びたら殺す」

「セレスさん、大人げないですよ」

くすくすと笑われた。

「しかしなあ。こんな所までお前巻き込んで連れて来ちまって悪かった。こんな形で帰郷なんて嫌だろ？」

こいつは立派な騎士になるまで故郷には帰らないと願を掛けていた。それが都へ行くための母親との約束だったらしい。こんな幼い子供だ。母恋しさはあるだろうに。そこまでして騎士なんてなってる楽しいものでもないだろうに。

「セレスさん、僕はまだ立派じゃないですけど騎士です」

こいつの故郷も北部にある。俺が出会ったのは北部の森でだ。

「母様にはまだ会えないけど、寂しいけど……寂しくないです！セレスさんに、王様に……いろんな人がいますから。僕は頑張ってるセレスさんみたいな優しい騎士様になって母様を見返すんです！」

「……お前も馬鹿だな」

こいつは騎士になりたいという気持ちを否定され……そこで母親に俺を馬鹿にされたのを怒り、家を飛び出して都まで来てしまったのだ。子供に見えても才能はあるのか、独学での槍術はなかなかの物だ。棒を片手に都までの一人旅を遂げてしまったのだから。

「でもまあ……強くなって損はねえか」

こいつもカード。いざつてときは自分の身は自分で守れるように
はなつて欲しい。

「んじゃ、アロンダイト領に着いたら暫く俺がお前に剣を教えて
やるよ。騎士は剣も使えないと駄目だからな」

「あ、ありがとうございますセレスさん！」

「ふむ、無邪気な子らが戯れる様は心が洗われるものだねえ」

俺は口に含んだ牛乳を思いきり吹き出してしまった。

「おやおや。言った傍から卑猥な子だ。白い液体を口から垂らし
てぶちまけるとは」

「そういう言い方止める！牛に謝れ！俺に謝れ！世界に謝れ！万
物に謝罪しろ！」

咳き込みながらそれでも俺は、この叔父を睨み付ける。だってこ
いつ絶対おかしい。

「なんで平然と女湯から出て来んだよ変態っ！！」

「いや、先に入っていたお姉さん方は最初こそ驚かれたがね、す
ぐにみんな私の虜さ。みんな今は余韻に浸っているみたいだから先
に上がってきたんだ」

「変態！犯罪者っ！強姦魔っ！あんたはどうしてそうなんだ！！」

「ははは、失敬な。合意の上だよ途中からは」

「アウト過ぎんだろうが！！最初からアウトじゃねえか！！そう
いうのは終わりよければってのはねえんだよ！」

しかし女湯に入って女を食って出てくるとは。この変態、ランス
には悪いが本当一回殺しておくべきなんじゃないかと割と真剣に思
えてくる。

「若い村娘も悪くないが、ほどよく筋肉の付いた女兵士も悪くないな。筋肉と脂肪の絶妙なバランスがまた。鍛えているとあそこの締まりも良くなるんだろっかな」

「ま、まさか俺の部下まで食ったのか!? 何てことをっ!!」

「セレス君。あんな明らかに君に好意がある女の子を野放しにして欲求不満がらせてる君が悪いんだ。下手な操立ては時に相手を不幸にする覚えておきなさい」

怒りと動揺で震える俺の肩を叩いて、この変態叔父は俺に囁く。

「何も一番じゃなくても、そういう好きでなくとも好意に甘えたい。その好意をキープしたいのなら手を出すのも一つの手だ。野放しにしておく……こうやって悪い男に食べられてしまうんだから」

「あんた、最低だっ!!」

「ははは! 良く言われるよ。むしろ私のような男には褒め言葉というものさ」

爽やかな笑顔を残し変態男は走り去る。

「くそっ……嫌なこと思い出した」

せっかくパルシヴァルに癒されて忘れていたのに。現状維持? 好意をキープ? それって……俺があいつにされることとそっくりじゃないか。親子揃って……やっぱあいつら最低だ。

「セレスさん……」

俯く俺を心配そうに見上げてくるパルシヴァル。

「これ、どじぞ」

差し出されたのはまだ半分以上残っている牛乳瓶だ。

どうやらこいつは俺が吹き出して殆どをぶちまけてしまい、飲む物がなくなっただけでこんな落ち込んでいると思っただけらしい。

そつだよな。訳の分からない話を聞いて、右から左。目から見た情報だけならそう解釈してもおかしくはない。

「気持ちだけもらつとくぜ」

それでも嬉しかったからお礼は言っておく。

「お前はまだまだ伸び盛りなんだから、しっかり飲んでしっかり食え。年下から飲み物食い物奪い取るのは騎士としてやっちゃ駄目なことだ。だからお前が飲め」

「でも……」

「俺は新たに酒を買う！飲まねえとやってらんねえ！」

「お酒って美味しいんですか？」

「……んー、その日によるぜ」

「そうなんですか」

こいつは酒と言うより酒を飲むという行為自体に興味を持っているようだ。

「お前と酒飲むのはお前が立派な騎士になってからな」

「はいー」

俺の言葉に頷くパー坊。その無邪気な笑みが、少しだけ……昔のあいつに似てるなあとか思っただけ。俺はもう一度口にする。

「お前は絶対ランスみてえにならないでくれよ」
「？」

何故そんなことを言われるのか解らず疑問符を浮かべ、それでもこいつはこいつなりの解釈で俺に笑いかけるのだ。

「はい！僕はセレスさんみたいになります！」

いや、それもどうなんだろうな。自分を否定するわけじゃないが、あまりお勧めできないように思うのは。

*

トリシユは考えていた。

「ランス様あ」

「これから決闘だから離れてくれ」

「私見届け人役やりますね」

「そうかありがとう。それじゃあここからそうだな、1000メートルくらい離れたところから見届けていて。俺は数術使いだしその位距離を取ってもらわないと危ないよ」

「きゃっ、やっぱり私が大切なんですねランス様は」

ランスはこの少女を心底嫌がっている。この婚約者を遠ざけるためわざと手近な相手である私のイズー……ユーカーを使ったのだ。そのくらいは僕も解る。解るのだが……腹立たしいのは同じだ。

僕が迫ると逃げるし拒むのに、この男相手に彼はあまりに従順だ。嫌がっても最終的には流される。これ以上何かがあっては僕が困る。僕としてはランスがこの婚約者さんと上手く行ってくれる方がありがたい。

「そんなお似合いの彼女が居て、それでもまだ僕のイズーに手を出すなんてね。君は男の風上にも置けない」

「やはり見る目がある方から見れば、私達はラブラブなんですネランス様！」

「……正気がトリシユ？」

少女は俺の言葉にうっとり。ランスは本当に嫌そうな顔。取り柄の顔がもう少して崩れそうなところまで来ている。

「それは君が嫌っている父様、僕のお師匠様そっくりじゃないか！」
「……」

ランスが笑う。冷やかな笑みだ。私のイズーの前じゃ見せないような冷酷なその表情。背筋が震える程の殺気。そんな顔で彼は俺の方へ手袋を叩き落とす。

「……あまり乗り気じゃなかったんだけど、ありがとう。やる気出てきたよトリシユ？」

やる気が絶対これ殺すってかいて殺る気って読む方のあれだ。しかし僕もここで負けるわけにはいかない。例えイズーが僕を応援してくれていなくても。

「君には……貴方だけに負けません！アロндаイト卿ランス！貴方の愛は間違っている！」

「……それはお前の方じゃないのか？」

「道としては逆送している自覚はあります。それでも僕はまっすぐあの子を愛してる！」

彼をまだイズーと呼ぶのは、名前で呼ぶのが恥ずかしいからだ。もしそんな風に呼んで彼に嫌そうな顔をされたら立ち直れない。僕が彼の女装に喜ぶのは、背徳感が薄れるからだ。

冗談めかして接しなければ絡むことさえ僕には出来ない。本の中の騎士になりきることで、演じることで僕はなんとか彼に話しかけることが出来るのだ。

だけど自らの危険を顧みず、大嫌いな僕なんかを庇ってくれたあの子。理屈じゃない。理屈じゃないんだ。気付いたらもう、仕方がない。正体を知ってもまだ好きなんだ。

「僕は彼が好きです。だけど貴方のそれはそうじゃない！彼を人として貴方は見ていない！その目が彼をどんなに苦しめているか！それさえ気付かないような貴方になんて負けるものかっ！！」

こんなこと言いたくなかった。僕は友人としてはこの男を気に入っている。

今だつて忘れない。彼は僕を否定しなかった。

大切な僕の宝物。母さんの形見の本だ。

父は領地に帰つてこない。本のようなそんな恋物語に憧れて、恋をして捨てられた……そんな哀れな女が残した本だ。

哀れな女は酷い男を責めることも怨むこともなく死んでいった。一時でも燃え上がるような恋を教えてくださいましたのは確か。彼の火は消えても、彼女の火は燃え続けた。その身を焼き焦がす程、彼女を燃え上がらせた。その気持ちを教えてもらえただけでも私は幸せだと馬鹿な女は言っていた。

例え幸せになれなくても、心から愛せる人に出会いなさいと、その思いはお前を強くしてくれるから。母さんは僕にそう言つてこの本を遺してくれた。

燃える火の海。屋敷の中で思い出と共に消えたあの人。僕には解

らなかった。そんなものために命を投げ出すその意味が。

でも理解したかった。大切な母さんが見ていたもの。見た景色を僕は知りたかった。そして今……それを僕は見ようとしている。

「これ、君の本だろ？」

「……え？」

昔の記憶だ。僕がまだ幼い頃の。

泣いていた僕の前に現れた、優しく穏やかに笑う少年は……あんな冷酷な顔で笑う男ではなかった。

「だっていつつこの本を抱えているじゃないか」

「み、……見てたの？」

「いつも大事そうにしているから、きっと宝物なんだろうなって」

見習い騎士の時の僕は、周りに馴染めなくていつもこの本だけが友達だった。空いた時間で頑張つて剣と槍を磨いても、強くなればなるほど人は僕から離れていった。怨み、妬み、僻み。そういった物が渦巻いている。努力もせず、だらけている。それなのに人を羨み憎む。僕は唯、頑張れば……誰かに、みんなに認められると思っただけだ。だけどそんな相手誰もいない。いないと思っていた。

「最近凄く頑張ってるよねトリシユ君。次の手合わせの時が楽しみだよ」

目をキラキラと輝かせて、その子は笑った。見ていてくれた僕のことを。僕の努力を彼は見ていた。

「あ……ありがとう」

「でもさ、彼らも酷いよね。人の物を盗んで隠すなんて騎士失格

だよ」

「何で僕……こんな目に遭うんだろう」

「うーん……城にはあんまり同世代の女の子っていないからじゃないかって母さんが……いや、何でもない」

妙なことを言いかけ、彼は慌てて否定する。噂ではアロンドイト卿も似たような目に遭っていた気がする。ちょっと代わった言動と何処かを見ている目と、時々現れる一人言。精霊の養母がいるとか言う不思議な子だ。剣は騎士見習いの中でもトップクラスの實力だし、礼儀も正しい、……僕にも優しい。だけどやつかみを僕以上に買っているはずだ。それでもこんな風に笑える彼は強いと思った。

「君は髪も長いし可愛いし、女の子に見えるからじゃない？人間の子は幼少時に好きな子を苛めるものらしいじゃないか」

「……………」

悪意からの嫌がらせじゃなくて、好意からの嫌がらせだと彼は言う。君は嫌われている訳じゃない。そう僕を彼は持ち上げた。

女顔か。そう言われればそうなのかもしれない。けどだからってそこまで僕の顔は母さんには似ていない。たぶん父親に似ているのだろう。顔も知らない何処かの男に。

「こんな顔……嫌いだよ。母さんに……全然似てない。似てたら

……また、何時でも会えるのに」

「……そうだね。俺もそう思う。俺も母さんに似たかったな」

「え？」

「俺も母さんに似てないんだ。それにもう会えない」

彼も母親を亡くしている。それを聞いて互いに親近感を感じた。だからだろう。彼はもう一度俺の本を尋ねてくる。

「……それ、宝物なんだよね。どんな本なの？」

「ええと……騎士とお姫様のお話。二人は両思いなんだけど、一緒にはいられないんだ」

「そうか。悲しい話だね……」

「うん。でも……僕はこのお姫様が大好きなんだ」

この話のヒロインは、母さんにちょっと似ている。だから……読むと母さんに会える気がする。悲しいけれど、それでも年々臆気になっていく人の輪郭を取り戻せそうな気になるのだ。

「僕はこの本のお姫様に会いたいと思うんだ。……おかしいと思うっ？」

「思わないよ」

僕を唾うことなく彼は真面目な顔でそう言った。

「誰かを好きになれるって才能だと思う。君は凄いなだね」

言い方一つで馬鹿にされている。そう感じるかもしれない言葉。だけど彼は本当に羨ましそうに僕に言った。あの時から僕はランスが、とても好きになったんだ。僕を馬鹿にしない。僕を笑わない、最高の友人だっと思った。

だけどこの男は未だに、僕を羨んでいるのだ。まだ何も好きにならないこの哀れな男は。僕の方こそ君をどんなに羨んでいたことだろう。

ランス、……君の傍にはいつもセレスティン卿がいた。僕らの境遇は似ていたけど、僕にはそんな相手はいなかった。君が困ればいつだって、何処からともなく現れて。君の悪口をいう奴がいれば、君の代わりに走り出し、そいつらを懲らしめに行く。

君がそんなに綺麗でいられるのは、彼が悪いことを被つてくれるからだ。悪いことをされても人を怨まずに居られるのは、彼が代わりにそいつらに三倍返しをお見舞いするから。やり過ぎだよと彼を窘める。そんな君は心が広く優しい人だと思われる。

「ただ僕には彼がない。彼は僕を守ってはくれない。あの頃からもう、あの子は……君の物だった。」

ランスと親しくする僕を彼は気にくわないと思っていただろうし、僕も大切な友人との時間を邪魔する彼を疎ましく思っていた。ただそれは本当は羨んでいた。僕にも彼のような相手が欲しかった。

だからだ。彼に初めて守られた時、僕は涙が出るほど嬉しかった。僕が好きだったのは、ランスじゃなくて。ランスは勿論好きだけど、それ以上に僕は彼に憧れていたのだ。あの時、それに気付いた。

（だけど……僕も騎士だ。僕も男だ）

女顔だと馬鹿にされても、僕だって騎士なんだ。大切な人はこの手で守れる男になりたいんだ。今度は僕が彼を守りたい。

「イズーは……セレストイン卿は君の玩具でも愛玩動物でも所有物でもない！一人の人間なんです！それを貴方はちゃんと正しく認識、理解出来ているんですか！？」

「それはトリシユ……君だって……」

「僕は違う！」

大切な宝物。それを僕は放り投げた。そしてそれを手にした剣で切り刻む。風に吹かれて飛ばされていく頁達を僕は見向きもしない。

（母さん……）

僕は見つけました。だからもう貴女も、本も要らないんです。例

え幸せにはなれなくても、僕は思いに生き、想いに殉じる。それを悔やんだしはしません。その位好きになれる相手を見つけました。

「と、トリシユ……?」

僕の行動はランスにも衝撃を与えた。僕がどんなにこの本を大切にしてきたか彼が一番知っているから。だからこそこの意味も分かるはずだ。僕は、本気だ。

「そんな中途半端な好意で彼に近づかないで下さい。彼の心を傷付けるのなら、僕は例え君でも許さない!」

*

もう夕飯の時間だというのに帰ってこない三人。少しに気になったから、先にパルシヴアルを食堂へ向かわせ……俺はロビーで待っていた。それから十数分、やっとあいつが現れる。

「珍しいな、お前が負けるなんて」

「そういう日もあるよ」

帰ってきたランスは少し落ち込んでいる風だ。そこでカードの所為だと言いつたのは男らしいと思う。でもそんなボロボロの姿で男らしさもクソもないとユーカーは苦笑した。

「ランス様!今手当の道具を取ってきますね!」

慌ただしく廊下を走るエレイン。そして自分の借りた部屋に飛び込むと、がさがさと物を漁るような音を立て出した。

「イズー!!」
「うおっ」

そう言えば後一人居るのを忘れていた。背後から現れて、抱き付いてくる同僚。長い金髪が身体を撫でてくすぐったいから止めて欲しい。

「貴女のために勝ちました!この勝利は貴女の物です」

これで相手が俺じゃなかったら絵になるんだろう。跪いて手の甲に口付けられる。気味悪い。

「そっかサンキュー。しかし手が汚れちゃまったしまた風呂入らねえと」

「ごしごしと服の裾で手を拭いながら溜息を吐く俺に、トリシユは生暖かい目を送る。意味が分からない。

いつもならここでそれじゃあ一緒に入りましょうとか言ってきてもおかしくないのに。なんだ?調子狂う。そして何故か俺を見るランスの目が酷く冷たい。

「ユーカー」

「何だよ?」

「言っただけのことと悪いことがある」

今はその悪い方だと突然俺を非難するランス。

「は、はあ!?!」

「お前は人に好意を向けられて、それでよく相手をそこまで傷付けられるな」

お前にだけは言われたくない。そんな言葉が脳裏に浮かんだが、とうとう口には出せず……俺は感じの悪いランスを見送った。

「ま、負けたからって俺にあたることねえだろうが」

ランスの背中が見えなくなってから、ようやくそんな一言を絞り出すのが精一杯。

「……ん？そついやお前いつもの本はどうしたんだ？」

横を見ればトリシユがいつも抱えている古本がない。それに気付いたことに、何故か嬉しそうに奴は笑う。宝物をなくしていかれてしまったのだろうか？

「なくしたのか？たく……何処に置き忘れたんだよ」

心当たりはないのかと、本探しを手伝ってやろうとした俺に、奴は静かに首を振る。

「あれはもう良いんです」

「は？いいつて……あれ、大切な物なんだろ？いつも肌身離さず持ってたじゃねえか」

いつだか俺が読ませると言ったが貸してくれなかった。ランスには読ませる癖に。かと思えば女装した俺には預けるといふ不条理。女装してない俺には探し作業でも触れられたくないのか？やっぱ俺のこと嫌いなんじゃないかこの野郎。

「あの……本探しはいいですから」

そう言っただけで恐る恐る、本の代わりを求めるように、トリシユは俺に片手を差し出した。顔が真っ赤だ。その手が震えている。

「しよ、食堂までで良いんです！て、手を……あの……その、つ、繋がせて！下さいっ！！」

その姿があまりに一生懸命で、俺はついつい吹き出した。そんな俺の反応に、トリシユは涙目になっている。嫌がられていると思っただろう。馬鹿だなこいつ。

いつもの変なテンションは、本の騎士になりきろうとする所為でおかしなことになっている。本がなくなった今は、これがこいつの素なんだろう。変に偉ぶらないと意外と可愛いところがあるもんだ。ランスの阿呆に比べればこいつの方がずっと純真なのかもしれない。なんとなくパルシヴァル系の一生懸命さを感じて、俺は仕方ねえなと思いはじめた。

「ほら」

俺も手を出してやった。でも掴まない。掴みたいならそっちからやれ。

「あの馬鹿に勝つなんてやるじゃねえか」

その点だけは褒めてやろう。あいつには俺もちょっと苛ついてたんだ。少しだけ胸がすくような気持ちになった。そう俺が笑ってやれば、余計泣きそうな顔になるトリシユ。

元々どちらかと言えば女顔のこいつだが、そういう顔をされると、ますますそうだ。俺がこいつを苛めているみたいでなんか居心地が悪い。くそっ、これだから顔のいい男は嫌いなんだ。

これ以上待ってやる必要はないなと背を向け俺は食堂に歩き出す。そこから数歩遅れて走ってくるあいつが手を掴む。たかだかそれくらいで馬鹿みたいだ。横目で同僚を見れば、阿呆みたいに幸せそうな顔している。

(……変な奴だな、こいつ)

今更だがこの男がどうしてここまで俺を気に入るのか、俺にはさっぱりわからなかった。

8 : A m a n t i u m i r a e , a m o r i s i n t e g r a t i o

ランスに恋人代わりのふりをしろだの、誤魔化すためにあれしろだの。トリシユに心底惚れられるだの、受難ですなユーカー！。

メインヒロインが出て来るまでもうちよつとの辛抱。頑張れセレスちゃん。

客寄せに女装させられるわ、アルドールとイグニスがのほほんとデートしてる傍ら中年騎士に部下食われるわ……不運だなあコートカードは。

6章序盤はセレス編なんだろう、きつと。中盤からジャンヌ編が始まるんだと思います。え？エレイヌ編？終盤だと思います。

聞いた話に寄れば、アロンダイト領はここからそんなに遠くない。馬車や馬を使えば一日足らずで迎える距離だ。かく言うエレインという少女も馬車を用いてここまで来たらしい。

アルドール達がトリフォリウムを出たのは翌日の朝早く。その甲斐あって日暮れ頃にはアロンダイト領が見えてきた。

「ここがランスの実家かあ……」

緑に囲まれたなかなか良い景観の土地。ランスの言うよう領主がしょっちゅう土地を開けている所為でそこまで賑やかな様子はないが、だからこそ保たれる……人の手が入らぬ静けさその美を湛えた土地だ。

俺としては結構好感を持ったが、ランスとしては余り良い思い出がないのかその顔は暗い。

とりあえず客室に通されたが、それが気になって俺は何も手に着かない。というか今日はやることがない。人の家なのだからあまり好き勝手に動けないし、そうしたところで俺に何が出来るというのか。帝王学を受けてきたわけでもない、王としての仕事も解らない。そして今は俺に出来る仕事もないのだろう。忙しいのはイグニスとアロンダイト卿親子くらいだ。

そしてそんなお荷物兼暇人の俺の相手を務めるのが……

「アルドール様！この本などは如何ですか？」

「うわ、面白そうだなー！」

暇つぶしはやっぱり本に限る。本の虫の俺はそう言う結論に至った。同じく読書家のトリシユと屋敷内の書庫を漁っている。

パルシヴァルは明日からユーカーに稽古を付けて貰うのかなんとかで、早めに就寝してしまった。

「……にしても、何だかんだで北部も暑いな」

「この辺りには水辺がありますからまだマシな方だとは思いますが……」

そう言いながらトリシユは窓へ視線をやった。その時……

「遅くまでお疲れ様です！アルドル様！トリシユ様！」

「あ、ありがとうございます」

書庫に響く明るい声。振り向けば茶を運んできた少女の姿。彼女が淹れてくれたお茶は、しっかり冷やされたそれは夏の暑さを僅かに払拭させる。良い葉を使っているのか味も香りもなかなかだ。

「でも俺達なんか構ってていいの？」

「はい、だって私のランス様の仕える方と、大切なお友達ではありませんか」

夫の主は私の主。夫の友は私の友も同然ですわと彼女は言う。その言葉はとても立派な物だ。しかし……

「それに将を射んとせばまず馬を射よと言うじゃないですか」

「ああ、うん、そうだね」

一瞬お茶を吹き出しそうになった。その馬に当たる本人を前にして言うだろうか。裏表のない子なんだなと、ある意味好印象。

「エレインさん、ちょっと窓を開けていただいても良いですか？」

「あ、はい！今すぐに」

トリシユの言葉にエレインは鍵の束を取り出して窓辺に駆け寄る。窓の一つ一つにも施錠が為されており、それは専用の鍵がなければ開かない。不便だが、仮にもここは領主の屋敷。内外に簡単に機密が漏れるようなことがあってはならない。仕方のないことなのかもしれない。そして屋敷の鍵の一部の管理を任されているのが彼女。家の鍵を任されるのが妻の務め。この子はランスの婚約者として彼の留守を守っているのだ。彼女の鍵が増えることは着実に外堀を埋めに来ている証拠でもあり、ランスにとっては見たくない現実なのだろう。

（そりゃあランスの気持ちも解るけどさ……）

恋愛対象に思えないものは思えない。俺だってフロリップを妹として見てきた。それが彼女を傷付けているとも知らず。それでもここまで想われて彼は何も感じないのだろうか？この子は暴走しているが、ランスへの好意に嘘はなさそうだ。

「どうかしましたかエレインさん？」

窓に手を掛け固まった。そんな少女を心配して近づくとトリシユ。彼も外を見固まった。そんな二人を疑問に思い、俺も恐る恐る其方へ向かう。幸いというか残念ながらというか俺は固まらずに済んだ。

「あれって、ランスとユーカー？」

こんな時間に何処へ行くのだろう。二人は森の方へと入っていく。それも人目を忍ぶようにこそそと。

「ら、ランス……っ！君という人はっ！！ぱっと思彼を諦めたように装いながらまだ全然懲りていないじゃないか！」

「こ、こんな時間に二人で何処に出かけるっていうんですの！？ランス様っ！お兄様っ！！そんなことエレインは許しませんよ！」

嫉妬に身を焦がす騎士と、屋敷中の鍵は閉めて回ったのにどうしてと慌てる少女。書庫の静寂は途端に破られた。

「これ以上僕のイズーを汚されて堪るかっ！」

「ランス様！私がお兄様のベッドと枕に画鋲を仕込んだからって、お外で何て不潔ですっ！」

そんなことしてたのかこの子は。可愛い顔して陰湿だなあ。

俺がそう思っている内にも二人は窓から飛び出していく。ここ、二階なんだけど。悩む魔もなく飛び下りるか。恋する人は恐ろしいなあ。俺も恐る恐る後を追う。あの暴走した二人を野放しにすることで、ランスとユーカーがどうなるかがちょっと心配だったのだ。

どうせあの二人のことだ。紛らわしいだけでたいした理由も意味もないだろう。久々の領地、大嫌いな家。そんな場所から息抜きにどこか散歩に行ったとか、そんなのが正解に違いない。違いないのだが、あの盲目の二人にそんな声は届かない。たぶん自分の目で見るまで何も信じない。溜息ながら俺は二人を追う二人を追いかけた。

*

こいつは本当に訳が分からない。今日一日ろくに口も聞いてこなかったと思えば、こんな時間に俺の所へやって来る。それで何を言ひ出すかと思いきや……

「ユーカー、頼みがある」

「な、何だよ」

真剣な目。どんな頼みなのだろう。こいつがこんな顔をするなんて。期待と恐怖で内心びくついている俺にこいつは微笑み……

「鍵、開けてくれ」

「はあ!？」

「お前に基礎を教えられた程度の俺には破れなかった。エレインとこの家……また鍵の技術を上げている」

「俺は便利アイテムじゃねえぞ」

酷え。こいつ俺を飼い犬所か、イベントアイテムか何かと同列にしてやがる。売れないし捨てられないし一回使うと大体用無しってあれな。でもたまにまた使う奴とか出てくるから預けるに預けられず手元に置くつてあれ。酷いにも程がある。

「引き受けてくれるんだな、ありがとう!流石はユーカーだ」

俺の不満も引き摺って、ランスは俺に鍵を破らせる。多少面倒臭くなっているが俺に破れないものではなかった。さてはこいつ途中で面倒臭くなつて俺に投げに来たな。

「んで?何処行くんだよ」

「母さんの所。顔出せって言われたし……それに頼んでいたこともある」

おおよその見当は付いた。だから詮索は無用つてのも。だから俺は代わりに違うことを言う。

「なんつーか……ここ来んのも久々だな」

た少女が一人。恋する乙女は恐ろしい。それを体現した奴だ。

「そ、その声……え、エレインんん！？こんな時間にどうしたんだよ！？」

いいところのお嬢がこんな夜中にドレスに葉っぱや蜘蛛の巣泥やら何やらで汚してまで……ってどんな風にしたらあんなに汚れるんだ。こいつ、匍匐前進か何かで追って来たのか？

しかし俺の疑問に答えずに、エレインは俺に詰め寄りざりと瞳を釣り上げる。

「それは私の台詞ですわ！女装しランス様を誘惑してあんなことをしたにも飽きたらず、今度は何処までお出かけですの！？Bですか！？Cですか！？Zですの！？」

「むしろ俺が被害者だ！つつーか、Zって何だよ」

《ユーカー！あんた私のランスになんてことしてくれてんのよ！確かに私のランスは格好いいし可愛いし優しいいい男だしあんたみたいな屑が惹かれても仕方ないと思うけど、身の程を弁えなさい！》

「だから俺が被害者だつて言ってるんだろぅが！」

「母さん、あんまりユーカーを苛めないでください」

「ランス……」

「それは俺の特権です」

「結局そこでお前は落とすのか！？俺オチ止める！！」

俺がツッコミを入れ終える。そこで俺は当たりが静まりかえっていることを知る。それにちょっと思い出すことがあって、恐る恐る後ろを振り向けばエレインが両肩を振るわせている。

「ランス様……お兄様……お二人は、またそんな明後日の方向を見て会話などなさって。お二人の前世は猫ですか！？まだ幻覚が見

えてるんですの!？」

「あ、いや……」

「いけませんわランス様!お疲れなんですわ!エレインが添い寝をしてお疲れをとって差し上げますわ!そうすればすぐに幻覚なんか見えなくなりますわ!」

そつだ。こいつには精霊が見えない。見えないどころか聞こえない。

湖の精と会話している俺達が、異常に見えるのだろう。幾らランスが数術使いとはいえ、知らないことを知らない人間が正しく理解するのは難しい。

「ランス様のお母様は亡くなったんですのよ?そんな亡霊に惑わされてはなりません!水妖は水辺に人を招いて引き摺り込むと言っじゃないですか!お兄様はどうでも良いですけどランス様に何かあつてはエレインは……エレインはっ」

「ランス……こ、こいつも悪気があつて言ってるわけじゃなくて、お前を心配してるつてのは解るよな?」

大切な養母を否定され、仏頂面になるランス。俺が必死にエレインとの仲裁を図るが、無意味に終わる。ランスがエレインを快く思っていないのは、たぶんこついうところ。でもこればかりはどうしようもないじゃないか。

「エレイン、俺はやつぱり君とは結婚できない。母さんが見えな、声が聞こえない。それは許せても……彼女を否定する君を、俺は好きにはなれない。君と結婚するくらいならセレスでも娶つた方が何倍もマシだ」

「だからそこで俺を引き合いに出すんじゃないやねえつて!」

「お兄様の馬鹿あつ!」

「ぐっ……」

やっぱりここで打たれるのは俺なのかよ。だから顔のいい男は嫌いなんだ。そういうのに惚れた女は本人じゃなくて近くにいた俺を殴るから。

走り去るエレイン。俺は追うに追えなくて、ランスに視線をやるが、この男と来たら追う気ゼロ。ぷいとそっぽ向いている。こいつは本当母親絡みの話になると大人げない。エレインより何歳年上だと思ってるんだか。

「……仕方ねえだろ。あいつは何も解らないんだから」

「解らないからって人を傷付けて良いという理由にはならない。俺は彼女のそういう思慮の浅さが大嫌いだ」

「今日のお前が言うな大賞はお前な。ここんどこ連日受賞しまくってんぞお前」

「え？」

「えじゃねえよ。ったく」

またいつもの天然面に戻った従兄に俺は重すぎる溜息。あれとこれ、どっちも素だから質が悪いんだよなこいつは。

「んで、そこに隠れてる奴出て来いよ。5秒以内に出て来ねえとどうしてやるつか……」

俺のカウントダウンに、茂みから飛び出す金髪三つ編み。即位式のポニテからまた庶民ルックスに戻りやがったアルドール。

「ったく、どうしてエレインなんか連れて来たんだよ」

「いや俺は、止めに来たんだって。あの子ほっといたら何しでかすかわからないし、二人が心配で……」

《誰？その子》

「アルドール様ですよ母さん。俺の仕える方です」

「あ、初めまして。ランスのお母さんですか？いつも彼には助けられています」

湖の精ヴィヴィアンのいる方をちゃんを見ながらお辞儀をするアルドール。その様子はエレインのそれとはまるで異なる。

「お、そっか。お前みたいな阿呆でも一応数術使いだっとな。んじゃ、見えるか」

「一応って何だよ」

「最弱が一応じゃなくて何なんだ？」

「うっ……」

俺の指摘に言葉を詰まらせる情けない奴。相変わらずのへたれ野郎だ。

《ああ！あのアルドール饅頭のアルドール様ね！》

「ま、饅頭！？」

精霊にまで都のお祭り騒ぎを知られていたのかと絶句、赤面するアルドール。ほんと都の奴らって馬鹿ばっかだよな。こいつも大概だが。

（まあ、それでも……）

ランスが俺を気に入った、最たる物はたぶん……俺がヴィヴィアの声を聞くことが出来たからだ。それがあつたから俺達は出会えたし友人になった。それじゃあこの精霊を見ることが出来るアルドールとなら、俺よりも親しくなれるのかもしれない。

入れ込みすぎて依存になると以前と同じ事の繰り返しだったが、友人として話せるようになったなら、少しはこいつの王への神聖視は和らぐだろう。

こんな阿呆に俺の自慢の友人を貸し与えるのは癪だが、それが今はランスのためなのだ。仕方ない。

「ランス、てめえはこの馬鹿に話しておくことがあったら？俺は攻撃も喰らったしもうてめえに付き合いきれねえ。んじゃあな」

そう言い残して足早に森を抜ける。後ろから俺を呼び止める両者の声があったが聞こえない振りをする。俺はお前らの通訳じゃねえんだ。便利アイテムでもねえんだよ。お前らも人間なら直接会話をしやがれ。

*

(ど、どうしよう)

アルドールは悩んでいた。困惑していた。動揺もしていた。ついでに言うなら逃げ出したかった。

しかしイグニスに言った言葉を思い出し、なんとかその場に踏みとどまった。

エレインは帰ったし、トリシユもそれを追って消えたし、頼みの綱のユーカーももういない。ここは俺が何とかするしかないのだ。

「話つて……俺に？」

ユーカーが残してくれた話題の種を拾って、俺は何とか顔を上げた。その先でランスは視線を母親に逃がしている。

流れるような水の色。そんな綺麗な髪をした小さな妖精のような

それ。それが噂に聞いていたランスの母親らしい。その節はカルデアアではお世話になりました、魚料理三昧で。

「……………」

どう言えばいいのか解らない。そんな様子のランスを助けるよう、口を開いたのは彼女だ。

《饅頭……ごほん、ええとアルドル様だっけ？改めまして初めまして。私はヴィヴィアン、この湖の精でランスの養母。実はこの間私はこの子から預かり物をしたのよ》

何で俺より先に饅頭の方が記憶に残って居るんだろう。ここにイグニス居なくて良かった。居たら明日から俺は彼女に饅頭呼ばわりされているところだった。そんな馬鹿なことを考えている俺に、彼女は真面目な顔つきで言う。

《貴方の妹の亡骸。とある水辺に埋葬させて貰ったわ。ぼちぼち落ち着いたら引き取りに来て貰おうと思っただけど……ちよっと参ったことになったのよ》

「フローリプが……？」

「どういうことですか母さん？」

《真つ当な精霊って血の穢れを嫌うものなのよ。悪い数字に当てられるとこつちも調子狂ったりするから》

詰め寄る俺達に、ちよっと黙って話を聞きなさいと彼女は言う。

小さな精霊に似合わない溢れる怒気に睨まれた俺達は口を閉ざした。

《要するに、だから預かり物を匿ってくれる宛って言うのがなかなか見つからなかったのね》

その口調ではここにフロアリプが居るわけではないらしい。あの状況で満足に葬ってもやれなかった。敵の手に奪われないようしてくれたランスには感謝しているが……俺はフロアリプの墓にまだ手を合わせることも出来ないのか。

《でも時々そういうのが得意な精霊もいる。環境汚染に感化されて慣れちゃったっていうかまあそういうの。ちょっと好戦的っていう所を除けば私達とそこまで大差し、能力自体は秀でてる。でも人間嫌いは私達以上。故に契約するのは難しい。そういう精霊が居るのよ》

「それでその方に預けたんですか？」

《ええ。綺麗な場所であるのは確かだし、景観だけなら良い所よ。不吉な気が漂ってるのが残念だけど》

問題はその不吉な気のことではないのだと、そう前置きをした上で彼女水を凍らせ氷のオブジェと地図を作る。

《最近そいつ引越したらしくて、私も預けた後に知ったのよ。返して貰おうにも他に預かってくる相手もない。ここに移したら数値異常の容量オーバーこの湖がどうにかなっちゃうわ。大体向こうにも数術使いがいるんでしょ？あんまり騒ぎになるようなことは出来ないわ》

フロアリプの運び入れはエルス・ザインが南部にいた頃だから出来たことだと言う精霊。今エルス・ザインが何処にいるのか俺には解らないけれど、あの子は俺を怨んでいる。追って来ないはずがない。

ヴィヴィアンの溜息が今居る湖のオブジェを水に戻し、湖面に戻す。そして湖の精は、ここから北に位置する古城を静かに指さした。

《でその場所って言うのがこの近く。あの古城の浮かぶ湖よ》
「古城っ!?!それはタロツク軍が居座っているというあの!?!」

その言葉にランスも驚きを顕わにする。俺に至っては驚きのあまり何も言えなかった。

《だから私もどうかと思ったのよ。まあ、湖引っ繰り返して小さな箱探しなんてしないとは思っただけど》

「最近その精霊が場所を移したというのは……そこで血生臭いことが起きているから。そういう風にも受け取れますが」

《ええ。たぶんそう言うことだと思っわ》

タロツク軍が居るといふ場所。そこにフローリップの亡骸が安置されている。行かなければならない所。それでも、そこにもう一つ理由が増えた。負けられないと思っ理由も。

「……ありがとうございますヴィヴィアンさん。ランスも俺の妹を、ありがとう」

「アルドール様?」

「俺もやる気出てきた。あの場所だけじゃない。フローリップを取り返す。そういう風に思ったら……もう負けられない」

そこにタロツク王が居るのだとしても、俺は震えていられない。

(フローリップ……)

最期まで笑っていた。泣いていた彼女。そんな血生臭い場所……彼女は好みそうではあるが、兄としてはもう少し穏やかな場所で眠らせてやりたい。違っ場所に眠るルクリースだっ寂しがっている。

フロアリプだって……きつと寂しい。あんな別れ方をしたんだ。ルクリースにちゃんと会わせてやりたい。

俺には死ぬのがどういうことかまだわからないけど、それでも二人とも俺の家族だ。

「家族が離れ離れなんて、悲しいことだよ。フロアリプは……ト
リオンフィのみんなとも離れ離れなんだ。せめて……フロアリプが
大好きだったルクリースの傍にいさせてやりたい」

「……アルドール様」

ランスが俺の方へと近づいて、初めて会った日のように……俺に
跪く。

「俺も尽力させていただきます。フロアリプ様を、ゆっくり眠ら
せて差し上げましょうアルドール様」

「うん、ありがとう……ありがとう、ランス」

俺も膝をつき彼と視線を合わせてその手を取った。俺の行動に彼
は驚いていたが、これ以上謙る体勢を思いつけなかったらしくその
まま固まる。

彼の風変わりな物言いと、正論に人は押されてしまう。だから彼
は自分が押されることに慣れていないのだ。そう思って俺が笑えば
彼はわけがわからず戸惑った風な顔になる。そういう反応をされる
と相手が年上だと言うことをちょっと忘れてしまいそう。

俺は小さく笑って立ち上がり、当たりを見回す。夜の湖はなか
なが良いところだ。幻想的だとも言うのだろうか。こんなところで
暮らせるランスの母さんが羨ましい。

「良いところだな、ランスの実家って」

「そうですねうか」

さつきまでの可愛さは何処へ、実家の話題になって露骨に嫌そうな声色になるランス。

「ああ。良いところだよ。緑と青に溢れている。シャトランジア……俺の実家の近くじゃこんなに綺麗な湖はなかった。こんな綺麗な場所だから、精霊も棲み着くんだろうな。ランスの母さんは見る目があるよ」

《あら？褒めても何も出ないわよ王様君？》

照れている小さな精霊は可愛らしい。ランスの母だとは言つが、大人女性という感じはしない。精霊ならではの無邪気さというのだろうか。そういうものに溢れている。

「……そうですね。景観は俺も嫌いじゃありません」

俺の言葉に少しだけ機嫌を直してくれたのか、ランスも湖を見つめながら小さく微笑する。だけど湖面を覗き込む彼のその面影は少し悲しげ。

「でもこれだけ綺麗だと泳ぎたくなるよな」

「アルドール様、冗談でも止めてくださいよ。母さんの家はこう見えてかなり深……」

「うわっ！」

「アルドール様!？」

水際を歩いていたら俺は、自分の足に躓いて体勢を崩す。流石最低幸福値ホルダーだ俺。そのまま湖に頭からダイブ。夏服とはいえ水を吸った服は重い。これまで本の虫の箱入り息子同然に育てられてきた俺は……服を着て泳いだことなどない。自宅の風呂で適当に泳

いだことがあるくらいだ。勿論適当なのでちゃんとした泳ぎ方など知らない。

身体が重い。息が苦しい。段々沈んでいく。

沈む間際、ランスも飛び込んでくるのが見えた。だけど彼だってそんなに幸福値の高いカードではない。俺の不運に彼まで巻き込まれてしまったら……ユーカーやエレイン、トリシユにヴァンウィック、いろんな人が悲しむ。ランスはいろんな人に好かれているんだ。俺とは違う。

(ランス、来ちゃ駄目だ！)

拒むように伸ばされた手を振り払う。ここで掴んだら彼まで溺れてしまう、そんな気がした。

*

夢の中を漂うような酷くぼんやりした……こんな感覚、何処かで見えぬ。それはつい最近。シャラット領で……ユーカーに叩き起こされる前に。

目を開けるが、目の中に水は入ってこない。痛くない。水のそこから見上げた景色。それはこの世の物とは思えないほど美しい。キラキラと差し込む光のカーテン。魚たちの群れ。ゆらゆらと揺れる水草。一面の水の世界。

俺がその景色に見惚れていると、突然バシヤンと上空から大きな音。見れば誰かが振ってくる。長い綺麗な金髪の美しい女性だ。その人の両足は紐に縛られ、その紐の先には大きな石が括り付けられている。足を固く縛られたその人は、人魚のように見える。だけど青い眼の人魚に赤い色は似合わない。彼女は苦しげに胸を押さえ、そこから赤い色を滲ませる。はっと気付いた。これは自殺ではない。

彼女は殺された、殺されるのだ。

我に返った俺はその人に近づくけれど、俺の手はその人をすり抜け、その縛めさえ解けない。その美しい人が苦しみから恐ろしい形相に変わるのを、俺は見届けなければならなかった。彼女が息絶える刹那まで。

目を背けたくて、背けようとしても口から漏れる空気の音が、苦しそうなその音が聞こえる。それに耐えられず俺はまた、その人を見てしまう。

人間って呆気ないんだな。それが俺の感想だ。俺にとっては物凄い長い時間だったけど、実質そんなに時間は経っていなかったんだと思う。

彼女が死んだそのしばらく後に、血の穢れに気付いた湖の精が現れて、どうしたものかと考え込むような仕草。彼女が湖面を見上げればそこで涙を流す小さな子供の姿。それが母さん、母さんと泣いている。その青すぎる程青い瞳の少年は、俺の知る人によく似ていた。

その子供の泣き声に、精霊は困り顔。俺も本で読んだ事があるが、この程度の重りなら腐敗の程度によつてこの死体は浮かんであの少年の目に晒されてしまう。

変わり果てた無惨な姿。それは子供に見せるには忍びない。精霊は女の遺体を数術で何処かに飛ばす。

それは単に血の穢れで自分の家を汚されたくなかっただけでも取れるが、それだけではないのかも知れない。帰ってはまた現れて母さん呼び続ける少年に、精霊は母性が目覚めたのか、心配そうに彼を見上げていた。そんな日が続いた、ある日少年が身を投げた。母さんに会いたくて、水の底を目指して。

精霊は人間をあまり好まない。だから関与しない。あの女の人が見た時、気付いていたとしても精霊は彼女を助けなかったに違いない。この精霊を突き動かしたのは、変えたのは……あの少年。傍

観を止め、精霊は水の底から浮かび上がり、沈む彼を陸へと戻し、息を吹き返さない彼に口付けをする。

「母さん……」

そう臆気な意識で呟いた少年の、その小さな手を取って彼女は只今と言うのだった。

*

「っ……！」

そこで俺は目が覚めた。

「ら、ららららららららランスっ!？」

「……お帰りなさい、アルドール様」

出オチに出イケメン。水も滴る何とやら。何しててもこの男は様になるし絵になるなあとちよつと現実逃避。だって顔近いし。顎捕まれてるし。今正に人口呼吸というかもう終わったんじゃないかねこれ？的な。ユーカー、他人事だって笑ってごめん。そっか、別に嫌いじゃないけどシヨックはあるなこれ。俺のファースト……女の子に囲まれてた時にはそんな展開なかったのに、ここで来るか？別にランスは嫌いじゃないけど、初めてが男かと思うとちよつと泣ける。いやでも命の恩人相手に何言ってるの俺？失礼だろ、最低だろ。本当ごめん。

でも俺もイメージではギメルとか妄想したことくらいはあったんだ。淡い夢だった……今のギメル(?)は俺に跪いて靴を舐めるとか靴キスを強いてくるようなDSだ。多分俺のイメージと重なることはない。そう思ったら無性に泣けてくる。

「ああ、ご心配なく。未遂です」
「み、未遂ですか」

涙目になる俺に、ランスが優しく笑みかける。その笑顔に安心してほっとしてまた俺は泣きそうだ。だけど何故に俺敬語？いや、ちよつと緊張して。

それきり黙り込んだ俺に、飛び込む前に脱いだらしい上着を羽織らせて、……ヴィヴィアンの方を向くランス。そんな薄着でそつち見たらあの精霊は流血物じゃなかるうか。主に鼻血で。見れば彼女はドキドキしている。しかしその顔は赤くなく、どちらかと言えば蒼白だ。どうやら彼女も見たらしい。そしてそれは彼女だけに留まらず……

「母さん……俺の母さんは、ここにはいないんですか？」

ランスのその発言に、彼もあれを見たのだと知った。

《そ、それは……》

口籠もるヴィヴィアン。俺は咄嗟に彼女を庇う。

「ランス、ヴィヴィアンさんは悪くない。彼女はランスに見せたくなかったんだ、真実を」

「退いてください、アルドール様。これは俺と彼女の問題です」

「違う！」

「アルドール様……？」

「お前は俺の騎士だろう！？だったらランスの悩みは俺の悩みだ！ランスの問題が俺の問題だ！違うか！？」

ぎりと彼を睨め付ければ、ランスが押されて押し黙る。ここは一気に攻めるしかない。

「知らない方が良いこともある。思い出を思い出のまま愛せる方が幸せなことだって……」

俺だって知りたくなかったことはある。道化師に騙られたギメル。彼女は被害者だ。何も悪くない。それなのに俺は、昔のように彼女を愛せないのだ。彼女は何もしていないのに、彼女の笑顔を信じられない。いつか本当の彼女に再会したとしても、道化師の顔が笑い声がちらついて……彼女の顔をまともに見られなくなる。たぶん、昔のように好きなままではいられない。もう、彼女を愛せないのだ。俺の恋は壊された。彼女の所為ではなく、赤の他人の悪意によって。ただどまだ彼女が好きだから、俺の心は痛み続ける。泣いて居るんだ。知らなければ良かった。思い出を汚い手で汚さないでくれ。踏みにじらないでくれ。綺麗なまま、飾らせてくれと。

「例え血は繋がってなくてもヴィヴィアンさんはランスの立派な母さんだ！一生懸命お前の心を守ろうとしてくれたんじゃないか！」
「……………すみませんでした。母さん、アルドル様」

俯いたまま小さくそう残し、ランスが走り去る。俺はランスとヴィヴィアンさんを交互に見てどうしたものかと狼狽えた。そうする内にランスは森の中へと溶け込んで、今追っても俺じゃ迷うだけ。仕方ないと俺はヴィヴィアンさんの方へと目を向けた。

《……………さつきはありがとうね、アルドル様》
「え、いや……………先に助けしてくれたのはランスですし」

俺が首を振ると、精霊は苦笑し……………小さく溜息。ランスの消えた

方を心配そうに見つめている。

《あの子はその色男なお父様と不仲な分、母親への思い入れが強いよ。自分を愛してくれる父親じゃなくて、自分を愛してくれなかった母親の方が好きなんだから……よっぽどね》

母親に愛されなかったのは、あの父親の所為だとして……今も生きていて父を憎く思っている。もう何処にもいない、手にはいることがない母からの愛。それをまだ心の何処かで諦められていないのだと彼女が俺に教えてくれた。

《人間って不便な生き物ね。なくした物は何でもかんでも美しく見えて仕方がないの。それで今傍にある物、手にしている物をそんな風に思えないんだから》

それをなくすまでそれがどんなに光り輝いていたか、それに気付けない曇った目。彼を愛してくれている人は幾らでもいるのに、彼はそれに気付かず、認められず、受け入れられない。そんなランスを精霊は深く哀れむ。

「……ランスは、犯人を捜そうとするんでしょうか？」
《しない理由がないわ》

ヴィヴィアンは空を仰ぎ、その暗さを瞳に宿す。

《あの子を取り乱すのは何時だって、家族に関係することだけよ》
「あの……彼女は何処に送ったんですか？」
《北……。当時はあの湖は無人……何の精霊も居なかった。だからそこに送ったの……》

無人の湖。穢れの流れ着く場所。精霊達のゴミ捨て場。フローリブが居る場所に、ランスの母親の遺体もある。だからこの精霊は、あんなに言い辛そうだったのか。

*

「さて、これでちょっとは仲良くなれるかな……って思ったのに何なんだろうっねこれ」

数術で身を隠し、イグニスが木陰から様子を窺うと……予想とはちょっと違う展開。これまでの情報と人物関係の齟齬が生じたからこうなってしまったのかもしれない。やはり何でもかんでも計算通りとは行かないか。そう溜息を吐けば、背後からそんな狂った計算結果を讃える者がいた。

「……流石ですね、神子様は」

「マリアージュ、仕事中だよ」

「それを言うなら同罪だわ」

「ああ、そうだねエレインさん」

こうして二人で話すのは実に数日ぶり。見事に彼女を演じてくれているが、過度の接触は周りに違和感を覚えさせてしまう。あくまで僕らは他人として演じなければならぬ。僕は結界を彼女に広げ、外部への情報をシャットアウト。

「僕は先読みつてだけでもないからね。後読みを見せることくらいは余裕だよ。まあ、アルドールは馬鹿だから自分の数術の力がなんか知らないけど暴走してシンクロを引き起こしたとかそんな風に解釈してくれるんじゃない？」

僕が彼らに見せたのは、この湖の記憶だ。僕は先読みだから未来を見ることが出来るけど、今は後読みの力もある。後読みは過去を見る力。数術使いの大半は、そこに残された数値からある程度の過去は読み取れる。その情報量を深く正確に読み取ることが出来る者が、後読みを名乗れる。長い時間が経てば、残る情報量も少ない。0でないとはいえ限りなく0に等しいそこから正しく真実を暴き出せる使い手は、世界に数人いるかないか。僕にとつての幸いは先読み後読みが数術ではなく、特技という点か。数術を使わなくとも、情報伝達を行える。代償を必要としない。それはそれでメリットだ。使える分には使っていきたい。

ここは水辺だから簡単に情報伝達を行えた。僕はハートのカード。水の間人だから、彼らが水に触れることは僕に触れることに等しい。水を媒体に彼らの頭に過去を映した。

「数術使いつてなまじ人に見えないものが見えるから、ちよつと不思議なことは大体肯定してしまう。数術に出来ないことはあまりない。だからそう思ってしまう。騙す力を持つ者が、最も騙されやすいってというのは皮肉だね」

だからこそ一番厄介なのは見えない相手なのだ。

「トリシユさんは数札。数術の才に目覚める事もあり得る。パルシヴアル君は精霊への適正がある。あの二人はその内視覚開花もなるだろう」

「となれば……厄介なのはお兄様、そういうことですか？」

「そういうことだよ。彼は味方なら本当に心強い相手だ。でも出来ることならランス様への依存を少しずつアルドールに移していくのがベストだね」

「そうですね？」

「だって最悪の場合、覚醒した彼をランス様に持って行かれたら、

このゲーム僕らの負けだ。そうならないように、まずは決して裏切ることがないように、ランス様の手綱をアルドールに握らせないと駄目なんだけど」

セレスティン卿がアルドールを裏切るとすればそれは十中八九ランス様絡みだ。ランス様とアルドールに不和が生じなければその展開は避けられる。さらにその対策として、セレスティン卿をアルドールに入れ込ませる。その二重策が最善の手だと言う僕に、マリアージユは異論唱える。

「昨日と今日とあの二人を間近で観察いたしましたけど、お兄様は正常ですわ」

「と、言つと?」

「彼には狂人の才能がありませんのよ。それがお兄様の才能です。お兄様は何があつても、誰が狂つても、正常で居続けられる才能があります。だからこそ人一倍、傷つきやすいんだと思いますわ」

確かに過去を振り返ってみても、彼は自棄になることはあつても狂うことはなかった。あれで彼は正常なのだ。

「普段まともな奴ほど狂う才能があるつてもなんだかなあ……」

ああいう社会不適合騎士が一番まともつてどういふことなんだろう」「だから彼はあのまま良いと思います」

僕の悩みを振り払うよう、マリアージユは力強い響きでそう言い切った。

「度を外すほど、ランス様が狂つたならば……彼は間違いなくアルドール様側に付きます」

「どうしてそう思つ?」

「だってお兄様は本当にランス様が大好きですもの」

演技から外れた彼女はそこに嫉妬など映さない。それもそうだ。別に彼女はランス様が好きなわけではないのだ。彼を好きだった少女をそれは見事に演じているだけ。そんな彼を何とも思っていない彼女がという言葉、それはとても客観的なものだった。

「だからそんな人がおかしくなっていく姿に耐えられるはずがないんです、あんな正常過ぎる兄様が……ですからその場合、兄様は止めようと思います」

「確かにね。……彼がトリシユさんを庇う理由がないとは思った。そう言うことだったのか……」

憧れる余り、その憧れから道を踏み外していくその人を見ていられない。尊敬するからこそ、誰よりもその崩壊に耐えられないのだ。もし自分に神の如く崇める人がいて、その人がある日突然悪魔に変わったなら、何とか元に戻ってくれと懇願するだろう。それが叶わないのなら、これ以上思い出を過去を汚さないでくれと……戦うしかなくなる。それが自分とその人との思い出を守る方法だ。アルドールが道化師に挑む力を手にしたのもたぶんそんなものだろう。追い詰められて追い込まれて、そこで精神崩壊から自分を守るための防衛策。一種の逆ギレ。好きな相手だからこそ、許せないことがある。マリアージュはそれを狙えと言っているのだ。そのために彼らはあのまま放置がいいだろうと。

「でも君もなかなかえぐいことを言うね」

「神子様は変なところで甘いんです。優しいんです。これには世界がかかっているんですよ？誰が相手だろうと徹底的にやるべきですわ」

愛らしい笑顔で、彼女はそんなことを言う。

「まあ、セレスティン卿だしいいか。追い込めば追い込むほど、アルドールは彼を気に入るだろうし、気に入られればその人を悪く思えなくなるのがセレスティン卿だ。そうなれば余計アルドールを裏切れなくなるはず」

(残る問題は……ユリスディカ。彼女のことくらいか)

彼女が現れるまでに、アルドールの周りの女性陣が全滅というのは初めてだ。だからこれがどう転ぶか解らない。心配なのはそこだった。

*

「帰ってなかったのか？」

森を進む俺の後ろから、ガサと現れる人の気配。振り向かなくても解る。足音一つで気配の色で。ランスは静かに息を吸い、背中の向こうに声を投げた。

「お前ら二人なんてちゃんと会話が成り立つか心配だろうが」

「ならどうしてあそこで助けに来てくれなかったんだ？」

「馬鹿か？あいつはお前の主だろ。俺には関係ないね」

ユーカーが面倒臭そうに、俺の傍までやって来て、上着を投げる。

「向こうで火焚いてやってるからこっち来いよ」

「お前はどこまでお見通しなんだ？」

「暇だったただけだ。お前ら置いてたら屋敷に入るのに二

度手間だろ」

どうせお前は俺に鍵を開けさせるのだろうと奴はいう。それもそうだ。確かに、待っていてくれた方がありがたい。俺達は窓から帰ればいいが、アルドール様はそうもいかない。

「お前……何やっていたんだ？」

「お前の所の領地だろ？畑からちよつと拝借して来た」

火の周りはいつが一人で暇つぶしをしていたというのはあまりに……楽しそうだ。干し肉焼いたり、畑からかっぱらって来たという野菜や果物を焼いていたり。一人でバーベキュー気分じゃないか。何豪勢な夜食を用意して居るんだ人の気も知らないで。

（これだけ用意していると言うことは……全部見てたわけじゃないんだな）

どこまで俺を過信して居るんだこいつは。俺なら大丈夫とか、そんな風に思っているのかお前まで。それは信頼なんだと思う。わかっている。それでも俺だって……

「ユー……もがっ」

「黙れ」

「……うえ？」

「いいから食え。良い感じに焼けてるぜ」

話しかけようとした俺の口を物理的に塞いできた従弟。口に突っ込まれた野菜と肉の串。でも俺は肉より魚派……そこまで思い、先程の不思議なあの映像を思い出す。あれは俺の記憶ではない。だって俺の視点ではなかった。そんなものが何故俺に見えたのか。

母さん。死んだ母さん。それが餌に変わったことを知った魚が……魚が集まって。母さんを食べようとした。その前に、養母さんが母さんを逃がしてくれた。だけど俺には衝撃的過ぎたのだ、あの映像は。もし養母さんあしななければ俺は知らずに、母さんを食べた魚を俺が食べていたのかも知れない。そう思うと……しばらく魚は見たくない。食べたくもない。

ユーカーに寄越された串を噛み締める。確かにそれは美味かった。荒っぽい料理だがこいつも基本何でも出来るから。唯、しないだけで。

「……… 美味しいな。特にこの味付けが」

「秘伝のタレだ」

「……… お前は何屋だ？」

騎士の癖に何故そんなものを持っているのかと尋ねれば、自作の物だと白状する。何処が秘伝なのかはわからないが、砂糖のほどよい甘さとピリリと微かな辛さが堪らない。味付けは良かった。それをかけるだけで香りまでもっと良くなる気がする。

「いや、だつてよ。よく俺飛ばされてたし。干し肉とかばっかだと味飽きんだろ」

こいつはなかなか味にうるさいグルメ肌。単に飽きっぽいとも言ふ。ユーカーが自慢げに取り出した数々の小瓶。それぞれがオリジナルの調味料と香辛料らしい。

「光荣に思えよ。この俺様の切り札の一つを食らわせてやったんだからな」

「切り札？」

「美味しい料理を食わせてその隙に逃げ出すっていう策の大事な切

り札に決まってるだろうが」

「そうかなるほど。お前は賢いな。だが馬鹿だ」

「そこで何でがっちり俺を押さえ込むんだよ！ここでお前相手に逃げるか馬鹿！」

「それもそうだな」

「うわっ……いきなり何しやがんだてめえっ！！」

「悪い、手が滑った」

火消しのための水桶の一つ。それをうつかりユーカーの頭からぶちまけてしまった俺に当然烈火の如く怒りを顕わにする従弟。目を逸らしつつ謝ってはおいた。

「うつかりやれることじゃねえだろ！」

「俺だけ水浸しなのがなんだか不公平だと思っただけだ。気にしないでくれ」

「気にするに決まってるだろうが！」

「いいじゃないか。お揃いで」

「そんな不幸までお揃いたくねえぜ。せつかく髪セットしたつてのこ」

「お前はセットしてそんなわざわざボサボサにしているのか？」

「お前っ、人の髪型そんな風に言うんじゃないよ！人の気も知らねえで……」

その言葉は先程、俺がユーカーに対して思ったことだ。

(俺は……)

なんて自分勝手な。こいつのことを解ろうともしないで、それで俺のことは何でも解ってくれたなんて。肝心なことは何も話さないのに、それでもちゃんと理解して肯定してくれだなんて。そう思っ

た途端、自分が嫌になる。せつかくこいつが用意してくれた食事が咽を通らない。

「……悪かった。ごめん」

「？何だよ急に。気味悪い」

気にした風でもなくユーカーが目を瞬かせる。こいつはもう、俺を許してくれたのか。どうしてそこまで……俺を。

「髪は………降ろしてるとお前と比べられて嫌なんだよ。それに髪伸びて来るとセレス呼ばわりされっし」

確かに言われてみれば……髪切る暇があまりないのだ。こいつは何時山賊、海賊退治でセレスタウン領以外に西へ東に北に南へ派遣ばかりされてきたから。体裁を気にする都周辺では評判が悪いが、それ以外の土地なら案外俺なんかより……こいつの支援者はいるのかもしれない。そんなこいつが俺を引き合いに出し俺の自慢ばかりするから、俺の名声が広がった。この素直じゃない男が認める程の男だ。どれだけ凄い奴なのだろうと。多分それだけのようないつもする。

「お前は……俺がそんなに凄い奴だとも思っているのか？」

「何だよ突然」

「教えてくれ」

「思つてねえよ」

「嘘だ」

「冷静になれよランス。お前俺に何したと思つてんだ？ここ数日のことだけでもお前が最低だって証明できる証拠は幾らでもあるんだぜ？」

正論過ぎて否定できない。

「良いか、お前は最低だ。俺に関してはその一言だ。だがそんな最低な野郎がどうしたわけか俺の自慢の従兄だ。この国一番の騎士様だ。俺はお前が最低なのを知ってるが、それを補って余り得る位良い奴だったのも知ってる。だからここにいてやるんだろうが」

そんなことも解らないのかと呆れられた。

「そういう馬鹿にこの食い頃の串はやらん！つてあああああ！」

「甘い」

「て、てめえ！意外に素早いなこんちくしょう！！素早さは俺の方が早いのに！！」

「お前の振りには無駄な動きが多い。それを読めばこんな風に先回ることも出来る」

良い感じに焼けた串を強奪した俺を睨み付けてくるユーカー。だがそれはそこまで悔しそうではない。むしろ嬉しそうだ。本当にこいつは俺に負かされるのが好きなんだ。俺に勝って俺に怨まれるより、負けて……俺が凄いというのを近くで見ているのが好きらしい。或いは勝ってひっそりと喜んでいる俺を見抜いて、それを見つけるのが楽しいのかもしれない。

「そつちの串も焼け頃だな。取ってくれないか？」

「仕方ねえな……つてぎゃああ！」

「ユーカー？」

視線を逸らして火を見つめていた俺も、ユーカーの悲鳴を聞いて、其方に向き直る。すると何処から湧いて出たのか、俺の父親がそこにいた。ユーカーの隣に腰を降ろして串を指ごと啜えている。

「ぎいやああああああああああああああああ！！放せ妖怪っ！！」

「ふむ、これはなかなかの味付けだねセレス君」

「何でその状態で普通に喋れんだよあんたはっ！腹話術か！？怖ええつての！！ぎやああああ！指舐めんな！吸い付くな！しゃぶるな！嘔むなこの変態っ！！」

「俺の従弟で遊ばないでください」

父と呼びたくもない男の頭を踏みつけて、焚き火の炎の間近数？の所まで追いやった。しかし男は悪びれない。やっと解放されたユーカーは半泣きで桶に手を突っ込んでいる。

「まったく私の偏狭馬鹿息子はこれだから。お前はセレス君に依存しすぎだぞ？少しはお父さんに分けなさい。そうだな、例として上半身はお前に、下半身は私が貰うみたいな」

「気色悪い例え方すんなっ！俺は俺のもんに決まってるだろ！！」「もつと踏まれたいですか？そうですか。じゃ全体重乗せますね、えい」

「はっはっは、まだまだランスは軽いな」

両足で踏みつけるがそれでもその体勢を保っているこの男は腐っても騎士。鍛えてはいるらしい。それが腹立たしかった。こんな男に負けているような気になって。

「おや、もうじゃれつくのは終わいかい？」

「貴方なんか構うより、ユーカーを構ってた方が楽しいし俺的には癒されます」

「っていうかこんな時間にあんたまでなんで外に居るんだよ」

「久々の領地だろう？年頃に育った食べ頃の娘がいるかと思って

領内を見回りにな。いやあ、たまには帰郷もするものだ」

「アホか！あんたここ数日ずっとそればつかるうが！！自重しろ！っていうか枯れる！今更跡継ぎ争いとかなったらランスが可哀想だろ！この年で今更弟妹出来てみる！」

俺の気持ちの殆どをユーカーが代弁してくれる。本当出来た従弟だ。

「なるほど。ランスの弟代わりの君は、その愛着が余所に移ると心配なのか、可愛いところがあるじゃないかセス君。それじゃあ叔父さん頑張って種蒔きでもしてくるよ！そうすればランスに捨てられた君が叔父さんの所にやって来るだろうからね」

「誰が行くかつ！！あんたもう今度こんなことしてみる！三本目の足ぶつた切つてやるっ！」

「いいのかいそんなことを言つて。困るのは君だろうに」

「余裕で困らねえよ！！」

ユーカーが焚き火の中に入れていた焼き石を手袋越しに掴んで、あの男に向かって投げ出した。流石にこの過激な歓迎には耐えかねたのか全力疾走で逃げていく中年。

「やっと消えたかあの性犯罪者」

ユーカーは、ふうと安堵の息を吐く。その手袋は焼き焦げている。

「ユーカー……」

「な、なんだよ」

俺に手を捕まれて驚いたような顔。手袋を外させるとやはり火傷になっている。

「無茶するな」

「だってああでもしねえとあのおっさん何時までも居座るぜ」

「それとこれとは話が別だ」

俺は回復数術を紡ぐ。その代償を知ってか逃げようとするその手を思いきり掴んで放さない。治療の際に何度か舌打ちをされたが放す理由にはならなかった。

ユーカーの手。手袋に隠されていたその手は、俺とは違う文字が刻まれている。俺は？、こいつはJ……こいつのそれはコートカードを意味する数字。俺なんかより余程生き残りそうなその数字。

だけでもっとも強かったルクリースさんが死んだ。こいつだって例外ではない。幸福値……それがなくなれば、こいつも俺も。それは解ってる。解っているのだが、これは癖なんだ。こいつの怪我を治すのが。

それにカードになる以前から俺は回復数術を使ってきた。その間は何を犠牲にして俺はこれを紡いでいたのだろうか？それも幸福値？それならそこまで回復数術は幸福値を削らないのではないだろうか？大きな傷なら兎も角、小さな傷ならそんなには……

「……お前、それどうしたんだ？」

俺の首から提げられた水入り水晶に、ユーカーが気がついた。いつもは上着に隠れていて見えなかったのだろう。俺も言われて思い出す。

「これは母さんがこの間……これがどうかしたのか？」

「いや、いまちよっと光ってたから。数術に反応すんのかと思っただけだ」

その言葉に俺も考える。いつもは数術を使えば、少しは疲れる。それが今はない。計算を手伝ってくれているのだろうか？目を瞑り自分の数値を確かめる。幸福値が減ったような形跡もない。

(これは……触媒か？)

俺の幸福値が減らぬように、母さんが俺を守るために……これを贈ってくれたのだ。弱い俺が少しでも長く生き延びられるようにと。

「……ごめん、ユーカー。俺……母さんに謝りに行ってくる！何本かは残しておいてくれよ」

「その必要はないみてーだぜ？」

立ち上がり、湖へ戻ろうとした俺にも……聞こえる話し声。

「それじゃあトリシユ、エレインさんのこと見失っちゃったんだ？」

「ええ、面目ありません。これでは鍵をどうすれば良いのやら」

「先に屋敷に帰っちゃったのかな……」

《アルドール様も私のこと無視しないでえー！》

「あ、ごめんヴィヴィアンさん」

がさがさと鳴る草むら。木陰から現れたのは母さんとアルドール様、それからトリシユ。

「あ……」

「ら、ランス！？」

まずアルドール様と目があった。気まずさを互いに思い出す。それを打ち破ったのが母さん。ユーカーめがけて突進していく。それ

を紙一重で避け続ける従弟。

《ちよつとユーカー！何楽しそうなことやってんのよ！私のランスを独り占めしてっ！！》

「別に俺は悪くねえよ！ランス！虫除けスプレーか蠅取りリボン持ってこい！」

「領主があんなこの領地にそんな画期的な物があるとでも？」

「くそっ！里帰りしねえと補充できねえのかよっ！！」

セレストイン領は南部でもそれなりに南に位置する。防虫技術はそれなりにある。逆を言えば虫が多い。だからそれに慣れてくるユーカーは虫が得意というかと言えばそうでもなく、むしろ苦手に近い。城での一戦ではたぶんこいつが一番震え上がっていただろう。アルドール様達の手前格好付けてはいたんだらうけど。まああれは虫じゃなくて母さんだしそれとこれとは関係ないか。

「イズーうううう！？ど、どうしたんですかその格好！頭から水でも掛けられたような、びしょ濡れじゃないですか！」

水を浴びた所為で髪が下ろされているユーカー。ああ、半ばセレス化しているようなものか。トリシユが大喜びだ。しかしそんな姿に直視出来ず目も合わせられないとは、どこまでこいつに本気なんだらう彼は。目を逸らしつつ上着を渡す。今日は上着リレーが頻繁だな。アルドール様も自分の上着は雑巾のように絞って片手に。結局ここにいる誰もが自分の上着を着ていない。唯それだけのことなんだけれど、何故かそれが俺のツボに来て俺は吹き出してしまった。それにみんなが驚いた顔をしたあとに、釣られたように笑い出す。ユーカーも呆れたように、だけど優しく笑って……俺達に串を刺しだした。

「めんどくせーからお前ら全員残りの食材処理手伝え。あとついでに片付けも」

「えー俺も片付け？ここ散らかしたのユーカーだろ？」

「黙れ宿無し野宿王。一口でも食った以上お前も共犯だ。あと文句言つなら鍵開けてやらねえ」

「解った。何でもするよ。ていうかこれ美味しいね。お代わりある？」

「変わり身早ええよ」

「イズーの手料理……手料理、イズーの……」

「お前はさつさと食え。冷えたら勿体ねえだろうが」

ツッコミの傍ら背中や頭を軽く叩かれている。トリシユは幸せそうだから別に良いとして、流石にアルドール様にまで手をあげるのはどうなんだ？

「あ痛っ！」

「だからお前はアルドール様に対して無礼だ」

脳内会議すぐに終了。やっぱり却下。俺もユーカーの頭を軽く叩いておいた。

「くうっ……」

俺を数秒睨んだ後に、言い返せないらしいユーカーがアルドール様に向き直る。

「もう、アルドールお前帰れ！お前居るとランスがランスじゃねえ！」

「えええ！？それ俺の所為！？」

「ランスの所為だがランスの所為はお前の所為だ！こいつお前の

騎士だろが！」

そのやりとりが再び俺のツボにきた。腹を抱えて笑う俺に……二人は目を瞬かせる。そして二人で顔を見合わせたと思ったら、二人して吹き出した。

「ざまあランス、凄え阿呆面！せつかくの唯一の取り柄の顔が残念になってんぜ！」

「ユーカー！まだ全然許容範囲だろこのくらい！これで残念なら平均顔の俺なんかどうなるんだよ！！」

「お前は顔面生ゴミって名乗ったら良いんじゃないやね？」

「酷っ！！ちよつと最近ユーカーイグニスに似てきたろ！？そんなに俺に好かれないのか！？」

「似てねえよ！そして俺に近寄るなっ！！むしろめえが神子に似て来た！！そんなに俺の嫌がる顔が見てえのか！？」

そこでユーカー以外の全員が頷いて、とうとう彼も本気で怒る。これは不味い。

「てめえら全員ぶっ殺す！コートカード様の力見せてやんぜ！」

「まあ、落ち着け」

咄嗟に俺はもう一つの水桶を彼に思いきりぶちまけた。

「落ち着いたか？」

「いい加減にしる阿呆っつ！！！」

怒りを通り越し、呆れに至りユーカーが笑う。今日一番のいい顔だ。俺と馬鹿なことをするのがこいつはやっぱり好きなんだな。胸ぐらを掴みかかって来た従弟は、俺を殺したいほど怒っているよう

には見えなかった。

「アルドールっ！それからトリシユっ！そっちの桶に水汲んで来いっ！そんでもってこの野郎の澄ました面にぶちまけてやれ！」

鍵開け係がこういふのだ。誰も逆らえない。

走り去る足音。暫く後にまた戻ってきて……それは予告も無しに俺とユーカーを狙ってきた。

「冷てえっ！何しやがんだっ！！」

「だってユーカー離れないし、邪魔だったから俺ごとやれるなあれかなって」

「合図くれれば俺も逃げるわ阿呆っ！」

アルドール様を怒鳴るユーカー。その声を留めたのは、次の水攻撃だった。

「聞いてたのに何でてめえまでやるっ！！」

「水も滴るいいセレス……素敵です……」

「阿呆っ！お前戻ってこい！ちよっと！目がおかしくなってるんぞ！？大丈夫か！？おいトリシユ！！！」

水桶を投げた後、力尽きたかのように崩れ落ちるトリシユ。駆け寄るユーカーに見取られながら卒倒。何が原因だったのか俺にもよくわからない。

「つて次は誰だよ！？」

俺から離れたユーカーを狙い、再びぶちまけられる水。その方向からはくすくすという笑い声。

「この僕を誘わないなんて良い度胸してるじゃないか。こんな美味しそうなタダ飯会を開催しておいて！」

「あ、イグニス！」

「い、イグニス様……？」

何時の間に現れたのだろう。神子様が火の側に座り、焼けた串をもぐもぐ食していらっしゃる。秘伝のタレは無断で使用されていた。今のは彼の数術だろうか。

「アルドール。君のそっちの焼きたての串僕にくれないと、絶交ね」

「好きなだけ食べよイグニス！」

「てめえ何処まで神子の犬なんだ！この乞食神子！飼い犬王！勝手に俺の秘伝のタレ使うな！それ作るの結構面倒臭いんだからな！」

その騒々しさに嫌気が差したのかユーカーから離れた母さんが、俺の方へと飛んでくる。しかしその顔は嫌がってはいなさそう。

《賑やかね、ランス》

「母さん……さっきはごめん」

《……いいのよ。あんな形でじゃないけど、いつかは教えなきゃいけないことだとは思ってたから》

母さんが俺の謝罪に首を振る。

《あんたがこれからどうするかはあんたが決めなさい。私が指図できる事じゃないにしてもいいことじゃない。それでも心配だけはさせて。それが親の務めだもの》

それ、大事にしてねと首飾りを指さされた。

「ええ。母さんだと思って大事にします」

《きやああ！もう！嫌ねえ！あんたが言うど何でも腹立つ位格好いいわ》

母さんが照れたように俺の周りと飛び回る。確かに若干、蠅っばい。

《でもちよつと安心したわ》

「え？」

《あんた、しばらく見ない内に……良い友達増えたじゃない。何時までもユーカーだけかと思って心配してたのよ》

「そ、そりゃあ……俺だって。ユーカーは大切ですけど……俺も人間ですから、他に繋がりのある相手だっていますよ」

人間社会は縦横の繋がりで構成されている。誰とも関わらず生きてはいけない。精霊に育てられても、俺は人間だから。

(でも……友達か)

そう呼んで良いのか若干困る相手も数名いるが、俺を支えてくれる人であることには違いない。イグニス様もアルドル様も、俺に身分を感じさせない、自分自身の言葉で……俺を励ましてくれた。トリシユもそうだ。まっすぐ俺にぶつかって来てくれた。俺に過ちを教えてくれた。

《でしようけど、それでも……良かったわね》

「はい、母さん」

*

「酷いですセレスさん！どうして僕を起こしてくれなかったんですか！？」

「あー、うんと、その、悪い」

翌日ユーカーに泣きついていたパルシヴァルを見て、昨夜全く彼のことを思い出さなかったことを心で詫びた。でも彼と俺はまだ友人とかそう言うレベルまで親しくないように思う。親友の弟分って……まあ、殆ど赤の他人だな。

「わーった。今度何でもお前だけに特別にこっそり作ってやっから、な？機嫌直せって」

「本当ですか！？ありがとうございます！」

むしろ敵かもしれない。俺の従弟に抱き付いたその子供に、大人げないが割と本気でそう思う。

名前つて何だろう。よくわからない。母さんが僕をパルシヴァルと呼んでいたけど、僕はそれがいつからなのかわからない。誰が僕にくれた名前なのかわからない。

物心ついたときには、僕はその森の中にいた。別に寂しくはない。母様も一緒だった。

だから別に僕はおかしいとも思わなかった。それは世の中はそう言うものなのだと思うたから。

母様は僕に、この森の中から出てはいけないと言った。どうしてとか僕は聞かなかった。母様がそう言うのならそういうものなんだろうと思つた。今覚えばとつても変だ。そんなことを言う母様も、それを疑問に思わない僕も。だけどその時の僕にとつて、この世界とはそう言う物だったんだ。だからそれも仕方のないことのように思う。

そんな森の中にあるとき人が現れた。僕とも母様とも違う第三者。それは僕がはじめて目にした他人だ。

僕を危険な目に遭わせたつて母様はとても怒つていた。本当は違うのに。僕はそこではじめて母様に疑念を抱いた。だってあの人は、セレスさんは何にも悪くないんだ。僕を助けてくれて、母様から僕を庇つて自分の責任だなんて言つたんだ。

そのまま森から出て行こうとしたあの人を引き留めて、一晩の宿を母様に願ひ出た。僕のはじめての我が儘だった。

その時僕は、セレスさんは疲れているだろうに一晩中質問攻めにしてしまった。世間知らずの僕にあの人はいろんな事を教えてくれた。セレスさんは男で騎士で貴族でカーネフェル人。僕の中には僕と母様という概念しかなかったから、あの人の言うことすること何でも新鮮で輝いて見えていた。

僕にとってあの人が憧れなのは、彼に助けて貰っただけではないのだろう。この森という狭い僕の世界。その外を教えてくれたのがあの人だ。森の外に広がるであろう青。木々の合間から覗くあの空のような人。あの人への憧れは外への憧れ。僕にとっての外の代名詞があの人だった。あの人の何もかもが綺麗で正しく見えた。母様のすべてが歪んで濁って間違っているように思えた。

だから僕は許せなかった。それが好きだったはずの母様の言葉でも許せなかった。僕の大好きなセレスさんに酷いことを言う母様が許せなかった。

セレスさんの綺麗な目を馬鹿にして、罵って……

「汚らわしいっ！そんな薄い色でよくも騎士になれたものだ！お前も所詮は城を都を腐らせた都貴族！落ちぶれて騎士などになつたその飼い犬なのだろう！？汚れた血がっ！私とこの子の前に立つなっ！！」

違うよ母様。セレスさんは真純血です。それに綺麗な青です。それにセレスさんはセレスさんです。僕を助けてくれた、恩人で……僕のヒーローです。世界で一番格好いい騎士様です。少なくとも僕にとってはそうです。僕の憧れる騎士を、貴族の駒とか犬とか言わないで下さい。

どうして何も言い返さないんですかセレスさん？貴方は何も悪くないのに。どうして何も言わないんですか？

「……………あ」

僕は目を開ける。なんだ、夢か。そうだよ、夢だ。

「……………母様」

僕は薄暗いその場所を飛び出した。暗いところにいると気持ちまで沈んできてしまうみたいで怖いから。だからあんな嫌な夢を見てしまったんだ。

いや、嫌な夢でもないか。久々に母様に会えた。思うところはあるけれど、やっぱり僕は母様を完全には嫌いになれていないんだ。それに……であつた頃のセレスさんにまた会えた。懐かしくて、嬉しいはずなのに少し悲しい気持ちになるのはどうしてなんだろう？

「……お帰りなさい、セレスさん」

いつの間に帰って来たんだろうこの人は。せつかく驚かそうと思つて隠れていたのに、セレスさんは疲れていたのかな。着替えもせずつに眠ってしまったらしい。

そこから出てみれば、室内は少し明るい。もう早朝になっていたらしい。でも僕も眠つた気がしない。それもそのはず。クローゼツトで体育座りなんかしてうたた寝。ちよつと無理な体勢だったのか身体が痛い。

この人にもう一度会いたくて、この人みたいになりたくて……この人を追いかけて僕は森を飛び出して、はるばる都まで来たけれど……最近のセレスさんは、とうか外で会うセレスさんは前ほど僕を構ってくれない。それはセレスさんが関わる人が僕以外にもいっぱいいるからで、それは仕方のないことなんだけど僕は少し寂しい。

だけど夢の中で、母様に言い返さず唇を噛み締めていたあの人は、言い返さなかつたんじゃないやなくて言い返せなかつたんだと思つた。あの時はそんな風には見えなかつたけど、今はそんな風に僕は思つた。ずっと強くて凄い人だと思つていたけど、この人は弱い人でもあつたんだ。外で見るセレスさんは、あの頃より強くない。他にもつと強い人がいて、セレスさんを狼狽えさせる。でもそれでもそれはセレスさんだ。

(僕も強くなりたいな……)

この人が弱いなら、僕が助けてあげたいんだ。あの日この人が僕を助けてくれたように。僕はセレスさんみたいになりたい。セレスさんにとつて、僕にとつてのセレスさんみたいな騎士になりたい。恩返しをしたいとかそんな格好付けるつもりはないし、僕に憧れて欲しいとかそんなつもりは毛頭無い。

僕が森の外へと来てみれば、僕に世界の広さを教えてくれたこの人が……世界の全てを知っているように見えたこの人が、とても小さな存在で、何も知らなくて……狭い世界を生きていることを知ったから。僕はこの人に教えてあげたい。空はあんなに青いんだよつて。片目で世界を見て、わざと貴方は狭めていませんか？本当はもつと……そう思うのに。

ランスさんは僕の母様みたいだ。セレスさんにとつてのそれだ。僕は母様の言うことを信じた。母様が空は赤いというのなら、僕はそうなんだろうつて思った。

セレスさんはランスさんが正しいつていつも言うけれど、僕にはどうしてもそうは思えなくて……ランスさんとセレスさんなら、僕は即答できる。正しいのはセレスさんの方なのにつて。

*

「……………」

これはどうしたことだろう。俺は、ユーカー「セレスティンは考え込んだ。

確か昨日は窓から扉から鍵は掛かっていたはずだ。ていうか掛けた。それなのに何故自分の部屋にこいつがいるのか。いつも結つてる髪は解いてあって女みてえだ。本気持ちよさそうにすやすや眠つてやがる。神子と違って外見だけじゃない。こいつは内も外も天

の使いに見えないことはない。可愛いのは素直に認めてやる。だが何でこいつが俺のベッドに潜り込んでなんかいるんだ。正直俺にそんな趣味はねえ。絶対ない。たぶんないはずだ。ないんじゃないかと思う。ないんじゃないかな。いや、弱気になってどうする俺！そんなんじゃアスタロットに申し訳が立たねえよ。

「おいこらパー坊」

自分の部屋くらい与えられたらどうに何故俺の横で寝てるんだこのガキは。ランスの失敗に懲りて俺はこいつには鍵開けを教えてねえはずだ。自分でやってのけたのならなんつーガキだ。恐れ入る。だが恐れ入ってる場合じゃねえ。肩を揺すって起きろと怒鳴る。

「……………う、……………あ、おはようございますせれすさんー」

起こしてみたがまだ半分寝ているらしい。ろれつが全然だ。っていつか腕が動かなくて金縛りか何かかと思っただけ飛び起きたが、実の所俺もまだ結構眠い。昨日は夜中まで連中と馬鹿騒ぎやってた所為だ。大体の所ランスの所為だが、責任者として神子がアルドールが悪い。神子は女だしここは騎士道精神でアルドールが悪いと言うことにしてやる。よってこんちくしょうアルドール。俺の睡眠時間を邪魔しやがって。だが、眠すぎて怒る気力もねえ。

「ふああ……………眠い」

俺ももう一度ごろんと横になる。

「一つ教えるよ、お前いつ来たんだ？」

「せれすさんおどろかそうとおもって……………くろーぜつとにはいどいんですたんばいしてましたー」

俺も身に覚えがある。昔親父を驚かそうとして、俺がいなくなったらびつくりするんじゃないか思ってた……でもその日誰も部屋に來なくてそのまま泣いた気がする。何やってたんだ俺、馬鹿じゃないのか？まあ、兎に角だ。気持ちは何となくわかるが意味としてはわからない。何で驚かせ用なんて思うんだか思ったんだか。発想がガキだ。

しかしなるほど。確かにランスの阿呆に連れ出された時に部屋の戸締まりはしてなかったかもしれない。その隙にやって来ていたのか。

妙に納得していると、パルシヴァルがまたこっちに密着して来る。俺は枕じゃねえ。

「おいこら、暑いから離れろ」

文句を言ったが相手は完全に爆睡している。寝付きの早さが羨ましい。こんな暑い日によくここまでやれるもんだ。でも暑いのは事実なので、無理矢理引っぺがそうとした俺に、パルシヴァルが寝言を呟いた。

「かあさま……」

恐るべしマジックワード。俺も実家とは上手くいっていないからそういうことを言われると弱い。

「……仕方ねえな」

耐えるしかない、この寝苦しさにも。

俺がこいつに甘いって自覚はあるが、こればかりは仕方ない。

こいつが家を飛び出したのは大体俺の所為と言っても違いはないんだ

から。

(……………立派な騎士になるまでは、か)

それまで故郷に帰れない。母親に会えない。寂しいだろうな。こいつはまだ子供なんだから。でもそこまでしてどうして騎士になんかなりたいのか。俺やランスなんかは他の職業選択の自由が無かったに等しい。だからこうしてる。でもこいつは違う。他のことだって出来ただろうに。

おまけに神子にそそのかされてアルドールの護衛になんかさせられちまった。こいつに何かあったらただじゃおかねえ。最悪こいつの憧れである騎士って職業がどんなに最低最悪な物かを教えてでも諦めさせて家に帰るのが一番なのかもしれない。そのためには……まずはこいつが嫌気の差すくらいビシバシ厳しく指導すべきだろう。か。それとも仕える王であるアルドールに幻滅させるのが最善か。そうだ、そうなもんじゃねえ。

「騎士なんて……………」

名誉に覆われただけの人殺しだ。英雄という名の殺人鬼だ。金が名誉が欲しいわけでもないだろうに、そんなものにわざわざなりたがるなんてパルシヴァルは一体何を考えているのだろう。うっすら涙を零すその寝顔からは、伺い知れる物はない。唯母恋しさを感じさせるだけだった。

*

読書の出来ない時間は殺されたり生き埋めにされていることに似ている。まさにその通りだとアルドールは考える。言うなればこの一月、俺は生き埋めにされてきたようなものだ。

読書はいい。一時現から浮遊する。まさに現実逃避。けれどそこで全く何も得られない訳じゃない。本の知識がすべて真実と言うことはあり得ないが、それでもそこから得られるものは多い。他人という物、自分という物。それを考えるに読書は最適。

例えばその本が創作の物語なのだとしても、そこにはその本を記した著者がいる。それは何時の時代の人かは違っても、彼や彼女が身の人間だったことは間違いない。心のある人間が何を思い何を考えそれを記したのか。そこからそれを読み取るのが読書の神髄だ。時を隔てた一方通行の会話と言ってもいい。理解の難しい彼や彼女を暴いていくのが読書の醍醐味。そして何より読書が優れているのは、此方が相手を知ることが出来ても相手が此方を知ることが絶対にはあり得ない。相手の心が思考が赤裸々に明かされているのに対し、俺のプライバシーは完全に守られている。だから安心してその一方的な対話に身を任せられる。

「……………」

この本だつて内容自体は面白い。興味深くある。以前も読んだことがある本だけれど、懐かしくて手に取ってしまった。本はその時とはまた違う味わいを俺に与えてくれている。

それなのに何よりも大好きなはずの俺の趣味。その趣味に没頭できない理由が俺にはあるらしい。

久々の読書なのに、そう思うのはとても残念だ。しかし、つまらないのだ。この一月俺は俺の現実を生きていたのだから。その差違に俺は戸惑っている。俺がして来た対話とは、こんな一方的な物じゃない。俺が著者になったかのように、俺の心の内を暴かせる。相手に伝えたいと思う。そうしなければ相手に何も伝わらないから。

例えばイグニスとユーカー……あの二人は捻くれているけど繊細で真っ直ぐだから。俺が嘘を吐いてはならない。自分は嘘を吐くけど相手には真実を望むのがあの二人の共通点だ。人間不信が入って

いるけど純粹なところだと評価すべき箇所だろう。

俺はアージン姉さんに嘘を吐いた。だけどそれが姉さんを傷つけた。だからおれはフローリップに対し真摯で在ろうとした。姉さんに出来なかった分、その代わりとして彼女に俺は嘘を吐かなかった。しかしそれが彼女を傷つけた。

ルクリースはいつも嘘ばかりを吐いていた。息をするように冗談を口にしていた。それでも俺の中で彼女の評価は揺るがない。肝心なときにはいつも傍にいてくれて、いつも俺を守ってくれていた。そう言うときは絶対に嘘を吐かない人だった。

嘘と本当。相手によってこのさじ加減は難しい。自分に偽りなくいれば、それですべての人と上手くやっていけるわけじゃないんだと俺は学んだ。

今読んでいる本の中には、当面の問題を解決してくれるような答えはどうやらないらしい。俺はこれが現実逃避なのだと認めざるを得なかった。

(難しいなあ……)

だって相手はあのランスだ。

最初こそ完全無欠の完璧超人美形騎士か何かと思っていたが、彼はそんな簡単な人ではなかった。表面上、彼は完璧だ。由緒正しい貴族の家柄と血筋、穏やかで品のある容姿と親切なその性格と、騎士の鏡と言うべき精神。剣の強さも一級品。その評判は国を超え、多くの人の憧れだ。

……かと思いきや、料理の見た目が最悪だったり、何かにつけて魚介類をぶっ込もうとしたり、父親が性犯罪者すれすれだったりする。後、素で相方のユーカーには天然で鬼畜入ってる。弟代わりの従弟が可愛いのは解るが、彼の可愛がり方はちよっと間違っている。何だかんだで二人がそれで楽しそうだから俺がとやかく言うことじ

やないとは思うから、その点はスルーしよう。それでもだ。

あの二人の関係性はちよつと異常だ。親友兼親戚なんだから、他人兼身内っていうちよつと微妙な繋がりなのは解る。だから本人達もその距離を測りかねている節がある。

俺だつて親友のイグニスが他の人に取られたらちよつと嫌な気持ちにはなる。寂しいと思う。当人達同士がいがみ合っているのは知っていても、イグニスとユーカーが毒舌合戦をしているのを見るとちよつと自分が取り残されたような気持ちになる。俺としてはイグニスは大好きだし、ユーカーのことも気に入っているのにこういう気持ちになるのはとても嫌だ。二人がじゃなくて、そんな風に思ってしまう自分のことをとても嫌な奴だと思ふのだ。

詰まるところ、大事な相手というのはそれが例え友人であっても執着が生まれるのは間違いない。それは何故かと考えた時に、相手が他人だからという結論に俺は至つた。他人は他人。自分の考えで、どうこう出来る相手じゃない。だからこそその軋轢、葛藤の末の執着なのだと考える。

仮に相手が身内なら、そんなことはあり得ない。身内は完全には言わないが、ある程度干渉できる相手だ。年長者ならば年下の相手がある程度従えることも可能。言いなりに出来るつてことは、執着を産まない。従えることが出来ないからこそ、そういう執着が生まれると仮定しているから。だから身内相手にそんな感情を抱くなら、それは身内に違ふ感情を抱いている。そう考えることも出来ないくはない。

だからそう言う意味ではランスは……彼を身内として見ていて、それでも他人として見ている。だから言いなりになるようではならぬ、ならないようである彼への思い入れがちよつと大きい。

みんなに優しいつていう彼が、優しくかったり優しくなかつたりする唯一の相手だ。ある意味特別だということだ。ランスの仮面を引きはがせるのはユーカーだけだと俺が思うのはそういうところからだと思う。現に、窓の外からの殺気が凄い。半端ない。

「ちょっと腕がおかしいな。いいか、一回手本見せてやつから。……つとこうだ。解るか？」

「ああ、なるほど……はい！解りましたセレスさん！」

「もう解ったのかよ！？」

「え？変ですか？」

「お前一ヶ月かそこらで俺より強くなったら呪うからな」

「そ、そんな一月で何か無理ですよ！それにセレスさんの教え方が上手いっただけで僕は全然……」

「つ、……続けるぞ！む、無駄口叩いてる暇はねえ！」

「はいっ！解りましたセレスさん！」

外では弟分のパルシヴァルに稽古を付けてやってる、意外と面倒見の良いユーカー。そんな二人を見守る体でにこにここと、それでも冷房数術が不要となるような殺気を発しているランス。とてもじゃないが彼の第一印象とはまるで重なるところがない。

北の湖城とやり合う意味で、戦力強化は確かに必要。ユーカーのしてくれていることは正直誰にとっても有り難い。それはランスも理解しているだろうに、内心複雑なのだろう。

可愛い自分の弟分兼玩具を他人に取られているのだ。ユーカーはランスの精神安定剤でも担っているのか。ユーカーに接する時間が減れば彼の表面上の余裕が削れていくような気がする。

しかしそんな不機嫌顔まで絵になるような美形だからどうしよう。たぶんどうしようもない。大抵の女の人はあれだけのイケメン相手なら何されても許してしまうんじゃないだろうか。理不尽だ。だけど男の俺でも納得してしまいたいそうになるから怖い。血の何分の一かは同じはずの従弟のユーカーがあれなのに。ランスのお母さんつてよっぽど美人だったんだろうな。あ、いやユーカーのご両親を知らない俺がこんなこと言っちゃ失礼か。ユーカーもなあ。黙っていればそこそこなの。黙ってないから。彼の印象を美形から遠ざける

のがその内面なのだとしたら、いやでもそれじゃあそもその話が成り立たない。内面ならたぶんランスの方が酷いんじゃないのか？見る限りそうだ。それが許されてしまうクラスのイケメンだから恐ろしいと言っているんだ。男に五月蠅いあのルクリースが鼻血を出すような美形だ。その恐ろしさは察するに余り得る。

それでもだ。流石にあれは大人げないんじゃないだろうか？っていうかランスも他にやるべきこととか仕事とか山ほどあるんじゃないのか？王としての俺の補佐もあるし、遊び歩いている父兼領主の尻ぬぐいもあるだろう。こんなことを何も手伝えない俺が言うのも何だけど、ランスも暇ではないだろうに。仕事も手に付かないほどあの二人が気になるのだろうか。

さっきまでちょっと離れたところから声援を送っていたトリシユはユーカーに領内の仕事でも手伝って来いと怒られていい笑顔で颯爽と消えていった。ええと、トリシユが幸せそうで何より。

ランスの殺気にはユーカーも脅えているのか、単に気付いていないのか。ランス相手に同じようなことは言わなかった。言っても無駄だと思っているのか、はたまた「こいつもパー坊の稽古つけてやるつもりなんだな」と盲目的に好意的に解釈して勝手に好感度を上げているのかも知れない。ユーカーはランスに憧れているところがあるから、それも充分あり得ることだ。

しかしそんな二人に挟まれてるパルシヴァル……あの子が哀れだ。あんな年からそんな苦労人の役を押しつけられてはあまりに酷い。何とかしてやりたいと思う。パルシヴァルは裏表なく素直で無邪気な少年だけれど、ユーカーには可愛がられているのに対し、あの誰にでも人当たりの良いランスにはあまりよく思われていない。とか思えば、これまたある意味純粋なトリシユとランスが友達だったりする。人間関係って複雑だ。

「なあ、イグニス」

「何？つまらない用件なら自重してよね」

ベッドに寝そべりごろごろとしているイグニス。目で俺に扇子でも持ってきて扇げと言わんばかりのくつろぎっぷりだ。ランスの次に仕事があるだろうに、彼女もこれまた働かない。病人相手にあまり酷いことは言えないし、充分これまでイグニスはよく働いてくれた。だから彼女が休んだりだらけるのは俺も異論はない。異論はないのだけれど、むしろ俺がここにいて良いのか解らなくなる。むしろ邪魔じゃね？でもここ俺に割り振られた部屋なんだよ。ここ追い出されたら俺何処行けばいいの？俺の部屋が一番いい風が吹き、俺のベッドが一番広くてふかふかだとかそんな理由で乗っ取られたんだけどどうしよう。

ってそんなことじゃなくて俺がイグニスに相談したかったのはランスのことだ。でもイグニス今機嫌悪そう。暑いのかな。そんな暑くて苛々しているときに夏生まれの俺なんか話しかけられただけでも暑くなるかもしれない。っていうか君の存在自体暑苦しいんだよ視界から消えて。っていうか筆ってやろうかそのロン毛とか言われたら一日くらい立ち直れない。

「そっか、ごめん自重する」

「そこまで言いかけて止めるとかこの上なく煩わしいんだけど、君の様子から察するにどうせまたセレスティン卿かランス様辺りのことかい？」

「流石イグニス、その通りなんだけどさ」

彼女を認めながら、語尾を濁す俺。そんな俺の態度にイグニスは一度小さく嘆息をした後、こんな言葉を投げかけた。

「……ねえアルドール、同族嫌悪って知ってる？」

「言葉としては」

「意味は僕も余裕で知ってるから脳内ペディアとか脳辞苑で読み

上げないで良いからね」

俺の得意分野が潰された。ちょっとイグニスの前でたまには良い格好を付けたかったのに駄目でした。調子に乗るな屑ってことですよねわかります。

「君は根暗だし自分大好きの自己愛者でもないし、君は君にそっくりな人間に会ったことがないんだろっね」

もし俺が自分にそっくりな奴に出会ったら、心底苛つくはずだと彼女は言った。それが起こりえないのは、俺のような考え方をする奴がそんなにいないからだろうとも。

「じゃあ仮にこうしよう。これは君に限らずだ。昔の自分が目の前にいたら、それはとても苛立つだろう?」

「それは、まあ」

頷く俺に、イグニスは……そういうものさと目を伏せる。

「ウィリアム症候群とでも名付けようか?今の自分がその昔に勝つていても劣っていても、人はそう思ってしまうものなんだ」

「ウイルソン症候群でもいいかもな」

俺が手にした本を見て、イグニスが小さく笑う。それに俺も笑って返した。流石はイグニス。世界最高峰の数術使いは、読書なんかしなくとも本の情報までカバーしている。本は一方的な世界だけでなく、こうして時に誰かとの共通の話題になるっていうのが嬉しいところだ。

「イグニスもこの人の話知ってたんだ。何が好き?俺はあの宝探

しの……」

「僕は振り子の話が好きだな。あとワイン蔵の復讐話。ぞくぞくするよね」

「流つ石、イグニス！通だなあ！」

ブレずに今日も俺の親友はドSで鬼畜でいらっしやる。でも不殺を説く教会の神子がそんなこと言っちゃ問題発言だよ？いやしかし、だからこそ神子になっても相変わらずイグニスなイグニスが俺は大好きなんだけれども。

それはさておき割と本気の冗談はこのくらいにしてと、イグニスは窓の外へと視線を投げる。

「仮に今と昔が全く同じであつても人は彼や彼女に嫌悪するだろう。彼と彼の場合はそのどれに当てはまるのかは、君の想像にお任せするけどね」

「それじゃあ、あれはどうしようもないってこと？」

「それでも今の状況ならまあ、どうにもならないよ。このドツペルゲンガーはどちらもカードだからね。ランス様にはパルシヴァル君を殺せない。だから小説通りとはいかないさ」「……ランス“は”って」

嫌な言い方するな、流石イグニス。先を見据える彼女の瞳はとても遠くを見つめている。

「パルシヴァルだつてそんなことはしないよ」

「今はね。だけどさアルドール。幾ら彼が無邪気な子供とはいえ、無邪気さは時に諸刃の剣だよ。僕はある一点において子供ほど残酷な生き物を他に知らない」

「ある一点？」

「愛情だよ」

「愛情……？」

「ああ。子供って言うのは人からの好意を、無償の愛を欲しがるものだ。特に彼は親元から離れているわけだろう？寂しくないはずがないんだ」

その愛情欲しさに世の兄弟は蹴落としい、貶め合う。フロリープを、姉さんを……俺は思い出していた。確かに、そういうことはある。確かに、……ある。

「セレスティン卿は兄貴分として彼にそれを注いでる。だから彼はあんなに彼に懐いているんだよ」

パルシヴァルにとってユーカーは唯のヒーローでも恩人でもない。やっぱり他人と身内のような思い入れが内在しているのだと彼女は言う。まあ、兄代わりだけじゃなくてここ最近は女装で姉代わりまでやってくれるんだから母恋しさのある子にとっては有り難いだろうなあ。

「……ランスがユーカーに執着してるのも、それと同じってことなのか？」

「そういうことだよ。ランス様は弟代わりのセレスティン卿に、セレスティン卿はパルシヴァル君に無条件で慕ってくれる……自分を愛してくれる気持ちを貰っているんだ。彼らは自分が大嫌いだからそういう相手が貴重なんだよ」

そこでイグニス……君だって、とは言わなかった。俺がルクリースとうち解けた理由がまさにそれだった。俺の大嫌いな俺を、彼女は好きだと言ってくれた。そんな彼女の言葉に支えられ、俺は大嫌いな自分を好きになれるよう、頑張っただけのことだ。

俺だってルクリースがフロリープとうち解けてからは、ちょっと

疎外感を感じていた。どっちも大切だったのに。今と同じ馬鹿な気持ちであの頃だって持っていた。俺はまるで成長出来ていないのか。

「でも……」

幾らイグニスという言葉とはいえ、俺はそれを頭ごなしに受け入れられない。それが俺のことならランスのことならともかく、これはパルシヴァルの話だ。

だってパルシヴァルはそんな子じゃない。まだ付き合いの浅い俺でも彼の純真さは知っている。彼は在りし日のギメルを彷彿させる程。彼が女の子だったら俺はすっかりときめいていたかもしれない。

「彼が本当に良い子なのは認めるよ。だからこそ僕も彼を引き入れた」

それは認めると起き上がったイグニスが俺に言う。だけど彼女はそこで言葉を止めたりしない。

「でも考えてご覧よ」

イグニスは、俺に思考を促した。

「彼がこのままランス様の悪意に当てられてごらん？ 白い色ほど良く染まる。彼は今のままでいられるだろうか？」

「それなら、尚のことどうにかしないと」

「具体的には？」

「解らないけど、ランスとパルシヴァルに何かあったら困るよ」

「どうして？」

「どうしてって、そんなの当たり前だろ？ 二人ともこんな俺に仕えてくれているんだ。だったら俺が二人を守らないと」

本を置き椅子から腰を浮かせ、今にも飛び出さん勢いの俺を見て、イグニスが待てと視線で止める。そしてゆっくり俺に近づいて、俺より低い背丈から、俺の頭をそつと撫でる。

「い、イグニス？」

「馬鹿の君にしては合格だ。少しは王らしくなって来たじゃないか」

あのイグニスに褒められている。嬉しくて涙と鼻水が出そうだ。っていうか今のイグニス本当優しい顔で笑ってる。飴と鞭とは言うけど普段の鞭が厳しい分、この飴は格別だ。この笑顔のためなら多分何されても俺は許せる、耐えられる。

「アルドール。王の資格はね、人を憐れみ思いやり、愛する心だよ。王は奪う者であってはならない。守る者であり愛する者であることだ。例え愛されなくとも、君は国を人をちゃんと愛してあげて欲しい」

出来るかい？と彼女の目が言う。ここで出来ると答えられないのが俺という人間だ。自信はないけどそんな風になれるように頑張りたい。そう返すのが今の俺の精一杯。いつかもう出来ているし、ずっとそう出来るように頑張るよと答えられたらとは思つ。

俺らしい情けない返答に、イグニスは苦笑して俺から手を放す。そしてさっさと行けと背を蹴った。

「その上で考えて動けば、最悪は避けられるよ。絶対に」

確信を帯びた強い口調でイグニスは、俺に伝えて扉を閉める。よく見れば俺の得物であるトリオンファイまで一緒に廊下に追いやられ

ていた。

窓から突き落とされなかっただけ充分これは優しい対応だ。でもそうされた方が楽に外に出られたんじゃないかなとか思う俺はちょっとどうかしているかもしれない。まあ、今更か。廊下を走り外に出て、俺はユーカー達のところへ行く。

「何だよ。てめえも面倒見ろって言うのか？」

そんなに露骨に嫌そうな顔しなくても。ユーカーって俺のこと嫌いなんだろうか？いやでも嫌われるのって嫌なはずなのにそこまで嫌な感じがしない。おそらくそれは彼がそこまで俺を嫌がっていないからだと仮定しよう。本当に嫌ならユーカーは斬りかかってでも俺のことここから追い出すだろうし口も聞いてくれないだろうし。

逆にここで満面の笑みとか浮かべられたら気持ち悪いよな。それはあまりにユーカーらしくないし、俺もドン引きしてしまう。なるほど、それならこれは俺と彼にとってのいつも通りに違いない。

「おいそこの暇人。振り返るなボケ。お前以外に誰がいるってんだ」

「あれ？俺が暇人だったのか。ちょっと気付かなかったよ」

「人の稽古邪魔する勢いでこっち睨んでくるような輩が多忙とはどうにも思えねえんだがな」

「言われてみれば確かに」

あ、ユーカー気付いてはいたんだ。言われるまでランスは解らなかったのか。本当この二人はボケとツツコミとしては良いコンビなんだな。釣り合いは取れてる。

「アルドールはお前の上司だろ。お前が面倒見てやれよ。その馬鹿は馬鹿でも頭で考える馬鹿だから身体に教え込んでも意味ねえだ

ろっし、理論的に潰さねえと多分無理だ。俺そういう面倒臭えの大嫌いだし」

「まったくお前は どうしてそう……」

そう言いながらも頼られたのが嬉しいのか、ランスは少し機嫌が良くなった。ユーカーはこうやってランスを立てるのが上手い。面倒臭いと口にして、自分という存在の駄目さをアピール。自分をまづ貶める。それは謙譲語のような働きだ。ランスのことは一切褒めていないのに、ランスを結果として持ち上げる。こういうのをさらっと嫌味なく出来るのがユーカーの対ランス用スキルだろう。

これが他の人間にも適応されるなら、彼はもう少し楽に世渡りできるだろうに、ランス限定だから勿体ない。でもその限定仕様がかかっているからこそ、このスキルを使われた側の気分は非常に悪くない。っていうか最高。確かに気分は良いだろう。俺だけ、自分だけ。そういう限定。捻くれ者のユーカーに唯一認められてるってことなんだから。

俺もちよつと勉強させて貰いたいけど、真似したところでそれをイグニスに使っても馬鹿にされるのが才チだ。あんまり俺が面倒臭いネガティブに入るとイグニスはうざったいって嫌がるし。俺をかにかえるレベルのそういうのは大歓迎だろうけど。

「それではアルドール様、僭越ながらお相手させていただきます」

「あ、うん！よろしく！」

俺のところまで来たランスはいつも通りのさわやかスマイル。それに上機嫌分がプラスされてとてつもない破壊力を持っている。俺が女だったら完全にここで攻略されていただろう。イケメン恐るべし。あまりのさわやかさに目が直視できない。

カルディアの砦でだったか、ランスと目を合わせた女はそれだけで孕むとか冗談でユーカーが言っていたが、この瞬間ありえないは

ずの信憑性を感じさせられた。ランス、恐るべし。

「……おい、ランス」

「何か？」

「見た感じ、アルドールとパー坊の力量の差は今のところあんまねえ。身体能力的にはアルドールの方が年の分勝ってるが、こいつの飲み込みの速度は異常だ。良い勝負になると思わねえか？」

「あまり感心できないな。仮にもアルドール様をそんな風に……」

「馬あ鹿。素振りは確かに基本だが、そんだけで強くなれたら世話ねえよ。何事も大事なのは実戦なんだよ。植え付けた理論を身体に行き渡らせる意味でもな」

本だけ読んでも強くはなれない。強くなったような気がするだけだ。だから参考書だけ読んでも計算が出来るようにはならない。応用問題が必要なんだと言わんばかりのごもつとも。

「つーわけであれだ！俺はこれから徹底的にこいつに教え込む！お前はそいつにそうしろ！その上で、夕方にでも一回こいつら手合わせでもさせようぜ？」

「僕が、王様とですか？」

「遠慮は要らねえ。ここで手を抜くことが無礼だと思えパルシヴアル！それが騎士道精神って奴だ」

「はい！セレスさん！」

戸惑い一瞬、やる気十分。秘密の特訓でもするのか場所を変えるぜと二人は去っていく。でもとりあえず一言言わせてくれ。

「え……？騎士道ってそういうのだったっけ？」

俺の言葉に、隣でランスが小さく吹き出していた。ユーカーのや

ることなすこと彼の笑いのツボらしい。

「し、失礼しました。アルドル様の前でとんだ無礼を」

「いや、いいよ。本当ユーカーは面白いな」

あ、こんな言い方したらお前と一緒に全然面白くねーよ的ニユア
ンスを醸し出したりしないだろうか？どうしよう俺うっかり酷いこ
とを。いや、面白くない訳じゃないんだよランス。唯ちょっとラン
スと二人きりだと俺も緊張するって言うかなんというか。ユーカー
とセットの時のランスは穏やかだしボケ度全開なんだけど、ランス
一人だとボケもあんまり発生しないっていうかツツコミ入れて良
いのかどうか判断に悩むっていうか、そもそもキレのあるツツコミが
出来ないはこの人の応対が出来ない。俺にはそういうキレがないか
らちよつと難易度が高い。

そんな割とどうでもいいけど本人としては深刻な葛藤をする俺に、
あっさりランスは頷いた。

「はい、見ていて飽きません」

だからってガン見は自重しろよとは俺にはちよつと言えなかった。
所詮チキンです。すみません。

「それじゃあユーカーみたいな喜怒哀楽の激しい女の子がタイプ
？」

「な、何故突然そのような話を？」

ちよつと狼狽えたランスが可愛い。こういう余裕のある相手が戸
惑ったりすると生じるギャップってのがあるんだな。

「いや、ランスは当然モテるだろうから。好きな子いなくても好

きなタイプくらいはあるんじゃないかなって」

「それはあるかもしれませんが、そのようなことを聞いてアルドール様が得られる物などあるのですか？」

「後学のために」

「……アルドール様はおモテになられたいのですか？」

あんまりそういう風には見えないけれど、そうなのならば答えなければと使命感に駆られるようなランス。

なっても煩わしいだけですよと言わんばかりの空気をしれっと出せるのが羨ましい。一回くらい言ってみたいわそんな台詞。ていうか俺の人生における一度目のモテ期ってもう終わったんだろ確か0章で。残り二度が何時来るんだかわからないし、明日の我が身も知れないこの人生……モテ期カウントで寿命を測れると思うとちよつと手放して喜べない。後今ユーカーは男にモテてるけど、あれもモテ期にカウントしていいんだろうか？一回目がアスタロットさん、二回目が今回っていうとユーカーあと一回モテ期来たら危ないよなちよつと心配。ランスとトリシユは日常茶飯事でモテてるみたいだからこの方法では測れない。いや、困ったね。良いんだか悪いんだか。

「あいつはあいつですから、あまりそういう事と結びつけたことはありません。確かにああいう妻でもいれば、結婚などしても毎日楽しく過ごせるんだろうなとは思いますが……」

流石、婚約者のエレインさんと結婚するくらいなら女装ユーカーなセレスちゃん娶るとか言っちゃうだけはある。イグニスと父親にはめられてあんなことまで出来ちゃうわけだ。

ランスは一緒にいて楽しい相手と一緒にいたいんだな。精霊に育てられたからなのか、俺より年上なのにこの人色恋沙汰に疎い。疎すぎる。だって幾ら好きだって言っても相手は親友で男で……とて

もじゃないけどあんなこと……仮に俺とイグニスで置き換えて……
……余裕で出来そうで、困った。イグニスを男だと思ってた時点で
も余裕で出来そうでちょっと悩んだ。まあいつか。仕方ないよイグ
ニスだし。ギメルと瓜二つだからとかそう言うことでもなくて。俺
のイグニスへの好きも、ちょっと行きすぎてる感はある。俺にとっ
てイグニスとギメルは神聖なものなだろうな。例えば敬虔な聖職
者が神様にでも出会ってキスなんかされたらむしろ光栄ですっ！！
とか思うだろう。それと似ている。そこに友人としてのフレンドリ
ーな親しみが混ざっているんで、よくわからない物になってしまっ
ているんだろう。

ちよつとしたことで、彼女が女の子だと思つと多少は意識はする
が、それ以前にイグニスはイグニスって言う概念が強すぎて、女の
子らしくないとかそういうわけではないんだけど、あまりそうい
う対象には思えない。それでもずっと一緒にいられるなら俺は嬉し
いし、そのための手段だつて言うんなら、ランスの言いたいことも
凄くよくわかる。むしろ結婚したいよ俺もイグニスと。毎日楽しそ
うだし。

だけどイグニスそのものが俺の好みのタイプってわけじゃない。
それならイグニスのような性格の他の女の子がいたら？ときめくか
？結婚したいか？つて言われると答えはノーだ。俺が好きなのはあ
くまでイグニスであつてその子じゃないからだ。

(この人は、誰かをそういう好きになつたことがないんだな)

返答に悩み思い悩んでいる風なランスに俺はしみじみそう思う。
好きの区別が付けられないのは、そもそもそういう好きを知らない
からだ。

子供って残酷だつてイグニスは言った。この人は子供なんだ。そ
ういう意味で。だからとても残酷なんだ。そういう好きでもないの
に悪い大人に騙されて「え？これって挨拶だろ」とか言つてしまう。

魔除けの儀式とか古来より伝わる神々に捧げる戦の勝利のための奉納なんちゃらとか言われたら鵜呑みにして最後までやりかねないなこの人なら。

ていうか俺より長く生きていてそういう文献にぶつからないこの人が不思議だ。お父さんがあれなら屋敷を探せば官能小説の百冊でも二千冊でも出てきそうなものなのに。なんとなくそれがランスの目に入る前に燃やしたり隠したりぶん投げてるユーカーの図が脳裏に浮かんだ。それと同時にそれを拾ってきて物を粗末にしちやいけないとか説教した挙げ句、これ何の本なの？とか尋ねて来るランスの図まで想像して、俺は少しユーカーが不憫で愛おしくなってきた。イグニスとユーカーをよくいびるのはこういう心境からなんだろうか？でも……あれはちよつと違うかも知れない、なんとなく。

それは兎も角だ。今はランスのことを考えていたんだ。ランス……ねえ。時々俺はこの人が純粹なんだかよくわからない。そんなこと言って常識と良識のある相方の心を抉り、新たなトラウマを植え付ける天然鬼畜というわけだ。

「……ランスはさ、アスタロットさんってどう思ってた？」

「はい？」

「会ったことあったの？」

「……そうですね、何度かは。大人しいですが、五月蠅いあいつとは釣り合いが取れていたのではないかと」

来た。仮面だ。ランスが当たり障りのないことを言って、本心を隠している。

俺が思うにこの問題は、ユーカーじゃない。ランス側にある。ランスが一回でも誰かをそういう好きにならないと、パルシヴァルがとばっちりを受ける。それを何とかさせるためには一度ランスに自覚をさせるしかないんだと思う。

「そうかな」

「え？」

「俺は……どんな似合いの相手を連れて来られても落ち込むよ。それがイグニスだったら」

ランスはイグニスが女だとは知らない。だからこう言う。二人は親友だ。俺にとってのイグニスが、ランスにとってのユーカーだから。だから貴方は違うのかと問いかける。そのための言葉だ。

「一緒にいられる時間が減る。凄く寂しいって、そう思う」

俺の言葉にランスが押し黙る。どうやら自覚してくれたようだ。自分の中に巣くった悪意に。

「私は……いえ、俺は………」

言い直すのは騎士としてではなく、ランスとして俺の問いに答えようとしてくれているからなのだろうか？

「そうですね、俺もそうです。彼女が現れてからあいつと過ごす時間が減った」

愛情と友情は少し似ている。相手が大切だって事に違いはなければきっとそう。独占したいという気持ちが生まれる。だから勘違いする者も世の中にはいる。正直俺も怪しい部類にカウントされるだろう。

でもランスもユーカーも俺と違って頭は良いからその辺を勘違いはしてはいない。けど、知った上で代用しようとしているから質が悪い。友情が代替品として機能しているから、ランスは他者に興味を示さない。限定された興味が周りにとばっちりが及ぶ執着になっ

てしまっているのだ。

「共に切磋琢磨、立派な騎士になろうと誓ったことも忘れて、恋愛ごとにうつつを抜かすあいつを腑抜けと笑ったこともありましたが、失望したのも事実です」

そうですね、俺も多分寂しかったんだと思いますとランスが俺の言葉を肯定する。

「だからこそ……今更俺だけそんな風に幸せになつたら、あいつはどう思うでしょうか？俺はあの日に俺が感じた以上の苦しみをあいつに植え付ける事になってしまいました」

その思いを知るからこそ、同じ思いを味わわせたくないというランスの優しさ。なんだかんだ言っても互いに思い合つてるところはあるから、結びつきは無駄に強い。生半可な覚悟じゃ二人の間に割つていくことは出来ない。

仮に俺が女でも正直ごめんだ。関わり合いたくない。正直お前ら結婚しろと思わないでもないが、危害が周りに及ぶのが目に見えている以上、その辺何とかしないとイケない。そんなことにもなればユーカーがエレインさんに刺されるだろうし、パルシヴァルやトリシユがランスに何をされる事やら。一番平和的解決法はランスとエレインさんがうち解けて良い感じになることだ。何とかならないものだろうか？

「俺は逆だと思つな」

「と、申しますと？」

ユーカーは生きていた彼女への気持ちに嘘を吐いたから、今でも悩んでいるし忘れられない。だからユーカーは今後誰かを、少なく

とも女の人を好きになることはあり得ない。そう言った意味ではまだトリシユにはチャンスがあるのかも知れない。

「ユーカーはそこまでランスとお揃いでいたい風には見えないよ。自分に出れないこと、出来なかったこと。それをランスに託したが、ついているように俺には見える」

婚約者への冷たさ。それが昔の自分と重なるのだろう。同族嫌悪とは少し違うけど。

アスタロットさんにはもう何もしてあげられないから、その妹の幸せを願い、そして自分の分身と彼女の分身としてランスとエレインさんを見る。その二人が幸せになれば自分たちも少しは救われるような気がする。

「託されました……」

「ユーカーは万が一でも自分と同じ後悔をランスにして欲しくないんだよ」

もしエレインさんに何かあったとして、それでランスは何も思わないのだろうか。思わないのならそれはそれで人として騎士としてどうなのだろう。それはランスの言う立派な騎士像とは離れてしまっているのではないか？

「それでも俺は」

そんなこと望んでいないと言うランス。確かにそうだろう。それはユーカーの押しつけだ。でも、それが一番簡単に、ランスを幸せにする方法だと思っているのだ。

「俺は……あいつなら兎も角、仮に彼女に何かあったとしても……」

…それで痛める心は私にはありません」

「……………本当にそう？」

「ええ」

ランスは頷く。嘘を吐いているようには見えない。そこから見るに、彼にとつて女性は守る対象であつて、優しくするべき存在であつて……………それは騎士道精神から来るもので、そこに使命以上の感情はない。騎士だから条件反射で守るだけ。使える王の名に恥じない騎士らしい騎士であること。それが彼にとつての正義だからだ。守るべきはそれであり、彼女たちではない。

（本当にこの人は……………）

誰かに恋をしたことがないんだな。だから、そういう痛みを知らない。愛する人が死んでしまう悲しみとか、変わってしまった想いの悲しさとかやるせなさとか。

（……………可哀相だなこの人は）

もしかしたらこの人は世界で一番幸せなのかもしれないけれど、同じくらい可哀相かもしれない人だ。

この人の外見と外面と名声に人は集まり、彼に好意を捧げるけれど、彼女たちは彼を知らないし見ていない。つまりは愛してはいない。けれど彼自身、誰も愛せない。

愛されないから愛さないのか、愛さないから愛せないのか。俺にはよく分からないけど、ランスが変わるか、ランスにとつて新世界……………言うなれば未知。これまでにならないような相手が現れなければ彼は一生このままだ。カードなのだから彼の一生は決して長くはない。ユーカーが必死になっているのは、最後の一枚になる気がまるでないランスの幸せを思つてだ。生き残らないのならせめて死までの

道程が幸せなものであるようにと、彼は一生懸命彼のことを考えている。

ユーカーが何でコートカードか、ちょっと解った。彼はその幸福を自分のためには使わないんだ。ルクリースとユーカーの共通点がコートカードということ。ルクリースも……幸せのはずのコートカードになったのに、彼女がその幸福を使い果たしたのは一月にも満たない。その幸福の幾らを自分のために使っただろう？俺を守るため、フローリプを、イグニスを救うため……その幸福を、命をすり減らした。

ユーカーもそうするつもりなんだ。それが彼の生き方なら俺が止めちゃいけないんだとは解る。それでも俺は……あんな風に誰かが死ぬのはもう嫌だ。ユーカーがそれで良いと言っても俺が嫌だ。

ユーカーは自分の幸福、命と引き替えに……ランスの幸せを願っている。その祈りでも彼を守ることが出来なければ、その時はアスタロットさんを生き返らせることを望むのだろうけど……ランスが生きている限り、ユーカーはそれを望まない。

二人とも目的が違うから、その優しさとかが無意味になって、思いが空回りしている。だから見ていて歯痒いんだ。

「……そうだね。俺は……俺も、ユーカーに……いや、ユーカーにも、死んで欲しくない」

そこでランスがはっと顔を上げたのが解る。驚いたように俺を見る。

「より難しい、困難な願いは幸福値を大量に消費する。確立をねじ曲げて結果を変えるのがカードの力だ」

「……………」

「ランスがふらふらしているとユーカーの願いも定まらない。幸福値が無駄に垂れ流されるんだとしたら、そういうのは良くないよ」

「俺があいつを犬死にさせると……殺すことになるよ、そう仰りたいのですか？」

「違うよ。俺はランスが俺のためにユーカーをそう使うことを嫌だって言ってるんだ」

ユーカーは俺にじゃなくて、ランスのためにカードの力を使いたいんだ。そのランスが俺のためにユーカーを消費するのはちよつと違う。だってランスが本心からそれを望んでいるわけじゃないんだから。それじゃユーカーも煮え切らない部分があるだろう。

「だってユーカーは俺に仕えているんじゃない。だからさランス……ランスはもう少し自分のやりたいこととかはつきりしてあげるべきだと思うな」

「……………そう、ですね」

それが解れば苦労しません。重い溜息からは、そんな言葉が聞こえた気がした。ランスはなあ……俺並に自分を知らない人なのかも知れない。

でも周りから見ればそれなりに彼の個はある気がするのに……例えば、そう思ってた俺は手にした得物に気がついた。そう言えばユーカーが何か言っていたな。夕方に試合だとか何とか。

ランスも騎士だし、剣技の中には個という物があるはずだ。案外こういうタイプは理詰めより、行動というかそういうのでぶつかる方がいいのかも。ぱつと見はユーカーの方がそういう感じするのに、ユーカーは行動より言葉とかの方が伝わるし、ランスはその逆なのか。本当見た目で測れない面倒なコンビだ。

「まあ、それは置いといて。そろそろ始めないと俺の負け確定色が濃厚になっちゃうと思うんで、剣の方見てもらえたりする？」

俺がトリオンフィを掲げれば、ランスもそれは得意分野だからかとてもいい表情で、喜んでと頷いてくれる。

「解りました、それではアルドール様。一度屋敷に戻りましょう」
「え？」

素振りとか、形とかそういうところから入るんじゃないの？驚く俺にランスは小さく首を振る。

「アルドール様は槍の心得は？」

「いや、全然」

「騎士という物は剣だけではありません。剣と槍と馬術、この三つを兼ね揃える必要があります」

騎士のイメージ、象徴としてまず掲げられるのが剣。そう思っていたけれど……ランスはそうじゃないと口にする。

どうしてここで槍の話になるんだろうとは疑問に思ったが、俺はランスに連れられるがまま屋敷に戻り書庫へと入る。そして槍についての本をいくつか持って来た彼に促され、席に着く。

「言われてみれば確かに本の中の騎士様って槍の名人とかもいるよな。試合とかっていうと槍試合の話とかの方が多いか」

「騎馬戦ですと剣より槍の方が活躍出来ますからね。剣を使うのは主に白兵戦になってからです」

「へえ」

「そしてパルシヴァルは剣こそまだ嚙ったばかりですが、槍の方はあの年ではかなり卓越した部類に入ります」

「ええっ!？」

「これまで騎士見習いだったので剣と馬を持っていなかったの仕方ないと言えば仕方ないのですが……」

「ぶつちやけ……槍についてまったく心得ない俺とあの子だったら」

「槍試合ならまず間違いなくパルシヴァルに軍配が上がるでしょう。ことに槍において彼には天性の才があります」

別に俺としては勝ち負けはどうでもいいけど、俺も強くはなりた
いからやる前から負ける気で勝負に望むのは良くない。それじゃあ
ちつとも身に付かないと思う。けどランスは完全に俺を勝たせる
策を考えるポーズに入っている。それが主としての俺を立たせるこ
とであるし、俺の名誉に泥を付けたくないのだろう。後、単にラン
スの負けず嫌いが発動しているのか。

勝つ方法を模索する。そのための鍛錬を怠らない。確かにこの人
は立派な騎士様だ。だからこそ……俺は出会った頃のランスがとて
も窮地に立たされていたのだと知る。

この負けず嫌いの男が、命を投げ出すための負け戦……仇討ちの
ために的に突撃しようと考えていたなんて信じられない。アルト王
を失った彼はそれほど脆い存在だった。その彼がここまでいろいろ
考えてくれるようになったことは、少しは立ち直ってきてくれ
ているってこと？状況は未だ最悪だけど……俺を信じていなくても、
王っていう俺がいることで、少しは彼を支えられてはいるんだろう
か？こんなお荷物みたいな俺でも、彼の役に立てているのか？それ
なら俺は……今彼の傍にいられてとても嬉しいと、そう思う。だか
ら自然と彼の講義にすんなり集中できた。

「アルドール様。一概に剣と言っても、その種類や技や目的には
様々な用途があります。まずは切る、突く、刺す、殴る。彼は殴る
切るの技はありませんが、突く技ならば槍の鍛錬で既に習得してい
るでしょう」

「あのー……刺す、については？」

「刺すというのはそうですね。鎧の継ぎ目、隙間などを狙う技で

す。突くに似てはいますが実戦経験がない以上それについても彼は知らないはずです」

「……実践か」

「はい。アルドール様は都までの旅をされる途中に何度か実戦もあつたとのことですよ。その点はアルドール様に分があります」

人を傷つけること。その躊躇い。覚悟を持つて得物を手に取ること。それをあの子はまだ知らないのだと彼は言う。

「先ほども言いましたが、槍は剣よりリーチが長い。幼い彼が身体能力の差をカバーするには最適な武器であるとも言えます。今回はそのリーチが失われている分、確かに良い勝負に……いえ、若干アルドール様が有利です。しかし相手はあのユーカーです。どんな技を教え込んでくるのか」

「ああ、そっか」

だから俺に槍についての知識を植え付ける必要があつたのだ。ユーカーはゼロから剣技を教えない。これまでパルシヴァルが一人で培ってきた槍技を活かしたやり方を探してくるに違いない。ランスはそれを読んだんだ。

「確かに俺……切るとか振り下ろすとかはやったけど、受け止めるとか剣で防御するとかはじくとか解らないな」

振り下ろされるならなんとか読める。でも突かれたらどう防御すればいいのか全く解らない。多分逃げに入る。避けることを考える。今までは傍にイグニスガルクリースがいたからそれで良かった。逃げなくても庇ってくれる。守ってくれる人がいた。だけど何時までもそれじゃ駄目だ。俺も自分の身くらいは自分で守れるくらいに強くないと。

「では一通りの技の流れと、その対応を説明後、実際実技に入りますしょう」

「ああ、よろしくランス！」

「ランス様ああああああああああああああああ」

「え、ええええええええええエレインん！？」

突然書庫に飛び込んできたカーネフェリーの少女。手の盆には二人分の茶を持っている。どうして俺たちがここにいるのかわかったのかわからないが、気が利くというのは間違いない。しかしその美德が美德として感じられないのはどうしてなのだろう？

にじり寄る彼女にランスはにじりにじりと後退。本棚の周りをそんな調子で何周かしている二人に俺は助け船を出すことにした。

「エレインさん、ありがとうございます。ちょうど喉が渴いてたんだよ」

ランスの主である俺がそう言う以上、彼女はここで俺を立てなければならなくなる。一応俺も王だし。それに彼女も気付いて机の方へと駆け寄ってくる。

「いえいえ、お気になさらず！私としたことが、アルドール様へのご挨拶が遅れて申し訳ありません」

俺という客人の手前、あまりぶっ飛んだことも出来ないようで、エレインさんはにこにここと笑顔を湛える。ランスも今は安全圏かと彼女から遠く離れた席へと腰掛ける。

「わざわざすまない。助かったよエレイン」

俺が感謝している以上、ランスも一応彼女に礼は言わなければな

らないみたいで、そんな言葉を口にした。それに彼女はきゅと喜びの黄色い声を発するが、ランスの端正な顔には冷や汗が浮かんでいた。

「それで、用事はそれだけ？」

なら出てけ。さっさと出てけ。そんな言葉を含む黒い笑顔でランスが笑う。しかしそんな彼に夢中の少女は真実を見据えることが出来ない様子。

「ランス様だったらあ！アルドール様の前で私にそんなことを言わせたいんですの？そりゃあエレインは“ランス様にお会いしたくて”ここに来たに決まっていますじゃありませんか」

なんてメンタルの強い子なんだ。帰れスマイルから強制的にバカツプルの会話まで昇華させて来た。

「いや、そうじゃなくて……今私とアルドール様は大切な話をしています」

「あ、そうでした！お義兄様からご伝言です！」

「ユーカーから？」

そこで初めて会話の流れに興味を持ったようなランスにむつとするエレイン。可哀相にユーカー。またこうやってとばかりでエレインに恨まれるんだな。

「唯勝負するのもつまらないから、負けたチームは勝ったチームの言うこと何でも一つ聞くってのはどうだ？ですって。セレスお兄様だったらまたご自分の首を絞めるようなことを言うんですから困った物ですわね。それともそういってご趣味なのかしら」

ちよつと返答に困る言葉が続いたが、ユーカーもいったい何のもりなんだ？俺やランスにさせたいことなんてないだろうし、あったとしても料理のリクエストをするくらいのかわいらしいお願いだろう。だが、相手はランスだ。俺が勝つた場合……俺の指導者であるランスも必然的に勝ちになる。その場合ランスが何を言い出すか。ユーカー相手にはそんな酷いことは言わないと思う。思うけど、相手はパルシヴァルだ。どんな大人げないことを言い出すことかと思つと恐ろしい。そして俺が手を抜くようなことがあつたらそれはそれで俺とランスとの距離、温度差がまた酷いことになる。ええと俺はどうすれば……？

「何でも言うことを聞く……ですか」

善人面が完全に悪人面になつてるよランス。それでも美形度が揺るがないのは流石ランスだ。ランスに火が付いた。今までの比じゃない程にやる気を出している。この人一体何をさせたいんだよ。つていつかささせたいことあるんだ、そんなに。

(ユーカー、まさかこれを狙つて？)

本気で来いって言っているのか？それが俺とパルシヴァルの成長に繋がるって信じて？……いや、よく考えたら何も無い試合じゃつまらないってだけかも。よくわからないけどユーカーがある程度ランスの操り方を心得ているのは事実らしい。

「頑張りましょうねアルドール様！」

「え、あ……う、はい」

何を考えているんだかよくわからないランスの満面の笑みに、俺

は少し押され気味に頷いた。……もとい、頷くしかなかったのだ。

*

「つーわけで、だ」

ちょっと悪巧みをする時のセレスさんはとても楽しそうだ。僕はそんなセレスさんを見ているのが楽しい。

パルシヴァルがにこにここと笑みを返すと、少し居心地悪そうにその人は顔を背けた。結構照れ屋な人だから、人の視線に慣れていないのか時々こっぴどい事をする。綺麗な目なのに勿体ない。

「ランスの阿呆はアルドールの馬鹿にきつと槍の知識を植え付けるところから始まるだろう。基本的な型とその切り返しは記憶させてくるに違いねえ。アルドールは記憶力だけは良いらしいからな」
「そうなんですか」

王様は、アルドール様はやっぱり凄いなあ。何かそういう凄いなものがないと王様になんてなれないのかもしれないな。そんなことを僕は考えた。

僕とセレスさんがやって来たのは領地の外れ、緑の多い森の中。ちよつと僕の住んでいたところと雰囲気似ている。

「そこで、だ。俺はお前に型を今日は教えないことにした」
「どうしてですか？」

「パルシヴァル、記憶力ならお前もなかなか良い線行ってるぜ。っていうかお前の場合飲み込みが異常に早い。教科書通りの技なら多分教えれば今日中に習得できるはずだ。試しに一回俺に打って来てみる」

「は、はいっ！えいっ！」

「さつきまで教えてた素振り通り、良い太刀筋だ。だが正確過ぎて簡単にガードされちまう。わかるな？」

「はい」

「特に相手は知識吸収型だ。お前が本の中の技を使ったり、俺やランスの技を使うようならその辺看破される可能性がある。だからお前は夕暮れまでにお前自身の技を一つ編み出す必要があるってことだ」

「僕の技……」

その響きにはちょっと憧れる。でも出来るんだろうか夕方までにいや、セレスさんが僕を信じてくれてるんだ。絶対にやってみせる。僕はその期待を信頼を絶対に裏切ったりしない。

「んー……だな、お前が磨くべきは反射神経だと思っぜ。頭で考えてからじゃ遅いってこともある。常に気を読めるようになってまず損はねえ。これさえ覚えておけば勝てない勝負でも負けることはまずあり得ない。死ぬ気でかじりつけば誰相手でもドローに持ち込めはするだろう」

「……勝てないんですか？」

不安になる僕に、セレスさんは言う。早まるなど。

「これだけ会得してても勝ちはない。だからちゃんと型とか型破りでも剣技はマスターしとけて話だ。勿論技はいくつか教えてやる。そつからお前なりに考えていけってことだ」

「はい！解りました！」

「んじゃまず最初に俺の技を見せる。お前がそれを覚えたら俺に打って来い。そこでそのガードを教える。その後は三時までひたすら実戦だ。三時なったら息抜きに茶飲みタイム。その後もう一回手合わせだ。そこまでにお前の技を俺に見せること。いいな？」

「はい！頑張ります！」

「ああ、それからだ。さっきエレインにも言ったが……」

「勝った時の話ですか？」

「……そうだな。お前が勝ったなら俺もお前の言うこと一つ聞いてやるよ」

さらっとそんな事を言うセレスさん。だけど突然そんなこと言われても、そんなすぐに何かを思いつかない。僕はこうしてセレスさんに、指導してもらえるだけでも嬉しいのに。

だけどそんな思いに水を差したのは、そのセレスさんだった。

「だが、お前が負けた時は……お前はもう一回考え直せ」

「セレスさん？それってどういうことですか……？」

「お前はうやむやの内に騎士になっちまった。だからまだ実感もないだろうし、騎士になってやりたいことってのもよくわからねえと思うんだ。だがこれは憧れだけでやっていけるような職でもねえ」

僕の夢であるその人が、僕に現実を語る。騎士とはそんなに良いものかと僕に問いかける。お前だって俺の悪い噂くらいは聞いたことはあるんだろうと、僕の憧れる自身を貶めていくセレスさん。

「……だつてのに、残念ながらお前は才能がある。このまま行けばいつか絶対強い騎士になるだろう。だからこそ俺はお前に聞いたことがある」

「……聞きたいこと、ですか？」

「いいか？騎士は戦う道具だ。国の駒だ。命は自分の物じゃねえ。命がけで、お前は何のために戦う？俺のためじゃねえだろ？でもアルドールのためでも、カーネフェルのためでもねえ。それなのにお前はアルドールに仕えている。お前はそれでいいのか？もしそんな風に自分が死んで、それでもお前は本当に良いのか？」

死ぬ。それはどうということだろう。

痛いこと？ 苦しいこと？ 死んだことがない僕にはわからない。ただ、動かなくなる。喋れなくなる。目を開けられなくなる。大切な人の傍にいらなくなる。それが死ぬって言うこと。裏を返せばそれが殺すって言うこと。それが騎士なんだってこと。

僕は何のために剣を取る？ これからこの手を汚すだろうか？ 考えたこともなかった。唯この人みたいになりたくて、走って走って……僕はここまで来てしまったんだ。

「それをちゃんと見い出せねえと、いつか辛い思いをするのはお前だ。強くなる意味と、強くあるための意味をちゃんと心に構えとけ。それが騎士の心得だ」

「……セレスさん、一ついいですか？」

「何だ？」

「セレスさんは、どうして騎士になったんですか？」

それしかねなかつたなんて嘘だ。セレスさんの性格なら、本当に嫌なことは絶対にやらない。騎士になりたくないのなら、別のものになれたというのには彼だって。それでも敢えて騎士になったこの人には何か思うところがあったはずだ。

「お前と同じだ」

「え？」

「認めさせたい奴がいた。それで俺は騎士になった。でも……未だにそいつは俺を認めちゃくれてねえ。だから俺は騎士として中途半端に終わってる」

その言い方から、それが僕と同じ……母様へではないことに気が

ついた。だってセレスさんの母様はもうお亡くなりだったはず。

(セレスさんは確か……)

南部の出身だ。でも滅多に地元に戻らない。実家とは縁を切ったとか勘当されたとかそんな話を耳にしたことはある。セレスさんはセレスさんの父様と仲が悪いんだ。

(だけど……父様か)

それは一体どんなものなのだろう？ 僕の家には母様しかいなかったから、よくわからない。セレスさんはとても寂しそうに、そして憎らしげに……怒りと悲しみを共に抱えた暗い目をする。そんな風な目をさせるような相手が、この人にとっての父様というものなら……僕も僕の父様について知る日が来れば、こういう思いに捕らわれるのだろうか？

「だからお前が俺なんか目指しても、きつとろくな事にはならねえ。だからお前はしっかりそういうことを考えろ」

セレスさんの傍には母様も父様もない。本当は僕以上の寂しいを、この人は知っているんじゃないのかな。

「はいっ！」

それなら僕は頑張ろう。寂しいなんて弱音を吐いてはられない。僕はセレスさんみたいに強い騎士になるんだ。セレスさんは何の弱点もない、本当に完全無欠の強さを誇るわけじゃない。それでも僕の前では絶対弱音を吐かないセレスさんはやっぱり僕にとっては一ローだ。その人が言うんだ。母様に認めさせるだけじゃ駄目だと。

貴方に認めて欲しいってだけでも駄目だって。何故僕が騎士を貴方を目指すのかを、しっかり考えなさいって。

「お茶は如何ですか神子様」

「ああ、ありがとうございます」

ノック後に、イグニスが鍵を開ければぺこと一礼、部屋に入ってくる金髪の少女。相変わらず見事な役者っぷりだ。その顔にはにこにこ愛想の良い笑み。だけどそれは「ここで点数稼いでおけば巡り巡って外堀埋まって私とランス様の後押ししてくれますよね」的思惑が滲み出ている。彼女の何が凄いつて、本人は別に彼が好きでも何ともないのにこんな顔を、こんな雰囲気を表せるところにあるだろう。

「しかしパルシヴァル君とアルドールの試合か。なかなか面白いことになって来たね」

確かに戦力強化は有り難い。弱さをカードの幸運でカバーするなんてことになったらせつかくのコートカードの高幸福値が無駄になる。幸福値を温存して戦って貰うためには本人自身が強くなってもらわないと。

北の湖城との一戦のためにも。というかその一戦で終わりじゃない。それこそが、はじまりの戦だ。

「ランス様のご指導ですもの、もう勝ちが決まったようなものですけどね」

つきつきと冷えた茶をカップに注ぐ少女。あくまで僕が数術で盗聴防止諸々の結界を張るまで演じる気であるようだ。僕は完璧すぎる部下に感嘆の溜息。その後にはさっと結界を張ってやる。

「それでアロンダイト卿、いや……あのお父上、ランス様じゃなくてヴァンウィック様の方だからね。彼に君の話は付けておいたよ。彼は彼女のことを知っているしね」

「あら、そうでしたの。それではさぞかし驚かれたことでしょうね」

「驚いたって言うより何だろうね。少しは罪を感じてくれたんじゃないかい？」

「それで神子様はあの親子に決定的なまでの仲違いを起こさせたいんですか？」

「別にそういうわけじゃないんだけどね」

茶を口に運びながら、僕は目を伏せた。

「唯、後悔は限りなく大きく味わって欲しいだけだよ。じゃないと人は何度でも同じ過ちを繰り返す」

「それはどちらのアロンダイト卿へのお言葉のおつもりで？」

「え？両方」

僕の言葉にエレインが苦笑すべきか吹き出すべきか固まっていた。

「まあ、その件はまだ当面先延ばしになるだろうけど、他の問題ならセレスティン卿の機転で少しは前進するんじゃないかな」

これで少しはランス様とパルシヴァル君の関係が改善すればいいんだけど。やっぱり根本的な解決策としてはランス様が他の誰かを好きにならなければ駄目だと思う。騎士としてはアルドールという王がいなくて生きていけないし、ランスという人間としてはセレスティン卿にもたれ掛かっている。このバランスと比率が結構難しい。

「好かれ過ぎて嫌われ過ぎて彼はアルドールを憎み、恨むよ
うになるだろう。何事も程々には言うけど難しいよね」

「かといってどうでも良ければそれはそれで困るんですよね？」

「そういうこと。せめてアルドールが彼より年上だったらなあ。

あんなことにはならないんだろうけど……年下を父親代わりに慕う
つていうのはちょっと難しいか。彼にもプライドとか見栄って物がある
だろうから」

あの問題を本当に難しくしているのはそのプライドと見栄という
ものだ。アルドールがランス様に敵う物なんて何一つ無いのに、そ
れでも手にしてしまうアルドールに彼は釈然としない物を感じてし
まう。いつもそうだ。それで彼は欲しがるだろう。手に入らない物
ほど魅力的に見えてしまう。その前にこの際誰相手でも良い。彼に
はきちんと自分の正しい好意という物を見つけておいて貰わなけれ
ば。

でもルクリースさんもフローリップさんもないっていうのは本当
痛い。セレスティン卿が女とフラグを立てると同時にランス様も他
の女とフラグを立てれば、どっちも上手く行く可能性が強い。だけ
どその肝心のフラグ立てる相手が皆無。だからこんな手まで使って
彼女にエレインを演じて貰っているのだ。

最悪この際僕が彼とフラグ立てても良いんだけどっていうか一回
そういう風に試した世界もあっただけど、それだとアルドールの
方から険悪化するからなあランス様と。

「でもそれならイグニス様。アルドール様の伴侶はランス様の趣
味とは真逆の方を添えればよろしいのでは？」

「あんまりにも心身共に最低人間だとアルドール自身が病むよ。
あくまで王妃はアルドールにとってプラスになる人間、味方であっ
て欲しいんだ」

王妃にはアルドールを支えて貰わないと困る。

「それにランス様はその生い立ちから王妃っていう立場になった女性には興味を持ってしまっただ、必然的に。これはどこの世界でもそうなってしまう。これまで気にしていなかった相手でも王妃っていう属性を手に入れた途端、気になっってしまうものなんだよ」

これは確か王妃がアージンさんでも、ルクリースさんでもそうだった気がする。ギメルが王妃になった世界もあつたけどあの時もそうだった。他人の手にした女ほど、魅力的に見えるものなんだろうなあ。それも仕方のないこととは言えなんとも業深い。

「だからその前に本当の恋って物でも知ってもらおうか、失う痛みを覚えて貰えばそういう危険を冒すこともなくなるんじゃないかっていうのが僕の考えだ。ぶっちゃけた話、これを今の内に何とかしておかないと後々本当に厄介なことを引き起こす。もう一つ策を敷いたとはいえ、あっちもどうなるかはわからない」

「ユリスデイカのことですか？」
「ああ。彼女はおそらく誰ともそういう風にはならない。正義の化身だからね」

彼女が恋をする日が来るとしたら、それは本当に世界平和が成った日だろう。そしてそんな日は……来ない。だからそんな事はあり得ない。

「彼女はアルドールにもランス様にもそういう気持ちを抱くことはないだろう。ルクリースさんやアージンさんみたいにプラコンだったりアルドールアルドールしてない分まだ彼に恨み妬みっていうのは発生しないんじゃないかと思う」

「……なるほど、そうかもしれないですね」

「ここだけの話、最悪彼女がランス様に振り向いてくれても別に良いんだよ。今のアルドールは女の人に興味を持つような精神的余裕がないからね」

あんな顔してるけどまだまだフロリプさんやルクリースさん、アージンさんのことは尾を引いている。今のアルドールはそれを裏切りだと思っただろう。今回はかりはセレストイン卿と気が合うわけだ。一回自分に好意を寄せてくれた相手を亡くした人間同士なんだから。次の恋に脅える、それを裏切りだと思っ。一途って言えば聞こえは良いけど、馬鹿って言えばそれまでだ。世の中には多種多様の馬鹿がいる。もっとも……そういう馬鹿に限っては、僕も嫌いじゃないけどね。

まあ、ついでに言うならば、道化師に負わせられた心の傷も深い。道化師の策で生じたギメルへの不信から恋愛感情って物が行方不明になっている所為もある。

(全く余計なことをしてくれたものだよ)

ギメルは本当に何も悪くないんだ。ギメルは本当に君のことが大好きだったんだ。僕はそれをよく知っている。痛いほどよく知っている。だからその弁解出来ない制約が恨めしく、呪わしい。

僕の知る情報開示はゲームの公平性を保つため、ゲーム進行を見る二神の許可がなければ降りない。ゲーム盤が複雑化した今回から新たに作られたルールだ。それはそうだ。だってこれまでこんなことはあり得なかったんだ。前回の僕っていうかこの僕は実にナイスな提案をし過ぎた。だからこそこんな制約背負わされた。神様ってんだから唯願いだけ叶えてくれればいいのにさ、同時に呪いまで掛けてくるとは話が違っうんじゃないの？全く詐欺みたいなものだよ。いつらは。

そんなわけで大体はその情報が道化師の口から表に出た後からし

か僕には言えないことになっている。口にしようとしても言葉として発せられない。喉を思い切り絞められるような痛みが襲ってくるだけだ。文字にして伝えようとしても同じだ。肝心なことを書こうとすると指がしびれるわ、紙が燃えるわ。あんな神様さつさと廃れればいいのに。ていうか滅べ。」

「でもイグニス様。私が迫れば迫るほど、ランス様はお兄様とフラグが立ってしまっていないませんか？」

「ぶっちゃけた話、それで後の問題が発生しなくなるなら一回そうさせてみるのもありなんじゃないかとさえ思うよ。でもなんだかんだあの二人は頭が固いし常識人だから難しいだろうけどね」

じゃれつく要領で周りがドン引きするような仲の良さを発揮するが、あくまであれは遊びの域だ。それに比べてセネトレアで部下に見張らせている某王子主従周辺なんか酷いものだ。定期的に入る連絡の度に部下が戸惑っているのがよくわかる。那由多王子はもう人としていろんな意味で壊れてるし、期を見て始末することになるんだろうな今回も。今回はどうなるんだろうなあの周辺は。今回は駒の配置に気を使ったし上手く機能してくれないと困る。そのために僕はもう、部下を何人失ったことか。

ラハイア……あの子の事は残念だけど、彼の犠牲があったからこそ……僕は二枚の切り札を得た。あの日、彼と出会ったのはこういつつもりじゃなかったんだけどね。そういうこともあるかなって……嫌な性分だ。粗方の先の展開、分岐パターンの解るからこそ、僕はやりたくもない根回しをしなければならぬ。それがこうなる布石なんだと思うと何の因果かと思うよ。それとも僕はあの日の僕の抜かり無さを褒めてやるべきなんだろうか？

「話が変わるようで変わった気がしないけど……マリアージュ、君も向こうで彼らは見たかい？」

「ランス様程じゃありませんけどなかなかレベルが高かったんじゃないです?」

「本音だと?」

「リフル様は本当にお綺麗ですね、いつそ不気味なほど。思想こそご立派ですけど、正直あれは危ないと思います」

「正論だね。僕も彼はタロック王の後釜にはなれないしさせるつもりもないよ。彼の力は国を守る物ではなく滅ぼすための力だ」

「アスカ殿下は……国王派の奴らに見せてやりたいくらいいい男になられて。リフル様に現を抜かす彼の姿を見れば国王派の保守派爺共が首を吊る勢いですね」

「彼ね……あの両親からなんであんなになっちゃったんだか。いや那由多王子の魅了邪眼って怖いね」

でも一番怖いのは彼の狂気の方向性こそ違えど彼は何処の世界でも大抵おかしな事になる。殿下はもう那由多王子に惚れた時点で人生詰んでるね。彼を人身御供にでも差し出さない限り、シャトランジア王になって僕の手駒にはなってくれないんだろう。今回の展開上それはちよつと無理。となると僕がああ国王派共を説得、一掃しなきゃいけないわけで……現状で殿下の力は頼れない。やはり一度僕は何が何でもシャトランジアに帰らなければならぬわけだ。それもなるべく早い時期に。ユリスディカと合流したら後はマリアージユと彼女に任せて僕は一度退くべきなのだろう。

だけど窺うからに、アスカニオス殿下の病みっぷりに対してのへたれっぷりから一線越えることは今回の世界は無さそうだなあ。よ、魔法使い。とまでは行かなくても魔法使いの弟子くらいは名乗って良いんじゃないかな彼、来年辺りから。残念なことは彼に来年って言う概念がないから僕は殿下を言葉攻めで陥落、手駒化することが出来ないって事だ。

でも、ああいうタイプは反動が怖いんだよね。僕はその反動をより強めて、彼が道化師に一矢報いる矢にでもなってくれればいいな

あとは思っけど。そのためにも僕は何としても那由多王子がより最悪で見るも悲惨な死に方をするように祈らないといけないな。殿下は那由多様が死んでから本領発揮するようなもんだし。あれで数兵っていうんだから詐欺だよ全く。いや、数兵だって捨て身になればあれだけやれるって証明ではあるんだろうな。

「でもまあ……君は魅了されなかったみたいで安心したよ」

「あら？だってそんなこと台本には書いてありませんでしたもの。それに神子様、世の中には混ざるより見ているだけの方が面白い物もありましてよ？」

「はあ、あの国はどれだけ僕の忠実な部下を腐られば気が済むのかな」

「それでは神子様、私のハートは文字通り神子様に魅了されておりますので。そういうことで如何？」

ひらひらと手の平、手の甲を惜しげもなく晒す彼女。そこに先程までは何もなかった。本当に彼女は演じるのが上手い。嘘と本当の使い分けが見事で、僕でさえ時々どっちだったっけと思うくらいだ。けどそこに刻まれた数に、僕はそれが嘘であることを知る。模様は同じでも、カードのナンバーが彼女のそれとは異なった。本当に見事だよ。それは視覚数術ですらない。僕でさえ使えない数術の一つだ。そんなことが出来るなら、僕の身体もこんな厄介なことにはなっってはいいし、彼女の力が他人に及ぶなら僕はさっさと男に戻る事が出来ただけで世の中そう思い通りにいかないわけだ。敵に神様がいる以上、凄いと言っても僕も人間だし反抗できる範囲っていつもものがある。だから、それも悔しいがそういうことなのだ。

「ライルとラディウスの事は……残念でした。私も」

「そうだね。それは僕も同じ気持ちだ」

僕は両手を握りしめる。その手の甲がヒリヒリと痛むような気がするのは、そのカードを一時彼に貸し与えていたからだろうか？

足掻きという名の策をもってしてもあそこで二人とも生かすのは無理だったか。キングの力が二枚合わされば或いは……そう思ったんだけど、儚い夢だった。あの二人は息びつたりだけど、向いている方向も同じなのに歩く場所がまるで異なる。そりゃあ簡単にその思想は交わらないか。

運命の輪？12が吊された以上、セネトレアとタロツク、それから道化師攻略には那由多王子とアスカニオス殿下の力が必要だ。アルドールとやり合えるくらいまで、あいつの幸福値を削って貰わないと困るんだよね僕としても。

いつそソフィアの代わりにユリスディカでも那由多王子の所に送り込んだらそれはそれで面白いことになったんだろうけど、彼女はラハイアとにているけれどカーネフェルが大好き分が強すぎて、那由多王子とは気が合わないかもしれない。彼女は凛々しくもまだ幼い。無意味に人生経験の厚いあの王子と比べては酷だ。今の彼女では混血や他の国を救うことまではまだ考える余裕が無さそうだからアルドールと引き合わせるのが一番だろう。

「マリアージュ……いいやエレイン、彼らのことを哀れむのも悲しむのもそれは今じゃない。彼らの無念を晴らすためにも僕らにはやるべきことがある。違うかな？」

「……そ、そんなことイグニス様に言われなくても解っていますわ！」

僕の合図にさつと配役に戻る彼女。でもまあ、これで少しは彼女の胸のつかえも取れただろう。同僚達の死を語らう暇もないのでは、彼女の仕事にも支障が出るだろうから。部下の心のケアっていうのも大事なことだ。人を動かすのって本当に大変だ。些細なことでも大きな失敗が生まれることもある。僕はどうでもいいような選択肢も

間違えてはならない。それで何度も痛い目見て来たからそう思う。僕は立派な神子を演じる。少なくともそれは僕の心とは違うけど、僕が世界平和のために動いていることは限りなく真実だ。これは間違いない。それがヒントだ。言えないからこそ、大きなヒントだ。僕はばらまく。運命の輪が、そしてアルドールがいつか僕の本当に手が届くように。死人に口なしって言うから、今の内にやれるだけのことはやるしかないんだ。

予言として未来の可能性を示唆することは出来るけど、それだつて道化師が今知っていることまでしか僕は言えない。じゃないと矛盾するからね。僕に忠実でいてくれる可愛い部下達にだって僕が話せる情報は限られて来る。もっともアルドール達相手よりは情報、秘密の共有が進むのは確か。あの頃彼や彼女が知っていたこと。それを語り教えることは矛盾に当たらないってルールだから。言葉遊びって言うのが好きなんだね神様って奴は。ああ面倒臭い。さつさと廃れる、そして消えてしまえ。

「そうですね、ふと思ったのですけど。殿下達のようにお兄様達がとおつても仲良しになって下されば、この件は丸く収まるのではありませんでした？」

僕はソフィアの心底嫌そうな声での報告と、数多のゲーム盤での殿下達のぶっ飛んだ仲良しっぷりを思い出していた。あれは那由多様だから絵になるっただけで、セレスティン卿じゃギャグだよ。幾らランス様が相手でもカバーしきれないよ絶対。セレスティン卿は中盤までは僕にとってはいてもいなくても良いしどうでもいいし存在自体ギャグみたいな物だから仕方ないね。

「まあ、見るに堪えないしあそこまでとは言わないけれど……。そうだな、ランス様じゃなくていいそのことセレスティン卿がブランシユ卿辺りと本当にこれでもかかってくらい良い感じになってても

くれば或いは」

「むしろアルドル様がお兄様とあれやこれやとあんな感じになつてしまえばよろしいのでは？もうこの際お兄様を女装させて王妃つてことにして」

「なんか更にカオスな状況になるような気しかないよ。それでランス様の王妃萌え属性が加わつたらどんな泥沼になることか……」

「……………王宮がそんなカオスな空間ではちよつと、士気に関わりますね」

想像して泣きそうになつた。うん……僕はもうあの世界の記憶だけは見たくないよ。流石の僕もあの時ばかりはセレストイン卿を哀れんだくらいだ。そんな僕の反応を見て、エレインが微妙な顔で苦笑した。

「やつたことあつたんですねもう既に」

冗談で言つたつもりだったのにと、僕の言葉に冷や汗を浮かべるエレイン。でもちよつとそわそわわくわくちよつと詳しく話を聞かせる状態のように見えるのは、この間までセネトレアに送り込んでいたために生じた弊害だろう。おのれセネトレア。僕の部下を何人腐らせれば気が済むんだ。

「世紀末つてこつういうことを言つんだなーつてちよつと意識が遠くなくなったよあの時は。滅びの前夜祭つていうか何というか。もうこの世界滅ぶのも仕方ないなーつてなるような狂いっぷりだった。あの時ばかりは道化師もドン引きして、しばらく出没しなくなった程だよ」

「そ、そうですか。それはさぞかし壱の神様も零の神様も驚かれたことでしょう」

「これだから人間は面白いつて壱の神は爆笑。零の神はやっぱり滅

ほすべきだつて言つてた」

「……零の神様つて意外と常識人なんですな」

「吉の神が良くも悪くも悪くも悪くもおおらかなんだよ」

こつこつ神の愚痴はアルドール達の前では出来ないから困る。下手に神の存在を植え付けるわけにも行かない。いることはいるんだけど、あくまで彼らには神なんか信じて貰っちゃ困るんだ。神に対する最大の攻撃は無関心。過度の恐れも怒りも信仰になり得る。そついつた意味では僕程神を信じている人間も他にはいない。そりゃあ僕が神子になるわけだ。

「それにしてもコートカードつてものは男運も女運も……つていふか対人運がとりわけ悪いつて特徴でもあるのかな」

「総合的にリアルラックが低いのがコートカードに選出される条件かつ特徴のようなものですから、必然的にそうなつてしまつんじゃないですか？」

「なるほど、返す言葉がないよ」

*

「逃げ出さずにやつて来たことだけは褒めてやるぜ」

約束の時間、約束の場所。裏庭まで出向いた俺達を迎えるのは不敵な笑みを湛えたユーカーと無邪気な笑みを浮かべたパルシヴァル。本当対照的な笑みだ。

アルドールはそんな二人が不思議に思う。どうしてこの二人が仲が良いのかわからない。そのうちパルシヴァルがユーカーみたいな笑い方をするようになったら嫌だな。別にユーカーが嫌いとかそういうのとは違うけど。

俺がそんなことを思っていた最中、悪役っぽい台詞を口にした従

弟に対しランスは少し目を見開いて……

「ユーカー、それは俗に言うフラグというものでは？」

言われてみれば某タロツクの決闘物の話でも、わざと時間に遅れて苛立たせるって話があった。

「馬鹿野郎が。自ら死亡フラグを立て、それをへし折るのが最高に格好いいんじゃないかねえか？なあパー坊？」

「セレスさん格好いいです！」

パルシヴァルは本当にユーカーが好きなんだな……。でもああいうところまで真似するようにならないで欲しいな切実に。

でも死亡フラグか。死亡フラグってでもあんな台詞だったか？あれは敗北フラグだよなどっちかって言う。弱い犬ほど良く吠えるっていうあれだよな。それじゃあ、死亡フラグっていうと……俺は書物で目にした言葉を思い出す。

「ええと、有名どころだと“俺、この戦いが終わったら結婚するんだ”とか？」

「くくくっ！かかったなアルドルっ！お前は本の虫という話だった！こう言えば必ずお前が死亡フラグと立てるのは目に見えていたぜ！お前みてーな知識野郎は自分の知識をひけらかしたくてたまんねえんだからな！」

「くっ……惑わされてはいけませんアルドル様！しっかりと気を強くお持ちください！！」

「え？どうしたんだよ二人して。そんな現実問題そんな言葉一つで勝敗が左右されるなんてことないだろ？負けたんなら俺の力不足だったってだけだろ？」

有名すぎる死亡フラグを口にした俺に、もう勝利は決まったと言わんばかりのユーカーと、真顔で俺を励ますランス。意味がわからない。言霊っていうのはギメルやイグニスみたいな数術使いならある程度操れるっていうのは知っているけど、あの言葉だけではプラスともマイナスとも知れない言葉だ。故に言霊としての性能は未知数。そして俺は言霊数術を使える数術使いでもない。だからこれにあんまり意味はない。

それでも数々の死線を越えて来た二人の騎士には違うらしい。

「甘ちゃんか」

「アルドール様は実戦経験がまだ少ないだけだ。そうやってあまりこの方を愚弄するのは止せ」

「ふん、その言葉を口にして死んだ奴を何人見てきた？俺は両手の指でも足りないほどだ」

「その程度か。俺は両目の睫毛の数はくだらない」

「ああ、悪い。俺は左右の眉毛の数並だったかな」

「あの……二人とも、それって多いの少ないの？」

数が微妙すぎる。髪の毛よりは遙かに少ないと解るけど、具体的な数はよくわからない。実際抜いて確かめて数えてみたいと思うけど、痛そう。あとそんなわけのわからないことで張り合わないで欲しい。この二人は変な会話が好き過ぎる。見てみなよ、ほらパルシヴァルだって話について行けずにつつむいて……いや違う。ランスの睫毛とユーカーの眉毛を凝視している。いや、純粹すぎるからっ！どうせ二人の見栄だから！！本気で数えなくていいんだよ！？だけどここで水を差すのはどうなのだろう。数えたことはないけれど俺も人体における睫毛と眉毛の平均本数とか瞬時に答えられるようなそのためのサンプルとしてその数を教えてもらえたら今後何かの役に立つわけ無いんだろうけど実生活で役に立たない無駄な知識ほど胸が焦がれるのは何故なんだ？

「と、兎に角ですアルドル様っ！戦場では常に何が起こるか解りません。僅かでも自身に疑念を抱くような言葉をかけてはなりません。一時でもそこにはない幸せを見るということはこの現実から目を背けるに等しいのです。その油断が大きな隙を生むことにもなり得ます」

「死亡フラグを舐めんじゃねえぞ」

なんか釈然としない物があるんだけど。この二人口裏合わせて俺をからかってたりしない？いやでもランスはそういう人の悪さはない。違う意味で人が悪いけど。そっち方面で悪いのは完全にユーカーだ。

「っていつか普通に俺、結婚とか相手いないし……」

これって死亡フラグとして機能するの？

「そうも言っていていられませんよアルドル様。都を取り返しタロツクを撃退すればすぐにそう言う話もやって来ます」

「あはは、なんだか遠い話だなあ」

「お前がもつとしっかりしてりや近い話なんだけどな」

「ご、ごめん……でもまあ、そう言うのはあんまり気が進まないけど、頑張ろう。カーネフェルを取り戻さないといけないのは本当だし」

女の子にモテたいから戦うわけじゃない。俺は王だから、この国を取り返さなきゃいけないんだ。俺を守ってくれたルクリースのためにも、……フローリップのためにも。俺はここから逃げちゃいけない。フローリップをちゃんと眠らせてやるためにも、北との戦いは絶対に勝たないと。これはもう、負けて良い、逃げて良い戦いじゃない

いんだ。ここからは……勝たなきゃいけない戦いになる。そのためにも……

「相手、お願いするよパルシヴァル。本気で来てくれ。俺も……強くなりたんだ」

「はい、王様！セレスさんの言う礼節持って、全力でお相手させていただきます！」

俺の視線を受けたパルシヴァルはにこ微笑み得物を手に取る。彼が手にしたのはちよつと変わった長剣だ。普通の長剣とは違う。あれつて確かユーカーの混血剣、セレスタイトにちよつと似ている……重くないのかな。いやよく見ればあれは片手半剣。ユーカーは片手持ちと両手持ちで技を切り替えたりしてるけど、パルシヴァルは両手で持っている。両手でやつと扱えるということなんだろう。でも……イグニスも気が利くんだな。パルシヴァルがユーカーに憧れているのを知ってて、ユーカーのに似た武器を彼に与えるなんてまあ、それはさておき。俺の扱うトリオンファイは、基本的に片手剣。おまけに元々装飾品としての剣だ。素材が良いから触媒としては優れているけど剣としてはお飾りも良いところ。全力でやり合ったら勝負的には際どいところだ。今回は剣の勝負だから数術は使ったら駄目だろうし。

それを見かねてランスが俺に得物を貸してくれる。ランスの家に伝わるアロングダイトというその剣は装飾も見事な事ながら、かなりの強度を誇る。どのくらいの間受け継がれてきたかはわからないが、刃こぼれ一つ無い立派な剣だ。

「でも、俺なんかが使っているの？」

それに今日一日俺が使ってきたのはトリオンファイだ。握りしめた感じの違和感、手に来る重みの違いに俺は戸惑う。今になって不安

になってきた。俺は何時だってトリオンフィを手にしてきたんだ。

「大丈夫ですよアルドール様。アルドール様はしっかり学習なさいました。それは得物が変わっても失われる物ではありません」

戦場では得物を弾かれ、相手の得物を奪って斬る、拾って斬る。そんなのも日常茶飯事だという話もある。王には手にした剣を瞬時に自分の物として使いこなせるような力量が、必要なのだと言われた気がした。

「……わかった。頑張ってみる」

「その意気ですよアルドール様」

顔を上げて頷く俺に、ランスが小さく微笑んだ。不意打ちで驚いた。彼はなんだかとても優しい顔をしていた。それがちょっと俺は嬉しかった。

「……んで、どうすんだランス？一本？二本？それとも降参引き出した方が勝ちか？」

「アルドール様、如何なさいますか？」

「そうだな……より本番に近いのは？」

「最後の、です」

「それじゃあそれで行こう！いいね？パルシヴァル？」

「はい！解りました！」

「おい、馬鹿ランス、そいつはちょっと不味いんじゃない？」

「アルドール様のご命令だ」

「いや、そうじゃねえだろ？あいつらまだガキだぜ？」

「それではアルドール様、パルシヴァル、構えてください。それでは行きます、はいっ、始めっ！」

「あ、こらっ！」

ユーカーの制止を待たず、試合は始まった。俺はまず様子見ということで相手からの一撃を待つ。と思っただが彼は動かない。彼も俺の様子を観察している。

これは不味い。この硬直状態が続けば、先に集中力が途切れた方が危なくなる。開始の合図と共に走り切り込む位の方が良かったのかも知れない。

「……………」

いや、彼は唯動かないのではない。距離こそ詰めては来ないが、円を描くよう俺の周りを回り出す。何時こっちに踏み込んでくるか。それを恐れてついつい視線が彼を追う。身体の向きが変わっていく。その瞬間、彼が反対側へと回り込む。俺の身体は今までの動作を続けようとこれまでの方向に回ろうとする。だけどそれじゃあ駄目だ。反対側を向かなければ！勢いよく身体を捻ろうとした所為で、首と背中に激痛が走る。何やってるんだ俺！

そんなことをしている内にもパルシヴァルの一撃が迫ってきている。今からじゃ避けられない。ならっ、迎え撃つ！

片手と両手の違いは……両手の方が力が入る。攻撃力が増す。振り下ろす動作ならば両手の方が重さで早い。しかし、振り幅は片手の方が範囲が広い。身体の捻りなどを上手く使えば両手でもそれなりに戦えるが、剣を嚙つて一日でそこまで出来るはずがない。

そして今の攻撃は、突きでも振り下ろしてもない。これは薙ぎだ。横から胴体切りにかかってきている。

(薙ぎ払いなら、片手の俺の方が早く払える)

多少手は痺れるかも知れない。それでも俺はこれを防げる。彼の攻撃を弾くため、俺は攻撃を迎え撃つ姿勢に入る。しかし、だ。パ

ルシヴァルは攻撃のリーチ範囲に入るその寸前……片手を離れたのだ。

「……っ!？」

途端に速度の上がる彼の剣。これまでの捻りの動作。それが生み出すスピードを持って剣の重さを軽減したのか。そしてそこに片手特有の振り幅を加える。唯待つだけの俺の剣では打ち負ける。咄嗟に俺も彼の剣を指して一撃をぶつけに行く。

キインと耳に残る鈍い音。手の震え、痺れ。手が重い。だけど俺はしっかりその手に得物を握っていた。

「え？パルシヴァル？」

見ればパルシヴァルは剣を手放し、俺の足を押さえていた。

「あー……危なかった」

「あのなあ……」

ほっとしたよう息を吐くパルシヴァルが何をしたのか理解したらしいユーカーが呆れた顔で近寄ってくる。

「馬鹿かお前は！だからためーは騎士に向いてねえって言うてんだろうが！」

「でもセレスさん、セレスさんはそういう騎士様じゃないですか」

軽くユーカーに頭を小突かれて、それでもそれに関しての文句は出ないパルシヴァル。

「セレスさんは強い騎士様です！セレスさんなら熊くらい殺せた

はずです。でもセレスさんは殺さなかったです！」

見れば俺の足下には、小さな虫がいる。蟻の群れだ。

この子、どんな動体視力を、視野の広さをしているんだ。俺はそこに驚いた。戦いの中で、他のことに気を取られるなんて、そんな危ないこと…… 実戦ならこの子死んでたかもしれないのに。

「僕は殺すための騎士じゃなくて、あの日のセレスさんみたいな守る騎士になりたいんです！僕はセレスさんのそういう優しいところに憧れたんです！」

「それはお前が俺を知らないだけだ。あの時はそうだったってだけで…… お前の知らないところで俺がどれだけ人を殺したか、お前は知ってるのか！？」

「それでも僕にとってはそれが本当です！それにセレスさんは何の理由もなくそんなことはしません！」

「するかもしれねーだろうが！」

「そんなことないです！理由もなく人を殺すような人は、理由もなく人を助けたりなんかしない！理由がなければ人を助けたり、守ったりしません！必ず損得利益を考えます！でもセレスさんは頭じやない、身体で動く人です！貴方は反射的に、本能で人助けが出来る優しい人です！」

「反射的に苛ついて殺したかもしれねーだろ」

「セレスさんが本能的に苛つくような相手です！余程酷いことをしてきたんですねその人は！」

「あ、あのなあ…… お前は俺を買い被りすぎで……」

「そんなことはありません！」

ユーカーに食って掛かるパルシヴァル。彼が俺に背中を向けた隙に、俺は気がついた。無事じゃなかった。俺の靴の裏に張り付いたその死骸。俺は既に数匹、気付かずに殺してしまっていた。たかが

虫だ。人じゃない。これは人殺しじゃない。それでも……確かに命だ。言い訳をしようとする自分自身に怖気立つ。俺はいつか、人をこの虫のように見て語る日が来るんじゃないのか？

あの子は、こんなちっぽけな虫のことまで気に病むのに。俺は“こんなちっぽけな”なんて形容をしまっただけに最低だ。そう思う、感じることで、俺の心が醜く歪み、汚れている証拠なのだと気付かされる。

パルシヴァル。あの子は確かに騎士には向いていない。それでも……あの子は俺より王に向いているのではないのか？

王の資格とは何だろう？ イグニスには愛することだと言った。愛するって何を？ 人を？ でも人って何？ 何処から何処までが人？

人って、カーネフェル王にとつての人って……カーネフェル人だけ？ それともカーネフェルの味方だけ？ それじゃあ俺がこれから戦うタロツク人は何？ 人じゃないの？ 虫？ この蟻と同じ？ 踏みつぶして、殺しても……何とも思わなくなるのが正解？ そういう物なの？ そもそも虫と人の違いって何？ 姿形が違うこと？ 意思の疎通が図れないこと？ 隔たった環境で暮らすこと？

実戦経験は俺の方がこの子より上。それなのに、どうして俺は今更こんな事に脅えているんだ？ 俺はエルス・ザインを斬った。あの子の腕を燃やして斬った。イグニスは当然のように次はあの子を殺すことを考えている。そして双陸。俺に親切にしてくれたタロツク人。彼は敵の将だ。都ローザクアを占領した相手だ。倒すべき敵だ。俺が踏みつぶすべきはこの虫じゃなくて、彼らの方だ。

彼らをまだ人と思えるこの躊躇いは、王に必要なのだろうか？ それとも要らない物なのだろうか？ だけど何とも思えなくなったらそれこそ俺は……狂王と同じじゃないか。

タロツク人を人と思えず殺せる奴が、どうしてカーネフェル人を人と思って殺さない？ だって両者の違いはただか目の色髪の色だけなんだ。

だって例えば赤い蚊と青い蚊がいたとして、どっちも血を吸うな

らどつちも殺すんじゃないのか？例えば黒いゴキブリと、虹色のゴキブリがいたとして……そのどつちもが家の中をガサガサと走り回り飛び回り増殖していたら、それは何色だって嫌な人は嫌だよね？人だって同じだ。どつちも勘に障れば……そういう風に見えてしまうものなんじゃないのか？

(俺は……)

俺は人が人に見えていることを、喜ぶべき。喜ぶべきなのに、手が震えて仕方ない。これ以上、パルシヴァルと戦えそうにない。勝つためにという思いによって……一瞬でも彼の顔が人に見えなくなったらと思うと怖いんだ。でも彼が人に見えていたら、人だから彼の背景を考えてしまう。家族構成から彼の立ち位置、その目標。もし手が滑ってここで彼を殺してしまうなんて事があつたらそれほどうなるんだ？

真剣で戦うのがこんなに怖いことだったなんて、俺は……知らなかった。いつも数術に頼って来ていた。剣だけで戦うなんてこれが初めてだった。

「アルドール様……？」

俺の肩が震えているのに、いち早く気付いたランス。俺は彼を見上げて笑って見せた。そうしなければ俺は今にも泣き出してしまいそうな程に、心が追い詰められていた。

「……ごめん、ランス。俺の負けだよパルシヴァル。君は立派な騎士だ。その優しい心をずっと忘れずに、これからも俺に仕え、支えて欲しい。そしてその優しさでこの国のいろんな人を助けてあげてくれ」

「王様……？」

背中を向けたままの俺に疑問を感じたらしいパルシヴァル。俺は
一呼吸置いて、笑顔を作る。振り返る。

「君を助けたユーカーみたいに、優しい騎士になってくれるね？」
「は、はいっ！」

そっだ。この子は俺に、必要だ。この子のような子が傍にいてくれないと、俺は……いつか見誤る時が来る。イグニスはそのを見越してこの子をスカウトしたんだろう。ギメルと出会った頃の、そうだ初心を忘れるなど……イグニスは俺に訴えたかったんだ。一体いつから俺はこんなに捻くれてしまったのだろうか？

「アルドール様……」

「いや、ごめんランス。向こうで数術やつてもらえる？ちよつと首ぐきつていつちやってさ。パルシヴァルとユーカーは、俺達にさせたいことでも考えててくれよ」

こつ言えばランスも俺に逆らえない。俺はランスの腕を掴んでぐいと引つ張り歩き出す。空き部屋に入って治療をして貰いながら、……俺は無言に耐えかねもう一度ランスに謝罪をする。

「ごめん……せつかく教えてくれたのに。剣まで貸してもらったのに」

「アルドール様。悔しいと思うことは向上心の表れですよ？それは立派なことです」

「そっじゃないんだ」

静かに俺が首を振ると、ランスは青い瞳を瞬いた。

「俺が殺した蟻にもさ、家族がいて兄弟がいて、友達がいて……もしかしたら好きな子とか恋人とかいて、死にたくないなとか思うとかそんなことがあったんじゃないかなって思うと馬鹿みたいに悲しくて。勿論蟻の習性とかから人と違う、あり得ないことつてもあるんだとは解ってる。あれは女王蟻じゃなくて働き蟻だから家族とか恋人とかつて枠組みはないだろうし……」

「アルドル様？お優しいのは結構ですが……」

「そうだよな。目に見えてないだけでもっと俺は小さな虫とか微生物とか殺しまくってるんだろ？解ってる。解ってるんだ。これが本当に馬鹿げたことだつて。くだらない事なんだ。馬鹿みたいな事なんだ……でも俺、あの子見てたら……虫と人の違いが解らなくなつて来たんだ。あの子が本当に優しくて良い子なのはわかるんだよ。それなのにそれを見ていて俺はそんなことを考えてしまつて……」

「……………」

「何も感じないか、可哀相のどつちか。両極端なんだ」

「両極端……ですか？」

「家族を殺されるのは、辛いし苦しい……悲しい。これから俺が戦うタロツクの人たちも家族がいるんだよな。でもカーネフェル人を殺させたら、その人の家族が悲しむわけで……だから守らなきゃいけないくて、でもそのために殺すつてことは俺はタロツクの人から恨まれて憎まれるつてことなんだよな」

それが王としての役割。仕方のないことだ。憎まれることだ。味方を得るつてことは多くの敵を得るつてことなんだから。それは解っているつもりなのに、手の震えが収まらない。

姉さんが死んだ。ルクリースが死んだ。フローリップが死んだ。それと同じ思いをする。俺が人を殺すのは、誰かに俺と同じ悲しみを押しつけるつて事だったのか。そんなすぐに解りそうなこと、どうして俺は今まで気にも留めずにいたんだろう？

「俺はカーネフェルの王なんだから、敵をあつ蟻と同じみたいに思えるようにならなきゃいけないんじゃないかって……そう思うんだ。相手を人だと思つて……そんな甘さでここから巻き返せるとは思えない」

「アルドール様……」

「でもそうなつた時……俺はちゃんとカーネフェルの人達を人だつて思えるのかな。見境無くみんな蟻に見えてくるんじゃないのか？」

俺はどうして今、彼の前で泣いているんだろう。どうして彼に頼つているんだろう。寄りかかっているんだろう。違う。本当は俺が彼を支えたいと思つたのに。立派な王になりたい……彼に信じて貰えるような、安心して心を打ち明けて貰えるような、預けて貰えるような人間になりあいつて思つたんだ。思つたのに……どうして俺はこんなに情けなくて頼りないんだろう。

「なあ、ランス……。俺はどつちになるべきなんだろう？」

先王をよく知る彼に、正解を欲しがつている。答えをくれとせがんでいる。本当は俺が自分で見つけてそれを彼に知らしめるべきなのに。俺はどうしてここで彼に頼つてしまつたんだろう。

それとも俺は聞きたかつたのか？誰よりも優れた騎士と呼ばれるこの人に。人を斬つたことがあるこの人に。お前はどつ思い人を殺すのか。殺した相手をなんだと思うのか。そんな本人が誰かに教えたくもないであることを、根掘り葉掘り穿り返すのか俺は。

「大丈夫です、アルドール様。貴方は王であつて貴方は騎士ではありません」

幼い俺に剣、人殺しを教えること自体が間違つていた。ランスは

そんな響きを持つ口調でそう言った。

「人を斬るのも殺すのも、すべては騎士の役目です。貴方は唯……国の希望であってくれればそれでいいんです。……俺が軽率でした」

俺の手からアロンドイトを引き取ったランスは、俺には二度と真剣を持たせない。静かにそう告げた。

これにトリオンフィは含まれないのか。トリオンフィは剣つていうか装飾剣の触媒だから、魔法使いの杖のような物。数術を使うための道具だからそれを俺から奪ったりはしない。必要最低限の身の守りはそれで出来ると考えてのことだろう。

「俺が貴方を傍で守ります。だから貴方が戦う必要はありません。誰が相手でも……貴方には傷一つ付けさせない。命に代えても守ります」

「ランス……」

「だからアルドール様は、アルドール様のお心のままに。人が人に見えるというのは才能であり美德です。無理に人を虫にしようと思われる必要はありません。アルドール様は……道化師以外のカードを殺す必要もないんです。それ以外の人間だって同様です」

「……ありがとう、ランス」

なんとなく、解った。俺はやっぱりこの人の前で格好付けようとか立派な王になろうとかそういうところを見て貰おうと思うこと自体が烏滸がましかった。俺は自分がどんなに駄目な王で至らないかそれを自覚し彼に弱さを見せていく。それが俺とランスにとっての正解だったんだ。だってランスはいつもより自分の言葉で話してくれるし、優しい顔で俺を見る。俺が弱くて何も出来ないから、彼を頼る。頼られることで彼は、そこに何かを見い出す。そういうこと、

なんだよな？

こんな風にしか自分を認めてもらえないなんて本当に情けないけど、少し……ランスとの距離が縮まって行くのは嬉しい。俺が先王とは違う人間だと、理解してくれようとしているのだ、彼が。

(でも……)

アルト王なら俺の質問になんて答えてくれたのだろう？人は何か？敵とは何か？……俺の答えは多分間違っている。人にランスに人殺しの役目を押しつけるなんて。俺は直接その罪から逃げているだけだ。王として彼らの罪を間接的に背負う立場にあるからって、彼らに人殺しを命じて自分は安全なところに守られているだけなんてそんなの……多分正解じゃない。

(でもそれなら……)

本当に正しい王の答えて、一体何なんだ？

*

「で、頼み事は決まったのか？」

裏庭に戻った俺とランスに、待ちかねたぜと欠伸をするユーカー。そんな彼にランスが問いかける。

「ああ。俺の分は後で言う。その前にパルシヴァルの奴を聞いてやれ」

ユーカーが眠たそうに目を擦り、傍らの少年を手招き。俺の方へと歩かせる。彼は俺の傍までやって来ると、じつと綺麗な青で俺を

見上げた。

「……王様、アルドール……様。僕ともう一回戦つてくれませんか？」

「……え？」

「考えてみたらおかしいです。僕はまだ何もしていない。技も出していない。アルドール様だって、あの隙に僕に剣を向ければ降参してたのは僕の方です」

決着はまだ付いていない。今日一日お互い頑張ったのに、あんな幕切れはないだろう。確かに誰もがそう思う。俺の手の震えを知らない二人は尚のこと。

出来ることならその勝負を受けたい。望むところだと言ってやりたい。それでも……まだ駄目だ。手が震える。もし万が一でも。このトリオンファイでも……うっかり数術が暴走したら？相手はペイジのコートカードなんだから俺が怪我をさせるとか殺してしまうなんて事はあり得ないんだ。わかってる。何度やったって勝のは多分パルシヴァルだ。ランスだってトリシユとの二度目の決闘に負けてしまったらしいじゃないか。基本的に上位カードは下位カードと真正面からやり合って勝てる幸運がない。さっきのだって彼の幸福値が生み出した、俺の心の隙を突いた勝利なのかも知れない。無理したところで俺の幸福値がすり減るだけ。そしてここで挑めば、また俺はくだらないような悩みに囚われて、精神に異常を来しかねない。これはパルシヴァルが悪いわけではないけれど。

「アルドール様はお疲れだ」

返答に困った俺に代わって、冷たくそう答えたのはランス。得物のアロンドイトを片手に、鞘から抜き払って……パルシヴァルに目を向ける。

「もう一戦というのなら、私がアルドール様に代わってお相手しよう」

「え！？ランスさんですか！？」

「大人げねーぞランス。鬼！悪魔！」

驚きを隠わにするパルシヴァルと、ソロでブーイングのユーカー。

「……もつとも虫に気を取られて勝負を投げ出すような君が、俺に勝てるよと本気で思うのなら、掛かって来ると良い」

「だから、てめえはどうしてそういうこと言うんだよ。んなこと南部で言ってみろ。お前の評判駄々下がりで、人気騎士ランクがトリシユに抜かれんぜ」

俺のためとはいえ、あまりに容赦のない言葉。それにユーカーも呆れている。そんなユーカーだがパルシヴァルにも一応聞いてはみる様子。

「んで、どーするパルシー？」

「ぱ、パルシー?!」

「いや、こいつが勝ったらパー坊呼ばわり止めろって言われてたんだよ。んで適当に今考えた。呼びやすいしこいつからの評判も上々だ」

「へ、へえ」

「シヴァルでも良かったんだが、連続で呼んでたら誰かにうつかり縛られそうで何か嫌だろ」

「へ、へえー……」

そんな発想出るのはユーカーくらいだと思うよ。でも実際ルクリースに出会い頭に縛られたりしてたし経験者はこういう発想になる

んだらうか？

そんなことはどうでもいいんだけどさ、俺はおそろおそろランスの方を見上げてみる。笑っているが目が氷のように冷たい。いつの間にか従弟がその弟分に渾名を作って親しげに呼んでいたことが、そんなにシヨックですかランスさん。ていうか貴方はもう名前が短過ぎて愛称も略称も作りようがないですって。頑張って作ってもランスさんとかラっさんとかンっさん程度？どうしろって言うんだ。

「まあ、お前が嫌だつてんなら……俺が代わりに出てもいい。その位はそつちも許可してくれんだろ？ていうか許せ。頼む。ていうか許すもんだろそのくらい。だから許せ。ていうか許せ」

「ああ」

ユーカーの押しに真つ正面から向き合うのが面倒だったのか、或いはその言い方がツボに来たのかは俺はランスじゃないから解らないが、推測するに半々……いや、後者が七割つてところだらうか？

「それじゃ、パルシヴァル。こいつが今日の最終授業だ」

俺とランスがやり合うところを見たのはないよなと、ユーカーがパルシヴァルに尋ねる。それは俺も見ることがない。戦うのが嫌と言った矢先に不謹慎だとは思っけれど、ちよつと胸が高鳴った。だって、二人とも本物の騎士で……その二人が試合をするなんて。これでわくわくしない男はいないだろう。

「俺とランスをよく見てる。あれが王道で立派で世間一般的ではもてはやされる騎士って奴で、こつちが騎士の風上にも置けないよな邪道騎士って奴だ」

そこから得られる物すべてを持って行け。そついう風にユーカー

は俺達に伝えたような気がした。

「おい、アルドール」

「様を付けるユーカー」

「いいんだよ俺は」

「あ、うん。気にしないでランス、いいんだよユーカーはそれで……何？ユーカー？」

「お前が審判やれ。試合条件はさっきと同じで良いんだよな？」
「え、降参するまで……って奴？」

もうすぐ日が暮れるっていうのに、降参が終了条件なら、どうなるんだこの試合。だってランスもユーカーも頑固っていうか負けず嫌いの節がある。おまけにランスは俺の思いを背負っているし、ユーカーも弟分兼愛弟子の手前、いつもみたいに折れたり拗ねたり出来ない。俺の頬を撫でる風。その風は夏の風にしては……妙に涼しげを帯びていた。虫の声も種類が変わってきている。夜が近づいてきている。

(夜……？)

確かヴァンウィックが言っていなかったか？ユーカーは……夜には凄く強くなるって。それを思い出した途端、俺はどくと鼓動が鳴るのを聞く。

(見てみたい……)

思えば俺がユーカーの戦う所なんて、シャラット領でと盗賊戦で少し。ランスはあの盗賊戦……そのくらいだ。

普段ならランスの方が強いだろうとなんとなく思う。それでも夜なら？北部で崇められるセレストイン卿ユーカー。彼の本当の力は、

最高の騎士と謳われるランスとどこまで渡り合える？同等？それとも……それ以上？

「ああ、それでいい。どうせ結果は見えている」

「どうだかな。あとお前のそれ負けフラグっぽくね？」

弱い犬ほどなんとやら。そんなことを思っただろうが口にはしなかったランス。でも彼の目には一瞬ユーカーへの侮蔑が浮かんだ。しかしそれは本当に一瞬。その直後、その青は驚愕に見開かれたのだ。

「……ユーカー？」

「何だよ？」

ユーカーがランスを見る、両目で。彩度の明度の異なる二つの瞳で彼を見る。俺はシャラット領での一件で彼の目を知っている。パルシヴァルもユーカーとセレスを知っているからその目のことを知っている。それでも、だ。ユーカーが変装のためでもなくやむを得ずでもなく、こんな風に両目を開けるのを、俺たちもランスも知らなかった。

いや、ランスだけは知っていたのかもしれない。だからこそこの驚愕だ。それを彼はある種の裏切りと捉えているのだろう。

ユーカーは自分の目を嫌っているけど、両目を開けたユーカーは……いつもともセレス時とも何か違う。彼の左目は浅瀬の青。彼の右目は薄氷を思わせる美しい空色だ。突き刺すような冷たさが、その右目に宿って……彼の周りに不思議な空気を纏わせる。いつも騒がしい彼が、とても落ち着いて見える。もしかしたら彼は……彼の心はいつもこんな風な温度をしているんじゃないのかな。開けた視界は彼にそれを取り戻させる。

「本気でやらねえのは相手にとって最大の侮辱だ。こいつの手前
そう言っちゃまった以上、俺も本気出すのが礼儀だ」

「……やはり普段は手を抜いていたか。この間は怪我だから仕方が
ないとはいえ」

「だってお前嫌いだろ。負けるのも、お前に勝つ俺も」

「……ああそうだな」

「その癖、手を抜く俺も嫌いだ」

「否定出来ないのが悲しいな」

「そこだぜ。俺とお前の最大の違いってのは。つかアルドール、
いい加減合図出せ」

「あ、ごめん」

出して良かったんだ。なんだか二人の会話を遮ってはいけないよ
うな気がして出来なかつただけど……これ以上躊躇ったら俺の所
為にされそうだ。

「そ、それじゃあ二人とも用意、構え。……開始っ！」

戸惑いがちに発した俺の合図に、二人は同時に飛び出した。俺や
パルシヴァルとは違う。一手に悩むんじゃない。一手のスピードに
二人は焦点を置いた。

「そんな、セレスさんがスピード負けをするなんて……」

「違う、……あれは数術だ!!」

飛び出してしばらくはユーカーの独壇場。しかし、先にリーチ圏
内に届いたのはランスの剣だ。見ればランスの靴底から噴射される
水。そこには光り輝く水が見える。俺の言葉の意味が解るのか解ら
ないのか微妙なパルシヴァルも、それがとても卑怯なことだとは理
解して……

「セレスさんは数術を使えない！それにこれは剣の試合です！そんなの卑怯ですよランスさん！！」

「いや、いいんだよパルシヴァル。これが立派な騎士って奴だ」

「セレスさん！？どうしてランスさんを庇うんですか！？」

攻撃の押収を繰り返しながら、それでも冷静に言葉を紡ぐユーカ。喋りながらもランスの剣を払える余裕が感じられる。ユーカが受けた攻撃は、最初のあの一撃だけだ。それも軽傷で済むよう彼はかわしたようだった。凄い。ユーカはほとんどランスの攻撃を見ていない。見ずにこれだけかわしているのだ。両目が見えていないのに、両目で見ない。気配を感じ取っている。全神経を集中させている。それなのになんて……涼しげな顔。

次第に視界が闇に包まれていく。一撃一撃を繰り返すランスの方は常に必死だ。それに対しユーカはランスの攻撃の切れ目を見計らい的確な攻撃を繰り返す。そんなユーカの冷静さが心底腹立たしいだろう。その相手が自分を褒めちぎるのだから、どんなにそれが憎く聞こえるだろうか。

「庇ってねえ。それでもこいつはあいつの騎士だ。あいつの代わりにあいつの名誉を背負ってる」

「名誉……ですか？」

「あいつが負けるってことはアルドールの、カーネフェル王の名誉に傷を付けるってことだ。そのためには自分の、騎士としての名誉を汚してでもあいつは勝利をもぎ取りに来てる。それが本当に立派な騎士って奴だ」

「俺を褒めて手元を狂わせるつもりか？」

「事実だろ？つかそんなちやちな技お前に通じるなら連戦連勝は俺だろ常識的に考えて」

名誉を持つこと。誇りを持つこと。それが立派な騎士。その名誉を誇りを預かり、絶対に負けないこと。それがランスという騎士の強さで魅力なのだ。ユーカーは言うけれど……パルシヴァルはそれで納得などしない。」

「セレスさんが王様に仕えていないからって、セレスさんが間違った騎士だとか、名誉がないとか、そんなの嘘です！貴方の剣を、目を見れば解ります！貴方に何も無いのなら、僕の目に……貴方はあんなにも大きく映ったりしませんでした！」

「……ランスはこの国で一番大勢の奴らに信頼つつう名誉を預けられてる。だからランスは負けるのが誰より悔しいし、負けられない。だが俺にはそんな名誉はない。だから俺は別に負けても良いし、逃げてても良い」

最初はそのはずだったんだ。そう零して、ユーカーがランスに切り込んだ。

辺りは薄暗い。普段なら見えている剣の軌道。それに気付いても避けられない距離。ユーカーが両手で振るった渾身の一撃。それを受け止めるランスの手にしびれが走る。その隙を見逃さず、ユーカーがランスに足払いを仕掛ける。体勢が揺らいだその刹那、彼を踏みつけ地面に落とす。

「俺は逃げるためにこの北部へ来た。その結果、解るかパルシヴァル。そんな俺にも勝手に信頼なんて言葉が生まれてやがる。俺はそんなもんいつか捨てるしそこから逃げるかもしれない。そんな奴を信じる馬鹿が湧きやがる」

そう言いながら、ユーカーはランスの首筋に刃を当て、降参を迫る。

「解るかパルシヴァル。騎士つてのはそういうもんだ。一度なれば、何処にも逃げ場はない。守れば守るだけ、身動きが取れなくなる。その内本当に守りたかった物も解らなくなる。奪われる。なくしてしまう。だってのに信賴っていう重荷だけが残される。……んで、降参はすんのか？」

「言うまでもない」

「だよな、お前ならそう言うよなやっぱり」

さつと剣を引くユーカー。本当なら、本番ならここで幕引き。降参されなくても剣を振り下ろす。そういうものなのだと俺もパルシヴァルも悟って、戦いの怖さを垣間見る。名誉が誇りが……：そういう物に縛られて、命乞いすらままならない。負けたとしても命乞いなどしない。それが本当の騎士という物だ。自分の命恋しさに、主を売るような者は本当の騎士とは言えない。ランスが最高の騎士と呼ばれるのは、戦場で命乞いなどしない。そもそもするような状況にすらならない。

「んじゃ、続けるぜ」

「……ああ」

試合の続行に、ユーカーが微笑。それにつられたようにランスが苦笑。そのかわされた笑みに、場の空気が僅かに和らいだ。

「二人とも………楽しそうだ」

真剣で渡り合っているんだから、二人とも怪我をする。手元が狂えばどつちかが死ぬことだってあり得るのに。

ユーカーが剣を退くことで、ユーカーはランスに教えた。これは本番じゃない。あくまで試合だと。誇りってそんなに大事かと彼はあの時間いかけた。ユーカーは……：こうして尊敬する相手と手合わ

せでできることが楽しい、それだけでいい。勝敗などどうでもいいとランスにその刃をもつて伝えたのだ。

俺に誇りはない。今に限っては守る者もない。だから負かせてみると、勝負を続けた。その姿は、いつかパルシヴァルが見た騎士とは違って見えたのだろう。救うために逃げる騎士が、戦いをこんな風に好むなんて思わなかった。そしてあんなことを言われれば……取り乱すのも無理はない。だって二人はもう俺たちの声が聞こえないくらい、この試合にのめり込んでいる。

「僕は……セレスさんにとって、重荷……だったんですか？それなら最初から……っ、僕なんか助けなければ、見捨てていてくれれば良かったんですっ！どうして今になって……そんな事を言うんですか!？」

「違うと思うよ」

「え……」

「ユーカーは、……俺みたいになるってのはそういう大変なことなんだって言うてるんじゃないかな？」

誰かに仕えるって事はランスみたいになるってことで、二人から見れば……形だけ仕えてもそこまで出来ない奴は騎士じゃないってことで……。ユーカーみたいに主に礼儀なく仕える、或いは主を持たない姿勢は、誰から見ても立派な騎士とは言い難い。

それでも縛られない彼は、主を持つことで信頼を持つことで身動きが取れないランスに救えない者を救うことが出来る。そうやって救い続けた結果、自由だったはずのユーカーも身動きが取れなくなりつつある。人々の信頼を裏切って、これまで通り自由に生きるのか……それとも信頼に折れて自分のやり方を捨ててしまうのか。その結果、守りたかったものを守れなくなってしまったとして、誰かではなく大勢を選んだことを本当に誇れるのかと彼はパルシヴァルに聞いているんだ。

「ユーカーは言うこととやることが全然噛み合って無くて、あれで君に何かあれば絶対助けてくれるだろ？俺にもそうだよ。俺に仕えてなんかいないけど、それでも守ってくれるんだ」

ランスとユーカーの違いは、見捨てられるかられないか。命令以外のことが出来ないランスと、自由に動けるユーカーは……それぞれ違う辛さを抱えている。

絶対に負けられないっていうのも辛いし、やりたくないことをさせられるのも辛い。だけど、負けても逃げても良いのに……逃げられないって言うのも辛いんだろうな。だからユーカーは……ああなんだ。

殺すために剣を振るうことが好きなんじゃなくて、最初はこうやって……遊ぶように競い合うのが好きだったんだろう。それが人殺しの道具として使われるようになったのがこの二人だ。そこから歩く道が隔たっていったのがこの二人……

「命令されるのって便利だよな。その善悪の判断をするのは命令される側じゃない。だけど命令されないってことは全部自分で考えなきゃ駄目ってことで……特定の主を決めないって事は、そういうことなんだよ」

手の届く限り、救える限りを救い続ける。際限なく……いつまでどこまでってのもわからずに、それでも助けたい相手を助け続ける。放っておけない限り、何人でも何人でも。それはきつと、そういうこと。

「どういうこと……ですか？」

「ユーカーはランスも助けたいんだ。だからそのために……全力で相手をしている。その上で、自分が負かされるまでこの勝負を続

けるつもりなんだ」

名誉が地に落ちてても、それで何も手に入らなくても、失うものばかりでも。そうすることで助けられる相手がいるのなら……彼はそんなことは絶対に言わないだろうけど、見ていればなんとなく解るんだ。

「ユーカーは、自分みたいになっても良いことは何も無いって言っているんだ。名誉も地位も得られない。感謝だってされないことも多い。敵も多いし恨みを買ったり。それでも君は彼みたいになりたいのかな？」

「僕は……」

「みんながみんな、君みたいに彼を理解して慕ってくれるわけじゃない。だからこそ彼も捻くれてる」

「……」

「ユーカーが君に優しいのも厳しいのも……君の気持ち嬉しいからなんだと思うな。ユーカーは本当にどうでもいい相手にはそんなこともしないとと思うよ」

「セレスさんが……？」

「ああ。ユーカーは君を気に入っている。間違いない。君はその自信を持って良いよ、俺が保証する。なんならカーネフェル王の証明書も発行してもいい」

職権乱用かもしれないけど、それで彼の悩みが解決するなら安いものだ。

「……ユーカーはさ、決断を急がせてるのは悪いよな。そんなこと急に言われても解らないと思うよ俺だって」

「はい……」

「だから、そういうことをゆっくり考えながら彼の傍にいればいい」

いんじゃないかな？形式上俺は君の主って事になるけどさ、君が他に仕えたい人を見つけたっていうのならそれでもいい。騎士の称号を剥奪するってことはないから安心していいよ」

「アルドール様……」

「……それにしても、やっぱり凄いなあ。あの剣捌き！本職はやっぱり違うな。君もユーカーがこういう風に戦うのを見るのは初めて？」

「は、はい」

「ああいうユーカーをどう思う？」

踊るように戦い続ける二人を、じっと見つめるパルシヴァル。しばらく彼はそうしていた後、そこから目を離せないまま……小さく言葉を零す。

「……僕も、戦ってみたいです。あの人と」

「どうしてそう思う？」

「僕も、あの人をあんな風に笑わせられるような勝負が出来る騎士になれば素敵だなんて思うんです。殺すとか殺さないじゃなくて……そういう次元を越えて、あの二人は笑っている。あのくらい強くなれたら、ランスさんみたいになれば……僕ともあんな顔をしてくれるんでしょうか」

「そうだな。あの二人は今、磨いた剣の腕をぶつけるのがこの上なく楽しいって顔だ」

「……やっぱりあの人は、殺すために傷つけるためにあんな風に強くなったんじゃないと思います。たぶん最初は……あんな風に」

家のためでもなく国のためでもなく……好敵手とのじゃれ合いだったのだ。皮肉なことに二人ともじゃれ合いと呼べる以上の才があり、じゃれ合いで済ませられる身分ではなく……そのまま騎士になっってしまった。誰かのためという理由を見い出したのは、先王と

の出会いがあったから。だからそれが失われた今、二人はまだ不安定。理由がふらふらとしたまま、強さと弱さと危うさだけが残された。

だからユーカーは俺たちみたいになるなと彼に言う。ランスみたいに一人だけにしがみついても、自分のように何にも執着せずふらふらと気の向くままに守っても。どちらもろくなことにはならないからと。

「僕も同じです。セレスさんに色々教えて貰って、それが嬉しくて楽しくて……褒めて貰えるのが何より好きで……セレスさんが驚いてくれるのが好きで……だから僕は、頑張つて……」

そのセレス……ユーカーが初めて褒めてくれなくなった。褒めることがパルシヴァルのためにならないと感じ始めたからだろう。今のパルシヴァルは幼く、純粹過ぎる。人はきつかり白か黒ではない。それを認められないくらいに彼は幼い。

「どうして騎士になったか、じゃなくて。騎士になって何をやったか。それじゃあ駄目なんでしょうか？」

パルシヴァルの問いかけは、言葉を変えて俺の胸へと響く。

俺はどうして王になったか。王になって何をやったか。そのどちらで評価されたい？どちらで責められたら苦しい？

どうして王になったか。俺は決して褒められた理由で王になっていない。Aカードだから、イグニスに言われたから。イグニス達と同じ混血を守りたかった。力が欲しかった。それがはじまり。そこから俺は何をした？まだ何もしていない。国のためになるようなこととは何も……即位してまもなく都を奪われ落ち延びた、哀れな王だ。今の俺はどちらも評価できる場所がない。だからパルシヴァルの言葉は有り難い。それはこれからを評価してくれる可能性。ユーカ

ーも同じだ。

パルシヴァルはユーカーが何故騎士になったかじゃなくて、騎士になったユーカーが自分を助けてくれたことを評価している。だからどうして自分が騎士になるのではなく、これから自分がすること、自分を認めて欲しいと考える。唯の憧れでは終わらせない。ここから考えて自分なりにこの道を歩いて行くからと、戦う二人をじっと見つめている。

それにつられて俺も二人の試合へ視線を戻す。ランスの数術と剣技に翻弄されることなく、剣技のみでそれと渡り合うユーカー。彼は数術こそ見えないが、数術への反応は過敏。本気で集中すればここまでランスとやり合えるのか。

数術使いと一般人の力量の差は歴然。数術使いの弱点である接近戦すら克服しているランスは最強。そのはずだ。そのランスとここまでやれるユーカーも見事だ。だって彼は唯の人間なんだ。

不意に俺は彼の中に何か探している答えが見つかりそうな気がして、目を凝らして彼を見つめた。道化師と俺が戦う上での重要なヒントがそこにあるのではないか。そんな気がして……

(……でもこうやって見てみると、二人は本当に良くお互いを理解しているんだな)

だからこそ、本当ならかわせないはずの一撃をかわせる、防げる。そこからの攻防。一手先……違う、もっと先までを読んで二人は今を戦っている。剣とは単純で単調な攻撃ではない。まるで、チェスだ。俺は目先のその一撃をどうするか考えるだけで精一杯なのに。

平常心を取り戻してからのランスは、乱れていた攻撃も防御もいつものように堅実で無駄のないものに。ユーカーのそれはいつも以上に自由気ままで、動きを読ませない。俺なんかじゃたぶん今のユーカー相手じゃ一撃だって防げない。それに食らいついていけるのは相手がランスだからこそ。辺りはすっかり日が落ちて薄暗い。そ

の空気こそ、ユーカーの本領発揮というものなのか。彼の動きはいつも以上にキレがある。常に片目を隠し、昼間は昼寝ばかり……。それは彼のこの夜目と関係していた。夜起きているから眠いのか、それが元々夜目だから、昼間が眠いのか。

(ちよつと待てよ……?)

鶏卵の関係は置いておくとして、昼間ユーカーが眠いというのはほぼ間違いないでしょう。それなら表現がおかしい。夜が強い、じやなくて……。本来の強さはこつちが本物ってこと？

俺たちは今まで昼間にフクロウを捕まえて喜んでいたようなものだ。夜の彼を捕まえられるはずもないのに昼間の彼こそ彼なのだと決めつけて。

(昼と夜……?)

何処かで聞いた表現。この胸騒ぎは……。嫌なことだ。俺は脳内を漁って、一つの文献を思い出す。その文献と共に思い出された記憶は、あの名も無き村での出来事だ。フローリップとルクリースがランプで遊んでいた時にジョーカーについて何か言っていなかったか？ジョーカーが二枚ある理由。一枚しか使わない理由。二枚のジョーカー……。その二枚の名前を、俺は以前本から拾った記憶がある。

「真昼と真夜中……」

ランプには様々ないわれがある。

例えば……。ランプは4スート13枚。4×13＝52枚。それにジョーカーを足して54枚。その数を足すと1+2+3+4+5+6+7+8+9+10+11+12+13＝91×4＝364。これにジョーカー2枚を足すと366。つまりは一年を表すという

説がある。他にも……ジョーカーの一枚が昼をもう一枚が夜を表すという話もある。

(昼夜、道化師……チェス……“よく、知っている”……)

それは言葉の連想だ。俺は昼と夜から道化師を、道化師から以前あいつが“この神の審判はチェスに似ている”と言っていたことを思い出す。そして道化師は……俺に恨みを持つ以上、“俺をよく知ってる人物だ”とルクリースが言っていた。

ユーカーがランスの攻撃をこうやってかわせるのは、ユーカーがランスを知っているから。ランスがまだ戸惑っていて押されがちなのは、夜のユーカーをランスがまだよくわかっていないから。

俺と道化師の関係もたぶん同じだ。道化師はユーカーと同じで対戦相手を深く理解している。対する俺とランスはそれを知らない。だからユーカーより強いはずのランスが劣勢になったりもする。

俺が道化師に勝つためのヒント……それはランスの中にあるんだ。カードとしてはランスの方が不利。それでもランスはここでユーカーに勝たなければならぬ。俺の代わりに戦う彼は、俺が許すとか許さないではなく、それでも負けることは許されないのだ。本人がそれを許せない以上、絶対に。これは遊びだとユーカーが語りかけても、それでもランスはそれでも仕事だと言い張るだろう。互いに相容れない理由がある。だから戦う。

それでもユーカーは負かされるのを待っている。どうしてユーカーはそんなことをするんだ？ランスが好きだから？ランスを勝たせたいから？違う、そうじゃない。

ユーカーはランスとトリシユの決闘に割り込んだ。下手したら死んでいた。ユーカーは出会った頃は死にたくないって言っていたのに、ランスに殺されることについては何も言わない。それどころかそうなりそうな事を何度かしている。

(ユーカーは、ランスを殺したくない。だから……?)

殺すくらいなら殺されたい。他の人を殺させるくらいなら殺されてやる。そう考えたなら彼の行動の意味も多少は理解が出来る。

ユーカーが守りたいのは誉れ高いランスの騎士としての名誉と、ランス自身だ。だからランスを庇うし、ランス自身がその名誉を汚すような振る舞いを仕掛けた時は必死になって止めるのだ。

相手を負かすと言うことは、自らが相手のタブーになること。思考の駒を動かすことが出来ない程に、追い詰めること。殺されないと言うことは、相手に殺されないだけの理由を手に入れる必要がある。俺が道化師相手にそれを教えることはたぶん無理だ。だから俺は相手からそれを教えられることがあつてはならない。そうだ……それさえなければ俺が負けることはない。負けではないのだ、まだルクリースが死んでも、フローリップが死んでも……悔しいし悲しいけれど、まだ負けではない。俺も道化師も互いに生きている以上これは引き分け。

ルール上俺と道化師は互いに互いを殺せるカード。それでもジョーカーとエースの幸福値の差は歴然。俺が道化師と引き分けにするには他のカードを犠牲にしなければならない。そうやって俺は爪を研ぎ、牙を研ぎ……道化師が幸福値をすり減らして、ここまで落ちてくるのを待つしかない。

ランスも言った。人を人として思つてはいいと。俺が蟻と思うべき相手はあの……道化師唯一人。あれが誰であつても俺は、彼が彼女をこの手で殺さなければならぬ。

そのための王だ。そのために、ランス達騎士に手を汚させる罪の温床。道化師を殺さなければ、この審判は道化師の一人勝ちだ。他のすべてのカードの願いも思いも無に帰る。そこに至るまで失われた命すべてが無意味。そんなこと、あつてはならない。

(でもそのために……)

俺は後何人の死を見なければならぬのだろう。道化師を殺すまで、俺は……俺の傍から後何人奪われるのだろうか？失われるのだろうか？ユーカーもランスも、トリシユもパルシヴァルも……イグニスも。みんないなくなってしまう？

せめて俺が強ければ。そう思つて剣を教えて貰つたのに……。ランスとユーカーの試合は心が躍るのに、そつとトリオンフィに手を伸ばせばその手が震える。それは、そんな自分に小さく嘆息した時だ。

「夕飯ですわよランス様、それとお兄様」

突然響いた明るい声。その直後にばしゃんと言つ音。二人の騎士の動きが止まる。

「え、エレインさん？」

見れば屋敷の上の階の窓から少女が顔を覗かせている。その手には空になった水桶が。

勝負に文字通り水を差されたランスとユーカーの表情は、それでもまだ戦闘意欲が冷めないようで、夕飯抜きでもとことん目の前の相手とやり合いたいと言っている。それがますます気に入らないと少女は眉をつり上げる。

「ご飯ですっ……！」

「っ!？」

エレインは思い切り水桶を眼下……もといユーカーの頭を目掛けて叩き落とす。ランスに気を取られていたユーカーはその攻撃をもろに食らった。

「ゆ、ユーカー!？」

ふらつき倒れるユーカーに、ランスが駆け寄りそれに遅れて俺と
パルシヴアル。見ればユーカーは完全に伸びている。まさかあの勝
負がこんな風に終わらせられるだなんて。

「ユーカーってコートカードなのに……」

どうしてこんなに運が悪いんだろう?カードの力を頼らない力に
長けているんだろうか?

「痛い……」

頭がガンガン、クラクラする。どうしてそんなことになったのか。ユーカーは重い頭でそれを思い出しながら、義妹である少女を恨めしく思う。

(エレインめ……)

桶ってあんなに重かったか？中に石でも積めて落とされたような痛さだったぞあれは。彼女を呪い、痛む頭を押さえながらゆっくり身を起こせば……寝台に寝かせられていることに気がついた。辺りを見回せば視界に飛び込むものがある。

「何してんだお前ら……？」

傍には今朝のようにくつついているパルシヴァル。ちょっと離れたところの椅子に座って本を読んでいるのがアルドル。夏だつてのに何この人口密度。暑い。暑苦しい。

「あ、起きたんだユーカー」

「つかなんでここにいるんだよ。こいつはともかく」

「ユーカーってほんとパルシヴァルに優しいな」

「そりゃあまあ……こいつはまだガキだし、普通はランスみてーに大人げねえこと出来ねえだろうが」

「ちなみにここだけの話、俺も年下なんだけど」

そうぼやいたアルドル。言われてみれば確かにそうだ。それで

ようか」

「そいつ汚したら本気でぶつ殺すぞ？」

「っていうかそんなところで何してたんですか……？」

「おお、これはこれはアルドル様。いえ、何息子があまりに冷たいのでね、セレス君でも苛め……可愛がって癒されようかと」

「勝手に癒されんなー！こっちの不快指数はパねえってのにつー！」

「う、うわぁ……そ、そうなんですか」

本気で気付いていなかったらしいアルドル。流石のあいつも若干軽く引いている。それもそうか。妖怪マツトレスはいつの間にか妖怪スーツに進化だか退化だかして、寝台に寝転がっていたパルシヴァルをその白い布で絡め取って抱き寄せている。あれは誰がどこからどう見ても犯罪者だ。当然俺もそう思う。即刻今すぐぐさま死刑か宮刑か島流しにすべきじゃね？割と本気でそう思う。

寝起きの身体に鞭打って、俺は愛剣セレスタイトを構えると、俺の殺気に飛び起きたらしいパルシヴァル。流石は俺の弟子。危機管理能力はあるようだ。

「あ、セレスさんー！！」

あ、無いようだ。あつたらそんな笑顔ここで浮かべるはずがない。しかし奴はそう言いながらするとヴァンウィックの拘束を解除。

(え？……)

あいつは腐ってもランスの父親。この国でも有数の名騎士だぞ？お遊びとはいえその拘束をものの数秒で解除するってどういう事？よくよく見ればスーツのあちこちに線が引いてある。俺がそれに気付いた後に、はらはらと細切れになったそれが宙に舞い、床へと

落ちる。油断していたとはいえ、今の攻撃はかなりの速度だ。気を取られた所為もあるが、全く見えなかった。気がつかなかった。

俺に駆け寄ってくるパルシヴァルが剣を鞘に収めるところを目撃し、今のがこいつの剣技だったんだなと確信したまで。一日足らずで本当に自分の技を編み出すとは、本当にこいつは天井知らず。つていうか俺に見せた技と全然別物じゃねえか。一日で一体いくつ生み出したんだってんだ。

「無事で良かったですセレスさん、どこも痛くないですか？」

「お、おう……」

あくまでパルシヴァルは俺の身を案じてくれている。その目に宿る光は何処までも純粹な色。それでもだ。ここまで教え子が天井知らずに優秀だと、劣等感が酷い。俺の教え方が上手いからとかパルシヴァルは言ってくれたが、そんなレベルじゃないだろう。俺が涙目になっていると、廊下からノック音。ランス……じゃねえな。叩き方があいつと違う。ていうかただ事じゃない。この激しいノック音は。

「アルドール様！此方ですか！？」

「トリシュ？」

室内に飛び込んで来たのは、今日一日領内の仕事を押しつけられていたトリシュその人。俺の視線に気付くと一瞬何か言いたげに俺を見たが、すぐに仕事を思い出しアルドールへの報告を急ぐ。

「北に動きがありました！」

「何だって!？」

トリシュの言葉にアルドールは青ざめる。そして周りを見回して、

神子とランス……その二人がどちらもここに居ないことを思い出し何故か俺に縋るような視線を送る。

「……湖城から抜け出す一派がありまして、彼らは此方に向かつてくるわけでもなく、更に北上、いえ……北西の方角へ向かっていました」

「つまり湖城の警備が手薄になったってことか……攻めるなら今がチャンスってことだよな」

「いいえアルドル様、一概にそうとは言えません。最悪これが此方を誘き寄せるための罠ということもあります」

要するに、こつちもこの領地の守りをゼロにするってわけにはいかねってことだな。それは結局有利なんだか有利じゃないんだか。せつかく敵に斬り込むチャンスだったのに、全力で攻められねえってのはこつちとしても不完全燃焼って感じた。

「とりあえずこのままうだうだ話してるのは時間の無駄だ。さつさとランスと神子を連れて来い」

「わ、解った！イグニスとはぶん部屋にいますと思うから……」

ばたばたと慌ただしく部屋から出て行くアルドル。それに続く者はない。

「……？どしたよ？さつさとランスの馬鹿連れて来いよトリシユ」
「それが……ここに来る前に彼に会いまして、先にこのことを伝えると……自分が神子様を呼びに行くと言っていたのですが」

まだここに彼らがないのはおかしい。そんな顔つきになる。

「まさか、あいつら……」

「トリシュっ！ユーカー！」

俺の不安を煽るよう、出かけた時以上に慌ただしく戻ってくるアルドール。

「イグニスがないんだ！どうしよう……もしかして道化師に攫われたとか」

「あー……それはねえよ」

確かに神子は女だが、そんなヒロイン属性は持ち合わせじゃない。あんな腹黒暗黒トス黒神子にそんな属性俺が認めねえ。しかし本気で心配してらしい、この馬鹿王の目にはあいつがどう映ってるんだか俺にはよくわからない。

「ったく……あの馬鹿」

にしても王が王なら部下も部下だ。

「何で俺を殴るんだよ」

「お前の馬鹿があいつに移ったからに決まってんだろ」

溜息ながら自然と手が出た俺に向かって、アルドールが不満そうに此方を見上げる。自慢の従兄に馬鹿菌を移された俺からすれば何が不満なんだと言いたいが、まあ満足そうに見上げられるよりは幾らかマシだ。

「……ランスの馬鹿のことだ。多分一人で北に向かったと思う」

「ひ、一人で!?!」

「恐らくそれに気付いた神子がそれを追ったって所だろう。幾らあいつが強くて、今のあいつはカードだ。カードの相性とか弱さはいいつの強さでカバー出来ねえもんがある……幸い神子はコートカードだ。戦力バランスを考えたんだろう」

戦力バランス。神子があっちに行つた以上、それを考えるならここを守るのは俺の役目だ。北の城を手に入れたところで、このアロンドイト領を奪われりや意味がねえ。籠城戦を強いられるのがあいつらじゃなくて俺達ってことになる。

でもそれを考えたのはあいつじゃなくて神子の方。俺が本当に殴りたいのは叔父の方だ。ランスの馬鹿は、父親の汚名により汚された自分の名誉のために暴走している。そのために正しさとか正義とか、そういうものに縛り付けられている。

自分の強さを過信しているとか、そんな風には言わない。事実、あいつは強い。それでもだからって無茶をするのは違うだろう。人に頼ることにあいつは慣れていないんだ。無駄に強いから、プライドがそれを許さない。

第一、今日は久々に俺に負けたりしたわけだ。プライドが参つてやがる。俺が負けていれば、あいつより弱い俺を頼ることが出来ただろうが、あいつに一回でも勝つた俺をあいつは頼れない。あいつはそういう面倒臭い人間だ。パルシヴアルのためとはいえ、俺は本気を出すべきじゃなかった。ましてや夜に戦う必要はなかった。

(そうだ……夜)

あいつは俺ほど卑怯な戦いに慣れていない。騎士道を重んじ基本は正々堂々戦い勝利してきた奴だ。だから夜の戦いはあいつに向いていない。

「ユーカー……?」

不意に俺の顔を覗き込むアルドール。この馬鹿は馬鹿だが妙なところで聡い。ボ口を出す前に始末する必要がある。

「うるせえうるせーうるせえ五月蠅えっ！！こつちは寝起きだぞ怪我人だぞやってられるか！俺は疲れた！俺は眠いっ！よつて俺はこの件では絶対働かねえっ！ランスの馬鹿のフォローなんかやってられるか」

いいからお前ら出てけ俺は二度寝するっ！そう怒鳴り散らして全員廊下へを追い出し鍵を閉め……ついでに柵を扉の前まで移動させる。

ここまでやれば、バレないだろう。しばらくは……要は俺が居ると思わせられれば良い。北部での俺の名はそれだけで守りだ。俺がここにいと知れば直接俺を知らない敵はここを攻めたりしないだろう。

カードではないとはいえ、あの変態叔父だつて騎士だ。パルシヴアルの件は油断しただけだろう、能力的には現在の俺やランスなんかよりまだまだむかつくことにあの叔父は強い。ここを守るのはそもそもあの男の役目であり義務だ。それをほっぽり出したとしたらそれはあいつの責任だ。

「……………悪いな」

俺はあいつみたいに立派な騎士じゃない。ここに残るのがベストだ。解つていても、それが出来ない。領地のためになんか、俺は戦えねえ。

俺が戦う理由は今となつてはもう一つ。仕える俺の王も、守るべき婦人も居ない。俺が戦うのは俺の友人、ランスのためだけだ。

「来いっ！リンガーレット！」

俺が愛馬の名を呼ぶと、蹄の音が近づいて……窓の下に俺の馬が現れる。俺の格好を見てこの馬は俺を小馬鹿にしたように笑う。仕方ないだろこればかりは。変装でもしないとここを抜け出す意味がない。

基本こいつは暴れ馬だから、あんまり束縛するとストレスで凶暴化する。都にいる時はそれで大分俺への当てつけが酷かったが、こへ来てから放し飼いにしてるのが効を成した。いつもより機嫌が良さそうだし、第一繋いでたらこいつがいなけりゃ俺の不在がもろバレだった。

「思い切り飛ばしてくれ！ランスの馬鹿に追いつくくれえに！」

*

「ユーカー……」

寝起きで機嫌が悪かったのか、それともやっぱりエレインに攻撃された痛みがまだ酷かったのか、或いはあの叔父の行動に何もかもが嫌になって無気力になってしまったのか。

アルドールは原因を考えてみたが、正解なんて解りそうにないの
で考えるのを適当なところで止めた。問題はそこじゃない。ユーカ
ーの協力を得られないところだ。

（困ったな……）

イグニスがいらない。そうなった時に一番距離を感じず頼ることが出来る相手はユーカーだ。

他のみんなとはまだ出会って日が浅い。人見知りというわけでは

ないが、物凄く心が落ち着くわけでもない。例えそれが見て和むパルシヴァルであっても、気を使ってしまう。知らないことが多いから、うっかり触れてはならないことに触れてしまわないかが怖いのだ。ユーカーにはそれがない。

シャラット領での一件で、彼の心を垣間見た。彼の弱さも見せられた。それで彼のことを深く知ったつもりになっている。だから俺としては個人的に親しみを感じてしまっているのだ。彼がどうかは知らないけれど。

(どうすればいいんだろう……)

イグニスがいないと何をすればいいのか解らない。北の湖城に向かったというのならそれを追うべき。ランスとイグニスだけでは心配だ。それでもこの場所の守りをどうするべきか。それも考えなければならぬ。

俺が挙動不審に陥ると、横でトリシユが心配そうに俺を見る。パルシヴァルは夜中と言うこともあって少し眠そうだ。

「どうかなさったんですか？」

「エレインさん！」

廊下に屯する俺達に、ランスの婚約者の少女が駆け寄ってくる。屋敷の見回りをしていたのだろう。片手に鍵の束を持っていた。

「いや、それが……」

ランスがいなくなったなんて言ったらこの少女はどんなに驚くだろう。そう思い言い淀む俺に彼女は意外なことを言う。

「ランス様ならお出かけになられましたけれど、ランス様にご用

でした？」

「し、知ってたんですか!？」

「知るも何も、ランス様の愛馬が消えていましたもの」

けろりとしたその返答に、驚いたのは俺の方。

「ランス様が何も言わずにここから消えてしまつのは何もこれが初めてではありませんわ。私はその留守を任されているのですから、鍵の管理にも身が入るといふものです。それが、妻の役目ですから」

そう語り、俺達に一礼。窓や扉の鍵をひとつひとつ彼女は確認していく。

「あら?お義兄様の部屋も鍵が……?まだ寝てらっしやるんですの?」

「え、ええと」

よくもまあ寝ると形容できたものだ。昏倒させたのはこの子自身だろうに。

「……ええ。気分が優れない様子で、しばらくそっとして欲しいそうです」

俺の代わりに答えてくれたのはトリシュ。何か言おうとしたパルシヴァルの口をさっさと両手で覆ったのはヴァンウィック。どうしてか、普段の言動の所為で犯罪者じみて見える。

「あの……彼が何か?」

「これは失礼」

俺が何事かとランスの父親を見上げれば、彼はエレインが階下に降りていくのを確認し、そしてパルシヴァルから手を放す。余程怖い思いをしたのだろう。パルシヴァルは涙目で俺の背中に隠れてくる。

「あの小さなレディには余り余計なことを言わない方が良い。彼女は暴走気味な所がある。彼女がセレス君に何かしようなものなら弟と息子に私も少々顔向け出来なくなるのでね」

「さて、たまには私も領主らしいことをしようか。留守番は任せられましたよアルドール様」

「え？」

「あの馬鹿息子だけで北の城が落とせるとは思えない。今のあれも、暴走しているだけです」

そういう意味ではお似合いの二人なのだがとヴァンウィックは肩をすくめて苦笑した。そんな彼を見て、ランスのいない所では、やけに優しい目をして彼のことを語るんだな。そんなことを思う俺を、ヴァンウィックは品定めをするようじつと見つめる。そこに先程までの優しさはない。

「俺に似ず、それでいて俺に似て馬鹿な息子です。アルドール様、どうかあの馬鹿を諫めてやってください。あれは騎士であり騎士ではない。あれは剣とは何かを理解していない」

「あの……それってどういう……」

「貴方があれの主でありたいと願うのなら、どうか貴方はもっと尊大であって下さいアルドール様」

「……え？」

「命令を待たず、感情で走るような者は騎士とは呼べません。今日のあれは実にあれらしくない」

いつも王のために生きてきた、ランスが王である俺を置いて行動した。俺の意見も聞かずにだ。それは本来彼らしくないことなのだとその父親から告げられている。

(それは……確かに)

上位カードが一人で行動すること。それがどんなに危険なことが解らない彼ではあるまい。ましてや向こうは敵陣真っ直中。死に行くようなものだ。幸いイグニスが傍にいるなら何かしらの目的があつてのことだとは思いつけれど、イグニスが本当に彼と一緒にだという保証もない。

(大体イグニスだつて……)

イグニスはコートカードだけど、女の子だ。数術使いで神子とはいえ……。

俺が思い出すのはシャラット領で傷ついた彼女の姿だ。俺より彼女が強いのは知っている。心配するなんて烏滸がましい。だけど……今のイグニスはエルス・ザインの使役虫に刺されているし、本調子ではないはずだ。彼女に何かあつたら、そう思うと不安に駆られる。

これは長らくイグニスとギメルが世界の中心だった俺の本能のよくなものだ。いつも何時だつて心配で仕方ない。

それでも脳裏に浮かぶのは彼女だけじゃない。今日一日見た、ランスのいろいろ顔。俺が貰った言葉。それが俺の脳裏を駆けめぐる。

ランスがこんな行動を取ったのは、俺が頼りないから？俺を危険に遭わせないため？俺が戦えないから？だから、全部自分が解決しようとしてしまったのか？

「ランスが……変わったって言いたいんですか？」
「ええ。それは貴方のおかげであり、貴方の所為だとも言えるでしょう」

それは良くもあり、悪くもあることだと俺は今咎められている。しかし、俺の所為かと思ったところにお前の所為だと言われた俺は、他人の目にも解る程に衝撃を受けた。それを見て言葉が過ぎたと、ヴァンウィックは苦笑し俺へと軽く謝罪する。

「……おっと、これは無礼を失礼します」
「いえ……別に俺は、そういうのは……」

気にしていないし責めるつもりはない。そう口にする俺に、彼は残念そうに息を吐く。その目はとても俺を王とは認めてくれてはいなかった。

「駄目ですよアルドル様。ここで私を無礼者と罵る位でなければ貴方に王は務まらない」

「……俺は、そういう風な王になりたいわけじゃない」
「でなければ家臣に民に貴方は軽んじられます。先王様がその典型的な例です」

ランスがユーカーが慕った王。その人にこの男も仕えたはずなのに、どうしてそんなことを言うのだろう？俺にはよくわからない。ランス以上にこの父親はが何を考えているのかわからない。

「例え善で正義であろうとも、王はそれで良い国を作れない。威厳のない王に国は守れませんよアルドル様。それでは誰も貴方については来ない」

「っ……」

それなのに、その言葉は俺を抉る。その言葉は嫌なくらい正論だ。俺は視線を彷徨わせる。いない。イグニスが隣にいない。ランスもない。ユーカーも部屋から出て来ない。ルクリースが、もういない。フローリプももういない。姉さんだって死んでしまった。こんな俺が果たして王と呼べるのか？

「師匠、流石にそれは無礼です」

「トリシュ……」

俯いた俺を庇うように、ヴァンウィックの視線から遮るように立ったのはトリシュ。長い綺麗な金髪が、俺の視界に広がった。

「無礼を承知で言わせて貰えば、アルドール様。貴方には王族としての威厳がない」

「うっ……」

「そして特別美しいわけでもない。余りに貴方は平均止まり」

「ぐ……っ」

「端的に言つとカリスマの欠片もない。」

「……」

「それでも貴方に付いてくる者がいる。それは何故だと思いで？」

「え……？」

グサグサと胸に刺さる正論の刃に打ちのめされていたが、最後の一文はこれまでと違うものだった。

「貴方は自分に何も無いとと思っているようだが、実はそうでもないんだろっ」

「そんなんじゃない、ありません」

それは俺がエースだから。俺が最上位カードに選ばれた人間だからこそその幸福だ。俺が優れた人材に出会えるのはイグニスと俺のその運によるもの。もともと俺の幸運は、他の所で働いた試しがない。他は全てが空回り。今となつては最低幸福値カードなのだから仕方ないと言えば仕方ないのか。

この運だつて、俺を突き落とすための幸運だ。だつて嫌な奴に出会つて別れるよりも、良い奴に出会つてその人を失う、死なせてしまつ方が俺にとっては何倍も苦しいことだろう。

俺の幸運は、そのための幸運なんだ。イグニスとギメルと出会つたのも、一度二人を失つたのも。そういうことなんだろう、きっと。この騎士はそういうことまで知らないから、そんな見方が出来るだけ。俺を正しく理解なんかしていない。

「貴方は多くを持たず、愚かで幼い。それが貴方の利点でしょう」

「すみません、全く褒められてる気がしません」

「一応褒めさせていただいたつもりなのですがね」

中年騎士が苦笑する。

「……確かにある意味貴方に王の才はある。貴方は人の庇護を引き出すのが上手い。貴方は弱く、何も出来ず、何も持たないからこそ……人は貴方の力になりたいと思うでしょう。近しい人間ならば貴方の良さを理解も出来る、だからこそ」

俺には近しい人の協力を仰ぐことは出来る。それでも、民を従えるまでには至らない。そこまでのカリスマが俺にはない。そう言われている。

だから俺にはみんなが必要で、その力を持つイグニスの、ランス

の加護が無ければ何も出来ず何にも至れない。何時も人に守られ、人を頼つてばかりの情けない俺。俺には何も出来ない。

ランスの言葉を思い出す。俺はもう剣を握らなくて良い。人を斬らなくて良いと言ってくれた。倒すべきは道化師。それ以外の戦いは俺には必要ない。守ってくれると言ってくれた。言わせてしまった。

「アルドール様。貴方の青はあの海のように青く澄んでいらつしやる。その輝きは貴方が幼いからに他ならない。貴方のその幼い理想に惹かれる者も居るでしょう。無くした夢を希望を託す者も居るでしょう」

彼の言葉が指しているのが、なんとなくイグニスで、ランスなんだとぼんやり思う。

「しかしアルドール様。腐った大人としての意見を言わせていただけ、世の中には貴方のその目が勅に障るような種類の人間もいるんですよ。貴方の青は、青過ぎる」

いつか人は誰でも大人になる。変わってしまう。夢も理想も移ろい消える。希望も姿を変えるだろう。その時になって取り残されるのは貴方だけなのだ、この騎士は予言するよう言葉を紡ぐ。

その時俺の傍には本当の意味で誰もいなくなる。正しさで優しさで哀れみで守れるものはない。はったり……虚勢のプライド。それでもいい。嘘を吐いて誰より王らしい王を振る舞え。それが守るということだ。一度王を失った騎士が俺に言う。

「俺には貴方の言っていることがわかりません。どうして俺がわざわざランスに嫌われるようなことをしないとイケないんですか？」

「……カーネフェリアというのはどうしてこう、お人好しばかり

なのだか」

「はい……？」

俺の言葉にヴァンウィックは少し眼を細めて笑う。まるで遠くを見るように、彼は俺を見ていた。

「いつぞやに、私の主も今のアルドール様と同じことを口にしたんだっただけでしてね」

「……アルト王が？」

「ここだけの話、アルドール様。私は過去に一度私の主を裏切ったことがありますね」

「貴方が……王を？」

それは以前も少しは耳にした。あの時はそれが本気がどうか解らなかつたけれど……

「むしろ一度だけというものは少ないと驚きですか？これは手癖しい……というのは冗談で」

その冗談というのが裏切ったという言葉ではないのは明らかだ。

「私はその行為と結果を後悔したことはありませんが、その裏切りを悔やまない日はなかつた。私の主はまったく腹立たしいまでに憎むべき所がなく、憎めないことを私はとても憎んでいた。いつそ彼がもつと悪い人間だったら、私は私を正当化することも出来たでしょうにと」

「……………そうですか」

この男が言いたいことが解った。この人は本当にだらしない男だけれど、確かにランスの父親なんだ。

俺がそついう風になれば同じようにランスが苦しむ日は来ない。いつまでも正しいままで居られる、彼が。だけど俺までそついうものを目指すなら、正しくいられなくなるのは彼の方なのかも知れない。

「でも、俺なんか欠点だらけだと思っんですけど」

「謙遜ではなく本気でそう思えるような貴方とでは、あれも貴方も苦労するでしょうな。アルドール様、貴方はもう少しセレス君辺りの不貞不貞しさを見習うべきだ。あれはあれで可愛いものだろう？うちの馬鹿息子とも打ち解けやすくなりますぞ？」

「あれはユーカーだからですよ、俺が真似てもそれは別の話です」
否定する俺の姿に、中年騎士は小さく笑う。その目は一瞬ユーカーの部屋の方を見て、もう一度笑った。

「あの……何か？」

「いや、何。それでどうするおつもりですかアルドール様？」

「俺は……俺も北の城へ向かいます。ランスとイグニスを放って置けない」

俺の言葉に、ユーカーの部屋と俺を交互に見てパルシヴァルが口を開いた。

「王様、僕も行きます」

「ユーカーの傍にいない方がいいの？」

この子ならセレスさんの傍に残りますとか言いそうなのに。ちょっと驚いた。

「君も行きなさい。引き籠もりの怠け姫様は、働き者の男が好み

のようだから」

「そ、そうですね？でも……」

ヴァンウィックにけしかけられるトリシユ。彼はユーカーとそれからこの領地が心配のようで踏ん切りが付かない。そんな様子の彼に、中年騎士は小さく溜息。

「パルシヴァル君とやら、言ってあげなさい」

「良いんですか？」

「何かあつたんですか？」

突然通じ合つたようなことを言う中年少年コンビに、俺とトリシユは首を傾げる。

「セレスさん、もうあの部屋にいませんよ」

平然と、それでも確かな確信をもった、パルシヴァルの言葉が響く。

*

北の湖城。その湖の中に……母さんの死体が眠っている。

トリシユから北の動きを聞いた後、俺は気がつけば馬を走らせていた。

ランスが我に返つたのはその城が視覚出来るほど近くに來てからだ。湖から少し離れた森の中、月下に佇むその城は……冷たい夜の空気を纏うように、物静か。寂れ捨てられた城は、物悲しい雰囲気漂わせる。その空気が記憶の中の母に重なるようで、ふらふらと……歩き出しそうになつた背中に落とされる声がある。

「こんな夜更けにどちらまでお出かけですか？ランス様」

「……っ！？イグニス様！？」

誰にも言わずに出てきたというのに、振り返った先には息一つ乱れのない涼しげな神子の姿がある。木々の影から僅かに覗く、月明かりに照らされる彼の琥珀の瞳は……、普段とは違った印象を此方に与える。神子は穏やかに笑んでいるのに、何処か突き放すような冷たい光をそこに宿している……そんな風に感じるからか。

「まさかお一人であの城を攻略できるとでも？」

「……ええ」

自惚れではない。冷静に考えて、それが一番効率的だと思った。そう言い返そうとする俺を、神子様は冷たく見つめる。それは俺を哀れむようにさえ見えた。その哀れみの理由がわからない俺をも彼は哀れむようで、無礼だからそんなことをは口には出せないが……俺は今彼に馬鹿にされている気もしていた。

「そうですね。この神の審判が始まる前ならそれも叶ったかも知れませんが。ですが今はこれまで貴方が暮らしてきた世界ではない。確立や勝率、そんな数字が弄られた今は、貴方の強さも歪みます」

いや、責められているようですらあった。何故“彼”を頼らないのかと。

「認めたくない気持ちは解りますよ。僕だって彼を認めたいわけじゃない」

それでもユーカーはコートカードだ。神子様はそれを言う。

「僕のように残り少ないカードと違う。彼はまだ、生命力に溢れています」

まだ。その言い方が気に入らなかった。この人はあいつの死を計算の内に入れている。もう決められたことだと言うような、その予言めいた響きが嫌だった。

俺があいつを頼れない理由は二つ。一つは単純に俺の心が。二つめは神子様の言うそれだ。

「俺は極力あいつに頼りたくないんです。あいつの命を磨り減らす、食い潰すような真似は……なるべくならしたくない」

「それで大人しくしていてくれるなら良いんですけどね。彼は彼の馬と同じですよ。誰にも飼い慣らせません」

だから上手く使ってやらなければならぬのだと、彼は言うけれど……俺はそんな風に、あいつを道具には思えない。矛盾しているのは解る。誰よりあいつをある意味で道具扱いしているのは俺なのに。

「僕としては放し飼いのほうが、彼への負担が増すと思います。そして彼は貴方の思惑から外れて動いてしまつてしまうでしょう」

躰が出来ないならしつかり縛り付けてでも言うことを聞かせろ。

その言葉にはそんな暴力的な響きがあった。

「でないとこんなことになります」

「……はい？」

神子様が示した方向から、近づいてくる蹄の音。暴れ馬の跳躍、それが俺達の頭上を越えて立ち塞がるよう向き直る。

「ゆ、……」

振り落とされないう馬を操るのに苦心したのだろう。心底疲れたように苛ついているユーカーというかセレスがそこにいた。

「……まったく、面倒かけやがって」

「来て、くれたのか……？」

お前を危険に晒したくない。そんな聞こえの良い建前。内心は半分以上はお前への対抗心からお前を頼れない。そんな俺のところまで、どうしてお前は駆けつける？

「数術も使えない癖に、ぴたりと此方の居場所を割り出す辺り、気持ちが悪いですよねセレスタイン卿は」

「ちょ、おま……人の勘の良さをそういう風に言うな！お前の発想の方が気持ち悪いわクソ神子っ！」

もはや息をするようにユーカーをからかう神子様。仲が良いのやら悪いのやら。本人達は悪いと思っただけ、端から見れば逆に息が合っているように見える辺りどうなのだろう？それは俺も本人達も望むところではないだろうが。

「しかし何故またそんな格好をしているんだ？癖になったのか？」

「断じて違うっ！！変装しないと俺が抜け出して来たのバレんだろっが！」

暴れ馬に乗って道を急ぐ婦人なんか居たら余計目立つと思う。幸い今が夜だからそんなこともなかっただろうが。

「……つたく、スカートで馬に乗るの結構大変なんだからな。おまけに飛ばしたせいですげえ気持ち悪いし身体痛え」

馬鹿だこの子。馬鹿可愛い。努力と頑張りの方向性がよくわからない辺りが俺のツボだ。思わず吹き出す俺を、真正面から睨み付けてくる従弟。それでもすぐに目を逸らす。その意味が分からない俺に、ユーカーが小さく呟いた。

「……怒らないのか？余計なことって」

「どついう意味だ？」

「お前の領地離れて……」

「ああ……」

カードのことを考えれば、国のことを考えれば確かにそうだ。けれど今神子様に言われたことと俺自身の引け目があった。だから責められない。むしろ、責められた時の俺の方が俺が異常だったように思う。

言うことを聞かせる。俺が本当にそれを願えば多分こいつは聞いてくれるんだろう。それでもそうすることを俺が嫌がるから、だからこいつは勝手にここまで来てしまった。結局は全て俺の所為なんだと結論づけられる。それでこいつを俺が責めて詰るといふのなら、俺は何処まで最低なのだろう？

「俺が怒るとすれば、お前にそんな風に思われている俺自身だな」
「……そっか」

少しほっとしたように笑うユーカー。俺は確かにこいつを追い詰めていたのかもしれない。

「俺とイグニス様の幸福値を心配して来てくれたんだろう？なら

俺にお前を責める理由はないよ、ありがとう」

「別に神子のためではないからな」

「ええ。でしょうから僕は感謝はしませんよ」

「なるほど、俺のためか。ありがとう」

「それはそうなんだけどな、わざわざ取り出して言われるとなんか腹立つ」

「お前は時々理不尽だな」

「お前ほどでもねえよ」

「それもそうだな」

「自覚あったのかよ」

「いや、言ってみただけだ」

「質悪過ぎる」

「じゃれてらっしゃる所失礼ですが、そろそろ頃合いです。行きましょう」

「失礼しました、つい癖で」

「っていうか別にじゃれてねえっ！……って、え？おい？神子、そっちじゃねえだろ？」

歩き出した神子様に、疑問符を投げかけるユーカー。確かに彼が向かおうとしているのは湖城のそれとは違っている。

「城の攻略はアルドール達に任せます。僕らには他の仕事があるんですよ」

そのためにも行かなければならない場所があると彼は言う。

「ですがイグニス様、それではあの城は放置……そういうことですか？」

「いいえ、あの城は落とします。そのためにアルドールには困りなかって貰います」

「はあ!？」

「コートカード二枚の守護が外れた彼は良い餌です。必ず食い付いてくる奴が居る。ページとはいえコートカードのパールシヴァル君もいます。まあ最悪の事態は避けられるでしょう」

「お前……それでもあいつの親友か？」

あつさり友人を囮に使うような神子様には、憤る風なユーカー。お前には関係のないことだろうに、結局この男は何も見捨てられないのだ。本当は俺などより余程騎士らしいのはこの男だ。

「違いますよ」

それに答える神子様の冷たい声。それが何処か自分に似ているトーン。ある種の薄情さを感じる。

「確かに僕はアルドールの友人ではありますが、それ以前に彼はこのカーネフェルの王であり僕はシャトランジアの神子です。僕は彼に仕え彼を支え助言し彼の力になる代わりに、彼にこの地と平和を守る義務を植え付けました。僕らの関係はそういう協力者であり、そこに私情を挟む余地はありません」

年下に言い負かされる。もっともらしい言葉に服従を強いらられる。それでも負かされても、心まで納得は出来ない。神子様を睨み付けるユーカーの目は怒りに燃えている。

「あの馬鹿は、いなくなつたお前のことを本当に心配してたんだぜ？」

「僕がそれを強いたわけではありませんし、そんなことで僕が責められるいわれはありません」

人間らしいユーカーの言葉に戻るは、機械的な神子様の返答。先程まで仲がよいのではと疑わせた雰囲気も一変、今の二人はまるで噛み合わない。本当に、錯覚だったのだ、あれは。

ユーカーが無意識的にアルドール様を庇うのは、多分本質的なところで気が合うからだ。神子様はどちらかというところ……俺側の人間なのだろう。俺がユーカーと親しくするように、神子様とアルドール様は親しくいらっしやる。それでも俺とアルドール様が、こいつと神様がうち解けられるかはまた別問題。なぜなら全く考え方が違うから。

「セレスティン卿、感情で国を治めることは出来ません。その結果がこの国だと貴方が誰より知っているはずですが？」

「っ……」

先代……アルト王はその感情のために亡くなった。ユーカーを庇って、死んでしまわれた。俺の主は……。

その結果国はこれまでに以上に荒れ、侵略もここまで進んでしまった。もうこれ以上は負けられない、そこまで俺達は追い詰められている。

そう思った途端に俺は、俺を心配してきてくれたこの友人を殴り飛ばしたくなる。国のことを考えるなら、お前はここへ来るべきではない。何故ここへ来たなんて。先程あんな言葉を口にしたのも忘れそうになるくらい。そんな俺の身勝手さが嫌になる。

(すまない、ユーカー……)

俺はお前をまだ心の何処かで憎んでいる。あの方を失ってしまった、その一因がお前にあると、あの方の心を知った今でもそう思っ
てしまっているのだ。

お前が死なせたんじゃない。あの方が自らそれを選んだ。選ばれ

なかった俺はそれを羨み憎んでいる。遣された言葉は身に余る光栄。それでも俺は言葉より、あの方の行為という好意を求めていたのだ。だから俺はお前が羨ましい。

あの人はそれが俺でも同じことをしてくれたのだろうか？ そうなつたんだとは思う。思う……それでもわからない。だから俺はお前が羨ましくて堪らない。憎らしくて堪らない。

「それでイグニス様、どちらに向かうおつもりですか？」

お前を庇うことなく、本題に戻そうとする俺の言葉。俺の表情が、俺の目の色が冷たくなったのに気付いたのだろ。それにお前が傷つくのが解るのに、どうして俺はちゃんと笑ってあげられないのだから。俺が兄代わりだったのに……こんな大人げない俺は兄貴分失格だ。

「ちょっと海まで。沿岸の方にそろそろ援軍が着く頃なんです。

それと合流し、あの城を叩きます。アルドール達にはそれまで敵の目を惹き付けていて貰います」

中と外から。確かにそれはあの湖城を攻め落とすには理想的な配置かもしれない。でもその中に入った者達が、人質にでもなったなら、この話は成立しないのだ。いや、それ以前に……俺はトリシユの話の思い出す。

「……ちょっと待ってください。まさか、城から出て行った一派というのは……!?」

「ええ、その援軍を叩きに行った。そう考えるのが妥当です。ですから僕らはその一派を背後から叩く」

「叩く……つつつてもよ。んなこと出来るのか？」

神子様の話に、冷静な口調で切り込むユーカー。俺の大人げない対応により、沈んだ所為で頭が冷えたのか。

「そりゃあお前とランスは数術使いかもしれねえ。だけどそんな一軍相手に現実的に人間三人で何処まで出来る？数術だってたじやないんだ。そう無理は出来ないはずだ。援軍と合流するまでどう動く？」

「問題ありません。僕の部下は優秀ですから」

ユーカーの問いかけに、神様が意味深にそう笑った。

詳しくは黙して語らず。秘密主義の節がある神様に続き、俺も馬を進ませる。湖城が、母さんが遠くなる。それでもこれが策なのだと言われれば、俺は神子様には逆らえない。幼いアルドル様を支える参謀がこの神子様なのだ。誰よりも先を読むことが出来る彼が言う言葉は真実だろう。その目を信じる他にない。彼が敵ではないのだとしても、感謝だけは忘れてはならない。そうあるべきだ。しかし、そんな神子様をやはりユーカーは快くは思っていないように、また少し不機嫌になる。俺の後ろを走るユーカーからは強い殺気を感じる。

だけどそれは神子様に向かうものではない。そこまでユーカーは悪になれない奴で、結局のところお人好しなのだ。

まだ病み上がりだろうに、気を張り巡らせて殿を務めている。そんな彼は夕暮れに手を合わせた時のような妙な雰囲気。馬を走らせるのを止めさせて、あの勝負の続きを今すぐ挑みに行きたくなる。そんな思いが浮かぶようだ。

(いや、今は……)

余計なことは考えるな。任務に集中しろ。剣になれ。忠実に命令をこなすだけの駒になれ。そう自分に言い聞かせるため目を閉じる。俺も騎士だ。馬は手足の一部で自分の分身だ。目を瞑っても操れる。この子は何時でも俺の意思を思いを汲み、地を駆けてくれる。だから危ないことは何も無い。

目を閉じて、感じるのはこれまで気付かなかった風の音。心地良い風が吹く。香る海風。久々の北の大地、これが故郷の風の匂い。その懐かしさに帰って来たと思うのに、歓迎されている気がしない。吹き付けるは向かい風。

俺が何をしたわけでもないけれど、その風は全てを知っているようだ。俺の生まれ持つ罪を糾弾するよう夏だというのに夜風は冷たく俺の頬を撫でる。

何故裏切った？何故裏切った？あんなに良くしてくれた人を。あんなに崇めた人を。答えは俺の中にない。俺はあの人を裏切っては居ない。裏切ったのはあの男だ。俺はあの男じゃない。だからその気持ち解らない。

「止まってください！」

神子様の言葉にはっと目を開ける。俺の愛馬はその合図に足を止めていた。

見渡せば周りの景色が変わっている。西へと進み、森の出口まで来た。海岸が遠くに見える。そこには数隻の船がある。

海岸の傍にはその船を迎えるような一団。おそらくあれがタロック軍の連中だ。

「……あの様子じゃ上陸出来てねえってことか？」

「いや、それなら場所を移せば良いだけだろう。何も海岸はここだけではない」

「何かあったという………ことでしょうかね」

神子様が神妙な顔つきになる。

「湖城からあの者達が出て行った以上、此方からは何らかのアクションがあつたはずです。その伝達を受け彼らが駆けつけた。つまり、もう既に何かはあつたということですよ」

「……つうと、例えば何だよ？」

「そうですね……あくまでこれは例えばですが、あの城への支援物資を運ぶ船を、僕の部下がつつかり撃ち落としてしまったとか、です」

「うつかり？随分と具体的な例えだな。大体聖十字は武力行使が出来ないはずじゃなかったのか？」

「世の中何があるか解りませんからねえ。それに聖十字もまったく無力というわけではありませんよ。武力行使の条件が厳しいと言っただけで」

「あなた方もご存知でしょうが、聖十字は正義のための軍隊ですが、それ以前に基本シャトランジアの守護のためにあります。ですからシャトランジアの領海領土を守るため、他国がその禁を侵せばそれなりの措置はとります」

それでもここはカーネフェル。今回はそれには該当しない。

「そして聖教会の掲げる十字法は、殺さないことを前提にした法です。それは兵士もその範疇であり、敵から彼らを殺させないこと死なせないこと。これも踏まえた上で自衛の権利を認めています」

「それって矛盾してねえか？」

「明らか悪を前に無抵抗で死ぬのは正義でしょうか？そうすることその悪が因り多くの人を傷付け殺すのならば、命懸けでその悪を討て。罪を犯しても正義と貫け。それが真の十字法です。元々

十字法に死刑がないのは、そう言った正義の罪人を目には目をと殺してしまうのは酷い話だというのがそもそも原点だったと記憶してします。現代では随分と解釈がねじ曲げられてしまいましたか」

当然神子様が生まれても居ないような時代のことを、さらさらと彼は語り出す。齡14の少年とは思えない、不思議な重みを持った言葉だ。

「ですから土壇場ではですが、僕の解釈では十字法は殺人を認めているんですよ。正当防衛と言いますし」

「おい、聖職者が何を言ってる」

「矛盾した法であるのは確かです。ですが兵士を数ではなく、物でもなく、人としてカウントするのが十字法。故に仕方のない矛盾です。最も重きが“人を殺すな”ではなく、“正義を守れ”にある。そこを誤認している者が最近では多くて困りものですよ」

ユーカーの言葉に神子様は肩をすくめて息を吐く。貴方もその一人ですかと言うように。

「失礼ですがイグニス様、十字法には教会の定義が記されてはいませんかでしたか？」

「ええ、そうですねよランス様。今回の件はそれに触れたものだと思います」

十字法は正義のための法律だ。それが行使出来るのは限られた場所。まずはシャトランジア国内。教会の敷地、所有地内。そしてこの教会というのに聖十字兵が含まれる。彼らが居る場所……この場合教会のある国限定。つまり今日ではタロック以外の三国、シャトランジア、カーネフェル、セネトレア……この三国で、この法は発動する。大体は国法と拮抗してしまうため効果が弱まるが、聖十字

兵本人が教会と同じということ……現行犯逮捕では十字法が優先されると言うことになる。

中立国という立場のため戦争には荷担できないシャトランジアが、正義の番人という観点から介入することが許されるのは悪をその目で捉えた時だ。

「ここしばらく僕も国境警備とカーネフェルの領海警備は目を光らせました。そろそろ僕も理由が必要ですので」

「理由？」

「腑抜けの国王派共を黙らせて、シャトランジアが全面的にカーネフェルの支援をするための理由ですよ」

そのために特に正義感の強い兵士、それからカーネフェルに縁のある兵士をそこに配置した。そこで接触があれば、一戦やらかさずにはいられないとそれを見越して。

「もう言い逃れが出来ない位、シャトランジアがカーネフェルを庇っていることが知られば、保守派の爺共も重たい腰を上げるしか無くなります。平和呆けで他人事と傍観しているわけにも行きません。今は事が事です」

(この方は……)

本当に俺の年下なのだろうか？頭が切れる。そう言えば聞こえは良いが、少し不気味だ。年令的にはまだまだ子供のはずなのに、常に正しい先を読む。冷静すぎるその思考はどこか冷酷ですらある。俺はそんな神子様にも、尊敬と共に畏怖の念を覚える。

国を守るために、人を平気で駒にする。法は兵士を人とカウントすると言ったその口で、人を守るためだから？人を物のように扱うような事を言う。そしてそのことに対する迷いなど微塵も表に出さ

ないなんて。……そんな子供が何処にいる？

(……………)

ありがたいのは確かだ。そうなればこの戦争も、負け戦から勝率が変わってくる。教会兵器が味方に付くのなら、セネトレアともタロツクとも互角以上に渡り合えるようになる。そんな策を練る、この方は本当に頼りになる。だからこそ、少し怖い。俺が俺達が、カーネフェルが。この方に本当に利用されていないかなんて否定できない。無論、そんなことはないと思う。それでも可能性としては胸の隅に留めておくべき。現にアルドール様は彼の言いなりだ。それは一抹の不安に違いない。

そもそも神子様は一体何が望みなのだろう。世界平和？それはどういふ風にして作られる物なのか。

「さて、話を元に戻しましょうか」

そう言って笑う表情は年相応、幼く可憐なものだというのに。

「まずは、彼らがあそこで立ち往生している理由でも探りに来ましょう」

くるりと首を回し、ユーカーへと視線を向ける神子様は、今度は可憐……ではなく、悪巧みをするような、それでいて爽やかな笑みを湛える。ユーカーはその視線に青ざめて、自身の姿を省みていた。

「おい、ランス……」

助けてくれ。そんな縋るような視線に、俺は今日一日のことを振り返る。そう言えば俺、久々に此奴に負けたりしたんだっただな。

(……………)

逡巡、答えは決まった。

「頑張ろうな」

俺も神子様のように笑みかけてみれば、くそおと悔しそうにユーカーが顔をしかめた。

*

(くそっ！)

ユーカーは思う。あの神子と出会ってから、ほぼ毎日舌打ちをさせられているような気がする。

(何が大丈夫です問題ありませんだってんだ。問題しかねえだろうが！)

ランスのため。ランスのため。ランスのためだっ！呪文のようにその言葉を繰り返し、何とか浮かんだ涙を乾かせる。

敗因は変装のためとはいえ女装して来た自分に日がある。そう言われてしまえばそれまでだが……「そういえばここ最近おまえはずっと女装してたけど今日はまだ有効活用してないだろ？」とか相方に言われた日にはどうすればいい？むしろそのつもりでこのためにそうして来たんだろみたいな顔されても俺は困る。

普通に神子が女なんだからお前がやれよとか言えない自分が嫌になる。なんで俺、あいつの秘密守ってやってんだろ。いつそのことランスにバラしてやるうとか思うのに。確かに女のあいつにこんな

真似させるのはちょっと気が引ける。悲しいことだが俺の心の一部は完全に騎士なのだ。気に入らない奴とはいえ、女に囿なんかさせられない。……しかし、だ。あの適当すぎる嫌がらせのような計画には溜息しか出て来ない。思い出してもそれは同じだ。

「タロツク人は基本カーネフェリー女は尻軽ビッチの軽薄女とでも思っている節があります。おまけに相手はここしばらく戦続きで鬱憤堪っているでしょうし、元々タロツクでは女が少ないですし物陰でもつれ込んだら間違いなくゲロりますね」

「俺カーネフェリーだけど女じゃねえし」

「ええ。ですから何かあっても問題ありませんね良かったですね」

「問題だらけだっ！」

「頑張れよセレス、俺は向こうで応援している」

「いつそお前が女装しろっ！お前は無駄美形なんだから絶対似合うだろっ！！」

「流石にそろそろ俺の身長じゃ怪しまれるよ」

「俺をチビみたいないない止めろっ！俺だって神子やアルドルよりはあるんだからな！これからまだ俺は伸びる！」

「しかしお前は魚を嫌うからカルシウムが不足して……正直それは怪しいな」

「半分以上お前の所為だっ！」

なんか泣けてきた。思い出しても泣けてきた。俺なんであいつの後なんか追いかけてちゃったんだろう。あいつのためとか心配してとか、そんな思いだったのに、どうしてこんなことになってしまったんだろう。

（俺は貴族だぞ？それがなんであんな神子に顎で使われねえといけねえんだ）

立場は一国の主に等しい神子とは言えど、生まれは卑しい下賤の民が。ランスからも頼まれたとはいえ、そこにイグニスと思惑が絡んでいるかと思うとやるせない。

神子が俺の武器を奪って代わりに渡してきたのは、タオルに洗髪料に風呂桶に石けんという謎の銭湯行き一式セットだった。

「なんだこれは」と聞いた俺に、あの女はにこりと微笑み……「もし相手方に見つかったら水を浴びに来たみたいな顔をして下さい」とか含み笑った。なんだその無謀な策は。精々正体ばれない程度に着エ口色仕掛けでもなさってくださいじゃねえよ。俺は騎士だつてのに何でそんなことしねえといけねえんだよ。ていうかなんでそんな物を用意している。ここまで読んでいたのか数術で取り出したのかは解らない。

(つていうかそんな馬鹿な言い訳通るのか?)

あの神子はそれが本当に策なのか、俺への嫌がらせなのかよくわからないことをする。

(でも、……まあ)

一番夜目に慣れているのは俺だ。多少の無茶は利く。上位カードのランスに無茶させるよりは余程良い。俺は高幸福値のコートカード様なんだから、そうそう酷い目にも遭わないだろう……と思いたい。

そろそろと息を潜ませ

ていうか視覚数術くらいかけてくれれば良いものを、神子はいい笑顔で「すみません省エネ中です」とか言い放った。やっぱりこれ嫌がらせだ。それでもそんな嫌がらせにも負けず、敵陣との距離を目と鼻の先まで詰めた俺は凄いと思う。森より間隔の薄い海沿いの木々。その陰を縫ってここまで俺は近づいた。その距離、僅か10メ

ートル。僅かもつ相手方のひそひそ話まで俺の耳に届いてくる。

「第一師団長は……どちらに」

戦場でやり合つにも相手の言葉を知らなければ降伏の意味も引き出せないし伝わらない。方言や訛りまではわからないが、標準的なタロツク語なら俺もとりあえずはマスターしている。だから大体の意味なら解る。

(第一師団だと?)

聞こえた言葉に俺は飛び上がらん程驚いた。

んな馬鹿な話があるか。基本天九騎士団は、一から九までの騎士と師団があり、数値が上がれば上がるほど狂王の側近だ。その側近中の側近が、どうしてこんなところに居る?

それはつまり……そう思うとぞくと肌が鳥毛立つ。

(狂王が……タロツク王が、この傍に……あの城にいるってことか!?)

深すぎる赤。睨まれた、あのどす黒い血色の目。身体が震えて動けない。あの人がいなくなったら、あそこで死んでいたのは俺の方。

(くそっ……)

取り乱すなと自分に言い聞かせ、俺は目を閉じ息を吸う。思い出す。あの人の青。最期まで優しくかったその色。その青色が、あの馬鹿王のそれに似ていて少し苛ついた。それでもその苛立ちが、俺に俺を取り戻させる。

「レクス様はまだお戻りではないのか？」

俺の耳に届いた言葉。その言葉に目を開く。俺は底に妙な引っかかりを感じた。

（レクス？聞いたことねえ名だな）

第一タロツク人らしくない名だ。平民ならそんな名の者も居るだろうが、師団長ともなる騎士は元々貴族出身、大抵漢字の名を持つ。エルス・ザインは元が平民だから仕方がないのだろうが、それでも当て字の漢字名は持っている。だから妙だ。

そんな者が様付けで呼ばれている。こいつらが第一師団の中の一派なら、様付けで呼ばれるのはそれを従える者だろう。だが、タロツク人は何だかんだで血に五月蠅い。あのガキと同じよう身分が低い騎士が居たとしても……それが第一位の騎士になれるはずがない。（部下には真名を教えてねえ……通り名ってことなのか？）

そうだ。俺は天九騎士の全てを知っているわけじゃない。実際俺や同僚がやり合ったという者の名を知る程度。これまでやり合った個人的な感想だと、上位騎士程実力も上がる気がする。そして上位騎士がカーネフェルまで赴くことは殆ど無い。

（本腰入れて侵略に、カーネフェルを落としに来やがった……そういうことか）

エルスが第六位、双陸が第四位。四位の騎士が数術全開殺す気本気のランスと同等レベルってことは、俺じゃ勝てるか正直怪しい。

通常の俺はエルスとやり合うのですらギリギリライン。不意打ち奇襲で夜に仕掛けるなら殺せはするだろうってところだ。

今日俺がランスに勝てたのは、ランスが俺を殺す気がないからだ。殺すつもりでやり合ったなら、負けるのは俺だと解る。俺は唯の間で、あいつはそうじゃない。才能に恵まれた騎士で剣士で数術使い。俺の本気なんて、たかが知れている。

だからここに第一位のタロツクの騎士がいるならば、俺の勝算はほぼゼロだ。今すぐ引き返し、この情報をランスと神子に伝えるべきだと思う。それなのに……何故か片手が熱い。俺のカードが燃えているみたい。そこに心臓があるんじゃないかって誤認するようにドクドクと血が巡る。カードは戦いを求めるように、置いてきた剣を欲している。

(タロツクの、最高の騎士……それがこの近くにいます)

俺の勝算は、この手のカード。その幸運だけ。何故だろう。以前の俺は命の危険を感じたならばすぐに逃げ出していたのに、どうしてこんなに心が胸が躍るんだ？死ぬかも知れないのに。あの日のように死ぬのが怖くない。あの赤い色が傍にあるかも知れないのに。肌が震えるのは、あの日と違う感覚だ。背筋がぞくぞくするのは恐怖ではなく、期待だ。

今日ランスとやりあって、あんな中途半端な結果に終わった。まだ戦い足りない。飢えている。もっとこれでもかてくらい、徹底的にやり合いたい。

そつだ。本当の本気を出せないのは俺も同じだ。味方相手に本気は出せない。殺すわけにはいかない。それでもそいつは敵だろう？殺してもいい。むしろ殺すことが仕事だろう俺の。本気でやっても俺は何も悪くない。咎められることはない。あいつ相手の本気の試合で、北部で暴れ回っていた頃の戦闘欲が目覚めたのか。そりゃあ弱い奴斬り殺すよりは、強い奴と剣ぶつけ合った方が楽しいよな。楽しい。楽しい。愉しみたい。

そんな思いに支配され、その場から撤退が出来なくなる。もう少

し情報が欲しい。そいつを知りたい。守る者が傍にいないだけで、ここまで気持ちが悪くなるのか。パルシヴァルには見せられない。こんな戦いだけを求める俺なんか。

「誰だっ！」

「なるほど……聖十字の少女とはお前のことか」

不意に我に返った。それは何者かの気配をすぐ傍に感じて。

見上げた先には一人の騎士。馬に跨るその男は、黒い瞳に長い黒髪……夜に溶け込むようなその一色の闇に俺は目を見開いた。

その目のなんと無感動なことが。先程までの俺の期待を裏切るような面白味のない目をした男。それでもその男にはまるで隙がない。強者だというのは一目瞭然。

「……………と思ったが、少々妙だな」

「それはどうも」

俺の気配からこの男は何かを感じ取ったらしいが、俺が手にした風呂道具セットを見て呆気にとられているようだ。それを感じて俺は声のトーンに気をつける。先程の第一声は、緊急事態だから仕方ない。そう言うときは普段と違う声が出るものだ、と向こうには思っただけで貰おう。

馬から飛び下り近づく男は、俺より大分背が高い。ぱつと見俺より年上だ。この男はタロツクで成人するかしないかその辺りの年だろう。俺が丸腰なのを悟り、腑に落ちないといった表情。

「失礼。別人か」

その言い方が引っかかる。つまりこの男は誰かを捜していたのか？

(聖十字の少女とか言ってたな……)

それはあの神子の部下のことだろうか？俺達はそいつらと合流しなければならんだから、ここで情報を引き出すのは悪い手ではない。俺は素知らぬ顔で男を睨む。

「しかし先程のあれは水浴びに来た少女が纏うような殺気にも思えん」

「誰だつて自分が使つてる風呂場にあんなに屯されちゃ堪らない」「それなら使つてくれても構わんが」

「あんな常識的に考えて、人目のあるところで脱げるか？つたく……この暑さだ、ひとつ風呂浴びようつて来たのにあれでは誰だつて怒る。普通の女なら誰だつてあの位殺気纏う。これだから女慣れしてない黒髪族は困るぜ」

「女慣れしていない……か」

その言葉に俺は一瞬寒気を感じた。言葉の違和感。これまでタロツク語を話していた男が突然カーネフェル語に切り換えたのだ。

「しかしお前は唯の村娘というわけでもなさそうだ。唯の村娘がタロツク語を話せるはずがない」

「っ！」

しまった！それもそうだ！俺はあそこで言葉が通じない振りをするべきだった。俺の受け答えはカーネフェル語ではあったが、その意味は相手の言葉を、タロツク語を理解してでの言葉。この男がカーネフェル語で返して来たのは、冷静に俺の過ちを指摘していた。

「それに見れば衣服の質も良い。眼差しは気高く、その言葉の響きにも高貴さがある。どこの有力者の娘と言ったところか」

捕らえておいて損はない。その言葉からは物騒な響きがした。

(何をとち狂ったことを)

この俺を人質にするだつて？んな馬鹿な話があるか。近寄る男に俺は蹴りを撃ち出した。しかしそれは容易く掴まれる。

「凶暴でも育ちが良いらしいな、青目の娘」

「っ……」

そりゃあ恥ずかしい。今の格好では本気で蹴りは入れられない。蹴りを入れるにはスカートが広がる。中身見られては困る。下着見られるのも嫌だ。ていうか万が一正体バレたらもつと嫌だ。何されるか解ったもんじゃない。

不意にあのメイド女のルクリースが当てつけで言いふらしていた、タロツク人の嘘だか本当だかわからない噂が脳裏を過ぎる。むしろこいつら女が殆ど生まれない男社会で暮らして来た奴らだし、普通に女より男とかの方が好きだったりしないよな。俺が女装だとかバレたらむしろ嬉しいとかむしろご褒美とか、あの人数で宴会でも開かれて全員の相手させられたりしないよな。そんなの嫌だ！嫌すぎるっ！誰かつ、この際トリシュでも良いから俺を助ける！助けてくれっ！ていうか働けコートカードっ！俺には幸運があるんじゃないかねえのかよ！？

「そう言えば先程、俺が女慣れしていないとか何やら口にしてはいなかったか？」

「いいいいいいいい言ってないっ！」

「とのことだが、お前達はどう思っ？」

「っ！？」

お前達？それはなんのこと？恐る恐る男が向いた方向に視線をやれば……海岸に屯していた兵士達が此方の方を向いていた。

(しまった……)

俺の「誰だっ！」というあの声。あれは少し大きすぎた。俺とこの黒髪騎士の茶番は一部始終こいつらにも見られていたのだ。

「師団長！よくぞお戻りに」

「レクス様！それが噂の女ですか！？」

師団長？こいつが、この男が第一師団を治める騎士なのか？こんな生気を感じられない目をしたつまらない男が？

いや、違う。生気が感じられないんじゃない。こいつは表面に何も出さないだけ。その奥底では何かが渦巻いている。その得体の知れなさがこいつを不気味に見せている。何を考えているのか解らない。とても冷たい目をしている。俺を突き放す時の、俺の嫌いなランスに似ている。

「ああ、隣町まで探したが聖十字の少女は見つからない。彼女を見た者はいないか？これは彼女とは違うのか？」

「いえ……我々も金髪青目の女と聞いただけで、あと髪は長かったとか」

「……髪は短いな。しかし切りそろえられているわけではない。これなら適当に切ったようにも見える」

俺が面倒臭がつて、剣で髪切つてた所為だがそんなところで他人に勘違いされるとかねえよ。何このデジャヴ。アルドールに会う前も俺、あいつに間違えられて酷い目に遭ったつてのに。

周りには大勢の兵士。そしてタロツク最高の騎士。丸腰の俺がどこまで戦えるのか。この騎士自体に興味は失せたが、この状況には少しだけ胸が躍る。そんな俺の様子を悟り、騎士の目に少し変化が変化が現れた。

「得物が欲しいか？青目の少女」

「突然なんだよ」

「質問に答えたならば貸してやろう。このままならお前はどうかせよ。ろくな事にはならないそれは解るだろう？」

「……何が聞きたいってんだよ。俺はお前の探してる奴のことは全然知らないぜ」

「ああ、そうだろうな。お前は何も信じない目をしている。神になど仕えていないだろう」

お前は俺の何を知ってるっていうんだ。怪訝そうな目でそいつを見ると、俺の変わる表情をそいつは懐かしそうに見つめるのだ。

「だがお前が彼女ではないという保証にもならん。お前の青には強い意志がある。それがこの国に向いていないとも言切れん」

知らないものをどう吐けとういうのか。呆れる俺の顔すら演技だと思っっているのだろうか、男はじつと俺を見つめる。

「そうだな。それでは……俺が聞きたいのはお前の名だ」

「名前？」

それは何か俺から情報を引き出そうとすること？俺の正体を怪しんでいる？ここで本名は名乗れねえ。……となると。

「俺はセレス。苗字は自分で考えろ」

どこその有力者の娘だと思っただけで調べる。そう逃げた。しかし男が食い付いてきたのはそこではなかった。

「一人称まで同じか。……なるほどな」

男は薄く笑って自分の剣を一振り俺へと投げてきた。

「セレス！俺はお前が気に入った。この俺レクスに勝つたならこの場を見逃してやろう！」

「随分と気前がいいじゃねえか」

タロツク人の癖にと少し褒めて笑ってやると、男は一瞬嫌らしい笑みを浮かべる。第一印象からはかけ離れた、へらへらした兄ちゃんって感じの笑みだ。

先程まで無感動だった騎士の瞳に表れた感情は、更に得体の知れないものだ。まるで道化。どこまで本気なのかまったく解らない、底知れなさがある。

それは部下達にとっても新鮮なものだったようで、そこらの連中みんな呆気にとられている。そんな笑みで……奴は言う。

「可憐な外見に似合わぬその男勝りな所がツボに来た！負けたら俺の嫁に来い！」

まさかの予想だにしない敵将の言葉に思わず吹いた。なんでこんなばっかなんだ最近。コートカードになってからこんなことばっかだぞ俺。

「正気ですか師団長！？」

「相手は金髪族の女ですよ!？」

女じゃねえよ。そう突っ込みたくなつたが、言えるはずもない。いろんな意味で。

「……解つた、やってやる。勝負方法は？」

よっぽどのがあつたら神子は兎も角ランスは助太刀に来てくれるだろう。もうこの際自棄だ。それに……雰囲気が変わつたこの騎士は、なかなか骨がありそうだ。戦う気は俺も出てきた。

「相手が降参するまで」

「……うっかり手が滑つて殺してしまつた場合はどうなるんだ？」

「その場合はまあ、それも仕方ない。残つた者が勝者で良いだろう」

「そつか。それなら仕方ねえな」

渡された剣を拾う。タロツクの剣は変わっている。これは刀と言ふんだったか。片刃しか付いていないため、諸刃に慣れている俺にはちよつと扱いづらいが仕方ない。

「それなら本気で行かせて貰うぜ!」

得物を抜き払う。隻眼では俺の正体がバレる。そう思つて両目で屋敷を飛び出して来た。だからすぐに本気でやれるっ!

片刃剣は俺のセレスタイトよりもかなり軽い。俺の一撃のスピードに、黒髪の騎士も驚いている風だ。

ルールを聞いて迷わずその首を狙つた俺の判断に、男は唇を釣り上げる。いきなりあんな事を言われても、普通の娘ならそんな決断瞬時に下せない。だが生憎俺は普通でも娘でもない。

「……ますますただ者ではないな」

男は笑う。俺の迷いのなさにこいつにも火が付いたようだった。

「くそっ」

得物の形状は同じようなものなのに、男の攻撃は一撃一撃が重い。俺だってそれなりにはやれるはず……そう思うがこの剣は軽すぎる。長さも重さも足りない。いつもなら届く攻撃、やれる技が上手く出せない。

(こいつ……)

両目の俺に負けてない所か俺が負けている。こいつの夜目が特別優れているわけでもないだろうに。俺は俺よりこの闇を見えていない奴に押されているのだ。

完全に遊ばれている。俺は一撃一撃をこいつを殺すつもりで放つのに、この男は子供をあやすように、遊んでいるのだ。だってこいつは俺の急所を一度も狙わない。狙っているのは……

(待てよ……?)

何度か刀をぶつける内に、俺はそれに気がついた。男は俺の手を狙っている。それは得物を叩き落とし、降伏を迫るという意味か。

(いや、……それだけじゃねえ)

俺もこいつも感じてる。無意識に、互いがカードだと。

俺が押し負けているのが単に騎士としての力量、体格の差なのか。それともカードとしてのそれなのか。それを見抜く上でも俺は、…

…その情報を知らなければならぬ。
そしてこの騎士もそれを知りたがっている。俺のナンバーを確認したいのだこの男は。それを俺に気取らせないため、あんな妙なことを言っただけを動転させたに違いねえ。

(もしこいつが俺より強いカードなら……あいつらを逃がさねえと駄目だ)

神子は弱っている。ランスはカードとしてはかなり弱い。だから俺がやるしかない。

(俺は神なんか信じねえ！崇めねえっ……認めるもんか！)

そんなものがいたのなら、どうしてあの人を救ってくれなかった。どうして彼女をあんな目に。それを運命なんて言葉で片付けさせない。神なんていない、あれは全部人の悪意が生み出した。

あの人死んだのはタロツクの所為、そして俺の弱さの所為。彼女が死んだのは、親父とそして俺の所為。ほら見る。神なんか介入する隙間はねえ。だから神はいない。いるはずがない。

(それでも……)

手が熱い。焼き焦げるみたいに。俺を使えとカードが俺を呼んでいる。願いを求めるのなら、祈れと俺を責め立てる。

(それがあいつを守る力になるなら)

この一時だけは信じてやる。否定し続けた神って奴を信じてやる。だから俺に力を貸せ！

俺の祈りに吹いた海風。砂を含んだ風に、騎士は一瞬目を瞑る。

しかし生憎俺は見えない方が得意分野だ。思い切り突き刺す一撃。手応えはあった。

それを褒めるよう、俺の肩に触れる手がある。

「レクス様っ！」

「良い、気にするな」

「しかし……」

「見事だ。この俺に一撃加えるとは」

駆け寄る兵士を片手で止めて、男は小さく笑う。脇腹を突いたただけだが血は流させた。急所は外したが無傷というわけでもない。だって腹に穴空いてるんだぜ？

……だと言うのに俺の肩を掴む手は、微塵に揺るがない。弱々しさなど感じさせない。今のでどれだけダメージを与えられたかまるで読めない。

(硬えっ！幸福値を使って、これかよ)

刀を抜くために両手に力を入れるがピクリとも動かない。筋力で押し留めているのか。痛いだろうに全くそんな素振りを見せないから傷のない俺の方が痛くなってきた。

得物はもうどうにもならない。それを悟ってそこから俺が手を放そうとする寸前。奴が俺の両手を掴んだ。

「だが敵に不用意に近づくのはあまり褒められたことではない」

「う……っ！放せっ！」

「降参するなら考えてやる」

「……………」

「降参する気は無いようだな」

「おうよ、腕封じたくらいで調子に乗るなよ騎士の兄さん。俺の

両足は常に金的狙っているものだと思え」

「なるほど、それは怖い」

そう言いながら愉快そうに笑う男の意図が分からない。

俺は拳を握りしめる。その手を放せばすぐに殴ってやるという意思表示。それから意味はもう一つ。だからこいつは手袋を脱がせられない。それを切り裂いたって、読めるのは模様だけ。数値までは解らない。

「そう言えば……先程俺が女に慣れていないとか言っていたな」

「根に持ちすぎだっ！俺はそういう執念深い奴は嫌いだっ！」

「我が国には据え膳という言葉があつてだな、お前が降参しないというのならそれはそれで美味しい話だ」

「や、止めるっ！」

服に手を掛けられたくなかったら、手袋の下を見せるとその目は語る。その数字によってここで殺すべきか生かすべきかを考えている。

思い切り蹴りを繰り出すが、駄目だ。女の服だとうまく戦えない。それも相手に見抜かれていて、俺は簡単に投げられる。そこを押さえつけられれば、為す術もない。いつそ降参するか正体バラしたくなる。

「そこまでです！」

俺を助けるように、凜と響いたその声に、俺はその人の姿を思い描いた。

「……………ラっ、……………」

咄嗟に奴の名前を呼びそうになって、それはいけないと踏みとどまった。敵に与える情報は少ないに限る。

(え?)

しかし、何かがおかしい。現れた人影はあいつではなかった。それは金髪の、見覚えのない少年の姿。

「情報通りだな、些細な悪も見過ごせないか」

「民間人に手を出すとは、軍人失格です！恥を知らなさい！」

此方に突きつけられたのは、まっすぐに伸びた綺麗な長剣。それは十字架を模っているようで。月明かりに照らされ鈍く輝く刀身は、聖十字を名乗るに相応しい輝きだ。

「なるほど、これは見つからないはずだ。少女というのは誤りだったか聖十字」

船の者達は女の群れに男が混ざっていると知らず油断したかと忍び笑う黒の騎士。

「いますぐその子から手を放せ！用があるのは私にでしょう!？」

力強いその言葉。そいつの目は静かに澄んで、だけど熱く燃えている。青い炎を宿しているような、不思議な輝きを放っていた。

触れれば焼き焦げるだろう。それでも温かいのか冷たいのか、触れてしまいたくなるような、そんな不思議と何かを人を惹き付ける。現れた救いの主を、俺は惚けたように見上げていた。

12・Est autem fides credere quod non

よつやく6章ヒロイン登場。長かった……

13・Fama crescit eundo・(前書き)

もうどうにでもなれ注意報。女装野郎が二人も出てきてやがります。こいつら真面目に戦争する気あるんだろつか？

今更過ぎて何を警告すればいいの最近解らない。人間関係があれすぎる所為だ。ヒロインが軌道修正してくれることを切に願って。もうどうにでもなれ。

一緒に騎士になろうよ。そして、全てを見返させよう？認めさせるんだ。この剣ひとつで全てを取り戻そうと俺は笑った。そしてあいつも頷いた。

それは幼い日の約束だ。その約束が今は遠い。俺もあいつも今はもう、そのために戦ってなどいないのだ。

「……ランスはさ、アスタロットさんってどう思ってた？」

あの少年は、俺の主は……何も知らないのに、時々明確に俺の心を言い当てる。まっすぐに濁りのない綺麗な青。あの人に似ている深い海の色。

あの色で見られると、俺は時々言いたくないことまで言葉にしてしまう。隠し通そうとする醜い心を照らし曝かれる。

あの人はそんな俺も許し認め、受け留めてくれる。だけど……彼に、アルドール様に同じ事が出来るとは思わないし、俺もそんなことをしてもらうつもりはない。

アスタロット。エレインの実姉。ユーカーの婚約者。もう何処にも居ない人。そしてあいつが未だに忘れられない人だ。

俺が彼女と会ったのは数えるほど。婚約者選びのためあの男に無理矢理シャラット領に連れて行かれたことがある。ユーカーと一緒にじゃなかったら馬に乗っても走っても泳いでも逃げていた。

俺が気になったのはあいつと結びつけられた少女がどんな娘なのか気になったからに他ならない。あいつにちゃんと釣り合うか。あんまりにも酷い子だったら俺も黙っていられない。

「ランス兄様……、ですよね？」

彼女は俺を義兄と呼んでいた。俺が姉と妹のどちらと婚約するか解らなかつたからだろう。割合的には彼女には姉の方が多かったから、確率的な意味でも、年令的にも年上の俺をそう呼んだのだ。もっとも俺が彼女の妹とそんな関係にさせられたのはもっと後のことだから、当時の俺はそれに異を唱えることもなかった。唯、一目見て俺を俺だと知れたのが、不思議だなと思った。

「初めまして、ランス兄様」

ぺこりと頭を下げる、瞬間広がるその髪は……カーネフェルの金よりも、タロツクの黒に近い暗い茶色。それでも青い眼はカーネフェルのそれだと知れる。

厄介者払いで両家のために結びつけられたのだとそこで俺も理解する。彼女もあいつも真純血。かけ合わせれば、次代には見目麗しい真純血が生まれる……その可能性に賭けてだ。

俺はその話に憤った。家の道具のように、そんな風にあいつが使われることが許せなかつた。だから俺は彼女を哀れみながらも、あいつのために彼女を憎く思った。

それを彼女は感じ取り、妙なことを言うのだ。それは確かあいつが席を外したその時に。

「やっぱり優しいんですねランス兄様は。セレス様の言う通り」
「……俺が、優しい？」

俺の憎しみに当てられて、それで何故そのようなことが言えるのか。俺は驚く。この暗い髪の少女は、数あるこの家の娘の中で一番優れた娘。あいつに相応しくないなんて、どうして俺に言えるだろう？その澄んだ水のような精神は、非の打ち所もなく美しい。こうして言葉を交わすだけで、俺の心が濁っているのを思い知らされる。

「だって兄様は、そんなに深い目をしてらっしゃるのにセレス様をちゃんと思ってるじゃないです」

それは彼の両親にも出来なかったこと。それを当然のようにやってのける貴方は凄いのだと言われたが、それこそ俺は馬鹿にされているように感じた。

「……人を色で区別するなんて馬鹿げたことだよ」
「ええ、そうですね」

貴方は確かにそれを本心として口にはしている、彼女はそう指摘する。

「ですがそれを嫌味としてセレス様が受け取らないで居られるのは、ランス兄様が本当にお優しい方だからなんでしょうね」

あの卑屈なユーカーが、俺の言葉には楯突かない。口では何か言ったとしても、心の中では受け入れる。そんな俺が優しいだって？

(違っ……)

それは優しさじゃない。我が儘だ。優しいのはあいつ方だ。そんな俺を許してくれている。

俺と笑顔で褒めてくれるアスタロット。彼女の言葉を嫌味と受け取ってしまうような俺が、どうして優しいんだ？

「セレス様は、いつもランス兄様のお話をしてくれるんです。とても楽しそうなお顔で。私はそんなセレス様を眺めているのが楽しいんです」

だから俺にお礼を言いたかったのだと彼女は言う。セレス様をあの顔にしてくれてありがとう。そんな感謝の言葉にさえ、これの心は影が差す。

だってそれは、自分の物であるユーカーに代わって、彼女が俺にお礼を口にしてるように聞こえたから。

俺に一礼し、戻ってきたユーカーの元へと駆ける彼女。談笑する二人を見て、何故か裏切られたような気がした。俺と話するときとは違う、顔で笑うあいつは俺の知らない別人だった。兄弟のようにずっと傍にいた。何もかも知っていると自負していた。だけど、そんなことはなかったのだ。そう思うとどうしてだろう。これまで信じた何もかも、ガラガラと音を立てて崩れ落ちていく……そんな感覚。あの頃の俺には、王とあいつしかなかったから。あいつが彼女に奪われたと知った日に、俺には王だけしかいなくなった。俺が騎士として、剣の道に以前に増してのめり込んだのはその所為だ。一緒に素晴らしい騎士になろうって約束したのに。あいつは鍛錬をサボって彼女に会いに行く。俺に負けることも多くなった。

許せなかった。以前のあいつは俺の努力なんか飄々と越えていった。本人が認めることは絶対ないが俺が認める。あいつには俺以上の剣の才がある。それなのにあいつは以前以上に何もしくなくなった。これが恋という物か。それはここまで人を腐らせるのか？

あいつが腐っていく。腐敗していく。その照れ隠しの仏頂面から立ち上る、姿無き腐敗臭。ユーカーも、俺の父と同じ……そんな生き物になってしまふのか？空の色が、変わっていく。目には見えないう、それでも解る。綺麗な青が、俺がこの世にあって綺麗だと……信じた色の一つが、こんなに簡単に汚されてしまふなんて。

あいつが墮落していくなら、俺は誰よりも立派な騎士になる。俺はあんな風にはならない。俺には王しかないんだ。俺は王についていく。誰よりも忠実で立派な騎士になる。あいつが本気でやらないうなら、それしか俺を負かしたあいつに勝つ方法がないんだと思っていた。

あいつは長く立ち止まった。彼女を失ってからは見当違いの方向へと走り出した。傷ついたあいつは心を閉ざした。もう傷つくことがないように。

その中に入ることが出来るのは、あの方と俺だけ。あいつの世界が閉じていく。それはあいつがまた俺と同じ剣の道に戻って来てくれたようで嬉しかった。だけど違うのだと気がついた。あいつは以前に増して無気力で、剣を振るうことに喜びもない。苛立ちをぶつけるように戦うだけ。そんなあいつを見ているのは苦しかった。

それは俺の知るユーカーじゃない。始めて剣を取った日のお前はそんな風じゃなかったはずだ。夢があり、目標があり……剣で全てを認めさせると抗おうとがむしゃらで。その目を馬鹿にした全てを、そして父親を見返してやると言っていたのに。

目的も忘れて、狂ったように戦うお前は、俺が望んだお前じゃない。それを伝えたところで、俺の言葉は届かない。

(俺は……)

俺は嬉しい。俺は悔しい。

アルドル様との出会いがあいつを変えてくれた。元のあいつを取り戻させてくれた。それは俺には出来なかったことで、感謝は言葉で言い表せない。感謝してもし足りない。だが同時に俺は心底悔しい。どうしてそれが俺ではなかったのだと。何も持たない彼にそれが出来て、どうして俺に出来なかったのかと。

彼はあんなにも脆く、弱く……普通の少年。いや、普通すら逸脱している。それは一度奴隷商達に脳を過去を弄られたからなのだろうか？アルドル様の普通さは普通ではない。

何処にでもいそいで、その実、何処にも居ない。そんな違和感が彼の中にはある

それでも彼の弱さは俺の存在意義に変わってくれる。だから俺にはアルドル様が必要だ。俺が騎士であるために、掲げる主は必要

だ。彼が俺が戦う意味に生きる意味に、死ぬための意味になつてくれた。俺はあの人の剣だ。それは揺るぎない。

それでも……そんな人を相手に、どうして俺は悔しいと思うのか。剣では俺の方が強い。けれど戦わずして俺はあの人に負けている。それがどうにも腑に落ちない。俺はあの日と似た感覚を感じている。アルドール様と出会ってから、ユーカーはまた他人を受け入れ始めた。ルクリースさんを、トリシユを、……パルシヴァルに関して。以前からだけれど、あそこまで余裕を持って時間を割いて相手をしてはいなかった。あいつの世界が開かれる。それは良いことのはずなのに、どうして俺の心はささくれ立つのだろう。

最初はからかっていただけだ。あいつが嫌がるのが楽しくて。怒ってむくれて照れた顔を見るのが好きだった。それでも最後は俺だけに……しぶしぶ折れる、そんなところも好きだった。優越感に浸っていたんだらう。誰の言うことも聞かないあいつを、従えた気になつていたんだらう。そうだ、俺は……得意げに。

だけど、あいつは自分の意思であんな格好をするようになった。それは俺から逃げるため。それは俺を助けるため。プライドの高いあの子が、そんなことをするなんて。その変化に俺は狼狽える。

俺を心配して来てくれたはずのユーカー。それは本当に俺のため？ だってあいつを変えたのは俺ではないだらう？ あいつ自身気付いていないかも知れない。でもそれだけじゃないような気がしてならない。俺にアルドール様が必要だからそうするのか、アルドール様に俺が必要だからそうするのか。その理由が反転して行きそうで怖いのだ。結局優しいのは俺ではなく、あいつの方だから……大切な物がまた増えていっても、捨てるとしたらあいつがじゃない。多分俺がだ。いつか俺から離れるあいつを俺が見限る時が来る。あいつはそんなことをしないから、俺がそうするしかなくなる。耐えられなくなつて、いつか……

「ランス様？」

神子様の声ではっと我に返る。

「いえ、何でもありません」

そうは言うが、遠慮るあいつの背中から目を離せずにいる。

暗闇なら両目の差違にも気付かれないと、最初からあいつは両目で来た。それはあいつにとって何よりのトップシークレット。彼女亡き後それを知るのは俺だけで、アルト様だってそれは知らなかったのに。その秘密がこんなにも簡単にぶちまけられる物だなんて。投げ出される物だなんて。

「それでは今の内に僕たちは行きましようランス様」

俺の言葉を信じたわけではないだろう。それでも時間の無駄は避けたいと、彼は俺達の役目を口にする。

「しかし、イグニス様……」

様子見のために送り込んだ相方。それを思うと俺は気が気でない。しかし神子は相も変わらず冷静だ。或いはそこまで彼のことかどうでも良いのか。俺はユーカーが心配で彼の方を振り返る。

そうだ。今、あいつは囷になってくれている。その隙に神子様の部下達と合流し、タロック軍の隙を突くのが彼の策。

今はそれに集中しなければ、そう思うのにどうして後ろを振り返りそうになる。だって今のあいつは丸腰だ。本当に、大丈夫？

「心配有りません。彼はコートカードです。そう簡単にどうにかなるとは思えません」

その言葉には俺にはない、ある種の信頼のような物が感じられて、彼を侮辱しているのはむしろ俺の方ではないのかと思いはじめた。俺はあいつをちゃんと頼れてあげていない。あいつの方が強いカードでも、俺が心配したいし頼られたい。あいつを弱くしているのが俺のエゴ。俺がそれを望んでいるから、あいつは弱いままでもいいようにしてくれる。

わざとこの方があいつを突き放すのは、それではいけないと俺に伝えるためののだろうか？

「彼に敵の目を惹き付けている間に、僕らは合流を図らなければなりません」

ああ、そうか。この人は……

俺に出来ないことをやってのける。冷酷に見えるのは、多分その所為だ。俺が甘くなるのは、信頼していないからだ。ユーカーも、アルドール様も。

神子様はアルドール様を、危険な場所に彼を送り込むことを企んだのは、彼ならばそこを切り抜けられると信じたからだ。俺はユーカーを信頼するなら、振り向かずに今やるべき事に専念しなければならぬ。

「イグニス様、貴方は余程アルドール様のことを信頼していらっしやるんですね」

「……彼はまだあの二人の騎士とは打ち解けていないところがありますからね。あの二人も同じです。苦難を共にしてこそですよ」

俺の言葉に一瞬面食らったように琥珀色の目を見開く神子様だったが、すぐに目を伏せそんなことを言い出した。もっともらしい言葉ではあった。

「苦難を……共に……」

「セレストイン卿なら大丈夫ですよ、三つ子の魂百までと言いますし彼はもう手遅れです」

「はい……？」

俺の目をじつと見て、神子様は悪戯好きな子供のようになんか微笑んだ。

「さあ、先を急ぎましょう？これも巡り巡ってアルドールの、カーネフェルのためですよ」

「……はい」

「それに間もなく彼への助っ人も現れる頃でしょう。ですから問題有りません」

*

(問題有りません、か……)

そうは言ってみた物の、ちょっと今回はやはり危ないかも知れない。イグニスにはさっそく胸の内を発言を撤回した。

嫌な気配がする。それが彼女のカードの気配なら、おおいに越したことはないけれど……この辺りから僕を除いてコートカードの気配が三枚もある。

一枚がセレストイン卿。もう一枚には心当たりがある。それならもう一枚は？

カードは上から下から決まる。それでも例外は稀にある。例えば上に変動が有れば、下のカードの配役が、変わる事だってあり得るのだ。

部下からの情報によって、スペードのコートカード三枚は把握した。ダイヤはジャックとキングは把握、だがクイーンはまだ行方知

れず。だがセネトレアにあるのは間違いない。

ハートは僕のシャトランジアに関わる以上、三枚とも僕は知っている。既に一枚失われたのは正直痛手だが。残りはクラブ。ジャックはセレスティン卿、クイーンはルクリースさん……だがキングはまだわからない。

カードは国だけではなく生まれや職で揺らぐこともある。だからカーネフェルに関わる人間か、それとも農民出身かははっきりしない所がある。

クラブのクイーンとジャックがカーネフェル……アルドールの下に来た以上、キングは恐らく僕らの所には来ない。神はコートカードが同じ陣営に固まるのをあまりよく思わない。そんな結果の見えるゲームに彼らは興味がないのだ。だからバラけさせる。

第一僕を含め、コートカードはその過去から大抵人格に問題がある。一点に集約されるような者ではない。個人の意思と理想があり、そう簡単に誰かに下るようなものでもない。僕がアルドールの傍に何枚か集められたのだって、その点を利用したからだ。

（セレスティン卿に釣り上げて貰って……そこで力を使わせる）

確信が欲しい。この付近に潜伏しているカードの正体。一瞬でもカードの力を使わせれば、僕はその情報を辿ることが出来る。神経は張り巡らせている。見過ごすことはないはずだ。

カーネフェルは火の元素が多すぎて、他のスートのカードの気配を薄めさせる。クラブのカードは力がここでは増幅される分、見つけやすい。アルドールが道化師やエルス・ザインに見つかるのもその所為だ。だから戦うのは他国の中が良い。その方が有利。だからカーネフェルは今危うい。さっさと彼らを追い出して、僕らが攻めなきゃ勝ち目がない。

「……イグニス様」

ランス様の声に顔を上げれば、そろそろと海辺からタロック兵が引いていく。彼らは林の方へと向かっているようだ。セレスティン卿が惹き付けてくれたのだろう。

「上手く行きましたね」

その隙に僕らはその場を抜けて、数術で船へと上がる。しかし船はしんと静まりかえっていた。

「イグニス様……これは」

「妙ですね、人の気配がありません……いや」

僕が現れたことに気付いたのか、数術を解く気配。姿を現したのは、明るい調子のカーネルフェル人の少女。兵士である以上そこそこ筋力は付いているが、それなりに可愛らしい外見ではある。だがそれは彼女の本当の姿ではない。マリアージュほどではないが、この子も変装スキルには定評がある。

「神子様っ！」

彼女は僕を見るなり駆けて来て、思い切り僕に抱き付いた。彼女の方が身長高いから何というかもろに。うん、もろに。でも僕には素直に喜べない理由が三つほどある。まずは一つ、それは彼女が厄介な者を飼っているから。そして二つ、それは偽りの肉の塊だからだ。そもそもそれは肉でも脂肪でもない。俗に言う以下察してください。最後の三つ目は……まあ、今となっては問題になるのかならないのかよくわからない。

それは兎も角このまま抱き付かれていると、僕といえども面倒臭いことになる。なので僕はその厄介なモノに今に離れる、そう告げ

る。

「よく来てくれたね、シャルルス」

よしよしと彼女の頭を撫でてから、本題を思い出してくれと訴えれば我に返ったように跪く。先程までの明るい表情が嘘だったかのように沈んだ顔で。

「今日はまだ連絡がないから心配していたんだけど……何があったんだい？」

「海上でタロツクの船から奇襲を受けました。辺りには数術妨害の数式も紡がれていて……私程度の術者では破れない物でした」

それは仕方ない。この子は純血にしては優秀で数術は使えるし戦えるが、通常時では相手が混血なら劣る。中途半端なナンバーなのは否めない。それにその性質上、力にムラがある。あくまで今回は補助に徹すると命令したから、仕方ないことだろう。

「……タロツクのカードが本格的に数術を会得し始めたってことかな。いや……エルスIIザインの可能性もある。相手はどんな技を？」

「嵐です。殺意しか感じられない大嵐……」

嵐か。エルスも風使いではあるが、そこまで大きな精霊は憑けていない。信仰を無くした哀れな精霊……通称悪魔、タロツク風に言うと妖怪共の寄せ集め。一匹一匹は大したことはなくとも、それが合わさることで強大な化け物になった。そう言った怨みの化身をいくつかあれば憑けている。彼の憎しみ怨みの波長が彼らと異常なまでに共鳴したから、彼は彼程の数術を手に入れた。それでも嵐を起こすほどの力は彼にはない。僕が見た限り、エルス自身は壱の数術

使いだ。攻撃数術は全て精霊頼りと言って良い。

このカーネフェルの地で風の元素を気ままに操るってことは……タロツクのかなり上位カードの仕業、その可能性が高い。それならエルスの線は薄いか。

(どうやら、タロツク王がカーネフェルに来ているというのは今度ばかりは本当かも知れない)

どこで盤面が歯車が狂った？これはこれまでの僕が知らない展開だ。だとしたら、不味い。エルスⅡザインはタロツクまで飛ばない。短期間で帰還する。流石に国をまたいで飛ぶような転移数術は使えないだろう。如何に彼が混血だつてそれは無理というものだ。契約数術だからつて、代償がないわけでもないし、第一脳内計算に耐えきれなかったらそれでアウト。混血だつて身に余る力を求めれば、脳死は訪れる。混血の数術使いは自分の力量と潜在能力を正しく理解する。その上で力を行使する。それが数術学の基本中の基本。

「状況から察するに、この船は君が一人で動かしてきたってことだね？」

「はい」

「それで残りの兵士は？」

「退避させそれぞれ別のルートから上陸を。嵐に最短ルートで来る船に、カードがいると思わせなければなりませんでしたので私がそれを……」

「……そうか、ありがとう。最善の行動だよ」

「あ、ありがとうございます」

照れたように彼女は視線を逸らしたが、僕は膨れあがるような殺意に当てられる。これは彼女の責任ではないとはいえ、本当にとばっちりだ。

「タロツク軍の船は此方に向かつて来たと言うより、この辺りを警戒していました。もう既に一度上陸した者達の一部かと」

此方の船がやって来たのを見て出陣させたのか。北部のこの辺りは既にタロツクに掌握されつつあるらしい。

思えば都攻めを遂げたのは南部から侵攻して来た双陸、エルス。それまでは南北からの挟撃を狙っていたタロツクも、無理にザビル河を渡る必要が無くなった。だから河を渡れなかつた連中は、引き返し北部の支配に専念し出した？もつともある程度は各地に兵を残していたのだろう。唯通り過ぎるだけと言うわけにもいかないだろうから。

河を渡れず北上する者と、北から降りてくる者。どちらにしる僕らは挟み撃ちにかけられている。今度こそ逃げられない。

「ユリスデイカは？」

「彼女の船は近場の海岸に」

「なるほど。それを聞いてあの湖城からタロツク軍が飛び出した……ということか。所で一ついいかいシャルルス」

「神子様？」

「君は何時から僕を神子と呼ぶようになったのかな？」

僕は服の下から取り出した、十字銃を彼女へ向けた。それに驚いたのは話を聞くことに専念していたランス様。

「い、イグニス様！？彼女は貴方の部下ではないのですか！？」

だけど構っている暇はない。ちよっかいをかけてくるなら僕の方だと確信していた。僕がアルドールと離れたのは主にそのためだ。

「この辺りの気配を歪めていたのはお前だね。ねえ、ジョーカー？」

*

その言葉に、ランスは言葉を無くしてしまう。

自身も数術使い。ある程度の術なら見破れる。

それでも道化師と呼ばれる相手をまだ見たことがない。だから何が本当なのか、わからなくなってしまう。限りなく気配の薄い、数術を解いたその者は……神子様と瓜二つ。

教会の礼服に身を包む可憐な混血の少女。愛らしさと残忍さを感じさせる、奇妙な笑みを浮かべていた。

「……さつすが“お兄ちゃん”！でも良かったの？部下との秘密を一つこんな序盤で私に教えてしまうなんて」

お兄ちゃん？道化師が神子様の縁者？いや、それに化けている？わからない。俺は皆から離れていたからシャラット領には行かず、道化師に会わなかった。アルドール様達の状況から、とても聞けるような状況にもなかった。それにあまりに忙しすぎた。

動揺する俺とは違い、神子様は冷静そのもの。それでもその瞳に宿る強い感情がある。美しい色の瞳を隠しきれない殺意で彼は光らせている。

「何処まで本当か解らないけど、そっちもタロツクの情報をわざわざ僕にくれたじゃないか」

「そりゃあそうだよ。“愛しの妹”のためだもの、ねえ……“ギメル”？会いたかったよ」

途端に声のトーンが変わる。先程までのテンションとは打って変

わった、淡々としたやや低めの声。愛くるしい少女のそれだったはずの表情まで、冷淡な少年のそれへと変わる。その素顔、その声は神子様の声に酷く似ている。だが違和感。それは先程の抱擁を思い出すような、うっとりとしたその口調。聞き流そうものならそこに囚われがちだが、注目すべきはそこにない。耳に残った単語は、妹、それからそれらしい人の名だ。

「神子様が……女性……？」

「ああ、初めまして高名な騎士様。出し惜しみされ過ぎて仲間はずれの可哀相なランス様」

何故それを！適確に此方の神経を逆撫でるその言葉。数秒前に言われたことを忘れてしまいそうになる程苛立つ。しかしその話題に引き戻したのはその、不愉快極まりない道化師だった。

「彼に教えてあげなかったの？」

くすくすと、その少女だか少年だかよくわからない者が笑う。

「何の話かわからないな。下らない話をしに来たわけ？」

「下らないだって？この間のことで理解したと思っただけだ。」

「君じゃ僕には勝てない」

「……………」

「いや、別に僕は愛しの妹の衣を剥いでその騎士様に証拠を見せるような変態趣向はないから安心してよ。そんなことをしなくても疑念を植え付けることは出来るからね」

証拠があるわけではない。それでも魔法のように、道化師の言葉が俺の中へ滑り込む。途端に神子様か、少女にしか見えなくなる。数術が解けていくのか。それとも此方がまやかしか。顔立ちが解つ

たわけではないのに。先程まで見目麗しい少年だと思っていた子が可憐な少女にしか見えない。俺は今まで何を見てきたのか。それがぐらぐら揺らぎ出す。

どうして俺は知らない？知らないのは俺だけ？やはり俺は信用されていない？あんな男の子供だからか？俺もいつか裏切ると……

「違います」

「イグニス様……？」

負の感情に囚われそうになった俺を、そこから掬い上げるは凜とした声。

「アルドールとセレスティン卿に知られたのは事故です。本当は誰にも教えるつもりはありませんでした」

その言葉にはいつものような含みが感じられない。それどころか

……

「い、イグニス様っ!？」

彼女は慣れた手つきでボタンを外し、胸元をくつろげる。俺は咄嗟に目を背けたが、それでも視界の端に少しだけ、小振りではあるが男のそれとは違う胸元が見えた。

「女は聖教会の神子にはなれない。万が一広く僕の正体が知られば、僕はこいつに今の地位を奪われる。そんなことがあってはならない」

道化師が、神子様と入れ替わる。誰よりアルドール様の味方のような顔をして、最大の敵を傍に置くことになる。

女の身のイグニス様がどうして神子になれたのか。その経緯はわからないが、俺は今国家機密以上に触れている。

あくまで嘘を突き通すことも出来ただろう。そえでも敢えてそうしてイグニス様は、俺を信じてみようと思ってくれたから。そうなんだと思う。

カーネフェルをここから立て直すためにはこの方の力が必要だ。シャトランジアに必要なのはこの人だ。道化師ではない。

(それに……)

アルドル様にとって、一番必要なのはこの人だ。俺の仕える人が信じる人の言葉を疑うことはアルドル様への裏切りだ。この人が何者であっても、俺がすべきことは一つだけ……

「ギメル、そんなストリップはあんまりだろ？ 恥じらうようなサービスはないの？」

「別に見られるくらい今更だ。大体恥じらってもこんな場面じゃ何も特にはならないよ。僕は得にならないことはあんまりしない主義だ」

「それもそうか。でもちょっとは良いこともあったんじゃない？ だって騎士って生き物は守るべきご婦人方がいる方がやる気が出るって言うじゃないか」

道化師が、俺を見てにたりと口元を釣り上げる。そこには得物を手にした俺の姿が映っているはず。

「イグニス様。貴方の秘密は私が守り通します」

俺は左手で母さんに貰った水入り水晶を握りしめる。どうか力を貸して欲しいと……

俺の祈りに呼応して、水の精霊が集まってくる。ここは海、水の元素なら幾らでもある。これなら少しはやり合える。そう思ったのだが周りの反応は芳しくない。

「無茶です、ランス様！幾ら貴方が強くても、相手はジョーカーなんですよ！？」

「冷静に見えてやっぱりクラブのカードなんだねアロンドイト卿は。“感情に走るのは身の破滅。いずれそれが貴方の命取りになるだろう。”」

珍しく狼狽える神子様と、予言めいた言葉を紡ぐ道化師。その言葉には俺の身体にまとわりつくような嫌な響きがあった。否定の言葉も口から出ない。絶対的かつ問答無用の正当性が灯った言葉。見れば、言葉だけではない。その口から飛び出す言葉は禍々しい数値を生み出す。

(これは数術！……でもこんな数術見たことがない！)

どうすればその数式を相殺できるのか。水の数術を簡単にそれはすり抜ける。攻撃も防御も効かない。得体の知れない数式が迫る！もつ後は物理攻撃しかない。剣を構えるしかない俺の前に神子様は進み出て、その言葉に挑むように言葉を謳う。

「誉れある騎士よ、貴方はこれから旅をする。幸福を幸福と知るために、貴方は深い悲しみに落とされる。“悲しみなくして喜びを知ることはない。苦難は貴方の救いのために現れる。”」

「イグニス様……？」

「聖杯は既に貴方の中にある。後は貴方がそれを見つckerだけ……」
「ランス様、貴方の幸せを願っています。」

抽象的なその言葉が何を意味するのか解らない。唯道化師の言うようにこれから俺に何か待っているのは確かなようだ。神子様はその悪意の言葉を僅かにねじ曲げて、救いの糸口を作り出してくれたのか？

その澄んだ声は、大気に広がって……道化師の紡いだ言葉の空気を僅かに退ける。謳う彼女の笑顔は、慈しみに満ちている。天の使いその者だ。

「……ギメル、君はあくまで僕の邪魔をするつもりなんだね？ど
ういう心変わり？これは君の願いでもあつたはずだろう？」

「可哀相な、お兄ちゃん”。貴方は何も知らないからそんなことが言えるんだ」

暫く二人は鏡のように睨み合っていた。その視線に触れてしまつたら俺の存在など消し飛んでしまうのではないか。そんな強過ぎる眼差しの交錯だ。息をするのも忘れて俺はそれを見ているだけ。

「……まあ、そんなに本気にならないですよ。僕はあの馬鹿に邪魔にされずに君と二人で話がしたかっただけなんだ。今日の所は君を殺すつもりはまだないよ。僕としても可愛い“妹”はメインディッシュに取って置きたいからね」

「……………あつそ」

そんな幕切れ、二人が視線を逸らす。その直後に俺はようやく身体
の自由を取り戻す。

「イグニス様っ！」

「大丈夫です。僕は……………」

そうは言うが、ふらついている。そうだ、元々彼女は本調子では

なかった。タロツクの数術使いの虫にやられていたことを、俺は今更ながらに思い出す。危なっかしいその身体を支えると、すまなそうに彼女が俺を見ていた。

「しかし、君もあんな男の何処が良いんだろっね。その騎士様の方が全パラメーター遙かに上だろっ？アルドルなんか身分以外に取り柄のない馬鹿じゃないか」

「ああ、そうだね。否定はしない。その身分さえ失いかけている阿呆だと付け加えてあげても良いよ」

幾ら親友相手と言えど、流石にそれは酷すぎる。親しき仲にも礼儀ありとは言っけれど、この神子様は親しい相手ほど礼儀を失う人らしい。

「……………だけど彼を馬鹿にして良いのはこの世に一人、僕だけだ。王の名を汚すことは許さない」

「イグニス様……………」

それでもその言葉は、この海よりも深い信頼が結びつきが二人にあつてこそ。本当に相手を大切に思っていないなら、こんな表情は出来ない。俺だってあいつのためにここまで顔が出来るか怪しい。静かな怒りをそこに湛えて、神子様が再び道化師を睨む。そんな彼女の気迫に俺は息を呑む。数術があるとはいえ、懐に入られれば赤子も同じ。接近戦では俺の足元にも及ばない。そんな数術使いが一瞬でも俺を震えさせた。本当に……………この方は何者なのだろう？答えがまるで見えない。

「それに彼には彼の良さがある。それに気付けないお前は本当に可哀相だと思う」

「冗談が上手くなつたね。あんな男に良いところがあるって？あ

いつと比べればそこらで湧いている蛆の方がまだ見所があるよ。ちなみにその長所って？」

「それは勿論、彼が馬鹿だと言うことだよ」

「ははははは！それは欠点以外の何物でもないだろう？……って、僕は戦いに来たんじゃないって言っただろ？」

剣を収めない俺を嫌そうに、道化師が横目で見る。

「それ以上、我が君への侮辱は謹んで貰いたい」

「まったく、何が最高の騎士だって？呆れたものだね。それとも毛並みの良い犬も、飼い主に毒されるとろくでもない野犬になるのかな。ああ、怒った？でもそれって本当にアルドールのため？本当は自分のためだったりするんじゃないの？貴族育ちはみんな馬鹿みたいにプライドが高いから」

「ランス様、耳を貸してはいけません」

道化師の言葉を遮る神子様は、奴はやつと話をする気になったのにとにやりとほくそ笑む。

「ふふふ……僕は悩んでいるんだよ、ギメル。君をアルドールの目の前で殺すか、アルドールを君の目の前で殺すか。どちらの方があいつにとって苦痛かわからなくてね、正直まだ選び切れていないんだ」

「そう。それじゃあ第三の選択肢を上げよう。お前から死ね」

「その顔で言われても、僕の不興は買えないよ？」

嫌味と敵意、あちら側からは歪んだ好意のようなモノまでそこに混ぜてその応酬を濁らせ脱線させる。しかし道化師がアルドール様を心底憎んでいると言うのは紛れもない事実だと、第三者の俺でも解る。

「何故そこまであの方のことを……」

彼は取るに足らない少年だ。だからこそ弱く脆く頼りない。それでも希望の火を背負う。この国が俺が失ってはならないものだ。

彼は至らない。何にもならない未熟者。だからこそ、人から憎まれるところまでも行かないはずだ。少なくとも殺してやると相手に殺意を抱かせるほど、彼の中に悪はない。

俺が彼を少しばかり妬むのは、俺が人として未熟なためであり、何も彼の所為ではない。

「サー・アロンダイト。今の貴方には解らないことだよ。貴方は本当の意味で人を愛したことも亡くしたこともないんだから」

「な、何を……」

それくらい、それくらい………記憶を巡るが検索に引っかからない。愛は愛でもこの者が言うそれに該当する愛はない。別にそんなものがなくても俺はここまで生きて来られた。どうせ老い先短い生だ。無理矢理必死にそれを求める意味が何処にあるというのだろうか？俺はこれ以上の未練は欲しくないのだ。

大体その何が偉いのだろう？それを知らない人間は人間として欠陥品だと言わんばかりの嘲笑を、道化師は浮かべている。その目は俺がユーカーよりも劣っていると暗に語りかけて来る。

「僕はこれまで貴方に殺された相手が哀れで仕方ないよ。貴方のような空っぽのがらくたに、未来を絶たれるなんて」

「溢れた水は落ちるだけ。空の杯はより多くの水を受け止められる。雨さえ降れば彼は誰より深い愛を知る。お前の言葉は侮辱として意味を成さない」

理不尽に俺を責め立てる道化師の言葉に対するは神子。こんなにもそっくりなのに、道化師は噛み合わないその思想に苛立っているようだった。

「物は言い様だね。それともギメル、君は聖職者だからそうなのかな？お前は誰も愛せないし愛することも許されない。だからこそ愛を知る人間が妬ましい。愛を知らない人間が好ましい」

「そんなこと、僕には関係ない。それは僕にとっても、取るに足らないことだ」

彼女の言葉は苦しげで、それでも強い決意を底に秘めている。その目は自分にそんな資格はないと口にしていているようで……やっぱり目の前の少年よりも、俺に彼女は似ている気がした。

「僕はアルドールが好きだ。だけどそれは友人として。それを下世話な方向に持っていく奴が僕は一番嫌いだ。それが僕と彼に対する最高の侮辱だ。僕が何であろうとも、それは揺るぎない物だ。“僕はイグニス！お前とは違う！僕は彼の親友だっ！”僕はギメルじゃない。その名で僕を呼ぶなっ！」

「……なるほど、半信半疑だったけどこれで確信が持てた。……やっぱり僕の願いは全てを葬り去らないと、叶いそうにないんだね」

片手を夜空の月に伸ばし、それがあまりに遠いと泣くように……道化師が少し寂しげに、小さく呟いた。けれどそれはほんの一瞬。刹那の中の出来事だ。彼はまたすぐに唇を釣り上げて、神子様とは違う笑みを浮かべた。

「それなら僕は何も苦しまず、悩まず、君を殺して良いわけだ。ありがとう“ギメル”、少しは楽になったよ僕も」

その歪な礼など歯牙にも掛けず、神子様は冷たい目で肩をすくめる。

「そんなことより、僕の部下は何処へやったんだ？ 今日一日彼らと連絡が付かないはどうせお前の所為なんだから？」

「むしろお礼を言ってくれても良いよ？ この船以外はタロツクの嵐に航路を変えた。この船の乗組員達はその敵船の中へと飛ばしてあげた。それを倒せたなら無事に上陸している頃だろう」

「また余計なことを……」

あわよくば相打ちさせようという道化師に、神様は深い溜息を吐く。

「そう、ユリスデイカだっけ？ あの子は君の部下のシャルルスって子が数術弾を使って逃したよ。彼女自身は船に残ったと思うよ。そろそろ妨害数術を解いてあげるから、これで通信も来るはずだ」

道化師が妨害数術を無効化。部下からの情報が届き始めたのか、神様は舌打ちながら彼を睨んだ。

「まあ、しばらくは僕も大人しく置いてあげるよ。タロツクが楽に勝ってしまったら、後々僕としても厄介だ。精々カード同士潰し合つてよ。正直な話、僕としてもAを4枚も相手にしてられなからね。アルドールの馬鹿は兎も角、他のAは強固な守りがある」

どこまで信用して良いのか解らない。重みを感じられない言葉で、道化師が数歩歩み寄る。今日は戦うつもりがないと言いながら、油断も隙もない。俺は再び剣を構える。しかし目に飛び込んできた光景に、俺は再び動けない。

彼は彼女に自然な動作でこつんと額をくつつけたと思った。二人

並ぶと二人の身長が違っていることに俺は気付いた。神子様の方が一回りほど小さい。アルドル様よりは道化師は低いだろう。それでも彼女には勝っている。こんなにそっくりなのに、左右対称ではない二人の姿に何故か不意に胸が締め付けられるような感覚が襲った。それは神子様も？だから彼女もそれを拒めなかった。そうして居ることで、互いに異なる願いを同じ物へと戻し解り合えることが出来るなら、彼らはそんな祈りの像のよう。

しかし事件はその一瞬の隙に訪れた。

絵にはなる。二人とも混血だから見目麗しい。だから絵にはなる。なるにはなる。それでもこの二人の関係が解らない。信じて良いのか解らないが、彼らの言葉を鵜呑みにするなら二人は実の兄妹らしい。その意外な行動は、先読みの神子様ですら読めなかったのか完全にされるがままだ。彼女が予見できないことを、どうして俺が動揺しないでいられるだろう？

完全に時が止まった。この場所は道化師が完全に掌握していた。それでもやがて我に返った神様が……片手を振り上げる。神子様に思い切りビンタを食らって、ようやく彼女の唇から離れる道化師。

「痛いよギメル」

「痛くしたから当然だよ」

照れか羞恥かそれとも怒りか、顔を上気させる神子様に、頬を打たれた道化師は……心なしか満足気。

「それにしても、本当にこっちの耐性ないんだね彼は。何処の箱入り騎士？ていうか騎士連中ってよく手の甲にやつたりするじゃない」

「するのは平気でもされるのとか、見せられるのはまた別の話だよ。第一場所と意味が違う」

「こんなの挨拶じゃないかと、俺の反応をせせら笑う道化師と、…
…反吐を吐くように、心底嫌そうな顔で唾を吐く神子様。最後の最
後まで俺を小馬鹿にした道化師は、置き土産と言わんばかりに神子
様にも嫌味を置いていく。」

「今日は楽しかったよ、ギメル。暫く見ない内に綺麗になった」

元素を無理矢理従えるような膨大な光……数字の渦。それに包ま
れ道化師の姿が揺らぐ。

計算式自体が彼を守る結界なのか、容易に近づけない……それど
ころか此方が立っていることさえ危うい。バランスを崩し倒れ込む
神子様を抱き留めて、俺も膝をつく。

「……と言いたいけれど、君はあの日と変わらず可愛いよ」

あの日と変わらない？それは何時との比較？俺には何も解らない。
それでもその一言が、神子様の胸を深く抉った。暗い影が琥珀の瞳
に降りて行く。その影は、道化師……その人の影が消えた後も、彼
女の目の中に深く残されていた。

*

「聖十字……？」

ユーカーは、その場の流れについて行けずにはかんと口を開けて
いた。

「その顔を見るに、本当に何も知らなかったようだな」

惚けていると、黒の騎士が少し驚いたように呟いた。神子の部下

がこの辺にいと聞いているが、それが純血だとは思わなかった。

いや、本来ならそれが当然だ。でもイグニスはその部下を信頼しているようだった。だから神子が混血だから、その部下も混血なのではないかという先入観が俺の中にあつた。

ついでに言うと聖十字のカーネフェル人は大抵女だ。人口比率的にそうなる。後は亡命して来たタロツク人の男がそれに次ぐ。聖十字軍の中にはタロツク女はまずいない。カーネフェルの若い男も割合ではほばいないに等しい。居たとしても中年とか爺が大半だ。

それもそのはず。カーネフェルの若い男は、その出生率の低さから貴重。適当な場所、適当な身分に生まれても、アルドールの阿呆のように養子として貴族の家に貰われたりする。法を破り奴隷商に売られる者もいる。売られなかったとしても攫われ金に換えられることもよくあることだ。

俺はこんな目の所為で真純血でも価値は殆どない。それでも昔、ランスの馬鹿はよく攫われそうになったもんだ。小さい成りで剣は強いわ精霊の加護のある数術使いのあいつをどうこう出来る連中はいなかったが。要はそれくらいカーネフェリーの男は貴重だつて事だ。

だから自分の息子を聖十字なんて危険と隣り合わせの職に就かせる馬鹿な親は居ない。いるとしたらそれは自分の意思で軍隊入りした正義漢か愛国者。

(……神子から与えられた任務を投げ出して、カーネフェルに上陸つてことは)

この少年はそのどちらか、或いは両方である可能性が高い。でなければ赤の他人の俺の危機にこうして自らのみを危険に晒すはずがない。

「タロツクの騎士よ！その子を放しなさい！」

「それならば、まず先にすべきことがあるだろう」

得物を捨てる。そう告げられた少年は、迷うことなく手にした剣を投げ捨てる。思い切り。

「解りました」

しかし投げる方向がよりにもよって騎士狙い。俺としては助かった。黒の騎士がその攻撃を防ぐため、俺を掴んだ手を放し突き飛ばす。そして自分の得物を奴も構える。……不意打ちとはいえあんな攻撃でこの騎士をどうこう出来るとは思えない。それなら……その攻撃が騎士に届く前に俺は飛んでくる剣を掴む。ずしりと重い諸刃剣。長さも申し分ない。やっと俺も本調子になれそうだ。

「もう一勝負と行くか？生憎俺はまだ降参してねえぞ」

受け取った得物を構えた俺に、騎士は黒い目を軽く見開いた。俺が逃げるものだと思いきみ、俺はここで挑みに来るとは思わなかったのだらう。

「……そんなに俺に嫁ぎたいのか？」

「したかねえよ！つうかもう我慢ならねえっ！これ以上俺を侮辱するってんなら……」

「駄目ですよ」

「は？」

騎士の言葉に噛み付いた、俺に近づくと聖十字。さっと、俺の手から剣を奪い返して微笑んだ。

「これは貴女のような方が持つべきものではありません」

持つべき物じゃないって、むしろ四六時中三百六十五日俺は剣と一緒にだぜ？騎士だし。それが普通だし。ていうかいい加減誰か気付けっ！せめて一人くらい気付っ！お前ら眼球腐ってんのか？俺は男だ！

「大丈夫ですか？」

「え、ああ……」

「怪我はないようで良かった。でもこんな時間に女の子が一人で出歩くなど不用意にも程があります」

にこりと優しげに微笑まれても、それは悲しいだけだった。何度も言うつようだが俺は男だ！その証明のため本名暴露し変装服を脱ぎ捨てたくなつたが、それはそれで俺のプライドが許さない。これ以上北部で変な尾鱗の付いた噂を抱え込みたくない。

「いや、あの……あの俺は」

弁解しようとしたが、思うように言葉が出ない。籠手の下から覗くのは、俺よりほっそりとした長い指。それでも一瞬触れた指は硬い。そこには幾つもの剣鞘がある。懸命にがむしゃらに剣を振るつて来た手だ。そこには俺の中にはない気迫のような、危機迫る何かを感じられた。その何かが俺に訴える。剣を持つべきではないのはこの子の方なのではないかと。

「それで私に何用ですか？」

「何用とは解っているだろう？其方も俺達を捜していたはずだ」

「……要求は何ですか？」

「お前の仲間は全て捕らえた。捕虜としての扱いを望むのなら、

我が軍門に下れ」

騎士と少年兵の会話に俺は一人置き去りのまま。

(……おいおい、正気かよ?)

俺とそう背丈の変わらない……いや、ちょっと俺より高いかも知れない。だが顔はまだ少し幼いというか……いや、整っているというか。こんな少年兵をタロツクの奴らが捜していたとは。

しかもルクリースの風評被害攻撃が真実味を帯びてきた。自然と下半身に力が入る、強張った。おいおいおいおいちよっと待て、俺はそんなの御免だぞ。

「くそっ……」

この少年兵がそうしなければ神子の部下、つまりはカーネフェルに縁のあるシャトランジアの女が捕虜以下の扱いを受ける。処理の道具に使われる? 奴隷として売られる?

この少年が下っても、それは犠牲の数が変わるだけ。自身を贄に最小限の犠牲を望むか、より多くの不幸か。それを男は問っている。

「……………」

「答えは決まったか、聖十字?」

少年のまっすぐな青。潔く、一点の曇りもないその青は……確か
に惹き付けられる何かがあるようだ。

「解りま……………」

「解られて堪るかよ」

だから嫌なんだ。俺は胸の中で息を吐く。

何も見えなきゃ、こうして何も守らなくて良いはずなのに。何処かへ行けば何かと出会う。こうして勝手に背負わされていく。

「こいつが何かは知らねえが、この俺を差し置いて交渉とは頂けねえ。いいかお前ら、ここはカーネフェルだ。そしてお前はタローク。そつちのお前はシャトランジー。ここはカーネフェリーの俺に話を通すのが筋ってもんだ」

勝手に人ん家の庭で好き勝手やりやがって。この辺はまだアロンダイト領だぞ？ランスの家は俺の家。要するにここは俺が守る対象内。そういうことだ。

仕方ない。こいつらはカードのことを知っている。それを見せればこいつらの興味は俺へと移るはず。

手袋を地面に叩き付け、ついでにうざったいドレスを脱ぎ捨てて、変装を解く。下に普通の着ていたから別に問題はない。しかし戦いにくいなのがつて。ドレスの下から見えないように下服の丈が普段より短いのが違和感だし、動きづらい。蹴りのスピードも開脚も、ダッシュも何もかもが煩わしかった。

俺は手の甲……クラブの袖口を見せる。そしてその手を裏返し、Jの文字を見せてやる。それには少年兵をも含め、その場の人間全てが息を呑む。

「北部でセレスの名を聞いて、目の色変えねえとはお前ら新参者だな。俺はユーカー」セレスタイン。アルトリウス王の騎士だ！」

「セレス……？まさか、こいつは!？」

「師団長!この女はっ、カーネフェル王の腹心!ロードナイトっ!」

「ほう、あの熊殺しの名高い騎士か。隻眼というのは嘘だったの

か。なるほど、一杯食わされた」

「それだけじゃありませんレクス様っ！この北部で、セレスティンの守護は絶大！夜に戦いその騎士に勝った者はいないとか……ここからどんな手を使ってくるか解りません！」

「それだけじゃありません！殺した熊を料理して、フルコースにし骨一つ残さず食べたとか！」

「いや俺が聞いたのは生でそのまま美味しく頂いたとか……」

「俺どんだけ腹減ってるイメージなんだよてめえらっ！貴族馬鹿にするのも大概にしろっ！」

どんな尾鰭ついてるんだよ俺の活躍は。

「なるほど。料理上手と来たか。これはますます俺のストライクだ。どんな物でも食材に出来るその才能……是非我が軍に欲しい。ついでに俺の嫁にもどうだ？」

「敵に好感度上げられても嬉しくねえよ」

「まあ、そう吠えるな吠えるな。折角の顔が台無しだ。……しかし男殺しとも聞いていたがまさか女だったとは」

「馬鹿か？俺は男だ！」

俺の噂って主に熊と男関連しかないのか？もつとあるだろ他にっ！腹を立てて俺は騎士を睨み付ける。まじまじと奴は俺を見る。そいつは無表情……だがその部下のがっかりしたような顔に俺は少し安堵する……が、よくよく見ればごくりと息を飲む阿呆も幾らかいる。むしろ待ってましたみたいな顔止める。やっぱ幾らかはいるのかよ。カーネフェリーの男はレアだよな、とりあえず記念に一回食つとくかみたいな顔の奴は殴りたい。いや、蹴り飛ばしたい。主に股間を狙って。

にしても今日は何という厄日だ。いやむしろ今年は何という厄年だ。もう嫌だ。犬も歩けばとは言いが、棒ってその棒じゃねえだろうが。

何で俺はここ最近野郎としかフラグが立たないんだ！確かに他の女とそんなことになったらアスタロットに申し訳が立たないとはいえ、これはあんまりにもあんまりだ！悪意の集中砲火過ぎる。俺だって一応生きてるんだぞ？人並みの幸せとは言わねえが、多少なりとは平穏とか望んでも良いじゃねえか。それが何これ。何なんだこれ。どうなってんだこれ。どうすんだこれ。

「確かに言われてみれば胸がない。俺は貧乳が好みでな、むしろ喜んでいたところなのだが……まさか無乳だとは」

「無乳で悪かったな」

「いや、だがしかし一体世の何人がその両者の違いを明確に述べる事が出来ようか？」

「俺に聞くな。でも多分性別の違いじゃね？」

「いつぞや我が君は言った。巨乳こそ世の宝だと。後くたばれ絶える貧乳と。俺はあの方を尊敬しているがその一点だけはどうにもいただけない。でかければいいというものでもないだろう。何時かあの方が巨乳以外の女は死刑と言い出さないか俺は心配でならない。ここだけの話、量より質。この信念の前では無と貧……それは微々たる問題。そうだろう？」

「真面目な顔で馬鹿なことを言うの、いい加減止めてくれねえか？お前の部下連中ドン引きしてるぜ？お前の第一印象ガタ落ちだわ何でお前みたいなのがタロツクの騎士なんだよ」

「王は退屈なさつていてな。俺はいつそのこと死ぬつもりで最後の言葉を問われた時に、彼に猥談を持ちかけた。その度胸のでかさを気に入られたとかそんな記憶がある」

「止める、俺の中のタロツク王のイメージを崩壊させるな。そんなのにあの人が俺が負けたと思うと死にたくなる」

「なるほど、だが敢えて今一度お前に問おう。ちょっとタロツクの俺の屋敷まで味噌汁を作りに来ないか？毎朝」

「……………条件にもよるな。俺の主はもういねえし、就職先を探

していないこともない。有給七日と昼寝時間は付いてるんだろうな？」

「あ、貴方達っ……な、なな何てことを言っているのですか！？私は聖十字！教会の定める十字架法は同性愛は禁止ですっ！」

顔を真っ赤に染めた少年兵は、俺達を見て狼狽える。俺はもう神子やあのメイド女に色々言われた所為で、慣れてしまった節がある。ていうかだ。そうは言うけど神子を見ている限りなんかその辺どうなんだろう？割とその辺緩そうな感じではある。聖職者は恋愛禁止結婚禁止とか法では定められているらしいが、あの神子常にアルドールの阿呆といちゃついてはいないか？どこからどう見ても。可哀相に、この兵士はまさか教会のトップがあんなだとは思わないだろう。

(っーか……馬鹿かこいつは)

せつかく俺が囿になったのに、どうして逃げない？何も俺も好き好んでこんな猥談に参加してたわけじゃねえのに。いや、ランスの阿呆とはこつという話できないからちよつと新鮮だったとかそんなことは全然無い。まったくない。これっぽつちもありやしねえ。

上手いことこいつらの所に潜り込み、せつかくお仲間とやらを解放してやるうと思っただけなのに。

「大体貴方はなんなのですか！？カーネフェルに生まれていながらそんなに簡単に国を主を鞍替えしようだなんて！騎士の風上にも置けませんっ！」

不味い。これは俺が苦手なタイプの男だ。いや、男は……男じゃなくても苦手なタイプ多いけど。苦手な女も多いけど。それは今はどうでもいい。兎に角これは不味いのだ。

こいつには俺のような小細工が通じない。空気を読んで話を合わ

せてくれるなんてそんな事が出来るだろうか？……無理そうだ。仲間を囚われて、すっかり使命感に駆られている。

「これだから教会の奴らは辛気臭くていけ好かねえ」

「何ですつて!？」

ツカツカと俺に歩み寄り、俺を睨み付ける青の色。教会を侮辱する言葉が許せないと、俺に手を振り上げて……そこで何かを思い出したように、そいつはその手を止めていた。

よくわからねえ。だが好機!

俺は油断しているそいつの手を引っ掴み、思い切り上空へと放り投げ、叫ぶ!

「リングァーレット!」

近場に潜ませていた俺の馬。それが少年兵が地に着く前に現れ、背に乗せる。あいつは暴れ馬。振り落とされたら唯じゃ済まねえ。それを悟ったのか兵士は必死に馬にしがみつく。

俺の判断に、レクスという騎士はにやりと笑う。その笑みに俺は思う。こんなのが狂王の腹心だって?なんともやりにくい相手だ。だってこいつは俺にまるで敵意がない。

「何時、気付いた？」

「手を見てだ。何人俺が部下に剣教えてきたと思ってたんだ」

剣を振るう女の手と男の手。その違いが解るようになる程度には、俺も面倒臭い役をさせられて来た。

「なるほど、腐っても騎士と言うことか」

「……つたり前だろ。この俺の前で、女に剣を握らせられるか」

俺の言葉に敵ながらあっぱれと言わんばかりに男は頷いて、俺にどうするつもりだと問う。

簡単には俺を殺せない。それは相手も理解した。そして考えるはず引き抜けるなら引き抜きたいと。こいつらが数術を何処まで理解しているかわからないが、神子が言う元素の相性。それを考えるに、タロツクの連中ほどクラブのカードが欲しい奴らは居ないのだ。

「……そんじゃさっきの勝負の続きと行こうぜ？簡単に俺の主になれると思うなよ？少なくとも俺は俺より弱い奴には従わねえからな！」

俺は聖十字兵が残した、十字の剣を手に取り笑ってやった。こいつに恨みはそんなに無いが、だからってそれは戦わない理由にはならないだろう。こいつはカード。削れるだけ削っておくのが俺の仕事だ。それがランスの野郎の望みなら。

13: **Fama crescit eundo**・(後書き)

6章ヒロインの本格的な出番は多分次辺りから。

「いたか!？」

「いや、こつちにはいない!あの方の愛馬が走っていくのを見た
つて奴もいる……もう領内にいないのでは？」

「そんな!しばらくはこつちに留まるって聞いたのに!」

「うちの畑で取れた野菜を届けに行こうと思った矢先にこれだ……」

誰も何も言っていないのに、外には騒ぐ人に嘆く人。アルドールはその騒ぎに目を丸くする。

(俺はユーカーの不在に気付けなかったのに)

ユーカーは北部の守りの代名詞。彼がいなくなったことで不安に
駆られているのだろうか?そう思ったけど、え……野菜?

「……どういうこと、でしょうか……?これ」

「いやはや、北部……とりわけうちの領地でのセレス君人気は凄
くてね」

ユーカーの不在を何処から聞きつけてきたのか、アロンダイト領
内は夜中だというのに騒がしい。やはりバレてしまったかと、ヴァ
ンウィックは肩をすくめた。

「ユーカーに何か用でもあつたんですか？」

「いや、そうではないんだよ。彼らはセレス君に恩があつてね。

収穫した物を是非食べて欲しいと競い合っていて……喧嘩ばかりす
るのでローテーションで割り振りして納得して貰ったばかりだった

んだ」

そう言えば昨日、ユーカーが畑から勝手に色々取って来たらしいけど、何の文句も言われなかった。てつきりここがランスの家だからだと思ってたけど違かったのか。それどころかむしろそれはこの人達にとっては光栄なことだったのか。

「何処だあああああああ！！」

「探せえええええええええ！！逃がすかあああああ！！」

「ええ！？」

今度は男達の野太い声。さっきは女性ばかりだったからその落差に驚く。それどころか彼らは暗闇でも解る、暗い色の髪。

「た、タロツク人！？もうここに攻めて来たのか！？」

「もうセレスの留守に気付くとは……アルドル様、どうか私にご命令を」

「僕も、頑張ります！！」

慌てふためく俺。応戦の命を求めるトリシユとパルシヴァル。しかしその背後で肩をすくめるヴァンウィック。

「いやいやアルドル様、あれは私の所の領民です」

「ええ！？タロツク人が領民なんですか！？」

俺は愕然としたが、聞こえてくる声をよくよく聞いてみるとそれは物騒な物ではない。

「何処に行つちまつたんだセレス様あああああ！！」

「んだ。あの方のために、芋の煮っ転がしさ肉入れて拵えてたっ

てのこ」

「こらこら君たち、文句を言いたいのには解るがそう騒ぎ立てないでもらおう。折角のセレス君の思いを無下にする気か？」

「領主様！折角あの方お帰りだつて聞いて俺達領地外れから来たばかりなんだ」

「あんまおおつぴらに出歩いたら迷惑かと思つて日暮れになつてから出てきたんだぞ！」

「やれやれ。どうしたものかな」

領民とはいえ領主の言葉が届かない。一体ユーカーは彼らに何をしたんだろう。

「……ほら、セレス君は山賊だけでなく海賊退治もしていたと言つただろう？その最中救われた者も多いんだよ。それだけでもないがね」

「あ……そうだったんですか」

「彼に頼まれここでの生活を保障したのは私なんだが、いや……私などより彼らはセレス君にぞつこんなんだよ悲しいことに。そうそう、セレス君の隊に入ったお姉さん方も奴隷上がりの子が多いんだ。彼に恩返しがしたいとね」

「やつぱりセレスさんはヒーローなんですな！」

ヴァンウィックの言葉に、格好良いですとここにはいない人に惚れ惚れしているパルシヴァル。それから……

「ああ、イズー。私のイズー。貴方はなんて優しい人なんだ！」

違う意味でメロメロな人がいる。ユーカーも大変だなあ。自分がいない場所でさえ、勝手に好感度を上げられてしまうなんて。これユーカーの方はどうか知らないけど、トリシュ側では完全にユーカー

ールート入ってるよね。ていうか一本道だよ。俺には関係ないけどさ。

(でも……)

ユーカーは凄いなあ。目の色で人に軽んじられても、それを行動でカバーして……こんなに沢山の人に慕われているじゃないか。俺なんかとは違う。それが重荷なのだと言ったけど……それはどうしてなのだろう？

「多少扱いにくいところはあるがね……まあ、助かっているのも事実だよ。男手の少ないこの土地で……信頼できる守り手が増えるのは。私が安心して領地から離れられるのもセレス君と彼らのお陰だ。セレス君は嫌がるだろうが、セレス君に何かあれば農具の代わりに武器を取って戦ってくれる気概のある領民達だからね」

「……どうしてユーカーは、進んで彼らを自分の配下にしなかったんでしょうか？」

話を聞く限り、部下になったお姉さん達というのは自ら志願してやっとなという印象を受けた。

「都近辺でセレスラインが幅を利かせるのは都貴族達が避けたい。第一タロツク人をカーネフェルの軍に加えたがらない。そしてセレス君はああ見えて騎士様だ。女性は戦わせるものではなく守るものだと思っっている節がある。……それから父親と同じ事はしたくなかったんじゃないかねえ」

「父親……？ユーカーのですか？」

「ああ。私の兄も、そうやって恩を押しつけ兵力を拡大させた男だからねえ……彼はあいつを嫌っているからそういうことは嫌なんだろう。そんな意図がなくとも、家のためになっってしまう働きは……」

…あの子にとって自分が道具だと認めるようなことだから」

ユーカーの父親。話には何度か聞いた。先王アルトさんの忠臣。王の権威を守るため、シャラット領を滅ぼした。その際ユーカーの婚約者……アスタロットさんを殺害した人。それ以来ユーカーが帰らない土地の人。だけど本当は……誰よりも認めて貰いたかった相手。

(ユーカー……)

ユーカーやこの人の血縁者と思うと、そこまで悪い印象を持ってないのだが……実際どんな人なのだろう？……もともとヴァンウィックだつて気さくな美中年だが、ランスや女の人の立場からよくよく考えれば考えるまでもなく酷いことをしている。それなら忠臣とはいえない人とは安易に呼べないのかも。

なんとなく彼を思つて沈んだ俺に、先程より大きな領民達のざわめきが飛び込んだ。

「あれは、あの方の馬！」

「リンガーレットが何か乗せているぞ！セレス様か！？」

「お帰りなさいませー！セレス坊ちゃん！！」

「いや、あれは違うぞ！あれは聖十字の鎧じゃないか！」

「なんだつて聖十字が！？」

聖十字。それを聞いて俺は思わず走り出す。階段を駆け下り大声でエレインさん呼び、扉の鍵を開けてもらった。

向かった先ではぐつたりと気を失いながらも手綱を放さない一人の聖十字兵。年の瀬は俺と同じくらい？少し上？わからないが、彼は疲労で衰弱しているようだ。

(……応急処置だけ)

咄嗟に俺は回復数術を展開。

俺の数術じゃ回復は出来ない。それでも一時的な回復は、気付けくらいにはなるだろう。この場からこの人を運ぶのにそれは必要だ。

「……………ここは」

震える瞼。ランスのそれよりずっと明るい、だけど綺麗な青目をしている。

「良かった、気がついた？」

「あ、貴方……………どうしてここに？ここは、カーネフェルなのではないのですか？」

「え？ああ、確かにここはカーネフェル。北部のアロンダイト領だよ。とりあえず俺に掴まって。話はそれからだ」

「え、あ……………すみません」

「うわっ!!」

肩を貸したもののあまりの重さに俺はバランスを崩して倒れ込む。この人俺より背が高い。それに……………鎧が物凄く重いんだ。

「あ、……………ごめん!!」

気恥ずかしさから顔を背ける。そうだ何調子に乗ってたんだ俺は。イグニスの部下の人だと思って彼女のことを何か聞けると思ってそれで俺は。イグニスの部下の前で良いところを見せたかったんだろ。うな無意識で。

だけど俺はこの間まで剣も持ったことがない半引き籠もりの缶詰生活を送っていた養子貴族様だった。

尻餅をついて驚いている俺に、聖十字の人が助け起こしてくれた。本当俺って情けない。

「……すみませんでした。私は大丈夫です。」

「あ、ああ！俺の方こそごめんなさい。それじゃあ案内します。」

しかも俺ついつい敬語を忘れていた。初対面の人相手に失礼だった。ユーカーにランスにイグニスに……最近みんなに敬語使うなって言われていたから調子の載っていた。本当恥ずかしいよ。

「エレインさん、この人のために着替えと食事とお風呂……あと、手当の道具、それからもう一室部屋の用意をお願いします。」

「はい、アルドル様！」

パタパタと駆けていく少女の言葉に、短い金髪の聖十字兵は黙り込む。

「あの、何か？」

「アルドル……とは、貴方の名前ですか？」

「え、ああ、そうです……けど。それが何か？」

「いえ、失礼しました。何でもありません。」

「とりあえず彼女の仕度が出来るまで、俺の部屋でもゆっくりして下さい。」

鍵を手渡そうとする俺に彼は首を振る。

「いいえ、その前にお礼共々ご報告したいことがあります。領主様はどちらに？」

「セレス君の馬を連れてきてくれたのは君かね？いや、ご苦労ご苦労。」

両手を広げて階段を下ってくるヴァンウィック。

「ひとまず帰らせたとはいえ領民達も不安がっているし、聞いたことは山ほど有る。しかしそんなことよりだ」

階段を飛び下りた中年色男は一瞬にして彼の手を取り踊るようにくるりと回る。

「麗しき聖十字君、おじ様に君のスリーサイズを教えてくださいませえ」

「ちよっと！いきなりなんてことを言うんですか!?!」

恥ずかしい。ランスじゃないけど恥ずかしい。一応俺に仕えてくれている人がこんなことをイグニスに部下に言うなんて。それって連帯責任で俺の責任。イグニスの部下に幻滅されるのはイグニスに幻滅されること。そんなの嫌だ。嫌過ぎる。咄嗟に彼に手を放させ、聖十字兵を俺は庇った。

「第一男のスリーサイズって何なんですかもうつ!」

「ふむ、なるほどなるほど。アルドル様は照れた顔はなかなか可愛らしいですな。ようやく食指が動きました」

「はい!?!」

「そういうことならこの際アルドル様でも構いませんぞ?私のこの手でスリーサイズを測って差し上げましょう」

「ちよっ!人前でそういうことは止めて下さい!この地の信用に関わりますよ!?!」

わきわきと両手の指を高速で動かすヴァンウィック。嫌だこの人なんか怖い。

「でしたら物陰へと参りましようか我が君」

「助けてイグニスううう！！ユーカーあああ！！！！ランスうう！！！！！！！！ここに誰もいなかった！助けてトリシュっ！パルシヴァルっ！」

肩を掴まれた俺はもう涙目だ。柱にしがみついで助けを呼ぶが、力負けして手の力が緩んでいく。

「領主様、まず先に謝ります。これから無礼を失礼致します」

「ごん。鈍い音がした。恐る恐る顔を上げると絨毯の上に倒れている美中年。彼を撲殺……いや、昏倒させたのは聖十字兵。剣を鞘に収めたままその後頭部をぶん殴つたらしい。」

「身分ある方とはいえ法を犯して良い道理はありません」

怖い。この人も怖い。凄く冷たい目で倒れたヴァンウィックを睨んでいる。

（あ、でも一応俺を助けてくれたんだよね？）

俺は恐る恐る彼へと頭を下げた。

「あ、ありがとうございます。後でイグニスにも貴方のことを伝えておきますね」

「ご無事ですかアルドル様！」

「王様！大丈夫ですか！？」

彼から返答が来る前に、階段を駆け下りてくる騎士二人。その言

葉に突然聖十字兵が跪く。

「え、あの……」

「貴方がカーネフェリア様ですね？」

「あ、……ええと、はい」

隠す理由もないだろう。彼と話をする上で、それは必要なことだ。それならば俺は彼へと向き直る。跪いた彼へと手を伸ばし、そういうのは必要ないと笑ってみせる。

「俺はアルドールⅡDカーネフェリア。……王とは言っても最近即位したばかりだし、今は都落ちしている情けない奴なんだ。だからそんなに畏まらないで下さいお兄さん」

「お、お兄……そ、そうですね。ええ、解っています。むしろ私はそれは上手く機能していると喜ぶべきであって」

「あの、何か俺……」

「いえ！何でもありませんので！」

「はいはいお二方、廊下で立ち話もなんだろう。居間でも使ってくれたまえ」

起き上がったヴァンウィックが俺と彼の肩を掴んでズルズルと廊下を進む。かなり凄い音がしたけど平然としている。この人は不死身か。殴った側の彼も驚いている。

そんなこんなで居間へと落ち着いた俺達。どう切り出すか迷う俺に気付いたのか、彼の方から言葉を発してくれた。

「ひとまずお礼を言わせて下さいカーネフェリア様。セレストイン卿と言うのは貴方の騎士ですね？」

「うーん……ユーカーは俺の騎士っていうか友達……って言うたら嫌がられるかな。まあ、他への好意でちょっと力を貸して貰っ

てるってどうかそんな感じで」

「…………え？」

「あ、いやいや、一応俺の騎士ってことになってるのかな？よくわからないや、あはははは。あと俺はアルドルでいいですよ。そっちの方が慣れてるので」

まだカーネフェリア呼びはしっくり来ない。呼ばれ慣れていないから。

「それでは、アルドル様。助けていただいたことを感謝します」

「俺は何もしてないので…………それより向こうで何があったのか話していただけますか？」

「はい」

俺の言葉に聖十字兵は頷いた。明るい場所で見ると彼の目は更に明るい。それでもユーカーの空色よりも濃いその色は凜とした彼の真剣な面持ち、それによく似合っている。強い意志を宿したその目の光はとても綺麗だった。

「私はシャトランジアから派遣され、シャトランジアカーネフェル間の海上警備を行っていました。それでわけあってこのカーネフェルに上陸しました」

「ああ、そう言えばイグニ…………いや、神子もそんなことを言っていました」

「私達の船は奇襲を受け、目的の場所とは違う…………この北部へと流れ着きました。そこをタロック軍に襲われて…………多くの仲間が捕らえられました。それを逃れた仲間はこの隣…………ブランシュ卿の領地に身を潜めています」

「あれ…………ブランシュって、トリシュの実家だよな？」

俺はてつきり湖城の話が来ると思っていたから驚いた。ていうかアロンダイト領の近くだったのか。

「領地とは言っても……父はアロンダイト卿以上に領地を蔑ろにしています。領内の管理はシール叔父さん……いえ、別の人間に任せきりで」

「ふむ。チエスター卿か」

トリシユの持ち出した名前に、ヴァンウィックが渋い顔つきになる。

「私も久しく会っていないが……我が弟子トリシユ君。これは数多の恋をした私だから言えることなのだがね、何か嫌な予感がする。やはり君は湖城に向かう前に彼に会いに行きなさい」

彼はトリシユに忠告をした後、俺の方にも促した。

「アルドール様、貴方もそうなさると良い。あの湖城の古城は元々彼の持ち物でね。あれを攻める意味でもそこに詳しい人間の話を知っておいて損はない。或いは……」

「その、チエスター卿に……なぜあの城がタロックの手に渡ったのか、聞く必要があると言うことですね？」

「ああ。そう言うことになる」

ヴァンウィックは一度小さく頷いて、席を立つ。居間の流れで大體の話は理解したと言わんばかりに。

「本当は私も会って話をつけてやりたくはあるのだが、流石にこの状況で領地を放り出したら馬鹿息子とセレス君に怒られる。おじさんはここで留守番をしているよ」

ひらひらと手を振りながら彼は居間を後にした。残された俺達は、少し気まずい沈黙に包まれる。何の問題も解決していないのに問題ばかり増えている気がした。

「……聖十字の方、それでセレストイン卿はどうなったのですか？」

本当に心配そうに絞り出されたトリシユの声。いつも半分冗談みたいな感覚で見守っていたけど、その声に俺ははっとさせられた。それは俺だけじゃない、パルシヴァルも気付いたようだ。

「トリシユ……」

「トリシユさん……」

「……彼は、無事なのでしょうか？」

切々と紡ぎ出される彼の言葉は、聖十字の胸にも届いたようで彼も気まずそうな顔になる。

「彼は、投降しかけた私を庇い……タロツクの第一師団長と刃を交えました。その隙に私を馬へと乗せてここへ……彼との勝負がどうなったのかは解りませんが、私が彼らに出会う前のやりとりからして、おそらく彼に分はありません」

「ユーカー……」

「相手の様子から、命までは取らないとは思いますが……」

「あの、他に誰か見ませんでしたか？格好良いカーネフェル人の騎士とか女の子みたいな可愛い混血の男の子とか」

「いえ？私が見たのは少女と見紛うような女装をしていた騎士様だけです。敵は勿論私も彼に言われるまで気付きませんでした、」

確かに女性にしては少々口汚い方でした」

「あ………そうですか」

それ確かにユーカーだ。セレスちゃんだ。こっそり飛び出すために女装も厭わなくなってきたのか彼は。

（本当ランス絡みのことになるとうーカー、手段選ばないよなあ……）

それだけ心配だつてことなのか。そう言えば俺が始めて彼と出会った時も散々だった。ランスが心配過ぎて暴走してたなあユーカー。あの時の俺、女装してたにもかかわらずぞんざいな扱い受けてたらしいし。

（あれ？）

何か妙だ。ユーカーって確かにお人好しだけどランスが心配で視野が狭いときに、こんな人助けなんて出来るだろうか？ということ。ランスは無事。イグニスも無事。それを確認しているって前提？その上でイグニスに扱き使われた。そう考えるのが妥当か。そう思い俺はほっと息を吐く。それを見計らったでもないだろうが聖十字兵はそこで俺の心労が増すようなことを言う。

「心配なのは、正体が判明した後も敵将の方に口説かれていたことです」

「なっ………なんですって！？それは本当なんですか！？」

取り乱すトリシユ。悲しみに揺れるような青い瞳が、今日ばかりは怒り狂って青い炎のように燃えさかる。

「ユーカー……」

本当に不運だ、彼。敵にまで口説かれるなんて。また他の男とフラグが。犬も歩けばって言うけどその棒じゃないだろうに。

「と、とりあえず落ち着こうトリシユ？向こうにはランスとイグニスがいる。何か本当に大変なことになったら助けてくれるよ」

多分。イグニスは怪しいけどランスなら、……多分。

「それにユーカーも騎士だ。それにコートカードだ。そんなあいつをどうこう出来る相手はそうそういないだろ？」

「しかし、アルドール様……」

これでも駄目か。それなら……

「お前が信じてやらないでどうするんだ」

この言葉の前に色々脳内補完できそうな含みを持たせて俺は言う。それに彼ははつと我に返ったようだ。

「……仰る通りですアルドール様。私は少々我を忘れていました」

そうやって憂いる顔は美形なんだけどなこの人。自分に自信がないのだろうか？だからユーカーを信じられない部分があるんだろうか。そこを肯定してあげないとこの人は、精神的に弱ってしまうのかもれない。

「それじゃあ向こうのことは二人に任せる。何かあったら此方に連絡が入るはず。そこをアロンダイト卿の采配で何とかして貰おう。」

俺達は湖城に行く前にチエスター卿を伺う。隙あらば聖十字の人達を取り戻す算段を練る。これがベストだと俺は思っけど……みんなはどう思う？」

「はい、異存はありません」

「王様がそう言うのなら僕はそれに従います」

「それじゃあ明日も早い。二人は身体を休めてくれ」

俺の言葉に従って退室をする騎士二人。残された俺と聖十字の人また、沈黙だ。

「……すぐに貴方の仲間を助けると言えなくてごめんなさい」

「……いえ、仕方のないことです。私もそのためにここへ来たのではありませんから」

「え？」

妙な言葉。ここへ来た？ここってこのアロンダイト領？でもそれはユーカーの差し金。それならここというのはここではない？

「私達は、命令違反をしたんです。だからもう……シャトランジアへは帰れません。それを覚悟でここへ来ました」

続く言葉にやっと気付いた。ここというのはカーネフェル。このお兄さんはこの国の生まれだったのか。

「私達はこの国を守るために、カーネフェルへ帰ってきたんです。シャトランジアには恩がありますが、聖十字の掲げる正義と祖国への正義とは、……どちらが重いかなど分かり切ったことです」

「……お兄さんは、凄いなあ」

「はい……？」

「稀少なカーネフェルの男なのに。騎士でもないのに……戦っ

とを選べるなんて、そんな簡単に出来る事じゃない。俺なんか……
本当、情けなくて」

夕方のことを思い出す。剣を取った、手が震えた。こんな情けない俺が王だなんて、この国は可哀相だ。

「何で俺なんかが……エースなんだろう。お兄さんみたいな強い心の人が……王様だったらきつと、もつと……」
「カーネフェル王、無礼を失礼いたします」

椅子から腰を浮かせて、身を乗り出した彼は俺へと手を伸ばす。
そして……

「え？」

それは思い切り。耳に響いた強い音。その痛みに思い出す。ああ、以前もこんな事があったなど。あれはシャトランジアの第一聖教会で。これから任務に行くという聖十字のお姉さんに俺は打たれた。

「……あれ、……お姉さん？」
「……っ!？」

不意に目の前の人とその人が重なった。髪型は違う。それでも顔がその目がそっくりだ。

「いや、お姉さん……違う、お兄さんもしかして妹とかお姉さんとかいたりしますか？双子とか」

「……私を打ちますかカーネフェル王？貴方には一回、その権利があります」

俺の言葉にはあと溜息を吐いた聖十字のお兄さん。

髪飾りかと思っていた三つ編み。髪を解くと……ばさと彼の髪が降ろされる。思ったよりそれは長い。それは見覚えがある……長い金髪の……金髪の……女の子!?

「お、お姉さん!! 聖十字の!! なんでこんなところに!!」

「それは此方の台詞です! 貴方がカーネフェル王だったなんて!」

お姉さんに大分遅れて俺も椅子から立ち上がる。

「な、なんで男の振りなんか……」

「女ばかりの軍だと思われると舐められるんです。だから比率で違和感がない程度……何人かは男装して警備を務めるんですよ聖十字では」

もしかして、アージン姉さんもやたらとシャトランジアではモテていたのを思い出す。同僚の女の子達からラブレターもらったり二月なんか大量のチョコレートを貰っていて頭を抱えていた。それでも貴族だしそれ相応の品をホワイトデーにはきっちり返したりするからそれ目当ての子まで増えてという悪循環が生まれていた。

あれって姉さんが男勝りだからだと思っていただけ、男装警備の仕事の所為もあつたのか? 確かに姉さんがきつちり男装したら格好良いかもしれない。なんて言ったら……姉さんに涙目で殴られるんだろうな。そう思うと、俺の涙腺が緩んだ。

「あ、あの……ちょっと、……そ、そんなに痛かったですか?」

「あ、気にしないで下さい。あ、欠伸です」

あれから肌身は出さず持ち歩いたトリオンフィ。それを胸に抱え

て蹲る。

このお姉さん、苦手だな。アージン姉さんと年とか背格好が似ている。今更のように罪悪感が湧き上がる。フロアリップやルクリース……あの二人のことだって忘れられない。忘れていない。だけど……二人とは一緒にいたから、未だに……俺の脳が間違っている。死んだって思えない。目を瞑ればこの同じ空間に二人が息づいている。

(それでも、姉さんは違う)

俺は姉さんの死を実際見ていない。そう言って逃げて来た。そのツケが回ってきたような感覚。聖十字……同じ肩書き。俺の罪悪感を刺激するように、この人が現れた。

彼女を直視できなくて……罪悪感から目を逸らす俺に、彼女が不思議がる。そこに天からの助け船。

「アルドール様あ！準備できましたよー！」

ありがとうエレインさん。今ならランスとの手助けをしてあげたいくらい的心境だ。

「あ、それじゃ！ええと後は彼女に良いようにして貰えるようにしておくからゆっくりして下さい！」

「あのっ！」

「は、はいいいっ！」

何故か突然脅えだした俺に戸惑う素振りのお姉さん。いや、俺は打たれたから脅えてるんじゃないやありませんよって言いたいけど何故か声が震えてしまう。

「明日の件ですが……私も一緒にさせていただけませんか？仲間

との合流まで、貴方の護衛をさせて下さい。私はそのためにここへ来たんです」

「いや、でも……お姉さんはここにいた方がいいですよ。今の戦争は普通じゃない。いくら強くても普通の人が相手じゃ……」

「生憎、私は普通の人間ではありません」

お姉さんが凜と顔を上げ、俺へと近づく。近づかれて急にドキドキする。感覚的にはランスに近づかれた時のそれに近い。凜々しいその顔つきはランス並にイケメンだ。いや、この人お兄さんじゃなくってお姉さんだからっ！そう言い聞かせるも、イケメンだ。姉さんにときめく同僚の方々に気持ちがちよつと解った気になった。

慌てふためく俺を正気に返らせたのは、彼女が俺に見せたもの。

「先程貴方はエースと仰いましたね」

「あっ！」

あの日俺は疑った。神の声が聞こえた。それはこの人がカードだからなのでは？そう思った。けどすぐに否定した。だってそれはこの悪魔のゲームが始まる前のことだったから。

それでも……彼女の手の甲には刻まれた紋章。俺が初めて見る模様。

「スピード……」

カーネフェル人の彼女に何故、タロツクに縁のあるスーツが出たのか。戸惑う俺に彼女は掌を見せる。そこに刻まれていたのは……見覚えのある、Qの文字。

「く、クイーン！？そ、そんな……」

今度はルクリース。彼女を思い出すその数値。あまりの衝撃に俺はその場にへたり込む。

もう無理。もう駄目だ。両目からボロボロ涙が溢れ出す。

(ルクリースっ……ルクリースっ!!)

彼女との思い出が俺の脳裏を駆けめぐる。それは今まで省みることもなかった屋敷での生活からはじまり……フローリプから俺を守ってくれた彼女の背中。一緒に旅をしたこと。俺をいつも彼女は守ってくれた。その当たり前が何時までも続くことを願ってやまなかった。いつかはそれが失われるのだと言われても、そんなことあり得ないと心の何処かで思っていた。それが……こんなに早く奪われるものだとは思わなかったんだ俺は。

焼けこげるシャンデリア、血だらけ……硝子の破片が突き刺さった彼女の身体。おいつかない回復数値。二度と開かなくなった彼女の目。俺の名前を呼ばなくなった彼女の口。

「あ、あの……」

呼ばれてる。何でもないとやわないと。だけど、駄目だ。何も考えられない。呼吸が乱れる。そして全てが遠くなる。

*

「そんなに気になさることないですよ。アルドル様は今不安定な時期というだけなのですから」

「で、ですが……」

トリシュはそう微笑むが、相手は簡単には納得してくれない。狼狽えた様子のその人に、何と言えればいいのだろう。そこまで多くを

自分は知らないというのに。

突然倒れたというアルドル様を運んで来た聖十字兵。見た限り、高熱などの症状も見られない。これは精神的なものだろう。

「私もそう詳しくは知らないのですが、アルドル様は都へ来るまでに大切な方を無くされたそうです。今はもうご家族の一人もいらっしやらないのだと」

「王家はこの方お一人だけに……ということですか？」

「……ええ、それは確かなのですがアルドル様は先代様の遠縁らしいのですが、わけあつてシャトランジアに養子に出されていたようです。そこを神子様に見出され、カーネフェルへと戻られた」
「シャトランジア……」

そこで聖十字兵は考え込む様子になった。何か思い当たる節があったのか。少し気になったが私は先を続けることにした。

「養子先の家ではあまり折り合いが良くなかったようですが、其方のご息女やメイドとは親しくいらっしやったようです。旅の途中でお姉様と護衛のメイドを亡くされ、……都から逃れる際に伏せつておいでの妹君も亡くされた」

「……そうだったんですか」

「気丈に振る舞っておられますが、あの方もまだ幼い……私共より親しい神子様やセレスティン卿が傍にいないことで参ってしまったのかもかもしれません」

だから貴方の所為ではありませんよと伝えて、今日は休んで下さいと退室を迫ったが……彼は頑として腰を上げない。

「私なら大丈夫です。これは私の所為です。ですから私が看病を

……」

「これこれお嬢さーん、夜更かしは美容の大敵だよ」
「ど、どこから現れるんですか貴方は！」

思わず吹いた。私としたことが。

でもお師匠様。それはないでしょう。なんでクローゼットから現れるんですか。いつからそこにいたんですか貴方は！

咳き込む私の隣で、聖十字の方も呆然としていました。

「……って今なんと仰いましたか!？」

「我が弟子よ。その目は飾りか？セレス君に夢中過ぎて他がお留守になつている！その子は紛れもなくレディ。それもその雰囲気間違いない！彼女は初物だ！」

「淑女に向かつていきなりそれはセクハラです師匠っ！」

「いや、最近男装少女と縁があるのかね私は。この間の黒髪少女は食べられなかったの、こゝらで男装金髪少女は食べておこうかと」

「領主様、それ以上そのようなことを仰るのなら、十字法で現行犯逮捕致しますが？」

「仕事熱心なもの関心だがねお嬢さん、オンオフは大事、人生切り換えが大事だよ。そして生き抜きもだ。あまり肩と眉間に力が入っていると折角の可愛い顔が台無しだ」

「別に私は可愛くなど有りませんから。そういうことは他のご婦人にでもどうぞ」

凄いいこの子。この変態相手に一步も引かない、神子様やランス並に手厳しい。

「弟子よ。これ以上私の邪魔をするのなら、此方にも考えがある。今日都から届いたこの手紙……これを複製してセレス君の実家に送って遊ぼうと思ったのだが」

「そつ……それは！」

私が彼を連れて都を逃れた時の盗撮写真。神子様、本当にアロンドイト領に配っていたのか。通りでこの領内の人々が私に冷たかったわけだ。今日一日大分扱かれたのはそのためか。

「さあ、どうする？どうする？欲しいだろうか？既成事実が！欲しいだろうか？外堀工作が！」

「ええっ！？貴方がセレストライン卿の身を案じていたのは美しい友情だと思ったのに、違うのですか！？」

「運命とは斯くも非情なものなのです、聖十字のお嬢さん。ですが師匠……」

確かに既成事實は欲しい。外堀だつて埋めたい。それでも私も騎士だ。譲れないものがある。……そうだ。肝心のあの人が頷いてくれないければそんなの無意味。

「その必要はありません！いずれ私がイズーを連れて直々にセレストライン領に挨拶へと向かいます」

顔を上げた私の言葉に、師匠の目が柔らかくなる。

「……ふっ、この数日で男を上げたなトリシュ。お前の男気に免じて今日は私も引き下がろう」

何故か満足げに笑み、夜中だというのに高笑いをしながらヴァンウィックは出て行った。なんとという近所迷惑。アルドール様が目を覚ましそうなものだが、そんなことはなかった。

「……何なんですか、あのアロンドイト卿と言う人は」

「生憎、私にもよく分かりません。しかし何やらどっと疲れが出ましたね」

「はい……」

「……あの方が本当に諦めたかも怪しいですし、ここは貴女にお任せします」

年頃の男女が同室というのは問題だと思いが、アルドール様は寝込んでいるし、そんな精神状態でどうなることもないだろう。

聖十字の少女に部屋は任せて私は廊下へと出る。扉に背を持たれながら……そこで仮眠と見張りを行うことにした。

ようやく6章ヒロインと主人公が再会。

いや変態と逸脱者が多いと、ノーマルは初々しくていいね。

でもまだ名前も聞いてないって言う……ね。ジャンヌとの出会いでアルドールのへたれと鬱度が増えてきたぜ!……普通に恋愛させてやれよ自分とツツコミ入れてみる。だが断る。

エルスという人間は、優れた数術使いではある。

それでもそんな僕だつて万能ではない。あ、やっぱ今の訂正。人間じゃなくてそこ妖怪にしておいて。僕はあるな虫虻みたい人種とは違うんだから。当然僕は凄いなんだけど、他人のためにそこまで頑張つてやる義理なんかないんだし？そんなに疲れることはしたくないってこと。うん、そうだよ。そうそう。

「全くどうしてタロツク然りこの国然り、無駄に広いかな」

おのれ、につくきカーネフェル。王から国から僕の敵。嫌がらせなのかい？この熱気。

元々僕の数術では、大陸の端から端まで移動することは困難だ。出来なくはないけど代償が半端無いし、第一そんな無茶な術使つたら僕が壊れるかもしれない。数術は代償と自分の限界をよく知った上で行くべきだ。

それにしても嫌になる。この照り付けるような真夏の暑さ。これはタロツク生まれタロツク育ちの僕には辛い。国宝級レベルの価値の僕の白い美肌が日焼けなんかしたらどうしてくれるんだって話だよ。

そう思うと僕を城からこんな所へ連れ出した人間が恨めしい。その一端である奴はと言えば、こんな涼しげな城で避暑とは何様だよ。

……王様か。

ていうか情報漏らしたくないからってあんまり情報残さない移動とか止めて欲しいんだけど。僕に無駄な労力かけるとか嫌がらせだよな確実に。そういう効率性を理解してるのかなこの男は。理解してないな。この僕が必死になって自分の居場所を探してやって来るとっていうシチュエーションに燃えてるんだろ？嗚呼もう嫌だこの

馬鹿王は。

「今戻ったよ、須臾」

「……帰ったか、那由多」

僕が近寄ると男は目も開けず口元だけで薄く笑った。その漆黒の髪はタロツクの間誰より暗く深い色。

「もう、また惚けてる。これだから中年男は。ボクはエルス！エルス！！ザインの名を名付けたのは誰だったんだい？そんなことまで忘れちゃったわけ？」

「無論戯れ言だ」

目を瞑っているのを良いことにこつそり一撃加えようとしたけれど、片手で止められてしまう。カード的には明らかに僕の方が強いのに、それを覆す強さがこいつにはある。簡単には殺せない。だから僕はこいつの傍でその期を伺い続けていたんだけれど……

僕の殺意はこの男にとっては丁度いいじゃあない。むしろ嬉しいみたいだから困る。僕は貴方のペットじゃないんだけど。

「これだからこの男は……」

僕の仕える王様は多少なりともいかれている。それは僕が彼と出会ったその日から変わりはない。それでも……そのいかれ具合がここ暫くで拍車が掛かっているのは確か。以前の須臾ならそう、僕をこつという戦場に送り込むことなんか無かったし、自身が国外に出ることも無かった。

（そこまで今のタロツクが、切羽詰まってるって風には見えないんだけどな）

そもそもこの男が国内を荒らしている一因なんだから。その時点でカーネフェルを攻める理由なんてあつてないようなもの。だってこの男は国のために戦っているわけではないんだ。

「よく帰つたなエルス」

「……別に貴方のために来た訳じゃありませんし」

「まあそう照れるな」

「照れてないっ!!」

やっぱり本当にここで殺してやるのか？苛ついて来た。睨み付ければ、狂王はその殺意に目覚めるように薄目を開ける。その赤のなんと見事なことか。

血よりも深く鮮やかで、その目に見つめられると血だまりの中にいるみたいでぞくぞくする。彼が犯した罪の全てがその目に刻まれているように、その目は果てしなく赤い。狂気に染まったその目が他の感情に揺れることはない。全てを悟ってしまったような、何もかも諦めたような冷たい目。

世界でもっとも強く残酷なタロツク王。それが時折僕を見る時だけ、悲しげに見えるのがこの男の持つ唯一の弱さなのだ。薄桃色を深く暗く染め上げれば、それは紫へと変わる。この男は僕の淡い紅色、桜色の瞳に……亡くした我が子を重ね見て、罪の意識に泣いている。度重なる裏切りを犯し犯され失った、それでもそこにだけ失われた愛があると信じているんだ。何処の世界に殺されて……それでもその犯人を愛する馬鹿がいるだろうか？もしその子が生きていたなら、自分を支えてくれただろうか？そんなありもしない幻想に取り憑かれて僕を見る。

馬鹿な男だよ。なら何故殺したんだって話。まあ、僕には関係ないことだしどうでもいいけどさ。

「そう言えば須臾、最近こつちに来たって話の第一師団長って奴
なんなわけ？噂聞く限りじゃ真純血でもないて話なのにいきなり第
一騎士なんて言われても吃驚なんだけど。そもそも何時の間にか代替
わり？」

「あれか。あれは拾った」

「拾ったって……本当拾い物好きだね須臾は」

どこで拾って来たか知らないけど、僕もその口だからあんまり責
められない。でも……時期的に本当にこの男が拾ってきたかは怪し
いところ。

(またあの男の差し金かな……)

僕はある男のことを思い出す。須臾がこんならしくないことをし
ているのはどうせ奴が関わっているんだろう。本当、人間は年を取
ると駄目駄目だね。丸くなるって言うの？昔のこの男はもっとギラ
ギラしてたのに。

「大体さ、臣下に“王”^{レックス}なんて名乗らせてていいわけ？」

「仕方なからう。奴は確かに王なのだから」

「……………コートカードってこと？」

「無論」

「スピード？ダイヤ？」

タロツク人は大抵スピード。血が薄ければダイヤ。それが僕の見
解だった。だからカーネフェリー達はクラブが多く、血が薄ければ
ハート。これはこれまで僕が出会ったカードを照らし合わせても大
体が符合する。それでも須臾はにやと笑って否定した。

「奴はクラブだ」

「タロツク人なのに!？」

「驚くことはない。金髪族の聖十字にスペードが出たと聞いている」

「カーネフェリーがスペード……まさか、そんなこと」

でもそれが本当なら、確かに拾ったのは正解かもしれない。この男が滅ぼそうとしているのは何もカーネフェルだけではないのだから、その時のために他のカードも手中に収めることは決して悪くはない。悪くはないのだが……

「でもさ須臾……よりもよって一番の天敵を第一騎士にするなんて、馬鹿？」

「其方は主君に向かって愚かと申すか？」

「ウイ、それは勿論言うよ。それがボクの仕事じゃないか」

僕が拾われたのは、この生意気さと殺意をこの男に気に入られたから。僕がその牙を無くせばこの男は僕に飽きるだろう。僕をこういう風にさせているのは半分以上この男の所為。だからここは四捨五入で責任はそっち持ち。僕はまるっと無罪。僕は悪くない。

「そのような口ばかり利くから其方は奴らの中で浮くのだろうな」

それを責めるでも咎めるでもなく僅かに哀れむように王は僕を見る。そうは言うけど僕らが周りと打ち解けてたらそれはそれで嫌なんでしょう？本当は僕にべったり甘えられたいんだろう？那由多王子は死んだ。刹那姫もセネトレアに嫁いだ。だからこの男は飢えてる。だから、そういう代用品が欲しいのだろう。

「ボクは人間なんかと馴れ合うつもりはないからどうでもいいよ」
「……子鬼仲間が出来て余程嬉しいと見える」

ほらね。すぐこれだ。僕は確かに貴方に拾われたかも知れないけどさ、だからって貴方の物になっただってわけじゃないんだ。これだから人間って大嫌い。王なんてその人間の頂点。つまりは地上で最も傲慢な生き物。

(王なんて)

大嫌いだ。須臾も、アルドールも。僕の大嫌いな人間の長だ。僕らの敵だ。殺さなければ殺される。僕がここに居るのは可愛がられるためじゃない。隙を見せたらその時に、この男を殺すため。僕が甘んじているのはこの男に隙が全くないから仕方なくなんだ。これまで幾度となく僕は返り討ちに遭って来た。その度にろくな目に遭わないけれど、僕は諦めた訳じゃない。

「ああ、レーヴェ？レーヴェと言えばそうだ。あの届け物運ぶの結構大変だったんだからね。須臾は僕のこと便利屋か何かと勘違いしてない？結構大変なんだよ大荷物運ぶの。前払いで支払った生け贄もそろそろ足りなくなるし、そろそろまた大暴れしないと」

「その舞台ならまだこれから与えてやる」

「ははは、流石は狂王様。って……何？」

「しかし其方が代償を得ないなど珍しいこともあるものだな。都入りの際に幾らでも殺せたはずだろうに」

「そ、それは……」

「双陸が上手くやったか」

「ま、まあね。人間にしてはよくやった方なんじゃないの？」

そうだ。よく考えればそうだ。無血開城とカーネフェル王の逃亡。民の信頼を失わせるにはいい策だ。でもそんなまどろっこしいことしないで全軍突入、皆殺し作戦でも良かったんだよね。まとまらね

ると厄介だけど、カード一枚一枚なら僕の敵じゃない。各個撃破さえ出来れば、それに持ち込めれば……そこでカーネフェル王を討つ事も出来たはず。楽にこの国を治めたいっていうのは他の奴の思いであって僕の望みじゃない。それなのにどうして僕はそれに乗った？むしる進んで協力した？

(双陸……)

そうだ。お礼だ。借りを返すために協力したに過ぎない。あいつは略奪者を煽動して遊んでいた僕を忌み嫌い、置いて行ってしまふような男だ。目の前でそんな風に都攻めをしたなら……

(あいつが、そういうの嫌かなって思ってた……)

いや、待てよ。どうして僕があいつの好き嫌いを考慮してやらなければならぬんだ？

怪我の所為できつと疲れてた。本調子じゃなかった。だから何時通りに考えられなかったんだ。そうに違いない。

そう結論づけたけど、須臾の目はまだ僕を見ている。

「其方が怪我をするとは珍しい」

「……っ」

めざとい。流石狂王。目敏い男だ。ていうかそんなに僕のことまじまじと見てたわけ？うわ、変態。

「我を愚弄するでない」

「ぎゃあああ！まだ何も言っていないっ！！」

「其方など新品の高給筆で墨を付けずに足の裏にいるは歌を記す刑に処す」

「ぎいやあああああああ！！ひゃあああああああ！いやあ
ああああ！！止めろっ！！馬鹿っ！！」

くすぐりって大したこと無さそうに見えて実は地味に辛い刑だ。
今度誰かいたぶる時に僕も使ってみようと現実逃避。そんなもので
死ぬわけ無いけど割と本気で死ぬかと思った。僕が涙目になって荒
い息を繰り返していると満足そうなこの男。本当にいつか殺してや
る。

「それだけ叫べれば大したことは無さそうだな」

「し、心配するなら普通に心配してくれませんか？」

照れ隠しで人をいたぶるの止めて欲しい。そんなんだから惚れた
女に裏切られたりするんだよこの男は。

「愚か者が。被虐趣味者に王が務まるか」

「そーですねー」

征服されて喜ぶような阿呆に王は務まらない。隙あらば攻め込む、
征服側に回るのが真の王の在り方だ。攻撃は最大の防御って言うだ
ろう？そういうことだ。だから王は加虐趣味者の方が務まるだろう
ね。確かにそれには同意だよ。だからこそ僕はある男が気に入らな
いのもかもしれない。

(カーネフェル王……アルドール)

あいつは僕を哀れんだ。敵である僕をだ。許せない。許せる事じ
やない。

(王の癖に、王の癖にっ！)

心身共に脆いあの少年王。都は奪ったとはいえまだ生きている。僕らはまだ王手には至らない。王が生きていれば奪回はある。生きている限り愚民共は希望を持つ。その火を早々に吹き消してやらないう。

*

「しかし愚かな」

「うっせーよ」

黒の視線を受けながら、ユーカーは不覚溜息を吐いた。

手を抜いたつもりはない。自分の得物じゃないと我が儘な言い訳を言うつもりもない。どんな得物でも手にしたら瞬時に自分の物とする。使いこなし、乗り捨てて行くのも戦場ではよくあることだ。だから自分が負けたのは、単純に力量の差。悔しいがこの男が剣士として格上だと言うことは認めざるを得ない。

「お前程の剣士なら一度目で力量の差は理解していたはずだ。それでも挑みに来るとは、そこまであの女を逃がしたかったか？」

「別に。好きに解釈しろ」

「好きにしるとはカーネフェリーは大胆だな」

「そうは言ってねえ。俺に触んな」

戯れに伸ばされた手を、べしと払いのける。何企んでやがるんだこの男は。

「やれやれ、身持ちが堅すぎるのも問題だぞ」

「しれっとそういうこと言うなっ！あんた顔と性格あってなさ過

ぎんぞー！」

「なるほど、カーネフェルは男が少ないからお上品にお高くとまっているわけだ。しかしタロツクは違う。我が国では少ないのは女の方だからな。男など無意味に不用意に集まれば基本話が猥談になる。むしろセネトレア方面では日常会話だとも聞いている」

「俺は良いが、俺の同僚達の前でそういうこと言うなよ。あいつらは俺と違って真面目に騎士つてのをやってんだから」

「それで隙が生じるのなら試してみる価値はあるが」

「まさか。さっきの姉ちゃんみたいに逆上されて、攻撃力+されるのがオチだ」

戯れ言はこの辺にしておくか。俺はもう一度溜息。

ここはタロツクの奴らが乗って来たという船の一室。その近の陸地には、こいつの陣営が置かれている。先程あの聖十字にこの男が話していたことから察するに、恐らくこの船に……神子の部下が捕らえられている。ついでに俺も捕らえられているわけだが、この男どうにもやる気がない。得物は勿論奪われたが、縛るくらいしないのか。これでは普通に軟禁されているだけ。

「つーか男物の服くらい貸してくれたって良いだろ。何着替え要求したら当然のような顔でタロツク物の女の服用意してんだよてめえはっ！」

「男の服か……我が軍に加わるなら考えよう」

「くっ……」

何て精神攻撃だ。一瞬頷きそうになった。

「或いは嫁でも構わんぞ」

「お前はどんだけ嫁が欲しいんだよ」

睨みつつちらと奴の方を見れば、タロツクの騎士は俺の片手をま

じまじと見ている。俺のカードが気になるのか。

「ジャックがそんなに珍しいか？」

「少なくとも我が陣営では見ない数値だ。そして11番目のカードには覚醒の可能性がある」

「それ……」

俺は驚き顔を上げた。何故だろう。何事でもない風に呟かれたその言葉は、シャラット領で道化師が俺に言った言葉。それを俺に思い出させる。

“私はね、収穫に来たんじゃないの。種を蒔きに来たの。大きな花を咲かせるために”

ジャックなんて、クイーンにもキングにも負けるカード。無論ジョーカーにもだ。それなのに何故？どいつもこいつも俺に拘る？

俺に知らされていない情報。そこに何か俺が目的を遂げるための決定的な……或いは致命的な何かが隠されているような気がしてならない。

「お前は……俺のカードが何なのか、知ってるのか？」

神子は知っていても多くを語らない節がある。そして俺を嫌っている。

敵の言葉を鵜呑みにするわけにはいかないが、俺はアルドールの阿呆ではない。神子のことは頭から信用は出来ない。あいつがアルドールを思っているのは確かだが、それがこのカーネフェル、ひいてはランスに向いているかは怪しいのだから。

俺は俺の目的のために、情報が必要だ。あの馬鹿に仕えるランスに頼まれたから、ではなく。あいつを死なせないためにも。

「俺は……ジャックには、何か知らされていない特性があるのか？」

「知らないのか？其方の陣営には数術の理解者がいると思ったのだが」

「生憎俺の味方とは言えないんだよそいつ」

「なるほど。王に仕えていないとは本当なのかもしれないな。ならば別に教えても構わないが」

「じゃあ話せ」

「しかしたただで教えるほど俺は優しくはない。そうだな……タロツク軍に加わるか、うちの田舎に荷物をまとめて嫁ぎに来ると良い」「まだそのネタ引き摺るのかよ」

そんなのどちらも領けない話。それでも情報を聞き出すには、どつちかに折れる振りをしなければならぬ。

「つーか、あんた田舎育ちなのか？貴族なの？」

「何故俺が貴族だと思う？」

「じゃねえとタロツク王が傍に置くとはい思えない。……でもあんなの名前の響き、タロツク貴族らしくねえよな」

「ふ……、面白いことを言うな。なかなか目の付け所が悪くない。そうだ、レクスというのは俺の名ではない。唯の役職名のようなものだ」

「役職……」

「他人のために命と同等のものをさらけ出したお前に敬意を称して」

レクスという第一騎士は片手の装備を外す。見せられた掌。現れた数に俺は絶句した。

「初めて見たか？……いや、そんなにキングが珍しいか？」

先程の俺の言葉をなぞるように、男が微笑。勝てねえわけだ。実力の差以前の問題だ。確率的にどうなんだよ。カードは例外を除いて13。基本的に俺より強いのは2枚だけ。俺が勝てないカードに出会す確立より、俺が勝てるカードに出会す方が圧倒的に……。なのはどうして。

最初はクイーンのルクリース。ページのエルス・ザインにジョーカーの道化師に。そして今度はキングだと？ろくでもねー奴とばかり出会ってる。

運命とか神なんてもの俺は信じたくないが、もしそう言う奴があると認めるなら、そいつらが俺を全力で潰しに掛かっている期がしてならない。今カーネフェルでコートカードは俺だけみたいなものだ。協力関係にあるとはいえ、神子はあくまでシャトランジアの人間だ。パルシヴァルはちょっと例外のカード。つまり俺を消費しきってしまえばカーネフェルは危うい。俺の肩には背負いきれないほど重いものがのし掛かっている。

勝てない相手にも負けてはいけない。それでも死んでもいけない。ここから先は慎重に行動しなければ。幸運は彼方にある。あいつが本気で俺をどうしようと思えば、きっと出来る。そうならないのはこの男にその気がないからだ。こいつが本気で俺をタロツクに引き摺り込みたいなら、多分俺の意に反して世界はそう動いていく。

そのはずなのにこの男が、俺を口説いているのは……その前提を覆す力が俺のジャックに秘められているから？

「察しの通り、俺は貴族出じゃない。真純血でもない。そんな俺が今の役職にあるのは偏にこのカードのお陰だ。王は強力なカードを求めている。取り巻きの貴族連中は大抵上位カードしか発現しなかったからな」

「それで俺を口説いてたってわけか」
「半分はそう言うわけだ」

半分。また妙な言い草を。やたら含みがある言葉。その残り半分にこそ、俺が曝きたい情報が隠されているはず。

「でも、ジャックのことをあんたに話したのは、タロットク王じゃねえんだろ？」

「無論。須臾王は数術が何たるかもよくは理解しておらん」

「そいつって……」

「それは先程の答えを貰えるまでは言えないな」

「……っち」

この男、俺に好意的とはいえ何でもかんでもペラペラ喋ってはくれない。それなら質問を変えてみるか。

「あんたが追いかけてたって事は、あの女もカード……それもコトカード。……クイーン当たりか？」

「……」

沈黙は肯定と受け取る。その上で俺は話を進めた。

「それより格下の俺があいつを逃がすのを止めなかつたってことは、俺のカードには女王を上回る秘密があるってことだよな？ あんたはそれを知っている。そういうことだろ？」

「まあ、そういうことだ。彼女を逃がすことでお前が逃げる術は失われた。それは俺にとっても好都合」

「食えねえ奴……」

「生憎俺が食べ得る側なのでな」

「そういう意味じゃねえよー！」

「こうやってすぐ場を茶化するのは、本題から逸らさせるためなのだろう。段々こいつのやり口が解って来た。もう簡単に踊らされたりしねえからな。」

「エルス＝ザインは俺を気にも留めていなかった。つまりあいつはこの件に関して全く知らない。タロツクには他に数術について理解している勢力があるって考えていいわけだな？」

「あの子鬼は須臾王のお気に入りが、所詮は異形の独学。教会数術の知識は皆無」

「……そういやタロツクはシャトランジアと国交ある時期があったな」

その時に数術の知識を取り込んだ一団が居た。それに連なる人間がタロツク軍の中にいる？

（だが、そいつらが王に数術のことを教えないのは妙だ。隠している？それに何の意味がある？）

考え込む俺に、男は口を開いた。

「生憎だが俺の仕えるタロツク王は彼ではない。俺にジャックの話をしたのは俺が仕えるタロツク王だ」

「……え？そ、それって……」

さっきまで言わないと言ったことをさらっと口にする。その変わり身の早さに呆気にとられる暇もない。押して駄目なら引いてみる。引いて駄目なら押してみる。その方向転換に俺は振り回されている。戸惑いで訳が分からなくなっている間に更に訳の分からない情報を寄越され、俺の混乱は深まる。

「毒の王家の血はまだ途絶えていない」

「嘘だ……残ってるのは王女だけだろ？王子は二人とも処刑されたはず。その王女が嫁いだ先のセネトレアの王も死んだ」

「……やけに詳しいな」

「……まあな」

タロツク王族が近親婚を繰り返すのにはわけがある。毒の王家と称されるように、毒に冒されたその身体は外の者には猛毒だ。

毒の王家の女に子を産ませられるのは並大抵の男では無理。同じ毒の王家の男でなければ不可能とまで言われている。しかし王子は二人とも死んでいる。

(毒の王家の……刹那姫)

長い黒髪、艶やかに笑むは妖艶な美女。

あの男、狂王の娘。同じだ。漆黒の髪に深紅の瞳に真純血タロツクの姫。あの男ほどではないが彼女を見たとき、俺は唯ならぬ恐怖を感じた。背筋が奮える程の美しさ。それでも、それでも……とてもじゃねえ。俺はあれを女として見られない。あれは化け物だ。あまりの恐ろしさにガタガタ奥歯が奮えた。半年前を思い出す。

*

それは突然。任務の報告のため城へ戻った俺の前……一枚の封書を手に俺が仕えた人は現れた。綺麗な金髪をふわりと舞ってにこりとかの人は笑う。

「お帰りセレス！」

「ぎゃあああ！おっさんどっから現れたっ！」

でも現れるにしたってもつとやり方つてもんがあるだろう。その人はいきなり床下から現れた。俺が通りかかる一瞬を見計らい床の石板を持ち上げて。

「驚いた？」

「驚くわボケっ！」

「いやだって最近お前は私に冷たいじゃないか。私を避けようとするし、寂しいんだよ。反抗期かい？お前もそんな年になったか。いや感慨深いものだね」

「違うっ！あんたが慎みがないからだ！俺みたいなのにくつつくな！抱き付くな！そうやって俺ばっか構うな！遊ぶな！あんたのお気に入りみたいに勘違いされると俺への風当たりが辛くなるんだよ！」

いろんな奴からそれはそうだが、それは俺は気にしていない。風当たりが冷たくなって俺が凹む相手は一人。……敢えて誰とは言わないが。

「事実、お気に入りだから仕方ないじゃないか」

「そんなら他のお気に入りにもそうしてやれ」

「そうしたいんだけど、みんな避けるの上手くなって来て私も困っているんだ。その点ユーカーは抜けてるところがあるからこうやって脅かせば一発だ」

「あんた脅かすのが目的なのか？俺に抱き付いて遊ぶのが目的なのか？」

「二兎を追う者は一兎をも得ずとは言っらしいけど実は私の目的はその両方だ」

「もつと違うことを追えよあんたは。その気になれば他にやること幾らでもあんだろ」

「ははは、やっぱりお前は何時までも無邪気で可愛いね。その顔が見たかったんだよ、うんうん。懐かしい。半年ぶりくらいだろ？もう少しこまめに顔を出しなさい。おじさんは寂しいです」

よくもまあ。こんな俺を見て無邪気と言えたものだ。あの人脳味噌半分腐ってんじゃね？無邪気なのはあんなの方だよ。

ふて腐れる俺の髪をわしゃわしゃ撫でながらあの人は愉快気。俺の通る道を予測し床穴掘ってまで身を潜めて待つなんて何てこの人は阿呆なんだろう。幾ら暇だからって……

「つたく。こんなことのためにこんなことして。こんな阿呆なことでバレたらまた連中に文句言われるぜ？」

「お前が久々に帰ってくると聞いてね。これはやるしかないかな」と

「馬鹿かあんたは！」

「いやいや道化王もねえ、時々こうやって馬鹿なことをしてあげないと反旗を翻す算段でもしているのかと邪推されるんだよ。こうやって本当に馬鹿なことしか考えてませんってアピールしてあげないと」

「俺以外を出汁にしてもいいだろうに」

「お前が一番良い反応をするんだよ。ランスやトリシユは頭が固いからなあ……本気で固まられた時、滑ったんじゃないかと思うと私もどきつとするんだ」

「ランスの阿呆のツボは変わってるからな……」

それなりに理解したつもりで居る俺でもたまに、何でここで笑うの？って思うことがあるあいつに関しては。

「あ、そうそう。そんなことよりさ！息抜きにちよっと遊びに行かないか？仕事熱心なお前を労い私が旅行に連れて行ってあげよう

「はあ！？おっさん何言って……っっていうかセレス呼び止めるっ
て言っただろ！大体あんたがそう簡単に外に出られるわけ……ま
た連れ出せって言うのか？無理無理！ランスの阿呆に俺がとっちめ
られる」

「ははは、あのだねユーカー。そういう訳ではないんだよ今回は」
ひらひらと見せびらかすように振られた手紙。それを彼は俺へと
手渡した。

「招待状？結婚式？」

「セネトレア王が婚礼の儀を挙げるそうだね。それで私の所まで
こんな物が届いたらしい」

「セネトレアつつたら……」

「ランスは連れて行けない。解ってくれるかな？」

「それは解る。けどよ」

あいつが強いつて言っても、あいつは世間知らず。ある意味俺以
上に。

それにあいつは稀少なカーネフェルの男。おまけに真純血。俺み
たいな欠陥品じゃない。魔物の巣窟みたいな場所に放り込めない。

「俺は問題なくてもおっさんだつて、危ないんじゃないの？」

「私はもう若くないから大丈夫だよ。その証拠に妻さえ私を寢所
に入れてくれなくなって早何年。いや、嫌われたものだね」

「三十路程度でそんな春の枯れた耄碌爺みてえな事言われても……
あとそついう夫婦間の不和を自慢げに語るなよな。自虐ネタ好き
だなあんた……」

「それに私に何かあったらお前が守ってくれるんだろう？」

馬鹿なこと言ってたと思つて油断した。そうやって一瞬にして俺の内側に入り込む。何もかもあんたに持つて行かれてしまふ。悔しいがおっさんの俺より上手だ。

惚れた弱みつて言葉があるが、敬愛でも主従間でもそれはある。このおっさんは俺をお気に入りと言つてくれて少なくとも俺を嫌つてはいないというかこんなこと恥ずかしいから言いたくないが好いていくれる……が、それ以上に俺がこの道化王に魅入られてるってことなんだろう。どうせ俺もランスの阿呆と同じだ。この人が大好きなんだよ俺も。それが解つててこうやってこの人、ほんと道化だよ。

アルトのおっさんは本当に、俺の使い方が上手いんだ。そんな風に微笑まれたら、俺が断れないのを知つていて。

「つたく、ついていけば良いんだろ。わかつたよ。それで……いつ出発なんだ？」

「今日」

「早ええよ！俺まともにランスと話も出来ねえじゃねえか！それでこれつて俺また怨まれるっ！」

「大丈夫だよ。どうせ話す時間があつてもお前達喧嘩ばかりじゃないか最近は。これ以上ギスギスしたくないのなら互いの頭が冷えるまで距離を置くのも大事だぞ。そう、私と妻のように」

「あんたが言つと説得力あるようであるでねえ……」

そうやってあんたは俺ばかり連れ回すから、あいつと俺はまた溝が深まる。たまには逆にしてくれよと言いたいが、今回はやはり俺が行くしかねえ。

何故だろう。その時ばかりは珍しく都貴族共も王の外出の邪魔をしなかった。王の不在にまた国庫から金楠ね取るかるくでもない法でも作るんじゃないの？心配でランスに目を光らせておくようには言つて置いたけど、王と一緒に出かけ俺をあいつは羨ましそうに

恨めしそうに見ていたな。あれはあの人がお前を信頼してないからでも、信用してないからでもないんだ。お前を心配して、信頼しているからこそ。それをちゃんとあいつは理解してないんだろうな。

「……にしても何だよこの国は」

初めて国の外へ出た。仕事だって解つてても年甲斐もなくはしゃぐ心があつたのは確か。

船旅は久々だったし、世界貿易の中心地だけあって、そりゃあ凄い。カーネフェルみたいな片田舎とは全然違う。あつちは都だつて木々や水辺が目に入るが、こっちは城へと繋がる表通りと言う大通り……そこから五本の通り。さらにそこから分岐する細い通りが幾つもある。そのあちこちに建物と店……見たこともない商品が立ち並ぶ。頭がくらくらする。

「セレスセレスー！向こうのあれも食べに行こう！やっぱりセネトレアに来たからには行列の出来ると噂のラーメンと餃子と炒飯とダックを食べに行かないと駄目だと思ふんだ。デザートは胡麻団子と杏仁豆腐」

「あんただんだけ買い食いするつもりだ！そんなに俺に金使わせて楽しいか！？」

「ははは、ごめんごめん。後で返すよ。そうだな後はそれからこの露天でかき氷と林檎飴とたこ焼きと焼きトウモロコシとお好み焼きと……金魚すくい？これは食材ゲットイベントなのかい？」

「俺のトラウマ穿り返すな！金魚は食うな！主に餌え！死んだらちゃんと埋めてやれ！」

溢れかえる人混み。ていうかもはや人塵。はぐれないようにと俺の手を放さないおっさんもどうかと思うが、事実これ一度はぐれたら見つけ出すのは不可能に近い。釈然としない物があるが渋々それ

を許容する。

「しかし……噂には聞いてはいたが、私も来るのは久々だな」

「久々？ていうか食いながら喋るな」

「以前はここまででもなかつただけだなあ……」

前に来たのは今代のセネトレア王の即位の時だという。もう20年近く前のことらしいからこのおっさんが今の俺と同じかそれよりもっと幼いかの時分だろう。もしかしたらパルシヴァルくらいの時かもな。その頃この人が見たセネトレアはもつと違う物だったという。

「あの頃はここまで奴隷貿易が表立っていなかったし……私の目に映るのはこの国のきらびやかな所ばかりだった」

「おっさん……」

「こらこらセレス、今はお父さんと呼びなさい。変装中だよ？ちなみにお父様でも可」

「だが断る。俺までこんな格好させやがって」

「私はもう年だけとお前はまだまだ若いからね。もし可愛いお前が誘拐でもされたら私がランスに怨まれる」

護衛とは名ばかり。あんまり表立って大勢で出かけると目立つし観光が出来ないと、王は護衛を俺だけにしてしまった。その俺も欠陥品とはいえ若いカーネフェルの男。奴隷商の目についてはいけないと無理矢理女装させられた。ランスが居なくて助かった。この年でこんな姿見られたら恥ずかしくて死にたくなる。

俺を連れて来たのってまさかあれか。欠陥品だからじゃなくてあなたの取り巻きの同僚達の中で俺が一番幼かったからか！そうなのか！？

(くそ、……そりゃあこんな危ねえ所にパー坊なんか連れて来られねえけどよ)

怖くて聞けない。聞いて頷かれたら俺ちよつと人間不信になる。なりそう。

(……しかし楽しそうだなおっさん)

なんだかんだで久々の自由を満喫している？俺と親子ごっこをするのが楽しいのか？わかんねえ。

ほんと、邪気のねえおっさん。いつまで経つても子供みてえな人だ。そんなんだから王妃様に愛想尽かされるんだよ。このおっさんが王妃様相手にムーディな大人の雰囲気色気醸し出す図が俺には容易に想像出来ない。たぶんやってやれないこと無いんだろぅがやる気がないんだろぅこの人。そんだんだからまだ世継ぎの一つにも恵まれてねえんだ。寝所シャツアウトはこのおっさんのいつもの道化っぷりがいけないんだ。びしつと決めれば格好良いのにそぅいう見せ場をわざと作らず阿呆なことばっかり前面に出す道化っぷりを発揮してるから……やれやれだ。

こんな浮かれたおっさんを見てみると、やっぱり子供とか欲しいんだろぅなと思うんだが、その肝心の子供作る気が無いのがどうしようもない。手に負えない。俺やランスみたいな部下を子供代わりにして遊んで満足してるからいけないんだよこの人は。そりゃあ俺だつて……別にこぅいうの、嫌じゃないけどさ。むしろ嬉しいけど、それじゃあ駄目じゃないか。俺がこの人を嬉しがらせないといけないのに、俺がそうされてどうするよ？この浮かれ具合が全部俺のための演技とか、そぅいうこともあり得るわけだ。俺は手放して喜べない。喜んでちゃ駄目だ。もつとこの人のために……

「……あの頃よりももつとこの国は豊かになった」

「おっさん？」

小さく呟かれた言葉。それに俺は顔を上げた。

「しかし何故だろうね。あの頃よりこの国の人々は心が貧しくなつたように私には思えてならないんだ」

「……………」

「こんなこと私が言つてはならないんだろうけどね、私は別に私の国が豊かにならなくても良いと思つているんだよ」

人の心が荒むくらいなら、多少国が遅れていても構わない。それを他国に馬鹿にされても構わない。自然豊かなその国土。温暖な気候と豊かな実り、美味しい食い物、広い土地……そこに暮らす人々が笑顔で居られるのなら、それ以外に一体何が必要か。俺の王は疑問を抱いていた。

「けれど、そんな気持ちが侵略の隙を与えてしまうのなら……辛いことだなあ。私は私の民に貧しさを教えなければならぬのか。心貧しい者になれと言わなければいけないのか」

タロツクは豊かな資源を食料を求めて攻めてくる。気の良いこの王は、多少の食料なら支援してやったことだろう。それで戦争が侵略が無くなるのならと。

だけど相手はそれを裏切る。貰うもの貰つといて、まだ貰い足りない。カーネフェルという土地が諦めきれない。恩を仇で返すようなこの世界。良い奴ばかりが損をする。

それに今日のカーネフェルの腐敗はタロツクだけの侵略でもない。攻めてくるタロツクとやり合うためには此方もそれ相応の軍事力が必要で、そのためにはセネトレアから武器に防具に船にいろいろいな物を買わなければならなくて。

カーネフェルで作っても良いんだがのほほんと畑耕して暮らしてきたカーネフェルにそんな知識はない。技術もない。材料だけ合っても意味がない。だからそれを売って商品を買う。だけど足下見られて底値で買われる。戦えば戦うほど貧しくなるという矛盾。それでも買わなければ唯奪われるのを指をくわえてみることしかできなくなる。シャトランジアは中立を頑なに守りそんな友好国を援助してもくれない。

「私には金勘定の才能がなくてね……戦うことしかして来なかった」

王が生まれ育った頃は戦争の真っ直中。幼少からそればかりを教えられてきた人だ。休戦がなった今は本当にお飾りの王。それでも優しい人だから、戦わずに守る方法が有ればそれに越したことはないと身を引いている。その信頼を都貴族共は裏切った。親父のしたことを絶対に肯定はしねえけど、この人を大事に思う瞬間だけは、あの男と気持ちが重なってしまうような感覚を俺は知っている。

どうすることも出来ない。それでもどうしようもない現状に激しい憤りを感じている。俺もこの人と同じで戦うことしかできないから、だから小難しいことはランスに頼りつきり。戦う以外でこの人を支えられる才もない。傷付けることでしか何かを守れない自分の能無しっぷりが時々嫌になる。

「私はこんな繁栄は望まないが……民はそれを望んでいたのだから。時々わからなくなるよ。民の声が私には聞こえない。ここ十数年で彼らの声は随分と変わってしまった。今では若いカーネフェルの女の子は、人がお金をしか見えないらしい……悲しいことだね」

あの人がそんなことを言い出した時……俺達は城の前の大きな通りに差し掛かっていた。そこは通称奴隷通り。

俺の手を掴むあの人の手、震えている。見上げればあの人が泣いていた。とても、悔しそうに歯を食いしばり。そんな辛そうな王の横顔に、つられて浮かんだ涙を俺は必死に飲み込んだ。

「新商品入ったよ！よ、奥さんお目が高い！こいつはなかなかの上物ですぜ？」

「困ってよし！養子にするもよし！正午からオークションがはじまるよ！掘り出し物盛りだくさんの奴隷オークション開催だ！」

「混血奴隷は勿論、今回はレアなカーネフェリーの少年奴隷も仕入れてきたよ！おまけに更に価値ある青目と来た！これは買いたげご主人様方！」

「こつちはタイムセールだ！タローク男、カーネフェリー女1ダース1万シエルのところ、今回は2ダース！タイムセール開催中！肉体労働、工場奴隷何にでも！休息給料食事も要らねえ！使い捨てにもってこい！さあ！買った買った！」

略奪で？戦争で？それとも密貿易で？入手経路はわからない。それでも目の前で連れられているのは確かにこの人の民で、守れなきやいけない相手で……出来ることならこの場で剣を振り上げて、何もかも殺し尽くして救いたいのに。法が世界が許さない。そんなことをすれば、カーネフェルが攻められる理由になる。もっと多くの民が泣く。

明らかに悪いのは彼らをこんな場所に連れてきた奴ら。それなのに、ここはセネトレア。常識が通じない。彼らを救うには金！金が必要だ！

「いいか、おっさん。これは氷山の一角だ。あんたが金を出して救った金で奴らは船を動かしましたあんたの民をかつ攫いに来る。奴らの金の流れを止めない限り、これはずっと続く。それは解ってんな？」

「……………」
「あんたがすべきことはここで奴らを救う事じゃねえ。国を世界をその腐敗を変えること。そうだろう？ 第一あんたには立場がある。目立つ言動は控える。他国に舐められたら弱みを握られたらお終いだ。それ以前にあんたは今財布持って来てねーだろ、危ないからって隣町で待機してる財布係が持たせなかった」

「……ははは、あんまりにもお前の言葉が正論で……泣けてくるよ」

王とは斯くも無力な物なのか、あの人はそう言っただけ泣いた。その様子に俺は溜息。

「おいこら、そこのおっさん」

何も変わらないとは知っている。それでもだ。俺は……どうせそこまで金に興味ねえ。人殺しでもらった給料、そんな汚い金で救える奴がいるなら溝に捨てるよりはマシだろう。

「そのの奴隷、買ってやる」

俺の手持ちの金じゃ、残念ながらカーネフェルの野郎奴隷を買うだけの金はない。

元々多売で儲けてるんじゃない、このダース売りの奴隷はその運送費用で儲けてる。運ぶ送料は別途にかかる。買えば買うほどまあ、その分高く付く。それでもだ。何億、場合によっちゃ何十億って掛かる混血奴隷やカーネフェリーの野郎奴隷に比べれば、その足元にも及ばない。つまりだ結論、俺でも買える。

「そののタイムセール、全部俺が買い占めた」

「へい！まいどありー可愛いお嬢ちゃん！いやこんなにタローク

の男買ってどうするんだい？取っ替え引っ替えて火遊びかい？若い
のにお盛んだねえ」

「阿呆か」

「ああ、そつちか！ひひひ、こんなに同族の女買ってどうするん
だい今夜はお楽しみですねとは言わないでおこうかい？」

「馬鹿か。俺はそいつら全部寄越せつつたんだよ。運送費用は
これくらいあれば十分だろ」

「つたく、半年分の給料がパーだぜ。俺が落とした金を見て、奴隷
商は途端に畏まる。」

「え、ええと可憐なお嬢さん、配送先のご住所は？」

「カーネフェル北部アロндаイト領まで」

「カーネフェルのアロндаイト！？そ、そいつはまた……どうぞ
今後もご贖身に！」

配送手続きを終えた俺に、おっさんはぼかんと開けた口をようや
く閉じた。感謝の言葉でも出るのかと思っただらおっさんちよつと笑
い堪えてる。失礼な。

「何故にランスの実家に」

「仕方ねえだろ。うちの領地なんか送ってもあの馬鹿親父に悪用
されんだろ。向こうで畑でも耕す手伝いさせる」

「それならヴァンの奴も違う意味で心配だな」

「だから男奴隷も買ったんだ」

「……だけど、ユーカー……」

「あんたがやるのは唯の自己満足でエゴだ。だけど俺がやるのは
自分勝手だ。唯の気紛れだ」

「実際唯の気紛れだ。このおっさんがあんな顔しなけりゃ俺はこの

まま通り過ぎていた。

それでもこれはこの人への尻叩きくらいにはなっただろう。こんなことがもう無いようにと、国境警備を強めることを考え何とかどうこうしようと足掻いてくれるはずだから。

ちらと仰ぎ見れば、あの人が涙を拭って少し……悲しそうに、それでも少しは嬉しそうに笑う。

俺の行動それで世界の何が変わったわけでもないし、この人を取り巻く現状が変わったわけでもないのに……救えていない相手も多いのに。でもまあ、この人が泣きやんでくれるなら給料半年分放り投げる意味があったとそう思う。

「んなことより、さっさと城行くぞ」

俺はおっさんの手を引いて城へと急ぐ。あんまり長居して目立つのも困る。

城門から城までは今日は一般開放されているのか結構人で賑わっていたが、城の警備は厳重で手紙を見せてようやく中へと招かれる。そのきらびやかな宮廷。カーネフェルの城より無駄に豪華。大理石の回廊。進んだ先に待っていたのは……

*

「おい、少年以上青年未満の女装騎士君」

「はっ……」

俺はレクスにぺちぺちと頬を叩かれ我に返った。

セネトリア女王のことを思い出そうと思ったのに、おっさんとの思い出に耽っていた。あの人キヤラ濃いんだよ。だからその所為だ。未だにあの人の言動一つ一つが俺の中に残って消えず、色あせないのは。

いつそ忘れられたら楽なのに。そうすれば誰ともあの人を比べずにいられる。アルドールに苛立つこともないのに。

「あ、ああ。セネトレア女王の話だったな」

あいつは恐ろしい女だ。だけど、あの人と一緒にだったから。それを思い出すと……タロツク王と対峙し、あの人に助けられたことを強く思い出す。罪悪感に胸が痛むが、あの人優しさに触れ……温かい気持ちもあふれ出る。だから先程までの恐怖は和らいだ。

それでも二度と会いたい相手ではない。タロツク女王、刹那というあの女。年は俺より上。ランスよりも少し上だろう。

婚礼開場では取り繕ったような微笑を湛えていたが、染みついた血の臭いは隠せない。普通の人間ならわからないだろうが、戦場を知る俺にはあの女から立ち上るそれと剥き出しの殺意に心底脅えさせられた。

人を殺すことを何とも思っていないような目。違う、人が人に見えない。違う、そもそも人という概念があの人の中にはない。そんな異常な世界の在り方を映した赤い瞳に打ちのめされた。

セネトレア王の正妻。それならまだ良い。恐るるに足りない。あの人もそう言った。彼女を娶ったセネトレア王だって据え膳だ。どんな極上の美女でも一度でも手を出せば精神を病み、それでも抱き続けられればいつか死ぬ。それだけの猛毒を飼っているのだ。だから交わったところで世継ぎは生まれえない。絶対に。

あの人危惧したのはタロツク側の思惑だ。その政略結婚に何の意味があったのか。

セネトレアとタロツク間の連携を強める？それともタロツクのセネトレア侵略？現にセネトレア王は先月死んだという話。破落戸に暗殺されたということだが、深層は定かではない。だってそれで得した人間はあの女。

無理難題のような婚姻条件に乗っ取り女の身でありながら、セネ

トレア王位をぶん盗った。自分との間に世継ぎが生まれる前に王が死んだ場合、王亡き後は玉座を譲れというその言葉から、彼女は王妃から女王になった。シャトランジアの神子が俺達カーネフェルに協力する用になった背景にはそれが関係しているのだろうなとは思った。世界の均衡が揺らいだ。だからこそ、神子はそうしたんだ。

「王女の実兄と異母弟だったか？王子は二人とも死んだ。セネトレア王は死んでその間に子供はいない。タロツクの姫に子を産ませられる男はもう何処にも……………いや、精々タロツク王くらいなもんだろ？」

いくらタロツクとはいえ……………兄弟間の近親婚は幾らでも聞いたことがあるが親子間の近親婚は聞いたことがねえ。第一仮に孕ませられたとしても、次代は怪しい。タロツク人の女が生まれる確立は低い。低すぎる。男しか生まれなくていう可能性は十分にあり、その場合そこで毒の王家は断絶する。

「だが、まだ終わらん。実際彼が殺されたところをお前が見たわけではあるまい」

その口調。やけに自信の宿るその言葉に、俺は一瞬怖じ気づく。何かとんでもないことを教えられているような、そんな気になった。

「わかるか少年、カーネフェルは完全に少年王一人しか残されていない。しかしタロツクはそうではない。須臾王がこんな前線に出てきた意味を考えろ。背水の陣のお前達側とは意味が少々違うのだ」

カーネフェルはアルドール一人。今あいつには妻がいねえし、娶ったところで……………世継ぎを生ませられるか怪しいところ。時間が足りない。そう、実質カーネフェルのはもう……………アルドールしか居な

いのだ。あいつが殺されたら……カーネフェルはお終い。ランスの希望も潰えてしまう。

「狂王亡き後は新たな王が現れる。つまりカーネフェルの騎士……お前達が血眼になってタロツク王を殺そうとしたところで無意味と言うことだ。……彼は良き王であり、民も須臾王ではなく彼を選ぶことだろう」

「そ、そんなの……何で言い切れるんだよ！？カーネフェルだってまだ終わりじゃない！」

「カーネフェルは滅ぶ。沈む国と運命を共にするだけ価値が、お前にはあるのか？」

断言された。その言葉が重たく俺へのし掛かる。信じたくないのに、それが肌から俺の中へと入り込んで俺の思考を支配していくみたいで怖い。有無を言わせぬ迫力が、男の言葉にはあった。絶対の確信。それをこいつは持っている。そしてそれは俺が知らない何か、重大な……何かなのだ。

「そ……それは」

「勿論しがらみはあるだろう。お前は優しい目をしているからな」

「っ……な、何勝手なことを！勝手に決めつけるな！俺は凄く冷酷非道な」

「そう吠えるな。しかし偽悪を演じてまでお前が守りたい者とは何か、少々気になるところではある」

その言葉に俺は黙り込む。喋れるはずがない。自分の弱みを敵に知られるわけにはいかない。

(っーかこいつ……)

どうしてそんなに俺のことが解るんだ？解ったような口を利くんだ？

訝しげに見上げる俺から目を逸らし、そいつは妙なことを言う。

「俺には一人妹がいてな」

「……は？」

「かなり可愛がっていたのだが、狂王に殺されてしまった」

その言葉の節から、こいつが狂王を憎んでいることが伝わって来た。タロツクにいるのは須臾王を殺すため……レクスはそう言っているようだった。

「お前はその妹に似ていてな」

懐かしむように手を伸ばされる。

「目も髪の色も違うのだが、不思議とそう思った」

頬に触れられたが、振り払えなかったのはそんなことを言われたからだ。そんな俺を笑いつつ、男は俺から手を放す。

「殺さなかったのは、そういうことかよ！い、戦に私情を持ち込むような奴に俺が負けるなんて……」

「私情無くして人間などやっていられるか。人が人たる証拠だらう？むしろ俺は機械的な人間こそ信用出来ん。うちにも何人かそう言うのがいてな、ああいう堅物とは一緒に酒も飲みたくない」

「お、俺は嫌だね。そんなわけわかんねえ見ず知らずの相手に仕えられるか！それならお前がこっちに……」

そつだ。ここでキングを手に入ればこの戦い、心強い。ランス

への負担も減る。タロツクがこの男が俺を欲しがるように、カーネフェルだって俺だって……こいつが欲しい。

「生憎俺にはもう王が居る」

だがお前はまだ王に仕えてはいないのだからと言われ……これも否定は出来なかった。

「今のカーネフェルは烏合の衆。幼き王にこの大国が収められるとは思わん。舐められるのがオチだ。いずれ荒れるぞこの国は」

「カーネフェルが……？」

「俺が思うに決定打は我が国ではない。カーネフェルはカーネフェル人によって滅ぼされる」

「……っ」

否定できなかった。都の腐敗を見るに、その言葉は真実だ。

誰も自分のために生きていて、国を愛する心なんか無い。俺だってそう。誰のために俺はカーネフェルにいる？そのエゴは、俺の大嫌いな都貴族達と変わらない。

「だからお前はそこにいるべきではない。その力はお前を破滅に導く。いずれ利用され、使い捨てられる」

「全員が全員そんなわけ……」

「いや、断言しよう。全て者がお前を道具にしか見なくなる。お前が守ろうとしている者さえも」

そんなの、信じられない。信じたくない。だって俺は今……そんな風に見られていない。神子とランスはそういう所があるかもだけど、少なくともアルドルとかトリシュとかパルシヴァルは俺をそんな風には見ていない。

あいつらまでそんな風に俺を見るようになるなんて……にわかには信じられない話だ。

(でも……)

絶対にないって言い切れるのか？あのランスでさえそうだったのに。昔はあんな風に俺を見なかった。昔のあいつなら俺が死んだら泣いてくれたんだろうが、今のあいつにそんなことは多分あり得ない。

万物は流転する。変わらないものはない。俺だって多少は変わっているはず。それでも掲げた大前提が変わらないから……取り残されていく。

「だが我が王はそのようなことはしない。カード全てを殺す気もない。あの方はカードを消費せずに願いを叶えるおつもりだ」

「……う、嘘だ」

「嘘ではない。あの方を見ればきつとお前も理解する。王の器、使えるべき主というのを見せてやる。俺と共に来い、お前は死なせるには惜しい男だ」

死なせるには惜しい？そんなこと、言われたのは初めてだ。幾ら身内に似ているからって買いかぶりじゃないのか？

「お前に本当の王というのを見せてやる。……そのためにも早くこの国を平定しなければな。それまでお前は捕虜だ。身の振り方をゆっくり考えてみると良い」

「俺は……」

耳元で囁かれた、言葉に俺は絶句した。その一言は俺の思考を吹き飛ばし、停止させるには十分過ぎた。

「お前は道化師の種だ。お前が開花するまで俺がお前を守ってやる。」

その時お前がどこの国を選ぶのかわからんが、その時はその時。そうならば俺を殺せるかもしれんぞと、男は不敵に笑っていた。

15: Scio me nihil scire. (後書き)

タロツク王とそのお気に入りと、前カーネフェル王とそのお気に入りの話。どっちのおっさんもテンション低いんだか高いんだかよくわからない。

他の部下相手だと違うテンションなんだろうけど、お気に入りの前でははっちゃけてますね。片や死んだ(殺した)子供、片や(奥さんと部下の浮気に身を引き)授からなかった子供。どっちも自分の子供重ねてるんだろうけど。

遠くで誰かが呼んでいる。

ぼんやりと霞掛かった意識の中、僕を呼ぶ声がある。

だけど咽につつかえた小骨のように、感じる違和感。それは何故だろうか？

ああそうだ。それは名前だ。

彼女が僕を呼ぶそれは、僕の名前ではないのだ。

そこまで思い、俺は目を見開いた。辺りを見回す。ここを俺は知っている。

一面の白景色。カラカラと回る音。

起き上がった俺のすぐ傍で、糸を紡ぐ美しい女性。その姿に思い出す。これは夢だ。以前も見た、夢に似ている。

以前はこれが夢だと気付けなかったから、彼女の顔までにはよくは覚えていなかった。記憶力しか取り柄がない俺が、意識すらしなかった。後から思い出せたのは、彼女の赤い唇だけ。後は服も髪も目の色も俺は思い出せなかった。

それでももう一度見てそれがその人だとは解った。外見ではなく、それは雰囲気的なものだろう。だって彼女は以前より……若返っている気がするのだ。以前の彼女は20代半ばくらいだった用に思う。それが前半くらいの印象。女性というか少し少女らしさが感じられるのだ。他に変わったこととは言えば、彼女傍には紡がれ終わった生糸の束。それが幾つも積み重なっている。それは以前より数が多くなっていた。

“……………貴方は不思議な子。生きたままここを何度も訪れる人間を私は他に知らない”

そんな言葉一つにも感じることもある。以前俺に、優しい声で残酷なことを言った彼女。優しい声色、それは一見好意的に思える。だけど何故だろう、その残虐性が少し増したような気がするの。

“ 貴方は零の人間でしょう？ ”

零？零の数術使いという意味だろうか？それなら確かにそうだけ

ど。
“ それでも貴方からは懐かしい昔を感じる……貴方は一体何なのかしら？ ”

彼女は少し考え込む素振りを見せて、まあいいやと言うのだろうか？どうでも良くなったように小さく笑った。

“ あれから少しは色を、意味を……名前の手がかりを貴方は見出しましたか？ ”

まだ実体は掴めない。だけど輪郭には触れている気がする。
俺は頷く。だけど何故か彼女は俺を鼻で笑うのだ。

“ 貴方は青。まだ貴方は青。貴方は何も知らない ”

“ どういうことですか？ ”

“ 人の子よ。貴方は人を愛したことがありますか？ ”

彼女が指差すは、穴の空いた繭。

“ わぁ！ ”

繭から生まれることが出来たのか。数匹の蚕……その成虫がそこ

にはいた。

“可愛いなあ……”

初めて見るその虫に、俺は好奇心を掻かれた。本で見たことはあつても実物を見たのは初めてだ。

人に近寄る性質があるとは聞いたことがある。人なつっこいその虫に、俺は浮かれて観察をする。そんな俺を彼女は観察しているようだった。

しばらくすると俺の指を上っていた虫たちは、何かに呼ばれるように俺の指から離れていく。

“あれ？”

“何も彼らは貴方と遊ぶために生まれてきたものではありませんよ”

驚く俺に彼女は小さく溜息を吐いたよう。

“彼らは愛し愛されるために生まれたのです”

彼女が再び示す先、気恥ずかしくて目を背けた。だけど彼女は見ると言う。それは意味あること。それは美しいこと。彼らの生まれて死ぬ意味なのだ。

だからといって虫の交尾の様子をまじまじと観察なんて出来ない。何だか邪魔しているみたいで気まずいから。そっとしておきたいという俺に、彼女は目を逸らすと言う。

“少年よ、貴方も同じです”

“え？”

“少年王よ、お前も同じです”

突然の言葉に戸惑うと、彼女は言葉を改めた。

“彼らの一生はあまりに短い。生まれて恋をするまでの時間のなんと短いことか。……或いはそれは恋などとは呼ばないのかもしれない”

それは恋ではなく愛というものに違いないと彼女は言う。

“お前も同じです。お前の一生も長くはありません。お前は失った恋を新たな恋で癒す時間すら与えられない。それでもお前は愛さなければなりません。それが人であり、王の役目なのです”

“……………俺は”

そうかもしれない。俺には時間がないのかも知れない。それは決して間違っではないけど……

“俺はそんな中途半端な気持ちで誰かをそういう好きになったりしたくない。それに……いきなりそんなこと、考えられないよ”

“考えられないのではなく、お前は考えたくない。考えようとしていないだけではないのですか？その虫も同じです。羽の意味も忘れてしまった。空の色も覚えていない”

それでもお前は男か、この欠陥品めと詰られているような気がした。

“だってそんなのおかしいよ！そんな風に誰かを手に入れたって必ず誰かが不幸になる！”

本能だとか欲望のまま、他人に言われるがままにとか。そんなの変だ。

イグニスやギメルはそういう欲に冒された人間の所為で生まれた。イグニスはそんな自分の出生を呪っていた。ユーカーは家の道具になることを嫌った。それで家を飛び出し、アスタロットさんを失った。

愛の始まりは恋であるべきだ。それも正しい手筈を踏んでの恋だ。でなければきつと誰も幸せになんかなれない。

“俺は王だ！カーネフェルの王だ！俺の仕事は人を不幸にする事じゃない！その反対になりたいって俺は思ってる！”

“子も残さず死ぬ王が王と名乗るか、滑稽な”

“それでもそんなのおかしいよ”

嗤う彼女に、静かに俺は目を伏せる。

“俺は何も出来なくて、俺は誇るものなんか何ももってなくて……大人の言うことだって解らない”

金と地位に固執する都の貴族の言い分や……ユーカーを深く傷付けたセレスティン卿の考えや、ランスの心を抉るアロンダイト卿の行動も。今の俺にはとてもじゃないけど納得できないことばかり。

そういう人達が大人だというのなら、俺はまだまだ子供。そして……そんなものが大人だというのなら、俺は大人になんかなりたくないと思う。そんな男が親に何てなれるものか。俺はどういうものが親というものなのか、正しく理解もしていないのに。

“あのさ、貴女は間違っているよ。人は恋をするためにでも愛し愛するために生まれて来たんじゃない”

俺の言葉に美しい人は笑みを消した。じつと俺を観察する目がギロリと光る。

“人は幸せになるために生まれるんだ。恋も愛もそのためのものであって、それ自体が目的じゃない。そんなことをしなくても幸せを感じられる人はいる。幸せの手に入れ方を無理矢理統一化してそれが唯一のことだなんて……そうやって誰かを見下すなんて、貴女は最低だと思う。そして人を正しく理解していない。知ったような顔で貴女は物を言うけれど、貴女は何も解っていない”

空の色も運命の色もわからない。自分の意味も名前もわからない俺でもそれはわかるよ。そう告げれば始めて彼女は怒りのようなものをその美しい顔に浮かべた。

“いつか俺が親になるのなら、俺はその子に軽蔑されないような自分になれた時が良い。誰に何を言われても……その子を絶対に幸せに出来るって自信と覚悟が持てるまで、そういうことはしちやいけないんだよ。じゃないと誰も幸せになんてなれないんだ”

俺の言葉を拒絶するよう、辺り一帯強い風が吹く。白い景色は雪だったのか。それが吹き飛ばされて、掘り起こされて見えてきたものがある。

雪の下から現れたのは、凍り付いた無数の墓。数え切れない。数えることを放棄したくなるような、限りなく無限に等しい数。その墓を背に、女性が泣き叫ぶ。

“お前に何が解るといふの！？誰かを愛したことも！親になったことも！腹を痛めたこともない……人の子が！”

“それなら、お姉さん。貴女は覚えているの？子供の頃に見た空の色。始めて誰かを想った心の温かさ。他には何も要らないと……心の底から思えるくらい、狭くて愚かな世界のことを！”

あの日の俺は本当に狭い世界に生きていた。それは間違っていたのかも知れない。それでも俺はその間違いを否定しない。その間違いだって今でもまだ、愛おしくて堪らない思い出なのだ。

大人になることがそんな世界を捨てることならば、俺はそれこそ間違っていると思う。何かを捨って何かを捨てるような生き方はおかしい。重くて重くて歩けなくなるまで背負い続けるのが人の道なんじゃないのか？忘れていい事なんて、きつと何一つ無い。辛いことも苦しいことも、全部引ってくるめて今の自分が作られる。自分の中の記憶は……どれだって否定してはならないものなのだ。

俺の服の下の無数の傷も、必要なことだったんだ。いつかそう言える日が来ると俺は信じる。養母さんは大嫌いだ。それでも、王になれば敵に捕まれば……いつか拷問される日だって来るかもしれない。その時大事なことを話してしまわないように、痛みに強くなつた俺はそれに耐えられる。そう思えば無駄な事なんてない。

“ 貴女は人を無意味と言った。死ぬまでに積み重ねたことでようやく意味になると言った。だけど違う！人はそんなピリオドなんかなくたって、もう意味になっっている！”

“ っ………… ”

亡くしてしまった人。傍にいてくれる人。みんなが俺を呼んでくれた名前。俺はその名前が大好きだ。他の答えなんか要らない。俺はもう、答えを知っている。

“ あの日の答えをくれてやるっ！俺の名前はアルドル！それが俺の真実だ！”

俺の叫びに、何故だろう。最後に……何も見えない吹雪の中、あの女性が笑った。赤い唇を釣り上げて。それがどうしてかわかるのだ。彼女はその笑みに、きつとこんな言葉を残した。

“それならばやってご覧なさい。お前が王だというのなら、すべての生きとし生けるもの……その全てに幸福を。神さえ成せぬ奇跡を起こしてみるが良い！”

*

「起きて下さいアルドール様」

「なんだよルクリース……俺の部屋勝手に開けるなって……」

おかしいな。扉を鍵開けられないように衣装棚を移動させて……そんなことを思っただけに返った。

目を開けるとそこは屋敷じゃない。そもそももう屋敷はない。ルクリースだって……もう死んだ。それじゃあ誰？俺を呼んで揺すつて起こそうとしているのは。

それは青。それは蒼色。ルクリースのそれより明るい色だ。

「お、おおおおおおおお姉さん！？ど、どうしてここに！？」

「わけあってご一緒させていただきました。本日はブランシュ領へと出向くのでしたよね？無礼とは思いましたが、これ以上出立が遅れるのは如何かと思いきこさせていただきました」

そんなしれつと返されても。それにお姉さん、今朝は髪を下ろしている。教会で会った時のまま、長い金髪だ。おまけに服装も昨日と変わっている。いつ着替えたんだろう。普通に女物の服だ。

「失礼します」

「え」

寝台から身体を起こしたところで急にお姉さんが膝をついて近づくから、俺はさっと目を逸らした。額に触れる彼女の手に、なんとなく緊張した。

「熱はありませんね……なんともないようで安心しました」

「あ、ありがとうございます」

ふうと息を吐いて彼女は笑う。真面目なその態度と危機迫る雰囲気から、あまり想像できなかったのだが……間近で見ると思ったより優しい笑顔だ。ちよつと脅えていた自分がこの人に対して申し訳ないことをしていたんだなって実感し……ここまで来て俺はようやく昨日のことを思い出す。

(そつだ、俺……倒れて……)

ここまでこの人が運んでくれたんだろうか？想像して自分の情けなさにちよつと泣きそうになる。

「それでは食事の方を運んできますので」

「え？俺普通に大丈夫です！」

急いで寝台から飛び下りて、さくつと身だしなみを整える。わざわざ運んで貰うまでもない。ちゃんと食堂まで歩いていける。それを伝えたのだが、彼女には怪訝な顔をされた。

「本当に、大丈夫ですか？」

俺は何処まで貧弱だと思われているのだろう。大丈夫ですと返し微笑むと、彼女もそれ以上の追求はしてこなかった。

だがそれも、食事が始まるまでの短い間だけだった。

「アルドル様、無礼を承知で言わせていただきますが、貴方はその年頃の男性としては軽すぎます。もっとしっかり食べてください。王あつての国です。いざという時に倒れられては困ります」

「お姉さん……無理、俺もう食べない……」

俺の空いた皿を見るやすぐにお代わりを装ってくれる甲斐甲斐しさ。その厚意が重い。胃に重い。やっぱり俺この人苦手かも。

「ははは、甲斐甲斐しいねえお嬢さん。どれ、おじさんにも装ってくれないか？」

「はい、何をお取りいたしましたしょう？」

「うゝむそうだな、それでは麗しのお嬢さんと生クリームともぎたてフルーツの女体盛りで」

俺はグラスのジュースを吹き出した。朝からこの人は何を言っているんだ。

咽せて咳き込む俺に、聖十字のお姉さんが背中をさすってくれた。もう片手では、布巾手早くシミにならないようにと俺の口元と衣服を拭ってくれる。

「大丈夫ですか？」

「あ、……ありがとうございます」

「なんとという華麗なスルー。これは今までにいなかったタイプだな」

俺達の向こうでヴァンウィックが何やらしきりに頷いている。

「なんで僕の耳塞ぐんですかトリシュサーン！」

「いや、あの……イズーのためです」

横目で騎士達を見ると、自分がいない内に純真な少年が悪い大人から悪影響を受けてはユーカーに怒られると、トリシユはパルシヴアルの保護をしていた。

「……そう言えばトリシユ、俺は北部のことは全然解らないんだけど……この辺りの地理にはやっぱりくわしいのか？」

「ええ、まあそれなりには……私も近年は領地には帰省していませんでしたし勝手が変わってしまったところはあるでしょうが」

「ああ、そうだよな。都での仕事を中心なんだもんな王宮騎士は」
ついついユーカーのことが頭にあって、みんなあっちこっちに派遣されているものだと思ってしまったが、それは本来の仕事ではないはず。王宮騎士は都の治安維持……突き詰めれば城の警備が専門のはず。常備軍的側面もあるからユーカーの仕事も間違いではないのだろうけど。しかし王宮という割りに城に住めない現状は本当おかしなものがある。いや……今はその城さえ奪われてしまったただけ。

「それについてはセレス君がイレギュラーと言うべきだな。彼は南部では肩身の狭い思いをしているし、渡り歩く任務を好んでいたから」

俺の考えの粗方を理解したのかヴァンウィックがユーカーの事を口にした。

「そ、そんなんですか。それじゃあトリシユやパルシヴアルは都でどういう仕事を？」

「僕はお使い専門です！お城の人のお買い物や頼まれ事をして届けるのとお城のお掃除と……そんな感じですよ！お仕事している内に

仕立て屋さんのポイントカードが凄いいことになりました！」

「私は豎琴を。よく都貴族の方々に引つ張られて行き仕事どころではありませんでした……というより他にろくな仕事回ってきませんでしたし」

「夏と冬には王都一斉ゴミ拾い清掃奉仕活動とかありましたね、セレスさんさぼってましたけど」

「いえ、しかし四度に一度の割合でランスに捕まっていたんですが……というかパルシヴァル。君も去年の冬は見かけませんでしたよ？」

「セレスさんに、“いいかパー坊、ランスの阿呆なら例え遊びでも何でも全力で挑めとか阿呆な事抜かすかもしれないが、余裕無く常に全力で行くのは騎士としてみっともないし情けない。適度に力を抜いて息を抜け。そんなわけで今回は休みだ！ひゃっはー”って言われてカルディアまで遠乗り連れて行って貰いました」

「イズー……貴方という人は」

「ユーカー……」

それ単に面倒だったからじゃ……。それで万が一ランスに捕まっても自分一人に説教が向かないように共犯者仕立て上げるなんて、なんて汚い。乾いた笑いを漏らす俺の向こうでトリシュと言えば……

「なんて素敵なんだ！！」

感激していた。もうユーカーなら何でも良いのか。駄目だこの人。やっぱりもう取り返しが付かないところまで来ている。痘痕も歴的な溺愛領域入ってる。

「噂には聞いていましたが……都はそこまで腐敗していたのですね」

聖十字のお姉さんが、少し悲しそうに俯いた。トリシユがこうなつたのはその反動に違いないとか好意的な解釈してそうなのがちょっとあれだけど。その辺の誤解は解いた方が良いのかそつとしておいて見なかつたことにするべきなのかちよつと瞬時に判断は下させない。

(でも……騎士や騎士見習いが使用人や小間使い、楽師みたいな仕事させられるなんてなあ……)

それも王の命令じゃなくて、都の貴族に顎で使われるという有様言われてみれば確かに酷い……。あまりにも酷い。それ騎士の仕事じゃない。絶対騎士の仕事じゃない。

ユーカーから話には聞いていた。騎士なんてろくでもねーと。肩書きだけの名誉職。働けば働くほど王の名声が地に落ちる。自分を人殺しの道具みたいに言うユーカーの仕事がマシに思えてくるからどうしよう。

「ふむ、ローザクア近辺は都貴族がのさばっているからねえ」

ヴァンウィックも肩をすくめている。

「あの、アロンダイト卿？湖の城が手放された理由というのはどういったものだったんですか？」

「ああ。あの城は元々チエスター卿の物だとは話しましたねアルドール様」

「はい」

「要はですね、あの城は北部の守りのために作られた要塞ですよ。長年この土地を守つた要なのですが、老朽化を理由に風情のない都貴族共は経費削減としてあの城を捨てさせた。ついでのごさくさで跡継ぎのいなくつた彼の領地まで没収。それで若くして色々あつた

トリシユ君の叔父であり後見人と言うこともあり、ブランシユ領を任せられた……だったかな？」

「いいえ師匠。正確には元々父が消え私の母が死んだ時から、シル叔父さんはうちの領地の管理をしてくれていたんです。本当に物心着いた時分でしたし幼い私には何が何やら……」

「へえ……そうだったのか」

二人の話聞く限りではチェスター卿はいい人っぽい。これなら割ととん拍子で今回の話はうまくいくかもしれない。

「それでトリシユが騎士になった後も、そのまま領主としての仕事をしてくれているってことなのか」

「はい、概ねそれで正しいですよ。ですが……」

俺の言葉にトリシユは頷くが……

「叔父さんは長年治めた土地をそのままにはしておかず、時折以前の領地に出かけて……領民を気に掛けたりあの湖城の手入れなどをしていたようです」

「領地を奪われたのに……？どんなことして大丈夫だったんですか？」

「仕方ありません。カーネフェルはあの土地に何もしてはくれなかった。それで何とかする権利すら奪ったんです。ブランシユ領だって叔父さんがいなければ……とつくに国に奪われていた土地です」

「え……？」

「私が南部へ降り、騎士になったのは……王にそのことを嘆願する意味もあつたんです。……もっともアルト様にはそんな権限がもう残っていなかった。悲しいことです」

もしかして。トリシユが都貴族と穏和な関係にあつたのは……も

と正しいように使われていたのは……自分と身内の故郷のため？それなら……ユーカーとのがなければ……トリシユは俺に付いてくれなかったかもしれないんだ。ごくりと唾を飲み込んだ俺に、ヴァンウィックがそう落ち込むでないよと生暖かい視線を送ってくる。

「土地を奪ったとはいえ、都貴族共は我々地方貴族の権力を殺ぎたいだけだからね。その後の目的なんてあつてないようなものさ。跡継ぎが居ないと言うだけで見せしめに嫌がらせを受けたようなものか。それもトリシユ君を養子に引き取るか引き取らないかのタイミングでの決行だ。どうして治世の才が無い者は、人を出し抜き蹴落とし権力にしがみつ়く術に特化しているのだから」

これだから無能をのさばらせているのは問題なんだと言わんばかりの中年騎士。この場合の無能は前王ではなく都貴族のことだろう。

「しかしだな我が弟子よ。君もうちの馬鹿息子のように、領地には帰りたくないのではないのかい？無論帰って貰わないとカーネフェルとしては大変なのだ」

「……別に私は叔父さんを嫌ってはいませんよ」

「トリシユ？」

「……………彼方がどうかはまた別の話です。それに」

一度目を伏せたトリシユだが、一呼吸置き目を開く。そして自分に強く言い聞かせるよう呟いた。

「それでこの国を怨むのは筋違いです。このカーネフェルという国の危機にそのようなことは言ってはられない。それは彼も同じ気持ちのはず」

力強く言い放つトリシユの言葉。それに俺の横の聖十字のお姉さ

んが肩をぶるぶる震わせる。

「お、お姉さん？」

「ブランシユ卿！私は貴方を誤解していました！貴方は素晴らしい騎士様です！」

お姉さんは勢いよく席から立ち上がり、トリシユに握手を求め、迸る感涙。その溢れる涙を拭おうともしない豪快な男泣きだ。男装が似合っているだけあって、性格までなかなか男前だなこのお姉さん。普通の格好していると普通のお姉さんに見えるのに……どうしてなかなか普通のお姉さんじゃないらしい。

「あの……私のことはトリシユで構いません」

「トリシユ様っ！貴方は素晴らしい人です！このご時世にちゃんと愛国の心を持った騎士様がいるなんて」

「あ、ははは。ありがとうございます聖十字のお嬢さん」

トリシユがさつと目を逸らした。ここまで純粹に褒められると辛いよね。トリシユの間まで「国などどうなっても構わん！私のイズー！！イズーがいればそれでよし！」みたいな恋愛至上主義突っ走ってたよね。やっと運命の人に出会えたと思っただから多少の暴走や心ない言葉は仕方ないとして、その記憶が新しく本人にしっかり残っているため罪悪感とはんでもなく大きいだろう。このお姉さんを直視なんて出来ないくらいには。

「そんな余所余所しい！共にこのカーネフェルを憂うる者同士……私は、アーク。ジャンヌ」アーク。私のことはどうかジャンヌとお呼び下さい！組する場所が違えども、私は我々は貴方の同士です！」

キラキラ輝くお姉さんの綺麗な目。こと国に関しての愛情は、パルシヴァル並の純粹さを持ち合わせているみたいだ。

「ジャンヌ……さん？」

言われてみればまだお姉さんの名前も聞いていなかった。それとも俺は故意にそれを避けていた？名前を呼ぶこと。それは愛着を持つ。持とうとする行為。始まりの一步。それを恐れた。知れば失うことを恐れる。俺としては……カードの名前を、特に……女の人の名前を聞きたくなかったのだ。だから俺は、その名を知った時に喜びを感じなかった。むしろ……夏だというのに一瞬血の気が引いた気さえした。それと同時に、俺の知る……無くしたカードの誰ともその名が重ならないこと。それに安堵し絶望していた。

「はい、申し遅れました。色々あつて挨拶が遅れてしまい申し訳ありませんアルドル様」

俺の言葉に振り返り、にこと微笑むお姉さん。

「ああ、男装の仕事の時は男性名らしくジャンと名乗っています」「ジャンヌ様、それは些か偽名としては単純すぎるのでは？ヌージャンとかヌージャとかどうですか？」

トリシユ自身は神妙な顔つき。至って真面目な言葉だったのだから、その言葉はその場の人間達の時を止めるだけの衝撃があった。ジャンヌさんも目が点だ。

「……トリシユさん、問答無用偽名必須仮面舞踏会の際に偽名が分かり易過ぎてもろばれたたってセレスさんが笑っていましたよ」「ああ、その噂なら北部まで届いていたな。タントリーシユだっ

たかな？」

カーネフェル……そんな祭りまでやってたのか。というかトリシユ……ネーミングセンスが酷い。もし仮にセレスちゃんが本当に女の子で運良くその心をこの人が射止めて外堀も埋めて結婚とか出来ても……このネーミングなら家出されるかもしれないな。

*

「へつくし！」

やっぱり海風は冷える。かといって窓を閉めていると蒸し暑い。昨夜は暑いと駄々を捏ねてレクス野郎に窓を開けさせたまでは良かった。ユーカーは昨晚のことを思い出して頷いた。

(タロックの服って慣れねえと動き辛え……)

窓からの脱走を試みるが立ち上がってすぐ帯を踏んで転ぶ。裾を踏んで転ぶ。俺はそんなドジっ子属性なんか身につけた覚えはねえぞ！恐るべしコートカードキング。こいつが傍にいるだけで、俺は逃亡すらままならないというのか。

しかし見当違いも良いところ。そんなに外の空気が吸いたいのならばと甲板まで連れてきてくれたこいつは確かに優しいさ。そう言うところは我が儘な捕虜の言いなりなんだから。

「冷えたか？ならば中へ戻るか」

何処へ向かって進んでいるのか解らない。そんな船に俺はいる。嗚呼、空は海はあんなに青いのに、どうして俺はこんな所にいるのだろう。情けなくて泣けてくる。

思えば最初からおかしい。あの時見た船は一艘だったはずそれがなんだ。俺が連れて行かれた場所はあれではなくて、そこから離れた場所にある別の船だった。数術の力で隠されていたとしか思えない。神子がスルーするってのは、わざとなのかその存在に気付けなかったのか。正直俺には解らない。今神子は弱っているし後者の可能性も十分あり得る……が、普段が普段なので前者のようにしか思えない。これは俺は悪くないよな。

寒がる俺を案じたのかレクスに甲板から降りようと促されるが、その間もジャラジャラと耳障りな音が聞こえてくる。

「つーか何なんだよこれえ……」

「セネトレアから仕入れた拘束具だな。なんでも数式が刻まれているとかで数術でも使わない限り取れないらしい。どうせろくでもないか虚偽の商品説明だろうと思っていたが、試しにお前に付けてみたら……どうやら本物だったようだということで、俺も使ってみることにした」

そいつは鍵穴のない手錠。付けられた時点でお終い。俺には数術の才能がない。コートカードの俺には幸運はあっても元素の加護がない。それを見越してのこれだ。

嫌別に俺だって何処かの柱と俺とか、か自分の両腕に拘束とかならここまで騒がない。問題は俺の手と鎖が繋ぐ、その向こうの相手に文句があるだけだ。

これを付けてる間はタロックの服じゃ着替えが出来ないと瞬時に悟ったらしいこの変態騎士は、寝ている俺を昨晚の俺のカーネフェル風の女装服に着せ替えてたというのだから驚きだ。そこまでして俺で遊びたいかこんちくしょう。お前も侵略者なら真面目に侵略をしろってんだよ！

「こんな誰得俺損生活俺は嫌だ！こっぴつのは普通あれだろ！？」

思わず守ってやりたくなるような華奢な婦人とか！むちむちのお色気漂うセクシー婦人とかだろ！もう少し騎士心撥るようなチョイスは無かったのかよ！」

「残念ながらタロツクでは女が不足していてな。そんな美味しい展開はない。だがそう問題もないだろう。現に俺得ではある。流石はキングの幸福は素晴らしいな。毎日24時間がウハウハだ」

「お前が得でも俺は不幸だっつってんだろうが！」

ていうかどうなのこれ。俺は俺のことを神子とランスが監視してるもんだと思つて、それで何かあったら助けてくれると思つてただけど……そんなことは全然全く無かつたぜ！……自分で言つて悲しい。

（そりゃあ……相手はキングだし？あいつら逃げてくれた方が良かった方がいいけどよ……）

それならそれでちゃんと逃げましたよ的な合図が欲しい。俺はどう動けば良いんだよ。それにあんなこと言われて……何を信じればいいのかもわからなくなりつつある。こんな時くらい、びしっと傍にいてくれよ。

（俺がジョーカーになるかもって知つたら……あいつ喜ぶのかな？）

俺が味方すれば絶対に負けはない。勝ち残れる。最後に俺が死ねば問題ない。

でも……俺がお前より強いカードになったことに苛立っているお前のことだ。ますます俺を嫌いになるかもしれない。そもそも俺がジョーカーになつたって、あいつが自分の勝利を望むかも怪しい。その力でアルドル様とカーネフェルを頼むぞ！とか良い笑顔で討ち死にしたりしそう。そんな展開嫌すぎる。

元々俺は自分が勝ち残れないもんだと思っていたから、諦められたんだ。お前を殺してまで……俺にはアスタロットは望めない。だけれどここで道化師だ。それを聞いたら少しは揺らぐ。こうしてじっとしていて……レクスに守られて。そうしているだけで俺はジョーカーになれる。俺に殺せないカードはない。一つだけならどんな願いだつて叶う。

だけでもしもだぜ？俺の知らないところでランスもパルシヴァルもトリシユも殺されて。アルドールの阿呆も死んで。そこで漁夫の利よっしやあ！！と喜べる強さが俺にあるのだろうか？過去の何も引き摺らないと言えるのか？

そもそもだ。願いの力で1人を生き返らせたつて、どうせ死ぬ。人なんかすぐ死ぬ。大したこと無い理由で殺される。頑張ったつて百年足らずの命だ。

それならそこに五十数人の命を費やす意味つてあるのか？そいつら全員の百年を奪つてまで誰かを生き返らせる意味はあるのか？その日の内に、その次の日に……その幸せが崩れないつて保証もないんだ。

生き返らせた相手と一緒に寿命が来るまで仲良く幸せに暮らす……なんて願いはあり得ない。願いは一つだけだ。文章長くなつても区切らなきゃ一つつてのは無理な話。端的に一つ。願いは一つだけなのだ。

俺は臆病だから、ちゃんと絶対だよつて保証されないと何も出来ない。あんなに大切にしていたアスタロットとの約束も揺らいできている。

彼女は俺に生きてくださいと言ったけれど、俺はもう……俺の生には興味が持てなくなっている。変な話だ。つい先月までは、どんなこととしてでも生き延びてやる。死んで堪るか。そう思つてたはずなのに。

生きる意味が死ぬ意味に変わってしまった。俺の生に希望なんて一つもありません。死ねばそこで始めて意味が生まれる。誰かの

ためになれて、アスタロットとも再会できる。

ランスの阿呆はアルドールっていう希望を手に入れたけど、俺には何も無いんだよ。仕える王なんか、アルトのおっさん以外いやしねえ！アルドールなんか……あんな奴、王でも何でもねえよ。あいつは唯のガキだ。戦争も玉座も似合わねえ……唯の普通のガキなのに。そんな普通のガキのために、ジョーカーになってもまだ、あいつのために働けてお前は言うのか？

「……………」

俺がジョーカーになったら。勝ち残りたい奴が俺の力を欲しがるようになる。今だって、まだジャックの俺をその確保のために欲しがる奴がいる。俺は家の道具が嫌で逃げて来たのに、また道具になっている。逃げてても逃げてても俺は何処へ行っても人間にはなれない。

(ランス……)

道具でも、お前の力が必要だって。そう言って貰えたなら、まだ踏ん切りが付く。けどあいつのことだから、そんな風には言わないだろうな。もう俺が人には見えていないのに、まだ幻影を夢見てる。俺の顔が人間に見えていると自分を騙すように笑ったりして。だって俺は知ってるんだぜ。お前が俺のカードを知った時……どうしてお前がって顔したの。格下の俺が強いカードってのが気に入らなかつたんだよな？そこで俺がもっと強いカードになんかなったりしたら……ますますお前の気分を害するだろう。

嫌だな。ランスのこと。アルドールのこと。思い出すだけで気が沈む。暗い気分を振り払おうとして……思い出すのは何故だろう。その相手はトリシユとパルシヴァルだ。あいつらと一緒に行動する日が来るとはなあ。感慨深いものがあるぜ。

けどあいつらもカードで。危険が迫る対象で。いつ死ぬかも解

らない。あいつら俺と違っていつも明るくて、そんなシリアスなんか似合わねえだろ。そう思ってるような相手だつて死ぬ。あのメイド女みたいにさくつと格好付けて死ぬかもしれねえ。油断も隙も無い。この世界はそれだけ悪意に満ちている。

ああ、どうしてだろう。どうしていつも俺ばかり、不安に苛まされてる？俺が弱いからなのか？ジョーカーになれば強くなれる…：わけがねえ。ジャックでこの様なのに。これでジョーカーなんかになったらもつと手に負えなくなるだけじゃねえかよ。

「なあ……あんだ、強いよな」

「否定はしない」

部屋に戻って暫く考え込んでいた俺が、突然投げかけた言葉。それにも騎士はすぐに相手をしてくれる。お前本当にこんなことして暇有るなら仕事しろよと言いたいが、戦うことが仕事なら、移動中の今は暇なのかもしれないな。ただどこいつのその余裕すら、強さの欠片に見える俺はどうかしているんだろうか？

「あんたは何で強いんだ？」

「それなら少年、お前は何故俺に負けたと考える？」

カードの力、騎士としての力量、体格差。言い訳は色々ある。それでも決定的な何か。こいつにあって俺にないもの。それは確かに存在する。二度の戦いで俺はそれには触れている。気付いているが、掴めない。

「何度やっても同じ事。今のお前では俺には勝てない」

ヒントは与えたと言わんばかりのレクスの言葉。

「俺を王に引き合わせるって、言っただよな？」

「ああ」

あつさり奴は肯定。目を逸らして背中を向けて俯いていた俺が悪いのだが、あまりにも簡単に答えが返ってくるので話を真面目に聞いていないのでは。そう思って振り返る。

すると奴は床に寝そべり何やら雑誌を片手に寛いでいる。こそと近寄りタイトルを盗み見ると、『月刊貧乳つるぺたマガジン』とかろくでもないタイトルが書いてある。当然こんなろくでもない資源の無駄遣いの発行元はセネトレアの書店だった。タロツクとは違う意味で確かに一回滅べばいいと思う。割と本気で……にしてもタロツクの第一騎士がこんなのでどうなんだ。こんな姿、本気で部下が泣くと思うから止めて欲しい。

何とも言えない表情になって俺はまた奴からギリギリの所まで離れて背を向ける。それを見計らったように奴は言葉の続きを口にする。

「セレスティン、お前には……お前の中には王が不在だ。そのよ
うな空の心では何も守れはしない」

「……王じゃねえけど、大事な奴はいる」

「それは1人ではないだろう？」

頭から冷や水を浴びせられたような感覚。血の気が一気に引いていく。こんな変態エロ本読んでる馬鹿に、俺の心が筒抜けなんて。何だかとても恐ろしかった。

「王とは複数いてはならないものだ。王は唯一無二でなければならぬ。お前がそれを完全に選べない限り、お前はそれ以上強くはなれんたろうな」

「王つて……なんだよ」

レクスが身体を起こし、引つ張られた俺も無理矢理それに倣った。

「王とは奪い尽くす者。お前はその1なる者に全てを奪われて尚、一変の曇りも無く彼を許し愛し肯定し、心からの忠義を持って仕えることが出来るのか？」

外はあんなに明るいの……この部屋は暗い。レクスの黒い目が、闇の向こうから俺を見据えるようにそこにある。

「俺の妹を殺したのは狂王だ。しかし狂王を動かしたのはあの人の騎士だ。……俺は最愛の妹をあの人に奪われた。……それでも俺はあの王に仕えるって言うのはそう言うことなんだと理解する。セレス……お前はそこまで、このカーネフェルという国を許せるのか？」

俺を何も知らない癖に、この男は……俺がこの国を愛していないことを知っている。俺が好きなのはあくまで人であって国じゃない。俺を縛り付けるのはしがらみであって土地じゃない。この国が俺にしたことを、俺は今だって覚えてる。

この国の風習が俺の人生を狂わせた。この国のシステムが俺の王を貶めた。この国の存在が俺の理想を苦しめる。

滅んでしまえ、こんな国。どうにでもなればいいんだ。そう思ったことが一度としてないなんて、俺には言えない。何度とだって思っ
つて来たし呟いた言葉だ。

許せるのか俺に。もしもランスがあいつらを。他の誰かを殺しても……それでもあいつは俺の、俺の理想で在り続けるのか？崇められるのか？

「放せ……」

「セレス……？」

「俺は……俺は道化師なんかなりたくないっ！そんなにジョーカ
ーが欲しいならっ……他のジャックを捕まえる！」

そうだ。このままで良い。俺はジャックで良い！これ以上何かが
変わるところなんか、見たくない。嫌だ。そんなの俺に見せるな。
見せないでくれ。

今のままなら、これ以上はなくとも今以下は無い。誰もこれ以上
俺に失望しない。期待しない。それでいいじゃないか。その何が
駄目なんだよ。

「生憎それを決めるのは俺でもお前でもない。……俺の仕える夕
ロック王だ」

「っ……」

「だが、それとは別として……俺はお前が気に入った。お前のそ
の弱さ、どう変わって行くかに興味がある」

好意的ではあっても、敵は敵。感情に訴えても逃がしてはくれな
い。この男、公私混同はしない。そこに微塵の迷いもない。それが
強さの証なのだろうか。迷いに迷ってブレまくりの俺は、だから駄
目なのか。

そんなこと言ったって。何か一つを何で。選んだつもりでも、ど
いつもこいつもどいつもこいつも……関わった以上は見捨てられね
えだろうが！そんないきなり切り捨てられるもんじゃねえよ。もう
何も無い。これ以上何かを手に入れることもない。だから暴走でき
た。それがどうして……今更俺にのし掛かってくるものが、重みが
増すんだよ？俺なんか最低の屑だ。みんな何処かへ行っちゃまえ。俺
の記憶の中からもいなくなってくれよ頼むから。

そう思っても、そう願っても……呼ばれる声が甦る。忌まわしい

名前。呪文のように縛めのようにどいつもこいつも俺を呼ぶ。痛くて頭が割れてしまいそう。

*

「ボクはエルス＝ザイン。第六師団を受け持つ狂王様の手下だよ」

「ああ、話だけは聞いたかな。狂王のお気に入って子な」

「はじめまして？へえ……貴方が第一師団長様ね」

「ああ、俺はレクスって名乗らせて貰ってる。ま、程ほどによるしくな」

我が儘な王様からの伝令のため、飛ばされたのは海の上。探し当てるの一苦労。それでもそれをさも簡単に。颯爽と。こんなこと朝飯前だという顔をしておくのが妖怪というものだ。人間は恐れさせてなんぼのものだ。畏怖もまた負の信仰。僕らの力を強めるためには必要なこと。

だと言っのに何だこの男は。エルスは少し苛立った。

ここの部下達は僕の登場に驚いたり腰を抜かしたり混血である僕の可愛さに参って違う意味で腰を抜かしたりしたっていうのになんなんだよこの男は。

黒髪黒目のタロツク人。真純血には見えない平民色。それが第一騎士とはねえ。おまけに何だろう。船の中畳みに改造してゴロゴロしてる。おまけに何か手にはでかいアクセサリーがあると来た。その盲片方の手にはいかがわしい本を持っている。

幾らプライベートルームとはいえここまで酷いプライベートが未だかつてあっただろうか？一応今、戦争中なのに何これ。緊張感の欠片もない。明らかにおかしいのに狂気の香りすら見受けられない。さも日常のようにこのおかしな感じを肯定しているこの男、やはり何処かがおかしい。歪んでいる。

「にしてもこれはこれは、随分と可愛いお嬢ちゃんが来たもんだ。もつともこいつには劣るが」

「冗談が上手いんだね貴方は」

ふて腐れてそいつからギリギリ離れたところで膝を抱えている女の気配には、どうも見覚えがある。

「で？セレスティン卿ユーカー……貴方までいつの間にそういう性癖に目覚めたの？」

「目覚めてねえっ！カーネフェル事情解ってんだろ！？女装しての方が色々移動するのに便利なんだよ！！」

流石の僕も驚いた。これまで何度か戦った騎士が、まさかこんなところでこんな事になっていようとは。でも予想以上に似合ってたからちょっと腹立たしい。まさかこの男にそんな才能があるうとはこれで僕らの目をかいくぐっていたのか。そう思うと尚更だ。しかし当の本人は、まさか僕にまで知られるとは思っていなかったのか、半分泣いている。精神的に参っているらしい。こういう顔を見ると駄目だな……。うん。なんていうかさあ、この間の仕返しもあるし？思い切りいたぶってやりたくなる。

「うわあ、恥ずかしい！それでもボクより年上？女装が許されるのは何歳までだったかなあ？！御貴族様が？真純血が？女装ですか！？あははははは！！」

「ぐうっ……くっそお！！人が言い返せないのを良いことにな！」

「さあて、どうやって辱めてあげようかなあ？キミの恥ずかしい写真でも撮って国中にはらまく？それともそうだなあ……そのまま、強行軍で色々飢えてる獣の軍に女装で放り投げてあげようか？仲良

しの騎士さん達宛に？それともアルドールに？リアルタイムでキミが襲われるのを実況してあげようか？良い息抜きになったりして向こうにとつてもさあ！だって色々重んじる連中多くてキミらって経験無い奴多いんでしょ？貴族様って大変なんだねえ！あはははは！その分たまつてるじゃないの？」

「エルスちゃん、あんまりこいつを苛めないでくれ。これは俺の妹二世或いは二号機だ」

「違ええええよつ！！」

「だが今の恥ずかしがる顔は良かった。お兄さんがポケットマネーを渡すから今度セネトレアの船から撮影装置を買って来てくれなしか？噂だと人間の屑方面との交友関係広いそうじゃないか」

「そんなの欲しいの？似たようなものなら軍にありませんでした？セネトレアから横流しで来た……」

「ああ、だがしかしあれはモノクロセピアだった。高画質のフルカラーでなければ意味がない………しかしエルスお嬢ちゃん。お前もなかなか良い貧乳して……」

「お前は見境無しなのかっ！」

ようやく立ち直ったのかツッコミという仕事を思い出したらしいセレスティン卿。第一騎士を鉄拳制裁。それでもあまり効いていないらしく、逆に近づいてしまったことで髪触られたり胸元凝視されたりとなんだかんだと被害を受けている。

(こんな男が第一騎士だなんて……あの男何考えてるんだ)

頭が痛い。だけどここの男がキングなら、利用価値はあるだろう。須臾にも思うところがあるようだし、星が降ってから行方をくらました……僕の力でも居場所の知れないあの男を引っ張り出すためのチャンスだ。

「とりあえず須臾からの言葉を伝えます。“兵と合流したなら此方へ来い。作戦に加われ”だってさ」

「やれやれ。到着早々扱き使われるわけだ。しかし良いのか？海へ出た船……あれを逃して。我々はカーネフェルに余所の船を近づけるな、そして逃がすなと命じられたのだが」

「そつちは問題有りません。ここまで船を出して貰ったんだ。ここからならボクが飛び移れます。だから交代つてことです」

そう、僕はこの距離なら跳べる。空間転移を発動し、船へと一気に跳躍。カーネフェルを出てシャトランジアへと向かった聖十字の船がある。あれを逃すなとは須臾の命。シャトランジアとカーネフェルは組ませるわけにはいかない。数式に包まれれば、すぐに見える景色が変わる。

突然現れた僕に驚いたような金髪美形騎士と、舌打ちし眉を寄せる混血神子。

「やあ、久しぶり。そして貴方には初めまして」

エルスがぐるりと辺りを見回せば、その他にもそれなりの数の、船を操る聖十字らしき乗組員も居る。どうやら陸に逃れた奴らだけでもないようで、船に乗り込まれた時のため、隠れ潜んでいた兵士もいたのだろう。それに気付かないとはあの第一騎士、数術の才能が皆無なんだな。ならば、付け入る隙はありそうだ。その事実にはエルスは気分良く、自然と顔にも笑みが浮かんだ。

「海つていいよね。良い風が吹く」

「神子様！風向きがっ！」

船を動かす風が変わったことに戸惑う乗組員達。それを見エルスはほくそ笑む。この神子も風の精霊は操れるようだけど、そこまで

好かれてはいないのだ。

僕は全属性使えるけど、一番懐かれてるのは風なんだ。見たところ彼らは土水に好かれた水使いに、水に好かれる火使い。其方の騎士は火の人間のようなけど、水の気を纏っている……だから情熱の炎という感じでもないし、風との相性はあまり良くは無さそうだ。

神子は仮にも聖教会の神子を冠するのだから、自分同様全属性は操れると見て間違いない。それでも得手不得手はあるのだろう。どんな腹黒でも性悪でも神子は神子、分類されるなら聖。残酷をも司る風とは相性が悪いのだ。

「全く……何処に逃げたかと思ったら、そんな子に入れ込んでたのかシルフィード」

「ああ、顔見知りだった？」

その少年は、僕の傍に控えた風の精霊。それを神子は睨み付けている。風の精霊シルフィード。前にカーネフェルに遊びに来た時に拾った精霊だ。何も言葉を発さないのが奇妙な奴だけれど、僕には従順だし精霊としての力も強い。神子の様子から見て、元は教会の所有する精霊だったらしい。

「このままシャトランジアに行くつもりだったんだろう？ だけどそんなことはさせない」

風の精霊に大暴れをさせ、船を揺らす。浮いている僕は大丈夫だけれど、咄嗟に受け身を取れなかった小柄な神子は転がる。騎士はそれを助けて抱き起こす。それでも他の乗組員達は女ばかり。あちこちに横転し、身体を強かにぶつけて呻く。船の動きが止まる。

うん、良い感じだ。エルスはにこりと微笑んで、紡いでいた召喚数式を完成させる。

「このまま海に沈んで貰うよ」

そりゃあさ、あのさ。最初は苦手な奴だと思ったよ。俺の嫌いな典型的なお貴族様だって。だけど今日ほど彼の不在を呪ったことはない。時に敵意より悪意より、無邪気と好意がそれを上回る悪意に変わるのだと、未だかつて無いほどアルドールは痛感している。

ガクガクと揺れる暴れ馬に掴まって、朦朧とした意識の中思いつくのはどうしてこうなったのかということ。

それは確かそうだ。湖に近づけば、タロツク軍に気付かれる。ブランシュ領を目指すには沿岸を通過することになった。

「あはは！走れ走れ！リンガーレット！」

アルドールは無邪気にユーカーの馬を乗り回すパルシヴァルを生暖かい目で見守る。本来の持ち主であるユーカーのことは完全に舐めているあの馬も、子供相手にはまだ甘い。いや、彼の無邪気さがあの暴れ馬の気性を物ともしない器のでかさがあるのかも。

本来彼に与えられた馬はと言えば、聖十字の彼女……ジャンヌに貸し与えられている。元々イグニスが教会から持って来た馬だ。船専門だった彼女も最初こそ戸惑っていたが、暫くすれば乗りこなす。

「ややややっぱりおおおお姉さんは凄いいいいななかなな」

「元々士官学校では勉強させられました。ここしばらく海上警備ばかりだったので忘れては居ましたが」

一番軽いのは幼いパルシヴァル。一人で馬を乗りこなせない俺は彼に乗せて貰ってる。つまりユーカーの暴れ馬と一緒に乗っているというわけで。今にも振り落とされそう。ていうか酔う、酔う、

酔ううううう！

道を進めるほどに顔が青ざめていくアルドール。それに気付いたのかジャンヌが口を開く。

「アルドール様、私の馬に」

「いいえ、ジャンヌさん。幾らアルドール様でも婦人と同じ馬では緊張してしまい、余計酔ってしまうでしょう。此方へどうぞ」

「いいえ！私のことは女などと思わなくて結構です。王に何かあつては国の一大事！カーネフェルのためにも私は貴方を失うわけにはいかないのです！」

「跳ねろ！跳べ！いいぞリンガーレット！見てください王様！こんなに高く跳んでますよ！」

「ちよっ！駄目っ！ばるしうゝあるううううう！俺吐きそ……」

二人が馬上口論している間にも幼い騎士は無邪気に馬を操る。そして俺の胃を揺する。我慢の限界が来た。馬が地面に着地する頃、朝食が逆流リバーズ。情けなくてももう泣きたい。呆れられてるんじゃないかと涙目でみんなを振り返ると、何故かジャンヌもトリシユも心配そうだ。

「大丈夫ですかアルドール様！？」

水とタオルを取り出して、甲斐甲斐しく俺の口元を拭ってくれる
聖十字兵と……

「全部吐いた方が楽になりますよ」

と背中を優しくさすってくれる騎士。

「あれ……」

何でみんなこんなに優しいんだろう。イグニスならここで……普通ここでは「うわ、君何やってんの？」と嫌そうな顔で睨まれて、「臭い取れるまで僕の方に近寄らないでよね」と香水ぶっかけられるのがデフォじゃないのか？

そう思うと涙が流れた。イグニスが居ないのが寂しい。不安だ。ここまで優しくされると不安になる。俺にはそこまで価値無いだろうに。

「駄目ですよパルシヴァル。アルドール様はまだ馬に乗り慣れていないのです。あんな乗り方したら、こうなつて当然です」

「ご、ごめんなさい」

ユーカーの不在時にはパルシヴァルを甘やかしていたトリシユ。そのトリシユに叱られたことがショックだったのか、パルシヴァルはしゅんと落ち込む。それが見ていられなくてアルドールは無理にでも笑つて見せた。

「い、いや、朝食べ過ぎたからあれだったただだよ。楽しかったから、また俺が元気になつたら乗せてくれよ」

「は、はい！王様！」

ぱあと明るくなった少年騎士が変わつて今度は聖十字の少女の顔が青ざめる。

「私が貴方に無理矢理朝食を食べさせてしまったからこんなことに……貴方は大事なカーネフェリア様なのに」

「い、いや……あの、ジャンヌさん？」

「王を守らなければならぬ私が王を傷付けてしまうなんて、私は何ということをつ」

なんだこのクソ面倒臭いパーティーは。

助けてイグニス！この聖十字のお姉さんに思い悩まないでこいつは馬鹿だからって言うてあげて！助けてユーカー！パルシヴァルをちゃんと良い感じに褒めたり叱ったり出来るのはお前だけだろ？ていつかお前が居たなら俺この馬乗らずに済んだんだよな？いやこういうフォローならきつとランスが適任だ！帰って来てくれランス！……そんな現実逃避をしても何も変わらないわけで。仕方ないので俺は、遠い目をするのを止めた。

「ち、ちよつとこの辺で一旦休憩しようよ。一息吐けば俺も落ち着くし、その間にこれからの進路の確認とか……そ、そうだとリシユ！ブランシユ領ってどんな感じの所なんだ？」

草地に腰を下ろして俺は無理矢理話題を変える。

（あ、しまった！）

途端にトリシユが微妙な笑みのまま硬直。地雷に触れてしまったらしい。如何にこれまでのパーティーがイグニス、ユーカー頼りだったのかを痛感する。

トリシユとパルシヴァルは俺との繋がりよりユーカーとの関係が深いし、こつちのお姉さんはイグニスの部下。一応トリシユとパルシヴァルは俺の部下って事になるんだらうけど、やっぱり縦より横の繋がりの方が強い。

「う、うちの領地ですか………？」

「というよりそろそろアロンダイト領を越えてトリシユ様の領内に入っている頃なのではないですか？」

「……そ、そうですね」

ジャンヌの問いにしどろもどろになるトリシュ。その遠い目は俺同様、ここにはいないユーカーを探しているようだ。本当に何なんだこのパーティは。満足に意思の疎通すら出来ない。通訳か!? ユーカーは同僚達の仲裁と通訳で、イグニス俺の取扱説明書みたいな?

(……言ってる虚しくなってきた)

事実、その通りとしか言えない。俺が沈んでいると、同じような顔をしていたトリシュが荷物の中から豎琴を取り出す。何時も持ち歩いてるのかこの人は。そして何やら歌い出した。ツッコミを入れるべきなんだろうか。だけどそうすることで既に微妙なこのパーティ。ちゃんと均衡を保てるのか? テンションがもつと下がったりしないか? 大丈夫なのか?

(本当に早く帰ってきてくれユーカー!)

前王が彼を重宝していたわけが解った。王宮騎士って基本天然か堅物かしかないんだ! だからボケとボケ殺しで大変なところへ行ってしまう。その軌道修正ツッコミスキルを持つユーカーがいないと日常会話すらままならない!

俺が悩んでいる間にも、トリシュは苦悩の歌を歌い奏でる。でも歌の内容がここに帰って来たことじゃなくてセレスちゃんの不在を嘆いているだけなのはこういうことなんだ。唯の照れ隠しなのか? それとも本当にユーカー欠乏症なのか?

「トリシュさん、歌お上手です!」

「ええ、惚れ惚れするような演奏です」

うあああああ！このお姉さんもパルシヴァルも純真過ぎる！そうじゃない！そうじゃないだろう！？ツッコミ！ここはツッコミ入れるところだよ？褒める所じゃないよ？

アルドールはツッコミを入れたいのに入れられない現状にストレスが貯まり始める。そして思う。

(やっぱりランスがいなくて良かった)

いたらこんなレベルじゃ済まない。天然ボケとボケ殺しがそんなにいたらもう駄目だ！

「あれ？」

不意に顔を上げれば豎琴の調べに加わってくる新たな音色。胡弓……ヴァイオリンの旋律だ。どちらの音色もそれぞれは美しいのに、新たな奏者は敢えて不協和音となる曲をぶつけてくる。その不快さから我に返ったらしいトリシュが楽器を置いて剣を取る。

「下がって！アルドール様！」

「え、ああ！うん」

その背に庇われて前を見据えれば、一人の少年の姿がある。彼は明るい金髪に緑の目。年は俺と同じくらい？背丈は俺が勝っているが顔のレベルは明らかに俺が負けている。

それは可愛い顔をした絵に描いたような美少年。ただどイグニスともパルシヴァルともジャンルは違う。

な、なんなんだ！カーネフェルは男が少ないんじゃないのか？都来てから男率が上がっただけじゃなくて基本みんな俺より設定イケメンしか出て来ない！今頃ルクリースが生きていたら毎日鼻血パラダイスだ！どうせならそんな幸せな出血死をさせてやりたかった。

「誰かと思えばトリシユ兄さん、帰ってらっしゃったんですね」
「キール……」

にこやかに笑う少年を見て、トリシユは完全に固まっている。そんな様子の騎士にアルドール達も戸惑う。

「に、兄さん!？」

トリシユに兄弟がいたなんて聞いてない。でもボケ殺し二人はこの兄弟から発せられる殺気のような物に気付いていない。

「トリシユ様の弟君ですか。兄弟揃って楽器の覚えがあるなんて風情がありますね」

ジャンヌさん、違う。お姉さん、そうじゃない。何カーネフェルも平和になったらいろんな人がそういう風に音楽を楽しむ余裕が持てるような国になればいいですねみたいな顔をしてるですか。音楽に携わってるこの人ら、心に全然余裕無いよ。無さそうな顔してるよ。笑顔なの表面上だけだよ。

「でもあんまり似てませんね」

二人の兄弟を見つめ、邪気無くパルシヴァルが呟いた。言われてアルドールもまじまじ二人を見比べる。どちらも繊細というか陰のある美形。ランスのような正統派美形じゃないし、ユーカーみたいな二枚目半でもない。ジャンルとしての美形ジャンルは似ているが、確かに雰囲気が違う。トリシユの方はいつも何処か悲しげな雰囲気があるのに、その弟らしき少年は、不敵な態度というか自信のような物が見え隠れしているのだ。パルシヴァルはそこを示唆したのだ

ろう。少年の笑顔は無邪気と呼んでも良いような可愛らしい物ではあるが、パルシヴァルのような純粹さが感じられない。何か裏があるような、そんな計算された笑顔。

(もしかして……)

アルドールは思う。トリシユが実家に帰りたがらない理由にこの少年も一噛みしているのではないだろうか。

「あれ？兄さんそっちの方々は？……わあ、綺麗なお嬢さんですね。もしかして兄さんの彼女ですか？」

周りを見回し、少年が目に残めたのは聖十字のお姉さん、ジャンヌの姿。

「「違います」」

そして息びつたりと否定するトリシユとジャンヌ。

「私を女などと愚弄しますか？私は歴とした男です」

「お姉さん……」

今は男装している。そこを見抜かれるのは彼女の勘に障ったらしい。なにか変装に関してのプライドがあったのだろう。それでも怒るポイントがよく分からない。

「我が友トリシユ様の弟君と言えども、彼と私の崇高なる友情を邪推するなど許し難い行為です！撤回を要求します！」

何時の間にこのお姉さんとトリシユは親友になったんだろう。今

朝のあのやり取りでこのジャンヌさんの中では愛国の意を持つ戦友ということになったのだろうか？

「あはははは！僕と兄さんが兄弟だって！あはははは！お姉さん、そっちの方がトリシユ兄さんには屈辱ですよ」

そんな彼女の言葉を少年はけらけらと嘲笑う。

「トリシユ？」

「……紹介が遅れました。彼は私の……」

弟なのか？それとも裏をかいて実は妹なのか？その言い辛そうな表情からして腹違いとかそういう設定なのか？どうなんだ？

内心不安になりながらトリシユの顔色を窺ってみる。その先で彼がようやく発した言葉は……

「私の叔父お抱えの胡弓弾きです」

「は、はい？」

俺の想像を超えていた。というか下回っていた。

「え、ええと。それじゃあ彼はトリシユの叔父さんの養子とか？」

「いいえ。養子の許可が下りていないのでお抱え楽師です」

「僕が勝手に懐いて兄さんって呼ばせて貰ってるだけですよ」

にこにこ少年は微笑むが、何か背筋が寒くなる物がある。なんというか俺に優しいイグニスを見たような気持ちの悪さがそこにある。この子は嘘を吐いている。

「へ、へえ……そうなんだ」

「兄さんだつて解らなかつたら、敵かと思つて間違つて殺してしまつところでしたよ、あはははは。でも兄さん暫く見ないうちに琴の腕落ちてませんか？あんまりにも下手すぎて兄さんを騙つた侵入者かと思つて殺そうかなと思つてました」

そして笑顔でとんでもないことを喋り出した。イグニスもこういう事言うけどイグニスは大抵の場合本気じゃなくて照れ隠しだから可愛いんだ。だけどこの子怖い。目が笑つてない。

(なんなんだよトリシュ、あの子なんか怖い)

(申し訳ありませんアルドル様)

面目ないと頭を下げたトリシュ。けれど彼はすぐに殺気を察し…
…俺を庇つて剣を振るつた。

キンと三度響く金属音。思わず目を瞑ってしまったが、恐る恐る目を開けば、トリシュが俺の前にいる。地面には二本の矢。そして楽器の弓でトリシュに襲いかかった胡弓弾き。他の攻撃が失敗したことに彼は軽く舌打ちし、手を引いた。

「あーあ、やっぱり気付くか。楽器の腕落ちた分、剣の腕は上がつてるんですね兄さんは。カミュル！コルチエツト！残念ながら失敗だ。領主様の所まで案内しよう」

少年の言葉に揺れる茂みと木々。木の上から飛び下りて来たのは長いツインテールの少女。それからセミロングの髪の少女とも少年とも言い切れない中性的な子供。服装から見るなら少年と言えるだろうか？並ぶ三人は外見色も顔もそっくり。この三人が兄弟だといふのは何となく解つた。それでも年までそう変わらないところを見ると、解らなくなる。

「な、なんだなんだ!？」

「彼らは三つ子の胡弓弾き。よく言うじゃないですか。黒光りする虫は一匹見かけたら三十匹はいると思えと」

それと同じことですとトリシユは言うけれど、それは彼らの間柄がとても険悪だと言うことを俺に教えてくれていた。

「で、でも三つ子!?! 純血で三つ子って珍しいな……」
「……そうですね」

トリシユは曖昧に笑う。

「シールのじっさは愉快なお人。だけどトリシユの兄さが死んだなら、シールのじっさはやれ愉快」

「シールのお爺は気の良いお人。トリシユの兄ちゃん消えたなら、シールのお爺はますます愉快」

現れた三兄弟の残りの二人は何やら物騒な歌を歌う。トリシユ本人の前でそれはあんまりだ。

「な、なんてことを歌うんだこの子達は……」

「貴方達、ここはトリシユ様の領地なのでしょう? 後見人様のお抱え楽師と言えどそれは無礼ではありませんか?」

アルドールとジャンヌの抗議にも子供達は聞く耳を持たない。愉快気に歌を歌って歩き出す。最初の一人の少年が悪びれなくすみませんねと笑うだけ。

「この子達は僕と違って嘘が吐けない子なんですよ」

自覚はあるのか。やっぱりこの少年も質が悪い。

「……ごめんとリシュ。これじゃあ帰りたくなんかないよな」

「いいえアルドル様。むしろ私は安堵してるくらいです」

「え？」

「ここにあの人を連れて来なくて済んで、ほっとしました」

トリシュが言うのは言うまでもなくユーカーのこと。どうしてここでトリシュが彼の身を案じるのか解らなかったから、それ以上の追求はしなかった。

三人の楽師に先導されるまま、馬から下りてゆっくりと歩みを進める内に、段々遠くに城が見えてくる。街に踏み居れば、彼方此方から楽器の音色。なんだか変わった雰囲気の街だ。

「ここがトリシュの実家か……チェスター卿も音楽が好きなのか？」

「……ええ、まあ」

トリシュは曖昧に頷く。耳を澄ませば街の彼方此方から……聞こえてくるのは弦楽器。それでもその中に琴の調べはない。ヴァイオリンにビオラにチェロにコントラバス。ハープもリラもそこにはない。

何だか肩身の狭さを感じつつ、三兄弟に案内されて城の内部まで踏み込んだ。

「シールのじっさ！客人さね」

「シールのお爺！お客人」

ツインテールとセミロングがパタパタと駆け寄る先には一人の老人。彼が奏でているのもヴァイオリン。三兄弟で一番物をしっかり

と話す少年が、彼の足下に跪き、此方を振り返る。

「チエスター様、トリシユ兄様がお帰りです」

「トリシユだと？」

その一言に老人は、奏でることを止めてしまう。

「お久しぶりです、シール叔父さん」

「何をしに来た」

トリシユを見る老人の視線は冷たい。それでもそこには静かな怒りが宿っている。

「……大事な用があつて参りました」

トリシユが人払いを目で訴える。それを悟った老人は、三人の胡弓弾きを下からせる。

「それで、用とは？」

「……こちらの方は私の仕える新たなカーネフェリア様。カーネフェル王アルドル様にございます」

「カーネフェリア？……この少年が？」

王には子がなかったはずと言う老人に、トリシユはその遠縁ですと説明してくれている。でもそんなあやふやな話、誰が信じてくれるだろう。今は俺の身元を証明してくれるイグニスもない。

「彼の青をご覧下さい！こんな深い青！カーネフェリアの他にあり得ません！」

「馬鹿者が！目などいかようにも誤魔化せる！最近セネトレアで

は目玉まで商品にしている業者がいると聞いたぞ！？その辺の田舎者を拾って王に仕立て上げたのだろう！聞けばお前は腐れ都貴族に顎で使われているそうではないか！」

「そ、それは……」

「これだから豎琴なんかに現を抜かす輩は駄目なのだ。楽器と言えは胡弓だろうに！琴弾きにはろくな奴がない！お前然り！あの男然りだ！心根の浅ましさが滲み出るようではないか！」

そんな些細なことで咎めるなんてなんて人だ。この人はほんの少しの違いさえ、トリシュの苛立ちへと変わってしまったのである。

「チエスター卿、貴方の言うことはもつともです。ですから私のことは構いません。しかしそんな不甲斐ない私に仕えてくれるトリシュのことを悪くは言わないでいただきたい。私が都から落ち、今日まで健在なのは彼らのお陰です」

「アルドール様……」

「何一つ誇るところのない私が持つ誇りが私の騎士です。彼への侮辱はこのカーネフェル王への侮辱と知っていただきたい」

ここでアルドールは我に返った。思わず感情的になってしまったが、この場の静まり具合と言ったらなんだ。もしかして言い過ぎてしまっただろうか？ただここで弱みを見せたらトリシュにとっても良くないはず。

あの城のことを尋ねたかったのだけれど、彼に俺を信じて貰うには、あの城を落とすくらいのことを行わなければならないように思う。何にしる、今は不味い。彼には頭を冷やして貰う時間が必要だ。

「本日の用はまた改めさせていただきます。突然の訪問、失礼しました」

そう告げてこの地を預かる老人にアルドールは背を向ける。それに続いて他の三人も。老人は此方に何も投げては来なかった。

*

「何て言うか……ごめん、トリシユ。俺の所為で余計チエスター卿と話辛くなっちゃったよな」

街の宿に腰を落ち着けて、アルドールはトリシユに謝罪した。謝らずにはいられなかった。家族間の気まずさは、自分もそれなりに知っているつもりだったから。

「いえ……」

優しい騎士はそれを責めずに首を振る。そして微笑してくれた。

「少し、気が晴れました。私の代わりに叔父さんに色々言っておさつてありがとうございます。……私はランスやユーカー程、貴方のお役に立てていないと言うのに、あんな勿体ないお言葉……」

「そ、そんなことないよ！トリシユはよくしてくれている！」

「そうでしょうか？」

「うん！俺はトリシユの豎琴、結構好きだよ。綺麗だし」

「……………ありがとうございます」

会話が続かない。俺もトリシユも今一歩踏み込めない。俺にはユーカーみたいには出来ない。ああいう強烈な個性がない。強く言えない。沈んでいる彼をちゃんと励ましてやることも出来ない。彼もそうなのだろうか。美味しく言葉が作れなくて、それに頼るように豎琴へと手を伸ばす。……それはとても悲しい調べだった。やっぱり

俺の言葉では彼を救えていないんだろう。

「アルドール様、ちょっといいですか？」

「え、あ。はい」

聖十字のお姉さんに呼ばれて、俺とパルシヴァルは部屋を出る。今は一人にしてあげるべきという、彼女の気遣いだったのかも知れない。彼女は教会に身を寄せているという仲間に会うべく、街に教会を探しに行くと言う。俺達もそれに付き合うことにした。そんな行き道で……彼女がぽつりと切り出した。

「私には大切な友人がいます」

「え……？」

「仲間ならば大勢いますが、心から親友と呼べる相手は彼だけでしょう」

街を歩きながら、お姉さんはそんなことを言い出した。

「彼とはとても気が合って、こうして違う場所においても、同じ方向を向いているのだと信じられる。そんな相手です」

心地良い風がお姉さんの髪と、耳に揺れる十字架の耳飾りを優しく揺らす。

「そんな相手のことでも、私は解らないこともあります。彼が沈んだ時に、どう語りかければいいのか解らないことが何度もありました」

「……そう言うとき、お姉さんはどうした？」

「どうだったでしょうか」

「え？」

「そのままそつとしておいたこともありますし、無理矢理剣の稽古に付き合わせたこともあります。十字法と国法全書を彼の前へと叩き置き、その暗唱特訓を挑んだこともあります」

「え、ええと」

「要するに考えるだけ無駄です。思ったままに貴方がしたいこと、してあげたいこと。それを選べば良いんです」

「でもそれって……」

「それが嫌なら言ってくれますよ。貴方は相手を思うあまり、相手にその言葉すら言わせられないようにしている」

俺が周りの人々と上手くやれていないのはその所為だと指摘され、はつとするものがある。

イグニスには……イグニスが人の心を読むこともあり、俺がそれを恐れないこともあり上手くやれている。イグニスははつきりと俺に駄目だと言ってくれるから。ユーカーもそうだ。いつも俺を悪く言ってくれる。それでも助けてくれる。だから少なくとも嫌われではないんだって思う。それは俺が彼らが好きだからで、彼らが自分に懐く相手を邪険にするような人間ではないからだ。

俺はまだ他の騎士達をユーカーほどには知らないのだ。ランスのことは少しは解ったつもりでも、やっぱり踏み込めない場所があった距離がある。トリシユは……自分のことを話さない。いつも愛しのイズーのことしか口にしていなかったから。彼の悩みはきつと恋くらいなものだろうと勝手に決めつけていた。

(でも、そうじゃなかった)

だからどう対応すればいいのか解らなくて。あんな悲しそうなりシユを立ち直らせることも出来なくて、こうして逃げてきたんだ。俯く俺の頭にまだまだお姉さんの言葉は続く。

「私は貴方のそう言うところが嫌いです」
「うっ……、うっ……ごめんなさい」

いきなり嫌いと言われる。これはこれで結構ダメージが大きい。俺はこの人に好かれるようなことは何もしていないけど、嫌われるようなことはして来てしまったんだな。そんな風に思っただけ。けれどお姉さんは、落ち込む俺を見て小さく笑う。

「それでもアルドル様。私は先程の……貴方の言葉は好きです」
「え……」

「チエスター卿の前で貴方が語った言葉は、トリシュ様の胸にも響いたのではないでしょうか？」

「で、でもあんな……俺の自分勝手な言葉」

「アルドル様。王も一人の人間です。心無い人に誰が国がついてきますか？」

お姉さんは不思議な人だ。純血で、数術使いでもないのに……イグニスみたいな事を言う。同じ聖十字の人間だから？それでも違う。アージン姉さんはこんなことは言わなかった。

「私は機械的な正義を説かれるより、心ある温もりのある正しい言葉が好きです」

王は人形でも機械でもない。王は人間。貴方も人間なのだと言われた気がする。それが昔のギメルの言葉に僅かに重なって、涙腺が緩んだから俺はを空を見上げた。そこに何かあるのかと彼女は尋ねるように、彼女もまた空を見上げて……同じ物を見出せなかったのか、静かに俯いてから……そっと、俺を振り返る。

「……………貴方の手、触ってみても良いですか？」

「え……」

真意が分からず、それでも断る理由がないので戸惑いながらも俺は聞き手を差し出す。手袋の下の文字をそこから見つめるように、お姉さんが俺の手を取る。

「カードを、見せて頂いても？」

「……どうぞ」

「やっぱり貴方がカーネフェル王なんですね」

刻まれたAの文字を見て、彼女は悲しそうに笑う。

「何かの間違いなら良いなと思ったんです」

「……え？」

「シャトランジアで、貴方は不思議なことを言いましたよね。まるでカーネフェルが自分の物であるかのように私にお礼を言ってくれました」

「あ、ああ……」

「貴方の目の色は、とても深い青だった。けどまさか貴方みたいな子供が王だなんて私は信じなくなかった。……アルドール様はお幾つですか？」

「今が15です」

「そうですね。それならばまだまだ解らないことも多いでしょう。これから知っていけば良いんです。貴方には未来がある。時間がある。カーネフェルは終わらせない。私が貴方をお守りします」

お姉さんは俺の足下に跪き、俺のカードを見つめる。

「私を貴方の軍に加えてください。この私のカード、私の魂。全

身全霊を賭けてこのカーネフェルの未来を守らせてください」

「俺は……嫌だよ」

「どうしてですか？」

「俺は……もう目の前で女の子が死ぬのは見たくない」

これ以上何かを抱え込みたくはない。だって失った時が辛いんだ。強いルクリースだって死んだ。姉さんだって死んだ。死んでないのは男のカードばかりだ。だからこのお姉さんを俺の傍で戦わせれば、きっと死なせてしまうよ。イグニスが帰ってきたら早くこのお姉さんのこれからをイグニスに丸投げで放り投げて……

(駄目だっ！)

いつもそうやってイグニスを頼って。何もかも責任押しつけて！ そんなんじゃない駄目だ。いつまで経ってもイグニスの望むような俺に、王になれない。

抱え込んでその全て守れるような男が王。だけど俺は弱いから、抱え込んだら潰れてしまう。まだ俺は理想の王になれていないのだ。

「私はカードです！女などとお思いになりますな！」

「それでもお姉さんはお姉さんじゃないか！」

侮辱のつもりはない。強い女の子が一杯この国にいるのは知っているよ。男でも俺みたいなへたれは沢山いるし、ユーカーみたいに逃走癖のある奴だっている。

それでも、思い出すんだ。男の俺なんか未来を上手く思い描けない。これと言って夢もない。だけど女の子は違うだろう。近い夢も、遠い夢も、しっかりとイメージ出来るはず。

「俺の姉さんも……聖十字で。いつつも男勝りで女の子に人気が

あつて……何一つ女の子らしいことが出来なくて」

姉さんは何時だつて自分に嘘を吐いていた。本当は良いところのお嬢様なんだ。綺麗なドレスを着たかつただろう。それなのにかつちりとした軍服に身を包み禁欲的に生きて。

女の子なんだからさ、格好いいなんかより可愛いつて言われたかつただろうな。俺があげたりボンを、嬉しそうにしていたじゃないか。

姉さんの夢を俺は知っていた。知つていて逃げた。イグニスと言う未来の一つでは、それは叶つていたのだと言う。だけどそれさえ、カードは派閥に分けて……政治の駒にしてしまふ。俺はどうあつても姉さんを幸せには出来ない情けない男だ。

「俺はそんな姉さんを、いつも傷付けて生きていた。姉さんは優しい人だつた。だけど俺は何一つ姉さんに報いてあげられないまま……姉さんは、道化師に殺された」

「道化……師？」

このジャンヌさんも道化師を知らないから言えたんだ。確定している。コートカードのお姉さんでも、道化師には勝てない。ジョーカーは最強だ。ルール上勝てるはずの俺ですら一太刀も浴びせられなかつた。

(そつだ……)

あの道化師は、俺の傍の女の子を快く思わない。殺そうと思えば殺せただけだ。俺のこともユーカーのことも。それでもターゲットを姉さん、フローリップ、ルクリースに狭めて来た。

「道化師は、俺を憎んでる。俺と親しくなつた女の子は道化師の

標的になる。だからお姉さんも危険だ。俺の傍にいない方が良い。カーネフェルのために戦ってくれて言う気持ちは嬉しい。だけど……」

「アルドル様。それでも私を女と言いますか？」

「え？」

解いた長い髪を、手にした剣でぱつぱりと切る。折角の綺麗な金髪が風にながれて飛ばされる。

「つまり私がこうして男装していればなんの問題もない。違いますか？」

「ああああ！勿体ないっ！折角の綺麗な髪がっ！」

「髪なら何時でも伸ばせます。それでも貴方に仕える許しを得るチャンスはそうそうありません」

「でもっ！」

「なら、無くした髪の代わりに貴方の長い御髪を梳かし、結び、整えさせてくれる権利を私に与えてくださいますか？」

微笑むお姉さん。それはやっぱり傍に仕えることを俺にせまる言葉だ。

「お、お姉さん狡いっ！」

「その呼び方では道化師に私の正体がばれてしまうので、お控え下さいアルドル様」

「うううう………と、兎に角！俺の一存じゃなんとも言えない！ジャンヌさんは聖十字の関係者なんだからイグニスに話を通さない。この件は神子が帰ってくるまで保留！」

「はい」

俺の言葉に、お姉さんは小さく笑って頷いた。俺の答えが子供み

「ただだったからだろうか？自分じゃ何一つ決められない情けない奴だと思ったからなんだろうか。」

「……俺はお姉さん、ジャンヌさんみたいに立派な人じゃない。王にはなつた。だけどまだまだこの国のことをよく知らない。俺が守りたいと思ってる物はお姉さんが考えている物と今は全然違っても知れない。そんな情けない俺が、貴女みたいな人の王にはなれないよ」

「カーネフェルを良く知らないのですか？」

「俺、カーネフェルに住んでた頃の記憶がないんだよ。シャトランジアには養子奴隷として送り込まれて。なんでもセネトレアで脳味噌弄られたみたいで、昔のことは何も解らない。本当の名前も家族のことも」

「……アルドル様」

「でも俺は、別にそれが可哀想だとか思わない。今の俺には大切な友達が、仲間が……ううん、友達になって欲しい人が沢山いる。それって凄く幸せなことなんだ」

「哀れまれない訳じゃないんだ。それだけは彼女に断っておく。同情されたくはない。だって俺は十分、アルドルとして幸せだ。この名前で出会った人、呼んで貰った人。今でも耳に残ってる。呼ばれる名前はこれなんだ。だから俺は俺の今が過去より大事。」

「……ただど世の中には俺みたいな馬鹿で幸せな奴だけじゃない。可哀想な人は幾らでもいる。それを生み出しているのが戦争と奴隷貿易……そこから起こる人の価値の格差、それに始まる人種差別。すべてはその二つを解決しなければ意味がない」

「……戦争と、奴隷貿易」

「俺が王になりたいって思ったのはそこなんだ。その二つのシステムは、俺の大事な人を何人も傷付けた」

俺は可哀想じゃない。それでも俺大事な人達を傷付けたその世の中の仕組みが許せない。

イグニスとギメルが奴隷になったのは、混血に価値を見出す風潮。二人が父親の顔を知らないのは戦争の所為。

奴隷商から守った混血の子供達。彼らが家を家族を失ったのも戦争と奴隷貿易の所為。俺が養子に入ったから、姉さんもフローリプも……長らく暗い影を宿した。純血至上主義がユーカーとアスタロツトさんを引き裂いた。

「誰かが言ったんだ。夢でだけどさ……人はみんな最初は無意味で無価値なんだって。それで頑張って生きて生きて……やっとならぬときになって意味と価値を宿すんだって。でも俺はそうじゃないと思った。だけどそうであるべきなんだと思う」

「どういうこと、でしょうか？」

「人はみんな無価値なんだ。値段を付けるべき者じゃない。血とか目の色とか髪の色とか、そうやって何が優れているとか決めつけては駄目なんだ。……そう言う意味ではみんな無価値で無意味。意味なんかない」

あの空が何色だってあれは空だ。それ以上の意味はない。それと同じだ。それを美しいと思うのも醜いと思うのも人の心だ。

「みんな、意味なんかないんだ。だけど俺には大切な人がいて、俺はその人達が大好きだ。だから俺はその人達を守りたいと思う。死なせたたくない。少なくとも俺にとってその人達は無意味でも無価値でもない。その人達にとって俺が無意味でも、無価値でも……俺がその人達が好きなんだ」

俺を見下ろすあの空は、遙かに漂うあの海は、俺を何だと思って

いるだろう？何とも思っていないだろう。そんなちっぽけな俺だ。でもその俺はあの空も、あの海も綺麗な青だなあと思う。俺の片思いだ。でもそれで良いんだ。馬鹿な俺はそんなことにさえ、幸せを見出せるだろう。

「死んで、死なせて……殺されて。それが意味になるなんて認めない。生きててそこにいるだけで、意味はあるんだ。俺にとってその人達は。だから守りたい。そうやって大切な人を増やして守れるようになれば……俺はその時やっこの国を守る奴になれるんじゃないかなって思うんだよ」

「……………そうですか」

「俺の考え方は変だろ？びしっと格好良く王様になれない。俺が強くないと、俺は守りたい者ばかり増えて、どんどん駄目になる」

「いいえ」

お姉さんが笑う。笑って俺の手を取った。

「カーネフェリア様。貴方は強い。強くなれます。王に仕える者が、貴方の力です。守りたい者を増やして良いんです。騎士様が、私とその人達を守っていきます」

「でも俺が王なのに……………」

「ですからアルドル様、どうか良き王に。良き人であってください。心を忘れず、人のために悲しみ、人のために怒ることが出来る貴方は十分王たる資格があります」

王の仕事は戦うことではない。正しく人を導く指針であることだと彼女は言う。

「人が心を無くした時も、貴方はその優しい心をお守り下さい。」

どんなに強い騎士様の剣でも、貴方の心までは守れないのです。貴方が守るべきは貴方の心に他なりません」

たったそれだけ。それだけでいい。後は全て仕える者が守ってくれる。守ってみせると彼女は言った。

「アルドール様。多くの人は自分のために嘆き、自分のために憤る。他人なんかお構いなし。自分さえ良ければそれで良い。そんな王は最低です。そんな私欲の王が国を腐らせ民を殺すのです」

「ジャンヌさん……」

「私がお嫌いですか？アルドール様」

不意に彼女は妙なことを聞いてくる。そして嗚呼、と気付いた。彼女は俺に問いかけている。私は貴方の民ですか？貴方の民になりますか？と。

どうだろう。嫌いではない。尊敬できる部分が沢山ある。だけど……まだよく分からない。だってまだ彼女のことはよくは知らない。いきなり好きだなんては思えない。

「嫌いじゃないけど……苦手、かな」

「どの辺りがですか？」

「その、様付けとか。俺そう言うの駄目なんだ。お前とは絶対に友達になりたくないって言われてるみたいで。敬語が癖っぽい騎士のみんなはもう諦めてるけどさ。立場もあるし。ランスとかトリシユはオンオフの切り換え出来そうにない堅物だし」

「ふ、ふふふふふ、あははははははは！」

「お、お姉さん？」

俺の言葉に突然蹲るお姉さん。両腕でお腹を抱えてせえせえと呼吸がおかしくなるほど笑い転げている。

「あ、す、すみません。ちょっと、可笑しかったもので」
「ち、ちよつと……ちよつとですか」

そんな泣くほど笑わなくても。

「それならアルドール、私も貴方が苦手です。さん付けされるのは私もお前とは絶対友人になりたくないと思われているような気がして憤慨です。敬語が癖の騎士様ならば兎も角、敬語が似合わないやんちゃ坊主みたいな外見の貴方に敬語を使われるのは違和感が迸り全くもつて遺憾です」

「そ、そこまで言うっ?」

此方を真似てアレンジされた言葉に、アルドールも忍び笑う。

「俺は外見は確かにそうかもしれないけど、実は結構繊細なんだぞ!??」

「ええ!そんな気はしていません!釣り目なのにそんな感じがしない雰囲気がありますよね」

「あはははは!そっか」

「ふふふ、そうですよ」

よく分からない応酬で、何故か俺達は笑い合う。久々に笑った気がした。イグニスとかユーカー以外の誰かの前で。ここまで大笑いしたのは……前は何時だったかな。

「……ありがとう、ジャンヌ。何か元気出たよ。これならトリシユにも何か気の利いたこと……は言えないかも知れないけど、こいつ馬鹿だなぁって吹っ切れさせられるような馬鹿なことは出来そう
な気がする!」

俺が頷き礼を言うと、彼女はどういたしましてと小さく笑った。

「アルドール、相手のことを考えても言葉にして貰わなければ解らないこともあります。その言葉を引き出すためには行動です。見たところあなた方はそのどちらも不十分に私の目には見えませんでした」

「……行動と言葉、か」

どちらが不足しても伝えたいことは伝わらない。目から鱗だ。今まで俺はそれを怠っても何とかなる環境にいた。イグニスの方とユーカーの状況把握空気読みスキルに甘えていた。

「そっか……そうだよな」

フロアリプとだって、俺が俺の言葉を押しつけるだけじゃなくて、俺が聞けば良かったんだ。俺のことをどう思っているのかとちゃんと聞いてあげれば良かった。それを無視したから俺達は、拗れてしまったんだ。あんな風にまた誰かが道化師の餌食になつては嫌だ。俺は俺の言葉と行動を磨く必要がある。

「ありがとう、ジャンヌ」

改めてもう一度お礼を言う。今度は行動も添えて。

俺が差し出した手を、彼女は近づき手を取って……握手に応えてくれた。

「友に助言するのは当然のことです」

「……そっか」

いきなり友人認定を貰って気恥ずかしくなり、手を離す……が何

か気まずい。気まずさから周りをキョロキョロ見回して……俺は血の気が引いていく。

「ぱ、パルシヴァル！？何処行っただんだ！？」

会話に夢中になっていた俺達は、後ろ……いや、前？あれ？うるちよろしてたよなあの子。……と、兎に角歩いていた少年の姿を見失っていた。

ジャンヌの方を見れば彼女も顔色が悪い。俺達は熱く国について王についてなんて語っていたが、子供にとっては退屈だろう。欠伸物だ。愉快的音楽にでも誘われて何処かにふらふら出掛けていつてしまったのだろうか？

「大変だ！あの子に何かあつたらユーカーに殺される！」

「セレストイン卿がですか？」

「ユーカーは俺には基本冷たいけどみんなに親切だし彼には本当に優しいんだ！可愛がつてるんだ！」

「私は恩人である彼を見直すべきなのか軽蔑すべきなのでしょうか？」

「今のは褒めるところだよ」

「ならばそうしておきます」

来た道を引き返す？いや、先に行つたかもしれない。そうだ。最後は俺達を追い越して歩いていた気がする。街の外れまで走って、それでもまだ彼は見つからない。

「おーい！パルシヴァル！何処に行っただんだー！？」

「おーさまー！こっちですー！」

いや、聞こえた。そんなに離れていない場所から声がする。

「アルドール！あれを！」

「パルシヴァル！」

見れば彼はズルズルと何かを引き摺っている。それは彼よりも大分大きい。近づいてみればそれが人間なのだと解る。

「ら、ランス！？どうしたんだ！？凄い怪我じゃないか！」

数式を展開。一時的に傷を塞ぐことしかできないけれど、応急処置にはなる。治療を始めれば、彼が薄く目を開く。

「アルドール……様っ……」

「喋らないで！話は後で聞きます！アルドール！今はすぐに宿に運びましょう！」

「あ、ああ！」

それなら俺が背負おう。そう思った。けれどジャン又は自分より背丈のあるランスをさっと抱える。鍛えているのだろう。そんなに筋肉があるようには見えなかったけど、鎧に隠れていて見えないだけだったのかもしれない。

それでも颯爽と彼を抱える彼女は格好良い。再び姉さんに憧れた聖十字兵達の気持ち解る。ルクリースがいたら鼻血が大変なことになっていそうな図だ。

(って違うだろ！俺の馬鹿っ！)

ランスは大丈夫なんだろうか。どうして彼が一人でこんな所に？

「パルシヴァル、何処で見つけたんだ？」

「風のお姉さんに呼ばれて、行ってみたらランスさんが海辺で倒れてたんです」

「風のお姉さん？」

「はい！船の時から僕の心配をしてくれていて、それなら丁度いいって神子様が僕の遊び相手につけてくれたんです！」

「まさか……精霊！？」

よくよく目を凝らしてみれば、少年の肩に小さな妖精みたいなものがある。ランスの養母みたいにはつきりとは見えない。見せる気がないのか、はたまた風の化身だからなのかは解らない。

(イグニスめ……)

唯で姿を消すようなことはしないってわけか。本当に頭が上がるな。それでも今はそのイグニスの行方も知れない。ランス共々心配だ。

「トリシユ様！この辺りにお医者様はいらっしゃいませんか！？」「何事ですか？……ら、ランス！君は一体何を！？」

突然の騒ぎにトリシユは、大あわてで宿の部屋から飛び出して来てくれた。友人の有様を見て彼もまた狼狽えるが、それに落ち着けと言わんばかりの冷静な声が響く。それはランス自身の声だった。

「……手当の道具だけ頂けますか」

「ランス！無理はするな！」

「大丈夫です、アルドール様。俺は数術使いですから」

意識を完全に取り戻したららしいランスは、すぐに自ら回復数術をかける。それでも深い傷だ。完全には治せなかった。今の体力では

逆に負担になると考えてのことか。傷口の手当てを彼は渡された薬箱でどうにか誤魔化している。

とりあえず安静にするようにとベッドを占領させたが、そんな彼を見ていると心配にもなる。

俺が慌てふためくことで、トリシユは落ち着いたのか今はどっしりと構えてくれている。

「……ランス、何があったのか話してくれるね？」

「……俺は神子様と……沿岸に向かったタロツク軍を叩く予定でした」

「そこを追いかけてきたユーカー。彼を囷に使い、相手の情報を探らせながら、俺達は停泊してあった聖十字の船を調べに行き……その船の傍に潜んでいた聖十字兵達と合流し、海に出ました」

「……ジャンヌ、船の人達は領内に逃げたって話じゃなかった？」「ええ、ですが船は一艘だけではありませんでした……私達以外にも上手く上陸出来たものがあつたのかもしれない」

「上手く上陸……？」

「……それは後でお話しします」

今は彼の話をと伏せられて、確かにそうだとアルドールはすんなり引き下がる。

「ランス、続けて貰えるか？」

「……はい、……イグニス様はシャトランジアに援軍を呼びに行くおつもりだったのです。アルドール様達が湖城に仕掛ける。その陽動に、沿岸のタロツク軍も帰るはず。そこを逆に挟み撃ちにする。そんな策でした」

「……うん」

渋るようなランスの言葉。嫌な予感がひしひしとする。額に汗が浮かんできた。

「その船をエルス・ザインに襲われました。彼の数術で船は壊され……神子様と言えど本調子ではないあの方には、全ての人間を空間転移させることは出来ませんでした」

「イグニス様……」

「……俺は、俺が飛ばされるところまでしか伝えられません。イグニス様は、俺が見た限りでは、最後まで船にお残りに……」

「………そっか」

「アルドール様……」

そんな不安げに俺を見ないでくれ。虚勢が剥がれ落ちてしまいそうだ。

すうと息を深く吸い込んで、俺は精一杯笑って見せた。みんな不安なんだ。俺がすっかりしないと。

「伝えてくれてありがとうな、ランス！イグニスなら、絶対大丈夫だよ！なんとたって俺の自慢の……自慢の親友なんだ！絶対何とかしてくれる！」

「アルドール様………」

「俺が信じなくてどうするんだよって話だよ。だからランスは気にするな。ゆっくり身体、休めてくれよ。俺、何か食べる物でも作ってくるな！」

そう言い残して、部屋を出る。それだけで息が荒い。上手に息が出来ない。廊下に蹲る。でも駄目だ。みんなに見られる。

もつと離れないと。震える足で立ち上がり、壁にもたれて遠くを目指す。そうして歩いて何歩めか……壁がない方の肩を誰かに支えられていた。

「え……？」

「私は壁です。お気になさらず」

ジャンヌだ。微笑む彼女は、俺に肩を貸してくれていた。

「調理場まで、ですね？」

「……うん」

調理場で顔を洗って気分を落ち着ける。その間に彼女はコップに冷たい水を用意してくれていた。そして何も言わずに椅子に腰掛けしている。彼女は聞かない。今は言葉ではなく行動が俺には必要だと考えたのだろう。それじゃあ、俺は……

「……イグニスは、俺の一番の友達なんだ」

なんとか絞り出した第一声。それはそんなものだった。

「一番の？」

「どっちでも一番。一番最初に出来た友達で、一番大事な友達で……」

まさかあいつが神子になるなんて思わなかった。……俺は王になるとか国を救うなんて、最初は全然考えて無くて……。そんな俺が王だなんて、この人から見れば笑い話だよな。

「俺はイグニスとギメル……大事な友達を助けたかった。償いがあった。また、昔みたいに三人で……笑える日が来ればいいなって。そんなことをカードに願った。だから俺はジャンヌみたいに最初から国とか誰かの幸せを願ってカードになっただんじやない」

「貴方はその友達に、何かしてしまったのですか？」

「したなんてものじゃない。俺は許されなかったことをした。俺がしたんじゃない。でも俺がしたんだ」

「……え、ええと？」

「友達は、選べって……母様が、言ったんだ」

意味が分からないという彼女に、言葉を改める。

「二人は母様にセネトレアに送られた。奴隷として売り飛ばされた。俺なんかと友達になった所為で！二人は辛い思いをしたんだ。貴族の家の息子が、移民なんかと友達になっちゃいけないって。馬鹿みたいな話だよ。俺だって元は奴隷上がりだっていうのに。血とか身分とか、そんなの、笑い話だろ？」

「……そうですね。馬鹿げています」

「そんな辛い目にあって……それでもイグニスと言ったんだ。この世界を変えたいって。もう誰もあんな悲しい思いをしないようにって、俺に力を貸してくれって……」

俺はあの日あいつに言われなかったら、王になっていなかった。すぐに殺されて死んでいた……何も知らないまま、俺は死んでいたんだ。

「俺がいろんなことを悩んだり考えたり出来るのは、全部イグニスのお陰なんだ。イグニスが俺に世界を与えてくれた」

「……それでは」

「心配なんかしてないよ。イグニスは強いし、何でも出来るし……それに俺、嬉しいんだ。昔のイグニスは……ギメルのことしか頭がない奴だったのに。イグニスの世界も広がったんだ。イグニスはランスを助けてくれた。……それがっ、イグニスの成長が見られて、

俺は……すごく、嬉しい……嬉しいのにつ……」

そつだ俺は嬉しい。本当に嬉しいんだよ。幾ら言い聞かせても、もう涙が止まらない。堪えられる量を越えてしまった。ボロボロと両目から次から次へと溢れ出す。

「変だよな。……俺、嬉しいのに、どうして」

「アルドール……無理にプラスに考えることはありません。貴方は王ですが、人です。部下の前では王として、強がるのは良いでしょう。それでも私はまだ貴方の臣下ではありません。だから今、貴方は王ではなく人であるべきです」

「……………」

「アルドール、貴方は友人に嘘を吐くようなそんな軽薄な人なのですか？」

「違うっ……」

「それではアルドール、貴方は今……？」

「悔しいよ！悲しいよ！何も出来ない！助けられない！力になれない！肝心な時っ！俺がっ！何時も助けて貰ってばかりで！俺が助けたかったのにつ……俺は何も知らないで！何も出来ないでっ！」

導かれて、吐き出された言葉。胸の内。それを聞いた彼女は、優しく俺の頭を撫でる。まるで子供にするように。

「……………アルドール、貴方は王です。立派な王です」

「……………俺が？」

こんなボロボロと泣いている、情けない俺に何を言っているんだろつこの人は。

「貴方が責めたのは自分自身。その怒りがあの騎士様へ向かわな

かったこと。それは十分立派な王の証です」

「だってランスは何も悪く無いじゃないか。船を襲ったエルスだつて……これは戦争なんだし、悔しいけど……起こり得ることだよ」

命令されたのならば、従うのが彼らの仕事だ。目の前で残酷な行為をされれば俺も怒るが、船を沈める、それは仕方のないことだ。援軍を呼ばれて困るのは彼らにとって切実な問題だから……そう、起こり得ること。それに気付けず何の対策も練ることが出来なかった自分が俺は許せないのだ。

「……驚いた。貴方は敵も憎んでいないのですか？」

「だって、敵だって人間じゃないか。色々あるよ……生きていれば」

「……不思議な人。子供みたいで、貴方は時々大人よりも遠くを見ているみたいです」

そんな風に不思議だと、俺を見る彼女の目の方が……近くを見るよつで、何処か遠くを見つめている。そんな風に俺には見えた。涙で視界が揺れていた所為だろうか？

解らない。だけど鼻水まで垂らし出した俺を見て、自分のハンカチで鼻を拭ってくれる彼女は優しい人だと思った。涙はそのまま流すことを許してくれるのだから。

(この人は……)

自分は女だから守られる存在だとは言わない。そして同時に男だから泣くとも言わない。俺から見ればこの人の方が、ずっと不思議に見えていた。

17: Non mihi, non tibi, sed nobis .

(後

トリシュ回に見せかけて、ジャンヌとアルドール回。
いちやついて……は、いないかな。

イグニス好きの友人に絞め殺されそうな回だ。

それは当たり前のように。

思い返せば昔の彼らはよく一緒にいた。彼らは兄弟みたいなものだから仕方のないことだとはいえ。

それが昔の僕にとって……いやつい最近までの僕にとってはとても気に入らないことだった。今とは大分違う意味で。

あの頃の僕は、数少ない友人が彼が傍にすることで奪われてしまうような気持ちになっていた。事実、彼らは友人と形容することに違和感を覚えるような親しみを持つ間柄だ。親友兼悪友とも言えば六、七割程度は言い表せるか。

要するに数いる彼の友人の中でも彼はとりわけ変わった存在だった。よく知ればそんなことも無いのだが、基本完璧人間の彼にそぐわないその相方の存在に僕は苛立っていた。今思えば心ない言葉を口にしてしまったことも多々あった。その目の色を自分と比べて人として自分の方があの完璧な彼の親友に相応しいとさえ思っていた。

そりゃあ、簡単にイズーが僕に振り向いてくれるわけがない。これまで僕は幾度だって彼を傷付けてきたんだものね。しかし飛んだしっぺ返しがあったものだ。カードになる前と後、僕の世界は認識はあまりに変わってしまったている。

今にして思うと、彼は少し僕と似ていたのかもしれない。不器用で、人に勘違いされて溝を作ってしまう。誰とでも打ち解けられる訳じゃない。だからこそ。だからこそ僕も彼も友人という物が大事だったんだね。故郷を遠く離れ心細い時に、あの頃はまだ他に縋れる物がなかったんだ。

こんな僕を薄情だと君は責めるだろうか？

それでも変わらないものなんてない。風変わりな君だっていつかは変わっていくだろう。いや……もう変わってしまったている。昔の

君と今の君とではまるで別人だ。アルト様が亡くなった今の君は、彼の亡霊に取り憑かれてしまっているみたいだよ。君は僕より彼より情に厚く、薄情な人間ではない。故に君は誰より王に依存していたんだろう。

そんな何者にも動かせないような、強い意志を持った君だ。そんな君でさえ変わるんだ。それでも僕は変わらないものを見つけたよ。君の相方は、本当に変わらない。時々本当に人間が怪しくなる位、彼は頑固だ。

昔と変わって最近は何も変わらない。昔も今も君のことばかりを考える。命というカードも君のためなら投げ出せるのだから。泣けるほど友情に厚い男がいたものだね。君が彼のために命を投げ出すなんてあり得ないのに、彼は君のために死んでくれるんだってさ。

だけど君はそれに感謝もしないんだろう？

その死を悼んですらくれないんだろう？そして君は笑うんだ。さも、それが当たり前のように。

*

こともあろうに、こともあろうに！ランスっ！君がそれを言うのかい！？

トリシユは怒りを抑え込む。そして今言ったことをもう一度言うてくれと友人へと告げた。

友人は些か奇妙に思ったようだが素直にそれを繰り返す。

「それで、ユーカーはまだここには来ていないのか？てっきり先に其方に戻ったと思ったんだが」

どうやら聞き間違いではなかったようだ。嗚呼そうだ、聞き間違いなどではなかった。

「一つだけ言わせてくれ」

「何だ？」

「僕は今日ほど君が無神経な人だと思った事はないっ！」

彼は君が心配で追いかけていったんだぞ！？それなのに何だあの言い草は！

君のみを案じて飛び出していったあの子を。君と神子様に囮として利用された彼のこと、心配もしていない。

「イズー……」

部屋の窓辺に腰掛けて空を見上げる。彼もこの空の下で、空を見上げているのだろうか？

君は今どこにいるのだろうか。危ない目に遭ってはいないだろうか？

「いや、君なら余裕で撃退してそうだけれども」

幻想と現実がイメージの中でぶつかり合う。彼は弱そうで強い。強そうで弱い。そのイメージはどちらも間違いではない。あの人は、がさつに見えて繊細だ。そんな危うい人なんだ。それを誰より知っているだろうあの男が、何故あんな事を言うのだろうか。それが信頼だというのなら……

「アルドル様」

同じ、親友への信頼を口にした彼と彼。その態度はここまで違う。アルドル様はイグニス様を信じようとして、信じられていないからあんなに不安そうだったのか？それでも気丈に振る舞う彼には胸を打たれた。

その直後にランスは、「まだ帰ってきていないのか？」それとも昼寝でもしているのか？そんな軽いノリで彼のことを聞いてきた。先程まで僕はランスのことも本当に心配していたのに、一瞬でその心配も無に帰った！

あれが信頼だつて？あれが友情だつて！？違うだろう！？あんなのは違う！よく躩けた犬やら鳩やらペットやらが家に自分で帰ってくるのが当然だと思っっている、そんな調教師の目だあれは！

一変の曇りも無い。心配がない。それが信頼だというのなら、人は人を信頼なんか出来ない生き物に違いない。心を預けられるくらい大切な人ならば、少なからず信じていても心配するんだ。それが彼にはない。彼は何かが無処かが欠けている。昔からあんな男だったか？変わってしまった？それとも僕が知らなかっただけ？

聞こえるはずがない。届くはずがない。それが解つていても豎琴に手が伸びる。

僕は何時もこうだ。受け身になりがちで、自分から何かをするというのが苦手だ。そんな時にあの本を読む。自分が彼に……本の中の高名な騎士様になったつもりになる。そうすると強気になれる。自分で壊して捨てたとはいえ、手持ちぶさたになった手は……何時も以上に豎琴にと伸びていく。本当はこの手をあの人に伸ばして、ぎゅっと抱き締められたら幸せなのに。いや、一度。たった一度だけあの人は応えてくれた。僕が行動した。手を繋ぐことを許してくれた。その手が震える。音が外れる。その情けない音で、我に返った。いや、我に返っても同じだ。あの時一瞬でもここにあって手が今はない。それがとても寂しい。

(情けないな……僕は)

本当ならアルドル様を追いかけなければならぬのに、自分のことで手一杯。追いついたところでどうやって慰めればいいのか解

らない。言葉が出て来ないんだ。

悩み事ばかりを音に乗せても、やっぱり微妙な音しかでない。下手になったと言われても仕方のないことだった。

久々に会った叔父さんは昔より年老いていた。当たり前のことだけども……年を取って丸くなる……タイプなら良かったのにな。ますます頑なになってしまわれたみたいだ。

ポロンポロンと奏でる内に、幻聴だろうか？違う音が混ざり出す。コンコンと、それは扉の向こうから。

「は、はいっ！」

「トリシユ、ちよっといい？」

「アルドール様？」

凄いな。あの状態からもう持ち直したのか。この少年王は作り笑顔ではなく、普通の顔に戻っている。それでも、少し……目が赤い。

「ユーカーのこと、ちよっと聞いてきたんだ。最後まで見てたのはジャンヌだから……」

「わ、私は……今はアルドール様の護衛という仕事がありますし」

気にならないと言えば嘘。それでも今は気にしないようにしなければ。そう言うも、無理はしないで良いと彼は笑ってくれる。

「セレスちゃんを心配しないトリシユなんかトリシユじゃないじゃないか。むしろその方が俺は心配だよ。何か不気味」

「あ、アルドール様……そんな、私の職務怠慢を指摘なさらないでください」

「そう言う意味じゃないよ。俺はトリシユらしくてそういうの好きだよ。セレスちゃんと絡んでる時のテンション高いトリシユとか、暴走してるトリシユとか、見えて微笑ましいし」

「ほ、微笑ましい……ですか？」

流石は王。器が大きい。同僚にふしだらな関係を迫る私に何のお咎めもない所か、我に返ると我ながら恥ずかしい暴走を微笑ましいと言いつちりますか。

「だって一生懸命だなんて見てて解つて。応援したくなるんだよ。俺は好きな人がいても、あんな風に押したり出来なくて。諦めて、わざと距離置いて……その所為で、俺はその大切な人を傷付けた」

「アルドル様……？」

「だから身を引くことが必ずしも正解って訳じゃないと俺は思う。まあ……セレスちゃんもセレスちゃん色々あったから難しいとは思いつけどさ」

要するに、頑張れよと言いに来たんだと告げるアルドル様。

「好きな子泣かせるなんて最低だよな。俺は最低だった。それがその子の幸せなんだって……無理矢理自分を納得させて諦めた。無理だつて解つてもその子の手を引いて、一緒に逃げるくらいすれば良かったつて、今ならそう思う」

でも、そんなことが上手く行つていたら俺は今ここにいないだろうなあなんて、アルドル様は小さく笑う。

「俺つて恋愛事上手く行つたこと無いんだよ。だから周りの人は応援したいなつて思うよ。だから俺はいつものトリシューがいいなあんまり落ち込んでるところは見たくない」

「いつもの……私……ですか」

「こればかりはユーカーの気持ちだから俺からは何とも言えないけど、俺は二人が話をしてるの見てるの結構好きだよ。ユーカー

のツッコミが一段と冴えてるし、トリシユのボケも良い感じで」

そこまで言っつて一呼吸置き、アルドル様は真剣な顔つきに戻る。本題に入るう。その目はそう語りかけている。聞きたくなくて聞きたい話。トリシユはそれに頷くしかない。

「…………ユーカーはコートカードだ。リアルラックは低くてもことに戦闘面、ここぞという所の勝負事での幸運は抜きん出ている。そのユーカーが負けて、更には逃げられないって言うのなら…………タロツクの敵将、第一騎士レクスっていう奴はユーカーより強いカードに違いない」

「第一騎士…………レクス…………」

聞いたことがない名前だ。それに第一騎士とはまた、とんでもない者が出てきた者だ。タロツク王の重臣中の重臣ではないか。それでは幾ら彼が相手でも、カード云々の前に勝てる図が想像できない。

「ジャンヌが言うには、その男は城から沿岸に向かった軍の一員ではなくて、海から来て軍と合流したらしい。聖十字の船の幾つかを沈めたのもその男だ。ジャンヌを打ち負かしたってことはジャンヌよりも強いカードの線が強い。…………結論として、相手はキング」
「…………キング、ですか」

口からは渴いた笑いが漏れる。そんな無茶な。自分の掌を思い出し、かけ離れた数に目眩さえ覚える。何ということだ。私には…………僕には彼を助けることすら許されないのか。

「イグニスもまさかキングがこんな初期の表舞台に出てくるとは思わなかったんだらう。ユーカーなら大抵の相手には勝てる。だからこそ彼に情報を探らせに行つて貰ったんだ。…………でも、トリシユ

……何か可笑しいと思わないか？」

「可笑的い、ですか？」

「相手はジャンヌのカードを知っていた。それで彼女を追いかけ
ていた。それなのに、ユーカーのカードを知って彼に乗り換えた。
カード的には彼女の方が優れているのに、だ」

「……確かに、妙ですね」

「唯単にセレスちゃんが入ったっただけで軍を預かる者が暴
走するとは思えない。勿論それもあるかも知れないけど、それ以外
の理由もそこにあるんじゃないかと思う」

アルドール様はそこで初めて、少し不安そうな顔つきになる。

「ユーカーの身の安全は多分、保証されている。彼のカードには
……何かあるんだ。クイーンより勝る利点が何か、あるんだ。何処
まで本気が解らないけど、道化師さえ彼に一目置いていた。俺が心
配なのはそこだよ」

みんな彼をカードとしてみている。それが不愉快だと彼は言う。

「俺はユーカーを何かの駒とか道具にはしたくない。されたくない。
いつだって彼には彼でいて欲しい」

「アルドール様は、何故……」

「友達だからだよ。ユーカーはそう思っただけでも、俺が勝手に
彼ををそう思ってる」

トリシユとは違う気持ちだけど、彼が心配で大切なのは同じだよ。
少年の優しい目は語る。

「俺も道具とか人形扱いされるのが嫌だなんてのはよく解るんだ。
ユーカーが実家に帰りたがらないのもその所為なんだろうな……最

近彼がランスと上手く行っていないのは多分カードのことが原因なんだと思う」

あの同僚と過ごした時間はまだ彼よりも自分の方が上。それでも理解しようとした時間は、この少年の方が遙かに上。だからトリシユの知らないことを知っている。それでもこの少年はそれを誇ることなどせず、唯心配そうに言葉を紡ぐのだ。

「だから俺は、ユーカーにランス以外の友達がいるって知った時、嬉しかったんだよ。パルシヴァルだけじゃない。仲が悪かったトリシユとユーカーがこんな風になるなんて」

心配そうな顔を微笑に変えて、アルドール様は息を吐く。安堵したと言っ風に。

「だって二人はユーカーを、カードとしても道具としても見ていない。俺はそれが凄く嬉しいんだ」

まるで自分のことのように、アルドール様は嬉しそう。僕とは違う。違う思いだ。それでも本当に彼のことを大切に思っていてくれるのが此方にまで伝わってくる。ランスとは違う意味で強敵だ。これではまるで、敵わない。

「俺は俺を王扱いたくないユーカーに、救われているところがある。だから彼にとってトリシユ達も救いになれるんじゃないかって、俺は勝手に思ってしまった。……俺は俺の大事な人を大切に思ってくれている人と、仲良くなれたらいいなと思う」

「アルドール様……」

「トリシユが嫌じゃなかったら、トリシユの話聞かせて貰ってもいい？俺はもつと知りたい」

「私のこと、ですか……？」

「ああ。俺は最初トリシュのこと勘違いしてたんだ。だからそれが恥ずかしい。俺を政治の駒として利用するために、そう言われて近づいてきたんだって思ってた」

「……間違ってますよ。城で貴方にお会いした頃は、貴方に取り入ることしか考えていませんでした」

「うん、でもそれはこの土地のためだったんだろ？誰かのためだ。自分の出世とか地位とかそういうもののためじゃなかったんだろ？それを知らずにトリシュに冷たくしてた自分が馬鹿みたいだなんて。城にいた頃は俺、本当にユーカーに頼りつきりで……一緒に都まで旅をした人達以外、信用できなかったんだ」

「アルドール様……」

今は信用している。そう、言われたような気がした。そんな言葉を貰えたのは……

「……都貴族側に付いてたトリシュとこうして一緒にいるなんて不思議だよな。ちょっと歯車が違っていればこうはならなかった」

「はい……全てイズーのお陰です」

「そうだな。俺にトリシュがいい奴だって気付かせてくれたユーカーとセレスちゃんには感謝してる」

「……はい」

「……だからありがとうトリシュ。俺に付いてきてくれて。俺の友達を大切に思ってくれて」

笑う少年に手を差し出された。握手を求められている。それでもそれは余りに勿体ない。だからその場に跪き、その手を取った。

「光荣です、我が君。カーネフェリア様」

はじめは、そう。あの人の傍にいたいからついて来た。それでもこの人の言葉に触れて、僕は今……この人こそ王だと思う。この国に、この人は必要だ。この人になら仕えたい。彼は僕に、そんな風に思わせる。この人ならこの土地を、この国を変えてくれる。そんな気がするのだ。その深い金の髪は獅子の鬣のように気高く神々しい。嗚呼、この人こそ王だ。

「……一曲、聞いていただけますか？我が君……アルドール様」
「うん、大歓迎！喜んで！」

そう微笑む幼い王に、かつての王には感じたことのない情が浮かんで来るのを知る。なるほど、確かにこの少年は幼く弱い存在だ。だが、王の器だ。彼は強く弱く、憎めない。不思議と彼を死なせたくない……守りたいと思わせる何かがある。絶対的なカリスマなど彼にはないのだろうが、人と同じ目線で、同じ場所に降りてこうして話をしてくれる。傷ついた相手を放っておけない。そんな心優しい人間だ。誰もが望んだ理想の王だ。

彼には欲がない。金も地位も名誉も彼は欲さない。周りの人間の笑顔。彼が求める物は、そんなささやかな物なのだろう。そう思えば自然と口元も綻ぶのだ。

“ そうだ、上手いぞトリシュ ”

その人は嬉しそうに笑っていた。僕はその人を父様と、呼んでいた。不思議には思わなかった。あの頃は。

誕生日に贈られた、胡弓を奏でる幼い僕。あの人はその操り方を丁寧に教えてくれた。城は古びている。それでも歴史の息吹を感じさせて、僕は好きだった。水辺に調べを響かせるのが好きだった。

だけどもある時、僕はあの懐かしい城から追い出された。母さんが死んだ後だ。彼女の部屋から見つけた手記が……原因だった。

生涯語ることが出来なかつた後悔がそこには記されている。母さんはチエスター卿に嫁いで来た。政略結婚だ。けれど隣のブランシユ領から仕えに来ていた甥……僕の父親と、母さんは恋をしてしまった。

夜伽には別の女を向かわせていた母さんは、僕の本当の父親が誰であるかを知っていた。それでもチエスター卿の子として僕を育てた。僕が父様と呼んでいた人は、父親どころか叔父ですらない。だから僕は父の先代ブランシユ卿、つまりは祖父が作った子供とされた。だから建前上彼を叔父さんと呼ぶ。

僕は悲しかった。これまで父と呼んだ人が、その日を境に僕を憎々しげに見つめるようになったこと。僕が何かした訳じゃない。それでも僕はそこにいるだけで、あの人を苦しめる。僕は一瞬で、共に両親をなくしたのだ。

母様がいつも眺めていた本。それはそこに自分の姿を重ねていたんだ。追い出される前に、それだけ盗み出して来た。その本だけを手に、初めて帰ったこの領地。

初めて会う。これまで顔を合わせたこともない本当の父親。彼はどんな風に僕を迎えてくれるだろう。この悲しみを埋めてくれるくらい、優しく僕を迎えてくれるだろうか？

不安と期待。矛盾した気持ちで辿り着いたブランシユ領。そこに父親の姿はなかった。代わりに残されていたのは、豎琴一つ。

戦争に行ったのだと聞いた。そうしてもう何年も帰って来ていないのだと聞いた。だけど嘘だと思った。きっと僕に会いたくないから逃げたんだ。今更どんな顔して父親面すればいいのか解らないから！

怒りにまかせて叩き付けた豎琴。だけどその時鳴った弦の音に、僕は一瞬怒りを忘れて魅入られた。まるでこの調べは、僕の悲しみを吸い上げてくれるみたい。僕を今から切り離し、嫌なことを忘れさせてくれる。

もしかしたらその人は、本当に仕事に出掛けていて。この調べが

聞こえたならば、この豎琴の持ち主は……僕を見つけてくれるんじゃないか？帰ってきて、僕を抱き締めて……寂しい思いをさせたことを謝ってくれるんじゃないのかなんて、馬鹿な夢を見た。そう思つて奏でる内に、季節が巡り……祖父が死んだ。

*

最初はイグニス様のことをどう伝えたらいいのか。そればかりを考えて、真つ直ぐアルドル様の顔を見ることが出来なかった。気が付けば室内からはもう彼の姿は消えていて……俺の傍に残つていたのは同僚二人だけ。だからつい、口にしてしまったのだ。本当ならここに居るのは三人のはずなのではないかと。

「……俺は何が不味いことを言ったのか？」

ランスの口からはそんな咳きが漏れる。部屋には誰もいない。おろおろしていたパルシヴァルも気まずさからか出て行った。こんな時ツツコミを入れつつ助言してくれる相方も今はいない。それがトリシユの怒りの発端になったのだとは解る。

(トリシユはユーカーを美化し過ぎている節があるな)

恋は盲目とはよく言った物だ。確かにあいつは可愛いが、トリシユのそれはもはや何かのフィルターが掛かっているようにしか思えない。

あいつは男だ。本気を出せば俺とも互角以上に渡り合える腕がある。そんな立派な騎士を心配するなんて、失礼なことだ。騎士の誇りを汚すことだ。トリシユは本の女性を重ねて彼を慕うがあまり、現実を見ていない。俺の親友はそこまで女々しくもないし、弱い男ではないはずだ。あんなにやる気がなく、鍛錬を怠つて来ていなが

ら、両目では俺を打ち負かしたのだ。それを才能と呼ばずに俺は何と呼べばいい？

今思い出しても心が震える。叶うことなら誰にも邪魔されずに最後の最後まで、白黒付けて勝負がしたかった。いつか……カードの確立なんかには左右されることなく、本当に自分たちの実力だけで、戦いたい。そんな日はもう来ないのだろうか。

打ち負かすに足る相手。認めた相手。そんな男に打ち負かされることだけが、己の未来かと思うとやるせない気持ちになる。

「イグニス様……」

あの神子様が俺を最後の最後まで信用してくれないのもそのカードの所為だろう。俺のカードは弱い。だから俺を逃がした。それは俺がまだ必要だと求められていることに他ならないのだけれど、カードの幸運は俺自身の力の不信に繋がる。俺ではあの戦況で生き残れない。高い幸福値を持ったコートカード。ユーカーが傍にいないれば満足にも戦わせて貰えない。俺の付属品だったあいつ……それがいつの間にか俺があいつの付属品になっている。

(ごめん、ユーカー)

あいつは何一つ悪くないのに、そう思うと素直に心配も出来ない。それは信頼だけじゃない。俺は嫉妬している。あいつのカードに。アルドール様も俺よりあいつを信頼している。あの方と同じだ。だからと言って俺があいつと同じ事をしてああはならないだろう。人には適材適所という物がある。あいつに出来ないことを俺がやり、俺に出来ないことをあいつがやる。今までも、これから……俺達はそういう関係だったはずだ。それが何を今更……不条理だと俺は感じてしまうのだろう。

「失礼します、アロンダイト卿」

室内に響くノックの音。それに応じれば、見覚えのない顔の少年が現れる。

「君は……？」

「お初お目に掛かります。僕はチェスター卿に仕えるしがない胡弓弾き。最高の騎士様、貴方のお噂はかねがね……北部まで聞こえていますよ」

「……それは、どうも」

どうせ悪評だ。父の暴走の所為で北部で自分を良く言う者はいない。いたとしてもそれはユーカーの受け売りだ。あいつは俺を過大評価しすぎている。

「僕は嫌味を言っているわけではありませんよランス様。だからこそこうして貴方に情報を持ってきたのです」

「情報？」

「申し遅れました。僕はキール。僕らはシール様の命に従い、胡弓弾き以外に領内の警備を任せられています。先程兄弟から面白い知らせが入ったので貴方のお耳にと思いここへ」

勿体ぶった口調の少年。用があるなら手短に頼むと伝えると仰々しい態度で謝罪をされる。

「これはこれはすみません高名な騎士様」

「……それで、俺に用事とは？」

「セレストイン卿……」

「！？ユーカーに何か！？」

「確か貴方のご親戚でしたね。彼には僕らも何度かお会いしてい

ましたので、彼のことは覚えていたんですよ。仮に変装されたとしても、僕ら楽師は耳が良い。声まで偽らないのなら僕らにそれは通じない」

心配はしていない。していない。それでもこの少年はそれを煽るようなことを言う。そんな不確かな物言いを彼は好む。

「先程領内に入った馬車の中からも聞き覚えのある声がしたと僕の妹が言っていました。そろそろその馬車は僕の弟のいる検問に差し掛かるのではないかと。そこを抜ければこのブランシュ領から元チエスター領へと差し掛かるわけです。彼は何かお忍びの任務でもあったのでしょうか？それなら僕らはこれ以上口出し致しません」

まるでこの少年は情報を伝える体で、此方に探りを入れていく風。俺にだけ揺さぶりを掛けてくる理由がそこにはあるようだ。

「セレストイン卿お一人にタロツク退治を申しつけるとは、今度のカーネフェリア様はいささか鬼畜であらせられる。我が主もそんな方は王とは認めないとのこと」

「それで、俺をチエスター卿側に引き込もうと？」

「これは聡明な騎士様。話が早くて助かります」

「なら手短にお断りしましょう。生憎俺の主はアルドール様。鞍替えをする気はない。彼が最後のカーネフェリア様なのだから」

「そこは悩んでいただけの方が嬉しいんですけどね。まあ、今回は勧誘ではなく唯の友好の証としての情報提供ですよ。東門に向かわれるといい。今ならまだ間に合いますよ。弟に足止めを頼みましたからね」

どこまで何を知っている？それを明かさず少年は部屋を去る。嘘

か本当かも解らない。それでもユーカーがまだ戻らないのは困る。今はあいつが必要だ。俺にとってもあの方にとっても。コートカードのイグニス様がいらない今、あいつだけがアルドル様を守れるんだ。

*

「結局父は戻らず、領主不在のこの土地は……祖父が亡くなったことで僕の後見人である叔父さんの管理下に置かれました」

トリシユが物語ったのは一人の少年の物語。それが彼自身を示すことはすぐに気が付いた。アルドルは最後まで口を挟めずそれに聞き入った。憎んでいないのだ。嫌われていても、トリシユはチエスター卿をまだ慕っている。だから、……悲しいのだ。彼は悲しむしかないのだ。

「トリシユ……」

「可笑しいでしょう？アルドル様……。私はまだこの下らない楽器を捨てられずにいるなんて、本当……女々しいったらありません」

トリシユは憎まない。父親のことも憎めない。それに続く言葉は、いつかのルクリースのそれを彷彿させる。

「……僕は父親を憎めるほど、彼のことをよく知らない。僕とランスは似ていて、それでも違う。僕にはイズーのような相手がいなかった」

憎むには相手をよく知らなければならぬ。人は知らない相手を殺せても、憎むことは出来ないのだと、ルクリースは俺に説いた。

これはそう言う話。……父親の姿を探すように、彼は豎琴を奏でるのだ。彼を深く知るために。

「でもトリシユは憎むために、その楽器を奏でてるわけじゃないんだろ？」

「……そうですね。僕は」

悲しげに目を伏せて、それでも弦から手を放せず音色を紡ぎ続ける騎士。

「母さんとその男を狂わせたという恋。それはどんな物だったのかわりたかったのかもしれません。それは叔父さんを傷付ける以上の意味ある物だったのか。そうして産まれてしまった僕に価値はあるのかどうか」

無価値だと認められるのが怖いのだと彼は言う。そこまで愛し合った二人だ。自分は望まれて産まれたはずだ。いや、それとも不要だったのか。自分さえいなければその恋が二人を苦しめ別れさせることもなかった？

「僕の本当の父親は、本当に母さんを愛していたなら……どうして身を引いたのか。解らなくなります。それが母さんの幸せだったとは……どうにも僕には思えない」

「なんとなくだけどさ……それってトリシユのためじゃないかな」「え？」

トリシユは気付いていないようだ。それは自分で気付くべき物だろうか？いきなり部外者の俺が我が物顔で喋り出すのはとても嫌な感じ。

(だけど……)

トリシユは悩んでいる。それなら参考までに、こういう見方もあるんじゃないかって、口にするくらいはいいよな？

「あのさ、事情をよく知らない俺がいきなりこんなこと言うのは失礼だと思うけど……それでも俺は、二人はトリシユが大好きだったんじゃないかと思うよ」

「どうして、ですか？」

「二人はトリシユが産まれるまでは隠れ忍ぶ恋人でしかなかった。でもトリシユが産まれることで、二人は親になったんだ。そして自分たちのことだけじゃなくて、トリシユの幸せを一番に考えたんだと思う」

「幸せ……？」

「だって最初からそれが知られていたら、トリシユは両親共に育てて貰えなかっただろ？……少なくとも当時のトリシユにとっては、父親も母親も傍にいたんだ。いられたんだ。だからトリシユの父さんは、身を引いて……母さんは、生涯嘘を突き通したんだ」

その幸せがふとしたきっかけで崩れてしまったのは悲しいことだ。それでもその不幸は彼に美德を与えてくれたように、俺には思えた。

「トリシユがチエスター卿を恨まずに生きて来れたのは、そんな優しい人になれたのは、トリシユがちゃんとみんなに想われていた証拠だよ」

「アルドール様……」

「今は拗れちゃってるけど、いつかきつとチエスター卿とも和解できる！絶対に！嫌えるはず無いさ！トリシユは何も悪くないんだ！」

「ですが……」

「イグニスが言ったんだ。人は産まれてくることが罪じゃない。生きる内に罪を背負ってしまうものなんだって。だからトリシユは恥じる必要はない。むしろ誇って良い！」

肯定する。誰が彼を否定してでもだ。チエスター卿は間違っている。それでトリシユを憎むなんて筋違いも良いところだ。彼は父ではなく何時までも男のつもりでいた。それが間違っている。

「……チエスター卿の領地！取り戻してやるんだ！俺はそれで彼にトリシユのことを認めさせる！こんな背水の陣に挑むんだ、命懸けの親孝行だよ！これで子供と認めないなんて俺が許さない！」

「……アル、ドール様」

「トリシユ！俺に付いてきてくれ！俺を助けてくれ……一緒に夕ロツクの奴らを追い出そう！勝って全てを取り戻すんだ！」

流れる無音。我に返った。ちょっと熱くなりすぎた。トリシユに引かれてしまったか？

気まずさを感じる俺に、彼は小さく吹き出してから……強く頷いてくれた。

「はい！我が君アルドール！」

「王様！大変です！」

トリシユが頷くと同時に室内に飛び込む小さな影はパルシヴァル。

「お姉さんが走って来て、馬に乗ってまた出て行ってっ！」

「ジャンヌが？」

彼女は教会との合流を図ったはずだったのだが……

「彼女は何か言っていた？」

「街の北側を抜ける一軍と！それからタロツク騎士の男を乗せた馬車が東門へと向かつてるって言っていました！お姉さんはそのまま北へ！」

咄嗟に判断を下せない俺に、トリシユが進言してくれる。

「彼女はコートカード。滅多なことはないでしょうし、教会の援軍もいるはず。アルドール様、東門へと急ぎましょう！どちらが連中の狙いかは解りません！それに今からでは北の軍勢には間に合わない！」

「あ、ああ！みんな、急いで支度をしてくれ！」

*

「こんなあっさり通してくれるとかおかし過ぎるだろ」

「まあ、もうこの領地は我々の支配下だからな。仕方ないだろう」

レクスはそう言つが、ユーカーは馬車の外……目の前の光景に啞然としていた。

船から降り立った場所。そこを真っ直ぐ東へ向かえば湖の城に着く。今いるその通過地点はブランシユ領。聞き覚えのある場所だ。

あの同僚の名前と同じ。

何度か仕事で赴いたこともある土地でもある。だと言つのにここはもう、タロツクの手に落ちていたのか。

「どうぞお通り下さい」

嫌らしい笑みを浮かべた少年は片手に胡弓を持っている。何度か顔を合わせたことはある。確かここを預かるチェスター卿のお抱え

楽師三兄弟の一人だ。チエスター卿は我が子のように可愛がついて、領内の大事な仕事を彼らに任せたりもしている。セミロングの金髪のはこれは末弟だったはずだが、女にも見える顔髪型。正確なところは解らない。唯一分かること言えば、兄がいる時は歌以外そんなに喋らない弟妹も、一人の時は割と饒舌。普通に会話が出来る。単に面倒臭いという理由で普段は兄任せなのではないかとさえ思う。

(しかし、所詮は脳内お花畑の楽師だぜ)

今がどういう時期か解っていない。それはこの街がもう安全だから。既に内々に、征服されているから。それは何時からだ？最北での戦いから逃げ帰る時はまだ、こんな風にはなっていないかつたはず。

(……俺の、所為なのか？)

北からの進軍を止めることよりも、ランスを探すことを選んでしまった。ランスを守れという言葉以外、捨てるように逃げ帰った俺だ。俺には俺だけにはこの現状を憂うる資格は無い。

こうして振り返ってみれば、自分が如何に無責任で小さな人間かがよく分かる。背負わされた物が重くて、無くしたのを良いことに何もかもかなぐり捨てて逃げていた。今だって新しく何かを背負うことから逃げている。だからこうして敵なんかの言葉に惑わされて、逃げ出せないでいるんだ。

「黒の騎士様がカーネフェルの女を捕虜に連れ歩くななんて珍しいですね」

誰が女だ！誰が！……怒鳴ってやりたいが、男だと知られる方が屈辱だ。悔しいがその胡弓弾きの少年を、一睨みすることしかできない。あんまり見ると俺の正体がばれる。あるこゝろないこと吹聴さ

れては敵わない。悔しいが今はこれくらいしか抵抗できない。

もつとも、もしかしたら解った上で俺に嫌味を言っているのかも知れない。だとしても言い返せない。万に一つでも気付かれていないという可能性がある限り。

「ああ。だが見る。あの真つ平らな胸！実に素晴らしい平面！あれぞまさに男のロマン！敵国の人間とはいえ貧乳は至高の宝。そうは思わないか？」

「ああ、捕虜じゃなくて現地妻ですか？」

「いや、むしろ本妻に迎え入れるため口説いている最中だ。しかしお前も中々良い真つ平らな胸をしているな少年」

だああああああああああああああああああ！ツツコミ！ツツコミさせるおおおおお！何て拷問だっ！ツツコミ入れたいのに、入れられないっ！ストレスでどうにかなりそうだ。見境無しかあの変態！タロークは周りに女が全然生まれなからやっぱあのメイド女が言ってたみたいに男色癖でも持ってるのかいい加減にしろっ！ジャックのカードが何だ！もうどうでもいい！あいつらの所に帰れなくてもこいつの傍にいるのはもう無理だ！離れようとして、鎖に繋がれていたことを思い出したが、この際あいつの腕ごと引き千切ってやる。

「待てセレス！何処へ行く？」

「もう我慢の限界だっ！これ以上俺を怒らせるなら、全員ぶっ殺す！……っうあ！」

ぐいと鎖を引かれただけで思い切り転んでしまっ。相手は腐ってもキング。幸福値じゃ太刀打ち出来ない。

「くそっ……」

「随分と気の強いお嬢さんですね」

「誰がお嬢さむがつ……！」

「まったく俺も手を焼いている。だがそこがまた可愛いんだが」

レクスに丸めた拳を口の中に入れて、喋ることもままならない。むーむー唸っていると目の前の少年楽師に吹き出された。蹴り飛ばしたい。殺したい。

顔だけなら可愛いが、なんて可愛げの無いガキなんだ。うちのパルシヴァルを見習え。あいつは外見だけじゃなくて性格まで可愛いぞ！

「しかしこういう手合いに限って褥では大人しくなる物でな」

レクスの阿呆っ！あること無いこと抜かすなっ！何時から俺がお前とそういう関係になったって言うんだお前の頭の中以外で！ていうかい加減口の中から手え退ける。俺の口が裂けたらどうしてくれるんだ。眼帯マスクに女装なんて装備になったら今以上に不審者丸出しだろうが！

怒りを噛み殺しながら眼前を見据える俺にざわと慣れた数術の気配が届く。これは、この数術はあいつだ！

「む？」

「ランス！」

数術によって切られた鎖。数術の心得のないレクスはそれが解らない。向けられた殺気に気付き水の刃を剣で叩き落とすのが精一杯。その一瞬の隙は俺が逃げ出すには十分だった。

これまで逃げ出せなかった理由も一瞬忘れ、馬車を飛び出し相方に駆け寄るも……この相方は何故か微妙な顔をしている。

「ユーカー……だよな？」

「俺じゃなかったら何なんだ！」

「いや、何処かの口の悪いご令嬢かと」

「こんな時にボケんな馬鹿っ！」

「いや、この間の服と違うから」

「こ、細かいことは気にするな！将来禿げんぞ！」

辺りは薄暗いし、俺ほど夜目が利くでもないのにこの短時間で俺がレクスに着せ替えさせられたのに気付くとはこいつは一体どんな目してるんだ。

そんな俺とランスの会話に耳を留めたレクスは、にやついた笑みを浮かべる。ランスの名はこいつも知るところだったのだろう。

「ほう……そつちの美形兄ちゃんがカーネフェル王お抱え騎士で最も有名なあのアロンドイト卿か。南部の戦ではうちの軍を随分蹴散らしてくれたそうだな」

「……？彼は誰だ？見たところタロツクの人間のようなが」

「お前見てたんじゃねーのかよ！」

「いや、神子様から情報を伝えられる程度で……基本お前をあそこに囿として置き去りにしていたからな」

「お前らとことん酷い奴だな！」

「そう言うな。此方も色々あつたんだ」

しかし空気の読めない天然男はぼつと出の将のことなど知らないという。それに関して腹を立てるでもないレクスは何だかんだで人間出来ているのかも。

「はっはっは！まあ、俺が軍に入ったのは一月、そろそろ二月前つてところだしな。そりゃあ知るはずねえよ」

「いや、何か悪いなレクス……」

「惚れ直したかセレス？」

「惚れ直すも何も最初から惚れてねえよ」

「まあ照れるな」

「照れてもいねえ！俺は怒ってんだ！」

「レクス……？」

「はじめまして、だなアロンドイト卿？俺はタロツク天九騎士団が第一騎士つてのやらせて貰ってる。しかし何だ、俺とセレスの会話総スルーするとはとんだ堅物がいたもんだ。あいつと良い勝負だな」

「タロツクにもこいつみたいいな石頭いんのかよ。お前の所も大変だな」

思わず同情したところ、気が立っていたのか珍しく……？もないか。短気になっていたランスに怒られた。

「ユーカー、何か言ったか？」

「別に言っただけよ！っていうかなんで俺の言葉は聞いてるんだよ！」

「ところでお前はあいつに惚れているのか？」

「違うっ！あいつが勝手に言っただけだ……って聞いてたのかよ！」

「トリシユが悲しむぞ」

「そういう意味でもねえっ！大体俺にはアスタロットがいるっていうかいたっていうか」

「もういないじゃないか」

「お前、俺に殴られたいか？」

「まあいい、そんな格好で得物もなければ戦えないだろう。下がっている」

「預けておいた俺の剣は？」

「今はない、ここには無いぞ」

「つ、使えねえっ！」

俺とランスのやり取りを、レクスは興味深そうに眺める。

「なるほどなるほど。セレス、お前の言っしがらみの一つはその騎士という訳か」

「俺が、ユーカーのしがらみだって？」

何を知ったような口をとランスがレクスを睨み付ける。先程よりも目つきが鋭い。そんな顔も絵になるのが腹立たしいったらない。

「おい、落ち着けよランス。何かあったのかお前？お前らしく…

…

「お前は黙っている！」

「え……」

こんな理不尽な怒りをぶつけられるなんて、滅多にない。俺はいつもランスの怒りは理解していた。その理由もだ。だからこそ謝れなくともふて腐れても、俺がこいつの怒りに対して怒ることはなかった。今だってそうだ。怒りの前に急な寒気が身を襲う。なんだかとても、訳が分からなくて。

「ああ、しがらみもしがらみさ。こいつ程の男が王にも仕えずそれでもまだカーネフェルに残る未練。そいつがお前なんだろうアロ
ンダイト卿？」

「敵国の将が何を。侵略者が偉そうな口を！」

「ああ、そうだな。俺は侵略者だ。それは認めるよ。俺はカーネフェルからお前から、そのジャックを奪いに来た。その男は是が非でも俺の嫁ついでに我が陣営に欲しい」

「普通逆だろ」

「いや、こう言われた方がお前は嬉しいだろう？」

「うれしくねえしっ！」

「ははは、まあそう照れるな」

「照れてねえっ！」

「要するに殺して構わないと言うことが」

「え？ちよつ、ランス！？」

レクスは不敵な笑みを崩さない。俺が傍から逃げたのに、鎖も切られたのに、それでも絶対の自信を失わない。対するランスはどんどん取り乱していく。しつかりしろよと言葉を掛けることも俺は出来ない。これ以上、俺が傷つくのが嫌だから。

そんな俺の心まで、あの男は見透かしているのだろうか？ああ、そうだ。鎖が無くなっても、俺が逃げられない理由は二つもある。あいつはそのカードを握っている。

「一つ教えておいてやろう。そっちにも数術使いがいる以上、俺のカードの粗方の見当は付いているだろうが……王は逃げも隠れもしない。だからこそ俺は名乗ってやろう。我が名はレクス。コートカードがクラブのキング。俺に勝てるのはこの世に道化師唯一枚」

「き、キング……！？」

事も無げにレクスが見せた掌、手の甲。そこに刻まれた格の違いにランスは驚愕。あのクソ神子から俺とレクスの戦いのことは聞いていなかったのか。何処まで職務怠慢だあの女。

「さあて色男の騎士様よ。あんたほどの高名な騎士がカードにならないはずがない。あんたは確率的に道化師である確立は五十八分の一ってわけだが、それだけ名誉がある騎士なら下位カードであるはずがねえ」

「だったら何だ？」

「要はあんたは俺には勝てない。俺はそいつを連れて行く。あんたは勝てない。それでも来るか？」

「望むところだ！」

「馬鹿止める！お前本調子じゃないんだろ？大体今は戦う理由が何処にある？」

「お前を渡すわけにはいかない」

強く言い放たれた言葉に身体の寒気が止んだ。しかし、それも一瞬だった。

「……ランス」

「お前は大事な、カーネフェルのカードだ。失うわけにはいかない」

「ランス……？」

ほんの少し離れている間に、彼には何があったのか。また埋めようのない溝が俺とこいつを隔て出す。誰よりも道具扱いされたくないこいつに、俺は……。それはまだ我慢できたとしても……お前の道具じゃなくて、カーネフェルの道具とまで言い切るか。

立ち上がり走って逃げる気力もなくなった。そのままその場に入り込む。そんな俺を背に庇うのはランスではなくレクスの方だ。

「なるほど。なら手合わせ願おうかアロンドイト卿ランス」

「遺言があるなら今の内に済ませておくと良い。10秒くらいなら待ってやろう」

「同じ言葉をそっくり返してやるよ。まあ、俺は10秒なんて短気なことは言わない。11秒くらいは待ってやるさ、はっはっは！」

そんなことを言いながらどちらも10秒も待つ気が無いのは見え見えだ。レクスはもう既に抜刀してにやついてやがる。この戦闘狂

が！ランスも怒りで頭の螺子が何本かぶっ飛んでいる所為で、それにいと容易く応じてしまふ。結果、すぐさま二人の剣戟の幕が切つて落とされる。

ランスの剣技には品がある。レクスは出身が貴族ではないと言っていた。だからその太刀筋に品こそ無いが、荒々しい力強さはある。無法者の強さというのか。一手先を読むのが非情に困難。俺もそういう気質ではあるから嗅覚でなんとか渡り合えるが、ランスとレクスじゃ相性が悪すぎる。

二人を止めないと。このままじゃランスが負ける。ランスが殺される。それでも今は武器がない。素手である二人を止められるとは思えない。

(くそっ！)

足を思い切り叩く。それでも両足が震えて上手く歩けない。あんな言葉一つで、何を俺は参っちまってるんだ。情けない。

(どうしちゃったんだよ、ランス……)

俺はお前の何を信じればいいのか解らない。昔、俺のために泣いてくれたお前に救われ……俺は家の道具じゃないと言ってくれたお前が好きでここにいたんだ。そんなお前の道具になることを甘んじても、俺は国なんて重い物は背負えない。俺がそんなに強い人間じゃないって、本当はお前が誰より知ってるはずだろ？

国のために命を磨り減らせ？投げ出せ？そんなこと出来ない。俺にとつてのカーネフェルはもう死んだんだ。おっさんは死んだんだ。ランス、お前は俺のカーネフェルじゃない。それでも俺の大事な家族だ。だから俺は……逃げられなかったんじゃないか、この……カーネフェルから！

国のために戦うお前のために戦うのが俺。なのにお前が自分の怒

りのために戦ってどうする？俺はお前の理不尽な怒りのために怒れない。大体何でお前はいきなり怒ったんだよ。唯虫の居所が悪かったってだけ？それだけとは思えない。

(しがらみ……)

確かランスはレクスにそう言われて切れた。それって……つまり、認めたくないって事？本当はお前も気付いている。それでも認めたくないから？お前が俺の枷だって。

「ランス……」

あの理不尽な怒りは、俺との繋がりを昔のままに保ちたいこいつのエゴだ。もう変わってしまったのに、お前も俺も。どう足掻いても戻せない。お前はもう、本当は……

(俺のことなんか、どうでも良いんだよな)

唯、それを認めたくないだけで。簡単に認められるくらいお前が素直じゃなくて……簡単に認められないくらいお前が優しいってだけで。

重荷なんだ。変わったこいつにとって、俺の変わらない信頼と思慕は。本当は……俺が傍にいない方が、お前はずっと楽に呼吸が出来るんだろう？俺がいないと呼吸が出来ないなんてそんな勘違いをしてはいるけど。

「くっ……」

「勝負あつたな」

剣技でここまで食らいついたとはいえ、カードと幸福の差は歴然。

たかだか？のヌーメラルのランスが最強のコートカード相手にここまで保ったことはそれだけで驚嘆に値する。

如何に水の数術を操れても、風が味方しなければ意味がない。し向けた攻撃が自分へと牙を剥く。それに乗じたレクスの一撃。それをかわしても水の刃は防げなかった。襲い来る水圧にアロンダイトを弾かれて、しゃがんで防ぐも刃の一つをかわせずその時に瞼を切られたのだ。血が入ってランスは目がよく見えていない。唯でさえ最初から体調が優れていない顔色だった。そんな時に数術なんて無茶するから……それは俺のため。俺のためと思いたがる、あいつ自身のために。

ようやく足が動いた。震えも止まる。ユーカーは立ち上がり、アロンダイトを拾い上げる。

(国のため……)

そう、ここからそう思えたならお前はもっと楽になれるのにな。楽になりたくて……お前はああ、言ってしまったんだよな。そうだったんだな、なあ……ランス？そのくらい……俺はお前の重荷になつてしまったんだ。そうなんだろ？

「レクス、そこまでだ。ランス程度の数札捨て置いたところで痛くもかゆくもねーはずだ」

「悪いがセレス、そうも言っていられない。剣を合わせて理解した。お前など可愛い物だが、……この男は危険だ」

「き、危険つて……」

「狂人の目だ。こんな者の傍にいれば大勢の人間が壊される。正論で目を曇らせてはいるが、これの本質は狂人だ。早急に芽を摘み取る必要がある……」

剣を握るレクスの声にも力が入る。何を言っているのか解らない

が、この男はここでランスを殺すつもり。項垂れたあいつの首を刎ねようと、刃をそこに添えている。

(そんなこと、させるもんか)

俺は手にしたあいつの剣を自分の首へと当てる。そしてさも当然と、俺ははったりを言う。確証はない。それでも騙しは俺の十八番だ。この場合カードの不運と幸運がどちらに転ぶか解らないが、試してみる価値はある。これで終わりに出来るなら。

「レクス、知ってるか？カードは自殺も出来るんだぜ？」

「……自らを人質とするか」

「お前は俺が、俺のカードが欲しい。そうだな？ならそいつを放せ。ここでは殺すな。じゃなきゃ俺がここで死ぬ」

「飲むと思うか？ジャックはお前の他にも三人いる」

「ああ、飲むな。俺はお前の妹に似てるんだろ？見捨てられるはずがない。その程度にはお前は最低じゃない」

俺は瞬きをも殺し、じつと暗闇に男の黒を見つめる。黒いその瞳は、やがて俺の青へと屈する。

「……セレスに感謝しておけ、高名なるアロンダイト卿」

ランスに一言言い残し、レクスは剣を収めた。そして俺の方へと歩み寄る。そして俺の手からランスの剣を奪う。でもプライド高いお前はそれが許せないよな。俺なんかに命乞いをされたこと。そんな生き恥。アルドールのためとか国のためとか、この一瞬は頭の中から忘れてしまったんだろう。感情を殺して来たお前がこうやって、暴走するのは専らあの人と……俺の所為だよな。それが良いことなのか悪いことなのか、俺にはもう……よく分からないんだよ。

「っ……っ！」

今のお前の青に浮かぶは、怒り一色。カードなんか無かったら負けない……という自負。理不尽な敗北へのやるせなさ。それがお前の遵守してきた騎士道さえも打ち破る。剣を収めた敵。それを背中から斬り付けるなんて……

（お前らしくもねえ）

だから気にするな。俺が、そんなお前は嫌で、見たくなかっただけだから。

しかし皮肉なもんだ。俺が預けた俺の剣、セレスタイト。数術でそれを隠していたんだろう。持っていたことを悟られないよう、不可視数術でも掛けていたんだ。それでお前はレクスに斬りかかった。それが許せなくて俺は……あの日トリシュにしたように、お前の前へと立ちはだかった。

見事な太刀筋だ。痛いなんてもんじゃない。これでお前の目がちゃんと見えていたなら、俺の胴体は真つ二つになっていただろう。肉と皮撫でられたくらいでこの位痛いんだ。本当、お前には敵わない。

（お前は……俺の、誇りだった。だけど……けどな、ランス）

手から伝わる手応えは、慣れた感覚だっただろう。そしてお前は妙に思ったはずだ。背中から斬ったはずなのに、どうして？何時もと同じ。正面から斬ったようなこの手応えは何だと……必死に目を凝らすんだ。それでもまだ見えないはずだ。その高さに俺はいない。

「セレス!？」

倒れる俺に気付いたレクスの叫び声。それに確信してしまっただろう。何余計なことしてくれてんだ。せつかく庇ってやったんだから何も言わないでいてくれよ。ああ、くそつ。

「……もう、良いんだ」

「ゆ……ユーカー!？」

ランスの声が震えている。でも、その内どうでも良くなるから、そんなに脅えること無いだろう。自分に嘘、吐かなくて良い。お前が脅えることはない。

「……もう、良いから。……捨て、ちまえよ……ランス」

「う……あ、あああ……」

「意外と、大したことないだろ……?こんなもん、なんだよ」

お前が今泣いているのは、俺を斬ったことでも俺への怪我を心配してもじゃない。俺を斬っても何も感じない自分が信じられなくて、それが嫌で嫌で堪らなくてお前は泣いているんだ。

「俺は……コートカードだ。お前なんかには殺されない。だけど、
痛えもんは痛え」

治療数術を掛けようとするあいつの手を振り払い、腹に力を入れて立ち上がる。

こんな傷大したことはない。痛いのは身体じゃない。だから治して貰っても意味がない。お前じゃ治せないんだよ。

「俺はお前の敵にはなれない。それでも味方でもいられない。そ

れがお前にとって良くないことだつて解ったから……俺はもう、お前を崇めねえ。尊敬しねえ、慕わねえ、……でも、軽蔑もしねえ。それでも傍にはいらねえ」

じゃあなと二人に手を振って、フラフラと歩く。倒れる寸前それを支えてくれたのは、あいつではなくレクスだった。それを振り払える気力はなかった。逃げられない理由もある。だから甘んじてその腕に収まる。その時、何か向こうの方から何人かの声が聞こえたが、余りに遠くて解らない。唯、間近で見たレクスが怒っているのは目に見えた。

「カーネフェルの騎士よ……俺もつくづく自分は最低だと思うが、少なくともお前には負ける自信がある」

「っ……………」

「言い訳でも返す言葉があるのなら……あの湖城に来るが良い」
何も言い返せず項垂れるランスをぼんやりと見つめながら、俺はレクスに抱えられ馬車へと戻る。

「早く馬車を出せ！」

御者である兵士を怒鳴りながら、レクスは俺の手当を始める。傷は浅いぞとか馬鹿みたいに声を掛けながら。俺は敵なのにな。
最強の一角であるコートカードのキングが、俺みたいな取るに足らない駒のために涙目ですらある。

「……………何故俺を助けた？」

カードの所為だ。あいつは……………不運だ。あいつがあんたに斬りかかったなら、死んでたのは……………あいつだったのが、目に見えてた。

……そういうのは建前だろう。

「しがらみ、切って……終わりにしたんだ」

俺は誰でもないし、何でもないし、何処にもいないし、何処にいても良い。俺は自由を手に入れた。要するに捨て犬だ。悲しいのは最初だけだ。すぐに野犬になれる。俺は牙と爪を研ぐ。カーネフェルとタロツク。どっちが勝っても良い。俺には関係ない。俺はじつと、時を待つ。今は何も考えられない。考えたくない。だから……

「それに……俺は今、どうしていいか……何もわかんねーんだよ」

それを彼へと伝えて目を伏せれば、静かに「そうか」と頷かれ……頭に触れられる。俺をそんな風に触るのは、あのおっさんとあいつくらいだったから……何だか無性に悲しくて、俺は両腕で目を覆うのだ。

「……少し寝ろ。城に着いたらちゃんと治させる」

「……暇、じゃ……ねえの?」

船で読んでいたエロ本は読まないのかと尋ねれば、震えた声で額を弾かれた。

「こんな状況で読めるか、阿呆」

(ど、どうしよう)

アルドールは狼狽える。こういう時、しっかりしろと檄を飛ばしてくるイグニスも今は傍にいない。

ランスがユーカーを斬るなんてあまりにもショッキングな映像を見てしまったから、みんながみんな狼狽える。

トリシユとパルシヴァルが狼狽えたのは一瞬。トリシユはランスを一度睨み付け、先に飛び出したパルシヴァルに続く。彼らは俺の言葉を待つ間もなく、すぐさま馬を飛ばして馬車を追う。俺も追いたかったけれど、ランスのことも放っておけなかった。

ランスの手にはユーカーの得物。手が石にでもなってしまったようにそれから手を放せず、彼は自分の罪にうち震えている。

「ランス……」

「アルドール……様っ……俺は……」

こんな弱り切った彼を見るのは初めてだ。ランスが泣いている。俺の前で、泣いている。

一時的な治療しかできないけれど、今俺が彼にしてやれることはそれくらいしかなかった。だから彼のを傍へと膝をつき、切られた脛の回復をする。それから冷たくなった指先をぎゅっと握って震えを押さえ込む。

「大丈夫だよランス、ユーカーは俺達が迎えに……助けに行く。それにあのユーカーがあんなことでランスを嫌うわけがないじゃないか」

「違うんです……俺は、俺が……」

「違っつて……？」

アルドールが必死に励ましの言葉を紡ぐも、ランスの震えは増すばかり。

「同じ、だった……」

「同じっつて？」

「あいつを切った感触。……同じ。これまで殺した人間と、何も変わらない！」

「そ、それは……ユーカーも人間だしそうだろ？」

「だから俺は……俺はもっとあいつは特別で、特別だと思っつて……だからっ！あいつを傷付けたりなんかしたら、こんなもんじやない！もっと……もっと……違う思いになると思った！なのに……同じなんです！……何も、感じないっ！俺は、あいつが大切に……あいつは俺の、大切な……家族で、親友なのにつ！」

大義名分、人殺し。騎士の仕事は名誉を冠するだけの人殺し。だから次第に何も思わなくなる。それが仕事だ。剣を握った瞬間から自分は眠る。自分は捨てる。そうして別の生き物になる。大切な人を傷付けて、それでも何時もと同じ無感動。何も感じない自分にランスは深く傷つき悲しんでいる。ユーカーのために泣けない自分が悔しくて、許せなくて……そんな自分のために泣く。自分の中での大切が、意味を無くし、意味を変えていくことを知らされたようでそれが許せなくて。

もしそれを自分に置き換えたなら。アルドールは考える。もし俺がイグニスに傷付けて、それでイグニスのために泣けなかったなら……俺は俺が許せない。ランスもそういう気持ちなんだ。今の俺には解らない。それでもそう言う日が来たら、俺もこんな風に慟哭するのだろうか？

「ランス……」

ランスは知っている。ユーカーが今まで自分のためにどうやって生きてきたかを。それを知っていたからこそランスはユーカーが大好きだったんだ。嫌えなかったんだ。そんなに好かれているのに自分は、何も思えない。その事実を突きつけられて、受け止めきれなくて……ランスは涙を流している。

「あのさ、ランス……ランスが本当にユーカーがどうでもいいなら、今こんな風に泣かないよ」

「でも、俺は！あいつのために泣けないんですっ……こんな俺がどうしてっ！あいつの友と言えるでしょうか！？俺なんかよりトリシュがパルシヴァルが！彼らの方があいつのことを思っているっ！」

ランスは他の騎士達と相方の関係を比べる。何時でも自分が一番でなければならぬような強迫観念。誰よりも信頼されているから、誰よりも厚い信頼で返したい。ユーカーの信頼に縛られて、がむしやらに彼は彼を大切にしががる。それが解ってしまったからユーカーは……あんな風になってしまったんだろう。トリシュを庇った時だって……こうなっているもおかしくなかったんだ。

「負けちゃ、駄目なの？どうして比べるんだ？」

「だって、俺は……俺があいつの……」

「それでもランスがあいつを大切に思ってること。思ってたことは本当なんだろ？」

この人はとても負けず嫌いな人。彼を誰かに奪われたくないのだ。縋っているのがユーカーのように見えて、それ以上に依存しているのはランスの方だ。それに気付いていたからこそユーカーは、あま

り親しい人間を作らないでいたんじゃないかとさえ思う。そんな献身的な犠牲がまた、依存に繋がる。そこまでされた以上、大切にしなければとランスは苦しめられる。

この人が泣いているのは、自分の心が解らないから。本当にしたこと、やりたいこと。それがわからない。今何を悲しんでいるのかも、本当の意味ではまるで理解していないのだ。

「ランスは今泣いている。自分のためにだ。それはエゴだ。それが欲だ。それが人間ってことなんだよランス。お前は人間なんだ、我が儘で良いんだ」

「アルドール……様？」

「いいじゃないかなそれで。何もかも諦める必要はない。欲しいものは欲しいって何でもかんでも手を伸ばして欲しがって良いんだ。それが人間だ」

力なく頂垂れた人の頭をぎゅっと抱く。俺じゃ先王みたいに父親代わりにはなれないだろうか。俺も養父さんとは距離を感じていたし、本当の父親って言うのがどういうものか良くは知らないけど……俺がアルト王だったら多分こうしていたんだと思う。だからそうした。

不思議と拒まれなかった。それだけの力が今のこの人には残っていないのだ。精神的に磨り減っている。

「約束……したんです。昔あいつと……二人で一緒に、立派な騎士になるうって。この国を守るうって」

「そっか」

「なのにあいつは！どうしてタロツクの将なんか守って……」
「まったく情けないな我が息子よ」

不意に響いた低い声。振り返ればそこには白馬に跨った男の姿。ランスの父親であるアロンダイト卿ヴァンウィックその人だ。

「はっはっは、今朝ぶりですなアルドール様」

「り、領地に残ったんじゃ……」

「な、何故貴方がここに……」

「一つ言い忘れたことがありますな。馬を飛ばしてきたわけだが……全く情けない顔を………していてもこれでもかと言うくらい色男だなランス。流石は私の息子だ」

我が子がイケメン過ぎて貶すに貶せずやれやれと肩をすくめる親馬鹿がいる。確かにランスはこんな時でも顔だけは整っている。

「さて」

「っ!？」

そんな我が子の鳩尾を思い切り殴り上げ、無理矢理気を失わせる中年騎士は、そのまま馬上に彼を担いだ。

「ひええっ!？」

「アルドール様もご同行願いますぞ」

かと思えば俺の手を引き馬上に引き上げ馬を走らせる。それが目指すはチエスター卿の城。

その間中年騎士の背中にしがみついて、俺は振り落とされないように努力する。

「忘れた事って、何ですか？」

聞きたいことは色々あったけれど、まず第一にはそれだ。

「あのお嬢さんのスリーサイズというのは冗談で、チエスター卿は堅物でしてな。年々石頭になっていくとか。神子様のいない今、アルドール様の身元を保証するのは難しい。私が後ろ盾として出向かなければ話も聞いてくださらないだろう」

「何でそんなに大事なことを先に言ったださらなかつたんですか？」

「いやー彼とは私も馬が合わなくてね、あまり顔を合わせないようにはしていたんだよ。むしろ私が顔を出すことで話し合いは逆効果になりそうだと思うっていたのだが、そうも言ったださらないかと」

どうせすぐにイグニスと合流すると思っていたのだろう。それがそうはならなかったということは……船が沈められたことは、彼にも伝えられたのだろうか？

「うちの領地に神子様飛ばした直属の部下が来てね、大方のこととは耳にした。あれだけの人柄のお人だ、おいそれと何かあったとは思わないが私の所に送り込むくらい切羽詰まっていたのだろう。ここは私も前線に出るしかあるまい」

「……ありがとうございます」

「はっはっは！何、男は30過ぎてからが華だろう？まだまだあつちもこつちも現役さ」

ヴァンウィックはけらけらと笑い飛ばし、気を失ったランスを見つめる。

「セレス君が攫われたと来たらうちの馬鹿息子は気が気でないだろうからねえ。親馬鹿のなり損ないとしても放っておけないんだよ、これでもね。さて、まもなくだ！」

ランスを抱えたまま颯爽と馬を飛び下りるヴァンウィック。彼は恭しく俺に片手を差しだし、降りる手伝いをしてくれる。かと思いきや、空いた片足で城門をガンガン蹴り付ける。

中から顔を出したのはあの胡弓弾きの少年だ。

「こんな時間に何事ですか!？」

「こんな時間にとはご挨拶だね少年。無論夜這いは夜にするものじゃあないか」

「……は？」

「ほらほら掘られなくなかったらさつさと領主様に案内したまえ。早く通さないと領民片っ端から老若男女構わずR18も真つ青のR180クラスのエロワールドを展開するエロリスト、アロンダイト卿ヴァンウィックが食らいに行くと言えて来るがいい」

「し、シール様！なんか変な変態が！！アロンダイト卿を名乗っています！ええ！？信じて良いんですか！？変態イコール証明！？は、はい！解りました！」

取り次ぎを図る少年の動揺っぷりが酷い。城内からは悲鳴すら上がっている。ヴァンウィックの悪名は隣の領地にまで響いているようだ。

「……あの、貴方は本当にこれまで何やってきたんですか？」

「アルドール様。男とは常に過去は振り返らない。前だけを向いて向かっていく生き物です故」

「いつか刺されるんじゃないですか？」

「既に過去に何度か刺しに来た相手を逆に私の自慢の息子を刺して満足させてから帰らせましたよ。ああ、この場合の息子とはランスではなく」

「……………へ、へえ」

駄目だ、この人。本格的に全体的に根本的に潜在的にどうしようもなく果てしなくとめどなくこの上なく屑だ。男としては最低の屑だ。父親としては少し見直したのに。

「え、ええと……許可がありました。ただし“城内の者にも領民にも手を出すな”とのことです」

「ふむ、よかろう。私もそこまで飢えてはいないのでね」

「いまいち信用できませんが此方へどうぞ」

老人の夜は早い。そして朝も早い。チエスター卿もその例外ではないらしく、夜の7時とか8時はもう深夜に相当するらしい。かなりの不機嫌そうな顔で彼は迎えてくれた。

「何用だ、アロンダイト卿ヴァンウィック」

「これはシールの爺様、お久しぶりですな。まだご健在でしたか」
「そんな嫌味を言いにわざわざ参ったか？」

「いやいや、そんな暇があるのなら私は他のことをしますよ。実はですね、このブランシユ領をタロツク軍が横断したという情報が入りましてな。縦断ならまだ解りますが横断とは如何なものか。北から進軍してきたタロツク軍が我がアロンダイト領の上、貴方の元領地に留まっているというのですよチエスター卿？これ以上あの場所に敵軍が増えるのは私にとっても好ましいことではない」

ヴァンウィックの切り込みを、俺は固唾と飲んで見守る。昼間にこの老人に啖呵を切った身は肩身狭くあるが、それでも気合いで負けては駄目だとじっと二人の勝負を見つめる。

「何が言いたい」

「負傷していたうちの馬鹿息子もそのタロツク軍の将と一戦やらかしたようでしてね、情けないことに負けてしまったわけですが、

東の門を貴方のお抱え胡弓弾きが通してしまつたらしいじゃないですか、敵軍の将を」

「……つまり儂がタロツクの連中と手を組んでいるとでも？」

「ええ、違つ風に聞こえたならば耳の医者を紹介するところでしたな」

「戯れ言を」

「本気ですよ。裏は大分取れていますのでね。でなければ辻褄が合わない。ここ数日で城の観察をしていた者から言われているんですよ。城に兵がどんどん増えていくとね」

「ふん、さしずめ貴様の所の甘い警備の所為で突破されただけではないのか？」

「生憎うちの領内に上陸した者は北上する者が多いんですがねえ……海からうちの北側はこのブランシュ領だつたと思うのですが？」

チエスター卿が、タロツクに下っている。それを示唆されたが、俺には意味が分からない。どうしてそんなことを？本当に降伏しなければならぬほど追い詰められているようには見えない。この街は音楽を奏でる余裕すらある場所だ。それが何故？

疑問を浮かべる俺は、ここを治める老人に……強く睨まれた。

「本当のところは解りませんが貴方がタロツク側に回ると言うことは、この方を……カーネフェリア様を敵に回すと言うことをお忘れ無きよう。この方がカーネフェリアだとは私が保証しますよ。彼はシャトランジアの聖教会の神子様が身元を保証されている」

「儂には貴様などのために身を引いたアルト王が理解出来ん……だが、ヴァンウィック！貴様のことは理解もしようないわ！貴様のよつな男が今更忠臣を騙るか！？」

「はっはっは！そんな今更そんな気はありませんよ」

中年騎士は明るく笑つ。しかし笑みを殺して一度だけ、老人を睨

み付ける。

「ですがね、私は貴方と違って残された時間はこの馬鹿息子の父でありたいと思うのです。あの可愛いトリシユ君と違ってうちの馬鹿息子は私を毛嫌いしていますかね。さてご老人、身辺整理でもなさったらどうです？タロツクが負ければ貴方もこの領地を追われる。彼は立派に育った。この領地を治めるに値する男だ」

「ふん、あんな優男に領主が務まるものか」

「務まりますとも。恋とは時に愚かで時に偉大なもの故に。若さもそれにまた似ています。その内麗しい姫君を連れて帰ってきますでしょうよ彼もまた」

こうしてユーカーのいないところでまた勝手に不幸フラグをこの人は。弟子可愛いのは解るけども少し甥っ子を真っ当に可愛がってあげてもいいんじゃないのか？

「さて、そろそろお暇しましょうアルドル様。この馬鹿息子をいい加減寝かせてやらんとあれですからな。というわけで客間をお借りしますぞ」

「出て行け変態」

「仕方ない。ならばチエスター卿お気に入りの三兄弟とやらを三人まとめて相手にでも」

「くっ！キール！適当な部屋に案内しろ！」

手をわきわきと動かしたヴァンウィックにはご老体も青ざめる。我が子のように可愛がっている楽師達がこの中年騎士の毒牙に掛かったら大変だと城の部屋を提供。確かにこの人が来てくれて助かった。こういう路線に走らないとチエスター卿とは話も出来ないのだとよく分かった。

(……はあ)

ルクリースがいてくれてばどんなに心強かつただろうか。彼女を見習いたいとほんの少し思ったけれど、どうにも俺には出来そうにない。ヴァンウィックを真似たら多分今以上にランスに嫌われてしまいそうだし。俺は俺なりのやり方を、模索していくしか無さそう
だ。

*

それは何時からだろう。よくはわからない。それでも何時しか俺は……本当に酷いことだと思っけれど、あいつのことをやはりペッコか何かだと思っていたのだ。俺の可愛がり方はそれだった。

本当に目に入れても痛くないくらいに思っていたし、出来ることなら俺以外に懐かれたくないし、懐かれたとしても一番は常に俺であつて欲しい。あいつが捨て犬。拾ったのが俺で俺が飼い主。だからそれは当然の権利であるべきだと何時しか俺は思い始める。

「何キしてんだよお前」

「別に怒ってないよ」

「普通に怒ってるし」

「怒ってない！」

「何キしてんだよお前」

「別に怒ってないよ」

「はいはい、んじゃ怒ってないならなんでそんなに不機嫌なんだよ」

「別に不機嫌じゃないよ」

「へいへい。どうせおっさんが俺ばっか連れ出すから腹立ててんだろ、お前アルトのおっさん大好きだもんな」

「別にそれだけじゃない」

「は？それ以外にお前に何があるんだよ？」

「ユーカー、最近俺と遊んでくれない」

「ぶはっ！遊ぶってお前……年上だろ？何がキミみたいな事」

「ユーカーはっかりアルト様と遊ぶの狡いけど！アルト様はっかりユーカーで遊ぶの狡い！」

「ちよつと待て。“と”と“で”の違いは大きくないか！？俺で遊ぶな！百歩譲って俺と遊べ！」

昔はこんな喧嘩も良くしていた。昔はそうだ。もつと素直に俺は色々口に出ていて。それが年々言えなくなつて。傍にいてくれたとか、もつと一緒に過ごしたいとか、そんなことも言えなくなつた。お前は俺からの好意の形が歪んでいったのに気付いていながら、それに異を唱えることが出来ない人間だった。どんな形であれ、好かれることは嬉しいから。そう思ってしまうのがお前だから。お前は自分を好いてくれる人間を完全に嫌えないという欠点がある。しかし面倒臭い性格のお前だ。目のこともある。俺が傍にいることで初対面の第一印象からお前を好くような変わり者はそうそういなくなる。

いつも一人のお前を構う振りをして、俺がお前を一人にさせていた。そうしてお前を構いたがる。飼犬はそうできてくれなきゃ困る。威勢の良い番犬。俺には懐く。可愛いものだ。

いつもお前をからかうことで癒されていた。お前の前では素に戻る気がした。そんなお前から俺は騎士として見られるようになっていった。お前は俺を見てくれなくなった。

それは俺の本音じゃないんだ。お前は気付いてくれるだろう？そう思っていたことも俺の殻が厚くなるにつれてお前には届かなくなつて。その内自分でも本音と建て前の区別が付かなくなつて、俺は俺を見失う。

俺はここにいるよ。殻をぶち壊してくれないか。また、昔みたいにお前と話がしたい。一緒に馬鹿なことを話して一緒に下らない馬鹿をやりたい。それが今では許されない。だから俺は苦しいんだ。お前の傍にいと俺は、俺に嘘を吐き続けている。お前みたいになりたい。お前にはなれない。

俺の理想がお前だ。それでも人々の理想はお前じゃない。偽った俺が理想だと彼らが言う。だから俺は偽る。情けない顔は出来ない。弱音は吐けない。

でも、それはもう良いんだよとあいつが言った。終わりにしようと俺に言う。

ああそうだね。そうしよう。それがいい。そうすれば、俺がお前を傷付けることももうない。いつだってお前を苦しめていたのは俺なんだ。俺がお前の重荷だった。枷だった。それを認めることが辛かった。反対のことはもう認めていたのに、相手にとってのそれが自分だと受け入れるまで……こんなに長い時間が掛かってしまった。俺もそうだよ。何時しか重荷になっていたんだ。変わらないお前が眩しくて。

そう思うと変わった自分が惨めに思えて、どんどんお前が憎くなる。お前が何かしたわけじゃない。解っている。解っているからこそ俺は俺を嫌い出す。そして俺は俺をそんな思いにさせるお前を嫌いになって来る。

それでもお前は変わらず俺を立て、俺を崇めて慕うのだ。俺の誇りだ、俺の自慢だと。増長していく俺の空っぽのプライド。俺の中には何も無いのに、俺は不遜に傲慢になる。中身などありはしないのに。

だから俺は俺とは真逆のお前の中ならば、俺に欠けている全てが備わっていると思ひ込んだ。お前を縛り付ける心は空虚な自身を満たしてくれると思っていた。

そんなお前は荒んでいったのだろうか。俺が縛り付ければ付けるほど、お前の中身が消えていく。手綱を緩めればお前は多くを手に

入れ遠離る。ますます俺は荒んでいくばかり。

俺の平穩とは常に、お前という犠牲の上に成り立っていた。

まだ、大切なのは本当だから。だからこそ、さよなら。お前はお前だ。そう言っただけであげられなくてごめん。お前をお前として見てあげられなくなってしまうってごめん。最後にそれを伝えたい。だけど声が震えてもう何も……言葉が出ないんだ。

「……………」

あれ？おかしい。ランスは目を瞬かせる。自分は外にいたはずなのに、見たことのない天井を見上げている。

精神的なものか、酷く怠い。頭が痛い。身を起こすのも億劫だ。そんな中、誰かの声が聞こえる。

「お前の初めての我が儘を、私はまだ忘れられずにいるよランス」

声の方向を向けば、何故か父である男が寝台横の椅子に腰を下ろしていた。何故ここに父さんが。そう思ったが、この男のことだ。何をやらかしてもおかしくはない。実は隠し子が100人くらいいるとか言われても俺は多分驚かない。むしろその程度で済んでいることに驚くか。だからこの程度、よくわかることだ。

それに、今は強く言い返す気力もない。だから俺は先の言葉を聞き返すことしかできなかった。

「俺の、我が儘？」

「ああ。お前は忘れてしまったか？」

父はにやにやと笑う。

「私はよく家を空けていたからねえ。お前に我が儘を言われるな

んで滅多にないことだ。だからお前が私に何かを頼むと言うことは、私にとつてとても印象的かつ衝撃的なことだったんだ」

「俺は……何を」

「これが“父様仕事に出掛けちゃ嫌あ”とかだったらまだ可愛いんだけども、お前は昔から顔は良いのに中身が可愛くない子供でなあ……」

肩をすくめていた父が、にっと口を歪ませて……彼の名前を口にする。

「だが、そんなお前が唯一可愛くなるのがセレス君がらみの時だった」

「ユーカーの……？」

「お前はアロンドイト領にセレス君を引き取りたいと言ったんだつたな。病気の療養という建前で、あれの傍にあの子を置いておきたくなかったんだらう」

「俺が……そんなことを」

すっかり忘れていた……

(そうだ、俺は……)

こんな目さえなければ、きっと父は愛してくれる。泣きながらその目を抉ろうとしたあの子。唯守りたくて、誰にも傷付けられたくなくて。守ってあげたかった。だからどんな理不尽からも守ってあげられるように、俺の傍に置きたかった。

それでもあいつがどんどん強くなって、俺が一度、打ち負かされた。剣なら誰にも負けないと思っていて。それが俺より後に剣を覚えたあいつに負かされて。それが悔しくて、悲しくて。俺が守られる側になるのが許せなかった。そうして俺のあいつへの情は……次

第に歪んでいったんだ。そうして今や、俺があいつにとって何より大きな理不尽の権化と化した。本当に、皮肉なことに。

「お前も覚えているだろう？あの子とうちの領地で遊んだ日々は」
「……はい」

今も思い出せる。毎日が楽しくて、新鮮で……輝いていた。あいつが一緒なら、何も怖いものなんか無かった。一緒に領地を探検して遊び歩いた。次第に元気になったあいつと一緒に悪さもした。だけど俺は……母さんが死んでから沈んでいた俺が元気を取り戻したのは、あいつのお陰だったじゃないか。あいつがうちに来てから俺は、毎日ずっと笑っていた。

「私も驚いたものだよ。あれが死んでからはいつもはしょぼくれた顔をして出迎えるお前が、あんなに笑って私を出迎えた。セレス君には悪いが、長らくお前のお守りを彼に任せてしまったなあ……」

しみじみと感慨深そうに父は言う。あいつを犠牲にしてきたのは自分も共犯だと語るように。

「いつそ彼が姪っ子だったなら、一生お前の面倒を見せて貰っても良かったんだがね。甥っ子じゃこの辺が限度なのかも知れないな」

確かにそうだ。彼が女の子だったなら俺は……俺がずっと守る側でいられたのに。負かされることもなく、屈辱を知ることもなく……唯、真っ直ぐに……大切にいられただろう。

(それでも……)

そうなら俺とあいつの繋がりには……ここまで密接な物にはならな

かっただろう。多分何かの枠に収まって、それで終わった。今はどの枠に収めてもしつくり来ない。だから投げ出したくなるくらい重い。それでも、大事だったのは本当で……遠く離れていくあいつに、心にぽっかり穴が空いたよう。

「俺は……」

「お前が嫌じゃなくてもセレス君が嫌なんだろうよ。なるほど、確かに時に友情は愛に傷ついた心を癒してくれるかもしれない。しかし同じ物にはなれない。お前達は……いや、お前がその辺を正しく理解していない」

「俺が……？」

「ああ、そうさ。セレス君はシャラット卿のお嬢さんと恋仲だった。しかあし、セレス君が大好きなお前はそれをあんまり快く思わなかった」

「……………」

友情と愛情を履き違えてごっちゃにしている阿呆がお前だと、父は俺を指摘する。母親からの愛、父親からの愛、兄弟としての愛。アルト様が現れるまで、そんな物を全部彼の親愛から得て置き換えようとしていた。偏狭で嫉妬深く、依存ばかりが強いそんな男と長年親友をやっつけてくれた彼は本当に有り難い存在なんだと言われた気がする。多分、それは一生物だ。彼を逃せばもう、代わりは永遠に見つからない。そのくらい希有な人材なのだ俺は教えられている。

「それでアスタロット嬢が死んだのを良いことに、お前は彼を騎士人生に縛り付けた。聞くところに寄れば二人で剣の道を究めるべく国に命を預けて生涯独身でもして男の喜びも知らずに生きていくつもりだったんだろう？ああ、勿体ない！セレス君もあれでそこそこ可愛いし、お前は私に似て美形だというのに」

かと思えば父の言うことは解らない。回りくどく大げさだ。

「何が言いたいんですか？」

「つまりだな、セレス君はお前と違い人を愛すると言うことを知っている男だ。そして失う怖さも知っている。だからお前との繋がりさえも許し愛せる器があるんだよ。友情もまた一つの愛の形故、彼はお前のためにでも死ねる覚悟がある」

「……………そう、ですね」

それは知っている。あの子は本当に俺を大切に思っていてくれた。だから俺もそれに応えたかったんだ。思ってくれる以上に思いたかった。大切にされる以上に大切にされたかった。そういうところでも俺は、どうしようもないほど負けず嫌いだったんだ。

「しかしお前は愛を知らない。誰かに恋したことも愛したこともない。だからお前の彼への友情には愛がないのさ、覚悟もない。親しみが情性で依存に変わっただけの繋がりで。お前のそれは愛ではなく、唯の情に過ぎん」

俺と人との繋がり、それは情なのだと父は言う。その全てに愛がない。アルト様との関係ですら、情に過ぎなかったのだと言い切られたようで胸が痛い。突然そんなことを言われても、愛なんて……………そんなの意味が解らない。

「我が息子よ、彼と真の友になりたいならばまずは愛を知れ。誰でもいい。心を開け。そして一度恋に愛に生きてみる。それはお前の器を広げる。お前が愛という物を知ったなら、その時はお前も彼と対等の親友になれるさ」

「でも……………っ！」

「私は私の親友と同じ女性に恋したことがあったが……それでも今も彼への思慕は尽きない。私はあの時ほど自分が男だったことを感謝したことはない」

「どういうことですか？」

「女性の友情は時に愛のために崩れるが、男の友情という物は愛の前にも不滅と言うことさ。別物と言うことだ。時には恋敵同士友情が芽生えることもある……」

「……………」

「今となつては私は、そんな友をもう一度……あの男のような奴に巡り会いたいから、食い漁りをするのかもしれないなあ……………」

父は遠い目をして眼を細め……小さく息を吐く。

「要するに、お前とセレス君が娘と姪でなくて良かったと言うことだ。お前達が私を取り合い友情にドロドロの亀裂が入るところは見たくなかった」

「仮に俺とあいつが女に産まれてもそれだけは絶対無かったと確信できます」

「まあ、考えるな、感じる。そう言うことだ。心そのままに行け。さすれば否応なしに恋の嵐は猛々しく吹き荒れる。お前は下らないことを考えすぎだ」

頭をがしと掴まれ何度か揺さぶられ、目が回る。そんな様子の俺を見て、父は小さく笑うのだ。

「それが彼への礼儀だ。彼はお前ほど心の狭い人間じゃない。お前の世界が広がることを喜ぶ器量のある男だ。まあ、陰で寂しがるくらいの可愛気はあるだろうがな。たまには相手をしてやればそれで十分喜ぶだろうよ」

「……………」

「別に私としてはお前がトリシユ君の恋敵に立候補してくれても構わないのだがね。そんな殺伐とした修羅場も端から見分には酒が進みそうだ」

「ふ、ふざけないで下さい！俺とあいつの繋がり、そんな下世話なものにしないで欲しい！」

「なら馬鹿息子、さつさと友人としてよりを戻しに行くんだな。そんな下世話な関係を迫る男が少なくとも二、三人はいるらしい。セレス君のリアルラックの低さは異常だぞ？それにもう私の弟子にあの少年騎士君が追いかけていったそうじゃあないか。もうお前の出る幕は終わっていたら面白いな王子様？」

「二人までは把握していますが、三人目とは？」

「無論私に決まっているよ」

「あいつに何かしたら俺が許しませんからね、父さん」

「ははは、お手柔らかに……………む？ランス、今何と？」

「仕度の邪魔です、出て行ってください」

しつこく同じ言葉を引き出そうとする父を部屋から追い出すと、彼は去り際こんな言葉を残していく。

「そうだ馬鹿息子、寝台の下をチェックしておけ」

「は？」

また何か変な本でも置いたのかと不安になるが、この状況でそんなことをするような父親なら今度こそ軽蔑する。仕方なしにとりあえず言われるがままチェックはしてみる。するとそこには……………

「混血剣セレスタイト……………」

ユーカーの片手半剣。俺が……………あいつを斬った剣。アロンドイトはあの時タロツクの騎士に奪われた。

「ユーカー……」

お前の怪我を治すのが、長らく俺の役目だったのに。その俺がお前にあんな大怪我負わせてしまうなんて……

痛む胸と共にそれを装備に加えるが、慣れない剣は手に重い。それでも人を斬る感触は同じ。あいつはもつと強い物だと思っていたのに、……人間、だったんだな。この壁なんかよりももつと脆くて柔らかくて。俺も……お前を美化、神格化していたところがあつたんだなと、思わせられる。あいつは何もしないが何でも出来るって、俺はそう決めつけていた。だけど、そうじゃない。そうじゃなかったんだ。

これまで明確にイメージできなかつたあいつの死。それが俺の中でリアルに想像できる物に変わっていく。死ぬんだ。いつか。あいつも、死ぬんだ。俺が死なせてしまうんだ。だからあいつは……俺から離れた。死にたくないからじゃない。俺に殺されたくないからだ。名誉のない汚れ役。それを俺にさせたくないから……

「ランス、起きてる?」

聞こえるノック音。声はアルドル様の物。

「はい、どうぞお入り下さい」

身支度を調べて扉を開ければ、少年王が部屋へと踏み入れる。

「疲れてるところ悪い。本当は今すぐにでも……って言いたい所なんだけど、ユーカー無しでの夜道は危険だ。敵の罠に嵌る可能性もある。この辺の地の利は俺達にはない」

みんなが心配だとは思っけれど、出発は翌朝にしよう。アルドル様はそう言った。それでも俺はそれに従えなかった。

「ですがアルドル様！」

「心配？」

「はい」

「そっか。じゃあ行く今から」

「……はい？」

突然のことに面食らう。彼の意見はほんの瞬く間に変わってしまった。

「ごめん、今はランスを試したんだ。いつものランスならきつとああは言わなかった。俺の言葉に従っていたはずだ」

「アルドル……様？」

「ランスは人形じゃない。人間だ。だからそれでいいんだよ」

そう言っつて、アルドル様は俺に笑みかける。

「俺もみんなが心配だ。ていうか俺とランスが一番カード的には今ピンチだ。みんなに心配されないためにも合流を図るのが当然の流れだよな」

「そ、そう言われてみればそうですね」

Aと？。最弱と弱い方から数えて三番目。こんな時に道化師にでも襲われたらひとたまりもない。

「しかし王の護衛が一人とは心許ない。どれ、私も付いて行っつてあげるとしよう」

「領地は良いんですかアロンドイト卿？」

「聖十字兵のみならず、運命の輪の子が来てくれたのでね。教会兵器持ちがいるなら正直私が出る幕ではないだろう」

「……また貴方は何処から出て来てるんですか」

何食わぬ顔で会話に加わる父はクローゼットから現れた。おかしい。扉から出て行ったはずなのに。

「いや、あまりにここの領主が腹立たしいのでな。壁ごとクローゼットの背中を切り抜きまたハメてこうして隠れていたわけだ」

さも当然のように器物損害を語られても……反応に困るのだがこの人は何も解っていない。

「む？どうしたランス？」

「何でもありません」

少しでもこの人を見直した、俺が馬鹿でした。

沈んだ船にもたれながら、エルスは夜空を見上げる。血の生贄は随分と稼いだ。これでまたしばらくは数術を使い放題だ。

(それにしても、疲れたな)

腐っても聖教会の神子。生贄の一部を逃がされてしまった。辛くも勝ったとは言え、祝杯を挙げるような気力はない。自分のために料理をする事ほど面倒なことはない。それは自分が妖怪ではなく人間だと認めるようなことだ。妖怪は食わなくても死なない。でも僕は食わなければ死ぬ。それが嫌だった。だけど妖怪は食べても死なない。だからそんな僕の気持ちを汲んで、あいつらは宴会ばかりをしていたよ。

レーヴェ達山賊は、少しあいつらに似ている。小悪党レベルの悪行、何処か憎めない愛嬌、そして自分に正直。美味しい飯が、酒が好き。綺麗な女も好きだ。そういう素直さが僕は好きだ。あの頃に帰ったような気になるから。

(レーヴェ、お腹空かしてないかな……)

早く、帰らないと。そう思うも足がふらつく。もう少し……もう少しだけ休憩が必要か。犠牲は足りても計算式を導く僕の頭が疲れている。思えば僕もお腹が空いてきた。帰ったら彼らと自分のために、米でも炊いてあげよう。

「……お腹、減ったな」

この世にはいろんな死の形がある。その中でも最も辛いものは何

だろう。僕が思うにそれは餓死だ。この世には様々な残酷な死の形がある。それでもその時だけはどんなに痛くとも、みじめでも、辛くとも……速やかに行われる死は慈悲深いものだと思う。

でも餓死はどうだろう？人間にとって食は必要不可欠。それがなくなりゆるりと死んでいく。何もかもがなくなるまでは猶予があるだろう。だからこそこの死は残酷なんだ。

次第に気が狂って行く。善悪の境界も揺らいでいく。目の前のほんのわずかな食料に、あるいは食料などではない何かを前に、自制を失った人は……普段なら犯さない過ちを犯すだろう。どんなに優しい人も、美しい人も、愛らしい子供も。取り繕っても無駄さ。化けの皮が剥がれていくよ。

そう、だから僕は優しい方なんだよ。村を焼くのも、船を沈めるのも……兵糧攻めだけはしないであげているだろう？人の目から見ればなるほど、僕は残酷かも知れない。それでも僕は人の狂気を駆り立てているだけ。言うなれば僕は鏡だ。僕を憎く思う奴らほど、歪んだ心根をしたサディストだってこと。だから綺麗な心を持つレィヴェなんかは僕をあんなに好いている。生物的には十分僕は優しく好意的。だからそういう死だけは与えない。

それはあまりに懐かしい死の香り。ひもじい思いは僕もよく知っている。鬼子と罵られ迫害される理不尽もよく分かる。彼女の痛みは僕の痛みだ。出会った頃の彼女はそれでも人間だった。覚醒しかけてはいたが、それでもまだ。

いつもの僕ならその羽化を助けただろう。嘲笑い、惨めで悲惨な悲劇を作ってやろうと大いに利用しただろう。完全な鬼を作って村中の人間を食わせてやるのさ。これまで君を苦しめたやつらに同じ思いをさせてやろう、復讐をしようと思いついて。

だけど、僕はどうして……彼女だけにいつものことが出来なかった。僕は人など哀れまない。それでも僕は彼女を哀れんだ。僕がその鬼と出会ったのは必然だったのだろうか？

それを考えるためにも、話はちよつと遡る。僕があのもんどくさ

いことこの上ない僕の王の下を訪れる前日まで。

*

「エルス、向こうの情報入ったぜー！」

「ああ、ありがとうレーヴェ」

天空より舞い降りる鷹。それが止まるはレーヴェの腕だ。それをエルスは興味深く眺める。

この少女は百獣の王の名を名乗るだけ遭って、不思議な力がある。獰猛な獣を手名付ける才があるのだ。というか獣のように戦い勝利しどちらが上かを理解させ、服従させる……そう言えばいいのかな。カーネフェル語はわからなくても獣の言葉は理解しているのかもしれない。人外と戯れるその姿はいつかの自分を思い出し、少しだけ悲しくなる。

そんな僕に気付いたのかな。褒めて褒めてと言わんばかりの山賊は笑みながら、僕を笑わせようとする。その好意に感謝はしつつ、胸の中で溜息を吐く。

僕には困った主が居る。通称狂王。俗に言うタロツク王。彼は僕以上に自由気ままな風のように。気紛れで弄び残忍でいたぶりふらりと姿を隠す。それは数術使いの僕からしても探すのは困難。住み慣れた本国ならいざ知らず、こんな未開の土地でそんな何時も通りをされては僕だって困る。カーネフェルに来てから本当に僕は働かなくなった。連日の疲れもある。

鷹の脚に括り付けられた手紙は、彼女の部下からの情報。古風な情報収集だが馬鹿には出来ない。人海戦術って言うだろう？僕一人で何でもかんでもがむしゃらにやるのは僕が疲れる。手を抜けるところは抜くのが良い。

(……………本当、疲れるよ)

僕だつて主程じゃないけどそれなりには飄々としていたはず。つかみ所がないといつてもみんなに言われていたじゃないか。それなのにここ最近の僕はどうかしていた。ちよつと思ひ詰めていた。慣れない土地とアルドルというあの男の所為だ。

僕が苛立つているのを見たレーヴェは何を勘違いしたのか、部下に赤飯を炊かせようとした。そうじゃないんだ。僕は男だとツッコミを入れる気力もなくなつた。

彼女の場合、その見事な胸まで胸筋と解釈し、自分が物凄い筋肉ムキムキの伊達男だと思つているんだから、言葉は通じても話は通じない。

レーヴェからすれば上手い料理が出来て可愛い♀女という方程式が成り立っているのだから仮に僕の裸を見たところで彼女の中では僕が女だという認識は覆らないだろう。ていうか多分襲われる。別にそれ自体は構わないけど正直その間レーヴェの僕への惚気を聞かせられると思うと耐えられそうにない。苦手なんだ、そういうの。

「あれから南下して来たつて話はねーな。こつから向こつこの北にある湖……ブランシユ領つつたか？その古い城は廃棄されたつて話だから陣を構えるにはうつてつけかもな」

もし王が使っていないなら自分たちが使いたいくらいだと彼女は言う。それが出来なかつたのは一つ二つ理由があつて……地図を見ればその湖城への道を阻む領地がある。

「そこへ行くにはアロндаイト領……ここを抜けなきゃいけないんだね。アロндаイト卿に会つたつて話だつたけど」

「ああ、すげーきもおっさんだつた。この俺様を女と勘違いして口説いて来た。目え腐つてんじゃねえの？」

残念ながらその理屈だと人類の大半は目が腐っているね。妖怪のボクまで腐りが及ぶとは本当に君は恐ろしいよレーヴェ。

「……つーと、そのアロンドイト領って所にいるってことだよな」「十中八九そうなるね。他に逃げ場もない。彼らは今度こそ背水の陣、袋の鼠だ。ボクの数術で君たち全員を領地を越えさせるのは難しいから直接乗り込むしかないかな。山沿いのルートで越えるとなると簡単にはいかないし……海に出るにも君たちはザビル河を越えられるような船を持ってはいないだろ？」

「それはいいけどよ、エルスいろいろ移動させるの得意だろ？」
「……血が足りないんだよ。ボクの数術、その奇跡を起こすには対価が要る。ボクに力を貸してくれてる神様達は血の奉納がないとやる気を出してくれないから」

「よし！エルス、でーとしようぜ！でーと！」
「え？ボクは須臾の居場所を確認に、報告が」
「そんなことよりさ！俺の馬、ちゃんと乗れてるか見てくれよ！」

この話の流れで何でもこうなるんだろう。戦う時に乗れなきゃ困るだろうと言いくるめられ、良いから良いからと同じ馬に乗せられて……と言っても彼女はまだそんなに上手く乗りこなせて……いないはずなのに、持ち前の服従能力を使ってかそれとも馬と打ち解けたのか見事な手綱さばきで野を駆ける。

もう教えることは何も無いレベルで、ちよつとなんだかなあとも思った。だけどそんな気持ちも吹き飛ばすよう髪と頬を撫でる風が心地良い。タロツクと空気の匂いは違うけどこうして感じる風の匂いは気が安らぐ。

僕の後ろでレーヴェは慣れないカーネフェル語でデートだとはしゃいでる。仲間にからかわれた時に理解したらしい覚え立ての言葉。まったく本当にレーヴェは子供だ。図体ばかり大きな子供。僕は彼女より年上なのに彼女よりずっと小さな子供の姿。彼女の傍でも釣

り合わないのだから、あの男の傍にいたら最悪親子……隠し子辺りに見られてしまつかも知れないな。そう思ってたちょっと笑った。

「で、何処まで行くの？」

「そいつは行ってからの楽しみだぜ！」

にっと笑ったレーヴェ。話してくれる気はないようだ。しばらく駆け抜けて、辿り着いたのは……滅んだ村だ。家は崩れ田畑は跡形もなく、草木が伸び放題のその荒れ地。それでもそこに僅かな見覚えが僕らにはある。

「ここは……」

「俺がはじめてお前と会った場所だ」

レーヴェの癖に良いチョイスだ。あっちこっちに剥き出しの骨が転がっている。人間ではない僕らのデートには丁度いい場所かもしれない。

「お前が鬼だって知らなかった俺は、お前が婆の話に出てきた天女様つてのに見えた。なんつーか、感動つての？ すごい綺麗なもんがあるんだなって驚いた」

褒められるのは嫌じゃない。だけど彼女のそれはちょっと苦手だ。そこに僕への恐れがないから。感じる違和感に僕は戸惑う。

「だからいきなり身包み剥ごうとしたわけだね」

「羽衣取れば帰れないって言うだろ」

今となっては笑い話。彼女との出会いを思い出して吹き出した。混血を見たことがなかったんだろ。初めて見る混血だからそう

思ったただけだよ。言うのは容易い。それでも彼女はそれが初恋だ、一目惚れだと大いに語る。だから僕もあまり意地悪なことが言えなくなる。人からこんな好意を寄せられた記憶が僕にはないから。

彼女は鬼だと自ら名乗る。名乗るが僕からすればまだまだ可愛らしい物で、彼女は人の領分だ。僕は彼女が僕の傍まで来ようとしてくれていることに戸惑っている。でも嫌じゃない。それでもここまですり寄り込むことに、痛む胸がある。戸惑うのはそのことだ。

僕は鬼だ。僕は人の不幸を笑うために生きている。それが鬼だろう？だって人間は僕の敵だ。その不幸ほど愉快なことはないだろう？

僕が彼女との距離を測りかねているのは彼女が人か鬼なのか、僕の中ではつきりとした答えが出ていないから。いつそ双陸の様な馬鹿なら簡単に……肉親殺しの自分を鬼とあいつは言ったけど、その言葉が嬉しかったけど……僕からすればあいつは何時までも人間。

僕がどんな甘言を囁いても予定以外の動きをしない、王の駒、王の犬。ああ、人間ですらないのか彼は。

(って、どうしてボクはあんな奴のことなんか)

どうでもいいことだろう。思い出す時間の無駄だ！そう思っけど……これはもはや嫌がらせだ。新しい怪我。また手当をされた。それを思い出すと、なんだか顔が熱くなる。まだ僕は怪我の熱から回復していないのか？

「エルス？」

「うあわっ！な、何？」

気付けばレーヴェに顔を覗き込まれていた。妖怪とはいえ僕も男だ。少女にこんな至近距離に近寄られれば驚きもするし照れることもなきにしもあらずって言うか。

「俺はお前が好きだ」

「あ、ああ……う、うん、知ってる」

「でも、お前はとうなんだ？」

その言葉はいつも言われている。それでも僕にそれを彼女が聞いて来たのは初めてだ。じつと僕を見てくる黒の瞳。その色がその色が……くそつ。駄目だ。直視できない。やましいことなんか何もない。それでも今は、駄目なんだ。

あんな子供扱い、人間扱い……不服だよ。恐れ戦いてよ。僕は妖怪なんだよ。人を食らう生き物だ。人を殺す生き物だ。なのにどうして僕を哀れんだんだ、ねえ双陸。答えてよ。

貴方はさ、王さえ良ければそれで良いんだ。王以外何も要らない、そういう生き物なんだろう？それなのに何故僕を哀れんだんだ？馬鹿な奴と捨て置いて、見捨てて見殺しにすれば良かったじゃない。貴方は僕が嫌いなんだろう？知っているよ、そんなこと。出会った日から、軽蔑の目を僕へと向けていたじゃないか。知って居るんだ。僕は。それなのに……それなのに、どうして僕はあんな奴のことなんか一々思い出してしまっんだ。わけがわからない。

「わ……わかんないよ。ボクは人間じゃないし」

「それなら俺もお前と一緒にが良い！それならお前も解ってくれらだろ？」

僕が拒むのは、自分が鬼になりきれていないから。だから、人間だから。だから嫌いなんだろうと縋るように僕を見るレーヴェ。

「どうすればいい？どうすれば俺はお前と同じ鬼になれる？妖怪になれる？もつと殺せばいい？とうなんだ！？」

「レーヴェ……痛い」

「わ、悪い」

思い切り肩を掴まれた。そのことに眉をしかめると、ぱつと彼女は手を放す。それでもまだ振り払えない未練を抱えて僕を見ている。

「何か、俺……ずっと田舎の農村にいたし。都とか城とか、見たこともねえし。ずっと村の中で生きて死ぬと思つて……それがなんか気がついたらこんなとこまで来てて、エルスとも会つた」

「……………うん」

「なんつーか……何も見えなくなつてた。だけどいきなり世界が開けていった。お前のお陰なんだ」

僕に感謝するよう、熱い瞳で僕を見下ろす彼女。その目にやっぱ僕は耐えきれず視線を逸らしてしまう。こんな風に見られるほど、僕は何かを彼女にしてあげただろうか？滅んだ村を横目で見ながら、僕は彼女との出会いを思い出す。

*

「暇暇暇暇暇暇あ！ねえ須臾う！何か楽しいことないの？」

「そう騒ぐな」

「本当は我が儘言われるの待つてましたーって顔してる癖にい」

「遠乗りでも行くか。ついでにまたどこぞの村でも焼いて来ようか」

「ウイ……って言いたいところだけど、まーた嘘ばかり。最近はいいつが五月蠅くて、あいつの許可無しにそういうことも自由に出来ないじゃないか。あいつ、死んじゃえばいいのに。ていうか殺していい？」

「構わんが、返り討ちにあつても知らんし我は助けんぞ？」

王の何は不釣り合いな、薄暗い場所に彼はいた。僕の使える主。

漆黒の髪に深紅の瞳を持つ男。通称狂王……世に恐れられるタロツク王その人である。

きらびやかな玉座もない。自由に部屋を抜け出すことも出来ない。数年前まで許されたそれも狂気を理由にこんな様。宮中の奥深く、人目に触れないような場所に彼は隔離されていた。

如何に強い王でも、戦争のない時は不要。それどころか恐怖の対象でしかない。

「最近、議会の奴らまた力を付けて来たね。野放しで良いの？」

「所詮小物だ。捨て置け」

「でもさあ、ボク……人間のああいうところが嫌い！一匹一匹は弱い癖にさ、蹴落としかう癖にさ、正面からこっちに敵わないとなると卑怯にも姑息にも手を組んでろくでもないことをしてくるじゃない」

「その時は全員殺してやるまで」

「わー須臾さまーかつこいいー」

「言の葉に嘘偽りは良くない。我を湛えるのなら心の底から叫べ。或いは正直に言え」

「はいはい、無論お断りしますだよ」

酸素も薄い。換気もままならない生活って嫌だね。僕は自然の風がないと駄目なんだ。

川魚が止まった水の中では生きていけないのと同じ事だよ。水葬から飛び出し自ら死を選ぶように僕も開けてはならぬと言われた窓から身を乗り出した。んー言い風。高さはあるけど数術使いの僕に敵は無し。さあて何処まで飛んでいこうか。

「それじゃ、ボクはこの缶詰生活にも飽きたしそろそろお暇させてもらいますね」

「待て子雀。囀るしか脳がない其方が我のために歌わないとは舌

でも切り落とされたいか？」

「子雀でも紅雀でも朱雀でもなくてボクはエルス！エルス！！ザイン！」

「早口で読めば後半が朱雀院となるではないか。故に其方は子雀が相応しかろう」

「ああ、もう！貴方がいなくなったら怒られるじゃないか！ボクが誑かしたとか言われるの本当嫌なだけど！ボク人間に興味ないし！あつたとしても中年男とねんごろみたいなありもしない噂立てられるの心外なだけどっ！」

「ふむ。むしろ光栄ではないか。この王とそんな噂が立つとは」

「はいはいこーえー光栄後衛さようなら」

「まあ待て」

「襟掴むなっ！脱げるっ！はだけるっ！変態変態性犯罪者！夜の帝王っ！下半身大魔王っ！」

「そこまで罵倒されると逆に期待されていると解釈せざるを得なくなるな」

「だからボクをそういう話に絡めるなっ！！」

「それが嫌なら我も連れて行け。何、一日二日気にする者も居らんだらう。あまりにも暇なので思いついたのだが“衆道において四十八手はどこまで成立するのかどうか”かどうかが気になってきたのでこの子雀を用いて実践に移してみるかという建前で人払いを命じておけば」

「貴方がそういうセクハラまがいの言い訳ばかりするからボクの風評被害が酷いんですけどっ！！この間なんか誰とは言わないけどねっ！貴方にメロメロのどっかの馬鹿に枕から布団からびっしり剣山刺されてたんだからね！！」

「ふむ、誰だろうな。いずれにせよ可愛いところがあるではないかその者も」

「かわいくないつ！被害にあったボクの身にもなつてよね」

「ならば死刑にでもしておくか」

「だからどうしてそう貴方は両極端なんだ！ていうかあんたの愛娘なお姫様が犯人だ！なんなのあの女？いつつも処刑祭りとかやってる癖にあの中途半端な嫌がらせは何なの！？」

「ほう、刹那がが。あれもあれなりに自重したのだろう」

「ファザコン女の嫉妬は見苦しいったらありやしない。……って
いうかボクをそういう愛人とか愛妾まがいの立ち位置にしないでくれない？ていうか適当に女作れ。妻が全滅してる今僕が貴方の傍に
いるとそういう目で見られちゃうんだけど？正面から来ないで地味
な嫌がらせ受けるのってすごい苛々する！否定しようにも王への侮
辱なんたらかんたらってどいつこもいつも」

この王は本当に両極端。心酔する者は本当にどっぷりで心底この男に惚れているし、恐れ戦き忌み嫌う者は本当に怖がっている。そして王の周りなんてその前者しか居ないに等しい。故に僕が城の中で微妙な立ち位置なのは主にこの男の所為だ。

「まあ、そう憤るな。何もそれだけではあるまい。あれのことだ」

「ああそうだよ！だから嫌だつて言ってるんだ！寝る場所なくてボクが困ってるのを見てそのまま自分の寝所に連れ込もうとするんだあの姫は！すぐ変なところ触ろうとしてくるしっ！本気で食われると思っただんだから！嫌ってるのか何なのかはつきりしない奴つてボク大嫌い！」

「ふむ……一度混血を食ってみたいと言っていたなそう言えば。私情と私欲を履き違いぬあれの美德よ」

「わけわかないし」

疲れる。この人の相手をしていると疲れる。これ以上疲れるのは嫌だ。仕方がないので渋々僕は折れてあげた。

「それで？何処まで行きたいの？」

「子鬼、其方は海の向こうを知っているか？」

「知らないよ。ボクはタロツクから出たことないし」

「タロツクの村を焼くのも厭いだらう。たまには余所の村でも焼きに行かぬか？異国の悲鳴もなかなか趣があるぞ」

「はあ！？国際問題なんですけど！？」

「それが明るみに出ればそれはそれでまた戦が始まるだらう。良いことではないか」

「そりゃあ貴方は困らないだらうけどさ……」

「其方もそろそろ血を浴びたい頃合いだらう？」

「否定はしないけど……だけどこつち端から向こうまでってこんなくでもない距離ボクにも飛べない。何度も点々と移動しなきゃ……そうなると生け贄もかなり必要だ」

「愚か者め。地図というのは端から端まで見るからそう見えるのだ」

そう言つて王は地図を丸めて筒にする。

「あ……」

「セントレア程ではないがな、カーネフェルは存外そう遠くはないのだ」

西と東の大陸。地図の東路は通らず西へと船を進めれば……そこも確かにカーネフェル。山脈が多くて上陸には適さないし海流も激しいから使われない道ではあるが……

「海路など妖術使いの其方には関係のない話だ。違うか？其方に関係するのは血のストック、それから距離が問題だったらう？」

「そうは言うけど、今のストックじゃ行き分くらいしかないよ。距離がないと言うけどそれでもタロツク列島の半分くらいはある

じゃない。隣町まで飛ぶつてのと話が違つよ」

「ならば向こうで稼いで来ればよい。違つか？」

「二日で？」

「問題有るか？」

「……………はいはいウィーウィー問題ないです」

悔しいが僕よりこの男が強いのは事実だ。適当なところで折れな
いと如何にお気に入りの僕だつて気紛れで殺されかねない。

「我が臣下も老いた。新たな駒を探しに行くのも悪くはあるまい」

「それはボクが貴方の寝首を搔くために画策しても良いつて事？」

「協調性のない其方が何かを頼るといふことが出来るのならば好
きにするが良い」

「確かに異国の精霊と契約するのもありですね。向こうの人間の
方が信仰が有りそうだ」

結局の所その日暮らしの切羽詰まった人間に目に見えないものを
説いたところで伝わりはしない。信仰は縋るものに見えて、そうで
もない。ある程度心に余裕がある人間が暇つぶしに信じるモノだ。
人生に深くを与えたいつていう欲だ。或いは失いたくないものがある
から願うんだ。商売繁盛家内安全。それは店があるから家がある
から財があるから。故の信仰。その全てがない者がどうして神を崇
めるだろう。

「信仰か」

「王への恐れも同じことだよ、狂王様？」

「……………ふ、其方は時折面白い事を言う」

他の者なら括り殺しているところだがと、王は笑った。

「ならば我を恐れる愚民共は、まだ余裕があると言うことか」
「いや、意外と人間ってしぶといもんだね。まだ反乱起こさないなんてさ」

いや、反乱を起こす気力もないくらい、すでに痛めつけられているとも言うかもしれない。まあ、僕には関係ないことか。

*

そう、あれは一年半くらい前のことだ。

僕は須臾と一緒にカーネフェルへと飛んだ。十数年ぶりの異国の地にあのおっさん甲斐もなくはしゃいじゃってさ。僕がやってあげた外見数術のために随分といい気になって遊んでた。

うん、昔は戦場を駆け回っただけあって、カーネフェル語にもかなり通じている。ネイティブの発音で喋れる。狂人の癖に演技も上手いんだよなあ。

だから片田舎なんかには飛べば、訛りがある現地の住民なんかより余程カーネフェル人らしい。都からお忍びで遊びに来た王族貴族様か何かと勘違いされてちやほやされていた。顔は悪くないんだ。その気になれば幾らでも女を囲えただろうに、変な男だ。政略結婚で実妹の姫と結婚させられた以外に娶ったのはシャトランジアの姫。この男が深く愛したのはその妾である異国の姫だとはあまりにも有名だ。この男が狂ったのはその姫を殺してから。

そんなお姫と同じ髪色目の色の女に囲まれてもしれっとかわす。それがまたクールに映るんだろうか？

(目立つなっって言ったのに！)

(黙っていても寄って来るのだから仕方あるまい)

小声で文句を言うが、チビチビと酒を飲む僕の主は満更でも無さ

そつだ。でも多分女に囲まれて喜んでるんじゃないやなくて、久々の豪華な食事に喜んでるよねこの人。毒の入っていない食事はそりゃあ美味しいか。

でも王の癖にタダ飯食いにして貰ったくらいではしゃぐなよ。視覚数術で醜い男にしなかつた僕の優しさが憎い。目と髪色変えるだけと消費をけちつたのがいけなかつたか。

僕も視覚数術で色は変えていたけど、それだとカーネフェルの女の子にしか見えなかつたんだらう。お姉様方には眼中にないと言わんばかりに総スルー。別に人間なんかにちやほやなんかされたくないけど、これはこれで腹が立つ。機嫌を損ねた僕は変装を解いて一暴れしに行くことにした。

「……でもまあ、ボクをそう簡単に攫えると思わないで欲しいな」

「強ええ……混血とはいえ、こんなガキに負かされるとは」

「か、金になると思つたのに……」

早速僕を襲つた山賊。全員返り討ちにして半殺し。踏みつけて死屍累々のその山に腰を下ろしてみたけれど、確かに異国の景色を見ながらの人間椅子も悪くないね。血の補給をするためには全員殺しても良いんだけど、そうしなかつたのにはわけがある。

「でもそういう強欲な人は嫌いじゃないよ。どう？お金稼ぎの手伝いしてあげようか？ボクは色々されるの好きじゃないけど、するのは結構好きな方だよ」

僕はさつそく現地で契約した精霊を召喚し、手早く彼らの傷を塞いであげる。僕の奇跡に彼らは畏怖を覚えつつ、優しく甘く微笑んであげれば彼らは僕の言葉に逆らえなくなる。

「とりあえず近場の村でも襲いに行かない？」

僕は人間は嫌いだけど腐れ外道は結構好きなんだ。見てて楽しいし、感性が僕らに似てるしね。

「いやあ！大漁大漁！ありがとうございました！」

「愛してるぜ！エルスちゃん」

そんなこんなで村一つ滅ぼす頃にはすっかり彼らとも意気投合。僕にフルボッコにされたことも忘れていいる。人間って馬鹿。でも馬鹿は嫌いじゃない。

「ボクは戦利品は要らないよ。お金とかそういうの興味ないし」

「あんたは女神か！最高だぜ！」

「一生ついて行きますエルス様っ！」

僕を売り飛ばすのは簡単じゃない。でも今日一日で僕を売り飛ばす以上の成果を上げた山賊達はみんな良い笑顔。すっかり僕に懐いたみたい。

沢山の血が流れたし、多くの悲鳴も聞けた。僕の契約相手の神々も、大いに満足してくれた。血のストックも大分稼げた。僕も気分は最高。男の悲鳴も良いけど、たまには女の泣き叫ぶ悲鳴も悪くない。いや、ほんと楽しい楽しい。

馬鹿面で幸せそうにいちやっついてるバカップルを引き裂いて目の前でいたぶるのって堪らないね。でも、自然界にとつて人間なんか害虫でしょ？その芽を摘んであげてる僕ってとっても優しいよね。男と女なんか寄れば勝手に人間なんて害虫増やすんだから。一匹見たら三十匹はいると思え、だっけ？僕がそんなことを思っていた時だ。風に乗って何かが聞こえたような気がした。

「あれ？……なんだか向こうの山から何か聞こえない？」

それは獣の咆吼に似た……だけど僕が知る限りの獣のどれともそれは重ならない。不意に胸が締め付けられるような、それでもぞくぞくするような……奇妙な感覚が駆け抜けた。

それは山賊達には聞こえなかつたみたいだけど、向こうの山のこととは知っていたみたい。

「ああ、そーいや最近この辺の住民が騒いでたよーな……」

「なんでも凶暴な鬼だか悪魔が棲み着いたのつて。近々山狩りをするつて噂が」

「まつたくカーネフェリーは迷信つうか信心深い馬鹿ばつかな。悪魔なんているわけ……いや、いるか」

「何でそこでボクを見るの？僕は悪魔じゃなくて鬼！もしくは妖怪と呼んで貰いたいね」

「いやいや、エルスちゃんは小悪魔だろう可愛いし」

「アホかお前！確かに見た目は可愛いがものつそ強いじゃねえかこの子！大悪魔か大魔王だろ」

「まあいいや。後でまた遊びに行くよ。僕はもうちょっと散策させてもらっつね」

数術で空を舞う僕を見て、「やっぱあれ売り飛ばすの無理だわ」と口をあんぐり開けている山賊達。まだ諦めてなかつた奴もいたのか。そんな彼らをくすくすと笑いながら僕は噂の山まで飛んでいく。近づく内に、風に乗ってくる臭いがあった。それは肉の焼き焦げる良い匂い。これはと思い僕はその匂いの方へと飛んでいく。風に乗って聞こえてくる声。噂の悪魔だろうか？

ああ、これはいい悲劇の香り。興味を持った僕はその鬼が居るという山へと降りた。その先で、僕は見た。あの日の僕のように、焼けた村に佇む少女の姿を。

「食い物……」

「食べ物？お腹空いてるの？」

僕の言葉に彼女は頷く。長い黒髪……だけどボサボサ。手負いの獣のような目をした少女。迫害か私刑にでも遭ったのか、ボロボロだ。

でも、弱くはないのかな。返り討ちに遭わせる程度には人間止めている。1対幾らだったかなんて解らないけど、この村を一人でこの子は滅ぼしたんだ。確かに鬼の素質がある。

そう、彼女は……言うなれば半ば壊れていた。僕と出会った時には、彼女が鬼になる……カウントダウンは始まっていた。放っておけばそうなただらう。唯、彼女がそうなる前に僕が彼女と出会ってしまった。

「ボクの目には特に食うに困っているようには見えないけど、君は選り好みをしている。だから飢えている。そういう者が死んでいくのは当然だ」

辺りの死骸を指差したが、その意味が分からないのだろう。そんな彼女の口元に、僕は僕の指を差し出した。

「食べてみる？」

ここで自分と同じ形をした物を食らう位の気概があれば、一つ脚本とこの子の舞台を立ててあげようかと思った。このまま壊して鬼の逸話でも書いてあげようか。そう思っただけ……

「うわあっ！！」

何するんだこいつは！！僕は思わず手を引っ込めた。

その子が鼻血を出して倒れていた。貧血だろうか。そんな身体で無茶するから……

「……………はあ」

仕方ない。死とは違う身の危険を感じた僕は、彼女に食料を与えることにした。

「で？君はなんだってあんな所で倒れていたの？」

持ち歩きの保存食だしそんなに豪華な食料でもないのにご馳走みたいに彼女は平らげる。さっきまで瀕死の半死人みたいな顔してたのに、この子食べる内にあつという間に復活した。あの馬鹿力といどどういふ身体の作りしてるんだ。

呆れる僕の横で、仰向けに寝転んで幸せそうな顔。さっきまでの獣のような形相は何処へやら。

「ああ、山の下の奴らは全然言葉通じねえ。それで俺に石投げてくるし、食い物くれねえし。それで……………この山で適当に木の実とか茸とか食って暮らしてた」

そこまで言っつて少女は再び獣のような形相に変わる。

「けど……………聖教会つて奴が、山を焼いた」

「なるほどね」

その目を見て解った。ああ、この子は僕と同じなんだな。焼き焦げる肉の臭い。よく嗅いでみればそれは人のそれだけじゃない。獣の臭いだ。それでもこの子がそれを食べないのは、言葉も通じない異国で一人ぼっちだったこの子にとって、その臭いの源は……………大切

な友達だったんだろう。

「……… ついておいで。話が出る奴らをボクは知ってる」

僕は何を血迷ったのか、さっきの山賊達の所へ彼女を連れて行った。

こいつらはろくでもないけど、普通の人間の方が余程ろくでもない。人から外れた者と共存できるのは、やっぱり人から逸脱した外道や鬼畜辺りだろう。

「おお！タロークの女！流石はエルス様！また良いもん連れて来やがった！」

「この子は駄目。売り飛ばしたら、怒るからね」

呆れる僕の横で、山賊達にさつきを向けるその少女。

「……… てめえ、今なんて言った？」

「何処に目え付けてんだ？ああ？この俺様が女だつて？」

「いや、どつからどう見ても女だろ」

反論した男。それを彼女は思いきりぶっ飛ばす。わあ、凄い馬鹿力。

「大丈夫？」

「あ……… あざーす……… エルス」

瓦礫に埋もれてダラダラと血を流す山賊。手加減無しでぶっ飛ばされたからなあ。骨も結構折れて半死状態。回復してあげると流石の破落戸も僕に深々と頭を下げた。うん、こういうのも悪くないね。

しかしそんな僕らに近づいて、回復したばかりの男の胸ぐら掴み上げ、少女は思い切り眼飛ばす。

「俺は男だ！この胸板を見てわかんねえか？」

空腹で倒れていた割りに彼女の発育は良い。というか年の割りにそれは異常だ。山で一体何を食べていたのやら……突然変異？いや数値異常に当てられたと見るべきか。

彼女は自身の見事な胸を指差して、そんなことを言っただけのける。これには僕も彼らも言葉を失った。怒りの余り彼女が吠える、がるる……低いうなり声は獣のそれだ。

「あはははは、キミって面白いね！今の声リオンみたいだ」

「……りいおん？」

「あ、獅子のことだよ」

「しし？」

「んーと……タロークなら、レーヴェって言った方が分かり易いかな」

「……レーヴェ」

何故かその言葉を理解した途端、怒り狂っていたはずの彼女が暗い顔になる。

その様子から、ああと思った。もしかして群れからはぐれたかサーカスから逃げ出した獅子でも彼女は拾っていたのかも。……もしかしたら逆かもしれないけど。

「いいな、それ！レーヴェ！俺様にぴったりのいい名前だ！」

そう言ってあの子は笑った。過去と決別するよつに、唯……僕だけを見つめて。

*

「……本当に、懐かしいね。一年ちょっと前の話なのに、何だか全然そんな気がしない」

そう言えば彼女がそう名乗りだしたのは、僕との出会いからだっ
た。実のところ僕は彼女の本当の名前も知らない。僕にとってレー
ヴェはあくまでレーヴェなのだ。

そんな彼女がタロツクに暮らしていた頃の事を僕に言うなんて、
何だか不思議な感じ。変な話で、もし彼女があ国にいたなら僕は
いつかこの子の村も焼いていたかもしれないのだ。そんな相手が今
や僕の同僚で、僕なんかを好きだという。変な話だよ。本当に。

「エルス、俺は山賊だ」

「どうしたの？急に」

僕の疑問に答えたのは言葉ではなく行動だった。

「レー……うっ」

あの日よりも広がった体格差。油断していたとはいえ容易く組み
敷かれてしまう。戸惑う僕に一度だけ、噛み付くように彼女がキス
をする。色気よりもなんだか食い気を感じさせるやり方だった。食
われるっていうか食われると思った。食欲的な意味で。内心違い意
味でびくついた僕から彼女は身体を退かし、にっと笑ってみせるの
だ。

「王様の所か、別の所かお前の心が今どこにあるのかわかんねー
けど、どっからでも俺様が奪ってやるから待ってるよ」

*

「ってやっぱ無理いいいいいいいいいいいいいいいい
!！」

思い出した思い出した思い出したっ！こんな遠出の任務引き受けてやったのはあれの所為だった！神子との一戦数術バトルが激しかった所為でうっかりすっかり忘れてた。

エルスはその場をのたうち回る。

「どんな顔して会いに行けって言っただ……」

この僕が！この僕が！あんなことされるなんて！僕は常にからく側であるべきであんな風に受け身になるなんて屈辱だ！……いや、まあ……相手は普通の人間じゃないし、まだマシだけど。

重いため息を吐けば、実体化した精霊がポンポンと僕の頭を撫でてくれる。風の元素がこの海上は多いから、そんなことも簡単にできたのだらう。

「ううう……シルフィード」

その外見は、ちょっと目付きは鋭いが……中性的な感じの美人だ。神子との一戦で大活躍してくれた風の精霊。この子は一年半前に力ーネフェルで手に入れた精霊だ。今回判明したことが過去に教会から逃げ出したという大精霊らしく、神子は取り戻そうと躍起になっていた。しかし風の本質は気紛れ。何かに縛れると言うことを嫌う。僕の気紛れ残酷気質がこの精霊の興味を惹いたのだらう。

タロックで契約した神様方と違って、生贄を必要としないで使役されてくれる彼女は有り難い。有り難いが、彼女はあまりに高等精

霊過ぎて言葉を話せない。神子のような人間なら意思の疎通も出来るらしいが、生憎僕は神子ではない。彼女が僕を慰めてくれていることくらいは理解できるけど。

「……………うん、そつだね。とりあえず……………須臾に報告しに行こうと」

僕はよろよると、重い腰を上げてみた。

*

「ありがとうございます！ありがとうございますっ！」

「いや……………礼には及ばん。大事にな」

こういうのはどうかと思う。双陸は帰って行く病人達に釈然としない思いを抱える。感謝されるようなことではないのだ。その病気を振りまいたのは自分たちの方なのだ……………それを言えない以上、その手当をするのは当然だ。

(それでも……………)

まだ、マシだ。これが一番犠牲の少ないやり方だった。あの同僚……………エルスの連れて来た虫の力で、無血開城は成った。王を逃したとはいえ都は落ちた。倒れた民達の手当を施すことで、タロックへの不信、偏見も和らいでいく。しかし、その間にもこのローザクアでの貴族と庶民達の軋轢は増している。

「金なら幾らでもある！うちの娘から診てくれ！」

「ふざけんじゃねえ！俺達は朝から並んでるんだ！」

城の外では諍いが絶えない。

(この国は……)

我々が滅ぼしたのではない。きっと、こつやつて内から滅んだのだろう。国の危機より自分の危機か。都を取り返そうという気概もないカーネフェルの民。外圧によつても今より良い暮らしが出来るならそれでもいいと思う連中が跋扈している。

あのような諍いを見ると、見捨てて死なせる方がこの国のためではないかとさえ思う。それでも国より家族を思う気持ちがある分だけ、兵としては劣つても、まだ人としては自分よりは優れているのだらうか？本当に最低なのは、病人自身が「自分から診る」と叫き出すパターン。ああ、また始まつた。止めに行かなければと、双陸は城の外へと出向く。

「皮肉なものだ」

タロツクよりも豊かであるはずのカーネフェル。この国の人々は……我が国と同じ、いや或いはそれ以上に貧しい心を持っている。飢えを知つてもここまでの心の貧しさを、我が国は知らない。

「治療は順番通りに行つてゐる。幾ら金を積まれてもそれは飲めん。ここは戦場だ。戦場に金も身分も価値亡きものと知れ。あるのは全てが等しい一なる命。必ず全ての治療を行おう。だから今暫く待つていただきたい」

「黒髪族が！」

「本当に治療してるのかも怪しいぜ！」

「毒の王家の王の騎士！毒でも盛つてるんじゃないか！？」

そこまで言うなら治療など受けに来なければ良いだらうに。毒味

役を買って出て、悪態吐いてでも順番を早めようという浅ましさに
は辟易する。

「治療を終えた人々の身内の方には、治療の手伝いをして頂いて
いる。これから効率も増していくだろう。だからこそ、お待ちいた
だきたい。彼らも金のためではなく厚意で協力してくれているのだ。
我々を信用できなくとも彼らの厚意を疑うことは私が許さぬ。窮地
にこそ人の真価は問われる。同胞を蹴落としてまで助かるうとは、
あなた方カーネフェルの人間はそこまで落ちたか？」

怒りを込めての一喝に、その場はしんと静まりかえる。つい激情
に駆られタロツク語での発言だった。理解できない人間も多かった
はず。それでも、此方の言いたいことは届いたのだろう。だから俺
は同じ言葉だけをカーネフェル語で言い直す。

「もう一度言おう。全ての人に我らは治療を行おう。だからこそ
争わずにその時を待っていたきたい」

強く前を見据えてそう言い放せば、病人も、その身内共々ざわめ
き出す。

「あのタロツクの将……随分と疲れた顔をしているわ」

「不眠不休で……？どうして敵国の将が……うちの国のために」

「私は王からこの地を任せられた。その任がある以上、この都を
人を守る義務がある。それをどうか分かって頂きたい」

一度頭を下げれば、やがて人々は列を整えきつちりと並び直す。
どうやら解ってくれたらしい。

安堵から少し身体がふらつくが、そうも言っていられない。治療
を待っている連中は大勢いるのだ。うちの兵士達も交代で休ませな

ければ倒れてしまう。その分俺がしっかりしなければ。

大変な仕事だ。だがやり甲斐はある。王から与えられた命が、この都での虐殺でなかったことを本当に感謝する。ここは、まだ心根までは腐っていない人々も多い。

(まだまだ捨てた物ではないな、カーネフェルという国も)

こんな形の征服は腑に落ちないが、もしかしたら……タロツクとカーネフェル。二つの種族が共存できる明日もあるのかもしれない。そんなものを見たなら王も……お心を取り戻されるだろうか？

(那由多様……)

せめて彼が生きていてくださつたなら。一言あの方に許すと言つてくれたなら。王はどんなに救われることが。

それが不可能だからこそ、エルス。王にはお前が必要だ。

お前が王を深く愛し、慈しみ……何もかも許してくれたなら、あの方は……昔の良き王に戻ってくれるはず。

エルスの残虐趣味さえ俺が矯正出来たなら、……それが一番難しいのだが。王も変わっていくはずだ。王の狂気が増したのは、あの子供が笑うからだ。村を焼く、人を殺す。そうすると嬉しそうにその子供が無邪気に笑うからだ。

そこに失つた我が子を見るからだ。エルスがもつと他のことまで心から笑ってくれるなら……王は、須臾王は……

自分を持ち直してからのランスは早かった。それは現実逃避をするように、彼は冷静に状況判断を下す。むしろ冷静すぎて怖いとアルドールは内心ビクついていた。

「その聖十字の方は教会の兵を率いていったようですから、自立します。其方に注意が向いている内に、トリシユ達と合流を図った方が良いでしょう」

「わ、解った」

「仮に弱いカードであつても普通の人間より高い幸運があると聞きました。ですから本来カードが突破口を開く、頭を叩き敵の司令塔を潰すなど……そういう風に動いた後で、兵で一気に畳み掛けるのが常套手段。敵の動きから見てもそれは間違いありません」

その裏をかくというのは時には必要だろうが、軍を率いる力があるのはランスとトリシユ、ユーカーも出来なくはないけれど、人を選ぶ。第一今はユーカーもトリシユもここにはいないし、率いられるだけの戦力も持っていない。なら動きを読まれるのだとしても、そう動くしかない。

ジャンヌとユーカー、それからパルシヴァル。此方にはまだ三枚のコートカードがある。彼らの幸運を頼りに何とか道を切り開く。

(ルクリース……)

もうあんなことは嫌だ。コートカード一人に頼って彼女の命を食い潰したのは俺。

ユーカーはそれを拒んだ。俺のためには死ねないと。死にたくないとい彼は言い、命を与えられる相手として選んだランスを突き放し

た。

それは俺達が、彼をルクリースのように消費しようとしていることが彼に伝わっていたんだろう。そんな風に思わなくても、俺は彼を頼っていた。頼るって言うことは無意識の脅迫。俺は彼に「死んでくれ」と囁き続けていたようなもの。

俺の不運を国の劣勢を彼一人に背負わせるわけにはいかない。他の二人、イグニスにそれを任せてもならない。彼らを上手く使いながら、誰も死なせない。そういう風にしなければならぬ。

「ランス、力を貸してくれ。俺はみんなを助きたい！」

「はい、アルドール様。しっかり掴まっけていて下さい」

仕度を急ぐ俺とランスをのほほんで見守るヴァンウィックに、ランスは冷ややかな目を向ける。これから一戦始まるというのに来る気がない父親に対する軽蔑の眼差しだ。

「貴方は来ないんですか？」

「どうにも、あの狸爺が気になるんでな」

「遂に老人まで許容範囲に入れましたか」

「馬鹿言え。流石の私もそこまで好色にはなれん。腹上死などされてみる。目覚めが悪い」

この親子ボケとボケ殺しだ。これじゃあ確かに関係修復も時間がかかる事だろう。

「では、アロンドイト、チェスター両領地の警戒をお願いします」

「任せましたよアルドール様。ああ、そうそう……ここに来たもう一つの理由を忘れていました」

「ひえっ……！」

上着の中に手を通すつまみブラウスのポケットに何かを入られる。それと同時に耳元で、中年騎士に告げられたことがあった。

「……何をしているんですか貴方は」

「いや何、少年王を口説いていただけに決まっているじゃないか」

「アルドール様、このような粗大ゴミは無視して先を急ぎましょう」

ランスは愛馬の手綱を握り馬上へ俺を招く。

そんな俺達に適当に手を振りながら、領地の守りを引き受けてくれる中年騎士。それを振り返る間もなく、ランスの愛馬が地を駆ける。

「アルドール様？」

小さく笑ってしまった俺に、前を見据える彼が疑問の声を上げる。

「いや、パルシヴァルの馬に乗った後だったからさ。やっぱりランスの馬の方が安定してて安心して乗れるっていうか」

「……彼はユーカー譲りですからね」

「ユーカー譲りってまさか……」

「いや、あいつの隠し子ではありませんよ。第一相手がいません」

あ、普通にツッコミ出来たんですね。てっきりボケの上乗せさせられるかと思った。

「だよな。普通に何歳の時の子だって話」

「……そんなことよりです。ユーカーのことを知れば、パルシヴァルがどう動くか解りません。彼はあいつによく懐いていましたし……まだ幼い。ユーカーを敵に奪われた以上、彼に何かあっては困

ります」

「ランス……」

冷静すぎる。その発言にはっとする。

ランスがあの子を語る冷ややかな温度。ユーカーに対するような思いやり、温かみを感じられない。コートカードを、本当に……道具のように思っている？

追い詰められているんだ彼も。この冷静さは、そうだ……恐ろしい物だ。

イグニスがない。ユーカーがない。ジャンヌはいるけどいい。北のタロツク軍を追っていったしランスは彼女がコートカードだとは知らない。

(どつしよつ)

伝えるべき？でも……彼女は女の子だ。姉さんやルクリース、フローリプと同じ女の子。ここでランスに教えれば、策に組み込まれる。これは戦争だ。解つていても……目の前で女の子が死ぬのを俺が見たくない。彼女が今俺達の持てるカードの中で、一番強いカード。ユーカーよりも強い。それって……ユーカー以上に使われる。ルクリースと同じ、幸運を……命を集られ食い潰される。

(いや……俺が、この国の王だ)

彼女はこの国で生まれた。俺の守るべき財産。俺が守らなければならぬ相手。ランスには言えない。彼女を呼び戻すことで生じる時間的損失もある。それは最善とは言えない。だからこれでいい。俺がやるべき事、俺に出来る事は、今のランスを窺めること。

「ランス、イグニスは生きてるよ」

「アルドール様？」

「だから自分を責めるな。人を軽んじるな。常に人間でいてくれ」

人をカードのように考える。それは今の彼が追い詰められているから。イグニスが死んだ。守れなかったと自分を責めている。その余裕の無さがユーカーとの亀裂に繋がったのだと解る。だからここで否定すべきはイグニスの死だ。俺はそれを否定できる証拠も持っている。

「何故、そう言えるのです？俺には、私にはとても……」

「俺達は約束したんだ」

「約束？」

「俺に立派な王になれとイグニスは言った。それまで愚かな俺を支えてくれると言った。俺はまだ立派な王じゃない。少なくとも、タロックをこの国から追い出せないような男は立派な王じゃない」

馬で走りながらじゃ辛い。ランスに掴まる腕の力を強め、片手を放す。その片手でポケットから取り出した物を前へと掲げる。俺がランスに見せたのは王宮騎士の持つ三つ葉と薔薇のそれに似た、四つ葉と薔薇のブローチ。

「アルドール様……」

彼なら意味が分かっただろう。

彼とユーカー、それからトリシユは三つ葉のブローチを持っている。ヴァンウィックが俺に教えてくれたのは、これに刻まれた数術だ。

「元の持ち主が死ぬと葉が一枚欠ける」

ランスが自暴自棄に陥り敵陣に特攻しようとして企んでいた時期があったのもその所為。それが王から与えられた物だから。

イグニスにはヴァンウィックにこれを渡していたのだ。何で俺にじやなくってというのは……もし葉が一枚でも欠けよう物なら俺が取り乱すと知っていて、あの場で一番どっしり構えているあの男に託したのだろう。いつ渡したのか解らないけれど、自分がランスと共に行動し、ユーカーが追って来る図のが計算ずくだったなら……それが正しい対応だ。

「これの持ち主はイグニス。だからイグニスは死んでない」

「だから……ですか？」

「これ渡されたのはさっきだよ。だから確証を得たのはさっきだけど……何も変わらないよ。安心はしたけどさ……イグニスは俺の大事な友達なんだ。その友達の言葉を疑うような俺は、俺としておかしい。俺の仕事はイグニスを信じること。立派な王になるまで、俺の仕事はそれだけだ」

信じているんだ。彼に……いや、彼女についていけば間違っことは何も無い。イグニスは俺より多くが見える。多くを知って、多くが出来る。

これは命令じゃない。俺が俺の頭で考えて、導き出したこと。その上での行動。

「………大事な、友達」

そんな俺の言葉に何を思ったのか、ランスは前を向いたまま……妙なことを口にする。

「つかぬ事をお伺いしますがアルドル様」

「何？」

「友達とは……一体何のことなのでしょうか」

「え？」

「俺はこれまでユーカーとトリシュ、そのどちらとも友人のつもりでした。しかし……カードになってからというもの、何かが違うように思えてならないのです」

「どういうこと？」

「俺は貴方がイグニス様を思うように、彼らを大事に出来ません。そこまで信用も出来ません。仮に貴方に斬れと命じられたなら、心苦しくはありますがそのどちらも斬ることが出来る相手です」

「俺はそんなことランスに頼まないよ」

「……そうでしょうね。俺のカードはあの二人に劣る。斬れるはずがない」

「そういうことじゃないんだ、ランス」

この人は頭が良いのに、どうしてこう、思い込んだら駄目なんだろう。

「確かに強いカードは必要だ。だけどカードである前にユーカーはユーカーだし、トリシュはトリシュだろ？だから俺がランスにそんなことを命じたりしない。二人はランスの友達じゃないか」

「アルドル様。ユーカーはタロツク軍の捕虜です。あいつのカードを知っているからこそ連中は生かしているのです」

万が一でも懐柔されることがあってはならない。その前に……その前にと彼は言う。

「敵の手にコートカードが渡るくらいなら……ユーカーを、殺すべきです」

「本気で言ってるのか？ユーカーが、タロツクのために戦う理由なんてないじゃないか」

「俺はあいつが信じられない。あいつは……強く、弱い。硬く、脆い。そういう風に俺が育てたっ！」

「ランス……？」

俺の配慮に足りない言葉。それがランスからこんな言葉を引き出した。それを言っただけで聞き、彼は更に自分に嫌気が差していく。そんな風に、傷ついて欲しかった訳じゃないのに俺の言葉はいつも……この人には届かない。駄目だ。駄目なんだ。俺とこの人の間には、ユーカーがいないとどうにもならない。伝えたいことが伝わらない。嘘偽り無く言葉にしたつもりでも、この人には届かないんだ。ここに彼がいたなら馬鹿野郎と俺達を一発ずつ殴るだろうか？でもそれは彼だから意味があること。俺が同じ事をやっても、この人には響かない。

「今のあいつは弱っている。あいつは俺でなくても良い。あいつが求めるのはなりたいたい自分……理想の騎士だ」

「アルドール様。俺はあのタロツクの騎士に負けたんです」

「それは」

「カードとしてじゃない。人の器が負けている……あいつはあのキングに惹かれていくはずだ。俺が他よりあいつにとって秀でていたのは、あいつの身体的損失を馬鹿にしないからに他なりません」

「ランス……」

「その上であの男は、あいつを大切にしている。俺以上に……そこまでされたあいつは、戦えない。タロツク人を斬れなくなる」

予言のように彼は言う。慣れ親しんだ間柄だからこそ見えるものがある。そこまで理解していて何故仲違いなどしてしまうんだろうこの人は。

「あいつは俺になれない。だから俺を慕った。だけど……あの騎士のようになら、あいつはなれる。なれてしまふ。だから、現実を知れば、夢に描いた騎士の俺ではなく……あの男を慕います。それはカーネフェルにとって不利益。コートカードを失うのは痛手です」

「ランス、ユーカーは……確かに優しいよ。捻くれてるし口は悪いけど」

そりゃあ知らない相手は殺せても、知ってしまった相手を殺すのは難しいだろう。ユーカーは距離を詰められるのに弱いんだ。慣れてないから。興味を持たれず生きてきたから、関心を持たれることが苦手だ。そうして懐いてきた相手を邪険に出来ず面倒を見てしまふ人の良さ。それが敵にも働いたなら、確かに困る。

「それでもユーカーは……何かを無くすことを恐れるよ。彼は失ったことがある人だから」

「アルドル様……？」

「新しく何かを手に入れることが怖い。今を守りたい。これ以上を失いたくない」

「……それは？」

「今の俺の気持ち。ううん、即位する前の気持ち。だけどきつとユーカーもそうだったんだ」

ルクリースを失った日。俺はシャラツト領からなかなか離れられなかった。王になりたくなかった。これ以上踏み出したくない。何も失いたくなくて……子供みたいに駄々をこねた。

「イグニス……そんな俺を打ったんだ」

「イグニス様は……本当にアルドル様のことになると激しい方ですね」

「イグニスが嘘を吐くの、俺解るんだよなんとなく」

「嘘……ですか？」

「イグニスが冗談以外で俺のことを本気の顔で悪く言う、怒る時それは……わざと悪役を演じている時なんだ。俺にはバレてないと思ってるみたいだけど」

残るなら残れ。僕は君なんか要らない。他の王を探す。君なんかいなくても僕は一人で戦う。カーネフェルとシャトランジアを、世界を守る。……俺を見ないで彼女はそう言った。

他に即位させられる駒がいなくても、イグニスは俺が俯いたままならそうしたはずだ。外堀を埋めて逃げ場を無くすようなことをイグニスはしない。俺に選択をさせる。命令じゃない。最初のあれは……お願いだった。

「俺はそれが解るから、イグニスが好きなんだ。本当は誰よりも優しい。一人で辛いことを引き受ける。だから助けたい。力になりたい……最初に俺が王になろうと思ったのは、そんなイグニスを見ていられなかったから」

解るんだ。俺が断つたなら彼女は一人で戦う。彼女が俺を必要としてくれたのなら、辛いことの肩代わり……それが出来なくても一緒に背負っていきたくかった。

「今もイグニスは戦っている。一人できつと辛い思いをしている。一人で背負いきれないような重い物を、抱え込んでそれでも必死にそんな彼女が帰ってきた時に少しでも楽になるように……俺は勝ちたい。タロツクに勝ちたい」

守りたいと思う人がいる。それでもこの国の全ての人をまだ俺は愛せてはいないのかもしれない。だけど、彼女は命懸けで俺を守ってくれた。王になった俺がこの世界に平和をもたらすことを信じて

だ。彼女が何かとてつもなく大きな物を守ろうと生きていることは間違いない。この世に悲惨な目に遭わされて、それでもそれを守ろうとしている。まだ許せていないと言いながら、不器用似合いそうとしている彼女の姿が愛おしい。守りたい。彼女の願いと、彼女が守ろうとしているものを。それにこの国は丸々含まれる。

「俺の言う友達って言うのは信じられる相手じゃない。何かあっても嫌いにならない。ずっと大好きな人のことだよ」

「信じられる相手、ではない……？」

「もしかしたら何もかも俺の思いこみかもしれない。騙されたとしても裏切られたとしても……それでもずっと好きでいられる相手。もし仮に……俺はイグニスに殺されても、イグニスを嫌いにはならないよ」

……国王としてはおかしいか。もしイグニスがカーネフェルを傷付けるなら、俺は立派な王として彼女とシャトランジアと戦わなければならぬ。だけどそんなことはあり得ない。だから仮の例え話

「俺とランスじゃ友達概念が違うのは当たり前だ。でもさ、ユーカーは俺にちょっとだけ似てるんだ。俺がイグニスを大好きな気持ちには、ユーカーがランスに対して思ってることに近いと思う」

俺は、俺の気持ちがいグニスに伝わらないなら凄く悲しい。だからきつと彼もそうなんだ。

シャラット領で瀕死の感じた彼との共感。それが今も流れ込んでくるような気がしてならない。

ユーカーは斬られたことより……何かをされたことよりも、信じて貰えないことが辛かったんじゃないかな。ましてやカード扱いされたことよりも。

「ユーカーはランスのカードを弱いとか足手纏いだとかお荷物だとか、一回でも口にしたら？」

「いえ」

ランスは静かに首を振る。

「……何処か、俺を申し訳なさそうに見ていました」

「……そうだよな。俺が一番弱いカードだろ？みんな冗談ではお荷物とか言うけど、本気でイグニスがそう言ったことはない。ユーカーだってそうだよ」

ユーカーは俺とも似ているけど、イグニスにも似ている。だからだろうな、俺はよく知っているはずのイグニス以上に、ユーカーのことが解るような錯覚に陥る。

「不謹慎だけど俺は……シャトランジアから出る時、寂しい以上にわくわくしてた。ずっと離れてたイグニスと一緒に旅が出来るなんて、嬉しかったよ」

思い出してと俺はランスを煽る。

「カルディアの砦からローザクアまでのユーカーの表情と、ローザクアからアロンダイト領までの旅。どっちのユーカーが楽しそうだったかなんて、俺は目を瞑っていても答えられるよ」

ランスは前者を知らないけれど解るはずだ。それは決して自惚れではない。信じるに値する物。

「ランスはさ、もしかしたらイグニスと似てるどころあるのかも。俺じゃあわからないけど、それならランスには解るんじゃないかな」

イグニスが俺をどう見てるか。それが解るなら、ランスがユーカーをどう見てるか。友達って何か、きつと解るよ」

「アルドール様……ありがとうございます。ですが……」
「……何？」

ランスは暫く黙り込む。気まずい沈黙。しかし小刻みに掴まる背中が震えている。

（わ、笑ってる！？）

俺はちよつと開いた口が塞がらない。それは数秒だったけど、その間に虫が口の中に入り込んで咳き込み急いで吐き出した。最弱力ードの不運は伊達じゃなかった。

「アルドール様？」

「ちよつと口に虫が……もう取れた。そんなことより……ランス、今笑ってなかった？」

「いえ、失礼しました。あまりに普通にトリシユのことが話からフェードアウトしていたのが、おかしくて」

「あ……」

友達について。そのことを聞かれたのに、何時の間にか親友について。に話が変わっていた。

「ランスとトリシユの関係か……うーん、俺で言うと俺とユーカーかなあ」

「類似点あまり見当たらないように思っています」

「イグニスとユーカーが話してるとどっちも好きだけど俺がやきもきする。二人ともなんか仲良いんだもん」

「あ、あれがですか……？」

「イグニスがあんなに全開で毒吐くつてことはなかなかないよ。ユーカー良い奴だし気に入られてるんだよ」

「あ、あれですか……？」

「そう言う意味では俺とトリシユも何処か似てるんだな。だってトリシユってランスもユーカーも大好きじゃないか」

「え？」

「トリシユは友達としてランスが好きで、ユーカーはセレスちゃんとして好きなんだろ？」 「セレスの活用法が何やら確立されてしまっていますね」

「それで俺はイグニスを親友として好きで、ユーカーのことは友達として……いや、ユーカーは俺嫌いだろっから、知り合いとして好き？そんな感じ」

「ふっ……アルドール様、それ以上俺を笑わせないください。

ツボに入って、手綱さばきが鈍ります」

「ご、ごめん」

確かに馬の走りが乱雑になっている。酔いそう。

「でも、そうですね。トリシユなら大丈夫でしょう。あれで彼も立派な騎士です。感情に駆られて暴走することはないでしょう」

言葉が足りなかった。パルシヴァルのことを心配していた。そう言いたかったのだと遠回しに告げられて、不器用な人だなとつくづく思う。

子供の未熟さを責めたのは、子供だから心配だと言いたい。でも相手も騎士だ。死んでも仕方ない身分の戦闘職。だから言えない。だから責めた。本当、不器用な人。この人は立派な騎士以外の自分をまだ、見失っているんだな。

「うん……大丈夫だよ。きっと、だいじょうぶ」

やがて近づく、夜の月を背に佇む城。湖面に揺れる月影の、静けさばかりが際だった場所。あの城の中に大勢の人がいるはず。それなのに物音一つしないのが、逆に不気味であった。

その周辺の森に身を隠しながら、状況を伺う最中、小声で手を振り小さな影が歩み寄る。

(王様ー！ランスさーん！)

(パルシヴァル！良かった、無事なのか！)

駆け寄れば彼が勢いよく俺に抱き付いてくる。ユーカーがいないので、その代わりだろう多分。

(パルシヴァル、トリシユはどうした？)

(トリシユさんは城が静かなのを良いことに一人で乗り込んでいきました。止めたんですけど聞いてくれなくて)

(と、トリシユ……)

俺とランスは多分、今日ほど心が通じ合った日は後にも先にもないかもしれない。

(ランス……あのさ)

さっき、友達についてを教えてあげただろ？だから俺に教えて欲しいんだ。

(立派な騎士って……何だろう？)

(申し訳ありませんアルドール様。俺もそれは……今見失いました)

*

阿呆だ。阿呆が来た。しかしあまりに正直すぎる阿呆なので、逆にこれは畏ではないかとレクスは思ってしまう。

仕留めるのは容易い。しかしあれが釣り餌ではないとも限らない。万が一あれがそうではないのなら、あれは敵方にとつての釣り餌。その内もつと大物が釣れるかも知れない。

「あれはカーネフェル王宮騎士がトリシューブランシュ。隣の領地の後継者だそうです」

部下からの報告に、レクスはがっくり息を吐く。個人的には斬つてやりたいが……

「ならば無下に斬るわけにもいかない、か。今後我々の協力者と成り得る男かもしれん」

「イズー！何処にいるんだい！？イズーっ！」

此方は闇に乗じて乗り込んできた連中を狩るために、わざと門を開けていた。籠城戦をする気はない。タロツクの力はそんな風に発揮される物ではない。タロツクは風に愛された国。だからこそ屋内戦は向かない。それを知っている奴らはこの夜に攻め込む。皆寝静まって手薄の夜。ここで攻め込まないはずがないのだ。そのためにわざわざあんな目立つ移動をしてやった。

セレスが傷を負ったのは計算外だが、一命は取り留めた。風は此方に味方している。

だというのにやって来たのがあのよくわからないポエム騎士一人とは。カーネフェル人はカーネフェル王は何を考えているのだろう。思考が読めない。セレスが分かり易すぎるだけかも知れないが、得たいが知れない物をあの男からは感じる。

「愛するイズー……君の無事を祈ってこの曲を捧げます」

綺麗な夜空だろ？ここ、敵陣なんだぜ？

笑ってはいけない。突っ込みを入れてもいけない。俺は忍耐力がある方だから問題ないし、そんなに詳しい所までカーネフェル語をよく理解していない。だからまったくカーネフェル語がわからない連中は無害。問題は、よく理解している、つまりはそれなりにカーネフェルと長く接してきた連中、英才教育を受けてきた奴ら。つまりは俺を除いた偉い奴ほど危ない。そこまでカーネフェル語に詳しくない俺でさえ吹き出しそうなのだから。

歌声は素晴らしい。その顔も美しい。曲も悪くない。だが、悲しいかな。その男に作詞の才は無かった！

延々と熱く愛を語る他人のポエムを聞かせられる俺達の身にもなつてくれ。目覚めぬセレス本人も何やら魔されている。余程嫌な思いで出でもあるのだろう。例えば夜な夜な耳元でこの演奏会をされたとか。

本人が至って真面目なのがもう本当にどうしよう。本人に全く恥じらいがないからこそ此方が恥ずかしくなってくる。タロツクには恥の文化と言つ概念があるんだぞ？何これ。外国怖い。異文化交流怖い。歌一つで戦闘不能に陥る連中まで出てきそうな勢いだ。

「レクス様！」

「王は何と言っている？」

「もう就寝されてらっしゃいます。あの王を起こすには殺気が悲鳴でも無い限り難しいでしょう」

「年寄りには夜が早くていかな」

「首刎ねられますよレクス師団長……」

「この程度で殺されたなら俺は今ここに生きてはいないさ」

「レクス様、あれなんとかして下さいっ！もう俺達耐えられません！」

「うーん……そうだな。カーネフェルで長く戦ってた奴らとか年寄り連中もあれはきついよな。でも、もう少し待ってくれ」

何とかしてやるから持ち場に帰れと兵士達を叱咤する。

風の方向は今夜はずっと北西から吹く。あの門を通り抜けてきたら間違いなく毒を食らう。毒を流す前にやって来たあの男も、ここに来てからずっと毒を食らっている。ましてやあんな馬鹿でかい声で歌っていれば毒の回りも早い。仲間が藻掻き苦しんでいるのを見捨てるという決断が、幼い少年だというカーネフェル王に下せるか？否。

必ずやコートカードを向かわせる。その幸運で逆境を覆そうと動き出す。コートカードを失えば、王など唯の紙切れ。アロンダイト領の傍に控える山賊達。それに一気に攻め込ませれば袋叩きだ。

「声が消えたか。よし、間もなく奴らの援軍が来るぞ。皆、戦闘に備えろ！」

「はっ！」

「俺はあのポエマーナイトの回収、解毒をしてくつか」

庭先に豎琴に持たれ蹲り、騎士は半ば死にかけていた。毒が回ってきたのだらう。致死の毒ではないが、毒への抗体が無い者からすればそれなりの毒。解毒をせずに放置したならこのまま死ぬのは確かだらう。

「あの男……馬鹿か？」

レクスは戦慄する。あの名高いアロンダイトという騎士を前にした時にすら感じなかった恐怖。それをこの騎士は発している。

何故なら男は……まだ歌ってる。途中から風に毒が流れていることに気付いただらう。だからもう歌えなくなつた者とばかり思っ

いた。しかし細かい声になりながら、それでもまだ毒の空気を吸い込んでいた。

(おいおい、マジかよ)

道化師など確率的にあり得ない。それがカーネフェルにあつたなら、奴らはここまでの敗戦を今日までに迎えなかった。

つまり俺には殺せるカード。あれだけの色男。気品さえ感じさせるその男は領地持ちの貴族だ。カードの位は高い。ならば弱い。ゴミ同然の雑魚も同じ。だというのにこの危機迫る殺気はなんだ？

その歌っていた騎士は、俺の姿を認めるやゆらりと立ち上がり豎琴の代わりに剣を取る。鋭いレイピア、今のその男の眼差しに似た危うい光を宿した凶器。

「タロックが……っ、天九騎士とお見受けする」

「ああ、まあな」

「我が姫、我が乙女を……お返し頂きたい」

「そういうわけにもいかねえんだ。悪いな別嬪さんな兄ちゃん。お前も嫁いでくるってんなら考えてやるぜ？」

「……笑、止っ！」

細身の騎士の、長い髪。それがふわりと夜風に踊る。

「ならば、力尽くでも……返して頂くっ！」

悔しいが、騎士として生きてきた時間はその男の方が俺より上なのだ、その一突きで俺は理解した。脇腹を掠めたその一撃。見事な物だ。惚れ惚れするような鮮やかな技だった。俺の適当剣術喧嘩作法なんとなく野生の勘添えとは大違いだ。基本俺弓の扱いしか慣れてねえんだよ。習った剣は対人より獣殺し向きだし。まあ、人の

思考も解れば獣殺しと同じ要領なんだが、なんともこの男はセレスとは違い、俺と同じ野生の勘で戦ってる奴じゃない。おまけにあのアロンダイトの色男のような読みやすさもない。火の人間特有の感情的な目に見える怒りじゃなく、静かな怒り。

細身な体躯。それでも長身。その長い手足を用いての突き。軽いから早い。早いからその一撃は重く、侮れない。これを半分死にかけの人間がやってのけるか？俺は舌を巻く。

（カーネフェルの剣に毒が塗ってあったら負けていたのは俺の方だぜ）

それをしない誇り高さが招いたのが、カーネフェルのこの惨状なのだが、そういうのは嫌いでもない。出来れば本調子のこれとやり合いたかったが、同時にやり合いたくなくとも思う。どうにも此奴と俺の相性は良くない。顔は可愛い娘みたいだから見る分には良いんだが、どうにも警戒が働く。

（こいつ、カーネフェリーの癖に火属性じゃねえな）

こう争っていてあれなんだが、風と火の民の相性は数術学的に最高なんだ。俺はまあ、残念ながらタロツクに生まれながら火属性の人間。火同士の相性も良好。そんな俺の天敵センサーが働くって事……こいつ、土か水。ここまで愛に拘る輩は恐らく水属性！そしてこの陣形は不味い。水に囲まれている。此奴が土でも水でも有利な属性配置。

（王は何も解っちゃいねえ！）

そりゃあ数術カード関係ない戦ならベストな陣だ。湖を渡らなければ敵は攻めてこられない。今は故意に開けているだけで、こつち

側の陸にある門を閉じれば完璧だ。船に乗ってきたところを湖に油を流して船の焼き払いでもすれば良い。風が味方すればそれも可能。

(この騎士は上位か中位程度のカード。元素の加護は持っていると見て間違いない)

この男は危険だ。ここで殺しておく必要がある。

レクスは肩で息をしている男が次の攻撃を繰り出す前に、今度は自分が打って出た。やはり。攻撃が最大の防御だったのだろう。その騎士は守りが弱い。既に毒が回っている。意識ももうろうとしているはずだ。早く詰みに行こう。そう急いだのが誤りか。狙った一撃。見えた騎士の顔にはうっすら笑みが浮かんでいた。耳を澄まし、レクスはその理由を察した。あの長つたらしいポエム大会と、死んだふりは、時間稼ぎの罠か！

「皆、城の上へ上がれっ！波が来るぞっ！」

兵は貴重。男は多いが処刑で殺されているから数が少ない。戦いを仕込んで戦う覚悟を持たせて実践で使えるようにするまで時間が掛かる。だから簡単に消費して良い命はない。

「師団長っ！貴方も！」

「俺には幸運の女神様がついてるから心配ねえ。行け！」

兵達を避難させる内にも、地響きは近づいてくる。

「やるなあ、色男。これだけ水があれば誰だって思うはずさ。あなたのスートを見破って……何かやるにしても湖の水を使うに違いないって」

「このチエスター領の北に人は住んではない」

それはこの辺の地理に詳しいからこそ出来る芸当。水を操り狙った部分だけを押し流す。その水は湖の水ではなく……海水。海水にやられればとんでもねえ。馬に食料、武器に防具。こっちの備蓄をおじゃんにする気が。

「作詞は酷え癖になかなか策士だな。愛を語る振りして、愚者を演じていたとはな」

「嘘などない。僕は王に誓った忠誠も確かだし、守りたい土地があるのも本当だ。そして……彼を思う気持ちにも一変の嘘偽りなど存在しない」

「“彼”、なあ。勘違いしてたつてわけでもねえのか。恐れ入ったぜ。だが……あんたそこまで強いカードでもねえだろ？津波を起こすなんて大技……命をどんだけ縮めたか、解つてるのか？」

「理解している。既に一度失った命。今更惜しいとは思わない」

「そんな磨り減った幸運で、俺に勝てるとも？」

「僕はイズーを信じてる」

「そうか」

人質は一人いれば十分だ。セレスにはその価値もある。貴重なコートカードをこんな序盤で犠牲にするような馬鹿はいない。どんな危険を冒してでも取り戻したいに決まってる。

魚は釣れない。この男はもう、殺して良い。

*

「トリシユっ！……放せっ！行かせてくれランスっ！」

「駄目ですアルドル様！あれは罠ですっ！」

「俺は嫌だ！目の前で誰かが死ぬのは嫌だ！ランスだって言ったじゃないか！遠くで何も出来ずに誰かに死なれることっ！傍で何も

出来ずに死なれること！どっちが辛いんだろうって！！」

アルドール様のその一言が胸に突き刺さる。つい手を緩めてしまったのはその所為だ。

「っ……パルシヴァルっ！彼を止める！」

思いの外足の速い少年王。離れた場所にいたパルシヴァルの傍を通過。彼は敢えて止めなかった。そしてあろう事かアルドール様の後に続いた！

確かに彼はコートカード。止めないのなら最善の判断。しかし止めなかったことが既に最悪の判断。

「くっ……！」

水の精霊を操れるのは俺だけだ。俺なら津波からも彼らを守れる。もはや追う他に選択肢はない。あの城にはトリシユとユーカーもいるのだ。

「はっ！」

愛馬に飛び乗り二人を拾う。進路は真っ直ぐそのまま、湖の湖城への門へ……

*

信じている。それは応えて貰う事じゃない。

信じてる。それは僕の愛を理解して貰うことでもない。

僕が信じているのは、あの日の光景。何時だって君は、そういう風に生きていた。

僕の声が言葉が届かなくても、君はきつと……動かずにはいられない。

(僕は……貴方の正義を、信じています)

例え僕がここで死んでも、君はきつとこの国のために生きてくれる。自分が戦わなかったことで死んだ馬鹿がいたこと。それを君は責め続ける。自分自身を。

「黒衣の騎士よ。一つ教えて差し上げます」

「ん？何だ？」

「愛とは愛されることでも愛することでもなく、……こんな見捨てられない優しさです」

僕はこんな風にしか、君を解放できない。君は自分の中に何もなく、誰かのためにしか生きられないと思っている。でも違う。君の中にはちゃんと、君の信じる正義がある。それに救われたのが僕でありパルシヴァルなんだ。もしかしたらそれは、アルドール様も。

(すみません、アルドール様……)

約束を守れそうにないことを心の中で主に詫びる。そして……

(父さん……僕は、貴方の息子になれたでしょうか？なれるでしょうか？貴方の領地を、お返しします。そう、まもなく……)

半ば覚悟を決めていた、トリシユへと振り下ろされる剣。それは随分ゆつたりと。いいや違う。彼が早すぎたんだ。トリシユはその落下物をうつとりと見つめる。まるで夢でも見るように見つめる立派な騎士。貴方こそがそれ。

眉一つ動かさず、100のために1を見捨てられる人がヒーローじゃない。こうやって1のために身体が勝手に動いてしまう貴方がヒーローだ。その見捨てられたはずの切り捨てられた1を救い続けることで貴方はやがて100を救う人になるだろう。そんな貴方を英雄と呼ばずに誰をそう呼ぼう？誰が貴方を見下しても、見捨てられた命が今ここにある奇跡を何と呼ぶ？

窓から飛び下りたその人は、黒衣の騎士の背中を蹴り飛ばしながら着地。流石に今は男物の服を着せて貰っているようで少し安心したようながっかりしたような。

「これは、思わぬ物が釣れたな。起きたのか？」

「……腐れ縁って怖いよな」

その落下人の第一声はそんな言葉。その意味する所は解らない。

「一つ教えてやるぜレクス。セレスティン卿ユーカー様の趣味は昼寝だ」

「そうか。それは良いことを聞いた」

黒騎士の言葉に、もう一つ教えてやると彼は笑った。

「だから一番嫌いなことは目覚めの悪いこと。二番目に嫌いなことは……数に物を言わせた弱い者虐めだ」

「一対一だが？」

「ばーか、お前みたいなたートカード、完全に数に物を言わせてるだろ？」

「ふ、それを言われたら何も出来んぞ」

彼の登場いきなりの言葉に黒騎士も苦笑する。この黒騎士は、ユーカーを斬るつもりはないようだ。だから僕を庇う彼の隙を窺って

いる。

「立て、トリシユ。その毒は致死性はないだろう。身体に不調が出るような調査はしてるんだろうが、眠りか痺れで動きを封じるための毒だなこりゃ。それもこいつらが降りてきた時点で弱められたか止められた」

温室育ちのお坊ちゃんには効くだろうなと呆れられたが、彼はさり気なく僕を風から庇う立ち位置に立つ。僕より小さな背中と思いの外しつかりしていても大きく見えた。

「水でも大量に飲めば胃から洗い流せし毒を薄められるだろう。何かねえのか？」

「携帯している媚薬飲料水が一リットル程度しかありません」

「お前阿呆か？上出来だ。飲め」

「で、ですが……そんなの貴方の目の前で飲んだら今以上に」

「今と何が変わるんだよ？」

飲んでも飲まなくてもお前はそうなんだと告げられて、否定されずにいてくれることが嬉しかった。彼自身の気持ちは別問題。だけど僕が彼を好きでいてもいいと、彼は言ってくれたのだ。

「ていうか随分と匂いだなおい」

お腹が減っていたのか、咽が渴いていたのか、こっちを物欲しそうな目で見つめる彼。意地汚いけど可愛い。ランスが可愛がった理由が何となく分かった。

「基本色々いわれのある天然の果物植物しか使っていない清涼飲料水ですからね。主な効果は疲労回復」

「疲労回復ってお前……それもはや媚薬でもなんでもねえだろ。つか船で見たのと違うぞ」

「あれはノリで買った市販の物です。材料が都近辺では手に入らなかったの。北部に来て本来のレシピ通りに……」

「レシピって料理かよっ！って騒いだら咽渴いた。ちよっと寄越せ……」

「そ、それは駄目です！あっ！」

「普通に美味え！腹立つっ！」

「良かった！殴られてる！蹴られてるっ！僕はちゃんと嫌われてる！好かれてないっ！」

「ん？どうしたレクス？これ無害で美味いぞ、お前も飲むか？やっぱ夏は夜でも咽渴くなー」

僕らのやり取りを呆然と見つめていた黒騎士はぼりぼりと頭を掻いて……

「カーネフェリーって、みんなそうなのか？」

などと聞いてくる。

「は？」

「え？」

「ここ、敵陣だろ？」

「まあ、だろうな」

「それで今正に特大攻撃が迫りつつあるんだっただな？」

「そう言う話だったっけ？」

「はい」

「なのにお前らそんな状況下でそんな楽天的でいられるんだ？」

「だって俺丸腰だろ？それにこいつ今本調子じゃねえし。解毒最優先だろ？ていうかお前そんな大技使ってたのかよ、阿呆か俺まで

殺す気か」

「痛いっ！痛いですイズーっ！」

仲間のはずの彼に関節技決められている僕を見て、黒騎士はなんかやる気が殺がれたと困った顔を浮かべていた。

「理には適っているが釈然としねえな……」

隙を狙おうとしたものの、隙がありすぎてむしろ騙し討ちではと考えた自分が悔しい。しかもまだその線を疑っていて動けない。そんな風に見える。

「んー……どうすっかな。解除する気も力も無いんだろ？とりあえずあれはシャトランジアの神子の所為にでもして置こう。シャトランジアなら水属性ばっかだろうし」

「そいつは助かる」

僕の残りの幸福値では呼び寄せた高波を押し戻すような力はない。解除は出来るがその時点でその一体が流される。方向的にどっちにしるこの城は襲われる。

「今更他にここに乗り込んでくる馬鹿もいねえか。仕方ねえ。そちの騎士も一緒に来い。上に避難……」

城門の方を見やった黒騎士は、其方に向けて固まった。続けて其方を見る僕らも、動けない。

「おいレクス、そんな馬鹿がいるんだが」

「カーネフェリーって、本気で何なんだ？」

「僕もあれは流石に軽率かと」

「お前が言うな！」

そんなことを言っていると城門を潜り抜ける白馬から、三人の人間が降り立った。何してるんですか僕の友人。夜に白馬はないでしょう。黒にしなさい黒に。目立つなんてもんじやないですよ。まずは黒騎士が何考えてるんだこいつら、何も考えてないのか？そう思わせておいて企んでいるのか？と思考迷宮に迷い込んでいらっしやる。

「トリシユっ！無事か！？……ってあれ、もしかしてユーカー？」

「セレスさんーっ！良かった！無事だったんですね」

「お前の今の抱き付き腹タツクルで俺のダメージ赤まで減ってる気がするんだが一応生きてるぜ」

お前もいたの？みたいな空気の読めないアルドール様の発言と、怪我人相手に思い切り抱き付いた少年騎士の所為で心身共に僕のイズーは辛そうだ。基本この人弱くて強いけど強くて弱い人だから。いつもならここで「阿呆かお前、どうしてこいつら止めなかったとか彼は言いそうなものだけど、ランスと彼の間には気まずそうな空気が流れる。それを察したのか、察していないのか黒騎士は、アルドール様とパルシヴァルに目を留める。

「……なんか見た感じ、そっちのちっこいののどつちかがカーネフェル王だろ？少年王ってくらいだから……こつちか」

「ち……もがっ！」

ランスはユーカーの口を両手で押さえ、言葉を封じる。

「何やってるんだあいつら？」

「か、カーネフェル流の肉体言語です。あ、あれはええと良い天

気ですね。意味は無事で良かった、元気そうで何より、私の趣味はレスリングですなどの意があります」

咄嗟にわけのわからないことを発してしまった。黒騎士は適当に納得した様子で異文化つてすげえなとぼやいている。

「まあ、あんまり俺のセレスに乱暴するなよ。そんなことすりや蜂の巣だぜ」

「もがつー！」

「しかしこんなちつこいのがカーネフェル王とはねえ。殺すの勿体ねえような美少年じゃねえか。誰だ？平凡顔のぱつとしねえ田舎者丸出しのガキだって噂振りまいてたの。エルスちゃんか？」

「もがふがつー！」

幼いながら空気を読んだパルシヴァルは否定の言葉を紡がない。それどころか立派に王の風格めいたものを纏い始める。

「汚らしい手で私に触れるな侵略者」

「おーおー、そんじゃやっぱ坊ちゃんかカーネフェリアか。そつちのぱつとしねえガキは影武者だったんだな」

「これ以上私の騎士を傷付けられるのは見るに堪えない。ここにタロツク王がいるのだろう？会って話したい」

「むーっ！むがつー！」

それを必死に止めようとする優しいあの人は、涙目だ。それできつと背後の男を睨み付けるが傷の所為で力が出ないのだろう。羽交い締められればふりほどけない。

それでもパルシヴァルを抱きかかえ城内へと進む黒騎士を、ランスを引き摺りながらユーカーは追いかける。そうなれば僕もアルドール様も追わざるを得ない。

(な、なんでこんなことに)
(……相手がカーネフェリアをそれと見分ける方法は、外見色しかありません)

心配そうにパルシヴァルを追いかけるアルドール様の眩きに、僕は答えた。

(王宮騎士が真純血で固められるのはそのためでもあります。真純血は王族のそれに似た深い青を持っていますから)

謁見の間に踏み込んでからは、そんなお喋りの余裕もなくなった。これを知っているのはこの場にはイズーだけ。前方を進む彼の身体が震えているのが解る。いや、彼だけではない。僕ら全員……その殺気に震えている。

踏み込んだ刹那、ぶわっと全身を撫でる風。その強すぎる風に誰も目を閉じた。

(パルシヴァル……君は)

しかしあの小さな少年だけが違った。今の彼は王を演じている。彼の考える王はこんなところで震える男ではないのだろう。だから彼は震えず脅えず、唯その先にいるであろう者へと視線を巡らす。

「夜分失礼するぜ、須臾王」

「……レクスか」

長い黒髪。それは夜よりも暗い漆黒。闇夜に浮かぶ赤い瞳は血よりも赤くおぞましさを感じさせる程。男の体軀はそこまででもない。細身で長身。どちらかと言えば自分に近い体型だとトリシユは思っ

た。しかしその顔を見てその考えを打ち棄てた。

竄れた頬、落ち窪んだ目、まるで死人の顔。

それでもその男は今ここにいて、生きている。何かに取り憑かれたようなその顔は見る者を戦慄させる。カーネフェル人がわからないとあの男は言ったが、そんな男を前に平然としている黒騎士の神経の方が僕には解らない。唯、イズーを近づけさせてはいけないのが解る。あの黒騎士は、壊れている。彼もまた狂っているのだ。でなければ……そんなこと出来るはずがないのだから。

「ああ、こいつらは、罨に招かれて来てくれたカーネフェリア様ご一行。褒美にその子一人貰っていいだろ？ 気にいっちゃまったんでね」

「……薄目の騎士か。平民出の其方が好みそうなものだ。よかるう、くれてやる」

「有り難き幸せ、ってことでそっちの兄ちゃんセレスを放して貰おうか」

「……………」

城内に入ってから僕らの後をついてくる兵士達。それがここに来て僕らをぐるりと取り囲み、長槍を突き立てる。

（ランス……君はどうするつもりなんだ？）

じつと友人の動向を見守る僕が聞いたのは、声にならない叫び声。

（な、何てことを……）

ユーカーが真実を口にするのを嫌った彼は、数術で僅かに塞がれた傷をなぞった。いや、思い切りその傷口をより深く抉ったのだ。その激痛に意識を飛ばしたのか、僕のイズーは気を失って床へと落

ちる。

「セレスっ！今手当をしてやるっ！」

僕は今この瞬間、先程の認識を改めた。タロツクの騎士は狂っていない。狂っているのは僕の友人の方だ。

だって、彼は眉一つ動かさずにそれをやってのけた。信じられなかった。あの日僕に優しく笑みかけてくれた少年と、今のその男の姿が重ならなくて。重ねたくなくて。思い出を汚すその男が許せない。今誘われたなら僕は、タロツクに下っていただろう。それを留めたのは僕の服の裾を掴んだアルドール様の震える手。見ればボロボロと涙を流して彼は泣いている。

（アルドール様……）

パルシヴァルも泣きたいだろう。それでも王を演じる彼にはそれが出来ない。今、泣くことが許されているのは彼だけだった。僕もまた、……そんな王を守るため、騎士であらねばならなかった。

それを見た狂王は、玉座から立ち上がり……狂気の刃を手にゆらゆらと歩み寄る。それをあの少年騎士へと振り下ろすため。

「パルシヴァルっ！」

「駄目ですアルドール様っ！」

飛び出した少年王。鎧も身に纏わぬ彼は早い。だが……故にっ！

（一撃でも致命傷に成り得るっ！）

それを知らないはずもないだろう。それでも彼は飛び出した。実用性のない装飾剣は軽い。それに気高い青い炎を纏わせて、カーネ

フェリアはタロツク王の前へ。

「くっ……」

「やはり其方がカーネフェリアか」

剣術でタロツク王に敵うわけがない。この間まで普通の少年として生きてきたアルドール様では勝てない。同じ、Aカード同士でも軍配はタロツク王に上がる。

それが解って飛び出した。その精神こそがカーネフェル王の血縁だと、長年の宿敵は語る。敵が最も王を理解しているというのが、何とも皮肉なことだった。

「小雀、侍れ」

小さく笑い、呪文のようにそれを唱えるタロツク王。

「夜伽なら他の奴当たってよね須臾」

文句を言いながら眠たそうに目を擦り、現れるのは黒髪の少女……に見えるが胸はない……？タロツクの着物の所為で無くもないように見えなくもない様な気がしないでもない。なんとも微妙なところだ。

それでもそれがタロツク人でないことは、瞳の色から明らかだ。その子供の目は赤ではなく薄桃色。作り物のような美しさはそれが混血であるという証。

「つて、アルドールじゃないか。へえ、もうこんな所まで来たんだ？」

「エルス＝ザイン……」

アルドール様とは因縁深い相手なのか、彼の注意が其方に向いた。その隙にタロツク王はアルドール様の得物を払い除け……すかさずそれを掴んで彼を蹴り倒す。

「うっ……ぐあっ」

それに留まらず、その剣でアルドール様を床へと縫いつけた。

「模造剣か。切れ味が悪いな」

アルドール様の剣を踏みつけながらタロツク王は言う。

「がっ……」

それは他人事だから言えること。床に縫いつけられた側としてはとんでもない激痛だろう。切れ味が悪いならそれは、生きながら杭を打たれたようなものじゃないか。

「さて、一人だけ使いに帰してやるか。カーネフェリアを救いたくばカーネフェルの残党は完全降伏するか、それかこの城に攻めて来い。その一人以外は全て殺して構わぬ。其方も代償を欲しがっていただろう子鬼？」

「やったー、流石須臾。話解ってるね」

黒髪の子供は嬉しそうに無邪気に笑い、品定めをするように僕らを見る。

「アロндаイト卿は切れ者で人望に厚い。だから早めに潰すに限る。アルドールは勿論殺す。……となるとそつちの子かお兄さんか。……って話だよな」

そしてそれは僕かパルシヴァルかの二択になった。やがてその子は頷き笑う。

「いいこと思いついた。逃がすのはそっちのお兄さんにしよう。良かったねお兄さん？」

その子は今度はにたりと笑う。悪意の満ちあふれた笑みで、僕から兵を遠ざける。

「簡単に殺しちゃ人質の価値ないしねえ。一日おきに一人ずつ殺す。それもすぐにじゃないよ。一時間ずつ手足の指折っていくのさ。残りの4時間はどうしようかな。最後は首の骨だとして、迷うなあ。両目と股間でも潰そうか？」

「カーネフェリアは顔は原型と保つようにしろ。掲げる首がなくては敵わん」

「はい。それじゃメインディッシュはアルドルってことか」

「お兄さん、君は隣の領地の未来の領主様なんだろ？それじゃあ人気者だね、良かったね。すぐに味方が集まるよ。23時間以内に戻ればまだ誰も死なずに済むよ」

「っ……お前達に時間の猶予など無い。私の数術は間もなくこの城を……」

「あはははは！面白いこと言うよね。純血なんかの、それもカードになってから初めて数術を使ったような出来合いの数術使いの数術を、混血の僕が防げないとでも思った？それにタロツク王は誰より風に愛されている」

「っ！まさか!？」

「そういうことさ。水の流れを風で流した。罌の毒が使えなくなったのは風の方が変わったからなんだよね。だから間もなくアロ

ンダイト、ブランシユ領に津波が襲つよ」

不味い。あれをどうにか出来る数術使いなど、どちらの領地にもいない。あれは曲がりなりにもカードである僕が大量の幸福値を叩いて使った技だ。防いだり軌道を変えることができるのは……僕より才能のある数術使いか、僕より上位カードだけ。今、あの場所には神子様がない。カードもない。防ぎきれないつ。

「父さんっ!!」

踵を返し、その場から逃げたそうとした僕の口から漏れた声。それに重なる声がある。それが信じられずに振り返る。振り返った先で彼は小さく、同じ言葉を繰り返す。父さん、……と。

「……ランス」

先程、何よりも大事な親友を傷付けて……眉一つ動かさなかったはずの男が、その顔を絶望に染めていた。

21: Dimidium facti qui coepit habet .

トリシュ回。

ユーカーの受難が続く。ランスさんは相変わらず鬼畜入ってる。

国とか王とかを考えるとどうしてもそうなってしまっ仕事人間。

正しい判断なんだけど、周りが感情論で生きてる奴らばっかなんで
非難轟々。

味方連中、あっちこっちで死亡フラグで参ったな。

キラキラ光る金色の髪と、森の緑と、海の青……それを瞳に映した人間は、人を哀れみ、人を見下し、人を差別し、決めつける。奴らは俺を鬼だの悪魔だの言うが、俺からすれば奴らの方が化け物だ。

「意味わかんねーし」

俺は生まれた時から男の格好させられて来た。タロットクじゃそれが普通だ。タロットクで女として生まれることは、親からすれば良いことだが、本人からすりゃそうじゃねえ。

それでも俺は幸せ者だ。同じ売り飛ばされるでも違う。

俺の親父とお袋は、俺のために俺を売り飛ばした。女として大金を得るためじゃない。俺の自由を願って俺を端金の男として売り飛ばした。

多くは望まない。唯、生きて……本当に心から愛せる相手と出会うようにとそう願ってくれたのだ。いまいちそういうの、よくわかんねーけど。だけど嫌いなものは簡単だ。すぐに解る。俺が嫌いなのは俺を嫌いな奴だから。目を見ればすぐに解る。だから人間以外は結構好きだ。目に嘘がねえ。

「異国の少女よ。何故お前はそのように己を偽る？」

「俺様は俺様だ。その何が悪いんだよ」

ある日、聖教会を名乗る爺が俺の所に現れた。カーネフェルに来て始めて言葉が通じた相手だった。だけどその爺は話を通じなかつた。

「神様って何だよ。そいつに祈れば腹一杯食わせてくれるのか？」

違うだろ」

俺は祈った。願った。それでも何も変わらなかった。幼心に学んださ。そんなものいやしねーんだ。

幼なじみから離され乗せられた船が沈んで気がついたらこの大陸に流れ着いていた。助かった幸運を喜ぶよりも、俺は異国での暮らしに戸惑った。なぜなら言葉が通じない。

食い物を分けてくれとか言っても話にならない。タロツク人に何の怨みがあるのか知らなねえが、奴らは俺に石を投げってくる。固くて食えたもんじゃねえ。だからその日も俺は腹を空かせていた。機嫌も悪かった。だってその爺俺に手土産の一つも持って来ないんだ。喋るのって体力要るのに。

「女の身でありながら男の衣服を身に纏うなど正に悪魔の所行」

「いや、本気で意味わかんねえ」

田舎ほど偏見っていう奴？酷いんだよな。俺も知ってる。タロツクでもそうだけ。子供の頭でもおかしいって思うことがおかしいって思えない大人が大勢いる。この金髪族の国でもどうやらそれは変わらないらしい。

「つうか俺が何処で何してようと別にあんたに関係ねーだろ」

「良いか悪魔の子よ。この世は須く主の物であって、何処で何をするにも規律と戒律という物が」

「わけわかんねえ」

こんな山奥でひっそりしてる分にも文句言いに来るとはよっぽど金髪族って暇なんだな。

「いい加減にしてくれよ。これ以上俺の昏寝邪魔するってんなら

ぶつ飛ばす。死にたくなかったらさつさと帰れ」

「改宗の意思無しか、これは救えん」

「俺が何時あんたに助けてなんて頼んだんだ？」

俺が肩をすくめると、ぶつぶつとその老人は文句言いながら山を下りていった。

そのすぐ後だ。その日の夜か？寝ている俺が燃えるような暑さで飛び起きたのは。

「レーヴェ……」

飛び出した山小屋。その外には傷ついた俺の友達。

心細い草原で、俺はこいつと出会った。豊かな黄金の鬘は、金髪族のそれに似て……それでも奴らとは違う。あの頃のこいつはそんな鬘はまだ無くて、ちよつとでかい猫みたいなもんで。怪我してたんだよな。親が毛皮を狙われて……殺されて肉だけになって、それを他の動物に食い散らかされていた横に、あいつは転がっていた。そいつも腹減ってるだろうに、絶対食べないんだ。なんだかほつとけなくて、盗んできた鶏と一緒に食った。怪我が治る頃にはすっかり意気投合して友達になってた。いいや、家族だった。

その家族が……もう動かない。金髪族に、殺された。

「さあ、悔い改めろ！悪魔！」

教会兵器を掲げる老人。俺にはお前が悪魔に見えた。松明掲げた村人達も同じだ。

「許せねえ……」

怒りで呼吸が荒くなる。俺の黒い目が見据えるのは奴らの姿。そ

れが次第に大きくなっていく。いや、違う。俺が近づいているんだ。

「ば、化け物っ！」

「ええい！ 怯むなっ！」

俺には武器がない。だから思い切り引っ掻き噛み付く。奴らの手から落ちた松明を奪ってそれで連中を殴りつけて火で焼いた。半数くらい片付けたところか。聞き慣れない音が響く。あの老い耄れが手にした教会兵器だ。それに足を射抜かれた。血が一杯出た。痛くて動けねえ。それを良いことに連中は袋叩きだ。

意識がもうろうとしてくる。それでも負けるわけにはいかない。俺は腹の底から咆吼っ！ 全てを怯ませる。そのうなり声が俺に最後の力を奮い立たせる。袋叩きつてことは、近くに敵がわんさかいるってこと。つまりはさ、殺し放題って訳だ！ 奴らの方から俺に近づいて来てくれるんだ、簡単なことだよな。馬鹿な奴。逃げれば良かったのに。

*

「君がここらで噂の鬼？」

綺麗な鈴のような声の後、ふわと空から舞い降りる影。その少女は俺が今まで見た人間の途中で、一番綺麗。肩で切りそろえられた流れるような黒髪を、結うは赤い絹のリボン。桜色の瞳が春を思わせる。

陶磁器のような雪のようなその白い肌に手を伸ばせば、解けて消えてしまっじゃないか。そんな躊躇いを覚えるほど、そいつは綺麗だった。空から天女が舞い降りた。あの日の俺はそう思った。それは死神だろうか？ あんな綺麗な死神さんに看取られ死んでいけるなら、俺は十分幸せか。そう思ったが腹が減っていた。辺りの死骸を

食う気は無かった。だって食ってやったら供養になるだろ？俺は供養してやる気もなかった。

俺が食ったのは俺の友達、レーヴェだけ。唯意味もなく殺されて死なれるなんて俺が許せない。その死を無駄にするものか。焼けた山。焼けこげた友達。泣きながら俺は食った。それでも腹は膨れねえ。胸はすーすーと風吹くように満たされない。

「食べてみる？」

その綺麗な人はそう言っただけに妖しく笑みかける。こんな綺麗なんだ。あんなクソみてえな人間共よりきつと美味しいよな。そう思っただけで捕まえて……噛み付こうとして、我に返った。だってあんまりにも綺麗だから、食うのが勿体なくなつた。間近で見たら本当に可愛いんだ。あんまりにも可愛いもんだから、頭がくらくらして俺は……気を失つた位だ。

俺が目を覚ますとそいつは俺に食事を与えてくれた。久々の人の手料理。涙が出るほど美味かった。

エルスは俺に仲間をくれた。エルスは俺に居場所をくれた。感謝してもし足りねえ。毎日24時間ぶっ続けで一生お礼を言い続けることで、こいつを俺の傍に留めることが出来るなら、俺は喜んでそつするよ。

俺は俺の両親が願った物が目の前にあるのだと理解した。こいつが欲しい。俺はこいつを手に入れるためにはるばる海の向こうに流されたんだ。

こいつが狂王の物だっというんなら、俺が王を殺してやるよ。そしてお前を奪ってやるんだ。王を殺したいって言うお前のための力になる。

だってエルスは俺の名前を当ててくれた。俺の友達と同化した俺を言い当てた。すげーと思つたよ。お前なら俺のことを、何でも解つてくれる。何でも受け入れてくれるって、そう……信じられたん

だ。だから俺がお前を解つてやりたい。何もかも。お前が鬼でも妖怪でも何でも良いんだ。俺がお前の全部を受け入れる。それが愛つてもんだろ、なあ親父？そうたるお袋？俺はエルスを愛してる。戦う理由はそれで十分。エルスのためだ。あいつを手に入れるためなら俺は、国くらい、幾らでも沈めてやるぜ。

「さて、そういうわけだ野郎共！大仕事だぜ」

みんなろくでもない奴らだが、エルスに感謝してるって意味では俺達は仲間だ。エルスに着いていけば欲しい物は何でも手に入ると、俺達は知っている。

「アロンダイト領、だったか。随分水で東に流された、生き残りがいても俺達に向かつて来る気概のある奴はいないだろう。」

「ん、なんだてめーは」

「夫の不在を預かる身として、私はあなた方をこの領地に入れるわけには行きません」

現れた金巻き毛の少女。それが手にするは漆黒に金の装飾が施された美しい銃。あの日見たそれとは色が違つが、教会を意味する十字が刻まれている。

「その武器……お前教会の人間だな」

「あら？唯の預かり物ですよ」

「どうだかな。まあ、邪魔するんなら誰が相手でも容赦はしねえ」

*

「神子様……どうかご無事で」

定時連絡が入らないと嘆く声。シャトランジア第一聖教会。そこで待機を命じられていた少女がいた。彼女は本当に僕を心配してくれていた。長い青髪、修道女の衣服に身を包んだ混血児。イグニスは、目を開ける前からその声を聞いていた。

「イ……っ、み、神子様っ！」

寝台から身を起こす僕に抱き付いてくる少女は、自分がしたこと気付いてさっさと飛び退き顔を赤らめる。

「ご無事で、何よりです」

涙を拭いながら彼女はぺたんと床に座り込む。安心して緊張の糸が切れたのだろう。僕はこの子が苦手だ。嫌いではないが、彼女の真っ直ぐすぎる好意は少し、アルドールに似ているから。

「敵に誤解させるために、わざとギリギリまで攻撃を受けるだなんて……あんな策っ、策でもなんでもありませんっ！」

「心配かけたなら謝るよ。だけど僕は、負ける賭けはしない。僕は何時だって勝つて来た。そうだろうっ？」

「……はいっ、神子様」

「まあ、……この様子だと僕は無事にシャトランジアまで飛べたようだね」

「はい」

「……シャルルスは？」

「神子様が助けた数名と共に、無事カーネフェルに到達。以後プランシユ領の警備を」

「マリアージュは？」

「引き続きアロنداイト領の警備を」

「不味いな」

「不味い……ですか？」

「マリアージュの数術能力は貴重だ。しかし……」

彼女に戦闘能力はない。正確には、今の彼女には。今は非力な少女に化けている。

他に渡している情報は、まるきりの役立たずの情報。使い所が違う。彼女の能力は少々特殊で、そんなに簡単にいるんな者になつたり戻ったりは出来ない。役者と同じだ。台本を熟読し役作りをし、台詞を暗記、物語の背景を知って……ようやく役者は出来上がる。そして同時進行でこなせる役は二役まで。

「アロンダイト卿ヴァンウィック……彼はどうしている？」

「アロンダイト領からブランシュ領に移動しました」

「……あれほど離れるなど言ったのに」

ヴァンウィックの傍に配置したのは、あの男はカードはなくても力は確か。それにマリアージュの教会兵器が合わされば、カード相手でも戦える。それはあの男にも僕は教えていたのに。

（ランス様の心を折らせないため、彼女に化けさせたのが仇となつたか）

真実を知ればあの親子の溝は埋まることなどないだろう。それは僕が困る。彼の婚約者が、セレスティン卿同様……自分の父親に殺されたなどランス様が知れば、彼のスイッチが入ってしまう。まだ、彼に狂われては困るのだ。カーネフェルにはまだ、彼の力が必要だ。

（ならば……）

方法はあれしかない。

《マリアージュ、攻撃は威嚇に留め、北へ向かえ。領主の屋敷には僕が数術結界を張っておいた。ブランシユ卿程度の数術、どうにでもなる。山賊共を屋敷前まで誘い、籠城に徹して下さい》

《えー、妻としての役目が》

《役者は結構、だけどマリアっ……君もいい加減本業を思い出せ！まさか本気でランス様に惚れてやいないだろうな！？》

《神子様のどけちー！了解しましたわ》

《シャルルス！今に其方にも波が来る。だが……タロツクへの威嚇にもなる。君に預けておいた教会兵器の使用を許可します》

《ですが》

《僕の最も信頼できる人……カーネフェル王を信じて欲しい》

《神子様……》

《……シャル。君の名前はあの腐れ爺国王と被ってて苛つくんだ、これ以上ぐだぐだ言うなら君の部屋の女装衣装全部焼き払うけど？どうする？》

《ひいひい！了解しましたっ！あとコードネームくれたの神子様なのに酷いっ！でも愛してるっ！絶対今度女の子の格好させてやりますからねっ！》

《女装なんかごめんだよ》

少なくとも今は彼女である彼女と、彼女ではなく本来彼である部下に指示を出し、やれやれと息を吐く。疲れた。変装上手の部下は公私混同ぶりが目立つ。お願いじゃなくて、命令じゃないと僕でも操縦出来ない面々が多すぎる。

シャルルスめ。カーネフェル人の男は目立つ。度々女装させて任務に当たらせたのは確かに僕がしたことだ。だけど本格的に目覚めなくても良いじゃないか。

マリアージュもマリアージュだ。役に入り込みすぎている。もう少し冷静な役を与えるべきだったか？しかし……生きている人間を

演じさせるのは、何かと面倒事が多い。あれは仕方のないことだ。

「神子様っ!?!」

「っ……………」

起き上がりすぐにふらついた僕に、彼女は駆け寄ってくる。その手から伝わる思いは僕には刺激が強いんだ。

「………… 大丈夫。念話数術を使っただけだから」

だからをそれを振り払い、僕は行くべき場所へと向かう。

「神子様っ! その怪我はっ! まだ手当も満足には…………っ」

「その必要はないよルキフェル。これが動かぬ証拠だ。これから王に会いに行く。君はここで待て」

「でもっ!」

「………… 僕に命令されたい?」

「………… いいえ、行つてらっしゃいませ、神子様」

君たち運命の輪。僕の手足。任務では道具として使う。だからこそ普段は最大限、人間として接したい。それが死に行く彼らへの僕なりの手向けなのだ。

「ああ、行つてくるよルキフェル」

都は第一聖聖教会の総本山とは違う場所にある。だから僕はメルクリウルス港から城のある都まで飛ぶ必要があつた。なら最初から都に飛べばいい…………とは限らない。あまり知らない土地へ行くこと。遠距離を飛ぶこと。それは僕であっても負担が大きい。船で行けるものなら行きたかつたが無理だつた。

実質僕が空間転移を発動させたのは二度。一度はランス様一人を飛ばし、二度目は僕自身を飛ばした。船に囚われていた兵など最初からいなかったのだ。僕が見せたまやかした。それでも数術使いのランス様とエルス・ザインを欺くとは、僕の視覚数術もまだまだ捨てた物じゃないらしい。

（まあ、英雄的なああの騎士様なら、ああすれば動かざるを得ないだろう。必死に戦ってくれるはずさ）

二度の遠距離移動は流石に応えた。かといって便利な教会兵器を表舞台に持ち歩くわけもいかない。敵の目に留まっではいけないのだ。万が一でも奪われればとんでもないことになる。数術は誰にでも使えるものじゃない。だが、教会兵器は……本当の教会兵器はそんなものじゃない。使い道を間違えれば取り返しが付かない。恐ろしい物なんだ。

（アルドール……）

僕は、君を信じてる。君ならきっと、大丈夫。

僕が隣にいらなくても……君はちゃんと、戦える。

意味がないんだ。僕がやるのは。君がやらなきゃ意味がないんだ。君の力で勝ち取って、初めてあの国は……この国は、生まれ変わるんだから。

（僕の仕事は、君を信じること）

傍にいられない日が来ても、それは変わらない。だから僕は、僕の仕事をやる。

数術での移動は出来る。寿命を減らしても良いなら可能だ。だけどそれでは意味がない。本当は移動した方が早いのかも知れない。

こうして都まで、護衛も無しで徒歩で歩くのは……幾らシャトラン
ジアでも危険なことだ。だけど僕は自分にルールを科す。都に着く
まで、数術は使わない。

まずは視覚数術、触覚数術で僕の身体を男に見せる。後は僕の身
元を証明する十字架。その成分を数値化。体内に取り込む。これで
最後。これから暫く僕は唯の子供だ。

今の僕には世界が見える。かつてちゃんとは見えなかった空の色
も、海の色も、君の顔も解る。それは僕が僕ではない何よりの証。
君を裏切っている、騙している証拠。だけど君はそれでも良いと言
つてくれる。いつか僕の嘘を曝いてくれると約束してくれた。だか
らいつか、僕まで……ここまでおいで、アルドール。僕はここに
なくても、僕は君を待っている。

「何だあの、薄汚いガキは」

「怪我してるのかしら？」

「ほっとけ、ほっとけ」

「あいつ、混血だ」

「まあ、混血ですって！？混血なんかが昼間から偉そうによくも
まあ往来出来た物ね」

「あのガキ、薄汚れているが身なりは良い」

「女が男がよくわかんねえが、顔は悪くない」

「売り飛ばしたら金になるんじゃないか？」

「やめとけ、バレたら大変なことになる」

あの日から、何も世界は変わっていない。今日もまた、醜く薄汚
れている。

世界は鏡だ。人の心を映す鏡だ。今日という日が美しいと思えな
いのは、そこに暮らす人々の心が醜く、その世界を見つめる僕の心

が貧しいからだ。

それでも言おう。やはり世界は醜悪だ。

「けつ、金目のもん何も持ってねえ！身なりは良い癖に」

「ちよつと待て、こいつ教会の聖職者か？やばい、さつさと逃げろぞ」

「お嬢ちゃん、酷い怪我だね。ちよつとうちで休んでいけよ……おい！無視かよ！？」

「……つち、その顔で男か。とんだはずれクジ引いちまった。紛らわしいことすんじゃねえ！今度やつたら殺してやる！」

「災難だったね坊ちゃん、もう辺りも暗くなってきたからうちに来ると良い。つち、五月蠅い！さつさとこいつを馬車に詰め込み！逃がすな！追えっ！」

「あの走ってる子供、混血だわ！」

「まあっ！不吉っ！」

「混血は街に出てくるな！聖水臭え教会か、薄汚い移民街にでも帰れよ」

「お前ら、もっと石を持って来い！混血なんかはこの街を歩かれたら堪らん！」

絶望したかと奴は聞く。僕は答える。消え失せる。

（五月蠅い、零の神）

希望は何かと奴が問う。僕は答える。見て解れ。

（黙れ、壱の神）

*

「イグニス、ほら」

何時だっただろう。彼と出会って半年くらいした頃だろうか？
僕は手を差しのばされた。

「何？」

「ギメルが裏庭と森で遊ぶのに飽きたって言うんだ。ちょっと街
まで遊びに行こうよ」

「本気で言ってるの？」

「大丈夫、ほら」

きちんと結われた髪をボサボサにして、アルドールは僕らと遊ぶ
時用について、僕に多めのお金で買って来させた平民用の服に着替え
ている。確かにそうすれば貴族だとは思えない。

「そんなに出掛けてバレないの？」

「今日は世界名作全集全24巻を読みたいからって理由で部屋に
引き籠もってるんだ」

「感想聞かれたら？」

「昨日のうちに全部読んだ」

「君って馬鹿？」

意味が分かっているらしい彼に、もう一度同じ言葉を繰り返す。

「君って馬鹿」

ただし今度は断定したが。

「僕らは街には出られないよ。ギメルは迷ってたまに出て行くけど、街は危ない。迎えに行くのも大変なんだから」

街は混血至上主義で溢れている。移民に対する風当たりは冷たい。タロツク人ほどではないが、混血だつてその次に扱いが酷い。基本格式高い、名誉を重んじる腐れシャトランジアの人間達は、よそ者を嫌う。かといって今の社会、集団意識が強いわけでもない。敵愾心だけ残つたまま、社会コミュニティの機能は低下している。

つまりこの中途半端な金髪族達は、セネトレアの民のようにコンプレックスを持っている。自分たちが真純血だと信じていたにも関わらず、タロツク人の血が流れるカーネフェル人の一派に過ぎないことを知つたから。カーネフェル人の目は青か緑。青が劣勢遺伝。

高貴なエメラルドと語っていた王族貴族の緑の目。それが遺伝的に希少価値など無いと知り、その青目を羨み怨んだ。ありふれた誰かではなく、価値ある自分を人は、親は求めた。誰かに馬鹿にされなくなかった。馬鹿にされることに耐えられなかった。そのためには何だつて出来た。

そもそもカーネフェルの青目の人々を、最初シャトランジアは未開の地の野蛮人と軽んじていた。大昔に島流しにでも遭つた罪人の子孫に違いないと。

しかし遺伝子を調べる内に、それが逆なのだと知らされた。古代シャトランジア人は一度カーネフェルの文化を全て焼き払い、女子供を残して殺した。そしてその血を取り入れて、高貴なサファイア、青目を手に入れようとした。

生き残りの幼い子供、幼い赤子。それを王や貴族は我が子として迎え入れ育てる。何代も続いた家の血を途切れさせてでも、青い瞳が欲しかった。

そこまでの奴らだ。プライドが無駄に高い。この国の先祖は歴史を無かつたことにしたるくでもない奴らなのだ。

そして現代にそれを語る書物はない。歴史は嘘偽りが刻まれたまま。過去にそれを改訂した数術使いもいたが、人は彼や彼女を糾弾し、嘘偽りで彼らを貶め、再び嘘の歴史を掲げ始める。だから今はもう誰も言わない。皆、自分の命が惜しいのだ。

だけど僕は知っている。だから血を重んじる無知な貴族や純血至上主義がいかの下らないことも解る。自分たちだつてタロツクの血が混ざった混血なのに。ただ、その血の度合いが違つてだけ。なのに誰かを馬鹿にするの？見下すの？僕にはそれが解らない。解りたくもないし、許せなかつた。

（この男は、そんな醜い世界を見て、同じ綺麗事が吐けるだろうか？）

人は同調する。多数決に流される。お前もきつと……そうなんだ。一人が石を投げるなら、お前は僕らを庇うだろう。だけど二人三人、お前は迷うだろう。五人十人、お前の心はもう遠離る。百を越えたらお前は僕を友達だなんて言えないはずだ。

世界は、万物は数字で出来ている。人はそういう数字に流され生きる、薄情な存在なのだから。

「いいよ、もし僕らが苛められたら君が僕とギメルを守ってくれる？」

約束してくれるなら行つても良い。僕は確かそう言った。君は笑つて僕の手を取つた。

「うん、約束する！」

僕はそれを鼻で笑つた。出来もしない約束するんじゃないやねえよと。裏切られることを、期待していた。君を見限りたかつた。お前もそ

の程度の人間なのだ、烙印を押したかった。ギメルを守れるのは世界に僕一人。僕の心を守ってくれるのはギメルだけ。僕らの世界は二人で完成されている。第三者など要らない。排除する。僕からギメルを奪う君を僕は排除する。

「混血が街なんか歩くなよ」

「この人間擬きっ！」

「お前らの仲間ってさ、海の方こうじゃペットにされてるんだろ？」

「ほら、御手！御手も出来ないのかよ馬鹿犬！」

妹の手を握る僕。その手に汗が滲む。手の震え。それがどちらのものかわからない。先程まで楽しそうにシヨーウィンドウを眺めていたギメルも何も発さない。

街に迷い込んだギメルを僕は探しに行く。殴れば相手に更に理由を与えてしまうから、僕はただ睨み付けるだけ。彼女を石から庇うのが精一杯。数術で弾き返せばそれがまた不気味かられるから、ぶつかる寸前にその物質を柔らかい物質へと変換、ダメージを弱める。そして地面に落ちる前にまた硬質化。相手の気の済むまでそれを繰り返す。

「な、お前ら本って読むか？」

「は？」

「歴史の中には復讐の法典ってのもあるらしいよな」

アルドールはにこりと笑って、漬け物石大の大きさの石を携えている。

「な、何だよお前！脅すつもりか！？そんな石、怖くなんか…」

「俺、石マニアなんだ」

「は？」

「君たちの持つてる石、一個100シエルで買い取らせてくれな
いかな」

「は？」

「頼むよ！庭先に砂利道作るのに良い石集めててさー」

よく分からないまま子供達の手から意志を奪い、代わりに貨幣を
握らせていくアルドール。

確かになんの儲けにも成らない移民苛めと、お金。どちらが美味
しい話？何の俗物な子供達は計算の結果、どちらが得かを判断する。
言いくるめられた子供達は、思わぬ小遣いが手には入って混血虐
めなんかするよりお菓子か玩具でも買に行こうとその場を立ち去
った。

金に物を言わせた勝利だった。

「よし、俺の勝ち！」

アルドールは満面の笑みを浮かべ、空いている方の僕の手を掴む。

「……馬鹿だこいつ」

「何だよ、守ってあげたじゃないか」

「守り方が格好悪い」

「ええ！いいじゃん、無血解決」

「もつと大勢現れたら？」

「もつとお金をばらまく」

「お金が無くなったら？」

「質屋に駆け込む」

「身包みなくなったら？」

「セネトレアに行つて臓器売ってくる」

「どうしてそこまでするわけ？」

「そんなの、友達だからだろ？」

「あははは！」

僕らの会話に突然ギメルが笑い出す。あいつらが来てから何も言えなくなっていたギメルが。

「アルドール、格好良い」

「そ、そう？」

僕の手を離し、アルドールのもう片手を掴みに行くギメル。僕は失われた片手の温度に酷く焦った。

二人の笑い合う温度。その意味が分かる。僕がギメルに捨てられる。僕はここにいるのに、僕がここにいない。僕とギメルの世界が、彼に奪われていく。嫌だと手に力を込めれば、何？と僕を心配そうに見つめるアルドール。

こんな僕の気持ちなんか何も解らない癖に、僕の心配なんかしないで欲しい。掴まれている彼の手を振り払って、ギメルのもう片手を求めに行った。

君と過ごせば過ごすほど、僕は僕を見失う。解らなくなるんだ。最初はギメルを奪われなくなっただけ。それが次第に君を好きになっていく。僕が怖いのは……僕だけ置いて行かれること。おまけのようにそこにあること。

君は僕が好きなんじゃない。ギメルが好きだから、その小姑の如き僕に気に入られようと必死なんだ。

あの日感じた恐怖は二つ。僕だけの妹が、彼に取られてしまうと
言う恐怖。それだけじゃない。僕は君が怖かった。どんどん僕の内側に入り込んでくる。君は普通じゃない。

君に気を許したらいけない。その瞬間、そいつは僕を投げ捨てる。あの男と同じだ。母さんを傷付けただけの男と同じだ。利用して、用済みになれば捨てる。僕って何？僕の存在って何？僕はギメルの

ために生きている。そのギメルは僕の代わりを見つけた。僕って、何のために生きているの？僕は何のために生まれたの？

それが解らなくなる。アルドール。そいつのせいで、僕はこころで苦しめられる。

(本当は、解ってる)

君は僕を見捨てない。だけど僕は……君を信じられなかった。知っているんだ。予言の言葉が僕に囁く。この男は僕を僕らを裏切らない。だけど、世界は人は僕らを裏切る。僕の心が壊されていく。だから彼が裏切らなくても僕らは、彼の傍にはいられない。それを強く確信した出来事だった。

その日のお礼という名目で、僕らの移民街に彼を連れ出したのは……僕が彼を恐れたからに他ならないだろう。

苦しめられたくない。君なんかのことで、何も悩みたくはない。僕は頭の中から足の踵爪先まで。その全てがギメルのためにある。髪の毛一本たりとも違う。彼女以外にあり得ない。勝手に僕の中に入ってくるな。僕の世界を広げるな。壊さないで、放って置いて、そっとしておいて。何も知りたくない。何も聞きたくない。僕は今手にしている物に満足している。これ以上を望まない。だからこれ以上を奪われたくない。

(だから、君は要らない)

ずっとずっと、そう思いたかった。

*

見上げた空では、月が僕を見ている。嗤っているようだった。

旅の一日目。気が付いたら僕は道に寝転がっていた。綺麗な夜空

を見上げていた。財布はなくなっていたし身体に傷が増えていた。向こうは殺したつもりだったんだろっな。

(やれやれ、酷い目に遭った)

それでも、こんなものか。そう思う。よくあること。それはよくあることだった。それを酷い目だと感じるのは、ここ暫くの僕が、幸せすぎたからなのだろう。

「アルドール……」

僕は知ってるよ。平和。これが、平和。

みんな目を逸らす。見てみない振り。

多数決に従い、あるいは金の数に従い僕を追いかける。

下らなさすぎて、泣けてきた。こんな物のために、僕は命を磨り減らして……大事な部下を何人も犠牲にしたのか。

「零の神……それに道化師。お前の言うことも解るよ」

一度壊してしまえ、何もかも。こんな醜い世界全て焼き払ってしまえばいい。僕だってそう思う。

だけど、アルドール。君の優しさに触れて僕は……人をこの世界を信じてみようと言う気になった。

シャラット領で、君は燃え落ちるシャンテリアから僕を庇った。弱い癖に、自分を犠牲にして誰かを守ろうとする。君は何時も、力尽くではない選択肢。君が無理矢理何かをしたことなんてこれまで一度もないだろう。今の君は怖くない。だけどその自己犠牲が僕は怖い。恐ろしい。

「僕には……君と同じ事が出来ない」

僕があの日君と同じ解決法を取ることは不可能だ。立場がある。君と同じやり方で、僕と同じような混血、移民は救えない。

「だから僕は、君と同じ事は……しない」

神子という身分、優秀な部下、そして僕自身の数術。それがなければ僕は、こんなにも小さい。数術を使えない僕は、とても小さな存在で、何も出来ない。命を食い潰してでも奇跡を起こす。だから僕に価値は生まれる。

君みたいに何も出来ない。だけどそこにいるだけで、誰かを救える人は幸いだ。僕はここにいるだけでは、何も出来やしないから。

「もう……行こう」

誰に唾われても僕は、これ以上立ち止まっているわけにはいかない。勿論無駄なことはいらない。これは意味あることなのだ。

スリに遭うわ、ナンパされるわ、誘拐されそうになるわ、石投げられるわ、殺されかけるわ散々だったが、丸二日……眠らずに歩き続けて都に着いた。

シャトランジアには派閥がある。僕の治める教会に従う教会派と、王の統治下にある国王派。アルドールの養子先トリオンファイ家は国王派。その娘であるアージンさんが聖十字に入ったり、フローリプさんが礼拝に来たりとそこまでの抵抗は無い程度の、代々そうだからってという表向きの国王派。そういうどっちつかずの層が多いのが現状だ。だから僕が兵を集めようにも、士気が足りない。この国には危機感がない。

僕のために戦ってくれるのは、どっぷり宗教にのめり込んだ狂信者くらいだが、正直戦力として宛には出来ない。特攻捨て駒隊くら

いだろう。

しかし、国王のために命を投げ出せる民もまた少ない。聖十字だつて、正義を心に持つている者は故郷を奪われたカーネフェル人、狂王の迫害にあったタロツク人の何割か。大多数は格式を重んじる腐れ宗教国の移民差別により就職先が無かつたとか、給料が良いからとかそんな理由で組みしている連中。本気で国を守るうという気概など無い。

だけど僕は預言者だ。僕は未来を知っている。悪い未来を回避する術を持っている。だけどそれって、僕が嘘を吐かないことの保証にはない。悪い未来を避けるということは、結果的に僕は見知つた預言を外すと言つことなんだから。平和とは僕の信仰が失われること。信仰を甦らせるには、多少の危険が必要だ。

安穩と暮らす愚か者共の目を覚まさせるためには、身の危険を教えてやらなければならない。その上で僕なら力になれると言つことを、たつぷり教え込ませなければならない。

(カードならある。幾らでも)

部下達が必死に世界を巡ってくれたお陰だ。僕は王を揺する切り札がある。今に見ている。

薄汚れた僕を見ても信じない。十字架を取り出して、ようやく通されたくらいだ。本当に嫌そうな態度で王の下へと案内する兵士達今に見ている、僕に平伏させてやる。

「二度と顔を見せるなと申し上げたはずだが」

「言われたのは私ではありません陛下。先代です」

「……ん、混血か。……ならばお前が噂の次期神子か」

シャトランジア王は金髪を失つた年老いた男。その白髪は、あの王子のそれには似ても似つかない。彼の銀髪には遠く及ばない惨め

な色だ。顔も大して似ていない。仕方のないことだけだ。

「そ、その怪我は……」

「メルクリウルスから歩いてここまで来ました」

「な、何!？」

「物騒ですねこの国。何度か死にかけました」

「……正気とは思えん」

「私は認めたくない。こんな国が、世界一平和で安全だとか!平等と正義を重んじる国だなんて認めたくない!いいえ……この国だけじゃない」

「王を即位させた帰り道……カーネフェルの海で、タロツク軍に私の船が沈められました」

「何!？」

「街の警備もあり私の護衛に人員が割けず、私はこうして歩いて参りました」

「私と貴方の民が殺されました。よって私はこれをタロツクの宣戦布告と見なします。このままでは我々のシャトランジアが、カーネフェルの二の舞です」

「戦争など認めん。和解も認めん。儂の娘を誰が殺した!?!お前達教会と、憎きタロツク王!!!二度とあんな事を儂は繰り返さなつ!!!」

かつて、タロツクとカーネフェルを休戦に導いた姫がいた。王女マリーはこの男、シャトランジア王の愛娘。彼女に惚れたタロツク

の若き須臾王が、彼女との婚姻を望み、それが叶うなら休戦に応じると言った。中立と平和を掲げるシャトランジア。姫はその申し出を受け、家族を捨てた。しかしその先で、彼女は我が子共々殺された。老いた王の嘆きは解らなくもない。家族を失う痛みは僕だって知っている。それでも……

何のための僕？それは……僕は、シャトランジアが聖教会の神子である僕は、誰に攻撃された？多くの仲間を海に沈められた？タロツクは僕をシャトランジアを傷付けた。逃がすものかっ！僕はこの国を変えるっ！その理由を手に入れたっ！

「……既に都は落ちました。カーネフェル王は北部に逃がしましたが、時間の問題です。時代は変わった。売国奴共の手で、数術も数術兵器もこの国から盗み出されている。世界中を敵に回し、今なおシャトランジアが世界最強に座していられるかも危うい」

「教会兵器が後れを取るとでも！？」

「ええ、取りますねっ！兵器は僕らを裏切らない！それでも人は僕らを裏切るんだっ！」

いつそ数術で人を操り人形にすればそんなこともなくなるだろう。だが、それは人道に反する。正義に反する行いだ。僕は教会は、そんなちっぽけな正義のために多くを奪われてきた。いつそ何もかも焼き尽くして皆殺しにしてしまえば良いんだ。そうすればもう何も壊れない。奪われない。無くさない。

（だけど、それじゃあ駄目だと……僕に教えてくれた馬鹿がいる）

僕はあの馬鹿を信じる。世界を救う鍵はあいつの中にある。可能性なんだ。あいつだけが世界の……僕の。どんなに困難な闘いでも、やってはならないことがある。だから人は自らに枷を、法を作った。だけど法は奪う物ではなく、守るための物。

(僕はそれを、忘れてはならない)

こんな小僧にと思うだろうな老いぼれ。

だけど大人が、年を食っていれば何もかも正しいのか？

(爺、せめて100回くらい殺されてから吠えろよ。僕はそんなもんじゃない……)

お前にそういう目を向けられたのが、これで何回目だ？もう数えるのも嫌になるくらい、僕はここから消えて、ここにいます。何年生きた？誇る事じゃない。それは僕の敗北回数。彼を救えなかったという事実なのだから。

それでも僕は、少なくとも同じ輪の中から抜け出せない貴方よりは、多くを見て、多くを知っている。

「解りますか王。子を失った貴方と同じ思いを、この国の民が、盟友の民が全く同じ思いをするのですよ！？貴様は親である前に王だろ！民を守らぬ王など王たる資格はない！今すぐその座を明け渡せ！」

「渡せるものなら渡しておるわっ！だが……儂の娘もっ、娘の愛した男もっ！儂は二人の孫まで失ったのだ！今更誰にこの国を継がせるというのか！？誇りを無くした売国奴か！？独裁を望む貴様にかっ！」

「いいえ、アスカニオス殿下、或いは……那由多王子にです」

「ふっ……戯れ言を。儂の孫は……もう」

「生きていますよ、二人とも」

「何っ！？」

僕は毎度のように、彼に優しく笑ってやった。希望の糸を垂らす

ように……罫を仕掛けるように。

「見せてあげましょうか？」

僕が数術で映し出す映像。部下から送られた情報群。

美しい金髪と紫色の瞳を持った、少女と見紛うような少年。それから長い金髪、深い緑の目を持った一人の青年の姿。前者は混血、後者は真純血のカーネフェル人。それでもこの老人の孫であることに代わりはない。

「おお、おおっ……これが、これがっ！あああ、マリーに似て……おおおっ、こっちは顔つきなんかアトファスそっくりでっ……まるで二人が僕の所に帰ってきたようじゃ……！」

そうですね。その所為で向こうは向こうでなんか色々カオスな事になってるんですけどね。でも老人にはシヨックが大きそうだからまだ黙っておこう。あんなことか話したらこの爺空気も読まずに単身セネトレアに出撃して討ち取られそうだから。

感極まって、立体映像に抱き付こうとして爺はそれを擦り抜け……その映像が温度もなく触れられないことに気が付いて床へと倒れる。

「殺人鬼 S u i t ……それが那由多王子の今の名前です」

「なんと、あのセネトレアの殺人鬼が、僕の孫だというのはか！？しかし、処刑されたと聞いたが……」

「僕が大事な部下を犠牲にして身代わりにして、彼を助けました。これは貸しですよ」

「ぐっ……」

「そして今、彼らの傍に僕の部下を送っています。この意味、解りますよね？僕は貴方に彼らを会わせることも出来るし、その前に

殺すことだって出来る」

愛娘そっくりの那由多王子。それをこの男は失えない。つくづく罪な男だよ、彼。

その手で抱き締めたい。お帰りよ、良く生きていたねとその髪を撫でてやりたくて堪らないのだ。

「……………何が、望みだ？」

馬鹿な男。この男は王ではない。何時も親……………祖父としての自分に転ぶ。一度として王としての答えを選んだことはなかった。今回も例に漏れずそう。これで王手だ。

「勿論世界平和のために、協力していただけますよね？」

「……………本当に、会わせてくれるんだな？」

「ええ、約束しますよ。タロツクをカーネフェルから追い出し、セネトレアを潰した頃には面会も叶うでしょう」

「……………解った。なら、まず何をすればいい？」

「今の十字法では無理なんですよ。ですから十字法の改正と、国法の改正。議会の解散。教会兵器の扱いは僕ら教会が長けている。戦時下では国王より僕が権限を持つことをまず認めていただきたい。でなければ国も動かせない」

この国の民は安全を求める。法を守ることは自らの平和を脅かさないことを望むから。どいつもこいつもそんな自分勝手な小さな平和を守るため、他人を犠牲にすることを厭わない。

だから、犠牲の立場に立たせてやる。それでやっと命の重みを、平和の本当の意味を知るんだ。

「法律で、民を縛るか。それは狂王のすることと何も変わらない

ではないか」

「拜金主義に蔓延る悪徳により信仰が薄れた。人を信仰で操ることは今の時代では不可能です。そして王の権威も既に地に落ちていく。民を従えさせるには、もう他に何もありません」

法律は絶対の正義じゃない。それでもなるべくなら正義の側でなければならぬもの。

見て見ぬ振りをするのが正義だろうか？馬鹿だな。恩を売るのが正義だよ。恩を仇で返すような奴を殲滅するのもまあ、正義さ。だってそつちが悪だからね。

こういう考えは、国王派だって持っているはず。そこを刺激すれば御すのも難しくはない。シャトランジアの食料自給率はかなり低い。だからカーネフェルがタロツクに落とされることは本当にシャトランジアにもよくないこと。有耶無耶の内にセネトレアに牛耳られれば、シャトランジアからもっと多くの金が奪われる。その金で奴らはこの国を攻め滅ぼすつもりだ。カーネフェルがいてくれるから、この国は安全なんだ。そのカーネフェルが滅んだら、殺されるのは自分たちだとシャトランジアの奴らは解っていない。それを解らせる必要があるんだ。

「身分も人種も関係ないっ！法律により、一定年齢上のシャトランジア国民の全てを徴兵の対象とします。それが平等というものです。拒むなら身分を剥奪、国籍を奪いそのままカーネフェルに送ります。そうすれば嫌でも今の世界を知ることでしょう。そして外の世界をその目に見せてやるんです。自分たちのこれまでの日常が、犠牲の上に成り立つ物であること！それが脅かされていることをっ！」

「権力を握り世界を牛耳り……神にでもなるつもりか」

「あんなつまらないものに僕は興味ありません。唯……守りたい物があるだけです。神なんて……あんな理不尽な奴らに、誰が」

誰が屈するものか。神の手で作り出す奇跡なんてろくでもない。愚かな人のが生み出す奇跡の方が余程優れている。

「安心してくださいよ。僕の独裁は来年まで。今年の12月31日までの話です。戦争もそれまでに終わります」

「どういうことだ？」

「予言ですよ。シャトランジアは戦いから逃げられない。それが運命の日です。このまま逃げるならその日に滅ぶのは我が国です。しかしここで戦うならば……それは避けられる運命です」

そう、それは確かなこと。勝者が決まるのはその日だ。それまでに決まらなければ……何もかもがお終いだ。この神の審判にタイムリミットがあることを多くの人は知らない。常識的に考えるなら簡単なことなんだけど、信仰の失われた現代では、知らない者もまた多い。

「それで願いが叶うなら、戦争してでもカードを殺したい。それが世界の王の言葉です。陛下……貴方やその近辺にもカードが現れたのでしよう？」

「……………」

「間違いなく貴方も狙われます。タロツクがシャトランジアも視野に入れてるのはそのためですよ」

「僕は、そこまで命は惜しくない。だが……成長した孫達に一度も会えんというのは心残りだ。会って話したい。この手で……抱き締めてやりたいのだ、よく生きていたと」

「予言します。それは叶えられる願いです」

その言葉で完全に、老いた王は屈した。王は自身の冠についた飾りを外し、僕へと手渡す。ハート型のそれと、教会トップの僕が持つ十字架と組み合わせて出来る、命の十字架。これさえあれば、

後は小五月蠅い貴族共も黙らせられる。

「ねえ、アトファス。もしも生まれたのが女の子なら……」

「そ、それを何故!？」

「僕は未来視と過去視が出来ます。だから協力を受けてくれた貴方に一つプレゼントです」

僕は振り返り、堅物爺に笑みかける。

「那由多王子の今の名前は、リフル。彼女が残した名前を殿下が与えたそうですよ。その時に、しっかり呼んであげられるよう精々覚えていてください」

床に蹲る王は泣いていた。国より民より孫可愛さに屈してしまった自分を恥じて、それでも嬉しくて。

「確かにこの国、お預かりしました。預かった以上、そう悪いようには致しません」

「……信じて良いのだな、教皇……聖下」

「ええ。ご安心を、陛下」

都からの帰り道、僕は王都の教会で身だしなみを整えて……そこに配置していた部下を率いて悠然と歩む。王から借りてきた兵士も一緒にだ。

「まあ、なにあの子？」

「教皇様、ですって」

「教皇聖下っ!?! あんな混血の子が!？」

「おい、一昨日あの子から金盗んだ奴がいなかったか？」

「女だと思つて襲つて、吹く脱がせかけて、舌打ちして逃げた奴もいたわよ」

「男だと解つた上で追いかけてた変態貴族もいなかった？」

人々は震え上がる。僕を助けなかったこと。僕に取り入るチャンスを自ら放棄したこと。そして彼らは何のために僕が一人で歩いていたのかを考え始める。

こういう時、混血に生まれて良かったと思う。混血は基本無駄に顔だけは良いから。

「僕は悲しい……」

はらはらと涙を流しながら僕は帰り道を進む。混血に反感を持っている相手をも、ドキツとさせるような泣き顔を僕は作る。混血迫害は妬みから来る部分も大きい。逆を言えば心酔させれば便利な駒が出来上がる。それは紙一重でもあるのだ。

彼らが僕らを化け物と呼び人ではないと言うのなら、僕らは人以上に悪徳を嫌い、人以上に正義を愛そう。人を慈しもう。そうすればこうやって、僕への信仰が生まれる。

知ってるんだ。飢えてるんだよ彼らは。金に満たされるほど、心が渴いていく。真実の愛を求める。僕は万物を愛そう平等に。視線一つに貴方を愛していますと囁こう。セネトレアの殺人鬼には及ばなくとも、僕もこの外見と演技力なら似たようなことが出来る。効率よく、もつと上手に。そして奴らは己の罪を知っている。だがそこから目を背けている。

だからその罪をまず曝こう。

「きつとこれまでだって、僕と同じような目に遭つた人々が大勢いたのでしょう。そんな人々を救えなかったことが、僕は悔しいのです。どうして僕はその時、そこにいなかったのだろう……」

人は責めない。僕は僕を責める。それが彼らの心を炙り焼く責め苦に変わる。

お前達はそこにいたのに、何故助けなかった？直接そう問われるよりも、心苦しいだろう。

だが、敢えて許そう。曝かれた罪。突きつけられたその罪から、救ってやろう。

無条件に許され無償の愛を捧げられたそいつらは、もう僕の手駒だ。どうせ悔い改めたところでまた罪を犯すだろう。僕に肯定されたい、許されなくなる。君は悪くないと言って欲しくなる、絶対に。

「教皇様っ！俺っ……俺っ！」

「聖下！私は……っ！」

「俺の話も聞いてくれっ！」

湧いて出る人ばかり。それを一人一人相手をし、慰め、叱り、許してやった。

人は憑き物が取れたように礼を言って帰路に就く。

あくまで善人を演じる僕。それを疑う者はいない。今日の、そして昨日の一昨日の僕のデモンストレーション。僕は意味のないことなどしない。殴られるなら、蹴られるならば……その痛み以上の意味をそこに持たせる。

その一連の行動を見ていた、借りて来た兵達。彼らも僕を見、教会派への誤った認識を塗り替えていく。

「神子は……いや、教皇様は特の高い方なのだ。あんなに幼いというのに……悟っていらっしやる」

「彼は教会と城を繋ぐ架け橋に……いや、この国そのものを変え方なのかも」

「俺達は今……とんでもない歴史の一頁に立ち会っているのでは

ないか？」

噂はやがて広まるだろう。神子は……いや教皇は、確かに平和を願っている。

この国は、もう落ちた。後は適度に部下達に情報操作をさせるだけ。何、嘘は言っていない。だって僕が昨日と一昨日されたこと、それは事実なのだから。

(アルドール……)

君と同じ事は出来ない。だけど、僕にも違うこと……出来るんだよ。

道化師に襲われたら終わりだった。だけど賭けてみる価値はあった。これでシャトランジアは名実共に、僕の物になっていく。君を全力で支えられるようになる。

よく分からない魔法のような奇跡を見せられても、人は僕を恐れるだけ。僕について来ない。だから僕は、人間の範囲内で出来る魔法を見せる。それが許すこと。普通は許せないことを許すこと。見るよ、そのこの連中の顔。こんな下らないことで、まるで魔法か奇跡か見たような顔してる。

こんな簡単なことさえ、心の貧しい民にとっては魔法なのだ。そう思うと哀れだと思う。本当の意味で救ってやれるものならと、僕かには思うのだ。

(ごめんね)

だけど、あなた方を救うのは僕じゃない。そこまで僕は生きては出来ない。だからそれを彼に託す。そいつは、そいつの名前はカーネフェル王、アルドール。

教会回。

教会に迫害された異国の少女レーヴェと、守るべき民に迫害された
神子イグニスとの対比。

イグニス出世回。王権奪って教皇に進化。これからどうなることや
ら。

イグニスは普通にアルドールが好きで困りますね。

「ランス、大丈夫だ」

取り乱した己の部下に、アルドールは笑みかける。

(俺のカードは最弱だ。俺は弱い)

それは事実。だけど俺は誰より一番火の元素に愛されている。だからそれは出来る。一つの心配は、触媒を拾いに行く余裕はないこと。だけど時は一刻を争う。

俺も数術使いだ。イグニスのように、見えない物を見らなければ……俺達はここで終わってしまう。だから俺はそれを見なければならぬ。

このカーネフェルという国土は火の元素に満ちている。だから、解るはずだ。近づいてくる膨大な水の元素に。

身体を燃やせ。炎に変われ。炎は俺を傷付けない。

「何……!?!」

炎が生じる際、風は生まれる。炎が激しければ激しいほど、その勢いは増す。より多くの酸素が必要だ、燃やすために。それを奪うために炎が風になる。

その風圧が、敵を次々吹き飛ばす。俺の仲間がランスが数術で守ってくれている。咄嗟の判断で理解して貰えて嬉しい。タロック王も吹き飛びはしなかったが、風に後退させられる。

近づく水。その落下までの時間。全てを一瞬で蒸発させられる温度。風向きに対する抵抗、それを押しつけるだけの勢い。それを一つずつ計算していく。

炎は作れる。だけど問題は……俺の計算速度。

「王様っ！」

「っ！？」

風の精霊をイグニスから与えられていたパルシヴァル。その力を借り俺の風と炎をかい潜り、俺の触媒トリオンフィを俺へと投げる。俺の得物には見慣れぬ水晶の首飾りが巻き付けられていた。それに触れた途端、水の動きがこれまでとは比にならないレベルで情報が見えてくる。トリオンフィを手にしたことで、俺の数術も精度を増していく。

剣を掲げ、傾けるは西の方角。

一つ間違えば大変なことになる。救うことは殺すことの裏表。トリシユの数術だってそう。数術は過ぎた力だ。この城を襲わせるはずの攻撃が、守りたかった街を飲み込む。

だけどここには俺だけじゃない。ランスが、トリシユが、パルシヴァルがいてくれる。だから、大丈夫だ。俺がここにいるのは、道化師を殺すためだけじゃない。俺を守ってくれる人達。彼らの守りたい場所、何かを、誰かを守るため。

焼かれる熱さにぎゅっと瞑った目。それでも数字が見えている。

元素の変動、世界の全て。その数値を理解する。

（今だっ！）

壁を突き破って一直線に伸びていく炎の柱。それが迫り来る高波を迎え撃つ。

僅かの狂いも許されない。沸騰した海水が人を襲うなら、それは唯の水より危険なことだ。水が人を襲う前に。俺はそれを全て空へと帰す。

「はあっ……………はっ……………」

終わった。緊張の糸が途切れて、俺はその場に倒れ込む。部屋は熱気に包まれていたが、ランスの守りでみんなは無事らしい。それにほっと息を吐く。だが、みんながみんなとは行かない。敵だと言えはそこまでだが、風に飛ばされ壁際まで打ち付けられたり……………炎に炙られ火傷を負った敵兵がいる。鎧に熱が通ったのだ。

それは俺が守りたくて、傷付けてしまったという事実。カーネフエル王が守る命にタロツク人は含まれない。だけど……………

「何故、守らなかった……………？」

「何故そんなことを我に問う？」

俺はトリオンファイを構え、タロツク王を睨んだ。身体の震えは恐怖じゃない。怒りに変わっていた。

「お前は風に愛されている。守れたはずだっ！お前の民をつ！」

「なるほど、其方は確かにカーネフエリアぞ。愚かな血を引いておる」

タロツク王はくくくと笑い、自らの得物を手に取ると……………苦痛に喘いでいる自らの民を、冷たく見下ろすのだ。

「幼き王、民とは何ぞ」

「民は財だ！王の宝だ！自分の命に代えても、守らなければならぬものだ！」

「愚かだな。民は財だ。だが数だ。取るに足りない。王の命令、王の気分一つで好きに使って良いものだ」

「っ……………！」

グシャ。何かの潰れる音。

タロツク王は剣を鞘に収めたまま。切れるはずのないそれで、役立たずと認識した兵士の頭を潰したのだ。

「解るか小さき王。王とは奪う者。其方らは奪わずに生きてきた。故に奪われる弱者になり下がった」

「違うっ！そんなのおかしい！」

「奪わぬと言うことは、奪われることを容認すること。今日のこのカーネフェルの弱体化は其方の綺麗事が生み出したことに他ならん」

そんな略奪者、侵略者の理屈、納得しろっというのがおかしい。

力が正義か？そんなの違う。こんなに間違っているのに、どうして誰もこの男にそれを言わないんだ？死ぬことが、そんなに恐ろしいか？生きながら、死んでいるのに。それが生きていけると言えるのか？

「……タロツク王、お前は間違っている」

視線を一度タロツク王からランスへ移す。それだけで彼は此方に駆け寄った。次に俺が何を命令するかを察し、僅かに心苦し気な顔になる。敵兵の治療など、そう思うのだろう。

「ランス、手を貸してくれ」

「……はい」

だが、彼は立派な騎士。命令ならば拒めない。回復数術を紡ごうとした彼に、違つと俺はその手を掴む。

「アルドール様？」

「俺は数術を理解した。そうだよ、難しい事じゃなかったんだ」

代替数術という存在がある。あの時間数術がそれだ。フローリップとコーカーに起こった数術変化。代償を払ったのは二人。だけど術を紡いだのは道化師だった。

「ランスは何時も通り数式を展開してくれ。それを俺が書き換える」

犠牲を払うのは、民じゃない。臣下じゃない。王だ。

俺の数術代償は命に関わらない。だから、やれる。

「これは……！？数式が……っ」

「大丈夫。ランスの命は減らない。代償は俺が払う」

頭を潰され即死した兵は助からないが、火傷や骨折程度ならまだ間に合う。

膨大な数式の代償。身体が急速に冷える。それでも触媒が無理矢理俺の身体を温める。その温度の変化に耐えながら、俺はタロツク王を睨み付けた。

「タロツク王、俺は戦いたくない。出来ることなら誰とも戦いたくない。だけど俺は王だ。俺の民が領土が侵されて、俺は黙ってられない。タロツクの民よ。俺は戦いたくない。出来ることなら戦いたくない。だけど俺は王だ。タロツク王に付くのなら、戦わなければならぬ」

イグニスに俺に言っていたこと。逆転への道しるべ。

だけど打算じゃない。俺は、彼らをこんな非道な王の下へと置いておきたくなかった。目の髪の色が違うだけで、戦う理由にはならないから。救うために傷付けたことを、見て見ぬ振りには出来な

った。

「だが、俺と……私の民になるのなら、私はあなた方を守ろう。この世の全ての者と物から守ろう。この国に、あなた方の居場所を作ろう」

「相変わらずの綺麗事と甘さだね、アルドール。ボクはそれは聞き飽きた」

「エルス……」

混血の少年は出来上がったばかりの死体に腰掛け、やれやれと息を吐く。

「世間知らずのカーネフェリアに良いこと教えてあげるよ。彼らはただ恐怖で須臾に従っていると思う？」

「どういうことだ？」

「兵役を拒めばそりゃ死刑だ。だけど受ければ……衣食住の保証が出来る。活躍すればするほど、本国に残した家族に優先的に食料物資が与えられる。タロツク人は生きるためには戦わなければならぬんだよ、どうしても」

「それくらい俺がやるよ！戦わなくなつて、ちゃんとその人達の口に入るなら、うちの農作物分けてやる！」

「それは出来ない。裏切れば、国にいる家族がどうなると思う？」

「……あ」

「親も子供も恋人も兄弟も親戚も、一族揃って皆殺し。見せしめにそりゃあ残酷に処刑される。その村に食料は与えず、代わりに処刑した人間の死体を食料として送る。普通は誰だつて、そんなの嫌だろ？後は舌がそれへの抵抗を無くした頃に供給を止め、兵糧攻めさ。そうなりゃ村は内から滅ぶ」

「なんで、そんな酷いこと……」

「酷い？面白いこと言うね。聞いた話じゃ、シャラット領だつて」

「あそこも同じように滅んだんだろ？前王の忠臣、あのセレスティン卿ユーカーの父親がそれをやってのけたと聞いたよ。結局お前らも何も変わらない。同類なんだ。綺麗事ばかり並べるなよ」

「え……？」

ユーカーから聞いた。シャラット領を攻め滅ぼしたのは父親だと。

「本当……なのか？」

それでも、その詳しい話を俺は聞いていない。動機は聞いた。だけど方法を、俺は知らされていなかった。

「……………あいつは、この国を憎んでいます。カーネフェルのために、ユーカーは……戦えない」

だから、先代のため。だから親友のため。そんな風にしかこの国を守れない。愛せない。誰かを通してじゃなければ戦う理由もない。彼は、許せないんだ。父親が、この国が。

「ああ、あそこはその前に食料と一緒に黒死病にかかった鼠を放り込んだんだっけ？かなりえげつない技だね。カーネフェル人だつて汚いこと卑怯なことは幾らでもするよね？お前達を信じるに値する物なんか、何も無い。そうだろう？」

エルスの囁きに、起き上がった兵士達が俺達を取り囲む。戦いたくないとほざいてすぐに、それを撤回するのかとエルスに言われ、機械的に彼らは動く。エルスは人を煽動する術に長けている。ルクリスと同じだ。それは、二人がこの世界をよく理解している。人の心を、その悪意を知り、正しく理解しているから。この世の地獄と彼女は例えた。違う場所、それでも同じ風景を、彼は知っている

のだろう。

(でも、俺は知らない)

その景色を多分、ユーカーの……あの青の瞳も知っているんだ。

「俺は……」

俺は何を言っていたんだろう。

エルスに嗤われるのが解る。ユーカーが俺を嫌うのが解る。俺は何も見えていないんだ。今ばかりを、明日ばかりを求める。その時俺は何もしていない。それでもそれは、俺の罪だ。カーネフェル王になるということは、そう言うことなのだから。

ユーカーに、戻ってきてくれという資格なんか無かった。それでも彼はトリシュを守った。帰ろうとしてくれた。それをランスが傷付けた。俺を守るために、傷付けた。俺がここにいる所為で。

ユーカーの親父さんと同じだ。彼は王への忠義のために、シャラット領を攻め滅ぼした。ランスは俺のために、ユーカーを傷付ける。ユーカーは家の道具になることを嫌ったのに、アスタロットさんと同じ。国の玩具に成り果てて、殺されてしまう、このままじゃ。カーネフェルにいれば必ず、ユーカーは……そうなってしまう。

そうなれば、トリシュはパルシヴァルは……ここにいる理由はあるのか？ユーカーがいるから、彼らとの結びつきが俺にも出来た。ユーカーがいないなら、俺は……俺には、ランスしか残らない。

「そんなことはありませんっ」

それは俺に発せられた言葉ではない。それでも俺の顔をぐいと上げさせる、そんな力を持っていた。

パルシヴァルはランスを睨み付けていた。いつも彼に脅えていた

彼が、真っ直ぐにランスを見上げている。

「君にあいつの何が解るっ!」

「解ります! 貴方が知らないこと!」

過ごした年月の違い。それが勝ち負けじゃない。

「貴方は彼を知っている。だけど貴方は彼を知らないっ! 僕も彼を知らない、だけど……僕は彼を知っているっ!」

人と人の関係に、勝ちとか負けという概念を持ち込む方がおかしいのだと彼の澄んだ青は言っているようだ。

「セレスさんが本当にカーネフェルがどうでも良いならっ! あの人は僕を助けなかった! 今日だって、トリシュさんを見捨てたはずだ!」

「それはあいつがお人好しなだけだ!」

「セレスさんは、見て見ない振りをしないっ! 見えないけど、見えているっ!」

パルシヴァルはその青い眼で、部屋中の人……一人一人を追っていく。尋ねていく。

「国って何ですか!? 民って何ですか!？」

その場にいる誰より幼い子供。最初に俺が話したときは、たどたどしい言葉使い。それが、小さな少年が……必死に考えカーネフェルとタロツクの、二人の王に負けずに人に訴えかける。

「目の前の、助けられる人を見捨てて……誰かの犠牲を勝手に肯

定してっ！無関係の大勢の人が助かるっ！見たこともないっ！会って話をしたこともないっ！そんな誰かの幸せを、願える人間がいるんですか！？」

「……っ、君に何が解るっ！騎士になったばかりの見習いが！人を斬ったことがあるか！？殺したこともないだろう！？人の未来を奪って希望を奪って、それで英雄扱いだ！それでも守らなければならぬものがある！自分を殺して、あいつを殺してでも、国を殺させるわけにはいかない！」

勝ち続けた騎士が泣く。勝てば勝つほど辛いのだと。

勝手な理想を押しつけられて、自分を殺していく毎日。自分が何処にもいなくなる。そんな自分に帰れる場所を、失った。もう一人も失いかけている。

「そんな自分勝手に国が、王が守れるものかっ！王を無くせば国が終わるっ！もっと大勢の人が……」

「大勢の人って誰ですか？名前は？年齢は？何をしている人ですか！？」

「それは……」

「あなたは負けたことがありますか？」

「俺は……」

「この国は負け続けた。王様もそう。セレスさんもだ。けどあなたはいつも正しい。そう思われていることが何よりおかしいです。勝つことが正しさではありません。負けたって正しいことは正しいんです！だから正しい人は、負け続けても……最後には、絶対に負けてはいけません！」

「俺は……」

「知らない誰かが貴方を崇め、讃えても、あなたは僕の憧れにはなれません」

驚いたって顔してる。あの日の俺とジャンヌみたいに。
打たれたパルシヴァルは打ち返さない。ランスは自分の行動に、
狼狽えている。こんなあからさまに間違ったこと、彼は自分が許せ
ない。

「あなたは立派な騎士じゃないっ！そんな風に、よく知りもしな
い人を大事に思える貴方はおかしいっ！傍にいる、見知った……大
事な人をあんな風に傷付けられる、貴方はおかしいっ！最低ですっ
！狂っているのは貴方だっ！」

しんと広間が静まり返る。こんな小さな少年が、大人達を言い負
かしたのだ。狂王でさえ、彼を愚かと呼ぶことはなかった。

（俺は……）

俺は、この少年に劣っている。彼の方が余程……この国の王だ。
その場に崩れるランスを支えたのは、俺も同じ気持ちになったか
ら。悔しいよね。悲しいよね。貴方は俺よりもっとずっと頑張って
生きてきたんだから。ある程度正しいことは、多少は間違っている。
ある程度間違っていることは、多少正しいことなのだ。

「俺だって……なれるものなら、あいつになりたかったっ……」

自分が欠けているのが解る。足りない物がある。
だから手を伸ばした。完璧な自分になりたい。自分の誇れる自分
になりたい。

誰かに讃えられるほど、この人は自分を見失っていったのだ。今、
何処にいるのか解らない。俺は誰だと自分自身に問い続けている。

（俺じゃ、駄目だ……）

彼を知らない。彼の過去をよくは知らない。支えてやれない。答えをあげられない。

助けて貰ってばかりなのに、唯の一度も俺が彼を支えることは出来ないのだ。

「……カーネフェル王と、その騎士共を処刑しろ。ただし、その少年だけ残せ。残りの順番は其方に任せるが、その前に仕事を一つ頼みたい」

タロツク王はパルシヴァルを指差して、兵に彼を取り押さえさせる。そして縛り上げてからエルスに託す。

「あの子に何をする気だっ！」

駆け寄ろうとした俺は、すぐに兵達に押さえ付けられてしまった。

「国に置く傀儡だ。幼い方が御しやすい。小雀、それをカーネフェリアとして都に送れ。双陸に教育を任せる。補助にレクスとおまけを連れて行け。そのおまけがいれば大人しくしているだろう」

パルシヴァルを託されたエルスは、主の考えを探るように自らの予想を述べる。

「つまり、この間の即位式は嘘っぱち。その本物も神子も、全部偽者だった。国民を騙した逆賊って事で良いんだね」

「無論」

「解った。それじゃあその間すっかり此奴ら監視しててよね！僕が殺す前に逃げられました」とか言ったら僕が須臾を殺してやるから」

「くそっ！」

触媒が手から離れた。けどそうは言っていられない。エルスが離れる前に、助け出さなければ。

「3つ数える内に俺から離れる。でなきゃ全員焼け死ぬぞ！」

目の前で見せた炎への恐怖。それを思い出した兵士達に動揺が走り、好きが生まれる。好機だ！

俺は手から離れたトリオンフィを拾い上げ、炎を纏わせる。タロツク王は片手で再び剣を取り、それを俺へと振り下ろす。

(怖くないっ！こんな奴っ！怖くないっ！)

俺と同じAじゃないか。勝機はある。

受け止められるっ！戦えるっ！俺が真正面からやり合って、殺せるかも知れない相手！殺さなければならぬ相手！それは、道化師だけじゃないっ！

力の差。体格の差。場数の差。負けているものは幾らでもある。だけど俺だって、勝っている物は一つくらいはあるだろう。年齢、身長、体重……それからええと。全部それってマイナスにもなる。だけどプラスにも出来る。負を正に変える。それを生かすためのやり方を考えるんだ！

「っあ……！」

俺の無茶な数術の連発。耐えきれなかつたんだ。元々トリオンフィは戦うための剣じゃない。唯の、装飾品。本物の……人殺しの剣には敵わない。

防いだ一撃。それが決定打になり、トリオンフィが砕け散る。こ

れはマイナス……？いいや、違っっ！

「ぐっ……っ、うあああああああああああああ
っ……っ！」

まだっ！まだだっ！この欠片全てが俺の触媒。身体を燃やせ。剣を燃やせっ！鉄をも溶かす炎に変われっ！

（ごめん、姉さん……）

だけど忘れない。俺に誇りを、ありがとう。剣が折れても無くなっても、無くならない物があると俺は信じるっ！信じたいつ！

咽から振り絞る咆吼。それが俺の触媒トリオンファイを解かし、狂王の得物をも解かす。高熱を纏った液体状の鉄。それを奴にぶつけてやった。

（終わるっ……）

こいつさえ殺せば、戦争なんか、終わるんだ。誰も戦わなくて良い。誰も殺されなくて良い。勿論風でダメージを軽減するだろう。それでもこの至近距離であれを浴びて、無傷なんて……そんなことはあり得ない。絶対に隙が生まれる。そこを俺の騎士達に叩いて……貫……

「……タロツク王家の二つ名を、其方は知らぬかカーネフェリア」
「そ、そんな……」

黒い煙の向こう。肉の焼ける匂い。想像も絶する激痛。それでも男は倒れない。

「毒の王家」。痛覚などつくに麻痺しておる」

手にはまだ高熱を帯びた液体がある。炎は俺を傷付けない。だが、あれは炎ではない。

「だが、其方はどうだ？」

「ひっ……！」

それを顔面に押しつけようと手が迫る。自分がしたこと。でもされるのが怖い。先走って口から悲鳴が漏れそうだ。

間近に迫る、人の肉が焼ける匂い。これは、二回目。いや……

(三、回目……?)

あの村で嗅いだ時はここまで近くじゃなかった。人を燃やしたんじゃないくて、燃やした家の中に人がいた。

今が1、カーネフェルに上陸した時の村で1……残りの一回？俺は何処で……

(でも俺は知ってる……気がする)

こんな風にすぐ傍で、誰かの肉の焼ける匂い。

「う、う……あああつ」

何か見えた。一瞬何かが見えた。だけどすぐに頭痛に襲われ蹲る。命令されている。俺は強いられている。思い出してはならないと。

「……………っ、……………っ！」

何か口から零れた。言葉だ。だけど聞こえなかった。俺の耳が利くことを拒否した。……俺の脳が俺を拒絶した。俺は俺の禁忌に触れかけた。

その事実にはっと我に返った俺は、目の前に迫り来る高熱の凶器に目を見開いた。もう避けられないっ！

目を瞑る間も与えられず、俺の身体は悲鳴をあげる仕度だけをはじめた。

悲鳴のカウントダウン。見えていたのに動けなかった。

決闘で、そして今日……ユーカーがトリシユを庇ったように、ランスが俺を庇ってくれていた。数術を紡ぐ時間が惜しいとその身を盾に狂王の前へと挑み出て、彼は腹を焼かれていたが、悲鳴を一つも発さずに……

「……ご無事ですか、アルドール様」

「ら、……ランス？」

立派な騎士以外言えない台詞を口にした。

俺はそれが悲しくなった。この人はとても立派だけれど、今のだつて俺のためじゃない。王を守ること。それが立派な騎士として刻み込まれた習性だ。

ユーカーは逃げた。王を守らず王に守られ生き延びた。それを責めた自分が同じ事は出来ないと、俺を庇ったのだ。騎士としてのプライドが。

「馬鹿……そんなこと、しなくていいんだ……そんなこと」

そんなこと、本当に貴方は望んでいない。それじゃあまるで人形じゃないか。

(違う……ちがうんだ、ランス)

俺は貴方を殺したいんじゃない。生きて欲しいんだ。その心臓を動かして、その唇で息をして。俺の命令じゃなくて。俺が王だからでもなくて。もっと我が儘に、傲慢に……人間らしくっ！

「ランス……痛いつて、言つて」

「命令ですか？」

「違うっ！」

「痛くないはず無いだろ！？痛いつて言えよっ！人間なんだろ！？」

「アルドール様……俺は……、私は騎士です」

同じ言葉を話しているのに、どうしてこんなに空回る？言いたいこと、言っているのに彼には何も届かない。

「騎士は、人間ではありません」

「人間だろ！？」

「……名譽に胡座をかいた、殺人鬼です」

「でも、人間だっ！生きて、今ここにいて、呼吸してるっ！なに人間じゃないなんて、どうして……」

「人殺しに痛いなんて言つていい権利はありません。殺すことは、殺されることです」

「それが、痛みが報いだつて言つのか！？守るために戦つて、その全部が罪だつていうのか！？」

「……だから我々は王を、光を求める。貴方に許されることを望む」

贖罪の証。そのために失えない。王を無くせば、彼の偉業は彼の中で本当に唯の人殺しに成り下がってしまう。だから俺を失えないと彼は言う。

俺が誰でも良い。俺がどんな人間でも構わない。俺という人間が本当に最低で救いようのない屑でも、彼は俺を光と呼ぶだろう。

「そんなの、間違ってる……」

「パルシヴァルの言う通り……俺は狂っていたのかもしれない」
「そんなっ……」

間近で香る、焼け焦げた肉の匂い。非日常の香りに目眩がした。

*

「おいおい、マジかよ」

レクスはこれで会うのが二度目の可愛子ちゃんに命令を下した男を呪った。

「こいつこんな状態で連れ出せるわけねえだろ」

まだ安静にしてなきゃ無理なところをまた腹かつさばかれたんだ。一度目は気を保ったセレスが今度は卒倒したんだ。よっぽど身体と心に負担が出ているのだ。しばらく安静にさせたい。

大体、日に二度もこんな重傷数術で塞いだら身体に負担が出る。一度だって怪しいもんだ。それに完治させたら暴れるのが解っている。暫く大人しくさせるため、わざと完治させずに治させた。俺も俺の主も此奴を壊したい訳じゃない。何とか絡め取りたいのだ。

「数術を使うから問題はないよ」

そう言う問題じゃねえんだよ。と、言ったところで数術使いに人間の心はわからねえ。人間を理解できるのは人間、数術使いを理解

できるのもまた数術使い。要するに別の種みたいなものなんだとレクスは頭を抱えた。

この子は狂王の味方というわけではないが、狂王派と言えば狂王派なのだ。いや、狂王がこの子派とも言ううのかもしれないが。

「それも困るんだって。普通に治療させなきゃ身体が保たねえ」

「誰も治してやるとは言っていない！ボクはそいつとこれを都に届けるって言われてるんだ」

二度も治してやる義理はないとエルスちゃんはすっかりご立腹。

怒った顔も可愛いが、俺の妹には似ていない。俺は僕っ子より俺女派なんだ。悪いな。

「やれやれ。呼びつけておいて今度は左遷か？双陸だっけ？俺あいつ苦手なんだよ」

「それはボクも同意しますけど」

「だろ？あー嫌だよ、俺ああいう真面目人間と相性悪いんだよ。俺何もして無くても反感持たれたりするし」

「それは貴方が何もしないから何じゃないですか？」

なるほど、エルスちゃんは適度に怒ると敬語になるのか。それじゃこれ以上文句も言えないか。

「この子、そいつに懐いてるんだって？だから丁度いい人質じゃないか。貴方が彼を逃がさなければ、この子も逃げられない」

「だってよセレス。どうすっか？」

どうせ寝ている。そう思いながらも聞くだけ聞いて見れば、大した奴だ。カッと目を開いて起き上がるうとしている。

「こいつに……何を」

「カーネフェル王にするんだって。こっち治めるのに駒は要るし、傀儡にするには幼い方が楽だしね」

「あー、寝てる寝てる。まだ無茶すんなセレス。そんなに激しい運動が好みなら回復してからいくらでも付き合っただけから」

軽口にツツコミすら入らない。こりやセレスもセレスでキレている。お前は子連れのか。確かにこの少年騎士は庇護欲を誘うような感じではあるが、お前の子でもなかるうに、そんなに可愛いかな。

(未練つてのは何もあの色男だけじゃないみたいだな)

ポエム騎士にこの少年騎士に、随分慕われてるじゃないか。流石俺の妹似の男。俺も鼻が高いぜ。

「……なあ、エルスちゃん。一つ取引しねえ？」

「何？」

「俺が須臾王の僕じゃないことは知ってるだろ？」

「勿論」

「ならエルスちゃんにとって有利な情報一つばかり教えてやる」

「……バレない保証はあるわけ？」

「そりゃあ勿論。俺のご主人様は人の裏を搔くのは誰よりも得意だ。狂王の目くらみ幾らでも」

「……聞いてから考える。それくらいの譲歩は？」

「俺がお願いしてる立場だから名、仕方ない。その方針でいいぜ」

「それで……情報っていうのは？」

「俺のご主人様は、タロツク王の縁者。そして彼は天九騎士の中の一人だ」

同僚達に仲良くなった奴でもいたんだろうな。俺のとおきおきの

爆弾に、みるみるエルスちゃんの顔が青ざめる。まったく可愛いもんだ。これじゃあこの子の人間不信に拍車が掛かるぜ。しかし俺の言葉攻めはこんなもんじゃない。

「エルスちゃんが須臾王を殺すのはいいけどな、タイミング間違えば大変だぜ？新しい王のイメーリアップに退治されかねない。元々エルスちゃんの評判は最悪だろ？王を更なる狂気に走らせた鬼つてな」

迫害されて、どんな辱めの中、殺されるんだろつな。そう囁いてやれば、それでもまだまだ強気に俺を睨み付けてくる不貞不貞しさは、いっそ可愛らしい。

「キングなんかにはボクが負けるか！」

「あんな、エルスちゃん。ジョーカーはちゃんと出るぜ、カード。俺見たし」

「な、何だつて!？」

「確かに手の甲には何も無い。しかし掌には鎌によく似た紋章が浮かぶ。逆さまのしって文字に似ているな」

「じゃあ……ボクは……」

信じられないと己の両手を見つめ、小柄な身体が膝を着く。その女のそのような艶やかな黒髪を撫でれば、小刻みな震えが伝う。

「良かったじゃないか。エルスちゃんは狂王を殺せる。だが狂王もカーネフェル王もエルスちゃんを殺す力はない」

「嘘だ！ボクはアルドールに手を焼かれたっ！」

「でも死ななかつただろ？生きてる内は負けじゃねえ。生き延びるって事は勝ったってことなんだ……って子供にはわかんねえか？」

「一方的に勝つてもつまらないんだよっ！そんなの唯の虐殺じゃ

ないか！」

「虐殺、好きだつて聞いたが？」

「ボクは面白く勝ちたいんだっ！計算通りだけじゃつまらないっ！全然面白くないっ！」

「……アクシデントが好きつて、エルスちゃん女王様面してエムいじゃねえか」

エムいMよりエスイMのが俺の好みだ。俺は口の端を釣り上げる。だが、生憎俺は人の良さそうな顔したSなもんで。容赦つてもんは時々敢えて行方不明。

「それとも、抵抗の手段もない逃げ道もない虐殺は……昔を思い出して嫌？」

「っ……」

顎に触れれば、震えが止まり、少年の身体が強張った。そうだな。俺なら殺せる。怖いだろう？そう瞳で囁けば、誰が怖いものかとまだまだ強気。元は平民だつて言うが、どうしてなかなか気位が高い。こりゃあセレスとも犬猿の仲な訳だ。そこそこ俺の好みだぜ。

「なあエルスちゃん、一人称ボクから俺に変えてみる気ねえ？それで俺を兄貴とかクソ兄貴とか呼んでくれたら最高だ。そしたらこつちサイドに迎え入れる特典とついでに妾にしてやるぜ？」

「興味ない」

「残念、振られちまったか」

こりゃ完全に怒らせたな。怒りが一定程度合い越えると今度は乱暴な口調になるつと。

「……エルス〓ザイン。俺からも取引だ。ペイジつて、知ってる

か？」

「おいおいセレス、あんま無茶するなよ。お前一人の身体じゃないんだ」

「気持ち悪いっ！俺一人の身体に決まっただらうがっ！いい加減にしるよてめえ……」

せつかく労りの言葉をかけてやったのに、セレスに三白眼を向けられた。あー、こつちも本気でキレてしまっている。ほんとお前らそっくりな。しかし、そんなセレスとあの堅物色男がべつたり仲良かったってんなら、案外エルスちゃんも双陸ってあの堅物同僚と気が合うんじゃない？警戒しとくか。

「ペイジ？」

「タロットの小アルカナの一枚。神子が言うにはカードの強さは10、5。普段はカードが消えている。強く願ったときだけカードが現れその強さは、11、5まで跳ね上がる」

へえ、そいつは初耳だ。やっぱセレスを傍に置いてて正解だった。俺が情報を流した分、流してくれる。なんだかんだでフェアな好きなんだな。いや、お人好しってことか。俺も大概だが。

「俺とガチでやり合えば、お前は負ける。だが、勝てる時もある」

「それじゃあ、どうしてボクにカードが出ない？」

「お前には、まだ明確な願いがないんだ。ペイジは……神子が言うには基本まだ無垢な子供にしか現れない」

「ボクに願いが、ない……だつて？」

「ペイジは特殊なカードだ。カードが現れていない間は幸福値は与えられてもカードじゃない。だから別にペイジを殺さなくても、このゲームは終わる。お前は俺達とは違って、生き延びられる可能

性がある。……これくらい話せば十分だろ？取引、受けるか？」

「……………」

「……足りないなら教えてやる。俺はお前を許さないが、あの馬鹿は馬鹿だ。あいつはお前を傷付けたことも、トラウマだ」

「アルドールが……ボクを？」

ぼかんとその言葉を受け入れかけたエルスちゃん。我に返って、憎しみの視線をセレスに向ける。そこに別の男を重ねて。

「ふざけるなっ！鬼のボクを人間風情が哀れむかっ！？ボクに何度屈辱を刻めば気が済むんだあの男はっ！ボクは……ボクは……」

「解るぜエルスちゃん。エルスちゃんは強い鬼だもんな。怖がられたいんだろ？恐怖されたいんだろ？」

「っ！ボクは貴方も嫌いだっ！」

一秒だってもう同じ空気を吸いたくない。ちょっと苛めすぎたか。潤んだ瞳で睨まれたが、やはり恐怖は感じない。

数術をいつの間にか紡いでいたのだろう？俺は元素の加護がないから解らなかつたが目の前の少年二人の身体が薄くなる。

「パー坊っ！」

「まだ起き上がるな馬鹿っ！」

「その呼び方止めて下さいって約束し……」

寝台から降りようとするセレスを押し留める内に、完全に二人の姿は消えた。今度は波駄目のセレスに睨まれた。

「お前っ、俺の言いたいこと解ってただろ！？」

「俺とお前をここに残してもらったのが交渉の限度だ。それに都の方が安全だ。双陸ってのは堅物で、お前を斬ったあの色男みた

いな感じのステレオタイプの忠臣だ」

「……そんな言葉っ」

「その王があの子の安全を保証した。ありゃ、殺せない人間の条件持つてるから大丈夫だろう」

狂王にもトラウマがある。だからそれに触れると殺せない対象が出てくる。

俺の主が言うにはまずそのタイプ1がエルスちゃん。殺した我が子を重ねた相手。

そしてもう一つ。それは金髪青目。そして……

「悲しいもんだよな」

「は？」

「俺は数術なんか使えねえが、あの王の死に様が目に見える」

「………どういうことだ？」

「狂気の淵には何があると思う？」

俺の投げた言葉に、首を捻って……その動作に今更痛みを思い出したのか腹の傷を押さえる仕草。

「そんなの、怒りとか憎しみとか……絶望じゃないのか？」

「これだから男を知らないガキは」

「俺が男を知ってたら大問題なんだが」

「愛だよ愛」

「………は？」

瞬く色違いの蒼と青。

「狂気の底には愛がある。それがなければ狂えない」

「そんなの、変だ」

「どうしてお前はそう思う?」

「それじゃ、どうして俺は狂えないんだ?」

「そりゃお前が尽くし系だからだ」

「は?」

「お前は愛されないことに慣れてる。だからお前は愛することに美徳を感じ、献身しちまうタイプだ。それで満足しちまうんだよお前は」

何故そんな知った風な口を聞く? そんな目で睨まれるが俺は視線で流す。

そんなの見てれば解る。これまでの他の同僚達とのやり取りを見ればそれは明らかだ。

「お前は俺と同じだ。既に一回、大事な物を亡くしている。それをちゃんと愛せなかった後悔がある。未練がある。だから新たに何かを愛せない」

俺と違うのはそこだ。俺ならその未練を二度と繰り返さない。だからこそ口説くのさ。

「セレス、例えばだ」

「例えば?」

「お前あの色男の兄ちゃんと、同じ女に惚れたらどうする?」

「それは……」

「無理だよな。お前はあの兄ちゃんを慕いすぎている。比較しちまう。自分が劣っていると思ってしまう。奪ってでも手に入れたいとは思わないだろうか?」

自分の欲はある。それでもそれを優先できないこの男に、狂気の才能はない。

「だからお前は狂えないんだ」

「意味が、わからない」

「それである兄ちゃん、その女を死なせたとしても……お前はあの男を怨まないだろ？」

自分より優れた男に守れなかったのだ。それじゃあ、仮にそれが自分だったとしてもそうなる。或いはもっと最悪の結末に。お前はそう思ってしまう。

「お前はさ、愛より大事なもんがある」

それも俺と同じだ。

「お前は許してしまう。許せてしまう。どんな理不尽も受け入れてしまえる才能がある。それくらい誰かに心酔できる力がある」

絶対の正当化。永遠の味方。そんな芸当出来る奴が、狂えるはずもない。

「違うっ！俺にだって……許せない奴はいるっ！」

「誰だそいつは？」

「……ロジアン＝セレスティン。……俺の親父だ」

「そうか……」

「レクス……？」

「俺がそいつを殺してやるよ。王の命令じゃない、俺の意思でお前のために」

「お前には関係ねえだろ！」

「関係あるな」

「ないっ！」

「そいつがお前が隻眼だった理由だろ？御貴族様はプライド高いからな、どどういう目にあつたのかは大体解る」

右目のそばにそつと触れれば、びくとその目が閉じられる。余程この眼がトラウマなのだろう。

「お前は仲間を殺さなくて良い。お前の同僚と俺が戦うことになったら俺の邪魔をしても良い。だが、俺から離れるな」

「でも、ま。元気になつた方だな。じゃ、俺らもそろそろ出掛けるか」

「……出掛ける？」

「俺の主は、まだタロツクに勝たせる気が無いんだよ。ていうかタロツクに負けて貰つても構わない。そんなわけで俺は仮の主の命令を遵守するため、これからお前と南部の都に旅立つってわけさ。別に都にどういう方法で行けとは言われてねえし問題ないな」

「はあ！？問題あるっ！こんな怪我で旅だつて！？馬車とか船とか揺れるじゃねえか！」

「なら俺に抱き付いてみるか？」

「揺れた方がマシだっ！」

「おいあんまり叫ぶとまた腹の傷切れ……」

ふらつと傾ぐ身体。流石に妹よりは重い。当たり前か。

「……言わんこつちやねえ」

妹にはいつも死の香りがあつた。死をそこにあるものとして感じているような遠い目。何のために生きているのか、何のために生まれたのか。

優しい子だった。獣の命まで、同じ数字に見えていた。食って生

きる意味を見出せない。それでも生きていることに彼女は罪を感じていた。

セレスはそこまで柔じゃねえが、本質的には同類だ。奪うことに罪を感じる、躊躇いがある。それは自身の幸福を願えないという致命的欠陥。誰かのためにしか生きられない人形。そんな姿がそっくりだ。

「……お前の言うことも解るんだ。確かに綺麗だよな」

奪う人間は美しい。理不尽と傲慢の中にありながら、絶対的な力で魅せる。お前は奪われることに至福を感じているんだろう、あの日の俺のように。

自分は絶対にそうはなれないから、だからこそ魅せられる。これまでの常識も概念も全て覆し、奪い、征服してくれる相手。

俺は彼に出会い、奪われて……初めて手に入れた。気付いたことがある。俺は、奪われるより奪う方が好きだ。奪ってみて初めて解る。気分が良い。凄く爽快な気分。

何かを手に入れること。何かを奪うこと。初めて自分の満たされない心が埋められていくようだ。躊躇わなくて良い。俺もあの人のように、あんな風になりたい。自分の心の欲望のままに生きてみたいと思った。

絶対に触れてはならない相手がいた。どんなに欲しくても求めてはならない相手だった。

それはとても狡かった。かつて同じような物を手に入れた奴らがあった。その癖俺にはそれを禁じる。物心ついたときから、俺にとつての世界はおかしかった。そのおかしな世界とそれを壊した奴がいた。

悲しみ、怒り。勿論あった。それでも何故か、視界が世界が開けていくような不思議な感覚さえあった。

それに触れる前に俺はそれを失った。それを悔いている。その渴

きを埋めようと、俺は水を求めている。咽が渴いた。水が欲しい。俺の聖杯は何処だ？

「お前が俺の、聖杯。俺の水……命の聖杯」

コートカードの癖にやたら不幸ばかり訪れるセレスに、業が深いなど俺は苦笑い。

カードでも補えないくらいに罪がお前の生まれにはあるんだろうさ。腹の包帯を取り替え手当もそこそこに、俺は旅支度を始めることにした。

*

馬鹿にするな。僕を馬鹿にするな。

恐れ敬え！恐れ戦け！僕は鬼だ！妖怪だっ！

(くそっ……)

エルスは何度目かもう思い出せない舌打ちをする。嫌なことを聞いた。とても不愉快な気分。

「双陸っ！」

「……エルス？」

南部にある都ローザクア。チェスター領からは大分離れていた。帰り道に生贄を補給しなければ。

「須臾から命令だって！この子をカーネフェル王として傀儡として育てる。貴方は摂関政治でもしてればいいよだって！」

「こんな幼い少年がカーネフェリアだったのか。お前の情報と大

分違うが」

僕が運ぶ際に数術で眠らせて、今ソファーに転がした少年に、同僚は目を瞬かせる。

「こいつは別人っ！アルドールの騎士の一人っ！まだ子供だからって須臾が甘さ出しただけ」

「そうか……」

「なに嬉しそうにしてるの？」

須臾の甘さに感涙、男泣きでも始めそうな双陸にエルスは数歩引き下がる。

「いや……須臾王は、やはり須臾王なのだと思うな」

「意味が分からない」

「本当は優しい方なのだよ……」

美しい思い出を紐解くように、僕と同僚はうっとり笑む。しかしすぐに我に返ったらしく、顔を赤らめた。

「俺は呪術師殿を相手に何を言っているんだろうな。忘れてくれ」
「ふーん……」

レクスとの一件でテンションが落ちた。からかう気も起きず、僕は聞きたいことだけ口にする。

「ねえ、第一騎士レクスって男と何度か顔を合わせている？ボクは北に行って初めて会ったけど」

「あの軟派な男か。カーネフェルに赴く前に何度か会話をしたくらいだが」

「いつからいた？」

「一月……いや、そろそろ二ヶ月経つかもしれん」

「本当に最近だね。ボクが船の手配で国をあけていた時期と重なる。……他に、最近メンバー代わったのってある？レーヴェの身元は僕が保証するからそれ以外で」

「何かあったか？」

「あいつ、裏切り者だよ。ボク以上に」

僕の言葉。真っ直ぐに僕を見る赤。あいつよりは明るい赤。僕よりずっと深い赤。手を伸ばしても届かないその深み。複雑な気持ちで僕はそれを見つめ返す。

「本人が言ってた。王の血を引くものに仕えてるって」

「王の血？」

「死んだはずの王子のどっちか」

「恒河様と那由多様はどちらもお亡くなりのはずだ」

「だといいんだけどね。生きてたら危ないよ。そいつ、須臾を殺して玉座を奪う気。おまけにレクスはキング。まず、太刀打ち出来ない。……おまけに奴が言うには、天九騎士の一人にそいつの主が隠れてるって話」

「本物を殺し成り代わっていると言うことか？」

「それは解らない。だけど貴方が須臾を守りたいなら………注意すべきだ」

「………そうか、礼を言う」

不意に頭を撫でられて、僕は訳が分からなくなって………視線を迷わせる。

「………双陸。ボクの言ったこと、まさか信じるわけ？」

「短い付き合いだが、………確かにお前は残酷だ。しかしお前は」

つもとゲのように鋭く真っ直ぐな言葉を紡ぐ。嘘は言わない」

視界が揺らぐ。

言うつもりはなかった。これからずっとこの男を馬鹿にしてせせら笑うために黙っておくつもりだった。だけどそんなこと言われたら僕は……もう……

(僕は貴方を、信じたい……)

貴方とレーヴェは違う。王の血縁なんかじゃない。こうしてもたれ掛かっても、僕を殺さないと、信じさせて欲しい。

だって、貴方も鬼なんでしょう？それなら僕を、受け留めて。恐れないならせめて、あいつらみたいに僕に親しんで。僕の宴会に貴方も交せてあげる。桜がとっても綺麗なんだ。

「エルス……？」

「双陸っ……ボクは……二つの墓の数値を図ったことがある」

抱き付いた途端、とても落ち着いた。涙を見られなくなかったからそうしただけ、そのはずなのに。

「どっちの王子の墓の下にも死体はないっ！だから気をつけろっ」

僕が貴方を恐れるから、信仰するから、ずっと……鬼でいてよなんて。とても言えない。そんな僕に貴方は、言った。既に自分も鬼であるのだと。

「……須臾もそれは知ってる。時々命令を記した文が届くんだ。死んだはずの王子の名を騙った奴から。須臾は面白がって、そのの

通りに動いてる。いつかそいつが自分を殺しに来るのを待っているんだ」

「……………それではその名は」

「……………“那由多”。須臾が狂った原因だって王子の名前」

須臾が呼ぶんだ。僕のこと……………たまに那由多って。まだ忘れられないんだろう。馬鹿な男。

その未練に手紙は上手いところを突いてきたのだ。

「勿論本人からかどうかはわからない。むしろそっちの方があり得ないと思う」

「確かに。那由多様の処刑は確かにあった。死体が盗まれたという事実もあるが、その死は確認されている。……………レクスか。虚言を吹聴しているのならばそれは王子への冒涇でもある」

だが、どちらにせよ注意は必要だなと僕の同僚は頷いた。

「エルス……………いや、エルス殿。今回の行動には感謝する」

「気持ち悪いからエルスでいい」

「……………そうか？ならエルス、感謝している。だが何故ここまで俺に教えてくれたのだ？」

「……………貴方は自分を鬼だと言った。僕は鬼だ。鬼は鬼を食わない。襲わない。だから教えた。それだけ」

「そうか」

嘘だ。解っているんだろ貴方も。

「なんで、突き飛ばさないの」

「さりたいのか？」

黙って僕のなすがまま。迷った末髪と背に触れる掌。それに疑問を唱えると疑問で返された。

寡黙で不器用な男は、こうしていることについての理由を話したりしない。自分自身も何かに飢えているのだと、僕に語ることもない。僕も自分の話なんか出来ない。だから、他の何かを欲しがるんだ。こんな風に。

飢えている。お腹が減って死にそう。そんな気持ちはよく知っている。あの山で、何度もそれを体験した。

どうして僕は此奴と一緒にいるときに、あの飢餓を思い出すのだろうか？この男も鬼だから？レーヴェはまだ鬼じゃないから？だからこんな気持ちにならないの？

お腹が減った。もつと満たされたい。よく分からない何か欲しい。宴会でもする？だけど今は桜がない。違う宴会はこの男の好むところではないだろう。僕とこいつの宴会は、どんな物？真面目なこの男は僕に飲酒を許さないだろう。僕は鬼なのに。

(お腹、減ったなあ……)

じつと視線を上げる。赤い眼とかち合った。その刹那、何か聞こえた。密着していたからこそ、大きく聞こえた。

それは虫の羽音。何の虫かという……腹に住んでいる。

「双陸、格好悪い」

「……………お、鬼とて腹は減るものだ」

視線を逸らすその男。机の上には大量の書類。馬鹿。仕事優先で食事睡眠をしっかりと取っていないんだろう。我に返れば目の下の隈が酷い。今まで僕はこの男を何らかのフィルターを通して見ていたらしい。

「食べたい物ある？こつ見えても料理は得意だよ」

「作れるのか？」

「僕も僕で苦労してたんだってば。須臾のところに来るの毒入り料理ばつかだろ？」

「……ああ」

「僕は三大欲求は素晴らしい物だと思う。特に食は神聖な物だ。その食事という行為を汚すことは許せない」

だから僕は食事での毒殺は行わない。それから兵糧攻めも絶対に行わない。食べられないのは本当に辛いことだから。

「僕が須臾を殺すまで、須臾には健康に生きて貰っていないと意味がないんだよ。弱った男殺しても、僕に箔は付かないから」

「……つまりなんだ。お前は須臾様に手料理を振る舞っていたと？それも我が君を哀れんで？」

「なんだよ。何笑ってるんだよ」

「面白いな、お前は」

「は？……僕が面白い、だって？」

「我が君がカーネフェルまで攻め込む気力を取り戻したのは……確かにお前のお陰なのかもしれんな」

僕が並べた食事達。それに双陸が微苦笑。

「王は幼少より毒を食らい続ける。こんな温かな食事を毎食用意されてみる。王がお前を寵愛するのも致し方ない」

「どういうこと？」

「これほど美味しい食事を口にしたのは俺も、何年ぶりが解らないレーヴェより回りくどい。そういう褒め言葉。

なのに、どうしてだろう。じわじわと心に迫るんじゃない。耳か

ら入った途端、僕の中で強く大きく響く。

「そっか……」

よく分からないけど僕は、やっとこの男に借りが返せたような気がして力が抜けた。それを見た男は、カーネフェル風の部屋の一角に作った座敷スペースに僕を手招く。

「お前も空腹なら、此方に来い。一人の食事は味気ない」

「……宴会、宴つてこと？」

「ふむ、鬼は食事を宴と呼ぶのか。覚えておこう」

だし巻き卵と炊きたての白米。レーヴェの所に漬けて置いた沢庵を少し転送。麩と豆腐と大根の味噌汁。焼き魚、煮魚。煮物と夏野菜の天麩羅。

宴と呼ぶにはささやかだ。それでも食欲をそそる匂い。僕が作ったんだもんだ。言われるままに僕も座敷に上がり込む。

「では、日に三度もお前達は宴をしていたのか」

「うん、山ではいつもそう。朝から晩までどんちゃん騒ぎ、本当に楽しかった……」

「精霊つて知ってる？カーネフェルでは妖怪のことをそう言うんだ」

「聞いたことはある」

「でも、本当は別の物なんだ」

「別の物？」

シャトランジアから始まる聖教会の信仰は歴史が長い。だから多くの人が知っている。認識されているから概念として消えることは

ない。だから精霊は滅びない。

同じく元素の塊でありながら、妖怪は違う。

「タロツクは宗教という物の歴史が浅い。王への恐怖信仰が強すぎて、霞んでしまっただ。だから妖怪には滅びがある」

「滅ぶとどうなる」

「また元素に戻る。意識とか個性とか、記憶とか……存在がなくなる。僕の仲間はそのような風に、殺された。僕一人の信仰じゃ助けられなかった」

「ご飯が美味しい。なのに不味くなるような話……だと相手は言わない。あれがどう美味いだの、これはどう出汁が効いているだの実況を交えつつ僕の話の話を聞いている。僕と僕の料理、どちらも蔑ろにはしないでいてくれた。」

絶対にこいつには話せないと思っていた。そんな言葉が勝手に口から溢れ出す。奇妙な感覚。それは此奴も鬼だから？そういう怪異なのかこの男は？

「僕が立派な鬼になって、信仰を集めれば……またあの山に妖怪は生まれる。僕はそんな怪異と共にありたいだけなんだ」

「エルス、あの方も鬼にしては貰えないか？」

「え？須臾？」

「あの方が鬼ならば、お前の願いも容易く叶う」

「でも、一国の王を鬼だなんて噂、物語を語るなんて風評被害も良いところだよ」

「今更我が君の評判がこれ以上下がるとは思えない」

「……意外と言っただね貴方って」

「いや、俺は唯……あまりにもこれが美味しいので、あの方がここにおいて、食べていただけたならと思っただけだ」

「ああ、そういうこと」

自分ばかりがこんな料理を食べていて良いのかと、まったくこの忠臣は。

「いいよ、そういうことなら、須臾も鬼にしてあげる」

向こうに戻ったら、須臾にも同じ物を作ってあげよう、久々に。レーヴェだけだと思ってた。

(だけど……喜んでくれるんだ)

不思議な気分。見知らぬ感覚。温かい日溜まりの温度。すぐに冷える血だまりのそれとは違う。いつまでもぽかぽかと……僕を妙な気持ちにさせるのだ。

「そつちのガキが一番最後だよ。本当に王はあの鬼に甘い」

俺達を牢へと押し込め、兵士は笑う。

その瞬間から、次に発せられるであろう言葉を予期し、ランスは二人をなるべく牢の奥へと送る。

「それで？どつちから処刑されたいんだ？」

もつとも扉の傍にいた自分がそれに応じれば、当然トリシュとアルドール様からは非難の声が上がる。

「ランス、俺が行く！」

「駄目です。貴方が死ねばカーネフェルも死んでしまう」

「でも、それでいいのか！？だって、ランス……ユーカーと何も話してないじゃないか！」

そのまま死ねば、苦しむのは誰？すぐ死ぬ俺はそれから解放されるけど、残されたあの子はどうなるのだと青い瞳が俺を責める。それでも……俺は何か？俺は騎士だ。

「貴方を守るのが俺の役割です」

私情を殺す。王を守るためなら。

それ以外の騎士としての生き方を、俺は終ぞ知らなかったのだ。

「考え直してください。君に何かあれば……悲しむ人がいる」

それなら自分が先に行く。その方がきつとあの人も悲しまないとトリシユが立ち上がるが、俺は視線でそれを制した。

「……トリシユ、後のことは頼んだ」

「ランス！？何を馬鹿なことをっ……こ、ここは私が」

「トリシユ。俺が頼んだのはアルドール様のことだけじゃない」

こう言えば彼は思い出す。彼は俺とは違う。王のためだけに生きているわけではない。

内心複雑な思いがあるのは確かだが、それでも彼もまた立派な騎士だ。そして優しい人間だ。その優しさはあいつを支えてくれることだろう。

「ランス……君は……」

「あいつのことを頼む」

こう言えば彼はもう、俺には言い返せない。それを知って俺はそれを口にしたのだ。私情を封じて。

俺はあの子を傷付けてばかりだった。だが、彼ならば違う。そう思うのも確かだから。

走馬燈のように過去の思い出が脳裏を過ぎり、苦笑してしまう。

それは当然のように彼から始まり彼で終わる。それ以前のことなんか、こういう時には思い出さない。こうして見ると、本当に俺は狭い世界を生きていたんだな。

(ごめんなさい、母さん)

俺がここに来ようと領地を飛び出したのは、貴女のためだったはずなのに。湖に眠る貴女を迎えに来たはずだったのに。

(貴女のことを、忘れてしまいました……)

それは今から始まることでもない。いつだって忘れていた。俺を笑わせてくれる人がいた。

ユーカーともう一人。今はいない人。俺が悲しむことを忘れたのはあの二人の所為だ。だから俺はこんな時でも悲しめなくて、微笑まで浮かべられる。

「アルドール様にも、お願いします。あいつは暫く抜け殻になるでしょうから」

俺がそう言えばアルドール様も動けない。責任を押しつけることで生に執着させる。俺をここで死なせれば、この人はせめてユーカーは助けようとしてくれる。

「……そこまで解ってて、行くのか？」

神子様みたいだ。全てを見透かすような透き通る青。いや、むしろ……アルト様に重なって、俺は咎められた錯覚を知る。

(いや……)

あの方はもういない。これから会いに行く。

「はい」

俺が突破口を作る。俺は数術使いだ、トリシユよりもカードは上位。元素の加護は厚い部類に入る。幸福値全て投げ出す命懸けの数術ならば、必ずやアルドール様を救う事が出来るだろう。

別れ際、俺は仕える人に手を伸ばす。

「アルドール様……これを」

「……これって」

俺が渡すは養母さんからもらった触媒。触媒剣が壊れてしまったアルドール様にはこれから必要なものだろう。

数術への理解がない兵士は、それを形見か何かだと思って特に咎める様子もない。どうせ全員死ぬんだとでも思っているのか。それとも単にカーネフェル語がわからないのか。

「おら！さっさと歩け！」

確かに罵声はタロック語。なるほど後者というわけか。連れ出された俺もタロック語で聞いてみる。

「何処へ連れて行くんだ？」

「処刑は明日の正午。太陽が天高く昇る頃。それまでお前は独房送りだ」と

エルス・ザインの言っていた風に拷問でもされるのだろう。手だけでも指は10本あるしなるほど昼まで十分保つだろう。

*

「落ち着いてください、アルドール様」

「だって、ランスを助けに行かないと！死ぬ気だ！」

「触媒を無くされて、そんな身体で数術など無理です」

「トリシュだってやったじゃないか」

「だから言っているのです」

まだ身体が怠い。毒が完全には抜けきっていない。そこに数術の負荷が掛かる。脳へのダメージは深刻だ。こんなことを触媒も無しで行っていた友人を、トリシユは心底恐れ見る。

こんなことを普通の人間がやってのけたらどうなるか。身をもつて思い知った。だからこそここは主を止めなければならない。命令を守るだけが忠義ではないのだ。

「ここから抜け出す手が、それ以外にも一つあります」

「それまでランスが無事な保証はあるのか？」

「……少なくとも、死んではいけないと思います」

考え得る限りの正解に近い答え。しかしそれで王は満足しなかった。解っている。だが保証もないのに絶対に大丈夫ですなどと、僕には言えなかった。

「……解りました。どうしてもその気ならばご自由になさってください。正し、その場合は私も焼け死にますが気にしないでください」

僕は炎の属性のカードではない。ハートはクラブの天敵の水だ。ハートの上位カードならば炎など打ち消すことができるだろうが、僕は元素に愛された上位カードでもない。幸運に守られたコートカードでもない。中途半端な数値のカード。アルドール様の全力の炎には打ち勝てない。

城事燃やしてここからの脱出を図るというのなら、その過程で僕は命を落とすだろう。それは最弱のカードのアルドール様だって非常に怪しい。

今僕に言えることは、自分の命を人質に主の考えを押し留めるとだった。僕の命など紙切れ一枚……そう思われたなら成立しない賭けだったが。

「……………ごめん、トリシユ」

アルドール様は熱を沈め、僕へと詫びる。自信がないわけではなかったが、それでも不安がなかったと言ったら嘘になる。その言葉に僕が安堵したのは事実。

「いいえ……………」

僕が仕えた人はやはり、それに足る人物だ。まだ幼く思慮浅く……感情を持って余した王だが、いずれは立派な王になるだろう。それを僕らが支えていかなければならない。

「アルドール様、ランスを助けましょう。貴方にはまだ、あの男が必要です。そしてこの国にも」

「……………ああ。それで、もう一つの方法って言うのは……………？」

強く頷き見つめ返すは深い青。たかだか一枚のカード。国からすれば大したことはない端数。そんな僕や彼を大切に思ってくれるこの人は、守るに値する人だ。

「エルスというあの混血も、タロツク王も、処刑をひっそりとする輩には見えません。必ずや我々にそれを見せることでしょう」

おそらく早朝辺りからあの男は吊されるか磔にでもされるだろう。そしてそれを民に見せつけた後に、殺すはず。

唯、その誤算は……………ランスが北部での知名度があまり無いと言う

こと。父親がいろんな方面にはつちやけた方であるため、むしろ北部では尾鱗の付いた根も葉もない噂話が広まっている節さえある。それをあの人は快く思わず、親友を褒め讃えるものだから……今度はその噂に妙な信憑性まで出てくるという悪循環。多分殺されたところで北部の民にダメージは無い。僕のイズー……、いや……、ユーカーでも引つ張ってきた方が余程北部の民には衝撃的だ。荒れ事ばかりを引き受けた結果が、海賊避け、山賊避けの異名。彼は北部では半ば英雄扱いされているから。

「処刑の場に連れ出された時、それが最初で最後の好機。アルドル様はそれまで横になって少しでも体力を温存させていてください」

そつだ。せめて彼がいてくれたら。北部での彼の高い知名度があれば、一緒に戦ってくれる兵は多い。この状況だって、数に物を言わせて打開することも。

(いや、無い物ねだりは出来ない)

それに僕は安堵している。彼の安全が保証されているからこそ、僕はここまで無謀になれるのだ。

その安心感とは裏腹に、身震いするような肌寒さ。夏とはいえ今日の夜風は冷たい。海からの風がここまで届いているのだろう。

身体を休めた主へと上着をかけてやりながら、牢のむかいから見える、鉄格子の先の月を僕はしばらく眺めていた。

雲はすっかりと晴れて……今は月が綺麗だ。星が見えなくなる程に。

*

馬を走らせて暫く。チエスター領を抜け、隣の領地に差し掛かった頃だろうか？レクスを抱える荷物が動き出したのは。

「起きたか？」

「これだけ揺れりゃ、嫌でも起きる。ていうか吐きそつ」

青白い顔でセレスが呻く。このままじゃ本当に俺の鎧か馬へと吐きそつだ。

「次の水場まで待てないか？」

「……頑張ってみる」

「この辺の水場は解るか？」

「ああ、この向こうだ」

余程気分が悪いのだろう。水場に誘うセレスは妙にしおらしい。思えば俺の妹もそうだった。風邪なんか引くと気弱になってそれがまた可愛くて。こんなところまで似ているとは、そう思うと胸が熱いもので満たされる。

その刹那、凄いい勢いで此方に向かってくる影があることにレクスは気付く。

「あれは……」

暗い毛色の暴れ馬。あれには見覚えがある。確かセレスが聖十字を逃がしたときの馬。水場に向かうと思われた、セレスをその馬が背に乗せる。

「主人を迎えに来るとは大した奴だ」

「そんなんじや、ねえよ」

平然と答えるセレスは別に酔ってなどいないように見える。あれは演技か。思い出補正の妹フィルターが掛かっていた俺の失態。この男、なかなか侮れん。

「ぶつちゃけこの馬鹿馬は俺よりランスに懐いてる。だから来たんだ」

そしてその馬の背には、他にも小さな影がある。金の巻き毛を結った少女。それがここまでこの馬を連れてきたのか。

「ジャンヌさんから伝言です。恩を仇で返すのは私の正義に反しますので、恩には倍の恩をもって……だそうですわ、お義兄様」

「……あの女からか。聖十字と繋がりがあってやっばお前神子の回しもんだつたんだな」

「悪いなレクス、俺は聖人君子でも善人でもねえから恩は仇で返させて貰うぜ。……一応おまけで礼程度の情報はくれてやったんだ。大目に見ろ」

「あの子が心配じゃないのか？」

「心配でもあんなガキでも……あいつも騎士なんだよ。もう、俺に守られる者じゃなくて……誰かを守る者になっちまったんだ。心配するってのはそんなあいつの名誉を汚すことだ」

なら信じてやる。それが騎士つてもんだとセレスが笑う。その微笑に悔しいが、こいつは敵対している時の方が二倍は魅力的に見える男なのかもなと思った。

流石は貴族か。どうにも俺や妹とは違う生き方、考え方があるらしい。それを下らないと呆れることが出来ないのは、そんな下らないことにこの男が命を賭けているからだ。

俺はキング。無事で逃げられるとは思っていないだろう。この言葉の応酬も本当は惜しいはず。不意打ちで逃げれば良かった。

「だから行くのか？あの色男は騎士ではないのか？」
「ああ。今のあいつは騎士でもなんでもねえ。唯の屑だ。だが腐れ縁でも俺の友人だ」

それをしないのはこの男が、俺との戦いを剣ではなく言葉で挑んでいる証拠。心で俺を打ち負かさなければ、この場を無事に逃げられないと知っているのだ。

確かにそのひねくれながらも真っ直ぐな言葉は、俺の胸へと届いてはいる。

「どうせまた下らないこと悩んで下らないこと言ってるに決まってる！ふざけた寝言を言った俺をあいつは殴った。今度は俺が殴つてやる番だ。友人が凹んでる時に罵つてやらねえのは友人失格つて奴だ」

「そこは励ますだろ普通」

「俺の励ましは基本的に罵りなんだよ！」

「確かにらしいな」

セレスは座した荷物に視線を送らず、声だけ投げる。

「……偽エレイン、ここまで他の奴らは何分で着く？」

「あと5分もすれば来ますわ。お義兄様はこの領地では人気者ですもの」

早すぎるような気もするが、はったりだろうか？……なら、5分待つてやるのも悪くない。待てば答えが出るのだ。

「つまりだレクス。俺がお前相手に5分持ちこたえればお前の負けだ」

「増援か。女ばかりのカーネフェル人が来たところで俺は情け容赦はかけないぞ?」

「お前どこまで男好きなんだよ」

「生涯愛する女は妹だけと決めてたんだよ。ここで女に走ったら妹に悪いだろ?」

「……はあ、奇遇だな。そう言う気持ちだけなら解るぜ」

荷物から渡された剣を手に、セレスが笑う。本当に、敵対している時のこの生き生きした顔が堪らない。

「だからこそ、お前は勝てない。それでもやるかレクス?」

情報は与えた。後は時間が解決してくれる。しばらくはのらりくらりとつかず離れずも悪くないかもしれない。勿論ここで俺を打ち負かすか言い負かすかしたらの話だが。

「……本気で来い。うっかり俺にお前を殺させるなよ?」

*

俺の元婚約者、アスタロット。その妹であるエレイン・シヤラットはランスに心底惚れている。その理由は確か、逆賊の生き残りとして俺の親父が彼女まで殺そうとした時だった話。

あいつは騎士の鏡らしく、当然それを庇った。ランスに甘い俺の親父は、エレインを殺すに殺せず放置した。そこで政略結婚として送られてきていたランスの婚約者である彼女はランスに完全に落ちた。

釣った魚に餌はやらないあの天然鬼畜男は、惚れられたのを疎ましがっている節さえあり、年の離れた幼い子供を女として意識できるほど変態でもなかった。

俺は自分とアスタロットのことがあったから、その妹であるエレ

インには幸せになつて欲しいと思ひ度々ランスにその辺を突つ込んでいたが、あいつはその度素つ気ない。かといって他に気になる女がいるようでもない。それなら尚更俺は義妹を応援してやりたいのだが、あんまり言うとな俺が怒られる。エレイン自身もランスが自分に振り向かないのは俺の所為だとまで言い出して、領地に顔を出さず度にいびられたのも良い思ひ出……ではないな、あんまり。おのれランス。何で俺がとばっちりを受けるんだ。これだから顔のいい男は嫌いだ。

ランス自身が乗り気じゃないので俺もそれ以上は言えないが、エレインの一途さは俺もよく知っていた。何かと気にかけていたのはその所為だ。

もし、彼女が死んでしまつて。その時あの日の俺のような後悔を、ランスが絶対にしないという保証はない。あれだけ想われていて何とも想わないようならあいつは本当に人間の屑だ。俺はそう思いたくなくて、あいつが悲しむこと前提に考えていた。変な話だよな。俺のためにあいつが泣いてくれることも想像できないのに、俺はあいつが彼女のためなら泣いてくれるはずだと決めつけていた。

そして、エレインは死んだ。

俺は知っていた。知っていて黙っていた。ついこの間、北部に来た時。この女が死んだことを知つたのだ。

*

「おい！どういうことだよおっさん！」

俺が領地入りしても、物騒なご挨拶をしてくる義妹がいない。寝床に画鋏も刺さっていない。これはいよいよ様子がおかしいと、俺は領主に詰め寄つた。

「いや、セレス君……これには深いわけがあるんだ」

図らずも、ランスの母親が自殺した湖に……彼女は身を投げたのだと言う。それがヴァンウィックがランスの母親に味会わせた寂しさと同じだったなら、俺はランスの野郎を一発殴らなければならぬ。お前も最低だつて言つてやらなきゃならなかった。だが……

「いや、彼女があまりに寂しそうだったんでね。おじさんにはあんまり罪はないと思うんだ」

「食つたのか？」

「いや、慰め……」

「あんた最低だつ！女と見れば見境無しかつ！？」

俺が殴つたのはランスじゃなくて、その父親だった。

「あいつはまだ子供だぞ！？」

普通に手を繋いだり、キスしたり、デートとか……そういうのに夢膨らませてるような年頃だろ！？

それを子供だとか、子供特有の恋愛感情だ、どうせ本気じゃない。すぐに心変わりするとかあいつは言うけれど、俺は見守つてやりたいと思つてた。仮に五、六年も続けば立派なもんだ。年の差だつてその頃にはあまり問題なくなる。

今は子供でも良いじゃないか。エレインはまだ二桁になったばかりのような年齢の子供だ。恋とか愛とかそういうものにもっと夢を見たい年頃だ。それにいきなり汚れた欲望塗れの現実を教えるてどうする！？残酷過ぎるだろうが！

それをこの男は汚したのだ。そんな淡い恋心を粉碎する行為が俺は許せない。身体だけじゃない。この男はあの少女の心まで汚れた心で凌辱したのだ。

「あいつは本気であの馬鹿に惚れてたんだ!? 他の男に無理矢理そんなことされれば自殺くらいするっ! あんたそんなこともわからないのかよ!? 彼女はあいつを幸せにしてやってくれたかもしれな
い人だったのにつ!」

泣きながら俺は殴った。甘んじてあの好色中年も殴られていた。
だが、この男は何も解っていない。俺とは見ている世界が違う。
その非を認めても、それが悪いことだとは思っていない。俺はそれが嫌だった。そんな男の子であるあいつも、人の心など解るはずがないとその目に言われているようである。

「うちの馬鹿息子は別に悲しまないよ。君とは違って。むしろ喜ぶぞ」

「そんなはずねえだろっ!？」
「いいや、間違いなく喜ぶね。ああ、良かった。これでまた剣の道に生きる覚悟を固めることが出来る」って

「っ……、ランスはそこまで最低じゃない」
そうは言ってみたものの、心の中で否定が出来ない。

俺はあいつの口からそんな言葉を聞きたくない。もし笑顔でそんなことを言われたら、俺は理想と現実のギャップに耐えられなくなる。俺の憧れがそんなことを言い出したら、俺は発狂寸前まで心が追い詰められるだろう。だから言えなかった。

ランスを守るためじゃない。弱い自分を守るために、彼女の死を言葉に出来なかった。

それとなく会話に彼女のことを織り交ぜて、様子を窺ってはいたが……本当にあいつは彼女に素っ気ない。まだ俺への言葉の方が温かみがある。

それでも北部に赴くと、彼女が俺達を迎えてくれた。あれは悪い

夢だったんじゃないか、あの腐れ中年の寝言だったのだと胸をなで下ろしたかった。

でも、耳鳴りがするんだよ。ほんの少しだけどな、この女に近づくと。

真実を知っているはずのランスの養母も何も言わなかった。俺と同じ気持ちなのか。或いはあいつが昔のように優しく、未だにどうでもいい女の死に悲しめるような優男だとも思っているのかはわからない。

パルシヴァルに稽古を付けている時間の休み時間だったか。茶の仕度をしているとあの男と出会った。エレインの件を問い詰めればあいつはそれには真つ正面から答えない。答えられない理由があるとなると、どうせ神子……シャトランジア側の国家機密に絡んでいるのだろう。だからあの男は別のことを口にした。

「うちの馬鹿息子は君が思っている以上に君が大好きなんだよセス君」

「……は？」

「私はそれを微笑ましく思いながら、危惧を抱いているのもまた確か」

「変な言い方するなよ。はつきり言え」

「このままじゃあの馬鹿は、今以上に君への負担になる。君はやがてそれに耐えきれなくなるだろう。そうなれば次に湖に飛び込むのは君になる」

「意味がわかんねえんだが」

「あの方が亡くなられた。なら……あいつが頼る相手は君しかない。忠告はしたがアルドール様ではおそらく駄目だろう」

俺には見えないものを見るように、中年男は虚空を見つめる。

「確かに人はそういう愛など知らずとも生きてはいける。あの馬鹿息子には君がいる。それに勝るとも劣らぬ宝をうちの馬鹿息子は手に入れている」

それは別物でありながら、代替できるものだと言つ。人生における楽しみであり喜びであり幸福の形の一つではあるのだと。

「だが、それを手に入れるのが早すぎたんだよ」

「早すぎた？」

「ああ。そういうものは長い年月苦楽を共にしてようやく手に入る絆だ。だかセレス君と馬鹿息子はあっさりそれを手に入れてしまった。それはあまり喜ばしいことではない」

「いや、普通に友人の一人くらいガキだつて作るだろ」

社会的とは言えない俺でも一人は出来たんだから。

「ははは、子供時代の友情なんてハムより薄い。ゴムより薄い。成長と共にどうでもよくなるようなものさ。それがちゃんと続ける時点で少々おかしいんだよ」

「いや、人の友情にケチつけんの止めてくれね？」

「友情というのは裏切りが前提でそこにあるものだ。結局他人同士の繋がりには大小少なかれ裏切りは存在する」

大きな裏切りばかりをしているこの男がまったく悪びれないのは、それを大差ないと知っているから。程度の違いはあっても同罪を犯している他人に、罪を糾弾されても痛くないということか。

「それじゃあ俺があいつを裏切ってるっていうのか？」

「いいや、君はいつでもうちの馬鹿息子のために実に健気だ」

なら妙な言い方するなとむくれるも、中年男は気にしない。

「君は裏切られたとしてもあの馬鹿を怨むこともないだろうし、大抵のことは許せてしまえる。それどころか仮にあれに死ねと言われたら君は死ぬだろう」

「それは……」

否定できない。事実だ。あいつが本気で言ったなら、多分俺はそれに従う。

「だが君は、あれに軽口以外で死ねとは言えないし、言われたところであれは死なない」

「あ………」

「今の君たちの友情はとても不平等なものであり、全面的に君の好意によって成り立つ関係だ」

第三者からの正論は耳に痛い。こればかりは否定の言葉が見つからない。

こんな男に好き勝手言われて言い返せないのが実に悔しい。こいつ貴族で領主で騎士だけど、変態で性犯罪者でインモラルなのに。

「それだけの相手がいるんだ。あいつが満足してしまうのも仕方のないことかもしれない。適当な女性と付き合ったところでうちの馬鹿息子は必ず君と比べてしまう。君ならこんなことは言わない。君ならもっと、こうさせてくれる……そういう不満が出てくるだろう。だからあれは適当な女性とは付き合えないのさ」

「いや、だから変な言い方するなよ」

「変ではないさ。あれはアルトを父親として慕い君を弟代わりにする振りで、ここだけの話母親代わりにしてるんだ」

「お、俺が!?!」

この男には言えないが、一応あの馬鹿には養母がいるのに。何故俺が母親代わりなんだ。じゃあ何か？俺は甘えられていたのか？…
…終ぞ記憶にない。

「しかし悲しいかな。セレス君は男だ。あいつへの愛情は友情と父性愛の方だろう。だからうちの馬鹿息子のそういう甘えは負担になっている。だからこそ今の君たちの関係は不健全だ」

「そ、そこまで言うか？」

「ああ、言うさ。これでも私は弟思いなんだよ」

心配する振りして、俺の聞きたくないことをさらっと口にする。
どの辺が弟思いなのか聞かせて貰いたいもんだ。

「要するにあの馬鹿息子は君の連れ子ポジションなんだよ。だから君が他の誰かと仲良くするとそれは腹立たしい」

「俺はペット扱いされてるもんだと思ってた」

「それがあれの甘え方なんだろう」

中年男は思いきり嘆息をする。吐いた分空気を吸い込んだかと思えば、ギリと此方を睨め付ける。

「だが私はそれが許せない！何なんだ君たち、…いやお前達はまったく！いい年をした男二人が縁側で茶を飲んでのほほんとしているようなイメージしか浮かばない関係だとは！あまりに健全すぎて不健全だ！お前達も青春真っ盛りの時期なんだから手当たり次第女を口説いてベッドインしてみたり！ナンパの成功率を競争したりっ！恋人を取り替えてみたり！酔いつぶれて間違えて男に手を出してしまってみたり！酔った勢いで上司の妻に手を出してみたり！うっかり孕ませてみたりしてちよっと責任取りなさいよとか刺されそ

うになつたり！そういうことを一度くらいはしてみるべきだ！振つた女の数か男の勲章だぞまったく！」

「なあ、あんたを軽蔑して良いか？」

こんな男と少しでも同じ血が流れていると思うと嫌になる。

「大体それとこれとでどう関係あるんだよ？」

そんなこと捲し立てたところでお前の罪は消えたりしないぞと睨めば、さっと目を逸らされた。このクソ野郎が。

「……言い訳をさせてもらうならば、北部には君ではなくあの馬鹿息子が来ると踏んでいたんでね。あのタイミングで彼女に手を出した」

まったくもって言い訳がましいが、一応は聞いてやる。

「うちの馬鹿息子は馬鹿だから、哀れみからでも手を出すかもしれない。そうならなくともあの子は馬鹿だからきつちり責任を取るだろう。なるほど、確かにあの馬鹿は結婚は出来るかも知れない」

「何が、言いたいんだ？」

「愛のない結婚など人生の墓場だと言っただよ」

「それはあいつにとって？」

「あいつと彼女にとってだよ。どうせ上手くいかないのなら、別れ話は早いほうが良い。私のそれを不貞と言ひ婚約破棄の原因にすれば良い。私の突飛な行動にショックで気が触れていっそのことセレス君辺りにでも走っても良い」

「それは止める。これ以上俺を不幸にする要因増やすな」

「それか二度とこんな事がないように、自ら相手を選べるように……ちゃんとそう言う物について考えるようにし向けるか、だ」

婚約者などと送り付けられた女が泣いて自ら命を絶つ。それを未然に防ぐには、自分が決めた相手を置くことだとヴァンウィックは語る。

「馬鹿息子がまともな人間になれるかどうかはもうこの際どうでも良い。審判の話は聞いた。あれは恐らく死ぬだろう。……ならば、せめて最後くらいはこの世界にある美しいものを見せてやりたい。それが親心というものだ」

「美しいもの……」

「セレス君はもうシャラットの所の娘さんとで知っているだろう。この世で最も美しいもの……それが恋というものだ」

「この醜い世界も光り輝いて見える夢のような魔法。幼い頃からこの世界の醜いもの、汚いものばかりを見て来たあれに、そんな光を知って欲しいのだ私は」

その汚いものを見せる発端の一因が何を言っているのだろう。矛盾しているように見えるがこの男としては矛盾していないつもりなのだ。これまでは男として生き、息子の残り僅かな余生の間は父親面をしたいという……なんとも自分勝手な親心。

最初は俺のため。負担をかけたくないとか言いながらこれだ。この親馬鹿は、結局俺の親じゃない。俺よりランスの方が可愛くて……それが本当は、当たり前。

「確かに私は好色かつ雑食の最低人間だが、馬鹿息子のことは愛してはいるんだよ。私なりに考えた結果の最善の行動だ」

息子の幸福のために、女一人の命が散ろつと取るに足らない。この男は愛する息子のためならば、人を数字と見ることが出来てしま

うとんでもない人間だった。

「…………俺にはわからねえな」

残念ながらうちの馬鹿親父は俺のことなんかそうは思っていないから。あのクソ親父は俺よりランスの方が可愛いんだ。その理由もわかった。そりゃあ可愛いはずさ。

「あそこまで慕われて、何とも思わないわけがない。あいつ以外に誰があいつにそういう思いを教えられたって言うんだ」

「残念ながらセレス君、想われたから想う愛に心奪われる愛は勝てないのさ」

恋多き男はまたろくでもないことを言う。

「要するに一目惚れだね」

「一目惚れ？」

「そういうそれではないがそれはセレス君にも言えることだろう？君はうちの馬鹿息子にぞっこんだ。幾ら私の弟子が口説いても馬鹿息子が軸だというのは微塵もブレない」

またもや正論。確かにランスは俺の憧れだ。同じくらい都じゃ人気のあるトリシユにそういう意味では毛ほどの興味もない。戦場に楽器持ち込むとかどうかしてんじゃねえの？そう思う。

「俺はあいつのことは…………今はどうでもいいとまで、薄情なこと
は言わねえよ」

アスタロットの手前口が裂けても言えないが、あいつが女だったらなあと考えないこともない。手を握ったくらいではしゃぐ様子か

ら、もしあれが女だったら可愛いなくらいは思った。いや、口が裂けても言わないが……悔しいが素のあいつは多少は可愛いと形容してやってもいい。トリシユが女顔なのが悪い。俺は悪くない。

こんな出来損ないの俺なんかのために、あのランスに決闘挑むような阿呆だ。人間としてはむしろ嫌いじゃない。面白い。

かと言ってあの男が望むような薄ら寒い関係になる気はないが、多少は俺も甘くなったもんだ。だからどうでも良いとまでは俺は言わない。

「だが私の息子は言うだろう」

「ランスだつてそこまで鬼じゃねえ」

「いいや鬼だね悪魔だよ。間違いない。親の私がそう言うんだ」

何て男だ。自慢の息子とか言いながら普通そこまで言うか？

「第一その神の審判というのは猶予があるものでもないんだろう？今の世紀が終わるまであと半年あるかないか。それまでに死ぬという前提ならゆったり愛を育む暇などないだろう」

そしてランスが死ぬことを前提で話をしている。確かにあいつの性格なら間違いなく死ぬだろう。でもその場合あいつを守ってる俺の方が先に死にそうなんだがその辺の配慮がまったくないぞこの男。

「そこで私は考えた。ならば残る道は二つだ」

「うっかり何処かの女に一目惚れするか、血迷って女嫌いになって俺に走るかって酷い選択肢だなおい。俺は冗談じゃないぞ。女の、母親代わりに襲われるなんざ……」

自分で言つて墓穴を掘つた。何言ってるんだらう俺。嫌なことを思い出して吐き気がした。だから他の話題を探す。

「つか、その言い方だと前々からあんたこれが起こること知ってた……いや、ランスがカードになっただって何で解ったんだ？」

「カードは上から下から選ばれる」

「え？」

「一応私も国の要人ではあるからね。先代の神子から話は聞いていたよ。それは王も同じだろう」

「……だから俺を責めなかったんだな。あの人を死なせた俺を」

「……あの方は王には向かない。平和な時代の王には向かない」

視線を落とした俺に、中年男は視線を戻す。

あの方は戦いの中で生まれた人だ。誰より平和を願いながら、戦うことでしか平和に貢献できない。幼い頃から戦わされて、帝王学など学ぶ暇もなかった。学んだ頃にはもう国が愛国心もない都貴族に乗っ取られていた。気が付けば権力が根刮ぎ奪われていた。

掌の上の宝石箱のような箱庭を、じつと眺めるだけの悲しい王。皆に笑われ道化ぶるあの方の道化は俺だった。悲しいあの人を癒せるのなら、俺はランスを斬ること以外なら何だってしただろう。

「かと言って指揮官としてもいまいち。一人の兵としては凄いいだがない……」

卓越した剣術と数術を使うあの方は、守られ戦うと言うことをしない。いつも先陣切って駆け出すようならくでもない王だった。でも……だからこそついて行く。一度でも共に戦ったことがある奴ならば、あの人に魅せられないはずがない。

王失格でありながら、立派な王だ。一人でも多くの兵を死なせないため自分が前に出る。人殺しの罪をなるべく自分が肩代わりできるように自分が斬る。そんな人だった。

「私が言うのもなんだが、あの人は君には救われていたと思うよ。最期に守れたのが君で良かったとさえ思っていただろう」

最期に誰かを殺すためではなく、誰かを守るために戦えたことは救いだっただろうと男は言う。そんなの本人にしか解らないだろうに、旧知の友であるこの男には……手に取るようにあの人が解っているのだろうか。

「不幸で悲しいあの人に、君が最期まで幸せを与えてくれたのだから、私は君を責められない。それは私やあいつには出来ないことだ」

恐る恐る視線を上げれば、珍しく薄気味悪さを感じさせない優しい笑みを浮かべた男がいた。

「うちの馬鹿息子は、あの人を敬いすぎていた。そういう畏まったのはあんまり好きじゃない奴だったからなあ。アルトの方はもっと近づきたいと思っていただろう。それでもそこに君が加わるだけで、その場は仕事から私事に変わる。そういうありふれた平和な時間をあの人は愛していた。嬉しかっただろうよ。一度壊れたそれが、次の世代で甦ったんだからな」

「おい」

「セレス君、そろそろ湯が大変なことになってるようだがどうするのかね？」

*

(くそっ！クソがっ！)

なんかエレインのこと思い出してたら最終的に親父のこと思い出してる。腹立たしいっ！

あのおっさんも最後に余計なこと言いやがってっ！

「随分今日はやる気があるなセレスっ！病み上がりとは思えんっ！」

「色々あつて俺も鬱憤堪ってんだっ！」

ユーカーは怒りのままに剣を打ち込む。何回かやり合う内にレクスにも馬に乗られたが、馬上試合なら俺に分がある。防戦一方に追い込まれたレクスは、むしろ嬉しそうに笑ってやがる。本当こいつも戦闘狂だな。

(だが今回ばかりは分が悪い)

タロツクの剣は片刃。つまり馬での戦いには向かない。片手で馬を操り、もう片手でそれを操るとなると……動作が限定されてくる。そう、手綱を握る手が邪魔で上手く切り込めない方向がある。

となれば攻撃は自ずと突きに限定されるが、奴の得物はそこまで長くない。馬上では槍を使うんだろが、此奴は俺を抱えていた所為でそんな大荷物持って来られなかったのだ。

いざとなれば馬から下りて戦えばいい。そう考えて。

勿論幸運は向こうに味方している。だから俺も決定打は打ち込めない。俺じゃ勝てないというのは事実らしい。

「お前が親父を殺してくれるって言った時……ほんの少し俺は揺らいだ」

「なら、こっちに来てくれれば話が楽なんだが？」

……何で無関係のこの男がそこまでしてくれるのか、解らなかつ

た。だけど、そんなことは関係なかった。

「一回話してみる。それでもやっぱり許せなくて……殺したいなら俺が殺す。あんたに頼る理由なんかねえ」

「ま、そりゃそうだな。俺もそれが負い目になってこつちに来てくれるってのも悪くないと思っただが」

「……悪いな」

口では負い目なんて言い方するが、そんなつもりでこの男はそうしようとしたわけじゃない。善意だと解る。だからこの俺が謝れた。確かにこの男は俺に親切だ。それは認める。

「……身分ある奴の身内殺しはきついぜ？お前は王にも仕えてないんだ。権力者共に残りの人生揺すられ良いように使われる。普通に領主なんか殺せばお前自身この国にいらなくなるだろうな。俺なら唯の侵略者。その一言で済む」

罪を背負えるのかと聞かれている。

狡いよな。親父がお袋殺すのは、身分ある領主様だから通つちまう。だけど俺だとそうはいかない。相手のテリトリーで殺すって事はそういうことだ。ここからカーネフェルを助ければ、俺の親父への復讐は……おそらく出来ない。

(でも……)

俺が、とか……そういうのは俺らしくない。あいつが、だ。

親父があいつの役に立つなら生かす。あいつにとつて邪魔な存在なら殺す。だから今日まであの親父を俺は放置して来た。あいつだつてそうだ。同じ事を思ってる。認めたくないが俺達は親子なのだろう。

「生憎な。俺にとっては最低の父親でも、あいつにとっては貴重な支持者の一人なんだ。むざむざ殺すわけにもいかねえ」

「あの色男の後ろ盾か。本当に懲りないなお前も」

腹かつさばかれてよくもまあそこまで慕えるもんだと呆れるレクスが見える。

「今こうやって帰りがるのも、あの男を死なせないためなんだろう？」

「……お前がこんな怪我の俺を連れ出すくらいだ。あいつの処刑が一番最初になったんだろ？それくらい解る」

コートカードの俺が傍にいないと、あいつら余裕で殺される。今は神子もパルシヴァルもいないんだ。あいつら数札だ。今エルスⅡザインが戻ってきたら全滅間違いなし。

「傍にいて守れないなら俺の責任だ。だから俺は傍にいなきゃ駄目なんだ。俺は絶対後悔する」

命令に背いてでも、守りたいものを守るのが俺という人間だ。

「だから、行かせてくれ」

馬を止め、俺はレクスに訴えた。

もう五分経つ。増援は来ない。これ以上やり合う時間が惜しい。

「……つたく。そう言う台詞は寝所で聞きたいもんだぜ」

セクハラ台詞でレクスが折れた。仕方ないと苦笑しながら俺を見

る。

「……セレス、行ってこい。とりあえずしばらくは俺は都で待つ。それまでよく考えろ」

「……ああ」

「あ、そうだ。忘れてたぜ、これ持ってけ」

「何だこれ？」

レクスが投げる小袋。それにはなにやら液体の入った小瓶がある。

「いいから持って行け。うちの連中は基本あの馬鹿真面目以外は全員毒使いだと思え。双陸でさえ命令なら毒を使う」

「まさかこれ、解毒剤か？」

「俺の調合したとっておきだ。大抵の毒には効くぜ」

にっと笑う男は本当に、何のつもりなのだろう。

「おまえ本当に……何なんだよ」

「ま、俺も狂王の味方ってわけじゃねえからな。カーネフェルが勝ってくれる分には有り難い」

狂王に仕えているわけではないこの男は、相変わらず妙な物言い。

「お前の主が玉座に着ければいいのか？」

「そういうこった。当面の利害は一応一致してるんだが、あんまり命令違反すると俺の立場も微妙になるからな。ほどほどに死なない程度に侵略ごっこに付き合っただけやる義務もある」

馬を操り南を向いたレクス。奴は去り際振り返り俺に笑む。

「俺は狂王の味方じゃない。だがお前の味方ではありたい。その辺忘れるなよセレス」

「私情丸出しだな」

「それが俺の長所であり魅力なんだって早く気付いてくれ」

「……考えとく。なあ……レクス、急になんで気が変わったんだ？」

「うちの堅物野郎はあの色男と似たり寄ったりだからな。うっかり俺のセレスに目移りされても困る。よく考えたら会わせたくなくなつた。そんだけだ」

じゃあなと手を振り走り去る黒の騎士。その背中が見えなくなつた頃、近づいてくる馬の嘶き。

「10分だつたじゃねえか」

「義兄様、まだ8分ですわ」

「四捨五入なら10分だな」

「そんなことじゃご婦人方にモテませんことよ」

「あ……なるほどな。だから俺最近野郎ばつかとフラグ立つんだな。気をつける。所でなんでお前から来たんだ？」

「お義兄様の一大事とあつて、みんな領地と山賊退治を投げて武装したまま北上していたところでしたの」

「何やってんのお前ら……」

「あら？どうせまた取り返せば良いだけじゃありませんの？命以外は幾らでも取り戻せるじゃないですか」

「そりゃ、そうだけだよ……」

「今はひたすら北上です。私達は囷となつて真つ正面からタロツク軍とやり合いますよ」

「お前、名前は？」

「皆さんに黙っていてくれるならお話ししますわ」

「……言えねえよ」

「ですわよね。私の名前はマリアージュ。察しの通り、神子様の部下の一人ですわ」

偽者の少女が笑う。本物の彼女は一度だって俺にそんな風に笑いかけたことはなかったけれど。

「神子様のご命令であなた方の後方支援を行いつつ、……ランス様にはこの件を知られるのは戦況に問題が生じそうでしたので、彼女に化けていますのよ。期が来れば適当に噂を流して死んだふりでもして終わらせますので問題ないです」

事後処理も任せるとは、本当に神子って奴は……今更だが唯者じやねえな。聖職者の癖に俺に殺害予告とかするくらいだ。確かに普通じゃないか。

「それで俺のことをお前らに教えたのは？」

「それは城の背後に回ったユリスディカ……いえ、ジャンヌ様の部隊にいる私の同僚ですわ。貴方が連れ出されるのを見ていたそうです」

「なら、あいつの恩返しって？」

「急がないと大変ですわよお義兄様？ランス様を助けるのがジャンヌ様になつてしまいますもの」

「馬鹿。エレインならここで、私のランス様が取られてしまいます。さっさと走れって言うのがデフォだぜ？」

「あら、私としたことが。なら……“お義兄様！さっさと跳ばしてくださいましっ！私のランス様がどこぞの馬の骨とも解らぬ女に釣り橋効果で惚れてしまったら大変ですわ！”」

「……ああ。すっかり掴まってな！」

神子がエレインに化けさせたのは、ランスのためだけでもなかったんだな。馬を奔らせながら俺は思う。

別人だと解つてても、これは邪険に出来ない。俺の罪悪感を突いてきやがる。悪趣味にも程があるが、この子は責められない。

「それで、あいつは無事なんだな？」

「そりゃあ私達の神子様ですもの」

何か含んだ様子でマリアージュが微笑んだ。理由を尋ねても、どうせまだ国家機密ですとか言われるんだろう。聞くだけ無駄だと、俺は馬を跳ばした。

エレイン改めマリアージュ回。

レクスはいつも通り過ぎて注意書きになんて書けばいいのかもわからない。

ろくでもないことしてるランスの父ちゃん。息子の婚約者（幼女）にまで手を出すなんてこの犯罪者っ！

そろそろジャン又無双書きたい。俺なんかどうせ駄目さって凹んで処刑されかけてるところを颯爽と救われて惚れるんだろっなランスは。

25・Cui bono? (前書き)

限りなくあっちっばい行き過ぎた友情注意報もそろそろ終わり。
やっとこの話の後半からノーマル軌道に戻りました。

《ランス、今日はこの位にしておいたら？》

「まだやります、養母さん」

一人で剣を振るったところで上達の幅は限られる。型通りの技を覚えるだけだ。本当は実践が一番良い。だけどあいつと戦うと、あいつも伸びる。あいつの上達速度は俺より速い。それは困る。

たった一度の敗北が、俺という人間を作り替えた。悲しみから俺を救ってくれた人は、俺に楽しいだけじゃなくて、悔しいという気持ちを教えてくれた。唯ひたすらに、どうしてなのかも解らずに、唯負けたくないという気持ちで漠然としてあつた。

負けたのが悔しかった？ 追い越されたのが許せなかった？

俺はずっとそう思っていた。

けれど夢の中、幼い自分を見つめると……その表情はそれだけではないと見て取れる。

泣くほど悔しかったんじゃない。泣くほど怖かったんだ。

(俺は……)

あいつに負けたくなかったのは、あいつを守れなくなるのが嫌だったんだ。だから誰より強くなりたかったんだ。また、一人になるのが怖かった。

その日そこにあいつがいないのは、シャラット領に羽を伸ばしに行っていたから。

見送りながら、あいつが遊んでいる間、鍛錬に明け暮れた。もっと強くなって差を開いておきたかった。俺があいつより強ければ、要らないなんて言われぬ。あいつの隣は確かに俺の居場所の一つ

で、失いたくないものだった。

(俺は……)

どうしようもなく、寂しかったのだ。彼がどこか遠くへ行ってしまうようである。

任務をサボるようになった彼に文句を言ったのは、傍にいられないのが嫌だったんだ。いて欲しかったんだ、俺が。どんな嫌な仕事でも、お前もいてくれるなら俺は頑張れる。強がれる。

お前だってそうだと思った。彼女を失っても俺がいる。守ってやる、支えてやる。それでいいじゃないか。

だけどお前に拒絶され……俺はその分まであの人に依存してしまっただけだ。そしてアルト様を失った今、俺の依存は全てお前にし掛かる。

それが堪らなく煩わしいんだろう？自分でもそれが重いんだって気付いていた。それでも嫌がらずに傍に戻ってきてくれたお前を、信じたかった。でも一度拒絶された恐怖がある。信じたい、でも信じ切れない。そんな迷いがお前を傷付けていたんだろう。

(ごめん……)

信じられない癖に、信じてくれだなんて虫が良い。

こんなに歪んでしまったけれど、最初は唯……本当に守りたかっただけなんだ。出会えたことが救いだった。そう思えるから大切だった。もうあんな悲しいことを彼が言わないように、強く大きくありたかった。

“守ってあげたかった”……そんな言葉も今では上から目線に聞こえてしまう。実際、俺はあいつと対等であることを拒絶していた。そうなった瞬間、きっと彼は俺なんかどうでも良くなる。だから俺の方が優位に立っていたかった。まだ俺が必要なんだってずっと言

い聞かせるために。

今じゃあいつが必要なのが俺。それを認められなくて、沢山傷付けた。

守られたくないんだよ、本当は。だって悔しいだろ？俺はそれを有り難いじゃなくて、屈辱だと感じてしまっから。

俺はアルドール様が羨ましい。彼は本当に弱いから、素直にそれをありがとうと思える。口にも出せる。俺は心か言葉が着いて来ない。どちらかが嘘になる。

子供に戻りたい。あの頃に戻りたい。あの頃ならもつと素直に謝れた。意地も張らずに済んだ。プライドなんてもの、まだなかった。今の俺は自分を持っていないのに、増長したプライドだけが高く聳え立つ。その中に俺はいない。空っぽの空洞。その中に反響する声は、耳を塞ぎたくなるような自分勝手な言葉達。

今俺が死のうとしてしているのだってそう。アルドール様のためとか言いながら自分のため。颯爽と死に向かう俺はさも忠臣に見えるだろう。二番目じゃ駄目なんだ。一番だから意味がある。

そんなちっぽけなことのために命を賭けるなんて、人から見れば馬鹿馬鹿しいだろう。俺だってそう思う。けれど他の生き方を俺は知らない。マニュアル化された俺の人生。騎士の鏡として生きる以外の道を俺はもう無くしてしまった。他に、何も無い。どうすればいいのかわからないんだ。

本当にお前が俺のことを思うなら、ここから俺を助けてくれ。違うんだ。嫌なんだ。本当は。俺は何処にいる？見つけてくれ。俺が空っぽなんかじゃないって、昔みたいに。

そうだ。この死には打算もあるんだ。嫌な奴だ俺は本当に。

無様な死に方だけは御免だ。名誉とか誇りある死が良い。他の誰かにどう見られたいか、じゃない。あいつにそう見られたい。ここまで来たら最後まで俺はあいつの誇りでいたい。憧れでいたい。

それは時に苦痛だったけど、堪らなく気分が良いことでもあった。

俺の唯一認めた男が、俺を崇め平伏す姿をどう表現すればいいのか。背筋が震えるような歓喜？あれ以上の至福を俺は知らない。

他人にどう思われようと構わないけれど、あの方の騎士として俺は惨めに死ねないし、あいつに失望だけはされなかった。俺の誇りとは、アルト王のための名誉とユーカーに失望されなかったためだけのもの。その過程で無駄に支持されて困ったことになったというのが本心だ。王亡き今となっては、失望されたくない。これがお前の望んだ俺の姿だろうとあいつを責め立てるように俺は騎士として生きて死ぬ。人としての俺を殺したのがまるであいつみたいなの八つ当たり。

でも、そのくらいしないとお前は俺を忘れるだろう。そんなことないと思わせて欲しい。俺はお前のためにもう泣けないから、泣いたとしてもお前を失って悲しい俺自身のために泣くんだろう。そんな汚れた涙をお前に送りたくない。

だから俺が先に死のう。お前は今でも俺のために綺麗に泣いてくれるだろうから。俺の墓の前で泣いて貰うんだ。そう思うと死さえ心が高揚する。

俺の墓の前で泣いて縋るあいつを思えば、背筋が震える。死とは斯くも甘美なものだったのか。あの人を失ったばかりの頃は……そんな余裕もなかったのに。俺も随分と冷静になったものだ。

*

夜が過ぎるのは、思いの外遅かった。夢を見る猶予までであったのだから。

目覚めると、両手の指が折れていた。指を折られても目覚めないとは余程疲れていたのだろう。

さしあたってこの指はどうするか。数術で治すことも出来たが触媒もない。自分のために無駄な幸福値を使いたくなかった。どうせ死ぬなら意味もない。

運良く傍にタロツク王が来たのなら共に冥府への道連れにしてやろう。奴ならば俺のカードでも殺せるはずだから。トリシユでさえ津波を呼べたんだ。彼より上位カードの俺ならば、命懸けならもつと凄いいことを起こせるはず。

まもなく現れた兵に引き摺られながら、ランスは足の指も何本か惚れていることに気が付いた。彼らに連れて行かれた場所は、よく晴れた快晴の下。物見櫓の上。そこから見下ろす景色は美しい。あの輝く水面に母さんが眠っているのか。ああ。フローリップ様もいるのだったか。

「それで俺の処刑方法は？」

「其方は火の上位カードだったな。ならば火刑などでは焼けんだろう。……この国の夏はここまで暑いのだな。これでは鳥葬など向かん。なれば、水葬にでもしてやろう」

「うわ、流石須臾！えぐいこと考えるうっ！水死体って結構グロいけどあれはあれで趣があるし、そういう処刑も涼しげでいいね」

いつの間に戻ってきたのか、狂王のお気に入りだという混血の数術使いもその隣にいて、今から始まる処刑を今か今かと指折り数える。俺に至っては本当に指が折られていたので無邪気な声が少々腹立たしい。

（しかし、水葬か）

これならまだ分がある。確かに俺は火の人間だが、水の元素を操るのも得意だ。この場合は何とか切り抜けられるかも知れない。

「あ、でもそいつでしょ？双陸が戦ったのって正統派の色男だっ
て言ってたから間違いない。確か水の数術使えるらしいよ？」

此方の心を読んだわけではなからうが、数術使いは思い出したように俺の情報を引き出す。タロツク軍で俺が戦った相手……都に来た双陸という男か。昨日都に飛んだというこの混血児は彼からその情報を譲り受けていたのか。

これにはタロツク王も考え直し、俺の足にお守りを付けるのではなく、その櫓の上に磔にすることを兵に命じる。

「ふむ……では鳥葬にするとしよう。子鬼、遊んでやれ」

「えー……鳥の召喚って無視と違って結構……いや、昨日稼いできたからいけるか」

兵が俺の手足を縛り付ける間、数術使いはにたにたと笑っていた。

「ねえお兄さん。人を生きたまま鳥に食わせるのって結構大変なんだって知ってる？知らないよね」

黒髪の少女に見えるその数術使いは混血だからなのか笑みこそ可憐。しかしその笑顔からは悪意が此方を覗いているのが明らかだ。

「臆病だつたり警戒心が強い連中はまず駄目だね。死ぬまで食べに来てくれない。でも、鳥は目が良いからね。死んだらちゃんと寄ってくる。ボクも昔何度か食べられかけたなあ……お腹が減らないようにじっとしていると、もう死んでるって思われちゃうんだ」

縛り付けられ磔にされた俺に、その子は水を飲ませる。唯の水ではないだろう。身体の力が抜けていく。手足が動かさなくなっていく。やはり毒か。

だが鳥葬が目的なら、毒殺などはしないだろう。これは俺の動きを封じるための毒。頭もぼんやりする。これは数術を使えるほどに、脳を活性化させない薬だろう。こんな方法で数術を防がれるとは、

相手方に数術使いが加わったのが大きい。タロットの毒の力とそれが合わさること、ここまでの脅威になろうとは。

「でも、それだけじゃ……唯の日光浴の人間まで襲われるよね。だからここでもう二つばかりスパイスがいる。一つは怪我をさせて弱っているという合図を出すこと。二つは……その鳥の警戒心を吹き飛ばすほど、飢えさせること」

そう言っつてその子が振り返る。その先には兵に連れてこられたアルドール様とトリシユの姿。

「昨日はよく眠れた？あはは！凄い隈！いつものぱつとしない顔よりは色男なんじゃないのアルドール」

混血はケタケタ笑う。主を侮辱されているのに言い返せない自分が非力だ。

「カードは見せて貰った。あの騎士を殺さずに傷付けられるのはアルドールが須臾くらいだね。どうするアルドール？」

「どうする……っつて？」

「あのお兄さんにちよつと大きな怪我負わせてきて欲しいんだ。血がそこそこ一杯出るような傷」

「そんなことっ！」

「出来ないなら須臾にやって貰うけど、それじゃあやり過ぎちゃうかも知れないなあ。それに彼だって敵にやられるより、……ねえ？どっちの方が嬉しいかな？」

あの子供、煽動力が本当に強い。人の弱みに付け込むのが上手い。トリシユを人質にすることで、大暴れも出来ない。渡された剣を手に……俺に近づいてくる事しかできない。

「ランス……」

彼は泣いていた。大粒の涙をポロポロ流して、眩しそうに俺を見る。だけどそれは、申し訳ないだとか謝罪の色はない。まだ諦めていないのだ。この状況からどうやって、誰が俺を助けてくれる？ 辺りを見回してもあいつはいない。こんなものなんだ。どうせ……

「アルドール、浅すぎたらもう一回やり直しだからね？ そのお兄さんに飲ませた薬は痛覚は取ってない。痛いって叫べないけど痛い。それを解った上でやって」

もう剣は持たなくて良い。俺が守る。そう言ったのに……その相手に俺を斬らせてしまうだなんて、俺は本当に騎士失格だ。仮初めの主に捧げた自分の言葉ひとつ守れやしない。

剣で抉られた腹部。痛いには痛かったが、報いなんだとも思った。俺はこんな風に……ユーカーを斬った。だからこれはその報い……

「ランスっ！」

聞こえるはずがない。その相手の声がした。都に連れて行かれたと聞いたのに……幻だろうか？ 幻聴だろうか？ 城の外には沢山の兵を連れたあいつがいる。

「ゆう……か……あ……」

自然と涙が溢れる。俺のためでもない。あいつのためでもない。あいつの所為で、泣いている。人は嬉しくても、泣けるのか。

「ちよ、……どういことー？ あいつ都に向かったんじゃ……」

「いいか！これからお前を一発殴りに行くっ！その前に死んだら容赦しねえっ！」

狼狽える数術使いの声を掻き消すような大声で、高らかにあいつは宣戦布告。

「いいかてめーら！何が何でも生き残れ！そうすりゃアルドールの馬鹿を引っぱ叩いてでも爵位をくれてやる！」

「そんでセレスちゃん娶るには爵位どこまで必要なんだ？」

「辺境伯までなつてからそういうことは言え」

「あつはつは、辺境伯認定まで何人殺せばいいんだい？」

「俺は爵位より秘蔵アルバム集の複成本がいいねえ」

「だから、こういうときまでお前らそういう冗談するなっ！折角俺が決めたつてのに、いまいちびしつと決まらないだろうが！女装ネタいつまで引き摺る気だっ！」

「セレス様！私はセレス様がランス様と2ショットしてくれていただけでいいですっ！勝手に写真撮りますけど」

「セレストイン卿っ！私はトリシユ様派でっ！もしくは五年後のパー君でもいいですっ！」

「だから俺をそういう目で見るのも止めろっ！」

ユーカーが声をかけるのは、金髪の女兵士のみならず、黒髪の男達の姿まである。

「ちょっと、あれどういうこと！？なんでカーネフェルの軍にタロツク人がいるの！？」

男が生まれなくなったカーネフェル人。女ばかりの軍隊。カーネフェルはそう舐められていた。それを補うべく、ユーカーがうちの領地に届けた奴隷。アルト様とセネトレア旅行をした時の土産だと

いう。彼らはユーカーに恩義を感じているし、しっかりと食事もし……農業に勤しみ健康な肉体を保っている。数で負けているとはいえ、やせ細ったタロツクの兵となら十分良い勝負になる。

(これは、なんとかなるんじゃない……)

俺はごくりと息を呑む。

「そつか……アロンドイト領には、ユーカーが助けたタロツク人の奴隷がいるんだ!!」

それに続く、思い出したようなアルドール様の大声に、タロツクの兵士達にも動揺が走る。

「そう言えば昨日も……」

「ああ、あいつら敵なのに……」

「それ、本当の話だったのか!？」

「奴隷が普通の人間として暮らしてる……?それも、爵位まで貰えるのか?」

昨日アルドール様と俺が助けたことが生きてきた。

半日足らずでその噂がタロツク軍の中にも波紋となって広まっていったのだ。

「いいか!タロツクの奴ら!俺の話の聞けっ!うちの捕虜になれば三食たらふく食わせてやるぜ?その辺考えながら戦うか死んだふりするか五秒で決めろ!……1、2、3……全軍突撃っ!」

ユーカー、それフライングだよ。毒が回ってるのに思わず俺は吹き出した。見ればアルドール様も同じだ。トリシュなんか「イズー

可愛いよイズー」と悶絶している。しまった、味方が一人使い物にならなくなっている。何てことをしてくれただユーカー。上にはまともな戦力がいなくなっただじゃないか。

「須臾、どうする？」

「裏切り者は我が敵もろとも始末する。それを肝に銘じて者共剣を取れっ！」

再び兵を恐怖で支配し城の外へと向かわせるタロツク王。

「子鬼！今すぐ召喚せよ。あの思い上がった小僧の目の前で、此奴ら全て殺してくれるっ！」「了解」

数術使いは数術を紡ぎ始める。ユーカー達が湖を渡り終える前に、城から兵が溢れ出す。その船に狙いを定め、矢が射られ……る前に船が大急ぎで引き返す。あそこまで大見得きつた相手がまさか敵前逃亡だとは思うまい。タロツク兵もなんのことだか解らずに、一瞬固まってしまふ。その隙に跳んできたのは大きな大きな鉛玉。

それは城壁にぶつかつた途端に爆発。その轟音は辺りの兵を傷付け、城を大きく揺らす。

「爆発……した！？あれは教会兵器……だけど以前見たのは唯の鉛玉。爆発するなんて聞いてないっ！それに十字法では威嚇でも人に当てられないはずなのに……」

「あんまカーネフェルを舐めるなよ！ここまで追い詰められたんだ！うちの国をあの国が見捨てると思うか？それからうちの馬鹿王と、向こうの神子は親友なんだとさ！てめーらが神子の船を沈めたことでシャトランジアはお冠だっ！」

「……あの国が、動いたか」

タロツク王は狂ったように笑い出し、その場の騒然とした空気を飲み込む。その直後、再び城が揺れる。しかし今度弾が飛んできたのは南ではなく北からだった。

「北からって……まさか海！？聖十字の船か！？」

「ここまでの飛距離、そんな……馬鹿げてるっ！」

「これが教会兵器！？ば、化け物だっ！！！」

爆音に、兵達は狂王の脅しの声も聞こえない。城内は極度のプレッシャーに押し潰された者により、混乱の渦に包まれる。

(これは……不味い)

トリシユにアルドル様を連れて逃げろと目で訴えるが伝わらない。ユーカーならこれくらい解ってくれるのに、トリシユと来たらユーカーの活躍を応援している。

今の見ました？戦うあの子も実に素敵だ。そう思わない？みたいな視線を送られてもどうしよう。今、そんな状況じゃないんだ。気付け！目を覚まして！お願いだから！今国の一大事っ！王の一大事なんだよ？解ってくれトリシユ！何故わからないんだっ！

「さっさと城から出て来い！その老朽化した城じゃいつまでも耐えられねえぜ！」

そんな熱い声援を受けているとも知らず、或いはそれを無視してか、ユーカーは果敢にも斬り込んでいく。教会兵器の威力を見せつけたことで、兵達は恐れ戦き道を空ける。その内に少数を対岸へと残し、湖を渡りきったユーカー達。その威力を目にした者は既に心が俺掛かっているのか、死んだふりをしている者もいるようだ。その姿に気を使っつか留守番組は、わざと弾を外しながら、死ぬふり

をするチャンスを作ってやるという心配りまで行っている。
今は一人でも多くの味方が、男手が欲しい。悪くない手だ。

「くそっ！……よし、完成だっ！」

思わぬ奇策に意識が乱れ、舌打ちしていた数術使いもとうとう数式を完成。空に大きな穴を作る。そこからギヤアギヤア言いながら飛び出してきたのは獰猛な目付きの大型鳥類。タロツクの鳥だろう。数値変化を受けたのか、頭の数や足の数がおかしい化け物のような鳥がわらわら飛び出る。

そしてそいつらは余程腹を空かせているのか旋回しては、肉好きの良さそうな相手からそれへと攫う。そういう意味ではタロツク軍の連中よりカーネフェルの者の方が標的に成り易い。エルス＝ザインは、この場の状況に合わせた物を召喚していた。

「須臾、あいつはコートカードだ。ここまで来られたら不味い」

「其方がいれば問題なからう」

「そ、それは……そうなんだけど」

退けと訴える数術使いに、タロツク王は応じない。あくまで一戦交えるつもりだ。

「なら、裏手から回ろう。挟み込むんだ」

「要らん心配だな」

「須臾!？」

タロツク王は薄く笑み、数術使いを振り返る。

「もって後三秒だ」

「え？」

「ユーカーっ!!」

数術使いが目を瞬かせたその刹那、アルドル様が鉄柵ギリギリの所まで身を乗り出して、叫ぶ。見れば奮闘していたあいつの身体が傾いでいく。

「そうかつ！毒をつ！」

昨日されたことを思い出したトリシユの声。それに俺達もはつと
する。

タロツク王は風のカード。そしておそらく誰より風に愛されている。風を操り毒を流すなど造作もないこと。

幾ら教会兵器があっても此方にはカーネフェル王という人質がいる。だから大砲も肝心なところは狙えない。

「子鬼、カーネフェリアと其方の騎士も同じように磔てやれ」

「須臾、どうする気？」

「あのような雑兵、我に本当に殺せぬか確かめてくるとしよう」

「や、……やめッ……」

ユーカーを殺してくると言うタロツク王。その背に言葉を振り絞る。血よりも赤い瞳が俺を見た。男は俺を鼻で笑う。ユーカーが震えるほど恐ろしいと言った男の目。確かに身体が震えるが、俺はそれを恐ろしいと思う前に……それを屈辱だと受け入れた。俺は怖いのではなく、馬鹿にされたことに怒り狂っているのだ。震えるほどに。

「それほど、あのカードが大事か？カーネフェルにはあの一枚以外コートカードがないと言うことか」

そうじゃない。カードだから……だから大切なんじゃない。それが解らないなんて、この男は何て可哀想な奴なんだ。

今度は俺が笑ってやった。この哀れな男を腹の底から笑ってやった。声は殆ど出なかつたが、俺の嘲笑は奴には聞こえたことだろう。男は怒りのままにより深く、先程抉られた俺の傷を抉って去った。

もうろうとした意識の中、目に見えるのは城の庭。そこで倒れたユーカーに、迫る漆黒の影。振り下ろされるその白刃。覚悟した悲鳴は上がらない。恐る恐るそれを見れば、狂王の剣を受け止めた者がいる。

それはユーカーではない。タロツクの黒い鎧に身を包んでいる。顔は見えない。しかしなかなかの剣さばき。仲間割れか？

何度かの応酬。力では負けているらしいその黒騎士は、自らの機敏な動きと迷いのない剣が生み出す風で、周りに溢れる猛毒をかわし呼吸を続けているのだ。

それを認めたユーカーは、ふっと笑う。その顔はしてやったりという顔だ。更に言うなら……“あいつが俺を連れ出す時、何着せてたと思う？”そんな表情。

そうか。ユーカーは、いちどあのレクスという男に連れ出された。その時……目立たぬようにタロツクの服を着せられたのだ。今のユーカーはそれを着ていない。そしてユーカーの使う兵にはタロツク人がいる。一人城に潜入させることが出来れば、そこから衣服を奪い更に数人潜入出来る。そして手筈を整えれば……多少荒事で大勢入れ替わることも出来る……？

「……ほう、これを止めるか。さては噂の聖十字とは其方のことか」

聖十字の剣さばきに、タロツク王が僅かに笑みを浮かべた。その刹那、狂王が膝を着く。

「背中がから空きだぜ、タロツク王」

それは大声ではなかった。それでも口の動きだけでも解る。どうやって解毒したのか解らないが、復活したユーカーが、聖十字に気を取られている隙に狂王へ一撃食らわせる。それが誰の分の仕返しなのか、聞かなくても解る。あいつは本当に……何処まで馬鹿なんだ。

「毒を使うようなお前達が、二対一を卑怯だとは言わねえよな？」
「下がってくださいせレスティン卿。手負いの貴方では足手纏い
です」

「おいこら腐れ聖十字！」

ユーカーと聖十字の睨み合いの間で狂王は低く笑い空を仰ぐ。

「あの男が逃がした兵が我に傷を負わせるか。くっくく………実に、面白い！見逃した甲斐があったと言う物よ」

「須臾の馬鹿っ！笑ってる場合じゃないだろ！」

主の危機に鳥を操り数術使いはユーカー達を退ける。巨大な猛禽類を相手に道を阻まれ、時間を奪われる。

「コートカード二枚は分が悪い……か。良からう。子鬼、撤退だ。鳥だけ残し兵を向こうの領地まで飛べるだけ連れて飛べ」

「過労死したら呪ってやる」

「それは楽しみだ。もつと酷使してやろう」

「やっぱ貴方は嫌いだっ！その内殺してやるっ！」

化け物鳥達を仕留める内に、数術使いは数式を完成。

そんなに距離がないのなら空飛んだ方が早いし代償も軽いと、数

術使いは味方を空へと招き飛んで行く。風を操る者が相手では教会兵器も威力が落ちる。向こうにはスペードのAもいるのだ。だから無駄弾になる。攻撃を見送ったのはそのためだろう。

「……やった、のか？」

「いえ、まだです！」

「つくそ！どうせなら鳥も連れてけっつてんだ！」

「騎士様は下の退治と解毒をお願いします！上は私が行きます」

「あ、おいっ！くそっ！焼き鳥になりたい奴から掛かって来いっ！俺の調味料の餌食になりてえんならな！」

信じられない。……追い返した。この城からタロツク軍を。

夢でも見ているのだろうか。思い出したように意識が揺らいでいく。それでもここで眠ってしまったら、本当に夢になりそうで怖い。目を覚ましたら俺はま打あの牢の中にいるのだとか、或いは二度と目を覚まさないのだとか。そんなことを思うと重い瞼も閉じられない。

「アルドール様、下がって！」

「トリシュ、向こうからも来たっ！今燃やすからその隙に……」

ついユーカーと聖十字の人の方ばかりを見ていたが、アルドール様とトリシュも上を襲いに来る怪鳥達を仕留めるのに頑張っている。完全に音声聞いていなかった。ユーカーが復活するまでは二人とも観客と化していたから多分戦い始めたのはつい先程のことだろう。コートカードの戦いは、神子様のような先天的な数術使いでもない限り、数術なんて派手な物を操れない。それは派手な物とは言えないが、幸運を盾にした賭け。その賭けがああ狂王に一撃食らわせるまでに至った。

俺は背筋が震える。これまでのそれとは違うような胸の高鳴り、

興奮だ。それに気付けば目も冴える。だが、同時に悔しくもあった。ユーカーとあの聖十字は知り合って間もないはず。それがまるで旧知の仲のように連携の取れた動き。それもあいつのピンチの時に駆けつけて、颯爽と救い出すなんて……

(そういうのは俺の役目のはずなのに……)

俺は苛立つ。訳の分からない感覚に、苛立っていたこともあり沸点が低くなっていた。

「危ないランスっ！」

「……？」

視線を上げる。アルドル様の声。ああそうか。あの二人は俺のために戦っていてくれたのだ。鳥達は弱っている俺から食おうとしていた。それを庇ってくれていた。しかし数が多すぎて、間に合わない。俺を斬ったときの剣はトリシユの手にあり、アルドル様は数術で応戦していた。それでも触媒が変わってまだ慣れないのだから。数術を紡ぐのが遅くなっている。それを察した鳥が俺へと急降下。

俺は何も出来ずにそれを眺めていた。鳥が俺へと触れる前に俺の周りに炎が点火。彼は炎の壁で俺を守ろうとしたのだろう。しかし化け物鳥は恐れない。

瞬きも出来ずに爪が俺へと迫り来るのを見守る刹那、一陣の風が吹く。姿はない。それでも俺の視線は誘われるように其方に向いた。そこには駆けつけたあの聖十字。その手に剣はない。伸びた腕は俺に差し出されたわけではない。それでも此方を向いているのは、彼が剣を此方に投げたから。鳥はその剣に貫かれ、串刺しにされていた。

彼は此方へ駆けて鳥を仕留めに掛かる。剣を引き抜くでもなく彼

はそれをそのまま上へと払う。身体の中から半分を、垂直に切り裂かれた獲物は蛙の潰れたような音を断末魔の叫びとして息絶える。

「お怪我はありませんか？」

初めて俺へと向けられる聖十字の声。思いの外高い。まだ少年なのだろうか。

彼は両手と兜が返り血塗れなのに気付き、それを外す。俺の縛めを解くのにそれは邪魔だと思ったのだろう。俺を血で汚さないための配慮だったのかもしれない。

「わぁ……ここは空気が綺麗ですね」

それが空気に肌を触れさせての第一声。対する俺は声もない。彼はその間に俺がいることも忘れて、空の青さとそよ風に微笑んだ。確かにこの城の上はいい風が吹く。しかし誰がこのタイミングでそんなことを言うかと予想した？俺には出来なかった。だからこそその何気ない一言が大きく聞こえる。狂王相手に渡り合うのだ。どんな相手が出てくるのかと構えていたが、誰に向けたでもないその言葉は、俺に強い衝撃を与えた。それ以上の意味などないような言葉なのに、何故か何度も俺の脳裏を駆けめぐるので。

それは何故か？そう発したときの彼の微笑。柔らかく優しく、綺麗な笑みだ。そう思うと気が遠くなる。その頃にはもう、自分の代わりにユーカーを助けたという憎い相手、ではなく……空気が綺麗と微笑んだ、その横顔だけが忘れられなくなっていた。

*

「まったく、本当うちの馬鹿連中は毒への耐性無いんだな。その辺強化しねえと今後やばいんじゃないかねえの？」

「ああ、イズー……君に解毒をして貰えるなんて僕は幸せ者です」
「へいへい、さっさと治してさっさと働け。お前俺への応援はっかでもとにも仕事してなかつたろ」

ランスは見慣れぬ石造りの天上を見上げる。夢オチにしては牢屋の中ではない。ならあれは本当にあったことなのか。それを確かめるべく身を起す。

「ユーカー……」

「ん、ああ起きたかお前も」

ユーカーとトリシユの会話で目が覚めた。正確には俺が目覚めると二人が会話をしていた。そうなるか。

「ユーカー、話がある。ちょっとこつちに来てくれ！」

「は？あ、おい！ちよつといきなりなんだよお前は！」

隣の寝台で寝ていたトリシユは居って来る気配がない。見た感じ看病と称してユーカーが寝台に拘束させていた。妙なことをされないうようにしたのか、活躍がなかった罰なのかは解らない。唯、どっちでもあるような気はした。

「お前も俺も一応毒食らって病み上がりなんだ。怪我だって……アルドールじゃ完全には治せねえ」

急ぎ足で進む俺にユーカーはそう訴えるが、俺はそれどころじゃないのだ。どうしても彼に聞いて欲しいことがあった。

人の気配の無さそうな密室に彼を連れ込んで鍵を閉める。俺の警戒に何事かと彼は騒ぐ。

何事かだつて？聞きたいのは俺の方だ。

「どうしようユーカーああああああっ！」
「うえっ！」

突然泣きついた俺に従弟は狼狽える。俺だって狼狽えてる。こんな俺の姿は彼も俺も全く知らないものだった。

「な、なんか気になるんだ！」

「……は？」

「俺、おかしいんだよ……」

「確かにおかしいな。お前距離近すぎ。俺のパーソナルスペースの侵略は止めて貰おうか」

「なんか凄い、心臓がばくばくして、痛いくらいなんだ」

「ちよ、ちよつと待て！俺にそういう趣味はねえぞ！」

「ああ！解ってる！でもお前しかいないんだ！こんなことお前にしか話せないっ！助けてくれっ！男相手にこんなの、おかしいと思うっ！だけどっ！」

「止めてくれ！お前だけはまともでいてくれるって俺は信じてたんだぞ！？誰に毒された！？」

「あの、聖十字の彼……」

「は？」

それまで狼狽えていたユーカー。その顔が一気に醒めていくのが見える。

「なんなんだあの子！颯爽と現れてっ！俺の役目なのに、お前のこと守って！それに怒ってた俺のことまで守ってっ！これじゃ俺が惨めだ！器が小さくて情けないっ！でもそんなことどうでも良いくらいあの人綺麗で可愛いんだ！俺おかしくなったのかな！？あの変態の子供なのだからなのかな……俺もおかしくなっちゃったんだ

っ！」

「落ち着け阿呆っ」

「ぐえっ！……痛いよユーカー」

「何突然とち狂ってんだお前は」

訳の分からないまま俺は頭に一発チヨップを食らう。不満を言う
とグリグリと頬を拳で弄られた。

「いいか？ジャン又は女だ」

「え？」

「カーネフェリーは少子化で男が少ない。当然カーネフェル人の
割合の多い聖十字軍はうちの軍と同様に女の多い軍隊だ。だから舐
められないように何割か男装して任務に務めるんだってよ」

「え？」

「聞いたこと無かったのか？」

「そうなの？」

「ていうかお前ら会ってるだろ？ブランシユ領ですれ違ってるは
ずだぜ」

「ごめんあの頃お前のことしか考えてなかった」

一旦途切れる会話。俺の口から漏れるのは、安堵の息だった。

「でも……そっか。女の人だったんだ……」

「あー……うー……ん、まっずいな……これ。こんな面倒事が起
こるなら、俺レクスの方にいれば良かった。ぶっちゃけ今この場か
ら物凄く逃げたい。巻き込まれたくない」

「冗談でも止めてくれよ。俺にはお前が必要だ」

思いの外、さらっと口に出来た。嗚呼そつだ、これも言いたかつ
たことではあるのだけれど、おかしい。優先順位に狂いが出ている。

それが解るのか、ユーカーはその一言には取り立てて何も返さない。

「あのよ……お前何日寝てたと思う？」

ユーカーの問い。窓の外は明るい。まだそんなに時間は過ぎていないようだ。

「え？……二時間？」

「違う」

「一日」

「違う」

「三日だ」

「み、三日ですか？」

「ああ。この三日間城の補強と修理を行った。アロンダイト領を山賊に奪われブランシュ領をタロックに奪われた以上、ここを暫くの拠点として動くとなった。しかしここで問題が二つばかり浮上した」

「既に聞き捨てならないことが一つあるんだが、続けてくれ」

「この三日の内に神子の野郎がシャトランジアをまとめきって神子から教皇にクラスチェンジしやがった。要するにシャトランジア国王よりもずっと偉い。それで今朝方こっちに戻って来た。今後は全面的に支援に回ってくれるって話で、それを聞いたタロック軍の一部は本国に引き返した」

「喜ばしいニュースじゃないか」

「そうだな。だがここで悲しいお知らせだ」

「え？」

「アルドールの阿呆はカリスマが弱い。そこで、支援するに決め手に欠ける。神子は国をまとめるために一人の女を持ち上げた」

そこまで言われ、嫌な汗が額に浮かぶ。

「その女は聖十字の掟を破り、カーネフェルを守ることを選んだ。聖十字での居場所を失った彼女をアルドールに引き取らせた。それはシャトランジアとカーネフェルの結びつきにも成る。救国の英雄ってわけだ」

「ユーカー……それって」

「負け続きの若い少年王だけじゃまだ民のテンションが上がらない。やっと一戦勝ち取った。その功労者として神子はジャンヌを祭り上げるつもりだ」

「祭り上げる……？」

「………結婚だよ」

「け、結婚！？だ、誰と誰がそんな話に！？」

「アルドールの阿呆とジャンヌだよ」

頭を思い切り鐘にぶつけたなら、こんな衝撃を受けるだろうか？わからない。今度ぶつけて試してみよう。でも大したことはないはずだ。今感じた衝撃の強さに比べれば。

*

「無理無理無理無理無理無理無理無理本当無理っ！」

アルドールは泣きながら親友に縋り付く。

「神様神子様仏様っ！イグニス様々！聖下様っ！俺結婚なんて絶対無理！俺へたれだし！俺すぐ泣くし！俺馬鹿だし！俺本の虫だし！」

「全世界のへたれと泣き虫と馬鹿と本の虫に謝れ。以上」

「嫌ああああああああ！ほんとに無理っ！お姉さんだつて、いやジャンヌだつて絶対嫌がつてるって！こんな酷いよ！政

略結婚とか相手のことを考えないと駄目だつて！」

「カリスマのない自分を怨みなよ。それがそんなに嫌なら5秒でカリスマ身につける」

「無理いいいいいいいいいい！」

「なら諦めなよ。どうせ今君好きな女がいるわけでもないんだろ？別に名目だけの結婚なんだ。彼女を傍に配置するためには他にはどうしようもない。彼女はそれだけの働きをしてくれた。その上で下女にでもするっていうならそれこそアルドール、酷いことだよ」

別に名前だけの結婚。無理に恋人の振りをしなくても言いとは言われても、意識はしてしまう。

(だってイグニスなんか機嫌悪いっ！)

いつにも増してイグニスが冷たいかつ鬼畜。イグニスが言い出したことでイグニスの機嫌が悪いなんて何か理不尽だけど、これを飲めば悪いのは俺と言うことになってしまふ気がする。

「だって、結婚つてもつと神聖なものだろ？そんな風に誰かを国の道具にするなんて……」

「君は国の道具だ。それが王だ」

「でも彼女は違う！」

「君がそうしたくないだけだろ。そう思つて事は多少なりとは君も彼女が好きなんだよ」

「別にそうは言つてないだろ！？」

「でも嫌いじゃないだろ？」

「そりゃそうだけど！だからつて結婚なんて、そんないきなり！急すぎるっ！」

「向こうにパルシヴァル君を取られたのは痛手なんだよ。君と彼とじゃ明らかに彼の方が可愛い。少年王って単語がぴったりだ。ぶ

「つちやけ君今年で十五でしょ？少年って形容していい限界ギリギリの年代じゃないの？」

「俺に言うなよそんなこと！」

「だからここは彼女の力が必要だ。救国のヒロインの存在はそれだけで士気が上がるんだよ。古今東西の歴史がそれを物語る」

「うちの軍隊女だらけなんですけど士気上がるの！？」

「ああ、上がるね。騎士様連中がまずやる気出す。女の子に良い格好見せたいし女の子に負けたくないし頑張る。そうなるってそんな騎士連中を見てお姉さん達が頑張る。その辺の連鎖反応で色々あってご老人やおっさん達も頑張る。ついでにセレスティン卿の秘密兵器でタロツクからの捕虜の一部がやる気出す」

おまけのようにユーカーが悲惨だ。もう止めてあげて。いい加減男とのフラグ立たせるの止めてあげて。

「いきなりいなくなって、帰って来てくれたと思ったら……出世してて、おめでとぅって言おうと思ったのにさ……俺に結婚しろだなんて、俺はもうどうしていいのかわからないよイグニスっ！」

イグニスは、俺にお帰りさえ満足に言わせてくれなかったのだ。その顔を見たときには泣きそうになったんだ。その涙が一気に引込んだのは今朝のこと。

「別に結婚くらい何なわけ？結婚したら僕らは他人？縁が切れるの？絶交でもする？」

「しないっ！」

「だろ？じゃあ今と何も変わらないじゃないか。はい終わり。この話終わり。これで解決。はいお終いい良かったね」

「良くないっ！変わるよ。俺が後ろめたい」

「僕が聖職者だから？結婚できない立場だから？」

「ああ」

「下らない」

鼻で笑われた。すごい、ショックだ。

「いいかいアルドール。ここから先君が彼女とどうなるうと僕はどうしても良いし興味がない。唯彼女のようなコートカードは本当に貴重だ。ルクリースさんを失った今、クイーンは本当に大事なカードだ」

ルクリースを死なせなければ、彼女との結婚を強要することなど無かったとイグニスと言う。死なせた一端はお前にもあるだろうと琥珀の瞳が俺を責める。

「あれは、僕らの責任だ。彼女を死なせてしまったのは」

「……怖いんだ。嫌いじゃないけど、怖いんだ」

「怖い？」

「ジャンヌは姉さんに似てる！ルクリースとも重なるっ！また道化師に殺されるかも知れない！女の子を傍に置きたくないんだ！今いるカードは男ばかりじゃないか！道化師は……俺の周りに女を配置することを嫌ってるっ！」

「馬鹿」

「痛っ！」

「僕はまだ生きてる。勝手に殺すな」

俺を蹴りつつイグニスが笑う。

「君は僕の言うとおりにしてればいい。これまでだってそうして来たじゃないか」

「でも……」

「僕が信じられない？」

「信じてるっ！」

「ならどうして迷うの？」

「やっぱり怖い。……目の前で誰かが、女の子が死ぬところ、見たくないんだ」

幸い俺はまだ目の前で親しい間柄の男が殺されるところを見ていない。だけど、アージン姉さん、ルクリース……フローリップ。俺の周りの女の子は次々死んでいく。そうなるとやっぱり道化師はギメルなんじゃないのか？俺が他の女の子を少しでも好きになるのを許せないんだ。そんな風に思ってしまう。そこで結婚なんてしてしまつたら、道化師の標的にしますって言っているような……

「イグニスまさか……彼女を囮にするつもりなのか？道化師を呼ぶために」

「……君はいつの間に、そんなに遠くを見る事が出来るようになったんだろうね」

肯定のような言い回し。信じられなくて彼……いや、彼女の肩を掴んだ。両手で触れる肩は頼りなく細くて……壁へと押しつける身体は華奢で、触ると解る。女の子だ。それじゃあイグニスとギメルなの？俺は今、もしかしたら初恋の人に……他の女と結婚しろと言われているのかも知れない。

おかしいよな、そんなの。もう少し抱き寄せれば抱き締められる。そんな距離にいながら俺達は……どうしてこんなに遠いのだろう。

「イグニス……俺は、……俺は、“ギメル”が好きだった！」

「知ってる」

「今だって彼女を嫌う理由なんて、本当は何もないんだ！」

「それも知ってる」

「俺は彼女に会いたい！本物の彼女と話がしたい！」
「……解ってる。だけど今は駄目だ」

琥珀の瞳は暗い影を落としながら、一度逸らされまた俺へと戻る。

「アルドール。僕はイグニスだ。ギメルじゃない。僕は君をそういう風には好きではないし、君もそうではないはずだ。君がギメルを嫌う理由が無い以上、君が僕に彼女を重ねることは、彼女への思いへの侮辱に他ならない」

最愛の妹を傷付けるのなら、軽蔑するよとその目が語る。イグニスの軽蔑は、俺が他の人と結婚することではなく、そうすることで生じる物なのだ。彼は俺に言うけれど、俺にはそうは思えないから空回る。

「僕が道化師を退治する。君がとどめを刺せるくらいまでに追い込む。あいつのことは僕が誰より知っている。だから、上手くやれる。君が信じてくれさえすれば、絶対に上手く行く！だから今は、今だけは……僕を信じてくれ！お願いだよアルドール！」

「イグニス……」

「僕は唯、君を守りたいだけなんだ！失うわけにはいかないんだ！」

「………“世界のために”？」

俺の言葉に彼女は力なく頷く。まるで、それは思い出したと言わんばかりの適当さ。そんなイグニスだが、……俺にはよくわからなかった。

25:Cui bono? (後書き)

25話にしてようやくこの章の本筋入って来ました。

0、いくらを入れると35話になる。長いよっ！

騎士コンビの関係をどうにか解決させないと、ランスがジャンヌに惚れようなかった。もっとしつかり惚れさせようとしたけど、数術使いでもないから格好良く登場ってあの程度しか演出できない。基本的にコートカードは戦闘パラメの運だけ異常に高いだけのただの人。強いカードだけど元から数術使いじゃないとコートカードは数術使えないって設定なので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6697s/>

悪魔の絵本6 恋人【逆】（カーネフェル編?）

2011年12月11日08時46分発行